

幻想天霊伝説～都会の悟空が幻想入り～

サウザンド・J

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

一星龍との戦いが終わり、悟空が神龍と共に飛び立ってから1年が過ぎた。

蘇った地獄の死者や、邪悪龍達によりメチヤクチャにされた地球を元に戻すため、孫悟天は地球復興の手伝いをしていた。

そんなある日の夕方、悟天は円盤のような機械を見つける。それを思わず手に取ってしまい、時空の彼方へ飛ばされてしまった！

気がついた時には地球に似た別の世界！

今、悟天の新たな物語が始まる！

―追記―

シナリオ決定版は、文字通りその章の修正が完了したものです。

古い話は残したかっただけなので、読む必要はありません。シナリオ決定版をお読みください。

目次

シナリオ決定版

第1章? 伝説の始まり? | 1

第2章? 時空を超えた過去の強敵達? | 61

第3章? 幻想少女強化計画? | 140

第1章? 伝説の始まり?

第1話 「伝説の始まり」 | 191

第2話 「現れたすごい奴! 幻想郷最速の射命丸文」 | 194

第3話 「着いたぜ博麗神社! 明かされるこの世界」 | 199

第4話 「帰れない!? パワーアップの秘密とは」 | 206

第5話 「命懸けのおつかい! 2人の刃が悟天を襲う」 | 219

第6話 「怪しい研究所? 自称幻想郷No. 2 魔理沙!」 | 231

第7話 「幻想郷はやっぱりすげえ! 裏で動き始めた謎の影」

242

第2章? 時空を超えた過去の強敵達?

第8話 「あの日見た円盤!! 覚悟を決めた幻想少女達」 | 253

第⑨話 「必殺! 妹紅怒りの一撃! もう1人の侵略者」 | 268

第10話 「圧倒的超魔理沙! 謎のドクターの企み」 | 290

第11話 「究極合体! やつと来た幻想郷No. 1」 | 301

第12話 「決着! 間一髪の大勝利」 | 312

第13話 「遅いぞ悟天! みんなで宴会」 | 323

第3章? 幻想少女強化計画?

第14話 「プロジェクト 開幕」 | 340

第15話 「因縁を断ち切れ!」 | 350

第16話 「再び燃え上がった炎」 | 359

第17話 「だいたい人間な5人のガールズトーク」 | 378

第4章? 冬の大侵略?

第18話 「大喧嘩!? 離れた2人」 | 392

第19話 「危ない悟天! 紅魔の危機」 | 407

第20話 「鬼と人間 それぞれの隠された力」 | 422

第21話 「幻想郷大混乱」 | 434

第22話 「未来から来た魔法使い」 | 451

第23話 「セル激怒! こいしの仲間割れ」 | 473

第24話 「2nd STAGE」 | 495

第25話 「セルの嘆き」 | 521

第26話 「バトルと鍋パーティー 前編」 | 538

第27話 「バトルと鍋パーティー 後編」 | 555

第28話 「本当の第4章」 | 591

第5章? 真の神?

第29話 「夏祭り! はしやぐなはしやぐな」 | 606

第30話 「謎の新惑星」 | 628

第31話 「SOS! もうダメだ!」 | 645

第32話 「幻想少女vsメタルクウラ軍団」 | 662

第33話 「最期の6日間」 | 686

第34話 「vs自分」 | 705

第35話 「幻想の魔神」 | 730

第36話 「声にならぬ咆哮」 | 755

第37話 「あいつの代わりに」 | 767

第38話 「忘れた頃に」 | 782

第39話 「お前が大事だから」 | 798

第40話「唐突に」	810
第41話「フュージョン！白銀の剣士 桜薇」	825
第42話「悪を斬り裂け！スターダストスラッシャー！」	834
第43話「Dr. ギーク」	847
第44話「悲しき超サイヤ人3」	857
第45話「大胆不敵な信仰集め」	879
第46話「絶望の夜明け」	899
第47話「凍てつく未来」	915
アナザーストーリー第1話「月の開戦」	928
アナザーストーリー第2話「命を司る者」	936
第48話「さらば、孫悟天」	949
第49話「本当の第5章」	964

シナリオ決定版

第1章？伝説の始まり？

地球は、悟空が神龍と共に飛び立つてから1年が過ぎていた。

邪悪龍によりメチャクチャにされた地球を元に戻すため、孫悟天は地球復興の手伝いをしていた。

天「よし、西の都の復興もだいぶ終わったな。そろそろ日も暮れる頃だし帰るか。」

一仕事を終え家に帰ろうと飛ぼうとした時、何かを見つけた。

天「ん？これなんだろう？」

それは円盤のような怪しげな物体。悟天がいる世界でも見たことがないものだった。

思わず悟天はそれを手に取ってしまった。

ーその時だった！ー

ピカツ!!ビリビリツ!!

天「な、なんだ！う、うわああ!!」

なんと！円盤が急に動きだし、時空の彼方へ飛ばされてしまったのであった！

これは、悟空が神龍と飛び立つてから1年が過ぎ、1人の青年が幻想入りした物語である。

第1章？伝説の始まり？

天「・・・う・・・ん・・・あ、れ・・・ここ・・・は・・・？」

気がついた時は湖の側にいた。空を見上げてみると、どうやら昼らしい。

天「？　もしかして、寝すぎちやったかなあ？」

こういったところは父親にそっくりである。

天「とにかくここがどこか誰かに聞いてみよつと。」

あまり動揺していない。

天「あつ、あそこに誰かいるつ。おい！」

??? 「ん？あたい？」

そこには1人の少女がいた。見かけない格好をしている。

あんなに小さいのに髪が水色であった。その歳でグレたのだろうか。

天「うん、急だけど、ここがどこか知らない？」

チルノ「うくん、あたいチルノ！」

天「え？う、うん。俺は悟天。ここがどこか知らない？」

チ「えーつと、わかんない。」

天「ええ…、それじゃあ、なんか知ってそうな人知らない？」

チ「いいよ！…あつ、この最強のあたいに勝ったら教えてやってもいいぞ！」

天「え？君に？」

チ「そーだ！あたいは最強なんだぞー！」

天「しょうがないなあ、よくし、絶対に勝ってやるぞ。」

勿論本気で闘うつもりはない。

天「よし、かかってこい。」

チ「くらええ！」

チ；氷符「アイシクルフォール」

チ「アイシクル、フォール！」

天「・・・(全然効かない)。」

チ「どーだ！まいったか！」

天「(しょうがない、気合砲で吹っ飛ばそ)はっ！」

ドツ！

気合砲でチルノを吹っ飛ばした。

チ「あああ…」

ここまではみな予想通りであろう。

しかし！気合砲が突然、チルノに吸い込まれる様に消え、

チ「はあああ!!」

ボウツ!!

チルノが大幅にパワーアップしたのだ！

天「な、なんだ!?急にチルノの気が上がった？」

いったいチルノの身に何が起こったのか？

天「いったい、何が起きてるんだ!?気を抑えていたとは思えないし、どこからこんな力が…。」

チ；氷符「アイシクルフォール」

チ「もーいっかい！アイシクル、フォール!!」

天「!!」

先程と同じ技であるが、威力は全く違う。

チ「このままこおりづけにしてやる！おりやあああ！」

天「・・・、それならっ！」

瞬時にチルノの背後に回り込み、

ゴンツ！

チ「えっ？」

後頸部を叩き、気絶させた。

驚いたものの、殆どダメージは無かった。

天「ふう、ビックリしたあ。」

「・・・あれ？あの変な機械が無くなってる。手がかりも無くなっちゃった。。。しかも、結局ここがどこなのか聞けなかったなあ。」

幸い、空を見るとまだ昼ぐらいなので、時間はある。

この世界を知る者がいないか探すために、湖を後にした。

・・・

「上空」

気を探してみると、人の気が沢山ある場所を見つけた。

天「ん？あれは村かなあ？行ってみるか。」

その集落へ向かおうとした時、

? 「ちよつと待ってくださいーい！」

何かがもの凄いスピードで飛んできた！

天「な、なに!?!」

文「先ほどのもの凄い気を察知してやってきました。間に合つてよかったです！」

「あ、私は文々。新聞の記者、射命丸文と申します！」

天「あ、うん。俺は悟天。」

文「悟天さんですね！早速ですが……」

天「(もしかしてまた勝負? そんな暇ないんだけどなあ。ここは逃げよつと)」

逃げようとしたが、

文「待ってください！何処へ行くつて言うんですか？」

肩に触れようとした手を、彼女を上回るスピードで掴んだ。

文「な、なかなか早いですね。これでも一応幻想郷最速を誇っているんですが……」

天「そんなことより、俺早く帰らないと。」

文「逃がしはしませんよ！力づくでも止めます！」

ジャーナリズムの欠片も無い。

天「うーん(そういえばこの子羽が生えてるね。気合砲を使えば怪我もしないし今度こそすぐに)。」

文「何を考えているのですか？」

天「うーんとね、こういうこと！はっ！」

ドツ!

文「しまっ!あーれ〜。」

いとも簡単に吹き飛ばされた。

天「よし!今のうちn」

と、その時だった!またしても気合砲は突然消えて、

文「はあああ!」

ボウツ!!

天「そんな、またか!」

またしてもパワーアップしてしまった!

文「おお、何ですかこれ?全身からパワーが溢れてきます!」

戦闘力は先ほどのチルノより遥かに上回っている。最悪の誤算である。

天「どうしてこうなっちゃうの〜。」

文「それではこちらから行きますよ!」

さつきとは桁違いのスピードで悟天に攻撃してきた!油断もありその一撃を捕らえられなかった。

天「なっ!」

文「どんどん行きますよ!」

悟天は文の動きを全く捕らえられずにいた。どうやらスピードは悟天を超えたらしい。

ドゴツ！ドガツ！

天「ぐっ、うわっ！」

文はそのスピードで悟天を四方八方から攻撃し、蜂の巣状態にした。

天「（まずい、このままじゃやられるかも。使いたくなかったけど使えないか）」

悟天は切り札を使うことにした。

天「だあああ!!」

ヴンツ!!

文「な、なんですかっ!？」

そう、〈超サイヤ人〉である。

天「さあ、今度は負けないぞ。」

余裕の表情を浮かべている。

文「（これはまずいですね〜。とても勝てる気が・・・）」

天「どうしたの？早く始めようよ。」

文「すみません、諦めます・・・。」

天「え？・・・そっか、わかった。」

ス・・・

一安心して、超サイヤ人を解いた。

文も気を抑えたが、最初に会った時と戦闘力は桁違いだ。どうやら、通常の戦闘力になったということなのだろう。

文「ああ・・・又しても取材ができませんでした…。どうしましょう…。」

天「えっ！取材!？」

文「なんだと思っていたのですか？」

天「てつきり勝負かって。俺急いでるし。」

文「多々多！ま、結局勝負しましたけどね。ということは、取材しても構いませんか？」

天「別にいいけど。」

文「うおおお！、ありがとうございます！それでは早速なんですけど、あなたは・・・」

なんと！取材は100分程かかってしまった。こんな調子で大丈夫なのか？悟天！

・・・

天「やっと・・・終わった…。」

文「ありがとうございますーす!」

ようやく取材は終わったらしい。

天「あつ、ちよつと待って!」

危うく大事なことを忘れるところだった。

文「何でしょう?」

天「俺、ここがどこかわからないんだ。これからどうしたらいいか教えてくれないかなあ?」

文「やっぱりそうでしたか。でしたら博麗神社に行くといいですよ。」

天「そこに行けば何かわかるの？」

文「はい！ここがどこなのかも、あなたがこの世界にとって何なのかも。」

天「ありがとう！それで、博麗神社ってのはどこなの？」

文「あの山の頂上へ行けばいいですよ。」

天「わかった、ありがとう！それじゃあ。」

少し急ぎめに飛んでいった。

文「まあ、そつちは神社は神社でも博麗神社ではないんですけどね。ふあゝはははは。」

.....

「妖怪の山の麓」

暫く飛んでいると、目的地の山に着いた。

飛んで行こうとしたが、麓から声が聞こえる。

？「待ちなさい！あなたは何者ですか！」

この高さだと会話にならないので降りた。

天「えつと、何？」

？「その服装といい、普通の人間が空を飛んでいるといい、あの神社を目指しているといい、明らかに怪しいです！この山に入ることは許しません」

天「うわあ！マンガに出てきそうなキャラクターみたい！ほんとに

いたんだあ。」

ナデナデ

？「わふっ♡・・・じゃありません！いいかげんにしてくd」

天「君なんていうの？」

ナデナデ

権「くうくん♡：や、やめてください！私は犬走権といいます！」

悟天の手を払いのけながら自己紹介をした。赤面している。

天「権かあ。俺は悟天！ここを通してくれないかなあ？」

権「駄目です！こんな怪しい人を通すわけにはいきません！」

天「俺、文って人にここへ行けって言われたんだけど。」

権「えっ！そうだったんですか!?!そうなら早く言ってくださいよ。」

天「信じてくれるの？」

権「今回は特別です。」

天「ありがとう！それじゃあまたね。」

勿論歩かず飛んでいった。

権「はあ、男の人に撫でられたのは初めてだったからビックリしたなあ。」

満更でもない権であった。

・・・

「守矢神社」

あまりかからないうちに、神社に着いた。やっと、この世界が何なのかを知ることができるのである。

天「ふう、やっと着いたあ。誰か呼ぼつと。あのく、誰かいませんか？」

この程度の敬語はチチに教育されている。

??? 「お？参拝者かな？」

天「あつ、誰か来たみたいだ。」

神「おお、外来人かい？私は八坂神奈子だ。」

天「俺は悟天。この世界に来たばかりで、いろいろわからないんです。ここがどこか知りませんか？」

神「簡単に言うと、ここは幻想郷という所だ。そして君のようにこの世界に紛れ込んだ人間を、外来人と呼んでいる。」

天「(幻想郷？父さんから聞いたことがない所だな。)」

神「ところで、君は人間ではないね？」

天「・・・それは俺の台詞だよ。」

だが、早くも敬語ではなくなってきている。

神「ほう、よくわかったね。私は人間で言うところの神だ。君は何者だ？」

天「俺は見ての通り普通の人間だけど。」

サイヤ人と人間のハーフと言ってもわかってくれないと思い、普通の人間と答えた。

神「他に用はあるかい？」

天「文が博麗神社に行けばいいって言ってたから来たんだけど。」

神「生憎だが、ここは守矢神社だ。」

天「ええ！嘘つかれたってこと？」
神「そのようだな。」

―その時―

??「おーい！神奈子様ー！」

遠くの方から誰かが飛んで来る。

??「嘘でえす！」

天「えっ！何!?!」

??「神奈子様！この人が騙されてここへ来たなんて全て嘘です！本当はこの守矢神社を潰しに来たんです！」

神「何を言ってるんだ早苗。私はこの青年はいいやつだと思うけどな。」

早「そんなことありません！神奈子さま」

神「博麗神社はあっちの方向へ行けば着くよ。」

「それと、誰も出てこない場合は硬貨が必要だから準備しておくといい。私ができるのはここまでだ。」

天「ありがとう！それじゃあまた。」

早苗のことは気にも留めずに飛んでいった。

早「ハアツ☆」

神「どうした早苗…。」

早「言いたくなっただけです！」

「すみません、早とちりしてしまいました。」

神「いいんだ。」

神奈子は考えた。あの気の質は知らないものではなかったからだ。

神「あの気の質、霊夢や魔理沙と似ている。いや、あの2人よりも何かが濃かった。・・まさかっ！」

早「どうしました？神奈子様。」

神「明日、あの青年のところへ行くんだ！もしかしたらお前も霊夢や魔理沙のように強くなれるかもしれない！」

早「あの人が元の世界に帰ってしまったらどうしますか？」

神「その点は大丈夫だ。彼には帰れない理由がある。」

早「わかりました！それでは準備しますね！」

諏「あのく、私もいるんだけど。」

本当に無視されているのは、この場では諏訪子だった。

・・・

〔博麗神社〕

気づいた時には辺りが暗くなってきていた。このままだとチチの夕飯が食べられなくなってしまう。

天「遠いなあ。・・あ！あれかな？」

先ほどの建物と同じような建物が見えてきた。どうやらここが博麗神社のようだ。

守矢神社とは違い、さらに人の気配がしない。

天「えっとこれかな？ここに硬貨を入れるとこここの人が現れるって。」

「一応呼んでみるか。あのく、誰かいませんか？」

??「・・・!!（この声は）」

天「・・・、やっぱ出てこないか。仕方ない。昔ピツコロさんがくれた10円っていうお金を入れてみよつと。」

生前のピツコロから貰ったらしい。今まで、お守りとして持っていたが、この場合は仕方ない。

天「それっ。」

チャリーン

??「お賽銭お賽銭お賽銭お賽銭！」

天「わっ！変な人来た。」

??「(なんだ、別人か…)誰が変な人よ！お賽銭なんてひっさしぶりなんだから！」

神奈子が言っていた意味がよくわかる。

天「えつと、君は？」

霊「博麗霊夢よ。博麗の巫女。声を聞いて師匠かなって思ったけど人違いみたいね。がっかりだわ。」

天「わ、悪かったね！」

霊「あんたは？」

天「え？俺は・・・」

「孫悟天！」

この出逢いが奇跡となることは、この時はまだ、誰も知らない。

さて、霊夢によると、悟天がいた世界は一晩では見つけられないらしいので、悟天は自分の世界が見つかるまで、霊夢と同居することにしたのだった。

~~~~~

霊「ううう、もう無理だよお。」

??「まだまだ！おめえならもつとできる！」

霊「痛いよお。もう動けない…。」

??「諦めるんじやねえ！もつと強くなりてえんだろ！チルノを倒すんだろっ！」

霊「グスツ、うおおお！」

~~~~~

朝が来た。

霊「んん、また師匠の夢ね。孫悟天はもう起きてるかしら？」

着替えをすまして、悟天の部屋に行ってみると、

天「くかああ、くかああ…」

霊「なっ！」

ぐっすり眠っていた。

霊夢は 深く息を吸い、

「起きなさいー！ーい!!」

天「うわあ！」

大声を出し、無理やり起こした。

霊「あんたねえ、今のところ居候でしょ？礼儀くらいちゃんとしてくれないかしら？」

天「ごめんなさいーい！」

だいぶ怒っている。すぐに布団を片付けた。

霊「つたく、そういうところまで師匠そっくりなんだから。あんたほんとに何者？」

天「え？只の人間だけど。」

霊「あつそ。」

天「（なんか母さんにそっくりだなあ。それにサイヤ人であることはまだ隠しておこう）」

霊「朝ごはんだけは作るから待ってなさい。」

天「へえ、楽しみだなあ。」

霊「なにはしゃいでんのよ。」

天「だって母さん以外の料理食べるの久しぶりなんだもん。」

霊「はいはい（なんだか子供みたい）。」

とは言いながらも、師匠との生活はこんな感じだったのが懐かしい。

天「いったただつきまーす！」

霊「はいはい。」

食事を取り始めた。

天「おっ！うんまーい！」

霊「・・・そう？」

天「母さんに負けないくらい美味しいよ！」

霊「小さい頃から作り方を教わってたからよ。」

天「霊夢の師匠ってすごいんだね。」

霊「・・・そうね。まったく何処行つたのかしら。」

天「居ないの？」

霊「2年前よ。私が15の時。巫女になってちよつとしてからずっと一緒だったのに・・・ま、自業自得なんだけどね。あんなこと言っちやつたから。」

天「なるほど、霊夢は17歳か。」

霊「話聞いてた？」

天「え？う、うん。」

霊「ソーンーゴーテーンー!!」

天「わわわかった！次からはちゃんと聞くから！」

霊「・・・ふんっ！」

いつの間にか食べ終わっていた。その瞬間、霊夢は悟天を追い出そうとした。

天「ごちそうさま え！ちよつと待つて」

霊「あ、今日は夜になるまで戻って来ないでね。あんたが居た世界を探すのは、紫にも手伝ってもらわなきゃいけないぐらい大変だから、そこらへんぶらぶらしといて。」

「それと皿洗いはしとくから。」

天「紫って？」

霊「幻想郷の賢者よ。あんたのことはとっくに見つけてると思うわ。」

天「へえ、なんかいやだね。」

霊「いいから、早く、出て行きなさいー！」

天「わ、わかりました今すぐー！」

慌てて飛び出した。

さて、今日一日何をしようか。そんなことを考えながら神社の階段をゆっくり降りていった。

・・・

階段を降り切ると、そこにはある人物が待ち構えていた。

早「悟天さん！大人しく私にもパワーを」

チ「あたいを弟子にして！兄貴！」

天「おお、チルノ！頭は痛くないかい？」

早「ハアツ☆ちよつと」

チ「あれぐらい妖精ならへっちやらへっちやら！とにかく、あたいを兄貴の弟子にして！」

天「えつと、なんで俺？」

チ「最強のあたいを倒したのは兄貴が初めてなんだ。弟子入りするしかないでしょ！」

天「うくん。」

早「ハアツ☆」

天「(ちようど暇だしいつか。それになんでだろう。この子には可能性を感じる)」

チ「お願いだよ兄貴。」

足にしがみついてきた。普通に可愛い。

悟天はロリコンではない(筈)。

天「よし！俺の修行は厳しいぞ。それでもいいのかなあ？」

チ「もちろん！どんな修行だって乗り越えてやるぞー！」

早「あ・あ・あ」

天「じよ、冗談だよ冗談。」

早「え？今、私に話かけました？」

天「？そうだけど。」

早「真面目な話をしてるわけじゃないのに構ってくれた！やったー！」

天「・・・。」

早「いつもなんですよ。真面目な話以外はスルーされるんですよ。」

天「へえ。なんか、大変だね。」

チ「兄貴く、まだく？」

天「あつ、そうだった。それじゃああの湖に行くか！」

早「ちよつと待ってくださいよ。」

天「それは修行の後でね。早苗も来ない？」

早「わかりました！」

チ「おい、置いてくぞ。」

天「あつ、待ってくれー！」

ちよつと遅れながら早苗は言った。

早「・・・名前、覚えてくれていたんですね。ふふ…、はあっ♪」

・・・

「霧の湖のほとり」

そんなわけで、チルノと悟天の修行が始まった。なお、早苗は修行がひと段落するまで傍観しておくとのことだ。

天「いいかい、気はこうやって使うんだよ。」

気弾の手本を見せていた。パワーアップしたおかげか、チルノは気そのものは出せている。

チ「難しいなあ。」

天「頑張れ頑張れ。俺だってチルノと同じくらいの時は苦労したよ。」

チ「そーなんだ。よーし、頑張るぞー！」

それから3時間修行を続け、ようやくひと段落ついた。

天「そういえば早苗は気を使えるんだっけ？」

早「はい、魔理沙さんに教えてもらいました！」

天「魔理沙？」

早「お友達です。霊夢さんの親友ですよ。」

天「へえ、気を使える地球人なんて珍しいなあ。魔理沙って強いのか？」

早「とんでもなく強いですよ！霊夢さんに引けを取らないぐらいです！」

「霊夢さんのお師匠さんの修行を受けた途端に、ものすごく強くなったらしいですよ！私も修行受けたかったですね。」

天「その修行を受けたのは、霊夢とその魔理沙って人だけ？」

早「その筈ですよ。幻想郷でずば抜けて強いお2人ですからね。」

天「そうなんだ。それで、私にもパワーをとか言いかけてたけどどういうこと？」

早「それはですね、これです！」

今朝の新聞を見せてきた。〈文々。新聞〉と書いてある。

天「あつ、昨日の。」

早「これによると、どうやらチルノちゃんだけじゃなく文さんもパワーアップしたらしいですね。それも悟天さん絡みだとか。」

天「えつ、チルノと会ってたことをなんで文が知ってるんだろう？」

噂をそのまま記事にしたらしい。新聞がやることではない。

早「神奈子様に表示されたのもありますが、私は確信しました！魔理沙さんの急なパワーアップ、そしてチルノちゃんと文さんのパワーアップ、これらは同じものだと！」

天「そうだとしたら、ますますそのお師匠さんが誰か気になるなあ。」

名前とか知らないの？」

早「実は知らないんです。魔理沙さんどころか霊夢さんですら名前を覚えてくれなかったみたいで。」

天「ええ…、まあいいか。それで、どうやったらパワーアップするの？」

早「え？自分でパワーアップさせたのにわからないんですか？」

天「俺の気を奪ってうまく使っていたのかなって思ってたけど、チルノからも文からも俺の気を感じなかった。なんでだろう？」

早「不思議ですね。そうだ！試しに私を攻撃してみてください。」

天「えっ、俺女の子には攻撃したくないんだけど。」

早「そんなこと言っつて、お2人を吹っ飛ばしたじゃないですか。」

本人は攻撃のつもりではないらしい。

天「ち、違うよあれは。逃げるためにやっただけで。」

早「(こうなつたら) 悟天さん、覚悟！」

天「えっ、なに!？」

早；秘術「グレイソーマタージ」

ドドドツ

チ「なに？楽しそう！あたしも！」

チ；氷符「アイシクルフォール」

ドドドツ

天「ちよ、おまつ」

ほぼ全部直撃した。が、

天「ふう、びつくりしたあ。」

まるで効いていない。

早「まだまだ！」

早；秘術「グレイソーマタージ」

あえて同じ技を使った。悟天の攻撃を誘うためである。

天「このままじゃ服がボロボロになっちゃうなあ。仕方ないかはっ！」

衝撃波を放った。早苗の攻撃はかき消され、そのまま早苗に当たった。

早「うわっ！」

いとも簡単に飛ばされた。が、

早「・・・はああ!!」

ボウツ!!

天「なっ、やっぱりか！」

もはやデジヤブである。

早「さあ、いきますよ！」

早；秘術「グレイソーマタージ」

天「なっ！」

ガードはしたものの、文の時同様攻撃は効いた。

早「まだです！」

天「くっ！」

ガシツ!

ここで初めての取っ組み合いである。一見互角のようだったが、

天「スキありっ！」

早「うわ！」

手を払い、早苗の後ろに回り、背中を押して吹っ飛ばした。

早「やっぱり強いですね。ここは降参します。」

天「でも、急になんで攻撃してきたの？」

早「それはですね、パワーアップするためです！目標達成です！」

天「あつ、そうだったね。でもそれだけの為にわざわざ」

早「それではまた会いましょう！」

天「えっ、ほんとにそれだけ？」

スルーされ返された。

チ「兄貴！続きしようよ！」

天「あ、うん。そうだね。」

それから夕方までずっと修行した。もちろん悟天には殆ど効果は無かったが、チルノには有意義な時間であった。

チ「それじゃあまた明日ね！兄貴！」

天「うん、気をつけてね。」

まだ夜ではないどころか霊夢の気が落ち着いていない。もう少し幻想郷を見て回ることにした。

•
•
•
•

〔紅魔館〕

見て回るほどもない距離に、一つの建物が見えてきた。

天「ん？なんだあの真っ赤な建物。」

洋館のようだが真っ赤だ。

降りてみると、門の前に人が倒れている。門番だろうか？頭にナイフが刺さった状態で横倒しになっている。

天「・・・ムチャしやがって。」

そう吐き捨て門の中へ入っていった。

ドアの前まで来てノックを試みたが、なんの反応もない。ドアは勝手に開いた。

??? 「これはこれは、また、わざわざこの私に殺されに来たようね。」

奥の方から少女が近づいてくる。

天「えっと、君は？」

レ「私はレミリア・スカーレット。この館の主にして誇り高き吸血鬼よ。」

天「俺は悟天。何か面白そうなことないかな？」

レ「あら？あなた、自分の立場をわかっているのかしら？」

天「立場？」

レ「あなたは今から私のディナーになるのよ。」

天「よくわかんないなあ。」

レ「ああ！もういい！覚悟しなさいっ！」

レ；紅符「スカーレットマイスタ」

ドドドツ

勿論効いていない。なんなんだあ今のはあ？と言わんばかりである。

辺りは煙に包まれた。

天「ほんとここの世界の人達って戦うの好きだなあ。」

しかしレミリアは、煙の中から悟天目掛けて一直線に飛んでいった！

レ「かかったなあホが！」

フラグは立った。

天「！」

バシツ!!

レ「え？」

ガシャーんツ!!

ビツクリしたせいで加減を間違えてしまい、払った手に力が入ってしまった。

レミリアは飛んでいった。物凄い音が聞こえたので心配になった。

天「ごめん！大丈夫？」

と、次の瞬間！

レ「う・・・があああ!!」

ボウツ!!

天「ええ！払っただけで！」

確かにパワーアップした。だが、

レ「・・・がはっ。」

その場に倒れ伏せてしまった。

天「一体、何が。ま、このままここにいたらまずいかもしれないし、神社に戻ろつと。」

逃げた。時間もちようどよかったので、神社に戻ることにした。門番は相変わらず倒れている。

・・・

「博麗神社」

博麗神社に戻ってみると、待っていたかのように霊夢は立っていた。険しい表情をしている。

天「もしかして、遅かった？」

霊「いや、ちようどいいわ。」

天「で、どう？俺がいた世界つてのは見つかった？」

霊「紫が見つけたわ。だけどね、私たちでいう外の世界じゃないのよ。」

「だからあんたは帰れないわ。」

天「・・・は？」

霊「逆に不思議よ。それならどうやって完全な異世界から来たの

か。」

「あと、あんたの世界はあんたが居た時から既に1000年経っていたわ。」

天「ちよつと待つて！1000年？じゃあ戻れたとしても俺がいた頃から1000年後なの？」

霊「そうよ。それに離れすぎてて戻せないらしいのよ。」

天「(パリーン)」

心の中の何かが割れた。

霊「それと、一つ訊きたいことがあるわ。」

天「え、なに？」

絶望に打ちひしがれている悟天に訊いた。

霊「あんた、サイヤ人でしょ。」

天「!!」

今度は悟天の顔が険しくなった。なんの前触れも無く〈サイヤ人〉という言葉が出てきたからだ。

天「どうしてそれを。」

霊「師匠もサイヤ人だったのよ。それにあんたは、師匠が私と魔理沙にやったことと同じことをした。パワーアップよ。」

天「あのパワーアップって前例があったの？」

霊「そう。気を与えたわけでも修行の成果でもないパワーアップ。師匠と同じであんたは――」

「サイヤパワーを宿させたのよ」

なんと、パワーアップの原因はサイヤパワーであった！

「サイヤパワーを宿させる」とはいつたい…。

天「なっ、サイヤパワーだっつて!？」
霊「そ。それであんたは、幻想郷のバランスを壊してしまったのよ。」

まるで、世界を変えてしまった悪魔みたいな言い方である。

天「で、でも、そんな簡単に宿るものなの？みんな普通の人間だと思っただけ。あつ、人間じゃないのもいたかな？」

霊「そこは私も不思議よ。私だっつてサイヤパワーを宿したのは、師匠と修行の生活を始めてから2年経ってからだもの。魔理沙は少し早かったけど。」

天「2年も掛かるなら、俺は関係ないね。」

霊「とぼけんじやないわよ。あんた、文たちに何をしたの？」

天「・・・、気で吹っ飛ばしました…。」

霊「・・・それだけ？」

天「うん。」

若干1人は違うがまあいいだろう。

霊「あんた、能力とか持ってる？」

天「能力？気が関係ないならわかんないなあ。」

霊「そう。また調べなきや駄目みたいね。」

天「あの、俺はこれからどうすれば？」

霊「幻想郷に永住するしかないわよ。」

天「ま、そうなるよね。どうしよっかなあ。」

途方にくれていると、

霊「よ、よかったら、その、」

天「え？」

霊「どうしてもって言うなら、博麗神社に住んでも、いいのよ？」

天「早苗に頼むから大丈夫だけど。」

霊「あ、あそこは男が泊まるの禁止なのよ！」

天「ええ！そうなの？」

全て嘘です。

霊「そ、そうよ。あんたはここに泊まるしかないのよ。孫悟天。」

天「そうかあ。じゃ、お世話になります。」

悟天のノリは軽い。

霊「ちよ、少しは感謝してる？」

天「してるってえ。」

霊「はあ、了解しない方がよかったかしら。」

こうして2人の生活は始まったのであった。

くくくくくくくく

師匠「今度は瞬間移動の修行だ。移動自体も大事だけど、物も一緒に移動できるようにするのも大事だぞ。」

霊「物って道具とか？」

師「そうだ。それができれば守れるものが増えるぞ。オラは一回それで地球を守ったことがあるしな。」

霊「へへ、師匠ってすごいなあ。」

師「どうだ？やってみつか？」

霊「うん！頑張る！」

師「よっしゃ！そんじやまずは神社の門から、オラがいる玄関までやってみろ。やり方は一通り教えたからできるよな？」

霊「うん、行くよ。」

師「・・・。」

霊「ん！」

ヒュンツ!!

師「お！できも・・・って霊夢!？」

霊「やった！できたよ師匠！」

師「いやいや霊夢！服が付いてきてねえぞお。」

霊「え？・・・きやあ！師匠見ないで！」

師「そんなこと言っただって。一緒に風呂入ってるじゃねえか。」

霊「外は嫌なの！」

両手を胸に当て、一目散に服の元へ走って行った。

師「ハハハ、可愛いもんだな。」

「頑張れよ、霊夢」

~~~~~

目が覚めた。またしても昔の夢である。

霊「ん・・・またか・・・。」

博麗の巫女は、日が昇り次第起床しなければならぬ。代々から継がれる掟だ。

霊「はあ...、師匠は今何処にいるのかしら。異変が始まるかもしれないのに。」

異変の心配をする理由は、悟天が現れたからである。当の本人はまだ寝ている。

天「くかああ。」

霊「なっ、また寝てる。すうう・・・」

「起きなさいーい!!」

天「うわあ!」

霊「いつまで寝てんのよ!」

天「え? まだ6時くらいだよ。」

この部屋には時計があるので、時間は容易にわかる。博麗神社にも時計ぐらいはある。

霊「はあ? 知らないわよ。ここに住むなら言うこと聞きなさい!」

天「そんなあ。」

霊「あ、日中はあんたにも働いてもらうわよ。主に家事ね。」

天「おっ、それなら俺得意な方だよ。」

霊「あら、頼もしいじゃないの孫悟天。」

天「そろそろ悟天って呼んでくれても。」

霊「なんでよ。」

天「なんでもありません∴。」

それから朝食を済ませ、洗濯物一式は悟天がやった。不思議なことに、神社に自分の服が揃ってある。

天「なんでだろう? まあいいや。」

師「服はサービスしといてやったぞ。おめえも頑張れよ。悟天。」

・・・

一式終わらせた後、悟天は縁側で寝てしまった。昨日の疲れと短い睡眠時間のせいである。

霊「孫悟天、今からお使い行ってきた。って、あれ？」

天「すうう。」

叩き起こそうとしたが、その寝顔を見ていると、できなくなった。師匠の寝顔にそっくりだからである。

10年以上も共に過ごした師匠の寝顔に。

霊「・・・しようがないわね。」

そのまま寝かせることにした。  
しかし、優しかったのもここまで。

天「ふあく、よく寝た。さて、何をしようk」

霊「こらあ！なに寝てんのよ！」

天「え？」

霊「ほら早く、お使い行ってきなさい！」

天「でも、今まで寝てたつてことは、寝かしてくれたんじゃないの？」

霊「う、うるさいっ！早く行きなさい！」

天「なんだあ、可愛いところあるじゃん。」

霊；霊符「夢想封印」

天「うわああ！今すぐ行ってきまーす！」

一目散に逃げていった。

いつ忍び込ませたのかは知らないが、買う物が書いてある紙とお金はポケットに入っていた。お金は見たこともない物であった。

・・・

「人里」

人里に着いた。人々は悟天に注目している。

人A「あれが噂の外来人？イケメンだわあ。」

人B「見たこともない服を着ているなあ。」

人C「何処に住んでるんだろう。」

天「みんな俺のこと知ってるんだね。」

ここまで広まった理由は、勿論文々。新聞の影響である。  
まずは魚を買いに行つた。

天「これ1匹お願い。」

店員「まいど。」

次は揚げ物だ。

天「これお願い。」

店員「はくい。」

みんな外来人に対してフレンドリーである。残金を見てみると余裕がありそうだったので、近くで何か食べることにした。

天「ん？あれは団子屋かな？」

甘い香りがした。屋台のようで、1人の少女が団子を売っている。  
うさ耳の飾りのような物を頭に着けている。

少女「おいでませ〜。」

天「おつ、やってるやってる。」

少女「あなたが噂の外人さんですね？」

天「うん、それじゃあ団子2本ちょうだい。」

少女「かしこまり〜。」

天「うん、まだお金あるな。」

少女「あとは何を買うんですか？」

天「野菜とかだよ。人参って書いてるし。」

少女「それなら、あっちのお店がそうだよ。」

「でもね、人参は今品切れなんだって。もう少ししたら、入荷されると  
思うんだけど。」

天「そっか、じゃあいったん帰ろつと。それじゃあまたね。」

少女「ありがとうございます〜。」

・・・

### 〔博麗神社〕

買い物袋を抱えて博麗神社に戻った。

霊「あら、早いじゃない。てつきりチャラ男には到底できない事か  
とと思ってたけど。」

天「俺チャラ男じゃないんだけど。」

霊「まいいわ。どれどれ・野菜が無いじゃないの。」

天「それが売り切れでさ。夕方もう一回行くよ。」

霊「はっ・あそこの野菜が無くなる訳ないでしょ。しかも余分にお金  
が減ってるし。」

天「あ、それはね、えつと、」

袋から団子を出した。

天「はい。2人で食べようよ。」

霊「な、なんで私があんと団子食べなきゃいけないのよ。」

天「いいじゃん別に。」

霊「しよ、しようがないわね。どうしてもって言うなら一緒に食べてあげてもいいわ。」

天「(わかりやすいなあ)」

一緒に食べたものの、あまり会話は無く、さっさと終わってしまった。

そして、夕方になった。

天「夕方だしもう一回見てくるよ。」

霊「早く帰ってきなさいよ。ご飯作れないからね。」

天「はくい。」

出掛けて行った。

霊「……。」

・・・

「人里」

人里の八百屋に行ってみると、野菜は揃えてあった。その店の前で、2人の銀髪の少女が何やらもめている。

妖夢「ちよつと、なんでこんなにある人参を全部買う必要があるんですか！」

咲夜「仕方ないでしょう。お嬢様が昨日何者かに襲われて寝込んでいるのですから。」



妖「そんなの知りませんよ。どうせレミリアさんが喧嘩売って負けただけなんじゃないですか？」

咲「そんな訳ありません。お嬢様は誇り高い吸血鬼。そんな物騒なやからに喧嘩など売るはずがありません。」

妖「へへ、まだレミリアさんがカリスマだと思ってるんですか？」

咲「なんですすつてえ？」

一向に買う気配はない。

天「(え？寝込んでるって?)」

心当たりはある。

妖「知らないんですか？レミリアさんなんて他の場所ではかりちゅまとかおぜうさまとか言われてるんですよ。」

咲「誰かしら？そんな無礼なことを言うのは。」

妖「あなたが絶対に攻撃できない相手ですよ。と言うか攻撃が届きません。画面の向こうなので。」

メタい。

咲「何言ってるかさっぱりわからないわ。」

妖「にしても、こんなの有り得ません！」

咲「急に何よ。」

妖「これだけレミリアさんの話をしているのに咲夜さんが鼻血を出さないだなんて！」

咲「何処の変態よ！」

妖「誰でしょうね。」

咲「あら？そんなこと言っているのかしら。」

妖「なんです？」

咲「人里の住人にバラしますよ。」

妖「何かありましたっけ？」

咲「あなたがむっつりだっただっていうこと。」

妖「な！何故それを！」

咲「当然ですよ。」

妖夢はかなり焦っている。

あまりにも長いので、悟天は待つのをやめた。人参を26本のうち3本取って行った。

天「おっちゃん、これお願い。」

おっちゃん「あいよ！」

天「ありがとう。」

速やかに帰ろうとした。

咲「ちよつと待ちなさい。」

天「え？俺？」

咲「なに抜け駆けして、勝手に人参買ってるのですか？」

天「俺ちゃんと払ったよ。」

妖「ずつと見てましたね。気ですぐわかりましたよ。」

天「気を知ってるの？」

妖「当たり前です。皆霊夢さんに教えてもらったので、知らない人は普通の人間です。」

天「なにしてるんの霊夢…。」

咲「こうなったら決闘ですね。」

天「みんな戦い好きだなあ。」

妖「ロイヤルでいきましょう。」

天「(やった、ロイヤルだ！2対1とかめんどくさいし)おっちゃん、これ持ってて。」

お「あいよ。」

咲「いぎ、尋常にー」

妖「勝負！」

妖夢は悟天に斬りかかった！しかし、

カンッ！

指2本で受け止めた。

妖「なっ！」

天「それっ。」

妖夢ごと横に放った。

咲「情けないですね。これならどうですか？」

咲；幻世「ザ・ワールド」

チチチチ：

咲「あなたは何も理解できないまま、死ぬ。」

時を止めた。悟天は止まった、かのように見えた。

天「ねえ、何してんの？」

咲「な、なんですってっ！」

止まった時の中を動いている。

天「みんな止まってるけど、もしかして時間止めちゃったの？」

咲「馬鹿な、そんな筈は！霊夢にも効いたのに・・・っ！」

ここで初めて、霊夢があの時手加減してくれたと気付いた。

咲「(このまま私1人では不利。仕方ない。)解除！」

妖夢が動けるようになった。そして、2人揃って悟天を挟み撃ちにしようとした。

咲&妖「斬る！」

天「そんなものっ！はあっ！」

気で弾き返した！2人共遠くへ吹っ飛んでいく。

咲「ぐっ！」

妖「がはっ！」

天「気絶させればパワーアップしても今日はこの辺で終われるだろう。」

しかし、誤算であった。2人共タフであったということ、負けず嫌いだということだ。

揃って立ち上がり、

咲「こんなところで、」

妖「咲夜さん以外に、」

咲&妖「負けるわけには、いかないんだああ!!」  
ポウツ!!

2人の気が迸った！戦闘力は一気に、悟天ぐらいまで追いついた。

天「し、しまったー！」

同時に2人もパワーアップさせてしまい、尚且つ片方は時を止める能力を持っている。

どうなる悟天！

咲「さて、どうやってお料理してあげようかしら？」

妖「何言ってるんですか？この男を斬るのは私です。そして、あなたもここで斬ります。」

天「なんでそこまで殺したいの？」

妖「いいえ、斬るだけです！」

それを殺すと言います。

途端に妖夢は飛び出した。今度ばかりは指2本だとまずい。

天「くっ！」

悟天も後方へ飛び出した。妖夢は追いながら何度も刀を振った。それを全て避けきっている。

妖「中々やりますね、外来人さん。でも、もう1人お忘れではないですか？」

後方の先には咲夜が待ち構えていた。咄嗟に悟天は飛び上がった！そして、

天；「かめはめ波」

天「かーめーはーめー…」

妖「？いったい何を？」

天「波あああ!!」

ドンツ!!

妖「なっ!!」

妖夢は驚いてしまい、直撃した。しかし一方で、

咲；幻世「ザ・ワールド」

チチチチ：

咲「今度は、止まったようね。」

動きを止められてしまった！

咲「さて、さっきの分をたつぷりと仕込んであげるわ。」

悟天の周りに大量のナイフを仕掛けた。そして、

咲「終わりよ。解除！」

周りのナイフは一斉に悟天の方へ向かって行った！

天「なっ！」

それでも高速移動でことごとく避けたが、

ザクツ！

天「うっ！だあああ！」

一本のナイフが右太もみに刺さった！その瞬間、悟天は危機を感じ  
気で全てのナイフを吹き飛ばした。

悟天の右足からは鮮血が滴っている。

天「・・・くそお。」

咲「よく一本ですみましたね。」

気味の悪い笑顔で言った。気がつけば後ろに妖夢も居た。

天「はは、まいったなあ。」

咲「終わりです。」

妖「覚悟！」

その時！

霊「ちよつとあんた達、何してんの？」

咲「霊夢！」

妖「霊夢さん！」

急に2人は気を沈めた。何しろ、霊夢が不機嫌そうだからだ。

霊「そいつに何かあったら私が困るんだけど。」

咲「まさか、この外来人は永住することになったの？」

霊「そういうこと。ここで引き下がってもらえるかしら？」

妖「・・・、仕方ありませんね。」

咲「霊夢がそう言うなら引き下がります。では。」

2人とも素直に引き下がった。

霊「さ、帰るわよ。」

天「あ、ありがとう。ちよつと待つてて。」

八百屋の方へ飛んでいき、人参を受け取った。気がつけば残りの人参はあの2人が買っていったらしく、一本も残っていない。

なんだよ。結局分けあえるじゃないか。

天「お待たせ。機嫌悪そうだけどどうしたの？」

霊「早苗が勝負を申し込んで来たのよ。」

「ー今の私なら霊夢さんにだって勝てます！ー」

「とか言ってたわ。正直あのパワーアップには驚いたけど。」

天「(ギクツ)」

霊「ああいう面倒ごととは嫌いなよ。もつと腕を上げてから来なさ

いつての。」

愚痴を聞いているうちに神社に着いた。玄関あたりに来た時、

霊「そこで待ってて。」

と言って、人参の袋を持って、入っていった。暫くしてから包帯を持ってきた。

天「あつ、大丈夫だよこのくらい。」

霊「バカッ！大丈夫なもんですか！」

そう言つて無理やり包帯をあてた。

天「痛い痛い！」

霊「にしても、なんで本気で戦わなかったのよ。本気だったらこんな怪我しなかったでしょうに。」

天「それは、流石にかわいそうかなつて。」

霊「はあ。とんだお人好しね。」

そんなことを言いながらもちやんと包帯を巻いている。

天「・・・、ありがとう。」

霊「感謝しなさい、その・・・、悟天。」

どうしたわけか赤面している。

天「えっ？今」

霊「さっ！ご飯の支度しよつと。」

天「・・・。ははっ。」



また、2人の距離は縮まった。 のか？

くくくくくくく

師「おお、随分と腕を上げたな霊夢。」

霊「えへへっ、やったあ！」

師「それに随分女らしくなってきたなあ。パンにも似てるかもな。」

霊「ん？パン？」

師「オラの孫さ。霊夢は今いくつだっけ？」

霊「12よ。」

師「そっか（確かあの時のパンもそれぐらいだったっけな）。」

??? 「あの…」

師「ん？誰だ？」

霊「あなたは？」

??? 「私、魔法使いをやつてて、その、名前はー」

くくくくくくく

霊「・・・もう朝か。」

そして新しい1日が始まる。

・・・

天「霊夢く、やっぱり朝早いよお。」

霊「うるさいわね。いい加減慣れなさい。」

天「まだ2日目なんだけど。」

霊「は？」

天「いえ、なんでもありません。」

こんな話をしながら朝食を食べている。  
丁度食べ終わる頃、

チ「おーい、兄貴いく。」

天「ん、早いな。学校とか行ってないの？」

チ「学校？何それ？」

天「勉強する所だけど。」

チ「それって寺小屋のことじゃないの？」

天「(昔のスクールみたいなどころか)あ、そうだった。今日は行かないの？」

チ「今日は休みだよ！だから修行しよ！」

霊「へへ、あんたチルノに稽古つけてたんだ。」

天「まあね。」

霊「このロリコン。」

天「なんで!？」

チ「早く行こうよ兄貴いく。」

天「あ、うん。ちよつと待ってね。」

少し支度をしてから2人で修行しに出かけた。

霊「昼には帰って来なさいよー！」

天「はいはい。」

•  
•  
•  
•

修行を終え、神社に帰って来た。

天「ふう、いい汗かいた。あつ！洗濯物やんなきや！」

霊「それはやらなくていいわ。昨日のうちに殆ど片付いたし。それより、あんたにオススメの場所があるんだけど。」

天「えっ！なにになに？」

霊夢は幻想郷の地図を出した。

霊「ここら辺に研究所みたいなどころがあるから。ここに行ったらあんたの好きなものがあるだろうし。」

天「好きなものって？」

霊「修行するための装置とか。」

天「あ、そうなんだ。」

ここ数年、まともに修行していない。そのせいか、あまり乗り気ではなかった。

天「それじゃあ、ご飯食べた後に行くよ。」

霊「え？作ってないけど。」

天「いいいっ！」

霊「嘘よバカ。」

クスツと笑った。

天「ははっ、良かった。」

そして食べた後、すぐに出発した。

•  
•  
•

「??」の研究所」

地図に書いてある通りに飛んで行くと、それらしい研究所が見えてきた。そこへ降りた。

天「ここかな。」

すると、研究所から人が現れた。正確に言う人ではないが。

「??」 「やあ、君が悟天君だね？」

天「えっ、どうして知ってるの？」

「??」 「そりゃ情報が回ってきたからさ。まあ入ってよ。」

天「君は？」

にとり「河城にとり。河童さ！」

こうして研究所の中へ入って行った。そこには異様な光景が広がっていた。

天「なに、これ…?」

に「外の世界のヒーローってやつさ。外人なのに知らないのかい？」

天「知らないなあ。それに俺は普通の外来人とは違うみたいだし。」

に「そうなんだ。ま、このヒーローってのは幻想郷にはいないわけだけど。」

「そこで、どうにか再現できないか研究してるわけだよ。」

天「俺の知ってるヒーローとはだいぶ違うなあ。」

そんなことより研究の器具よりグッズらしき物の方が目立つ。ハマっているのだろうか。

天「ああ俺もう帰らなきゃ。」

に「それと！」

天「？」

に「これを応用して修行するための装置も作ってるんだよ。まだ完全にはできてないけど。」

天「それってどんな？」

に「これさっ！」

そこには何かの扉があった。

に「ここに入ってコンピュータと一体化することで、データにしかない相手と戦うことができるんだ。」

「勿論、この中で死んだら現実でも死んだことになるけど。ま、死にそうになったら外にいる私が敵を消せばいいだけだから安心して。」

安心できない。にとりだからではなく、その装置そのものが。

プシュー

??? 「ふう、終わったぜ。」

装置の扉が開いた。

天「誰か出てきた。」

に「あ、おかえり、魔理沙。」

魔理沙「この修行はほんとにいいな！いつもありがとうなにとり！」

に「お安い御用だよ。」

魔「ん？お前はもしかして。」

天「やあ、俺は悟天。」

魔「うおお！会いたかったぜ！」

天「え？・・・そっか、新聞で。」

魔「私は霧雨魔理沙！お前とずっと戦いたかったんだぜ！というわ

けだ。勝負しろ！」

天「ほんとみんな戦い好きだなあ。」

今さらだがサイヤ人の台詞ではない。

魔「場所を変えるから、じゃあなにとり！」

に「じゃあねく。」

天「ま、いつか。」

2人は近くの平地まで移動した。いや、3人である。

・・・

「妖怪の山の平地」

に「こんな機会を見逃すもんか！悟天君のデータを取って、あの装  
置に組み込まないと。」

本人は結構真剣である。

魔「見せてやるぜ。幻想郷No.2の力を！」

天「あ、霊夢の次なんだね。」

魔「うるさーい！悟天、後悔することになるぜ！」

天「う、うん。」

正直本気でやるつもりはない。  
しかし！

魔「はああ！」

天「!!」

魔「はあああ！」

気が迸っている。髪が光り始めた。

天「！まさか！いや、でも！」

魔「はあああああ!!」

ヴンツ!!

魔理沙の戦闘力は一気に上がり、目は先ほどより光り、髪も光っていた。髪型はそれほど変わっていない。髪型や目の色以外は超サイヤ人そのものだった。

魔「驚いたか！私が、超魔理沙だっ！」

どこかで見たドヤ顔である。

天「もしかして、本気でやらなきゃダメ？」

果たして、幻想郷No.2の実力とは如何なるものなのか!?  
そして、右足を負傷している状態で大丈夫なのだろうか？

魔「どうだ悟天！驚いたか！」

天「な、なにが、どうなって…。」

魔「？ その様子だと、初めて見た顔じゃないな。知ってるのぜ？」

天「いや、俺の世界だけだと思ってたし、それに俺も。」

魔「私が初めて見たときは霊夢だったな。霊夢も師匠から教わったらしいし。」

天「超サイヤ人をかい？」

魔「超サイヤ人？なんだそれ？私はただの人間だぜ。」

天「（謎が深まるばかりだ）」

魔「もう話は終わりだ。こっちから行くぜっ！」

一目散に飛んできた！避けようとするも、

天「いつ！」

足の傷が響いてしまい避けられなかった。

魔「たあっ！」

ドゴツ!!

天「うわっ！」

攻撃により飛ばされたと思ったのもつかの間、とんでもないスピードで後ろに周り、上へ蹴り上げた！

魔「はっ！」

ゲシツ!!

天「ぐあっ！」

そしてまた物凄いスピードで先まわりし、上から下へ叩き飛ばした！

魔「そーれっ！」

ドガツ!!

天「があっ！」

そのまま地面へ叩きつけられた！そして、

魔；魔符「スターダストレヴァリエ」

魔「くらえっ！」

ドドドドツ!!



さらに追撃をキメた！  
静かになり、倒れた悟天の前に立った。

魔「ハッハッハ！この程度で手も足も出ないとはな！」

天「くっ・・・ははは。」

魔「ん？遂にいかれたか？」

天「いやあ、やっぱりすごいなって思ってたさ。こんなに強い地球人が居たなんて。」

魔「褒め言葉として受け取っておくのぜ。それで？降参か？」

天「まさかまさか。これだから本番だろ？」

魔「ふん、そんな強がりなんていらなげ。」

天「さあ？どうかな？」

「ゆつくりと立ち上がり、気を高めた。戦闘力はどんどん上がっていきく。」

魔「この感じ、師匠に似ている！」

天「だああああ!!」

ヴンツ!!

髪は金髪になり、超サイヤ人に変身した！

天「そういえば言い忘れてたね。俺はなれるんだよ。超サイヤ人になる！」

魔「そ、そう来なくちゃ面白くないのぜ。」

天「さあ・・・」

「第2ラウンド始めよう!!」

・・・

に「おっ！あれが悟天君の本気だね！すっかりデータを取らなくっちゃー！」

どうやら、悟天が超サイヤ人になったことに喜んだのは、魔理沙だけではないらしい。

に「戦闘力を計測しないと！・・・って。」

もう始まっていた。始まる瞬間を見逃したのである。

に「あー！もう！戦闘力だけでもいいや！どれほど悟天君が強くて、魔理沙が簡単にやられるわけないし。」

と言ってる間も両者は激しく闘っている。

そして、戦闘力の計測が終わり、数値を見た。

に「!!? う、嘘だろ。」

数値を見たにとりは驚いた。あの魔理沙よりも悟天は上だったのだ！

に「まずい！魔理沙が大変だ！」

魔理沙の方へ飛んで行った。にとりも誰かから舞空術を教わったらしい。

??? 「やっと見つけたわ。魔理沙♡」

どうやら闘っている悟天と魔理沙に向かっている者は、にとりだけではないようだ。

・・・

激しい闘いが続き、両者は睨み合っていた。もう夕暮れである。

天「どうした魔理沙。体力が落ちてるよ。」

魔「はあ、はあ、そんな、負け惜しみは、いらないぜ。」

天「負け惜しみ？」

魔「さつきから、お前の攻撃は、全然、効いてないぜ。お前も疲れただろ？」

天「・・・。」

実は相手が女の子ということもあり、手加減をしている。そのせいで、なかなか決着をつけられないでいるのだ。

とは言え、魔理沙は痩せ我慢をしている。

魔「どっちにしろ、これで終わりだぜ！」

至近距離で構えた。

魔「はあああ！」

天「なっ！気がどんどん上がってる！ならこっちも！」

魔；魔砲「ファイナルスパーク」

天；「かめはめ波」

魔「ファイナルスパーク！！」

ドオオオッ！！

天「波あああ!!」  
ドンツ!!

2つのエネルギーはとてつもない勢いでぶつかった! やや魔理沙がおしている。

天「なっ! おされてる?」

魔「いつけえええ!」

天「くっ、負けて、たまるかあああ!」

そんな中、にとりが到着した。

に「魔理沙! すぐに降参して!」

魔「は!?! なんで!?! 今勝ってるだろ?」

に「説明は後! とにかく今は降s」

??? 「魔――理――沙――――ツ!!」

奇声にも似た声で、何者かが飛んできた!

魔「げっ! アリス!」

ア「もう逃がさないわ――!」

魔「すまん悟天! 勝負はまた今度な!」

天「えっ?」

魔理沙が急に攻撃をやめたためにかめはめ波はそのまま直進し、魔理沙を追いかけるアリスに直撃した。

ア「あっはあああん!」

天「あっ!」

アリスは倒れた。

に「大丈夫かな？」

天「ごめんっ！君大丈夫？」

大丈夫なわけがない。と思っていたが、

ア「ほおおあああ!!」

ボウツ!!

天「えっ？」

に「!!」

こんな状況で、アリスもサイヤパワーによるパワーアップを成し遂げたのであった！

ア「なアにこれエ？身体の底から力が湧き上がってくるウー！」

天「なんか、怖いなあ、いろんな意味で。」

急にアリスは悟天の方を見た。ニヤアつと笑い、

ア「あなたが、美味しそうな外来人さんね。」

天「・・・。」

ア「次はあなただからね♡ あくムラムラする！待ちなさい！魔理沙ー！ー!!」

そう言って、魔理沙を追いかけていった。

天「・・・、変態だ。でも、あの目は…。」

何かに気づいたが、今は止めなかった。

アリスの一連の流れをスルーしたにとりは、計測機に夢中になっている。

天「にしても、どうして魔理沙を助けに来たの？」

に「魔理沙が死んじゃうと思ったからね。」

天「酷いなあ。俺は女の子を殺したりしないよ。」

に「・・・やっぱりそうなんだ。」

天「え？」

に「新聞見たときから、いい人だって思ったんだよ。信じてよかった！」

天「助けに来たあたり信用してないんじゃない？」

に「それにね、みんなのパワーアップの秘密がわかったよ！」

天「なんだって！」

に「どうやら、悟天君のサイヤパワーが対象者の中に入り込んで、サイヤパワーを維持しつつ、対象者の色に染まるみたいだね。」

天「・・・つまり？」

に「本人がサイヤ人みたいになるってことだよ。」

天「そうだったのか！でもなんで俺じゃないとパワーアップできないの？」

に「本物のサイヤ人じゃないと、移すことができないみたい。」

天「？ どうしてにとりはサイヤ人を知ってるの？」

に「魔理沙からいろいろ聞いているからね。」

「霊夢と魔理沙のお師匠さんはサイヤ人だったらしいよ。だから修行を受けたあの2人だけが、とんでもなく強かったんだろうね。」

天「俺より先にサイヤ人が来てたのか。」

「あつ、そういえば魔理沙の姿が変わったあのパワーアップはなんなの？」

に「あれも君と殆ど同じさ。」

「サイヤパワーを宿した者は、サイヤ人と形質が同じになるんだよ。だから、あれは超サイヤ人と同じパワーアップしてるのさ。」

天「超サイヤ人じゃないのに超サイヤ人と同じパワーアップか。じゃあ、なんて言うの？」

に「うーん、超魔理沙でいいんじゃない？」

天「(にとりがつけた名前だったんだ…)」  
に「もう暗くなってきたね。悟天君も帰りなよ。私は今日のデータをあの装置に組み込むから帰るよ。」

天「そっか、それじゃあ。」

2人はそれぞれ帰るべき場所へ帰っていった。

・  
・

### 〔博麗神社〕

帰ってみると、ボロボロな悟天の姿を見た霊夢はかんかんになって怒っていた。

霊「ちよつとなによその格好！」

天「魔理沙と手合わせして、それで。」

霊「誰が縫わなきゃいけないと思ってるのよ！」

天「え？自分で縫うけど。」

霊「口答えしない！貸しなさい！」

天「・・・自分でやるのに。」

この日も、何事もなく終わったのであった。

くくくくくくく

師「おお！魔理沙、おめえすげえな！」

魔「へへっ、私は最強の魔法使いを目指してるからな！」

霊「・・・。」

師「でもよお、弾幕ばかりじゃなくて、ちゃんと組み手の修行もしなきゃダメだぞお。」

魔「勝てればいいのぜ！弾幕はパワーだぜ！」

師「霊夢も教えてやってくれよお。」

霊「私休憩する。」

師「？ どうした霊夢？」

霊「・・・なんでもない。」

師「・・・。」

魔「師匠！弾幕撃ってくれよ！」

気弾のことだ。

師「お、おう。」

~~~~~

霊「・・・朝ね。」

それから悟天は、チルノの稽古をつけながら、幻想郷のいろんなところへ足を運んだ。

もう一度紅魔館へ行ったり、迷いの竹林へ行ったり、地霊殿へ行ったり、たまににとりの研究所へ行ったりし、時には手合わせしたりして、いろんな者と知り合いになった。

そして、寝込んでいたレミリアは元気になり、悟天に再度勝負を申し込んでくれた。

にとりの装置はそれから忙しくなった。

装置のことを聞いた、チルノとアリスを除くサイヤパワーを手に入れた複数の少女達が、頻繁に使うようになったのである。

それがきっかけで、少女達の間でも交流が深まり、仲間意識が芽生えていたのであった。

時の流れというのは早いもので、半年という月日はあっという間に流れていった。

第1章

? 伝説の始まり?

〈完〉

第2章? 時空を超えた過去の強敵達?

? 「ドクター、あれの完成はいつになりますか?」

ドクター? 「あと半年といったところか。」

? 「にしてもドクターはすごいですねエ。あれの細胞の中に、さらにバーダックとトランクスの細胞まで混ぜてしまうなんて。」

ド 「元のデータがあったからな。これくらい容易い。」

? 「にしてもあの転送機は、孫悟天を連れてきてしまったようですが大丈夫なのでしょうか。」

ド 「なに、心配はいらん。たかが孫悟天だ。それに、もうじきか。4つの転送機が到着する筈だ。」

? 「あんなのがへこの幻想郷へ来て大丈夫なのでしょうか?」

ド 「問題ない。孫悟天が来る以前の幻想郷よりも遥かに強くなっているようだ。簡単には滅ばん。あの4人程度で滅んでもらっては困る。」

? 「ドクターがそう仰るなら。」

ド 「ククク、楽しみだ。全ては、大いなる計画のためだからな。」

遂に動き出した謎の影。

果たして、大いなる計画とは? あれとは何なのか?

第2章

? 時空を超えた過去の強敵達?

「博麗神社」

天 「それじゃ、行ってくる。」

霊 「はいはい。」

この日も弟子達に稽古をつけるために、早々と出掛けた。すでに1番弟子のチルノが待っていた。

チ「遅いよ兄貴い。」

天「いやいや、早すぎだよ！」

時刻は午前7時半である。早起きは霊夢との生活によりできるよ
うになっていた。

しかし、彼にはまだ荷が重い様子。

チ「みんな待ってるよ！早くいこ！」

天「わかったわかった。」

いつも通り、湖の近くへ向けて飛んでいった。

...

「霧の湖のほとり」

ルーミア「あっ！にいちちゃんやつと来たのだ！」

リグル「もう遅いよあんちゃん。」

2人の弟子が待っていた。他はまだ来ていない。

この半年の間で、チルノが悟天に弟子入りしたという噂は広がり、
彼に弟子入りする幻想少女が相次いだのだ。今では5人も弟子がい
る。

天「いやあ、相変わらず早いなあ。」

ル「まだ明けてすぐだから眠くないのだ。」

天「え？」

リ「私はたまたま早く起きたんだよな。」

チ「よーっし、始めるぞー！」

天「元気いっばいだな。」

それから1時間経ったあたりで他2人も到着した。

ミステイア「おはようございます〜兄さん。」

大妖精「おはようございます、お兄様。」

天「あつ、来た来た。」

これでもみな揃ったので、修行を再開した。

努力に励んでいると、2時間ほどの時間はすぐに去ってしまった。

天「にしてもみんな強くなったなあ。」

弟子たちは強くなったのだが、未だにサイヤパワーを手に入れたのはチルノだけである。

にとりによると、各々の素質が関係しているらしい。

リ「いくぞあんちゃん!」

天「あ、うん。」

5人；「合体かめはめ波」

ミ「吹っ飛ばー!」

い。
ミステイアはたまに口が悪くなる。いや、元々こうなのかもしれない。

5人「波あああ!!」

ドンツ!!

天「んっ!」

片手で止めにかかった。そして、

天「はあっ！」

かき消した。

大「お兄様はやっぱり強いなあ。」

ル「でも前より、にいちやんがかめはめ波を止める時間が長くなってるのだー。」

リ「おっ、それは成長だな。」

ミ「もうすぐで勝てるかもね！」

チ「一旦終わろう！夕方にまた修行しようね兄貴！」

天「うん！それじゃあまた。」

一旦湖から離れた。5人はまだ話している。

天「さて、人里に行つて団子でも食べるか。」

ゆっくり飛んで行つた。

・・・

「にとりの研究所」

悟天達が修行をしていたその頃、にとりの研究所には妖夢とアリスがいた。

勿論修行のためであるが、アリスがいるとどうしてもいかがわしい話にずれてしまう。

ア「それでねエ、男の人のアレを啜えるとオ、頭がポーツとしてきてねエ、」

妖「(ゴクツ)」

に「ちよつと、修行しない上に変な話するなら帰ってくれない？」
ア「ちゃんと修行しますよオ。魔理沙を捕まえるためにもオ。」
に「……。」

アリスには性格を変えてしまう何かがあると、悟天から聞いていた。それも研究中である。

に「それならほら、早くバトルシミュレーターに入つて。」

この修行装置の名前である。この半年の間で決めたそうだ。

ア「私我先ねエ。」

妖「早く終わらしてくださいね。」

に「相手は誰にするの？」

ア「魔——理——沙——！——！」

に「はい。」

実はこの時、他の部屋には霊夢も入っていた。

・・・

「魔法の森上空」

人里へ向けて飛んでいた悟天は、同じく飛んでいる妹紅とすれ違つた。

天「あ、妹紅。」

妹紅「あ、女たらし。」

天「まだその呼び方なの？」

妹「う、うるさい！この女たらし！」

こう呼ばれるようになったのも訳があるが、それは後述する。
妹紅にとって彼は、女に対してデレデレしてるダメ男だそうだ。

天「それじゃあね。」

妹「ふんっ！」

そして妹紅は、にとりの研究所の方へ飛んで行った。

・・・

〔紅魔館〕

一方、紅魔館では優雅な時間が流れていた。

レミリアの妹フランドールは屋内で遊んでおり、

門番の紅美鈴はスヤスヤ寝ており、

レミリアの親友のパチュリーとその助手の小悪魔は本を読んでおり、

メイド長の咲夜は紅茶を淹れていた。

主人であるレミリアは、屋上で紅茶を飲みながら景色を眺めていた。勿論、パラソルの陰に入っている。

咲「今日は天気がいいですね、お嬢様。」

レ「そうね。気持ち良い風だわ。」

湖の近くでは、悟天の弟子と思しき5人の姿も見える。遊んでいるのだろう。

そんなのどかな風景を壊すかのように、突然風が止んだ！

レ「！」

咲「あっ！」

ーと、次の瞬間!!

ピカッ!!ビリビリッ!!

湖の近くの林の中で、眩しい光が放たれた。

咲「お嬢様、今のは！」

レ「間違いないわ。孫悟天が初めて幻想郷に来た時と同じ光よ。」

咲「それに、にとりの研究所と守矢神社付近に、それぞれ一つずつ同じ光が放たれました。」

レ「残念だけど、孫悟天とは違って物騒な輩が来たみたいよ。」

咲「能力で見たんですね。」

レ「そう。あの林に美鈴を向かわせなさい。もし美鈴がやられることがあれば咲夜、あなたに行かせるわ。」

咲「かしこまりました。」

この後、美鈴は叩き起こされ、渋々林の方へ向かったという。

レ「面白いことが、起きそうね。」

・・・

「紫の住処」

? 「紫様ー！」

紫「なにようるさいわね。」

? 「それが大変なんですってー！」

紫「藍、今昼寝中なの。邪魔しないでくれる?それに霊夢がなんと

かしてくれるでしょ。」

藍「その霊夢がまだ気づいてないんです！しかも3箇所に見れたんですよ！」

紫「他の妖怪や魔理沙に任せなさいな。」

藍「あつ！もう1人現れました！4人とも霊夢や魔理沙でないと勝てないんですよ！孫悟天でも流石にこの数やっぱりむ」

紫「それを早く言いなさいよ！」

藍「ええ！」

藍は逆に吃驚（びっくり）してしまった。

紫「うーん、悟天君が来てから周辺の妖怪や人間は強くなったものの、こんなに早く来られては…。」

藍「どうしますか？」

紫「あの4体は私が見張るわ。もし被害が大きくなるようなら、スキマで幻想郷から追放するから。」

藍「（珍しく紫様がやる気だ。）」

・・・

「霧の湖のほとり」

リ「今の、なに？」

大「なんだか怖い。」

チ「兄貴と初めて会った時と同じだ！」

ミ「でも、こんなに胸騒ぎがするものなの？」

ル「ちよつと見てくるのだ。」

大「気をつけてね！」

ルーミアはただ1人、光った方へ歩いて行った。
2分ほど歩くと、人のようなものが倒れていた。その横にはあの円盤もあった。

ル「あれ？気を感じないのだ。ロボットなのか？それにこの丸いのは何なのだ？」

顔が紫色なのでそうだと思った。
つついたりしてみたが起きる様子はない。

ミ「ルーミア遅いね。」

リ「やばいんじゃないのか？」

大「チルノちゃん、私たちも行こうよ。」

チ「そうだね。行こっか。」

4人が歩こうとした横を誰かが走り去った。

大「今のつて。」

リ「ああ、あの居眠り門番だ。」

チ「早く行こ！」

4人も走っていった。

一方ルーミアは、

ル「あつ、やっと起きたのだ。」
?? 「・・・。」

やっとそれは起き上がった。今さらだが、異様な格好をしている。

ル「名前はなんていうのだ？」
人造人間15号「15号。」

ル「やっぱりロボットなのだー！ねえ、にいちやんみたいに強いのか？」

15「ソングクウ…。」

ル「孫悟空？誰なのだ？」

次の瞬間、何も言わずにルーミアを蹴った。

ゲシッ！

ル「あがつ！」

木に激突し止まった。見上げると、15号は手のひらをこちらに向けている。

ル「え？ま、待つのだ…。」

有無を問わずにエネルギー弾を発射した！

？「危ないっ！」

ボッ！

リ「また光った！」

ミ「あつ！」

駆けつけたそこには、異様な格好をした男と、ボロボロになって倒れている美鈴と、その隣で泣いているルーミアがいた。

大「ルーミアちゃん！」

ミ「なんてことを…。」

リ「ルーミア、立てるか？」

ル「グスツ、うん…。」

チ「許せない！」

大「チルノちゃん、どうやらあの男の人はロボットみたいだよ。」

チ「それなら決まりだね！」

リ「もしかして…。」

チ「え？」

リ「ん？壊すんじゃないの？」

チ「あ、そうそう！」

このように、たまにチルノと会話が通じないことがある。

チ「あたいら5人組で、こんなやつ木っ端微塵にしようよ！」

大「チルノちゃん、木っ端微塵の意味わかってる？」

チ「わかんない！でも戦おうよ！」

大「チルノちゃんがそう言うなら。」

リ「おうよ！」

ル「門番の仇を取るのだ！」

ミ「修行の成果、見せてやろうよ！」

チ「みんな！行くぞ！」

15 「ククク…。」

ルーミアを除く4人は、円盤に気づけなかった。

大「チルノちゃん、まずどうしたらいいの？」

チ「うーんとね、そうだ！」

「みんな！散らばって！作戦通りに！」

4人「わかった！」

言われた通りにみんな散らばった。
チルノは、正面から攻撃した。

チ「くらえええ！」

チ；氷符「アイシクルフォール」

チ「アイシクルう、フォール！」

15 「フン。」

15号はガードした。全く効いている様子はないが、チルノはやめなかった。

チ「負けないぞ！はあああ！」

15 「ククク」

チ「はあああ！」

15 「フン、ハアツ！」

腕を勢いよく広げ、アイシクルフォールをかき消した。
その時！

リ「だあつ！」

ル「やあつ！」

リグルは後ろから15号の足を回し蹴りし、バランスが崩れたところにルーミアが目にあ闇を擦りつけた。

そこへ、木陰に隠れ、気を溜めていた大妖精とミスティアが、

大&ミ「合体かめはめ波」

大&ミ「波あああ！」

ドンツ！

枝の上から、暗闇で視界を奪われた目に向けてかめはめ波を発射し

た！

15 「グアアツ！」

命中した。4人はチルノの近くへ集まった。

大「やったね！チルノちゃん！」

リ「作戦成功だな！」

ミ「ドキドキした〜。」

ル「門番の仇をとったのだ！」

チ「はあ、はあ、へへっ、どんなもんだい！」

煙が晴れると、15号はまだ壊れていなかった。

だが、一部が損傷していた。具体的には、サングラスの右レンズ中の機械がむき出しになり、帽子は殆ど壊れた、と言ったところだ。

リ「お、おい、嘘だろ。」

ミ「まだ、倒れてないの？」

ル「あ、あ…。」

大「チルノちゃん！この次の作戦は？」

チ「・・・ない。あれで倒せると思ってたから。」

大「そんな…。」

15 「ククク。」

不気味に笑うと、ボロボロの帽子を投げ捨てた。

まだ普通に動けるといふことが、最大の誤算である。

ミ「どうしよう！どうしよう！」

リ「どうしようって言われても。」

ル「！来るのだ！」

15；「F・Fスパークキャノン」

ボボボボッ!

連続エネルギー弾が飛んできた!

大「うわっ! (ピチューン)」

ミ「ああっ!」

リ「いっ!」

チ「ぐっ!ぐっ!」

大妖精は、攻撃に耐えきれず消えてしまった。

ミスティアとリグルは、1発でノックアウトしてしまった。

ルーミアは、暗闇に隠れやり過ぎした。

チルノは、耐えきったが今にも泣きそうである。

ル「もう、終わりなのだ…。」

チ「ぐすつ、まだ負けてないぞ!」

「兄貴が言ってたんだ。最後まで諦めちゃいけないって!そして、泣いちゃ、いけないって!」

15 「ククク」

ゆっくりと残った2人に近づいてきた。

ルーミアは既に放心状態、チルノは震えながらも構えている。

目の前まで迫ってきた。

15 「へっ!」

ゲシッ!

チ「あがつ!」

蹴り飛ばされ、木にぶつかった。それでも、

チ「か、かかってこい!」

15 「ククク」

小さな少女は諦めなかった。
その勇気は、無駄ではなかった！

？「よく頑張りましたね、あなた達。」

？；幻世「ザ・ワールド」

チチチチ：

その声が聞こえた途端、15号が止まった。

チ「え？え？」

咲「ただのアホの子かと思ってたけど、よく頑張ったわね。悟天さんの修行が身にしみてる感じがするわ。」

チ「あっ！メイド長！」

咲「今は敵の時間だけが止まっています。さあ、お友達を紅魔館へ運んで。」

ル「え？助かったのかー？」

チ「ルーミア、早く運ぶよ！」

ル「？わかったのだ。」

ルーミアは状況がわかっていない様子であったが、すぐに動いてくれた。

チ「門番は？」

咲「もう運びました。」

チ「1人で大丈夫？」

咲「大丈夫よ。あなた達のおかげで1人で勝てるわ。」

チ「お願い！」

咲夜はニツコリと笑った。

チルノとルーミアは、颯爽と運んでいった。

咲「もういいかしら。解除！」

15 「アッ？」

咲「今度の相手は私です！かかってきなさい！」

15 「ククク」

咲；奇術「幻惑ミスディレクション」

ドドドツ！

複数の弾幕を放った。

15 「ククク！」

それを躲し、咲夜に迫ったが、

咲「はっ！」

ドドドツ！

15 「グッ！」

さらに距離を取られ、別の弾幕をぶつけられた。

この技は、2段階攻撃だったのだ。

咲「？ 思ったよりは効いてないわね。」

確実に命中はした。

今の攻撃で致命傷を与える予定だったが、そこまでには至らなかった。

15 「ククク」

周囲を気にかけてみると、遠くで物凄い気を察知した。

咲「こ、これは、まさか文さんの。」

15 「ギイツ！」

咲「っ！」

15号は傷だらけであるのに対し、咲夜は至って冷静であった。激しい攻防の末、距離を取り見合った。

咲「はあっ！」

15 「ハアツ！」

お互いぶつかり、突き抜けた！

咲夜は突き抜けたまま構えている。

15号は振り返り、不気味な笑みを浮かべながら歩いてきた。

15 「ククク」

咲「・・・。」

15 「ククク、ク、ク…ク…」

歩いて来る途中、15号の頭は綺麗に斬り落とされ、自身の手の上に落ち、

ドカーンッ!!

そして、爆破した。

咲夜、美鈴、リグル、ミスティア、ルーミア、大妖精、そしてチルノの7人が手にした見事な勝利である。

空は紅に染まろうとしていた。

咲「ふう、後日あの5人にはお礼をしましょうか。」

「文さんが気になりますますが、もう疲れましたし、お嬢様のディナーの準備

備でもしましょうか。」

こうしてメイド長は、自分の帰る場所へ帰って行った。

・・・

「にとりの研究所」

光が放たれた頃、にとりの研究所前では。

妖「何ですか今のは。」

に「行ってみよう！」

ア「あはん♡待ってェ。」

修行を終えたアリス・にとり・妖夢は、光った方へ向かった。
途中で妹紅に会った。

妹「さっきのって？」

に「今行くところ。」

妹「そんじゃ私も。」

ア「妹紅もそういうことに興味あるのオ？」

妹「燃やすぞ。」

ア「あん♡」

4人は森の中へ入っていった。

そこには、肌の白い大きな男が横たわっていた。勿論、その横にはあ
あの円盤もあった。

妹「なんだこいつ。」

妖「気を感じませんね。」

ア「人造人間ってところかしら。これってもしかしてオナに「この円盤つてもしかして！」

にとりは急いでその円盤を手を取った。

に「ちよつとこれ持って帰って研究してくる！悟天君がどうしてこの世界に来たのかわかるかもしれない！」

全速力で帰っていった。

妖「さて、これどうしますか？」

妹「この変態に玩具にされる前にとつと壊そうぜ。」

ア「エ〜。」

妹「残念そうな顔するなよ。」

妖「！ 離れてください！」

ボツ！ボツ！ボツ！

そう言った直後、その大きな男は起き上がり、エネルギー弾を3人に向けて発射した。

妖「くっ！」

妹「おっと！」

ドカーンッ！

ア「あつはーん！」

妖夢は剣で払い、妹紅は手で払い、アリスは直撃した。アリスは静かになった。

妹「あの変態を1発で黙らせるとは…。」

妖「いつもやってるじゃないですか。」

??「ソン、ゴクウ…。」

妹「暗号か？」

妖「人の名前のようにも聞こえました。」

妹「だとしたらそいつを守るためにもここで壊さなきゃな！」

??「・・・。」

妖「14号？」

妹「あれの名前か？」

妖「はい、あれを見てたら頭に浮かんできました。よくわかりませんが、そういうことにしますか。」

妹「そうだな。あつ、にとりのやつ、結局スパイカメラを置いてきてるじゃねえか。」

気がつくとも浮いているカメラがこちらを見ている。

妖「にとりさん、執念深いですね。」

14号「・・・、殺す。」

妖「それでは、魂魄妖夢ー」

妹「藤原妹紅ー」

妖&妹「参るっ!!」

2人は一斉に、14号目掛けて飛んでいった。

しかしぶつかる寸前で、

14「フンツ！」

ドゴツ!!

妖「うっ！」

妹「あっ！」

妖夢は殴り飛ばされてしまった。

妖「(これほどパワーがあるとは・・・、油断した・・・!)」

少しくらいは我慢できると思ったのである。

妹「てめえ！」

妹；蓬菜「凱風快晴　ーフジヤマヴォルケイノー」
ドドドツ！

至近距離でスペルを使った。

14 「グツ！」

妹「よっしゃいくぜっ！」

ドゴツ！バシツ！ゲシツ！

怯んだ隙を突き、ラツシュした。最後に、

妹「はっ！」

ゲシツ！！

蹴り飛ばした。が、思うようには行かず、5メートル程度しか飛ばせなかった。

妹「へっ、随分タフじゃねえか、お前。」

14 「・・・。」

妖夢はこの黙った一瞬で斬りかかった！

妖「はあっ！」

キンツ！！

しかし、妖夢の一太刀を手の甲で止めた！

妹「な、なんてこった。妖夢の一太刀を、手の甲で止めちゃうなん

て。」

妖「くっ、まだまだ！」

キンツ！キンツ！

さらに斬りかかったが、全て止められてしまい、

14 「フツ！」

ドゴツ!!

妖「がつ！」

またしても殴り飛ばされてしまった。

隙をつき、後ろに周った妹紅は頭部に蹴りをいれようとしたが、

ガシツ！

妹「なっ！」

足を掴まれ投げられた。

バキツ！バキツ！

妹「ぐえっ」

何本もの木にぶつかり、木々を何本か折ってやっと止まった。

妹「げほっ」

妖「どうすれば…。」

妹「ダメだ。正面からじゃ攻撃が効かねえ。しかも不意打ちも効かねえ。どうすりゃいいんだ。」

両者は長く見合ったまま、殆ど動かなかった。

痺れを切らし、妖夢は正面から突っ込んだ！

妖「だあっ！」

左腕で斬りかかった！が、

ガシッ！

右腕でしっかりと掴まれてしまった！

妖「くっ、くそお！」

14「フン…。」

睨み合ったまま止まっている。しかし力はお互い抜いていない。

妖「ぐぐぐ。」

14「クウ…」

妖「負けて、たまるかあっ！」

14「！」

ザッ!!

残っていた右腕の楼観剣で一気に14号の右手を斬った！

14「ガアッ！エ、イツ！」

ドゴッ!!

妖「ぐあっ！」

14号も負けじと左の拳で殴り飛ばした。妖夢は岩場にぶつけられた。岩も大破した。

妹「大丈夫か妖夢！」

妖「はは、3発でノックアウトとは…、防御の修行をサボってしまったせいですね…。」

妹「その分、攻撃で成果が出てるじゃないか。あんな堅いやつの右手を斬つちまうなんてよ。」

妖「えへへ。」

ふと見上げると、空は曇っていたことに気づいた。それだけでなく、離れた場所から強い気を感じ取った。

妹「ん？なんだ？」

妖「これは、文さんの気？」

14「グウウウ…」

妹「喋ってる暇はなさそうだな。」

「仕方ない、こんな所でお披露目することになるとはな！」

妖「妹紅さん、いったい何を。」

妹紅は腕を交差し、自身を灼熱の炎に包んだ！

そして、肘を曲げ、両腕を左右に広げ、構えた！

妹「うおおお!!」

妖「妹紅さんの気が、上がっていく！」

妹；「フェニックスダイナマイト」

妹「フェニックス、ダイナマイト!!」

ポウツ!!

炎を纏ったまま、14号に突撃した。

14「ガッ！」

右腕で殴ろうとしたが、その腕の先には手が無い。

妹「もらったあ！」

14号にすっかりとしがみつки、あつという間に、

ドツカーン!!!

14号諸共粉々に吹き飛んだ!

妖「妹紅さん!そんな、自爆だなんて…。」

泣きそうになっていた。

すると、破片と肉片の集まりから、肉片だけが光り集まった。

妹;「リザレクション」

そして、光の中から先ほどと同じ構えの状態で、生きている妹紅が現れた。

妹「くう…、効いたぜ。」

妖「妹紅さん!ど、どうして?」

妹「あれ?知らなかったか?私は不老不死だ。だから捨て身にしてもこの通り。体力は減るけどな。」

妖「よ、よかった…。死んだままだったらどうしようかと。」

妹「おいおい、泣きそうになるなよ。文の方が気になるが、もう私は疲れた。今夜はにとりに泊めてもらおうぜ。」

妖「そうですね!…あれ?アリスさんは?」

妹「えつと…、あ、いた。」

妖「運びましょうか。」

妹「そんじゃ、にとりの所に帰るぞ。」

妖「はいっ!」

かくして、14号を相手に勝利を収めることができた妹紅と妖夢。不死鳥の戦士と、銀の武士は、肩を並べ、林の中を歩いていった。

•
•
•

「妖怪の山の麓」

光が放たれた同じ時、守矢神社付近の妖怪の山の麓では、

権「あわわ、何ですかこれ？」

権の目の前に、1人の男と、あの円盤が光を放ち、急に現れた。

権「この男の人、結構カッコいいかも。」

じーっと見つめているが、起きる様子はない。

この光は、文々。新聞社に居た文も気づいた。

文「あやや、今の光は麓の近くですね。これはスクープかも！」

上司「その前に、はい、この書類片付けて。」

文「急急急！それどころじゃないのに。」

取材より先に、書類に追われた。

•
•
•

〔守矢神社〕

神「今の、気づいたか？」

諏「うん、良くないことが起きたね。」

早「どうしました？」

神「良くないものが入ってきた。それも3体。1体は妖怪の山の麓にいる。」

早「え！でしたら。」

諏「うん、早苗、行つてくれるかい？」

早「勿論です！」

神「気をつけるんだぞ。今回はただの妖怪じゃないからな。」

早「わかってますっ！行つてきまーす！」

諏「怪我しないようにね。」

神「・・・(今の早苗なら大丈夫か)。」

子を心配する親の気持ちである。

・・・

〔麓〕

じーっと見つめていること3分、遂に起き上がった。

権「うわっ、起き上がった。」

??「・・・お前は誰だ。」

権「私は犬走権。この山の警備をしています。」

13号「俺は13号。孫悟空を知らないか？」

権「孫悟空？わかりません。文々。新聞社に行けばわかるかもしれ
ませんけど。」

13「そうか。では早速。」

権「ちよつと待ってください！勝手に入るのはダメです！」

13 「・・・そうか、残念だ。」

右の手のひらを権に向け、エネルギーを集中させた。右手が赤く光った！

権「なっ！」

早「あつ、あれですね！」

麓に到着した。そこには、ボロボロになって倒れている権がいた。

早「権さん！あなたがやったのですか？」

13 「どうやらお前も邪魔者らしいな。」

早「何が目的ですか！」

13 「孫悟空を殺すことだ。」

早「そんな人は知りません。ですが、人を殺すのであれば私が相手になります！」

13 「小娘が。」

早「はああ！」

ポウツ！！

気を高めた。

13 「ほう。お前はまだやれるらしいな。」

早「あなた、見たところ人間ではありませんね。」

「アンドロイド、でしょうか。それなら心置き無く闘えます！」

13 「ほぎげ。」

早「覚悟！」

早；秘術「グレイソーマタージ」

早「はあっ！」

ドドドッ！

弾幕を連続で浴びせた！が、

13；「アンドロイドバリアー」

全て防がれた。

早「なかなかやりますね。ならこれはどうですか！」

早；奇跡「客星の明るい夜」

早「くらいなさい！」

13「何度やっても同じだ。」

13；「アンドロイドバリアー」

再度バリアを張り、全ての攻撃を防いだ。

バリアをとりて正面を見てみたが、

13「ん？何処へ行った。」

早「ここですよ！」

ゴツッ！

後ろから奇襲をかけた！

13「なにっ！」

早「だだだだ！」

連続攻撃を決め、

早「はあっ！」

吹っ飛ばした。そして、

早「トドメです！」

早；大奇跡「八坂の神風」

早「はあああ！」

最後に一撃をくらわした。

早「ふふつ、どんなもんですか。にしても壊れてないとはやりませぬ。」

13「ククク。」

早「？何がおかしいんですか？」

13「いやいや、孫悟空やその仲間達以外にも、こんなに手応えのある奴がいると思うと楽しみでな。」

早「・・・何を企んでいるんですか。」

13「さあな。だがこんなもので終わっても面白くないからな。」
バシユツ！ボツ！ボツ！ボツ！

途端に高く飛び、早苗に向けてエネルギー弾を連射した。

早「はっ！はっ！、そんなもの、当たりませんよ！」

13「それはよかったな。」

早「？」

下を見てやつと気づいた。

避けたエネルギー弾は、倒れている樫に何発も当たっていたのだ。

樫「あつ、がはっ…。」

早「！樫さん！」

慌てて樫に元へ降りた。

その瞬間を13号は見逃さなかった。

13 「ハハハ！バカめ！」

13；「S・Sデッドリイボンバー」

早「しまった！」

まだ避けることはできた。しかし権を抱えたまま避けきるのは不可能だった。

権を守るため、13号の攻撃を背中で止めようとした！

早「うわあああ！」

体を張って、なんとか止めることができた。その見返りは大きなものになってしまったが。

13 「貴様も、孫悟空のように甘いな。そんな死にかけの命を助けて何になる。」

早「大切な、お友達です！私の数少ない、大事なお友達です！」

13 「ふん、くだらん。そのせいで2人揃ってあの世へ行くことになるんだぞ。」

早「そうは、させません。あなたなんかは、誰も、殺させません！」

13 「ふん、じゃあな。」

2人に向けてエネルギー波を発射しようとした
その時！

？；岐符「天の八衢」

ドドドッ！

ものすごいスピードで弾幕が飛んできた！

13 「ぐうつ！今度はなんだ。」

この隙に早苗は権を抱え、距離をとった。

早「あ、文さん！」

文「ふう、どうやら早苗さんは無事の様子ですね。」

早「・・・でも、権さんが・・・」

文「え？」

ぐつたりと倒れ伏した権を見て、一瞬絶句した。

文「・・・権？」

権「文さん。すみません、麓を、守れま、せんでした・・・」

文「いいえ、あなたは充分守ってくれましたよ・・・」

権「へへ、文さんに、褒められ、ると、がはっ、嬉しい、です。」

文「もう喋らなくていいです！」

権は目から滴をこぼしていた。

権「文さん、あとは、お願い、しますね。」

文「権!!」

権は目を閉ざしてしまった。気は無いくらい小さくなっている。

文「・・・。」

13 「お別れの挨拶は済んだか？貴様も邪魔をするなら容赦は」

文「許しません、よくも、よくも・・・！」

13 「?なんだ」

空は曇っていないのに雷が落ちた!

早「え?私、曇らせてないですよ?」

文「よくも、よくも!!」

森がざわついた。氣候が明らかに変化している。

早「文さんの気が、どんどん…。」

文「よくも権をつ!」

13「なんだ、なんだというんだ。小娘風情が。」

文「うゝうゝ!!」

早「あ、文さん!」

文「があああっ!!!」

ヴンツ!!

猛獣の様な叫びを上げた直後、気は迸り、髪が少し逆立ち、虹彩は真っ赤に染まった!

文「早苗さん、権を早く、永遠亭へ。」

早「文さんは、1人で大丈夫なんですか?」

文「私の理性が残ってるうちに、とつとつれていけっ!」

早「は、はい!」

文は今まで殆ど敬語で喋っていたが、その敬語はなくなっていた。

文「お前…、覚悟、できてんだろうなあっ!!」

13「な…、あ…。」

13号は、あまりにも気迫で、震えてしまった。

だが、慌てていたのもここまで。急にくるりと方向を変え、権を抱える早苗に向かってエネルギー波を発射しようとした。

一瞬だったにも関わらず、気がついた時には既に文は目の前に来ていた!

13 「な n」

ドゴツ!!

13 「うごっつ!がああ…」

文の腕は、13号の腹を貫いていた!

文「いいかげんにしろ…、このクズやろう…。」

13 「あゝっ、がっ」

文「弱き者を散々痛ぶりやがって…、動けない相手を…。」

ここでやっとな腕を引き抜いた。風穴が開いている。

しかし文の気は収まっていない。

文「お前、人造人間か。」

13 「あああ、うっ」

文「まだ壊れないか。無駄にしぶといな。」

13 「ち、調子に乗るなよ。」

文「…いて。」

すると、何処からともなくガラクタが飛んできた。その一部が文の頬に当たったのである。

そのガラクタは全て、13号に集まっているではないか。

13 「この程度で終わったと思うな。これぐらいは計算済みだ。」

「そして、お前がいい気になっていられるのも今のうちだ!」

見る見るうちに、破片は13号の身体に溶け込んでいった。

文は、黙って見ていた。これから13号がパワーアップすることは推測できていたが、このまま壊しては権の仇は取れない。

13 「ハハハ!その判断が命取りになるんだぞ!」

文「……。」

そして最後の破片、いや、最後だけはパーツに見える。それが溶け込んだ瞬間！

13 「うおおおお！」

文「……。」

上半身の服は消し飛び、髪が橙色へ、肌が青色へ変色した。そして、身長も3メートル程にまで大きくなり、体格もそれに合わせてでかくなつた。

それだけではない。先ほど開けた穴が塞がってしまったではないか。

合体13号の完成である。

13 「待たせたな。これが俺の本気だ。」

文「待たせやがって。私の怒りはまだ収まってないんだ…。」

13 「ほう。」

文「壊れても知らないぞ!!」

既に夕方であつた。

・・・

「人里」

天「今の、ものすごい光だつたな。何だつたんだろう。はむっ。」

光が放たれて少し経つた頃、我らの主人公は悠長に団子を食べていた。

天「んっ！3箇所でもみんなの気が高まった。」

「しかも1箇所はチルノ達だ。まずい、助けに行かないと。妖夢や妹紅や早苗が本気で闘ってるなら、チルノ達に勝ち目はない！」

弟子達が心配になり助けに行こうとした、次の瞬間！

ピカッ!!ビリビリッ!!

天「なっ、なんだ!?!」

今度は人里の商店の方で眩い光が放たれた。

このままでは、一般人のみんなが危ない。

天「くそお。・チルノ達を信じるしかないか。」

チルノ達が勝てることを信じ、光が見えた方へ飛んでいった。

勘定はちゃんと置いて行った。

光が放たれた場所に到着してみると、多くの野次馬が囲んでいる。そこには円盤と、頭が異様な形をした謎の宇宙人が横たわっていた。

村人A「こりやなんでい?外来人か?」

村人B「見たことねえ円盤だなあ。」

村人T「うわすげw」

この時、光が放たれたから既に2分経っていた。

天「みんな、どいてどいて。」

村人C「あっ、悟天さんだ!」

女A「きゃー!悟天さんよー!」

悟天ファンを名乗る4，5人の女たちが集まった。

天「いやゝははは、今それどころじゃないんだよ。」

流星都会育ちである。これだけの女性に囲まれても動じない。

女B「悟天様！サインしてください！」

天「わかったわかった。ちよつと待つてね。」

サインをしようとした瞬間、宇宙人が起き上がった！

???；「デスビーム」

天「！ 危ないっ！」

女B「きゃっ！」

女Bを抱き抱え、避けた。が、

村人T「ぐへっ！」

別の村人に命中した。

天「大丈夫かい？」

女B「はい、なんとかか…。」

女は赤面している。他の村人は、撃たれた村人に集まって騒いでいた。

村人D「うわあ！血だ！」

どうやら血を見ることは珍しいようだ。いかにこの人里が平和か

が窺える。

??? 「よく避けたな。」

天 「お前は誰だ！」

クウラ 「俺はクウラ。地上にいる孫悟空を殺しにきたんだが、何処だ？」

天 「何の話をしている！父さんはここにはいないぞ！」

ク 「? どういうことだ？それに他の奴らも見当たらないな。」

天 「他の奴ら？」

ク 「地獄に穴が開いたからな。地獄にいる奴ら全員で孫悟空を殺しにかかった。」

「フリーザとセルだけ何故が残ったがな。」

天 「地獄に穴？まさかあの時の！」

超17号と闘った、一連の出来事のことである。

ク 「あの時？どうやらあれからだいぶ時間が経ったようだな。俺からしたら一瞬だったが。」

天 「思い出した。いろんな奴がやってきてたけど、幾つかの気が突然消えていた。」

「ウーブ君とかにやられたのかと思ってたけど、俺と同じように別次元に飛ばされていたのか！」

ク 「よくはわからんが、お前は孫悟空の息子だな。」

天 「その通り、俺は孫悟天。お前を倒してやる！」

ク 「ククク、見くびってもらっては困るな。死んでから少しは上達したんだ。先に死ぬのはどっちかな？」

天 「言ってる。だあああ！」

ヴンツ!!

超サイヤ人に変身した。

ク「ほう、流石は孫悟空の息子だ。そこなくてはな。」
天「悪いがここで闘うには分が悪い。付いて来い！」
ク「・・・、いいだろう。」

かくして2人は人里を離れ飛んでいった。

村人A「頑張ってくれよー！悟天さーん！」

村人B「本気出すと金髪になるって本当だったんだ。」

村人C「あの新聞も捨てたもんじゃねえな。」

村人T「げふっ！グツドラック…。」

幻想郷に一切の被害を出さなかったため、地球の反対側まで飛んでいった。

不思議なことに、クウラは大人しく付いてきていた。

天「ここら辺でいいだろう。始めようぜ。」

ク「超サイヤ人、今度は負けないぞ！」

天「だあっ！」

ク「かあっ！」

ドゴンツ！！

両者は激しくぶつかった！

その闘いは地球を震わせていた。

天「はっ！どりやあっ！」

ドガツ！！

ク「ぐああっ！」

天「せいっ！」

グリツ！！

ク「ごはっ…。」

明らかに悟天が優勢だった。

それもそのはず、彼は既に幼少の頃から超サイヤ人に変身できている。それからの成長も合わせると、クウラに勝ち目はなかったのだ。

ク「な、何故だ。何故、これほどの差が。」

天「もう終わり？それならもう地球から出てってほしいなあ。ここに父さんはいないし。」

ク「この俺に、ぬけぬけと出ていけと？」

ク「ふざけるなあっ！」

天「うるさいなあ。」

ク「こうなったら！」

そう言うと、更に高く飛び、右腕を上げ、人差し指をつきあげた。

天「何をする気だ？」

ク「ハッハッハ！これでこの星もお終いだっ！」

ク；「スーパードヴァア」

その指から、凄まじいエネルギーが溢れ出した！

天「！」

ク「この星諸共、消えてなくなれっ！」

それを悟天目掛けて投げた！

悟天は両手で受け止めた。

天「くっ！何をしている！こんなものはね返すのにそんな時間はないぞ！」

ク「ククク…」

天「なんで、笑っている…？」

ク「貴様は知らんだろう！この俺が瞬間移動を使えるということ

！」

天「!!まさかつ！」

クウラは、村人の気を探し、見つけ出した。

ク「ハツハツハ!!さらばだつ！」

天「考えたなっ!ちくしよおお!!」

ヒュンツ!!

クウラは一瞬で消えた。

天「うつ、くつ!はあつ！」

一気にはね返し、幻想郷まで急いで飛んだ。

天「人里のみんなが危ない!間に合ってくれえ!」
バシユツ!!

・・・

「人里」

村人A「うわあ!さっきの怪人だ！」

村人B「なんだった！」

村人達「わあああつ！」

人里は、大混乱に陥った。

ク「ハツハツハ!手始めにお前達を皆殺しにしてやる!」
?「よう!お前、強そうな害来人だな!」

誤字ではない。

ク「！お前は誰だ？」

魔「私は霧雨魔理沙！普通の魔法使いだ！」

ク「魔法使いだと。」

魔「？なんで驚いてるか知らねえが、時間も遅いんだ。霊夢に手柄を取られる前に倒させてもらうぜ！」

ク「ま、待て！俺はただの外来人だ！」

これを言えば、危害は加えられないと思ったのである。助かったところで感謝はしないが。

魔「知ってるぜ。人里を襲おうとしたんだってな。気でわかったからな。」

ク「気だと？お前、孫悟空を知らないか？」

魔「うるせえ！知るかそんなやつ！」

ク「待て！」

魔「はあああ！」

ヴンツ！！

彼女らの間でも正式には決まってるじゃないが、今は「超化」としておう。

瞬間で超化し、

魔；恋符「マスタースパーク」

魔「マスタースパークッ！」

ドオオオツ！！

ク「ぐああああ！！」

一瞬で決着をつけた。クウラの破片が魔法の森へ落ちていく。そ

んなことは気にする筈がない。

しかし、これがさらなる恐怖を生むとは知らない魔理沙であった。

魔「ふん、ちよろいもんだぜ。・うおっと！」

急に雷が落ちてきた。考え事の片手間で避けてしまうとは、流石幻想郷No.2である。

魔「雷？そっぴや文の気がすごいことになってから、天気不安定だったな。ちよつと参加するか！」

箒に乗り、妖怪の山の麓へ飛んでいったのであった。

・・・

「??」

？「ドクター、どうやら無事、3つの転送機がこちらに戻ってきました。」

ドクター？「ようやくか。1つはどうした？」

？「河城にとりに取られました。」

ド「ふむ、まあよい。プレゼントしてやろう。」

？「それと、」

ド「どうした。」

？「ドクターゲロの人造人間14号、15号はもう倒されてしまいました。クウラもやられましたね。」

ド「たった数時間でか。やはり孫悟天に倒されたのか？」

？「いえ、いずれにしても、幻想郷の小娘どもに倒された模様です。」

ド「小娘、か。やるではないか。13号はどうした？」

？「先ほど合体に成功し、今は天狗の射命丸文と戦闘中です。」

ド「あの天狗の小娘が1人で闘っているのか？」
？「はい。どうやらドクターが望んだパワーアップを成し遂げたようですよオ。」

ド「素晴らしいじゃないか！孫悟天のサイヤパワーはこれほど強大なものであったか。」

「ここに来たのが奴でよかったな。」

ド「そうか。それにしてもこのまま13号が倒されてしまうのは面白くない。一応訊くが、持ってきたか？」

？「勿論ですとも。クウラの破片でございましょう？」

ド「ククク、流石だ。この破片の一部を少しばかりいじるとしよう。」

「ドクターゲロの人造人間に合うように、な。」

.....

〔麓〕

激戦区では、なかなか決着をつけられないでいた。

13「はあ、はあ、その程度のパワーでは、この俺を壊すことにはできないぞ。」

文「はあ・・・、はあ・・・。」

とは言うものの、散々痛めつけられている。何枚もスペルカードを使われた結果だ。

文にもう少し体力があれば、決着がついていた。

無理もない。これほどのパワーアップを制御しただけでも評価できするのに、ここまで持ちこたえたのだ。

文「・・・やめだ。」

13 「なんだと。」

文「もう私の気はすみました。ここで引き下がるとします。」

13 「俺から逃げると言うのか？」

文「まさかまさか、まだ気づきませんか？」

13 「なに？」

文「もうじき到着します。幻想郷No.2が。」

横を見ると、それが見えてきた。箒に乗った、気の迸る金髪の少女である。

魔「あつ！あの2人か！」

文「やつと来ましたか。」

魔「やつと着いたぜ。つて文、お前もなれたんだな！」

文「これで、少しは魔理沙さんに追いつきましたかね。」

文はニヤリと笑った。

魔「ありがとな文！私が来たからにはもう安心だぜ。」

「あとは私が壊しておいてやるからな！」

文「魔理沙さんならできそうですね。改めて、霊夢さんや魔理沙さんの強さがわかります。」

魔「そんなに褒めても何も出ないぜ。」

「事情は気でわかってるのぜ。早く永遠亭に急いだらどうだ？」

文「！・・・感謝します！」

そうと決まったので、物凄いスピードで永遠亭へ飛んでいった。

魔「さーて、次は私の番だぜ！ま、お前に勝ち目はないけどな！」

13 「ほぎけ！」

勢いよくぶつかりに行くも、

魔；星符「メテオニツクシャワー」

魔「メテオニツク、シャワーー！」

ドドドツ！

13「ぐおお！」

簡単に弾かれてしまった。

魔「どんなもんだぜ！」

実を言うと13号は、腹に命中し大ダメージを受けただけである。腹は修復されたものの、文のパンチはよく効いたようでよく響く。

魔「はっ！」

バシツ！

13「ぐっ！」

何度かかっても、変身している魔理沙には通用しなかった。

13「ちくししょう、ちくしよおおお！」

魔「そろそろ壊していいか？お前、見た所人造人間みたいだな。幻想郷に害をなす装置を壊すのはいいことになってるんだ。」

13「ぐぐぐ…」

その時！！

ピリリリッ！！

？「お待ちくださいアい。」

魔「な、なんだ!？」

？「初めまして、霧雨魔理沙さん。」

魔「誰だお前は！」

? 「わたくしですかあ? グヒヤツ、今は内緒でエす。そのうち教えますよオ。」

身体が組み立てられるようなジャンペンのような現れ方をし、異様な姿をした男が13号の後ろに現れた。

魔 「誰だか知らないが、こいつの味方するならお前も容赦しないぜ！」

? 「おやおや怖いですねエ。」

「ふむ、確かに、わたくしは味方ではないですねエ。勿論、あなたのような小娘の味方でもありません。」

魔 「ちっ! ウザい喋り方だな！」

? 「ありがとうございます。」

魔 「ウゼエエ！」

? 「さて本題を始めましょうかねエ。」

「13号さアん、あなた、この小娘に勝ちたいですねエ? 痛ぶりたいですねエ?」

13 「・・・。」

? 「勝ちたいですねエ!!」

13 「! あ、ああ。」

威圧をかけた。

魔 「おっと、簡単にはさせないぜ！」

魔 ; 恋符 「マスタースパーク」

魔 「マスタースパークッ！」

謎の男だけに命中した。が、

? 「おやおや、何かしましたかア?」

魔 「・・・えっ?」

全く効いていない様子であった。

魔「そんな、どうなって…。」

?「13号さアん、これを取り込んでくださアい。大丈夫ですよ、取り込めるようになってますのでエ。」

13「わ、わかった。」

謎の男が渡した破片は、13号の体内に吸い込まれていった。途端に！

13「オオオオオ!!」

気が溢れ出した！

魔「な、なんで人造人間から気を感じるんだ!?それに、これは!？」

帽子を必死に抑えている。

?「グヒャーヒヤツヒヤツヒヤツ！流石はドクター！大成功でエす！」

どんどん13号の戦闘力が上がっていく。そして、近くの雲は全て消し飛んだ。

?「それじゃ、頑張ってくださいアい。」

魔「あつ、待て！」

ピリリリッ!!

言った時には遅かった。空間移動で消えてしまったのだ。

13 「さあ、始めようか!!」

ここに、究極合体人造人間13号が完成してしまったのである。

...

「にとりの研究所」

に「す、すごい。わからないことだらけだ。」

あれからずっと、円盤の分析をしていた。

わからないことだらけだということに、気づいた彼女もなかなかだが。

妹「お〜い、にとり〜。」

に「あつ、妹紅と妖夢。」

妹「今回は泊めてもらうぜ〜。」

に「いや〜随分とやられたね。3人とも服がボロボロじゃん。」

妖「(3発でやられたなんて言えない)」

妹「まあな。でもにとりが見せてくれたデーブイデーってやつだっけ?あれに映されてた技を使ったら勝てたぞ。」

に「おお!!でしょよ!」

大喜びしている。実際そうなのでこれ以上はつつこまない妹紅であつた。

妖「!!何ですかこの気は!」

妹「おいおい、もう私は疲れたぞ…。」

急にとてつもない気を感じ取った。13号のものだ。

に「直感だと、魔理沙と同じくらいか。魔理沙が馬鹿やらなきやい
いけど…。」
プシュー

その時、バトルシミュレーターの扉が開いた。

中から強者の風格を持った1人の少女、博麗霊夢が出てきたのだ。

霊「ふう、今日はこれで終わりにするわ。」

に「あつ、霊夢さん！ちようどいいところに。」

霊「どうしたの？」

霊夢が知らないこれまでの経緯をざっくり説明した。

・・・

〔麓〕

魔「はあっ！」

ゲシツ！

物凄いスピードで背後に回り、頸にキックをかました。

13 「何かしたか？」

魔「！くそっ！」

魔；魔符「スターダストレヴァリエ」

魔「こいつでどうだ！」

ドドドツ！

全て命中したのだが、

13 「もう星の出る時間かな？もう暗いからな。」
魔 「馬鹿にしやがってええ！」

全く効かなかった。

怒った魔理沙は正面から殴りにかかった。ラッシュを続ける彼女に対して、全て太い腕で受け止めた。ただ笑って見ているのであった。

魔 「はあ、はあ、なんで、効かないんだ。」

13 「俺もよくわからんが、防御力が格段に上がったようだ。お前の攻撃がちつとも効かないぞ。」

魔 「くそお！どうなってんだよ！」

13 「ふんっ！」

ドゴツ！

魔 「ぐっ！」

突然パンチしてきたので、ガードした。

魔 「いつてえ！・・・なっ！」

13 「くらええ！」

13 「フルチャージデッドリイボンバー」

早苗に放った時よりも数十倍のパワーだ！

魔 「けっ！」

魔；恋符 「マスタースパーク」

魔 「マスタースパークッ！」

ドオオオツ！！

2つの攻撃がぶつかった。てっきり魔理沙が押されるものと思われたが、お互い一步も引けを取らなかつた！

魔「あれ？意外といけるぞ！このまま、はあぁっ！」

13「ククク」

魔「いつけええ！」

なんとか気合で押し出した！が、そこに13号はいなかった…。

13「かかったな。」

魔「えっ！」

ドゴツ!!

腰に強烈なパンチをかました。

魔「がっ！」

ガシッ

落ちないよう髪を掴んだ。そして、何度も右フックをかました。

13「おいおいどうした！さっきまでの威勢はどこにいった！」

ドゴツ！ドゴツ！ドゴツ！

魔「がっ！ぐっ！いつ！」

口からも、鼻からも血を流した。

魔「あ…ぐ…。」

13「へっ！」

魔「ぐえ」

ス…

髪を手から離し、そのまま地面へ落ちていった。魔理沙の超化は解けてしまった。13号も降りた。

13 「ハハハ！随分か弱い乙女のようになってしまったな！」
魔「う・・ぐ…。」

今にも泣きそうになっている。

13 「まだだ。もう少し痛めつけてから殺してやる。」
魔「ぐす・・、れい・・む・・。」

絶体絶命のピンチ!!

13 「へッへッへ、おらっ！」

ギイイ

魔「ああ、あがっ」

首を絞め始めた。勿論ここでは殺さないつもりでいる。

13 「おっと、まだ死ぬなよ。」

魔「ゲホッ」

泡を吹き、既に意識すらなくなりかけている。

13 「遺言を聞いてやる。言え。」

魔「れい・・む・・にい・・ちゃん・・助け・・て…」

13 「ハッハッハッ！もう遅い！誰も向かって来ないぞ！」
「さて、そろそろトドメだ。どうやって殺されたいんだ？」

魔「…。」

13 「俺は優しいんだ。首を引っ張ってもいでやる。」

魔理沙に手を伸ばした、その時!!

13 「なにつ！」

ゲシツ!!

13 「ぐおっ！」

突如目の前に現れた少女によって、顔面を蹴られ飛ばされた。

霊 「生きてる？」

魔 「…!!」

13 「貴様、誰だ！」

霊 「私は博麗霊夢。博麗の巫女よ。にしても、随分とやってくれたわね。」

13 「ふん、貴様もすぐ同じ目に合わせてやる。」

霊 「どうかしら？」

13 「今なら逃してやっても」

霊 「はああ!!」

13 「!!」

ヴンツ!!

霊夢はすぐに超化した。髪は少し赤っぽくなり、少し逆立ち、赤いオーラを放った。

霊 「魔理沙、これ食べて。」

魔 「…え…？」

霊 「それを食べれば元気になるわ。傷も癒えるわよ。」

倒れている魔理沙の横にある豆を投げた。しかし、腕が動く筈もなかった。投げた豆すら掴めていない。

霊 「まったく、しょうがないわね。」

魔理沙に食べさせようとした。13号はこの機を逃さなかった。

13 「そんな小娘に構ってる場合かつ！」

背後からフックをしたが、

ヒュンツ！

寸前で躲された。

それだけでなく、

ゲシツ!!

13 「ぐおっ！」

横からキックされ、10mほど飛ばされた。

霊「ほら、早く。」

魔「あ…。」

霊夢は無理やり魔理沙の口の中に押し込んだ。

霊「ほら、ちゃんと噛んで。」

カリカリ、ゴクツ

魔「えっ？えっ？」

13 「!!」

体中の痛みが、一瞬にして消えた！

魔「ど、どうなってんだこれ!？」

先ほどとは打って変わって、ぴよんぴよん跳ねている。

霊「仙豆っていうの。師匠が作り方教えてくれてね。」
「作るには何年も時間がかかるから、今までの異変の時はなかったの。」

魔「そうだったのか！やっぱ師匠はすげえぜ！」

13「……。」

こうして、魔理沙は復活した。

魔「私たち2人が揃えば、怖いもんなしだぜ！」

霊「魔理沙は下がってて。」

魔「ちよっ！またいいところ取りか？」

霊「死にかけたくせによく言うわ。」

魔「うっ…。」

霊夢は1人、前へ出た。

13「お前1人で、だと？」

霊「そうよ。小手調べにね。何か不満かしら？」

13「小娘が1発や2発でいい気になりやがって。」

霊「さ、始めましょ。」

13「ちっ」

霊夢は、至って冷静であった。

13「かっ！はっ！だっ！」

霊「！」

13号は霊夢に向かってラッシュを続けている。しかし、未だに1発も当たらない。それどころか、

ヒュンツ!!

霊「っ！」

ドゴツ!!

13「ぎいっ！」

躲され反撃を喰らっている。

霊「・・・、あんたまさか。」

13「？」

お互い止まった。霊夢は続ける。

霊「あんた、私に1回パンチしてみて。」

13「は？」

霊「早くしなさい。じゃないとこっちから行くわよ。」

13「・・・ほざけっ！」

ゴツ!!

13号は右腕に力を入れ、全力でパンチした！が、

霊「やつぱり。あんたって防御力だけなのね。」

13「なん、だと？」

手で受け止めた。

霊「おかしいと思ったのよ。大して強くないのにどうして魔理沙が負けたんだろうってね。」

「でもあんた、防御力だけは一流よ。」

13「・・・。」

霊「そんなに堅くてもね、決着を付けることはできるわ。私が全力の攻撃をすればあんたは消える。覚悟なさい。」

13「・・・ハハハハ！」

霊「何が面白いの？」

13 「貴様は誤解している。例えお前に効かなくても、お前を倒すことはできると言うことをわかっていない。」

霊「は？」

13 「例えば、この星を爆破させる、とかだな。」

霊「！まさか！」

13 「その通り！俺はこの星を消し飛ばす技を持っている。」

「しかも連続で何発でも出せるのだ！」

霊「そんなこと、させるわけ」

13；「アルティメットデッドリイノヴァ」

ギユイイイン・・・

わずか数秒で作りあげてしまった。

13 「さあどうする。こいつを放った後に俺を攻撃するのもいいが、この星はどうなる？」

霊「あんたなんて私1人でどうにでもなるわ。それは魔理沙に任せろし。」

13 「この俺が、それを待っていると思うか？」

霊「ちっ！どうすれば…。」

魔「霊夢！私も一緒に攻撃するぜ！」

霊「何言ってるの！あれはどうするのよ。」

魔「それは…。」

ちょうどこのタイミングで、文が到着した。近づいた時に超化をといたらしく、普通の姿だ。

文「ふう、間に合いましたね。」

霊「文！どうしてここに？」

文「話は聞こえてました。私があれを止めますから、お2人はあの人造人間を壊してください！」

霊「あなたに任せられるわけないでしょ。」

文「はああっ!!」

ヴンツ!

即座に超化した。

霊「文、その気は…。」

文「説明は後です! さあ、ぶっ壊しちやっってください!」

霊「…、わかった。」

13「お前はさっきの。最早貴様ではこれを止めることはできんぞ!」

文「そうですか? やってみなくちやわかりません!」

4人は一気に戦闘力を上げた!

霊「行くわよ魔理沙!」

魔「おう! 霊夢!」

霊; 霊気「博麗かめはめ波」

魔; 魔砲「ファイナルスパーク」

霊「かーめーはーめー…」

魔「ファイナル…」

13「消し飛べ!!」

13号は、妖怪の山へ向けて投げた。そして、

霊「波あああああ!!」

魔「スパーク!!」

ドオオオツ!!

2人の攻撃は13号へ直撃した。13号は太い腕でガードしている。

文「はああああ!!」
ゴオツ!!

文は13号の攻撃を受け止めた!

文「ぎぎぎ。」

13「ぐううう!!」

霊「きいつ!」

魔「ぐぬぬ!」

互いに一步も譲らなかった。

霊「くっ!」

魔「し、しぶといな!」

13「その言葉、そっくりそのまま返すぞ。」

霊夢は本当の全力を出せていない。13号が待ってくれなかったからだ。

3人はまだ競り合っている。しかし、1人は違った。

文「うっ、ああ!」

霊「文!」

13「どうやら、ここまでのようだな。」

勝利の笑みを浮かべた。

魔「くそっ!ここまでかよっ!」

霊「魔理沙!集中して!」

文「うっ!すみま、せん…」

バチンッ!

ノヴァに弾かれ、山の斜面へ飛ばされた。

魔「ち、ちくしよおおお！」

13「ハハハハ!!さらばあ！」

万事休すと思われた。霊夢ですらそう思った。
しかし！

ドンツ!!

ノヴァは止まった！

霊「!!」

魔「なんだ！」

?「はあ、はあ、どうやら間に合ったみたいだね。」

止めていたのは我らの主人公、孫悟天であった！

13「き、貴様は!!」

天「みんな、待たせちやったね。」

霊「悟天！」

魔「に…、悟天！」

天「2人とも！これは俺に任せてくれ！」

霊「わかった！」

魔「よっしやあ！」

この時、13号はわずかに腕の構えが緩んだ。
そこへ!!

レ；神槍「スピア・ザ・グングニル」

一本の槍が、13号の腹目掛けて飛んでいった!

13 「ぐおお!」

穴を空けた!

レ「やっと腹を見せてくれた。これであなたは終わりよ。」

魔「レミアア!」

霊「味な真似してくれるじゃないの。」

レ「さあ、トドメをさしなさい!」

13 「ば、馬鹿な…。」

構えている腕すら剥がれてきた。

天「よおし!できるかわからないけど俺だつて!(トランクス君と編み出した、あの技で!)」

天;「ビクトリーキャノン」

天「だああああつ!!」

霊「波ああああつ!!」

魔「いつけえええつ!!」

13 「そん…ご…く…う…。」

ゴオオツ!!

13号は、跡形もなく消し飛んだ。
ノヴァは、星の外へ押し出された。

天「ふう、疲れたあ。」

霊「…。」

魔「やったのぜえ!!」

レ「ふふ。」

この時、この闘いを知っている誰もが、歓声を上げた。

霊「あんた、いいタイミングで来てくれたわね。」

天「たまたまさ。」

魔「さっ！帰ろうぜ！今夜は無理そうだから明日宴会しようぜ！」

天「おっ、いいねえそれ！」

霊「ちよつと、私嫌なただけど。」

魔「霊夢は片付けが嫌なただけど？」

霊「そうだけど。」

天「まあいいじゃないか。」

霊「ふんっ。」

見事、過去の強敵達を相手に、大勝利を収めたのであった。
空は、満天の星空であった。

くくくくくくく

霊「うえくくん！」

チ「こんな弱い博麗の巫女なんて初めてだな！」

霊「ごめんなさい！ごめんなさい！もう痛いことしないでえ。」

チ「やっぱ人間なんてこんなもんか。あたいの相手なんて務まる訳ないね！あたいつたら最強ね！」

妖精A「巫女いじめるの楽しいな。」

妖精B「いいぞもつとやれ。」

妖精C「自分から喧嘩売つといて、これだもんなあ。」

妖精達は、胸を張ったり、楽しんだり、呆れたりしていた。
そんな中、1人の男が現れた。

??「おめえたち、弱い者いじめは良くねえぞ。」

チ「ん？おじさん誰？」

妖精A「何だろう、この不思議な感じ。」

妖精C「人間、じゃないよね。」

人間の姿はしているのだが。

??「オラのこととはともかく、もうその辺にしてくれねえか？」

妖精B「いやだもつとやりたい。」

チ「えーつと、この最強のあたいに勝ったらやめてもいいぞ！」

??「・・・。」

ナデナデ

その男は、無言でチルノの頭を撫でた。すると、

チ「あれ？なんだろ、この気持ち。」

チルノの表情が、先ほどよりも優しくなった。

??「もうこんな悪いことしたら駄目だぞ。」

チ「うん！ごめんね、小さな巫女さん。」

霊「ぐすつ。」

チ「帰ろつ、3人とも。」

4体の妖精は帰っていった。

??「おめえ、大丈夫か？」

霊「うわくくくん。」

??「泣いてたらわかんねえぞ。」

霊「痛いもん！痛いもん！」

??「ははっ、そんなに元気なら大丈夫そうだな。」

霊「えぐつ…。」

?? 「それはそうと、おめえは悔しくねえか？」

霊 「え？」

?? 「負けっぱなしは嫌じゃねえか？」

霊 「・・・嫌だけど…。」

?? 「そんじや、オラと修行しねえか？」

霊 「修行？」

?? 「強くなるための特訓さ。どうだ？」

霊 「・・・うん、する！」

?? 「よし、そんじや決まりだな。そういやおめえの名前は？」

霊 「博麗、霊夢。おじさんは？」

?? 「オラか？オラは…。」

~~~~~

目が覚めた。

霊 「・・・、そうだったわね。師匠と初めて会ったのは。」

どうやら疲れた様子だ。

霊 「あ、悟天起こさないと。」

.....

「博麗神社」

昼頃、霊夢、魔理沙、文、レミリア、それから紫が博麗神社に集まり、宴会の会場を何処にするか話し合った。

何故紫が混ざっているのかはわからないが。

霊「さて、何処がいい？」

魔「そりやあ勿論博麗神」

霊「嫌よ。」

紫「博麗神社は飽きたから私は霊夢に賛成。」

霊「うっさい。」

魔「じゃあどうするんだ？にとりの研究所は狭いから嫌だぜ。」

レ「紅魔館もやめてほしいわ。美鈴が怪我してるし、咲夜も疲れてるから。」

文「文々。新聞本社も今、記事で忙しいのでやめていただき」

霊「あんたの所は、緊急事態でもない限り行かないわ。」

文「なんか貶されたような…。」

紫「となるとやっぱり…。」

魔「守矢神社だな！」

早「おーい！」

霊「…。」

早「嫌でえす！」

文「守矢神社にしましょうか。」

レ「異議はないわ。」

早「ハアツ☆」

紫「決まりね。」

早「待つてください！今回あの人造人間にトドメを刺したのは誰か  
思い出してください！」

霊「ちよつと早苗！」

魔「そういえばそうだな。私はトドメを刺したことになってないん  
だろ？霊夢。」

文「(ニヤニヤ)」

霊「ぐぬぬ。」

レ「まあ私は紅魔館じゃなければ何処でもいいんだけど。」  
早「決まりですね。」

ウザい笑顔を見せつけた。

そんなわけで、宴会会場は博麗神社になった。

・  
・  
・  
・

夜になった。宴会の準備は3割が悟天、7割は霊夢がした。  
3割しかできなかつた理由はというと…、

くく

「霧の湖のほとり」

天「よし、みんな休憩しよう。」

大&ミ「はい。」

リ「うくん。上手くないなあ。」

ル「・・・。」

チ「もう?」

相変わらず、チルノは元気はつらつだ。

ルーミアは昨日の戦闘のショックで、修行をできないでいた。

天「ははっ、チルノは元気だなあ。」

チ「うん!もつと強くなりたいもん!」

大「チルノちゃんには敵わないよ。」

天「ごめんね、みんなを助けられなくて。」

リ「まあ、勝てたから大丈夫だよ。」

天「妖精以外の3人は、怪我とか大丈夫なの?」

ミ「いったいよ。」

大「私は妖精なので大丈夫です。」

リ「もう大丈夫、いてて。」  
ル「・・・。」

天「ルーミアは、暫く休んでて。」  
ナデナデ

そう言い、頭を撫でた。

チ「今日は暑いし、紅魔館で休憩しようよ。」

天「今入って大丈夫かなあ？」

咲「お嬢様から許可が下りましたよ。」

天「うわ、時間停止で聞いてたのか。」

「紅魔館」

大「じゃあお邪魔します。」

ミ「邪魔するぞ。」

リ「ういーす。」

一行はそれぞれ休憩した。

するとレミリアは、

レ「悟天、ちよつといいかしら？」

天「ん？なんだい？」

レ「あなたに会わせたい子がいてね。」

と言い、地下に案内した。扉がある。

天「ここに誰かいるの？」

レ「ええ。」

天「随分と隔離されてる気がするけど。」

レ「前までは隔離してたわ。守るためにね。」

天「へえ。」

自分が来る前の紅魔館で何があったか、なんとなく察した。

レ「ほら、連れてきたわよ。」

???「・・・。」

天「君かい？俺に用があるってのは。」

その少女はもじもじしている。

レ「自分で言いなさい。私は何も言っていないわよ。」

???「・・・。」

赤面している。恥ずかしいのだろうか。

チ「兄貴い、もう始めようよ。」

遠くから聞こえた。

天「ちよつと待っててー！すぐ行くからー！」

行こうとした時、少女は悟天の袖を掴んだ。

???「わ・・・わ・・・。」

レ「・・・。」

フラン「私、フラン！そ、その、私も、修行したいの。いい？」

天「・・・うん！ほら、一緒に行こう！」

フランの手を握り、走っていった。

レ「フラン、ようやく自分から声をかけられるようになったのね。」

姉は薄ら笑いを浮かべた。

くく

と、しつかりとした鬨い方を教えるのに時間がかかったわけだ。

天「いやあ、ごめんね霊夢。」

霊「ふんっ！」

御機嫌斜めのような。会場がここと決まった時からだが。だいたいのメンバーが集まった。

魔「よおーし、それじゃあ始めようぜ！」

紫「せーのっ、」

「カンパニー!!!」

宴会が始まった。紅魔メンバーと地霊殿メンバーはまだ来ていない。神社だけだと狭いので、野外も使っている。

魔「うめえな！この肉！」

霊「食べ過ぎると太るわよ。」

早「霊夢さん、既に魔理沙さんは」

魔「早苗え、ちよつと話があるんだけどお。」

早「すいませんすいません！」

メインは焼肉のようだ。

妖「私は肉など食べません。武人の心に反します。」

妹「そう言うなって。ほら、たん塩食ってみろ。」

妖「いいえ食べません。」

妹「ほいつ」

妖「むぐつ」

無理やり押し込んだ。

妖「んんん！」

みるみるうちに笑顔になっていく。

幽々子「あらあら、気に入ったようね。」

妖「そ、そんなこと、ありません！」

この人物は妖夢の主人の西園寺幽々子。このように、異変に関係ない人物でも参加していいのだ。

チ「うわあ、これうんまいねえ…。」

大「わわわ、溶けてるよチルノちゃん！」

ル「肉は最高なのだ。」

ミ「食べる側も悪くないですね。」

リ「なんか、複雑になるな。」

ル「なんでなのだ？」

リ「これ基本牛の肉だろ？お前ならいいかもしれんが、私やみすちーはあれだから。」

ル「細かいことは気にしちゃダメなのだ。」

リ「…そうだな。」

文「あやや、肉は最高ですね。」

霊「あんた烏でしょ。」

文「天狗なので問題はな」

萃香「おーい天狗う、こっち来いよ。」

文「急急急！」

霊「地霊殿メンバーも来たみたいだから頑張ってね。」



文を連れていった人物は、鬼の四天王の1人伊吹萃香。

彼女はサイヤパワーは宿していないので、今では文より力は劣るのだが、文はこのやり取りを大事にしてるらしく、大人しく連れていかれるのだった。

さとり「すみません、また呼んでくださって。」

霊「いいのよ。いつも言ってるでしょ。こういうのは数が多い方がいいんだから。」

この人物は古明地さとり。地下にある地霊殿の主人だ。

他にも妹のこいし、鬼の四天王の1人星熊勇儀、ペットの火焰猫燐と霊鳥路空が来ている。

こいし「……。」

天「ん？」

じーっと悟天を見つめている。

こ「私こいし。お兄ちゃん酒に強そう。」

天「はは、そうかなあ。」

悟天は酒に強い方だ。すぐに見抜くとは只者ではない。

こ「お兄ちゃん、前に博麗神社にいたおじさんに似てる。」

天「へえ。名前は知ってる？」

こ「それは知らない。話したことないから。」

天「そうなんだ。前から思ってたけど、その人が誰か気になるなあ。」

「霊夢は覚えてないんだっけ？」

霊「うん…。」

天「でも、そんなことあるかなあ。」

霊「私にもわからない。ずっと暮らしてきたのに顔と名前がどうしても思い出せない。」

天「変だなあ。」

こ「にしてもお兄ちゃん、私が能力を使ってるのにどうして私と話せるの？」

天「能力？」

こ「へ無意識を操る程度の能力」を持ってるの。だから、使ったら誰も私に気づかないの。」

天「その能力ってやつはみんな持ってるの？」

こ「たぶん。」

天「面白そう。霊夢は？」

霊「へ主に空を飛ぶ程度の能力」よ。」

天「魔理沙は？」

魔「ん？へ魔法を使う程度の能力」だけ。」

天「確か咲夜は」

咲「へ時を操る程度の能力」です。」

天「うわっ、びっくりしたあ。」

霊「あ、来たのね。」

レ「お邪魔させてもらうわ。」

魔「あれ？フランは？」

咲「修行でお疲れになったのでお休みになっています。」

魔「何したんだ？に…、悟天。」

天「サイヤパワーが宿ったらしくて…。」

咲「お嬢様もそうでしたから仕方ありません。」

魔「咲夜ってに…、悟天に対して敬語なんだな。」

咲「歳上だからね。」

天「咲夜って…。」

咲「19です。お嬢様から悟天さんは23と聞いています。」

天「なんで知ってるんだらう。」

レ「へ運命を操る程度の能力」よ。あなたの過去を見たの。」

天「俺のプライバシーは…。」  
レ「うふふ。私次第よ。」

悪びれる様子はない。

天「チルノは？」

チ「へ冷気を操る程度の能力」だよ!」

天「そのまんまなんだね。」

チ「どうだ兄貴!すごいだろ!」

天「うん、そうだね。」

早「私はへ奇跡を起こす程度の能力」を持ってますよ! 霊夢さんと  
は質がちが」

霊「悟天はなんか能力はあるの?」

天「ん、なんだろうね。気を操る程度の能力かな?」

早「ハアツ☆」

魔「それならみんな使えてるぜ。」

天「だよなあ。」

に「もしかしたら、みんなのパワーアップに答えがあるかも。」

天「また急だなあ。」

に「やっと私の番が回ってきたよ。霊夢さんもそう思うでしょ?」

霊「確かにね。私や魔理沙がサイヤパワーを宿した時よりも、みんな遥かに強いわ。」

魔「私も文があれに变身できた時のパワーは驚いたぜ。」

に「何か心当たりはない?」

天「うくん。」

に「それはそうと、魔理沙はなんで悟天君を呼び捨てなの?」

魔「へ、変か?」

に「だって悟天君のことを話す時ってにいちちゃんって呼んでて」

魔「わあああ!!」

顔を真っ赤にして叫んだ。

天「そうなの？」

霊「へえ〜。」

霊夢はニヤニヤしている。

に「え？そんなに知られなくなかったの？」

魔「ちきしよお、言っておけばよかったぜ…。」

天「俺は別に構わないけど。」

魔「え？」

天「だから、にいちゃんって呼んでもいいよってこと。」

魔「・・ほんとか？」

天「そりや6つも離れてるし、変じゃないよね。」

早「魔理沙さんも可愛いですね〜。」

魔「ちよつと待て、なんで歳のこと知ってるんだ？」

早「ハアツ☆」

天「霊夢が教えてくれて。」

魔「なんで言っただんだ！」

霊「魔理沙、後ろ。」

魔「は？」

ア「魔——理——沙——！——！」

魔「うわっ！出やがった！」

ア「今日こそあなたの初めてを奪うわア！」

魔「キモイキモイ！」

ア「アアアア！」

魔「すまん、ちよつと席を外すぜ！あと早苗、覚えてろよ。」

早「ええ！無☆視されてると思ったのに〜。」

魔理沙は外へ逃げていった。

天「そつかあ、妹分か。」

霊「忙しいやつね。」

天「・・・。」

霊「どうしたの？」

天「いや、あのアリスの目、あの時に見たのと同じだなんて。」

霊「あの時？」

天「人に寄生することでその人を操る敵と闘ったことがあってさ。それと同じなんだ。」

霊「誰かに操られてるってこと？」

天「たぶん。」

天「それも調べてるよ。」

天「ありがとう。」

紫「あくあ、私の幻想郷がどんどん戦闘民族の国みたいになっていくわ。」

霊「あなたの幻想郷じゃないでしょ。」

紫「やかましい。」

天「あはは、仲良いね。」

紫「そりや、霊夢が6歳になるまでは私が世話してたし。」

天「そうなんだ。親は？」

紫「・・・複雑なのよ。」

天「ごめん。」

霊「はい、暗い顔しない。じゃんじゃん飲んでやって！」

それから数時間、楽しい時間が流れた。

悟天は、勇儀や萃香と飲み比べをしたり、幽々子と大食い対決をしたのであった。

楽しい時間というのは流れるのが早いもので、殆どの幻想少女達は酔って寝てしまった。飲み比べが祟ったのか、悟天も寝てしまった。

・・・

悟天が目を覚ますと、みんな気持ち良さそうに眠っている。

天「あれ、霊夢と魔理沙がいないな。」

気を探ってみたところ、どうやら神社の屋根の上にいるらしい。行こうとしたら、話声が聞こえた。

魔「その、ありがとうな、霊夢。」

霊「あんたがいなかったら、異変解決が面倒になるから助けただけよ。」

魔「はは、霊夢らしいぜ。」

霊「今度油断したら助けないからね。」

魔「もう油断はしないぜ。痛かったからな。」

霊「ならいいわ。」

魔「それに、霊夢を殺せるのは、私だけだからな。」

霊「あんたを殺せるのも私だけよ。」

お互いの拳を軽くぶつけた。

魔「にしても霊夢、にとりに聞いたけど、その時の私は相当惨い姿だったらしいけど、なんで動じなかったんだ？」

霊「慣れ、かしらね。」

魔「そんな惨い異変あったか？」

霊「紫と幻想郷の外側の土地に行ったことがあったのよ。それはそれはひどい有様だったわ。」

魔「へえ。地名とかわかるか？」

霊「えつと、リユースエンってところだったと思うわ。その国が幻想郷を侵略しようとしてたから、私と紫で軍隊を壊滅させたの。」

魔「普通に言ってくれるな。」

霊「力はなかったから。」

魔「そうだ、霊夢はいちやんのことどう思ってるんだ？」

霊「き、急に何よ。」

魔「半年ぐらいずっと一緒なんだろう？そりや恋仲にもなるかなって思ってたさ。」

魔理沙は楽しそうだ。

霊「別になんでもないわ。ただの同居人つてところね。」

魔「ちえっ！つまんねえのく。」

霊「そういうあんたは悟天のことどう思ってるのよ。」

魔「にいちゃん、かな。私は独り身だし。」

霊「魔理沙の親もなかなかひどいわよね。」

魔「子どもを捨てるような親は親じゃないぜ。」

霊「ま、そうね。」

魔「だから私は、本当の兄貴として見てるぜ。」

霊「そう。」

魔「にいちゃんとの進展、楽しみにしてるぜ。」

霊「あれと恋仲とか絶対ありえないから。」

天「(傷つくなあ。)」

物陰に隠れ、話を聞いていたのだった。

こうして、宴会は無事終了した。

片付けは、霊夢が6割、悟天が4割であった。

•  
•  
•

???

? 「ドクター、この度はお疲れ様でした。」

ド「ああ。」

? 「13号のデータは如何致しましょうか？」

ド「一応保存しておけ。クウラの細胞はまた使うぞ。」

「そうだ、次はアレを使うとしよう。」

? 「しかし、アレはあと数年かかるのでは？」

ド「問題ない。闘ってるうちに勝手にパワーアップするだろう。」

? 「そうですね。力が少し足りないだけで形は出来上がってますからね。」

ド「忘れるところだった。核にプロテクターは張ったか？」

? 「勿論です。丈夫にできてますよ。」

ド「これが肝心だからな。さて、半年後に解き放つか。」

「セルよ。」

## 第2章

? 時空を超えた過去の強敵達？

〈完〉



### 第3章? 幻想少女強化計画?

に「皆さん、こんにちは。ご存知河城にとりです。」

「さて、どうして私から始まったか、気になるでしょう? それは他でもない。この章は…、私が主役だからさ!」

デデーン!!

「勿論、私がサイヤパワーを手に入れて霊夢達と一緒に闘うわけじゃないさ。頭脳派だからね。」

「私は闘う人材を育てるのが好きなんですよ。」

「というわけで、私が幻想郷の少女達を強くするから、主役になったってわけさ! よろしくね!」

#### 第3章

? 幻想少女強化計画?

妖「にとりさん、カメラに向かって1人で何してるんですか?」

呆れた顔で見ている。

に「それは言っちゃダメだよ。って妖夢じゃん! いいところに来てくれた! ほら、一緒に喋って!」

妖「ちよ、なんで私が。」

に「だって妖夢ってメタいじゃない? こういうトークは全部妖夢に任せたいくらいなんだよ。」

妖「メタい? 私がですか?」

に「誰よりもメタいよ。」

自覚がなかったらしい。

妖「そうですか…。私はただ作者の」

に「そこらへんだよそこらへん!」

妖「もうわかりません。」

に「ああ、もういいや。」

妖「ところで、強くするとは具体的にどんなことをするんですか？」  
に「それはまだ妖夢にも言えないなあ。強化対象だし。」

妖「強くなる方法を教えないのに強くなれるんですか？」

に「そうさ。」

妖「嫌な予感がします。」

に「それはそうと、あの異変からどれくらい経ったっけ？」

妖「1ヶ月くらいですかね。だんだん暑くなってきました。」

に「そうか、もう1ヶ月か。早いもんだね。」

妖「にとりさんが思い浮かべてるのはにとりさんが作ったゲームのことですよね？」

に「あ、バレた？宴会の2日後にリリースしたからね。」

妖「テレビゲーム、でしたよね。テレビすら幻想郷には画期的なものだったのにゲームまで作ってしまうとは。」

に「それに格闘系にしてよかったよ。ちょうど異変の後だったから、人里のたくさんの人が見に来たんだよね。」

妖「あんまりゲームの話ばかりしてもダメですよ。」

に「あ、そうだった。」

「超化、だっけ。文さんがなれるようになったからみんな追い付こうと必死なんだよね。これの名前は考えておかないといけないね。」

妖「そうですね。1ヶ月だけで超化を成し遂げた方もいますし。」

に「レミリアさんのことだね。流星はカリスマって感じ。」

「満月の日を計算して、自分を人間の血の中に閉じ込めて、満月の夜で一気に気を解放したらなったもんね。」

文の次に超化を成し遂げたのはレミリアだった。

妖「吸血鬼ならではの発想ですよね。」

に「そうだよな。じゃあ半人半霊には何か特別な」

妖「ありません。」

に「だよね。ははは。」

妖「にしてもその人間の血つて…。」

に「そこには触れないで行こう。」

妖「デスヨネ。」

に「あと、サイヤパワーを宿した人もいるよね。」

妖「フランスさんとこいしさん、ですね。」

に「そうそう、悟天君と修行したからだね。こいしちゃんは最近見かけないけど。」

妖「今となつては他の弟子たちにも見えてないでしょう。」

に「だろうね。」

力をつけたことで、能力が通用するようになったからだ。

妖「私も早く、超化できるようになりたいです。」

に「その為にも、だよ。ちよつと出てつてくれる?」

妖「な、なんですか急に。」

に「もう始めるの。」

妖「始めるつて何をですか?」

に「あ、アリスだ。」

妖「えっ!?!」

反射でドアを見たが、

ゴツツ!

妖「あつ…。」

そこにアリスの姿はなく、何者かに気絶させられてしまった。

に「ごめんね、こんなことさせちゃつて。」

霊「いいわよ別に。これでみんな強くなれるわけでしょ?」  
に「勿論さ。」

靈「頑張りなさいよ。準備は整ったみたいだし、私は帰るわ。」  
に「ありがとね。」

研究所から出ていった。

に「さてと、やっと本題に入れそうだね。」

「それじゃあまず1人目、始めようか。」

・・・

「運命の丘？」

妹「・・・あれ？私は、何処にいるんだ？」

起きてみると、まだ夜であった。夜空を見上げている筈だが、自分の身体が見当たらない。

妹「もしかして私、ようやく死ねたのか？」

しかしこの風景に見覚えがあった。

いつだろう？

妹「この月、そしてこの丘。まさか！」

タイミングを見計らったかのように、1人の少女が丘へ歩いてきた。  
た。

その少女は紛れもなく、自分自身であった。

妹「やめろっ！その丘を掘り起こしたら駄目だ！」

声が聞こえてないのか、全く手を止めようとしな  
い。そして、例の薬を掘り出してしまった！

妹「やめろっ！やめてくれ！それを飲んじやいけないんだ!!」

少女は不思議そうに眺めた後、蓋を回した。

「やめてくれえっ!!!」

意識は少女に接近しているが、触れることができない。同様に声も届かない。

妹「くそっ！」

少女を何度も殴っているつもりだが、その腕すら見えない。

少女は薬を飲み干してしまった…。

妹「……。」

少女は去っていった。

彼女は泣いていた。

妹「…なんで、ムキになっただろうな、私。過去はもう変えられないって、わかってる筈なのに…。」

その薬こそ、〈蓬萊の薬〉であり、妹紅はこうして不老不死になり、〈老いることも死ぬこともない程度の能力〉を手に入れたのだ。

妹「あれ、意識が。」

景色がどんどん移り変わった。まるで早送りのようだ。

妹「この時何してたっけな。」

流れる情景を見ても思い出せない。特に何もしていなかったのだらう。

すると、急に流れが止まった。

妹「ん、そういえばそうだったな。」

それは、自分が妖怪退治をしている様子だった。

能力故に無敵だったため、負けはしなかった。

それだけでなく、元々呪われたような存在だったので、呪術も彼女には効かなかったのだ。

妹「はは、懐かしいな。まだあの時は妖怪退治してれば報われて死ぬる、とか思ってたっけな。」

それを信じて300年程妖怪退治を続けてきたのだがこの通り死ななかった。なので、退屈な300年であった。

退屈だった歴史も早く流れ、更に300年が過ぎた辺りで、

妹「!!」

自分をこんな身体にした原因の人物、蓬萊山輝夜との再会だった。

輝夜は本来月人であり、同じように薬を飲んでいたので不老不死だった。

妹「あの顔見ると虫唾が走るな。」

2人は殺し合っていた。

とは言え双方共に死ねないので、殺しては生き返り、死んでは蘇っ

での繰り返しであることは本人らもわかっていた筈だったが、お互いに許せない何かがあったのだ。

妹「・・・けっ！」

そこからまた、景色が流れていった。

妹「そーいや何かした記憶はねえな。ここ最近になるまで。」

と言った途端、親友の上白沢慧音との出会いが映った。

妹「あつ。」

表情が明るくなった。それは、次の光景を見ても変わらなかった。

妹「こ、これは。」

博麗霊夢との出会いだ。自分を苦しめたのは輝夜に続いて2人目だったのだ。

最後まで立っていたのは妹紅だった。

妹「そっか。ギリギリ勝ったんだっけ。白黒魔法使いもなかなかだったな。あの時は。」

さらに時は流れ、『第二次月面戦争』が浮かんだ。

妹「あの時、はつきりした。もう私じゃ、あの博麗の巫女には勝てねえって。」

「月軍の隊長と互角に渡り合えるなんてな。」

嬉しいような悲しいような・・・。

次のシーンで、思わず頬を赤らめた。

妹「あ…。女たらし。」

孫悟天との出会いだ。

天「いやあ、参ったなあ。」

妹「おい、あんた大丈夫か？」

天「大丈夫なんだけど、道に迷っちゃって。」

妹「それなら私が案内してやる。」

天「おっ！ありがとう。」

「俺は悟天。君は？」

妹「藤原妹紅だ。話は変わるが、さつき竹林が吹き飛ばされてるのを見たんだが、知らないか？それで心配になってさ。」

天「あ、それは俺だよ。これで道が見えるかなって。」

妹「なんだと…？」

怒りの表情を露わにし、振り返った。

天「えっ、なんで怒ってるの？」

妹「当たり前だろ。竹林を荒らしやがって。」

「さては妖怪だな？」

天「妖怪じゃないって！もうちよつと俺の話を」

妹「妖怪退治は久しぶりだが、ここで倒させてもらうぞ！」

天「はは、やっぱ幻想郷の人たちって好戦的だな。」

妹「笑ってんじやねえ！」

天「うわっ！」

殴りかかってきた。驚いたのはそれだけではない。その動きにはしつかりした骨格が出来ていたのだ。



天「へえ、やるじゃん。」

妹「喋ってる場合か！」

ドゴツ

天「ぐあつ」

腹に一発入った。が、

天「なんちやって。」

妹「なにっ！」

妹紅の腕を掴み、気合いを込め投げ飛ばした。

妹「うわあ！」

天「これなら怪我もしないかな。」

しかし、妹紅は空中で止まった。さらに、

妹「はあああ!!」

ボウツ!!

天「えええ！」

サイヤパワーを吸収した。

妹「なんだこれ？パワーが、溢れて。」

天「またか！」

妹「よっしゃやんぜ！」

一気に気を高めた。

天「な、なんて子だ。文よりも強いぞ。」

妹「くらえっ！」

ドゴツ！

突撃してきた。油断したせいで、彼女の拳は彼の頬にめり込んだ。

天「ぐわっ！」

妹「はっ！」

ゲシツ！

左脚で腹を蹴った。

天「ぐあっ！」

さらに左フックをかまそうとしたが、

妹「ほらっ！」

天「おっと」

ガシツ！

右手で止められた。

天「強くなったね。」

妹「そりやどうも。」

お互いニヤリと笑い、距離をとった。

天「それじゃ、俺もちよつと本気を出そうかな。」

妹「本気？」

天「はああっ！」

ヴンツ!!

超サイヤ人へ変身した。

妹「!! その姿は!」

天「あ、魔理沙と似てるけど違うよ。」

妹「いや、博麗の巫女にも似てるんだ。」

天「やっぱ霊夢もなれるんだね。」

妹「だけど、私は負けないぜ。はあああ!!」

勝つために気をさらに上げた。

天「! やめろっ! 人間以外がサイヤパワーを宿した後に使いすぎると壊れる!」

レミリアの一件のことだ。

妹「私は不老不死の人間なんだよ。」

天「なんだって! でも:」

妹「今はなんとしてでもお前を倒す!」

天「...」

妹「行くぞっ! 覚悟しろっ!」

悟天はわかっていた。いくら妹紅でも自分を倒すことはできないということ、既に体力の消耗が始まっているということ。

妹「あれ? 力が入んねえ。」

天「やめといた方がいいよ。」

妹「うるせえ!」

天「...」

妹「ぜったい、おまえを... たお... す...」

気が小さくなり、落下した。

天「あつ、危ない。」  
ス・・

超サイヤ人を解き、妹紅をキャッチした。  
人がいないか周りを見渡した。

天「そっか、飛ばばよかつたんだ。」

地球では平和な時間が長かつたため、飛ぶことをたまに忘れてしま  
う。

今なら人里が何処にあるかが見える。

天「・・・送っていくか。」

妹紅をお姫様抱っこした。

実はこの時、早い段階で目を覚ましていた。

妹「・・・ちえつ。」

赤面し、そっぽを向いた。

これを観なくても覚えている。彼の腕は、温かかったのだ。  
彼女は永い人生で、初めて恋をしたのだ。

妹「この、女たらしめ。」

微笑みながら言った。今、全てにおいて人生が楽しいのだ。

妹「そういえば女たらしは、博麗神社で住んでるんだっけ。」

2人で行動しているところをよく見かける。ただ、あまり仲が良さそうには見えない。

妹「ムカつく…」

自分と一緒にいけないのに、一緒にいられる霊夢の態度に腹を立てていた。

妹「女たらしだけど、いいやつだ。それも大事にしないなんて…」

気が一気に上昇した！

ヴンツ!!

妹「ムカつくぜっ!!!」

瞳の色が明るくなり、橙のオーラを放った。

妹「超えてやる。博麗の巫女を超えてー」

「あいつを奪ってやる!!」

決意した。強くなるための目標が決まったのだ。

この雰囲気をぶち壊すかの如く、あの声が聞こえた。

? 「はい、目標達成！お疲れ様〜。」

妹「こ、この声は。」

知っている声のようだ。

•  
•  
•

「紅魔館？」

咲「・・・あれ？私は・・・」

目を覚ますと、いつものように自分のベッドの上にいる。

咲「確か、お嬢様と一緒にティータイムを楽しみながら、面接しにくる人を待っていた筈ですが。」

他にも不審な点がある。メイド服のまま寝ていたということだ。

咲「近頃は芯のある人間が来なくなるとお嬢様が仰ってたけど、何故だろう。大丈夫な気がする。」

根拠はないが、今日面接に来る人間に少し期待していた。

咲「！ 気が乱れてる。ホールだ！」

能力を使ってすぐに駆けつけた。

来てみると、館内はボロボロになっていた。遅かったのだ。

咲「これは・・・」

一瞬、目の前の光景を疑った。

すぐそばに、美鈴が倒れている。

美「咲夜、さん。逃げて・・・」

ポツ！ドカーンツ！！

と言いかけたところに、エネルギー弾が飛んでき、美鈴に直撃した。

咲「美鈴！」

既に息はなかった。  
前方を見ると、見覚えのある影が見えた。

咲「あんたは！」

15号であつた。

咲「どうして、あの時、壊したのに！」

15「ククク」

咲「!!」

咄嗟にナイフを投げたが避けられた。いや、15号が何かに吸い込まれたせいで当たらなかつた。

咲「まさか！」

吸い込まれた先へ走つた。

そこには、にとりのスパイカメラが撮つた映像で見た、合体13号がいた。

咲「な、なんで…。だって、あんたは霊夢や魔理沙が。」

13「ガア！」

容赦無く襲つてきた！

咲「くっ！」

右手に握っていたナイフで首を飛ばそうとしたが、

カンッ!

咲「なっ!」

13 「ククク」

ナイフの刃が折れた。

13 「ガア!」

ドゴツ!!

咲「うっ!」

腹に強烈なパンチをうけた!その激痛で、縮こまってしまった。

咲「う、こんな、ところで…。」

改めて気を探ったところ、誰の気も感じ取れなかった。もう生きているのは、自分だけなのかもしれない。

13 「ククク」

咲「お嬢、様。」

レ;神槍「スピア・ザ・グングニル」  
ドツ!

レミリアが不意打ちをかまし、煙が上がった隙に咲夜を助け出した。

レ「大丈夫?咲夜。」

咲「お嬢様!うっ」

レ「ここで休んでなさい。」

咲「でも。」

13号は待たなかった。問答無用でレミリアに襲いかかった!



レ「ふん、はあっ！」  
ゴンツ！

攻撃を躲し、顔面に一撃を食らわしたが、全く効いていなかった。  
13号はニタニタ笑っている。

咲「何故、お嬢様は変身しないのかしら」

13「ガア！」

ドゴツ!!

レ「ぐあっ！」

上から地面へ叩きつけた！そして、

13「死ねえ!!」

ボオツ!!

右手から勢いよくエネルギー波を発射した。爆風で咲夜も吹き飛ばされた。

咲「うわあっ！」

・・・

気絶してたらしく、目が覚めると13号はいなくなっていた。  
だが、見たくないものは見えてしまった。

咲「お嬢様？」

先の方に、動かなくなったレミリアが倒れていた。  
ゆっくりと近づいた。

咲「お嬢、様…」

目の前まで来た。耐えきれず、目からは涙が溢れ出してしまった。  
それでも呼びかける。

咲「お嬢、様…」

抱き寄せたが、やはり動かない。レミリアは白目をむいている。

咲「お嬢様、お嬢様」

温もりが消えた体を強く抱きしめても、何も変わらなかった。

咲「お嬢様、お嬢様ああ!!」

「うわあああ!!」

大声を出して泣いてしまった。

その声に気付いたのか、天井を壊し、13号が現れた。

13「ククク」

咲「あああああ!!」

咲夜の気が、どんどん膨れ上がってきた!

13「ナニツ!」

ピコンツ、ヴンツ!!

「うわああああ!!」

次の瞬間、瞳の色は明るくなり、髪も少し逆立ち、迸る衝撃波を放った！

13 「ア…。」

咲 「ツ!!」

13 「ウツ」

ギロつと睨んだのも束の間、折れてない残りのナイフで逆襲を始めた！

咲 「グツ！」

ザクツ!!

13 「ガア！」

胸部に斬りつけた。

咲 「アゝア！」

ザクツ!!

13 「ウア！」

怒り狂ってしまった。もはや誰にも止められない！

咲 「ウツ！アア！ハッ！ハッ！ハアゝッ！」

13号がどんどん斬られていく。

咲 「ギツ！ガア！アアゝ！ハッ！」

もう、出した声と斬りつけた回数が合っていない。口以上に腕が速いのだ。

既に、13号の腕と首は無くなっている。

咲「ハァッ！アッ！ガァ！」  
「ウァァァァ！！」  
ザッ！！

最後に、13号の巨体を半分に斬った。

咲「はぁ・はぁ・・・。」

文が倒せなかった敵を、一人で一方的に倒してしまった！

咲「・・・うう、お嬢、様…、みんな…」

落ち着き、再び泣いてしまった。無理もない。一瞬にして家族を失ったのだから。

穴が開いた天井から、冷たい雨が降り注いだ。慰める者は、もういない。

咲「う・・・ぐ…。」

泣いているが、超化は暫く解けなかった。

？「はい、これにて終了！お疲れ様〜！」

咲「・・・??」

・・・

???

妖「・・・ん？ここは…。」

気が付くと、見知らぬ荒野の真ん中で倒れていた。服も少々痛んでいる。

妖「思い出せない。私は、闘っていた？」

ここは明らかに戦場だ。壊れた旗や武器がある。

妖「！ 何か来る！」

遠くから無数の気を感じた。

それは、妖精軍団であった。それだけではない。一体一体が今のチルノくらいの強い気を持っている。

妖「こんなに強い妖精が、この数ですか。」

次の瞬間、妖精軍団は妖夢目掛けて一斉に掛かった。

妖「これでも、あれからずっと修行してきたんです。」

ゆつくりと2本の刀を抜いた。

妖「倒せるものならー」

「倒してみなさいー」  
ポウツ!!

気を高め、妖夢も駆け出した！

妖「はっ！たあっ！」

ザッ！ザッ！ザッ！

大量の妖精を一太刀ずつ斬っていった。

妖精達は妖夢のスピードについて行けず、反撃すらままならない。

妖「やつ！せいっ！」

みるみるうちに減っていく。

見上げると、離れて気を溜めていた10人の妖精が一気にエネルギー波を発射した。

しかし、避けようとしなかった。

妖「それくらいなら！」

妖；断命剣「瞑想斬」

妖「はああっ！」

エネルギー波を両断した！

二手に分かれたエネルギー波は地面に当たり、爆発し埃が舞った。怯んだ隙に一気に飛び出し、残り十数人の妖精達に斬りかかった。

妖；人鬼「未来永劫斬」

ザッ！ザッ！ザッ！ザキッ！！

1人残らず斬り裂いた。

妖「こんなものですね。でも、こんな状況前にもあったような。」

ぼやいていると、遠くから何か歩いてくる。大柄な男だ。

妖「!!」

忘れもしない。自分を3発で倒した14号だったのだ。

妖「こんなことがありますか？」

状況もわからない上、因縁の相手と出くわすとは、流石の妖夢でも予測不可能であった。

妖「も、もうあなたなんかには負けませんよ！」

腕が震えていた。あれから1ヶ月修行したとは言え、あの敗北の恐怖は勝たねば消えない。

妖「た、たあつ！」

14「ンツ！」

勢いだけで斬りかかった。パンチを3回避け背中を斬りつけようとしたが、

キンツ！

妖「うっ」

力が入らず斬れなかった。その隙を突かれ、

14「ガアツ！」

ドゴツ!!

妖「うあゝっ！」

またしても殴り飛ばされてしまった。

妖「・・・もうっ！なんで…」

肉体への痛みはあの時ほどはないが、精神への痛みは大きかった。

妖「どうして…、どうして…。」

悔し涙を流した。敵はすぐそこまで迫ってきている。その時、師の言葉を思い出した。

妖忌「いついかなる時においても、怖れたり迷ってはいけない。」

「お前には白楼剣がある。もし、自分を見失い取り乱してしまった場合は一」

「その刃で迷いを断ち切れ」

妖夢「迷いを、断ち切る…。」

自分の中で、震えている己を白楼剣で斬った！

妖夢？「あなたは、もう大丈夫よ。自信を持って。」

妖夢「…。」

臆病者は、溶けるように消えた。その瞬間、体の震えが止まった。

14 「ガアッ！」

構わず殴りかかってきた。

が、その大きな拳を小さな手のひらが防いだ!!

妖「もう、あなたは怖くありません。」

ヴンッ！

ゆつくりと顔を上げながら、気が一気に上がった！

髪に変化はなく、瞳の色が明るくなり、銀のオーラを解き放った！



妖「!!!」

14「アツ」

ザツ!!ドカーンツ!!

一瞬だった。14号が声を出した時は既に、上半身と下半身は分かれてしまったのだ。

ス・・

超化を解いた。いや、解けた。

妖「・・おかしい。やっぱり何かおかしい。」

少し考え込んでいた矢先、

?「はい、ノルマ達成!もういいよ。」

妖「・・クスッ、そんな気がしました。」

銀の勇者は、満足げに笑った。

・・・

「にとりの研究所」

妖「やはり、あなたでしたか。」

に「あ、バレてた?」

妖「あなたの好きなシチュエーションですからね。」

に「確かに妖夢には、バトルシミュレーターで1000人斬りとかやらせたもんね。また腕上げたんじゃない?」

妖「それは恐縮なんですけど、なんで妹紅さんと咲夜がいるんです

か？2人とも寝てるようですけど。」

に「妖夢と同じことをしたのさ。ジャンルは違うけどね。」

「妹紅は〈決意〉がテーマで、咲夜は〈怒り〉、妖夢は〈迷いの根絶〉だよ。」

「それで2人とも疲れて寝てるの。」

妖「よく考えますね。」

に「霊夢さんから聞いたけど、あの姿へ変身させるには感情の爆発が鍵になるらしいから、どうやったら効果的か考えたんだよね。」

妹「・・・。身体が石のようだ。」

咲「ここは、現実ですか？」

に「覚えてないの？もう戻ってきてるよ。」

妹「そうだったな。」

咲「お嬢様は、死んでないんですね？」

に「勿論さ。」

咲「・・・。」

妖「ぷぷつ、それにしてもメイド長でも泣くんですね。」

軽く笑っている。

咲「う、うるさい。」

妖「あれ？らしくないですね。」

に「そりゃそうさ。」

妹「いったい何したんだよ。」

に「後ほどね。」

妖「この度はお世話になりました。ありがとうございます。」

に「礼には及ばないよ。」

妖「それでは私はこれで失礼します。」

に「ばいばい。もう夕方だから早く、いや、速く帰った方がいいよ。」

妖「うわあつ！幽々子様ー！」

バシユツ！

18時までには御飯を作らないと、お仕置きされるのだ。

に「間に合うといいね。」

妹「そんじや私も帰るぞ。」

に「じゃあね。」

咲「・・・。」

に「?帰らないの?」

咲「コンピュータの中とは言え、お嬢様を殺す演出はどうかと思えますよ。」

口は笑っているが目が笑っていない。

に「ちよ、ちよつと待ってよ。こうでもしないと強くなれなかったかもしれないんだよ!」

咲「それで?」

に「実際大成功だったじゃん!もう少し気分を落ち着け」

咲;メイド秘技「殺人ドール」

に「ぎやああああ!!」

・・・

「妖怪の山」

文「うくん、上手くいきませんね。」

権「文さん、また例の変身の特訓ですか?」

文「はい、あの力を自在に操りたいので。」

文はいつでも超化することができなかつた。

無理もない。あの孫悟空ですら、自在に操るために別の星で修行し

ていたのだから。

権「それにしても、どうしてそんなに頑張るんですか?」

文「今まで届く筈もなかった霊夢さんに、追いつくことができる千載一遇のチャンスですから。」

権「別に追いつかなくても。強い方増えましたし。」

権は他力本願だ。

文「それじゃ駄目なんです。」

権「なんでですか?」

文「それはやっぱり…」

空を見上げてこう言った。

文「見守りたいからですよ、あの人を。一番近くで。」

・・・

「にとりの研究所」

ビー、ビー

に「ん? 誰だろ。」

電話らしきものをとった。

?? 「もしもし、にとり様でしょうか?」

に「そうだよ。そんなにかしこまらなくていいのに。」

?? 「いえ、世話になっっている身でもあるので。」

に「私と君たち月人の仲でしょ? 気にしなくていいって。」

?? 「有難う御座います。」

「早速ですが、例の兵器はできたでしょうか？」

に「うん、もう直ぐできるよ。」

?? 「本当ですか！」

に「もうちよつとみんなの様子を見たかったところだけど、急いでいるんならしようがないよね。」

?? 「思ったのですが、どうして我々に協力してくださるのですか？」

に「戦争ではこちらにも迷惑かけたからだね。」

「私1人でも、月の都と仲良くできるきっかけになればと思って。」

?? 「恩にきます。私も彼女らを傷付けてしまい申し訳ありません。」

に「戦争だから仕方ないよ。」

?? 「それでは、次は取引の際に会いましょう。」

に「それじゃあね。依姫。」

...

〔紅魔館〕

一方紅魔館では、ある人物の面接をしていた。

レ 「それじゃあ、入っていいわよ。」

?? 「失礼します！」

ノックをし、入室した。ドアもしっかり閉め、椅子の横まで歩き立ち止まった。

レ 「いいわよ。座って。」

?? 「はい、失礼します。」

レ 「ふふ、それじゃあ改めて訊くわ。お名前は？」

?? 「えーと…」

レイ「レイです！」

レミ「それじゃあまず、なんでここで働きたいと思ったの？」

レイ「レミリアお嬢様の為に何かできたらなと思ったからです！」

レミ「ふくん。ご趣味は？」

レイ「絵を描いています。」

レミ「へえ。仕事の希望はあるかしら？」

レイ「門番の仕事を希望したいです。」

レミ「そう。ここはあまり人間はいないけど、仲良くできるかしら？」

レイ「はい！勿論です！」

レミ「ふふ。じゃあ、最後に質問よ。」

レミリアは急に血相を変えた。吸血鬼の目だ。

レイ「(ゴクリ)」

レミ「あなたは、紅魔館のために死ねと言われたら、死ねる？」

レイ「…それがお嬢様の為になるなら喜んで。」

レミ「・・・結果は出たわ。」

レイ「(ドキドキ)」

・・・

結果、レイは採用された。

レミ「ほう、あなたの紅茶、なかなか美味しいじゃないの。」

レイ「ありがとうございます！」

レミ「流石に咲夜には勝てないけど。あ、帰ってきたみたい。」

ドアの前にいるようだ。

レミ「もう終わったから入っていいわよ。」

咲「失礼します。」

レミ「お疲れ様。どうだった？」

レイ「ほんとに殺されるかと思った」

咲「お嬢様、ですよね？」

レミ「そうよ。どうかしたの？」

咲「・・・その・・・」

「抱いて、くれませんか？」

レミ「あら、珍しいこと言うじゃない。咲夜がそう言うの何年ぶりかしら。」

咲「・・・」。

レミ「ほら、おいで。」

咲夜の方が身体は大きいですが、その時のレミリアは咲夜よりも大きくみえる。

ギョツ

咲「お嬢様、お嬢、様・・・」

声が震えている。

レミ「よしよし、よく頑張ったわね。」

「うわああああん!!」

堪えられず泣いてしまった。

レミ「おやまあ、なんで泣いてるの？」

咲「だって、だって・・・!」

訳を聴いたレミリアは後日、にとりを襲撃したそうなの。

同じ頃、門前には悟天が来ていた。

美「あっ！悟天さん！」

天「やあ美鈴。」

美「お待ちしてましたよ。どうぞ！」

天「うん。」

辺りは暗くなってきた。

ホールに入るとフランが待ち構えていた。

フ「悟天お兄様いらっしやい！」

天「フランちゃん！あれからすっかり大丈夫かな？」

フ「うん！もう元気！早く修行しようよー。」

天「これだけ暗かったら大丈夫かな。」

フランと一緒に外へ出た。そこには庭の手入れをしているレイがいた。

天「あれ？君は？」

レイ「新入りのレイって言います！どうぞ、よろしくお願いします！」

天「おっ！随分と元気だね。君は人間だっけ？」

レイ「はい、人間です。悟天さんはサイヤ人との混血なんですよね？」

天「！ どうしてそれを？」

レイ「あなた達の世界を本で覗いたことがあるんですよ。この幻想郷に来る前の話ですがね。」

天「ま、待って！本？来る前ってどこまで？」

レイ「あなたのお父さんが神龍と共に何処かへ行ってしまったところまで知っています。」

「勿論、悟天さんが生まれる前の事も。」



天「・・・本物だ。」

レミリアでもない限り、父が飛び立ったことなど知るはずがない。それに、レミリアが新人にこんなことを言うだろうか。

天「世界って、広いね。」

レイ「そうですね。ですが、そこが面白いんです！」

天「そうだね。お父さんは何処に行ったんだらうなあ。」

フ「お兄様ー、早くしようよ。」

天「あ、ごめんごめん。」

軽い運動程度の修行をした。

少しした後、レミリアの声が聞こえた。

レミ「みんなホールに集合しなさい！歓迎会を始めるわよ！」

天「そつか。今日は歓迎会だったんだ。咲夜が疲れてるみたいだったけどよく作れたなあ。」

フ「みすちーも来てくれたんだよ。」

悟天の弟子たちとフランは既に仲間だ。

天「へえ、みすちーも来てくれたんだ。楽しみだなあ。」

ホールにはみんな集合しており、レミリアが案内した。

レミ「それじゃあみんな玉座の間に来て。」

天「え？何するの？」

レミ「秘密よ。」

皆玉座の間へ入った。玉座にはレミリアが座っている。

レミ「レイ、こっちに來なさい。」  
レイ「はい。」

5段程度の階段を上がり、玉座の前で跪いた。

レミ「これからあなたは、紅魔の一員よ。忠誠を誓いなさい。」

レイ「はい、これから紅魔館の為にこの身を捧げます。」

天「(こんなしきたりあったんだ)」

レミ「わかるわ。あなた、素晴らしい能力をもってるわね。」

レイ「・・・。」

レミ「私から名を授けるわ。あなたの名はー」

「レイ・ブラッド、よ。」

こうして、レイは紅魔館の一員となり、苦樂を共にすることになった。

さあここからは楽しい食事の時間だ。お馴染みの紅魔メンバー以外に数名の妖精メイドの姿も見受けられる。

天「やっぱりみすちーの料理は美味しいね！」

ミ「いやあ、そうでもないですよ。」

咲「いえ、なかなか美味しいですよ。」

ミ「ありがとうございます！」

実に嬉しそうだ。

美「いや〜久しぶりですね〜。こんな豪華な食事は。」

咲「その代わり明日からみつちり働いてもらおうわよ。レイくんと一緒。」

美「え！あの子門番やるんですか？」

咲「そう希望してたらしいわ。」

美「そうですかそうですか！なら早速レイくんに昼寝の極意を」

グサツ！

頭にナイフが刺さった美鈴は倒れた。

天「はは、相変わらずだな。」

咲「いつまで経ってもこうなんですから。」

天「あれ？咲夜疲れてる？」

咲「あら、よくわかりましたね。」

天「そりゃあね。あまり無理しちゃダメだよ。」

咲「ありがとうございます。」

レミ「ちよつといいかしら。」

天「ん？いいけど。」

レミ「あなた、見た目によらず食べ方が綺麗ね。」

天「ははっ、まあね。」

都会育ちだから当然だ。

レミ「あと、さっきのレイとのやりとりを見させてもらったわ。」

天「あつ…。」

レミ「レイはあなたの過去やあなたが生まれる前のことを知っているそうね。」

天「(まずい)」

レミ「どんな脅しに使おうかしら。」

天「まあ、ほどほどにね。」

レミ「ふふ。」

弱みを握られてしまった、のだろうか。

天「レイくんと似てるね。」

レミ「そうかしら？」

天「ま、いいけど。」

レミ「何にせよ、また紅魔館が賑やかになるわ。」

天「俺もその方がいいと思う。あと、なんで俺だけ招待したの？」

レミ「あなたを招待すれば、レイにもあなたにもいい刺激になるとわかっていたからよ。」

天「その辺はお見通しってことか。」

彼女には頭が上がらない理由である。

パチュリー「う、胃がもたれた…。」

小悪魔「え！大丈夫ですか!？」

この魔法使いはパチュリー・ノーレッジ。隣にいるのは助手の小悪魔。

パ「食べ過ぎ、かしらね。」

小「今日はそんなに沢山作られてないですよ。」

パ「グラタンがダメだったかしら。」

小「え…、それ私も食べましたよ。」

パ「え…。」

この後、他数名もトイレへ駆け込んだという。

こうして、無事？歓迎会は終了した。

悟天やミスティアは帰っていった。

レミ「レイ、あなたの部屋は二階の咲夜の隣の部屋ね。」

レイ「わかりました！」

レイは二階へ上がっていった。すれ違いで咲夜が降りてきた。

咲「お嬢様。」

レミ「?」 どうしたの?」

咲「差し出がましいのですが、一緒に、寝てはくださりませんか?」

レミ「そう言うと思って、枕は2つ用意したわ。」

咲「流石はお嬢様です。」

とても嬉しそうだ。

かくして、紅魔館のちよつと特別な1日は終わった。

...

「霧の湖のほとり」

ガシツ!バシツ!ドンツ!

紅葉が始まった頃もなお、悟天は弟子たちと修行していた。

弟子は7人もいる。ただ、年齢はさておき見た目はみんな幼い。

偶然だろうか?!

天「いやあ、流石だなあこいしちゃん。もうこんなに上達しちゃうなんて。」

こ「えへへ、お兄ちゃんに褒められちゃった!」

チ「ぐぬぬ。」

その笑顔を見て悔しがっている。

大「仕方ないよチルノちゃん。私たち妖精だから。」

チ「妖精だって、強くなれるもん…。」

大「チルノちゃん…。」

チ「大ちゃんは悔しくないの?さいやばわーを持ってないの大ちゃんだけだよ。」

大「私は、妖精だから仕方ないかなって。チルノちゃんみたいに強くないし。」

そう、ルーミアもミステイアもリグルも既にサイヤパワーを宿している。チルノもあつという間に追いつかれてしまったのだ。

チ「・・・見ててね大ちゃん。」

大「え？」

チ「あたい、いつか必ず、この中で一番になってみせるから！」

大「チルノちゃん・・・」

彼女は本気だ。

天「それじゃあ、俺以外のみんなで組手してみて。」

こ「いいよ。」

ル「やるのだ！」

ミ「うん！」

リ「やるやる！」

チ「や、やるぞ！」

大「私はちよつと・・・」

天「わかったよ大ちゃん。フランちゃんがいればちようどよかったんだけど仕方ないか。」

今は昼だ。吸血鬼にとっては修行など無理だ。

チ「あたい、こいしとする！」

こ「え、余りつてことでお兄ちゃんとしたいんだけど。」

チ「まずこの最強のあたいに勝ってからだ！」

こ「ま、いいけどね。」

こいしは余裕の表情だ。

ル「チルノ大丈夫なのかー?」

リ「流石に分が悪いんじゃ…。」

天「ま、見てみようよ。」

ミ「じゃあ私はルーミアと。」

ル「やるのだ。」

リ「私あんちゃんとかよ…。」

天「大丈夫だって、本気は出さないから。」

というわけで、1組ずつ始めることになった。  
まずはチルノとこいしだ。

チ「だあつ!」

シュツ!シュツ!シュツ!シュツ!

悉(ことごと)く躲かれてしまっている。

こ「それ本気?」

チ「はあ・・はあ・・まだま」

こ「それっ」

ドンツ!

チ「あゝっ!」

張手で飛ばされた。

それでも転ばないように立った。

チ「いつて〜!」

こ「ほらほら、早くかかってきてよく。」

チ「うっ、うわあつ!」

こいしへ飛んでいき再びラツシュした。

シュツ！シュツ！シュツ！

こ「遅い遅い。」

躲される中、

チ「はっ！」

ドゴツ！

こ「うっ！」

天「！」

こいしの腹に一撃をかました！

こ「このっ！」

ゲシツ！

チ「うわっ！」

チルノに回し蹴りを決め、勝負がついた。

チ「いてて。」

リ「すげえ、こいしに一発喰らわした。」

大「すごいよチルノちゃん！」

こ「・・・。」

天「一瞬だったけど、いい試合だったね。」

「チルノ、君はやっぱりすごいよー！」

チ「え、ほんとに？」

天「うん、力の差を感じさせないいい動きだったよ。」

チ「！ やったー！」

嬉しさのあまり飛び上がった。



天「こいしちゃんもすごいよ。3ヶ月くらいでこんなに強くなるなんて。大したもんだよ。」  
ナデナデ

そう言い頭を撫でた。彼女は満足気な笑顔を見せる。

チ「あ！ずるいぞ！」

こ「まく、勝ったの私だし。」

チ「うう。」

天「まあまあ喧嘩しないで。」

この後、ルーミアはミスティアに勝利し、リグルもなかなかの上達ぶりを見せつけた。

・・・

### 「博麗神社」

昼下がりに。

霊「魔理沙遅いわね。」

咲「休暇を貰った私より遅いのは問題ね。」

妖「まだ寝てるんじゃないですか？」

早「もう魔理沙さんほつといて始めま」

魔「よう！遅れてごめんだぜ！」

霊「遅かったじゃないの。」

咲「もう1時よ。」

妖「髪ボサボサですし。」

早「ハアツ☆」

魔「さつき起きたんだぜ。髪を直す時間はなかったぜ。」

霊「あんたほんとに女？」

咲「気品が足りないわね。」

妖「女子力は大事ですよ。」

早「そんなんじやモテませんよ。」

魔「早苗ちよつと面出ろ。」

早「なんで私だけ！」

妖「ははは。」

霊「さ、全員揃ったしお茶会始めるわよ。」

咲「やつとね。」

妖「このメンバーが集まるってそうそうないですよね。」

魔「貴重だな。」

早「それじゃあガールズトークっぽく私から1つ質問を」

霊「みんな最近どう？」

早「ハアツ☆」

魔「ん、私はあまりうまくいってないな。」

霊「あら、珍しいじゃない。」

咲「修行のことでしょ？」

魔「まあそうなんだが。」

霊「咲夜はどうよ。」

咲「順調よ。今なら魔理沙と互角に渡り合えるんじゃないかしら。」

妖「などと、その気になっていた893の姿はお笑いですね。」

魔「流石にそれはないな。」

咲「そんなに言うなら手合わせしてみる？」

魔「今はやめとこうぜ。」

咲「いえ、まずはその半死体と。」

妖「上等ですよ。やれるものならやってごらんなさい。」

睨み合っている。

早「ちよ、ちよつと！落ち着いてくださいよ！」

霊「あんたら2人はそこまですて。」

咲「ごめんなさい霊夢。」

妖「申し訳ありません。」

早「じゃあ次は私が」

魔「紅魔館のレイってやつは元気か？」

咲「元気よ。美鈴の悪い癖が染み着き始めてるけど。」

早「ハアツ☆」

霊「見た目は好青年って感じよね。」

妖「これの指揮下なんて勿体無いくらいです。」

咲「あら、あなたの所の大食い幽霊のお世話よりはマシだと思うけれど?」

妖「幽々子様へのそんな言い方は許しませんよ。」

咲「あら、何か間違ったこと言ったかしら。」

妖「なんですって。」

咲「何かしらあ?」

またしても睨み合う。

魔「どうしてこうなった。」

霊「はあ…、それで、レイ君は紅魔館に馴染めてるの?」

咲「温厚な人だからだいたい馴染めてるわよ。妹様ともすぐ仲良くなっただし。」

魔「フランと?なかなかいいやつだな。」

妖「そういえば、フランさんは悟天さんと修行してますね。」

咲「そうなのよ。悟天さんのおかげで攻撃に骨格が出来上がっていて嬉しいわ。」

霊「悟天にとっては、全然修行になってないけどね。」

魔「最近にいちやんに対して当たりが強くないか?」

霊「まあね。ここ数ヶ月、家事をあまりしてくれないのよ。」

咲「それは大変ね。」

妖「そんな一面もあるんですね。」

早「あれ?出稼ぎとかしてませんかでしたっけ?」

霊「そうなの？」

魔「そういえばそんなことしてたような。」

霊「私の暮らしがあまり変わってないからどうでもいいわ。」

妖「・・・なるほどですね。でも気を付けてくださいね、霊夢。」  
霊「？」

この時の霊夢には、妖夢が何を言っているのかわからなかった。

霊「そういえば最近の萃香知ってる？」

妖「いつの間にかサイヤパワーを宿してましたね。」

魔「飲み比べ以外でいちちゃんと絡み有ったっけ？」

霊「それが実は…」

くく

天「それじゃあ今回はこれで終わりっ！」

弟子達「はーい！」

弟子達が帰った後、

萃「お、おい悟天。」

天「あ、萃香ちゃん。」

萃「ちゃん付けで言うなー！」

天「ところでどうしたの？」

萃「・・・ちよっと、用があつてな。」

天「なに？」

萃「私に・・・」

天「？」

萃「サイヤパワーをくれないか!？」

天「どうしたの急に。」

萃「みんなサイヤパワー持ってるだろ？私にはないからどうやって

も追いつかないんだ。」

「このままじゃ、鬼の尊厳がなくなっちゃうんだよ！」

涙ぐんでいる。

天「大変だね。」

萃「だから、サイヤパワーくれよ。」

天「あれって確か、妖怪が吸い込んだら数日倒れるそうだからやめた方が」

萃「頼むよ悟天！」

ギユツ

半泣きの状態で抱きついてきた。断る理由などあろうか。

天「わ、わかった。わかったから落ち着いて。」

萃「ぐすつ、あんがと。」

天「それじゃあじつとして。」  
くく

霊「つてことがあったらしいわ。」

魔「だはははは!!」

咲「妖怪は苦勞するんですね。」

妖「なんで私は…。」

早「元が人間だからじゃないですか？」

妖「なるほどですね。」

霊「そんなに笑っていいのかしら？」

魔「?なんだよ。」

霊「だってこの前、悟天にお使い頼んだ帰りに魔理沙が悟天に抱きついて私見ただけだ」

魔「わあああ!!」

咲「くすつ、可愛いじゃない。」

妖「乙女ですね。」

早「甘えん坊さんですね。」

魔「う、うるさい！早苗！後で奢りな。」

早「そんなく。」

霊「話を戻すけど、妖夢は修行の方はどう？」

妖「私も調子いいですよ。超化維持もできるようになりましたし。」

咲「私は最初から維持できるけど。」

妖「いちいち口を挟まないでもらえますか？」

咲「そんなことで喜んでいては駄目ってことよ。」

妖「大きなお世話です。」

ギロリ。

早「お2人は仲悪いですよね。」

霊「そのうち仲良くなるわよ。」

魔「霊夢、みんな成長早くねえか？私たちなんて超化維持ですらもつと時間かかっただろ？」

霊「確かにそうね。なんでかしら。」

早「悟天さんに秘密があったりして。」

魔「まっさかく。」

咲「・・・。」

霊「次の話いくわよ。」

早「・・・。」

霊「あれ？いいの？」

早「あ、別にいいですよ。私は魔理沙さんよりもうまくいってないの。」

霊「それは悪かったわね。」

魔「そ、そうだ。早苗さつき何言いかけたんだ？」

早「よくぞ訊いてくださいました！」

急に元気になった。

早「皆さん、恋をしていますか!？」

咲「してないわ。」

妖「いえ。」

魔「恋はしてないな。」

霊「何それ美味しいの?」

早「ええ…。」

こんな女子会が他にあるだろうか。

魔「霊夢にはにいちちゃんがいるだろ。」

霊「あんなのに恋するわけないでしょ。」

咲「意外と悟天さんとは脈無しなのよね。」

妖「意外ですね。とつくに落ちたと思っていました。」

早「霊夢さん不器用ですから仕方ないですよね。」

霊「うっさい。」

魔「咲夜はいないのか?気になる人とか。」

咲「仕事で忙しいから考えてられないわ。」

妖「そりやあなたみたいなのヤクザメイドじゃ無理ですよ。レイ君も

美鈴さんに取りられて終わり。はい残念。」

咲「首を搔つ切って2度と喋れなくしてあげようかしら?」

妖「やれるものならやって」

ゴツツ!ゴツツ!

咲夜と妖夢は、座ったままちやぶ台へ倒れた。

たんこぶができている。

早「霊夢さん怖い。」

魔「霊夢らしいやり方だな。」

早「痛そく。」

霊「まったく、いい加減にしなさいっての。」

早「なんでこんなに仲悪いんですかね。」

魔「文化の違いじゃねえか？」

霊「私はうるさいのが嫌なだけよ。」

魔「そういや早苗は恋してないのか？私はまだしてないけど。」

早「私もまだですね。今が満ち足りているので。」

魔「満ち足りてるっていうと？」

早「今こうして、大好きな先輩達とお話できるってことです！」

霊「ふ、ふん。可愛いこと言うじゃない。」

魔「うわ！霊夢がデレたぞ！」

霊「うるさい！」

早「これは文さんに報告ですね。」

霊「あんたもこぶ作ってほしいわけ？」

早「う、嘘ですって！そんなこと言うわけ」

文「写真もう撮りましたよ。」

窓の外に文がいた。

魔「あ、ドンマイ霊夢。」

文「それでは明日の朝刊で。」

霊「こらあ！待ちなさい！」

バシユツ!!

文を追いかけるため、神社を出た。

早「ああ、これはもうお開きっほいですね。」

魔「だな。咲夜と妖夢も寝てるし、私らも寝るか。」

早「お2人は寝てるんじゃないやなくて気を失つてると思うんですけど。」

魔「細かいことはいいんだぜ。おやすみとつつあん……。」

早「どっかで聞いたことあるセリフですね。じゃあ私も寝ますう……。」



こうして、ガールズトークはお開きとなった。

・・・

「にとりの研究所」

その晩のこと。

に「これで完成のはず。アリスさん、起きてる?」

ア「眠れるわけじゃないでしょオ。ムラムラしてしようがないんだからア。アハハハ。」

に「薬できたから、ほら飲んで。」

ア「なアにこれエ、媚薬?」

に「もうそういうことでもいいから早く飲んで。」

ア「アリス、イツキマアす!」

一気に飲んだ。すると!

ヴンツ!!

超化した!

ア「正気に戻れた!」

に「大成功だね。」

ア「もしかして、にとりが元に戻してくれたの?」

に「そ。悟天君がヒントをくれてさ。」

ア「どんな?」

に「力をつければ治るかもって。ビンゴだね。」

ア「ありがとね。この呪いもどうにかしないと。」

に「治し方はパチュリーさんに訊いたりしてるけど、まだわからな  
いんだってさ。」

ア「この呪いさえなければ、今すぐにでもあいつを撃てるのに。」  
に「あいつ？」

ア「本当は呪いを防げたの。でも、あいつは呪いにかかるように仕  
向けた。」

に「誰なのか目星はついてるの？」

ア「こんなことができるのは、あいつしかいないわ。」

に「その話は、また今度聞くよ。」

ア「それもそうね。」

に「今度は咲夜も連れてくるよ。アリスの立体浮遊術を覚えたいっ  
て、昔言ってたから。」

ア「そうね。」

なんと、アリスの本性は淫乱魔法使いではなかったのだ！

呪いやあいつとは誰なのだろうか？

.....

「???

ド「いよいよ完成か。」

？「お疲れ様です。」

ド「アレは10年経っても完成していかないがな。」

？「それも完成が近いのでしよう？一刻一刻とドクターの夢が近づき  
ますね。」

ド「その為にも、セルを使う。」

「私の夢への道は、ここからだ。」

### 第3章

？ 幻想少女強化計画？

完

## 第1章? 伝説の始まり? 第1話 「伝説の始まり」

悟天「よし!西の都の復興もだいぶ終わったな。そろそろ日も暮れる頃だし帰るか!」

この青年の名は孫悟天。

彼が一仕事を終え家に帰ろうと飛ぼうとした時、何かを見つけた。

天「ん?これなんだろう?」

それは円盤のような怪しげな機械。悟天がいる世界でも見たことがないものだった。思わず悟天はそれを手に取ってしまった。

―その時だった!―

天「な、なんだ!う、うわあああ!!」

なななんと!円盤が急に動きだし、時空の彼方へ飛ばされてしまったのであった!

これは、悟空が神龍と飛び立ってから1年が過ぎ、1人の青年が幻想入りした物語である。

第1章?伝説の始まり?

天「・・・・・・う・・・・ん・・・・あ、れ・・・・ここ・・・・は・・・・?」

気がついた時は湖の側にいた。空を見上げてみると、どうやら昼らしい。

天「?もしかして、寝すぎちゃったかなあ?」

こういったところは父親にそっくりである。

天「とにかくここがどこか誰かに聞いてみよつと♪」

動揺どころか楽しんでいる。

天「あつ、彼処に誰かいるつ。おーい！」

??? 「ん？あたい？」

そこには1人の少女がいた。見かけない格好をしている。あんなに小さいのに髪が水色であった。いったい何があったのだろう。

天「うん、急だけどこか知らない？」

チルノ「うくん、あたいチルノ！」

天「彘？う、うん（汗）俺は悟天。ここがどこか知らない？」

チ「えーつと、わかんない。」

天「ええ、それじゃあなんか知ってそうな人知らない？」

チ「いいよ！・・あつ、この最強のあたいに勝ったら教えてやってもいいぞ！」

天「え？君に？」

チ「そーだ！あたいは最強なんだぞー！」

天「しようがないなく、よくし、絶対に勝ってやるぞ。」

勿論本気では言っていない。力の差はわかりきっていたからだ。

天「よくし、かかってこーい。」

チ「くらえええ！」

チ；氷符「アイシクルフオール」

チ「アイシクルく、フオール!!」

天「・・・（全然効かない）。」

チ「どーだ！まいったか！」

天「（しようがない、気合砲で吹っ飛ばそ）はああつ！」

悟天は気合砲でチルノを吹っ飛ばした。

チ「ああああ…」

ここまではみんな予想通りであろう。

しかし！悟天が放った気合砲が突然、吸い込まれる様に消え、

チ「はあああああ!!」

チルノが大幅にパワーアップしたのだ！

天「な、なんだ!?急にチルノの気が上がった？」

いったいチルノの身に何が起こったのか？

第2話へ、続く!!

## 第2話 「現れたすごい奴！幻想郷最速の射命丸文」

くあらすじく

一星龍によりメチャクチャにされた地球を元に戻すため、孫悟天は今日も地球復興の手伝いをしていた。そんなある日、悟天は円盤のよ  
うな機械を思わず手に取ってしまい、時空の彼方へ飛ばされてしまっ  
た。

気がついた時には、湖の側におり、ここが自分のいた世界ではない  
ことに気づく。ここがどこのか知るべく、そこにいたチルノという  
少女に話しかける。しかし、自分に勝たないと教えないと言い張り、  
仕方なく勝負することになる。とはいえ、勝敗はみんなご存知。悟天  
は気合砲で吹っ飛ばそうと試みたが、気合砲は消え、チルノは謎のパ  
ワーアップをしたのであった。いったい、何が起きているというのか  
？

チ「はああああ！」

天「いったい、何が起きてるんだ!? 気を抑えていたとは思えないし、  
どこからこんな力が」

チ；氷符「アイシクルフォール」

チ「もーいっかい！アイシクルく、フォール！」

天「!!」

先程と同じ技であるが、威力は全く違う。

チ「このままこおりづけにしてやる！おりやあああ！」

天「・・・、それならっ！」

悟天は瞬時にチルノの背後に回り込み、後頸部を叩き、気絶させた。  
驚いたものの、悟天には殆どダメージは無かった。

天「ふう、ビックリした。．．あれ？あの変な機械が無くなってる。手がかりも無くなっちゃった．．。しかも結局ここがどこなのか聞けなかったな」

幸い、その世界はまだ昼ぐらいなので、時間はある。悟天は誰かいないか探すために湖を後にした。

．．．．．

気を探してみると、人の気が沢山あった。

天「ん？あれは村かなあ？行ってみるか」

悟天が其処へ向かおうとした時、

？「ちよおおおとと待ってくださいーい!!」

何かがもの凄いスピードで飛んできた！

天「な、なに!?!」

文「先ほどのもの凄い気を察知してやってきました。間に合っよかったです！あ、私は文々。新聞の記者、射命丸文と申します！」

天「あ、うん。俺は悟天。」

文「悟天さんですね！早速ですが．．」

天「もしかしてまた勝負？そんな暇ないんだけどな。ここは逃げよつと」

悟天は逃げようとしたが、

文「待ってください！何処へ行くんですかあ？」

肩に触れようとした手を文を上回るスピードで掴んだ。



文「な、なかなか早いですね。これでも一応幻想郷最速を誇っているんですが・・・。」

天「そんなことより、俺早く帰らないと。」

文「逃がしはしませんよ！力づくでも止めます！」

ジャーナリズムの欠片も無い。

天「うくん（そういえばこの子羽が生えてるな。気合砲を使えば怪我もしないし今度こそすぐに）」

文「何を考えているのですか？」

天「うくとね、こういうこと！はああっ！」

文「しまっ！あーれくくく」

文はいとも簡単に吹き飛ばされた。

天「よし！今のうちn」

と、その時だった！またしても気合砲は突然消えて、

文「はああああ！」

天「そんな、またか！」

またしてもパワーアップしてしまった！

文「おおおおお、何ですかこれ？全身からパワーが溢れてきます！」

戦闘力は先ほどのチルノより遥かに上回っている。最悪の誤算である。

天「どうしてこうなっちゃうの〜。」  
文「それではこちらから行きますよ!」

さつきとは桁違いのスピードで悟天に攻撃してきた!油断もありその一撃を捕らえられなかった。

天「なにっ!」  
文「どンドン行きますよ!」

悟天は文の動きを全く捕らえられずにいた。どうやらスピードは悟天を超えたらしい。

天「ぐっ、うわっ!」

文はそのスピードで悟天を四方八方から攻撃し、蜂の巣状態にした。

天「(まずい、このままじゃ、やられるかも。使いたくなかったけど使うしかないか)」

悟天は切り札を使うことにした。  
そう、〈超サイヤ人〉である。

天「だあああああああ!!」  
文「な、なんですかっ!?!」

変身した。

天「さあ、今度は負けないぞ。」

余裕の表情を浮かべている。

文「(これはまずいですね)。とても勝てる気が・・・」

天「どうしたの？早く始めようよ。」

文「すいません、諦めます・・・。」

天「え？・・・そっか、わかった。」

悟天は一安心して超サイヤ人を解いた。文も気を抑えたが、最初に会った時より戦闘力は桁違いだ。どうやらあれが基礎戦闘力になったということなのだろう。

文「ああ・・・又しても取材ができませんでした・・・。どうしましよ  
う・・・。」

天「えっ！取材!?!」

文「なんだと思っていたのですか?」

天「てつきり勝負かなくて。俺急いでるし。」

文「急急急!ま、結局勝負しましたけどね。ということは、取材し  
ても構いませんか?」

天「別にいいけど。」

文「うおおおおお!、ありがとうございます!それでは早速なん  
ですけど、あなたは・・・」

なんと!取材は⑨⑨分かってしまった。こんな調子で大丈夫な  
のか?悟天!

第3話へ、続く!!

### 第3話 「着いたぜ博麗神社！明かされるこの世界」

くあらすじく

謎の機械により時空の彼方へ飛ばされてしまった悟天。気がつく  
と湖の側におり、そこにいたチルノという少女にここがどこか聞こう  
とするも、何故か決闘を申し込まれ、さらには悟天の攻撃が逆効果と  
なったりしたが、その場をおさめる。

人の気が沢山感じるところへ行こうとすると、今度は射命丸文とい  
う少女に見つかり、逃げようとするも、決闘を申し込まれる。さっさ  
と逃げようとしたものの、チルノと同様のパワーアップをしてしま  
う。切り札の〈超サイヤ人〉に変身して反撃しようとしたが、その姿  
を見た文は降参する。目的は取材であるとわかった悟天はすんなり  
と受け入れてしまう。99分かかるとは知らずに。

こんな調子で大丈夫なのか？

#### 幻想天霊伝説 第3話

天「やつと・・・終わった・・・」

文「ありがとうございます！す！」

ようやく取材は終わったらしい。

天「あつ！ちよつと待って！」

危うく大事なことを忘れるところだった。

文「何でしょう？」

天「俺ここがどこかわからないんだ。これからどうしたらいいか教  
えてくれないかなあ？」

文「やっぱりそうでしたか。でしたら博麗神社に行くといいです  
よ。」

天「其処に行けば何かわかるの？」

文「はい！ここがどこなのかも、あなたがこの世界にとって何なのかも。」

天「やったー！ありがとう！んで、博麗神社ってのはどう行けばいいの？」

文「あの山の頂上へ行けばいいですよ。」

天「おお！ありがとう！それじゃあ。」

少し急ぎめに飛んでいった。

文「まあ、そつちは神社は神社でも博麗神社ではないんですけどね。ふあゝはははは。」

.....

暫く飛んでいると、目的地の山に着いた。飛んで行こうとしたが、麓から声が聞こえる。

？「待ちなさい！あなたは何者ですか！」

この高さだと会話にならないので降りた。

天「えっと、何？」

？「服装といい、普通の人間が空を飛んでいるといい、あの神社を目指しているといい、明らかに怪しいです！この山に入ることは許しません」

天「うわあ！マンガに出てきそうなキャラクターみたい！ほんとにいたんだ〜（撫で撫で）」

？「わふっ♡・・じゃありません！いいかげんにしてくd」

天「君なんていうの？（撫で撫で）」

権「くうくん♡：や、やめてください！私は犬走権といいます！」

悟天の手を払いのけ自己紹介をした。赤面している。

天「椀かく。俺は悟天！ここを通してくれないかなあ？」

椀「駄目です！こんな怪しい人を通すわけにはいきません！」

天「俺、文にここへ行けて言われたんだけど。」

椀「えっ！そうだったんですか!?!そうなら早く言ってくださいよ。」

天「信じてくれるの？」

椀「あなたの服に文さんの羽が付いてますので。」

戦闘の時に付いたのだろう

天「ありがとう！それじゃあまたね。」

勿論歩かず飛んでいった。

椀「あの感じだと、あの人文さんに勝ったんですね。．．．それにしても男の人に撫でられたのは初めてだったからビックリしたなあ。」

満更でもない椀であった。

．．．

あまりかからないうちに、神社に着いた。やっと、この世界が何なのかを知ることができるのである。

天「ふう、やっと着いた。誰か呼ぼつと。あの、誰かいませんか？」

この程度の敬語はチチに教育されている。

??? 「お？参拝者かな？」

天「あつ、誰か来たみたいだ。」

神「おお、外来人かい？私は八坂神奈子だ。」

天「俺は悟天。俺この世界に来たばかりでよくわかんないんだ。ここがどこか知りませんか？」

神「簡単に言うところここは幻想郷という所だ。そして君のようにこの世界に紛れ込んだ人間を外来人と呼んでいる。」

天「(幻想郷？父さんからも聞いたことがない所だなく。)」

神「ところで、君は人間ではないね？」

天「・・・そりゃ俺の台詞だよ。」

神「ほう、よくわかったね。私は人間で言うところの神だ。君は何者だ？」

天「俺は見ての通り普通の人間だけど。」

サイヤ人と人間のハーフと言ってもわかってくれないと思い、普通の人間と答えた。

神「何しにここへ来たんだい？」

天「文が博麗神社に行けばいいって言ってたから来たんですけど。」

神「生憎だが、ここは守矢神社だ。」

天「ええ！嘘つかれたってこと〜？」

神「そのようだな。」

ーその時ー

??「おーい！神奈子様ー！」

遠くの方から誰かが飛んで来る。

??「嘘でえす！」

天「えっ！何!？」

??「神奈子様！この人が騙されてここへ来たなんて全て嘘です！本当はこの守矢神社を潰しに来たんです！」

神「何を言ってるんだ早苗。私はこの青年はいい者だと思うけどな。」

早「そんなことはありません！神奈子さま」

神「博麗神社はあっちの方向へ行けば着くよ。それと、誰も出てこない場合は硬貨が必要だから準備しておくといい。私ができるのはここまでだ。」

天「ありがとう！それじゃあまた。」

早苗のことは気にも留めずに飛んでいった。

早「ハアツ☆」

神「どうした早苗・・・」

早「したくなっただけです！すみません、早とちりしてしまいました。」

神「いいんだ。」

神奈子は考えた。あの気は知らないものではなかったからだ。

神「あの気、霊夢や魔理沙と似ている。いや、あの2人よりも何か  
が濃かった。・・・！まさかっ！」

早「どうしました？神奈子様。」

神「明日、あの青年のところへ行くんだ！もしかしたらお前も霊夢  
や魔理沙のように強くなれるかもしれない！」

早「あの人が元の世界に帰ってしまったらどうしますか？」

神「その点は大丈夫だ。彼には帰れない理由がある。」

早「わかりました！それでは準備しますね！」

諏「あのく、私もいるんだけど。」

.....



.....  
気づいた時には辺りが暗くなってきていた。このままだとチチの夕飯が食べられなくなってしまう。

天「遠いなあ。・あ！あれかな？」

先ほどの建物と同じような建物が見えてきた。どうやらここが博麗神社のようだ。守矢神社とは違い、さらに人の気配がしない。

天「えっとこれかな？ここに硬貨を入れるとこの人が現れるって。一応呼んでみるか。あの、誰かいませんか？」

??「・・・!!!（この声は）」

天「・・・、やつば出てこないか。仕方ない。昔ピッコロさんがくれた10円っていうお金を入れてみよう。」

どうやら生前のピッコロから貰ったらしい。お守りとして持っていた。しかし、この場合は仕方ない。

天「それっ。」

チャリーン

??「お賽銭お賽銭お賽銭お賽銭！」

天「わっ！変な人来た。」

??「（なんだ、別人か…）誰が変な人よ！お賽銭なんてひっさしぶりなんだから！」

神奈子が言っていた意味がよくわかる。

天「えっと、君は？」

霊「博麗霊夢よ。博麗の巫女。声を聞いて師匠かなって思ったけど人違いみたいね。がっかりだわあ。」

天「わ、悪かったな！」

霊「あんたは？」

天「え？俺は・・・」

「孫悟天！」

この出逢いが奇跡となることは、この時はまだ、誰も知らない。

第4話へ、続く!!

## 第4話 「帰れない!? パワーアップの秘密とは」

くあらすじく

謎の機械により、幻想郷へと飛ばされてしまった悟天。其処でチルノや文、神奈子の協力によりやつとのことで博麗神社に到着した。

博麗の巫女である霊夢によると、悟天がいた世界は一晩では見つけられないらしい。悟天は自分の世界が見つかるまで同居することになったのだった。

### 幻想天霊伝説 第4話

くくくくくくく

霊「ううう、もう無理だよお。」

??「まだまだ! おめえならもつとできる!」

霊「痛いよお。もう動けない・・・。」

??「諦めるんじやねえ! もつと強くなりてえんだろ! チルノを倒すんだろつ!」

霊「グスツ、うおおおおお!」

くくくくくくく

朝が来た。

霊「んん、また師匠の夢か。孫悟天はもう起きてるかしら?」

着替えをすまして、悟天の部屋に行ってみると、

天「くかあああ、くかあああああ…」

霊「なっ!」

ぐっすり眠っている。深く息を吸い、

「起きなやー!ー!ー!ー!ー!ー!ー!」

天「へああ！」

悟天は飛び起きた。

霊「あんたねえ、今のところ居候でしょ？礼儀くらいちゃんとしてくれないかしらあ？」

天「うわあ！ごめんなきー！ーい！」

だいぶ怒っている。すぐに布団を片付けた。

霊「つたく、そういうところまで師匠そつくりなんだから。あんたほんとに何者？」

天「え？只の人間だけど。」

霊「・・・そう。」

天「(なんか母さんにそつくりだなあ。それにサイヤ人であることはまだ隠しておこう)」

霊「朝ごはん「だけ」は作るから待ってなさい。」

天「うわあ！楽しみだなあ。」

霊「なにはしゃいでんのよ。」

天「だって母さん以外の料理食べるの久しぶりなんだもん。」

霊「はいはい(なんだか子供みたい)。」

とは言いながらも、師匠との生活はこんな感じだったのが懐かしい。

―食事―

天「いったただつきまーす！」

霊「はいはい。」

天「おおっ！うんまーい！」

霊「・・・そう？」

天「母さんに負けないくらい美味しいよ！具材はパオズ山と違う筈

なのはどうやって作ってるの?」

霊「師匠の影響かしらね。作り方も小さい頃から教わってたし。」

天「へえ、霊夢の師匠ってすごいんだね。」

霊「・・・そうね。まったく何処行つたのかしら。」

天「居ないの?」

霊「2年前よ。私が15の時。巫女になってちよつとしてからずつと一緒だったのに・・・ま、自業自得なんだけどね。あんなこと言つちやつたから。」

天「なるほど、霊夢は17歳か。」

霊「あつ!というか話聞いてた?」

天「え?う、うん。」

霊「ソーンゴーテーン!!」

天「わわわかった!次からはちゃんと聞くから!」

霊「・・・ふんっ!」

いつの間にか食べ終わっていた。その瞬間、霊夢は悟天を追い出そうとした。

天「ごちそうさま へ!ちよつと待つて」

霊「あ、今日は夜になるまで戻つて来ないでね。あんたが居た世界を探すの大変みたいで、紫にも手伝ってもらわなきゃいけないぐらいだから。そこらへんぶらぶらしといて。それと皿洗いはしとくから。」

天「紫って?」

霊「幻想郷の賢者よ。あんたのことはとっくに見つけてると思うわ。」

天「へ、なんかやだね。」

霊「いいから、早く、出て行きなさいーい!」

天「わ、わかりました今すぐーい!」

慌てて飛び出した。さて、今日一日何をしようか。そんなことを考

えながら神社の階段をゆっくり降りていった。

.....

階段を降り切ると、そこにはある人物が待ち構えていた。

早「悟天さん！大人しく私にもパワーを」

チ「あたいを弟子にして！兄貴！」

天「おお、チルノ！頭は痛くないかい？」

早「あの、ちよつと」

チ「あれぐらい妖精ならへつちやらへつちやら！とにかく、あたいを兄貴の弟子にして！」

天「えつと、なんで俺？」

チ「最強のあたいを倒したのは兄貴が初めてなんだ。弟子入りするしかないでしょ！」

天「うくん。」

早「ハアツ☆」

天「(ちようど暇だしいつか。それになんでだろう。この子には可能性を感じる)」

チ「お願いだよ兄貴。」

足にしがみついてきた。普通に可愛い(子供として)。悟天はロリコンではない(筈)。

天「よおし！俺の修行は厳しいぞ。それでもいいのかなあ？」

チ「もちろん！どんな修行だって乗り越えてやるぞー！」

早「あ・・・あの・・・」

天「じよ、冗談だよ冗談(汗)」

早「え？今、私に話かけました？」

天「？そうだけど。」

早「真面目な話をしてるわけじゃないのに構ってくれた！やったー！」

天「・・・。」

早「いつもなんですよ。真面目な話以外はスルーされるんですよ。」

天「へえ。なんか、大変だね。」

チ「兄貴、まだ？」

天「あつ、そうだった。それじゃああの湖に行くか！」

早「ちよつと待ってくださいよ。」

天「それは修行の後でね。早苗も来ない？」

早「わかりました！」

チ「おーい、置いてくぞ。」

天「あつ、待ってくれー！」

ちよつと遅れながら早苗は言った。

早「・・・名前、覚えてくれていたんですね。ふふ・・・はあっ♪」

・・・

そんなわけで、チルノと悟天の修行が始まった。なお、早苗は修行がひと段落するまで傍観しておくとのことだ。

天「いいかい、気はこうやって使うんだよ。」

気弾の手本を見せていた。パワーアップしたせいか、チルノは気そのものは出せている。

チ「難しいなあ。」

天「頑張れ頑張れ。俺だってチルノと同じくらいの時は苦労したよ。」

チ「そーなんだ。よーし、頑張るぞー！」

それから3時間修行を続け、ようやくひと段落ついた。

天「そういえば早苗は気を使えるんだっけ？」

早「はい！魔理沙さんに教えてもらいました！」

天「魔理沙？」

早「お友達です。霊夢さんの親友ですよ。」

天「へー、気を使える地球人なんて珍しいなく。魔理沙って強いのか？」

早「とんでもなく強いですよ！霊夢さんに引けを取らないぐらいです！霊夢さんのお師匠さんの修行を受けた途端にもものすごく強くなったんですよ！私も修行受けたかったですね。」

天「その修行を受けたのは霊夢とその魔理沙って人だけ？」

早「その筈ですよ。幻想郷でずば抜けて強いお2人ですからね。」

天「そうなのか。それで、私にもパワーをとか言いかけてたけどどういうこと？」

早「それはですねー、これです！」

今朝の新聞を見せてきた。「文々。新聞」と書いてある。

天「あつ、昨日の。」

早「これによると、どうやらチルノちゃんだけじゃなく文さんもパワーアップしたらしいですね。それも悟天さん絡みだとか。」

天「えっ、チルノと会ってたことをなんで文が知ってるんだろう？」

勿論適当に記事にし、たまたま当たっていただけである。

早「神奈子様に指示されたのもありますが、私は確信しました！魔理沙さんの急なパワーアップ、そしてチルノちゃんと文さんのパワーアップ、これは同じものだと！」

天「そうだとしたらますますそのお師匠さんが誰か気になるなく。名前とか知らないの？」



早「実は知らないんです。魔理沙さんどころか霊夢さんですら名前を覚えてくれなかったみたいで。」

天「え、まあいいか。それで、どうやったらパワーアップするの？」

早「え？自分でパワーアップさせたのにわからないんですか？」

天「俺も少しは考えたんだよ。俺の気を奪ってうまく使っていたのかなって思ってたけど、チルノからも文からも俺の気どころかそれに近い気も感じなかった。なんでだろう？」

早「不思議ですね。試しに私を攻撃してみてください。」

天「えっ、俺女の子には攻撃したくないんだけど。」

早「そんなこと言ってお2人を吹っ飛ばしたじゃないですか。」

本人は攻撃のつもりではないらしい。

天「ち、違うよあれは。逃げるためにやっただけで。」

早「(こ)うなったら) 悟天さん、覚悟！」

天「えっ、なに!？」

早；秘術「グレイソーマタージ」

チ「なに？楽しそう！あたしも！」

チ；氷符「アイシクルフォール」

天「ちよ、おまっ」

ほぼ全部直撃した。が、

天「ふう、びっくりした。」

まるで効いていない。

早「まだまだ！」

早；秘術「グレイソーマタージ」

あえて同じ技を使った。悟天の攻撃を誘うためである。

天「このままじゃ服がボロボロになっちゃうなあ。仕方ないか。はああ！」

衝撃波を放った。早苗の攻撃はかき消され、そのまま早苗に当たった。

早「う、うわあ！」

いとも簡単に飛ばされた。が、

早「・・・はああああ!!」

天「なっ、やっぱりか！」

もはやデジャブである。

早「さあ、いきますよ！」

早；秘術「グレイソーマタージ」

天「う、ぐわっ！」

ガードはしたものの、文の時同様攻撃は効いた。

早「まだです！」

天「くっ！」

ここで初めての取っ組み合いである。一見互角のようだったが、

天「スキありっ！」

早「うわあ！」

早苗の後ろに回り、背中を押しして吹っ飛ばした。技術は悟天の方が上である。

早「・・・ふう、やっぱり強いですね。ここは降参します。」

天「でも、急になんで攻撃してきたの？」

早「それはですね、パワーアップするためです！目標達成です！」

天「あつ、そうだったね。でもそれだけの為にわざわざ」

早「それではまた会いましょう！」

天「あつ、ほんとにそれだけ？」

スルーされ返された。

チ「兄貴！続きしようよ！」

天「あ、うん。そうだね。」

それから夕方までずっと修行した。もちろん悟天には殆ど効果は無かったが、チルノには有意義な時間であった。

チ「それじゃあまた明日ね！兄貴！」

天「うん、気をつけてね。」

まだ夜ではないどころか霊夢の気が落ち着いていない。もう少し幻想郷を見て回ることにした。

・・・

見て回るほどもなく、一つの建物が見えてきた。

天「ん？なんだあの真つ赤な建物。」

洋館のようだが真つ赤だ。門の前に人が倒れている。門番だろうか。頭にナイフが刺さった状態で横倒しになっている。

天「・・・ムチャしやがって。」

そう吐き捨て館の中へ入っていった。

・・・

ドアの前まで来た。ノックを試みたが、なんの反応もない。ドアは勝手に開いた。

??? 「これはこれは、また、わざわざこの私に殺されに来たようね。」

奥の方から少女が近づいてくる。

天「えっと、君は？」

レ「私はレミリア・スカーレット。この館の主にして誇り高き吸血鬼。」

天「俺は悟天。」

レ「あら？あなた、自分の立場をわかっているのかしら？」

天「立場？」

レ「あなたは今から私のデイナーになるのよ。」

天「よくわかんないな。」

レ「ああ！もういい！覚悟しなさいっ！」

レ；紅符「スカーレットマイスタ」

勿論効いていない。なんなんだあ今のはあ？と言わんばかりである。辺りは煙に包まれた。

天「ほんとここの世界の人達って戦うの好きだなあ。」

しかしレミリアは煙の中から悟天目掛けて一直線に飛んでいった！

レ「かかったなアホが！」  
天「！」

ビックリしたせいで加減を間違えてしまい、払った手に力が入って  
しまった。

レ「え？」

レミリアは飛んでいった。物凄い音が聞こえたので心配になった。

天「大丈夫？」

ーと、次の瞬間！

レ「う．．がああああ!!」

天「ええ！払っただけで！」

確かにパワーアップした。だが、

レ「がはっ。」

その場に倒れ伏せてしまった。

天「一体、何が。ま、このままここにいたらまずいかもしいか  
ら神社に戻ろつと。」

逃げた。時間もちょうどよかったので戻ることにした。門番は相  
変わらず倒れている。

．．．．．

.....  
博麗神社に戻ってみると、待っていたかのように霊夢は立っていた。険しい表情をしている。

天「もしかして、遅かった?」

霊「いや、ちょうどいいわ。」

天「で、どう?俺がいた世界ってのは見つかった?」

霊「紫が見つけたわ。だけどね、私たちでいう外の世界じゃないのよ。だからあんたは帰れないわ。」

天「・・・HA?」

霊「逆に不思議よ。完全な異世界に来た上に、あんたの世界はあんたが居た時から既に100年経っているのよ。」

天「ちよちよちよつと待つて。100年?じゃあ戻れたとしても俺がいた頃から100年後なの?」

霊「そうよ。それに離れすぎてて戻せないのよね。」

天「(パリーン)」

心の中の何かが割れた。

霊「それと、一つ訊きたいことがあるわ。」

天「え、なに?」

絶望に打ちひしがれている悟天に訊いた。

霊「あんた、サイヤ人でしょ。」

天「!!!」

急に悟天の顔が険しくなった。なんの前触れも無く「サイヤ人」という言葉が出てきたからだ。

天「どうしてそれを。」

霊「師匠もサイヤ人だったのよ。それにあなたは師匠が私と魔理沙にやったことと同じことをした。パワーアップよ。」

天「あのパワーアップって前例があったのか？」

霊「そう。気を与えたわけでも修行の成果でもないパワーアップ。師匠と同じであんたは——」

「サイヤパワーを宿させたのよ」

なんと！パワーアップの原因はサイヤパワーであった！「サイヤパワーを宿させる」とは一体……。

第5話へ、続く!!

## 第5話 「命懸けのおつかい！2人の刃が悟天を襲う」

くあらすじく

幻想郷にやってきた悟天は博麗神社で一夜を過ごし、その神社の巫女博麗霊夢は朝食までご馳走してくれた。しかし、悟天が元いた世界を特定するために一旦追い出されてしまう。

出てみるとそこにはチルノと早苗がおり、チルノは弟子入りを志願してきた。(子供として)可愛かったのでOKする。一方早苗はパワーアップ目的でやってきて、なんとかノルマを達成する。

時間も余ったので、近くにあった洋館に入ってみると、いきなり主人から攻撃されるもその場をおさめる。だが、今までとは違い苦しんでいるように見えた。

博麗神社に戻ってみると驚きの事実を告げられる。それは、サイヤ人であることを突き詰められたこと、元の世界へ帰れないこと、そして、

今までのパワーアップの正体がサイヤパワーであったことだ！

### 幻想天霊伝説 第5話

天「なっ、サイヤパワーだっ!?」

霊「そ。あんたは幻想郷のバランスを壊してしまったのよ。」

まるで世界を終わりにした悪魔みたいな言い方である。

天「で、でも、そんな簡単に宿るものなの？みんな普通の人間だと思っけど。あつ、人間じゃないのもいたかな？」

霊「そこは私も不思議よ。私だってサイヤパワーを宿したのは師匠と修行の生活を始めてから2年経ってからだもの。魔理沙は少し早かったけど。」

天「2年も掛かるなら俺は関係ないね！」

霊「とぼけんじやないわよ。あんた、文たちに何をしたの？」



天「・・・、気で吹っ飛ばしました。」

霊「・・・それだけ？」

天「うん。」

若干1人は違うがまあいいだろう。

霊「あんた、能力とか持ってる？」

天「能力？気が違うならわかんないな。」

霊「そう。また調べなきや駄目みたいね。」

天「あのく、俺はこれからどうすれば？」

霊「幻想郷に永住するしかないわよ。」

天「ま、そうなるよね。どうしよつかなく。」

途方にくれていると、

霊「よ、よかったら、その、」

天「え？」

霊「どうしてもって言うなら、博麗神社でも、いい、のよ？」

天「早苗に頼むから大丈夫だけど。」

霊「あ、あそこは男が泊まるの禁止なのよ！」

天「ええ！そうなの？」

嘘でえす！

霊「そ、そうよ。あんたはここに泊まるしかないのよ。孫悟天。」

天「そうかく。じゃ、お世話になりまっす。」

そう、悟天は軽いのである。

霊「ちよ、少しは感謝しなさいよ！」

天「してるって。」

霊「はあ、なんで了解したのかしら。」

こうして2人の生活は始まったのであった。まさか何十年も共に暮らすとは知らずに。

~~~~~

師匠「今度は瞬間移動の修行だ。移動自体も大事だけど、物も一緒に移動できるようにするのも大事だぞ。」

霊「物って道具とか？」

師匠「そうだ。それができれば守れるものが増えるぞ。オラは一回それで地球を守ったことがあるしな。」

霊「へー、師匠ってすごいなあ。」

師匠「どうだ？やってみつか？」

霊「うん！頑張る！」

師匠「よっしゃ！そんなじゃまず神社の門から玄関までやってみろ。やり方は一通り教えたからできるよな？」

霊「うん、行くよ。」

師匠「・・・。」

霊「ん！（ヒュン）」

師匠「お！できーて・・・って霊夢!？」

霊「やった！できたよ師匠！」

師匠「いやいや霊夢！服が付いてきてねえぞお。」

霊「え？・・・きやあ！師匠見ないで。」

師匠「そんなこと言ったって。一緒に風呂入ってるじゃねえか。」

霊「外は嫌なの！」

両手を股に当てて、一目散に服の元へ走って行った。

師匠「ハハハ、可愛いもんだな♪」

ー頑張れよ、霊夢ー

~~~~~

目が覚めた。またしても昔の夢である。

霊「ん・・・またか・・・」

博麗の巫女は日が昇り次第起床しなければならない。代々から継がれる掟だ。

霊「はあ・・・師匠は今何処にいるのかしら。異変が始まるかもしれないのに。」

異変の心配をする理由は悟天の存在である。当の本人はまだ寝ている。

天「くかあああ。」

霊「なっ、また寝てる。すうう・・・」

「起きなさいーい!!」

天「へあああ!」

霊「いつまで寝てんのよ!」

天「え?まだ6時くらいだよ。」

この部屋には時計があるので、時間は容易にわかる。博麗神社にも時計ぐらいある。

霊「はあ?知らないわよ。ここに住むなら言うこと聞きなさい!」

天「そんなあゝ。」

霊「あ、日中はあんたにも働いてもらうわよ。主に家事ね。」

天「おっ、それなら俺得意な方だよ。」

霊「あら、頼もしいじゃないの孫悟天。」

天「そろそろ悟天って呼んでくれても。」

霊「なんでよ。」

天「なんでもありません・・・。」

それから朝食を済ませ、洗濯物一式は悟天がやった。不思議なことに神社に自分の服が揃ってある。

天「なんでだろう？まあいいや。」

師「服はサービスしといてやったぞ。おめえも頑張れよ。悟天。」

・・・

一式終わらせた後、悟天は縁側で寝てしまった。昨日の疲れと短い睡眠時間のせいである。

霊「孫悟天、今からお使い行ってきた。って、あれ?」

天「すううう。」

叩き起こそうとしたが、その寝顔を見てしまい、できなかった。師匠の寝顔にそっくりなのである。10年以上も共に過ごした師匠の寝顔に。

霊「・・・しようがないわね。」

そのまま寝かせることにした。

しかし、優しかったのもここまで。

天「ふあゝ、よく寝た。さて、何をしようk」

霊「こらあ！なに寝てんのよ!」

天「え?」

霊「ほら早く！お使い行ってきなさい!」

天「でも、今まで寝てたってことは寝かしてくれたんじゃないの?」

霊「う、うるさいっ！早く行きなさい！」

天「なんだく可愛いところあるじゃん。」

霊；霊符「夢想封印」

天「うわあああ!!今すぐ行つてきまーす！」

一目散に逃げていった。不思議なことに買う物が書いてある紙とお金はポケットに入っていた。お金は見たこともない物であった。

・・・

人里に着いた。人々は悟天に注目している。

人A「あれが噂の外来人？イケメンだわあ。」

人B「見たこともない服を着ているなあ。」

人C「何処に住んでるんだろう。」

天「わあ、みんな俺のこと知ってるんだな。まあいいけど。」

ここまで広まった理由は勿論文々。新聞の影響である。  
まずは魚を買いに行った。

天「これ1匹お願い。」

店員「まいど。」

次は揚げ物だ。

天「これお願い。」

店員「は〜い。」

みんな外来人に対してフレンドリーである。残金を見てみると余裕がありそうだったので、近くで何か食べることにした。

天「ん？あれは団子屋かな？」

甘い香りがした。屋台のようで、1人の少女が団子売っている。うさ耳の飾りのような物を頭に着けている。

少女「おいでませ〜。」

天「おっ、やってるやってる。」

少女「あなたが噂の外来人さんですね？」

天「うん、それじゃあ団子2本ちょうだい。」

少女「かしこまり〜。」

天「うん、まだお金あるな。」

少女「あとは何を買うんですか？」

天「野菜とかだよ。人参って書いてるし。」

少女「それなんですけど、うちの子が全部食べちゃったんですよ。ごめんなさい〜。」

見てみると少女の後ろに大きなペットがいる。夢中になって人参を食べている。

天「そっかく、じゃあいったん帰ろつと。それじゃあまたね。」

少女「ありがとうございます〜。」

.....

買い物袋を抱えて博麗神社に戻った。

霊「あら、早いじゃない。てつきりお坊ちゃんには到底できない事かと思ってたけど。」

天「俺お坊ちゃんじゃないんだけど。」

霊「まいいわ。どれどれ・野菜が無いじゃないの。」

天「それが売り切れでさ。夕方もう一回行くよ。」

霊「は？あそこの野菜が無くなる訳ないでしょ。しかも余分にお金が減ってるし。」

天「あ、それはね、えっと、」

袋から団子を出した。

天「はい。2人で食べようよ。」

霊「な、なんで私があんと団子食べなきゃいけないのよ!」

天「いいじゃん別に。」

霊「しよ、しようがないわね。どうしても言うなら一緒に食べてあげてもいいわ。」

天「(わかりやすいな)」

一緒に食べたものの、あまり会話は無く、さっさと終わってしまった。しかし霊夢にとっては、忘れられない記憶となり、霊夢の中での何が変わった。

そして、夕方になった。

天「夕方だしもう一回見てくるよ。」

霊「早く帰ってきなさいよ。ご飯作れないからね。」

天「はくい。」

出掛けて行った。

霊「.....」

.....

人里の八百屋に行ってみると、野菜は揃えてあった。その店の前に、2人の銀髪の少女が何やらもめている。

妖夢「ちよつと、なんでこんなにある人参を全部買う必要があるんですか!」

咲夜「仕方ないでしょう。お嬢様が昨日何者かに襲われて寝込んで

いるんですから。」

妖「そんなの知りませんよ。どうせレミリアさんが喧嘩売って負けたんじゃないですか？」

咲「そんな訳ありません。お嬢様は誇り高き吸血鬼。そんな物騒なやからに喧嘩すら売るはずがありません。」

妖「へへ、まだレミリアさんがカリスマだと思ってるんですか？」

咲「なんですすつてえ？」

喧嘩しているようだ。一向に買う気配はない。

天「え？寝込んでるって？」

独り言である。

妖「知らないんですか？レミリアさんなんて他の場所ではかりちゅまとかおぜうさまとか言われてるんですよ。」

咲「誰かしらそんな無礼なことを言うのは。」

妖「あなたが絶対に攻撃できない相手ですよ。と言うか攻撃が届きません。画面の向こうなので。」

メタい。

咲「何言ってるかさっぱりわからないわ。」

妖「にしても、こんなの有り得ません！」

咲「急に何よ。」

妖「これだけレミリアさんの話をしているのに咲夜さんが鼻血を出さないだなんて！」

咲「何処の変態よ！」

妖「誰でしょうね。」

咲「あら？そんなこと言っているのいいのかしら。」

妖「なんです？」



咲「バラしますよ。」

妖「何かありましたっけ？」

咲「あなたがむつつりだっっていうこと（小声）。」

妖「な！何故それを！」

咲「当然ですよ。」

恐いぐらいの笑顔だ。妖夢はかなり焦っている。悟天は待つのをやめた。人参を26本のうち3本取って行った。

天「おっちゃん、これお願い。」

店員「あいよ！」

天「ありがとうございます。」

速やかに帰ろうとした。が、

咲「ちよつと待ちなさい。」

天「え？俺？」

咲「なに抜け駆けして勝手に人参買って行ってるんですか？」

天「俺ちゃんと払ったよ。」

妖「ずつと見てましたね。気ですぐわかりましたよ。」

天「気を知ってるなんて珍しいなあ。」

妖「当たり前です。皆霊夢さんに教えてもらったので知らない人は普通の人間です。」

天「なにしてんの霊夢・・・。」

咲「こうなったら決闘ですね。」

天「みんな戦い好きだなあ。」

妖「ロイヤルでいきましょう。」

天「(やった、ロイヤルだ！2対1とかめんどくさいし)おっちゃん、これ持ってて。」

咲「いざ、尋常にー」

妖「勝負！」

妖夢は悟天に斬りかかった！しかし、  
カンツ！  
指2本で受け止めた。

妖「なっ！」

天「はいっ。」

そのまま妖夢ごと横に投げた。

咲「情けないですね。これはどうですか？」

咲；幻世「ザ・ワールド」

咲「あなたは何も理解できないまま、死ぬ。」

時を止めた。悟天は止まった。かのように見えた。

天「ねえ、何してんの？」

咲「な、なにっ！」

止まった時の中を動いている。いや、咲夜だけでなく、悟天の時間  
も止まっていない。

天「みんな止まってるけど、もしかして時間止めちゃったの？」

咲「馬鹿な、そんな筈は！霊夢にも効いたのに・・・はっ！」

ここで初めて、霊夢があの時手加減してくれたと気付いた。

咲「(このまま私1人では不利。仕方ない。)解除！」

妖夢が動けるようになった。そして、2人揃って悟天を挟み撃ちに  
しようとした。

咲&妖「斬る！」

天「そんなものっ！だああああ！」

気で弾き返した！2人共遠くへ吹っ飛んでいく。

咲「ぐっ！」

妖「がはっ！」

天「気絶させればパワーアップしても今日はこの辺で終われるだろう。」

しかし、誤算であった。2人共タフなものと、負けず嫌いだということだ。揃って立ち上がり、

咲「こんなところで、」

妖「咲夜さん以外に、」

咲&妖「負けるわけには、いかないんだああああ！！」

2人の気が逆った！戦闘力は一気に悟天ぐらいまで追いついた。

天「し、しまったー！」

同時に2人もパワーアップさせてしまい、尚且つ片方は時を止める能力を持っている。

どうなる悟天！！

第6話へ・・・続く！！

## 第6話 「怪しい研究所? 自称幻想郷NO. 2 魔理沙」

くあらずじく

これまで相手をして来た少女達のパワーアップの原因はなんとサイヤパワーによるものであった! しかし、まだどうやってサイヤパワーだけでパワーアップしたかは謎である。

永住は確定してしまい、守矢神社に頼もうとした悟天であったが、霊夢がここで住めとのことなので博麗神社に住むことになった。

朝早くに起こされ、雑用を強いられる中、買い物頼まれる。

一通り買って、お土産として団子を霊夢にあげたあと、買い損ねたキャラットを買いに再び人里へ。そこには喧嘩をしている2人の銀髪の少女が居た。無視して買うと、まだキャラットは残っているのに決闘を申し込まれてしまった。

一気にケリをつけようとしたが、裏目に出てしまい大ピンチ! どうなる悟天!?

幻想天霊伝説 第6話

咲「さて、どうやってお料理してあげようかしら?」

妖「何言ってるんですか? この男を斬るのは私です。そしてあなたもここで斬ります。」

天「なんでそこまで殺したいの?」

妖「いいえ、斬るだけです!」

途端に飛び出した。今度ばかりは指2本だとまずい。

天「くっ!」

悟天も後方へ飛び出した。妖夢は追いながら何度も刀を振った。それを全て避けきっている。

妖「中々やりますね、外来人さん。でも、もう1人お忘れではないですか？」

後方の先には咲夜が待ち構えていた。咄嗟に悟天は飛び上がった！そして、

天；「かめはめ波」

天「かーめーはーめー…」

妖「？いったい何を？」

天「波ああああああ!!」

妖「なっ!!」

妖夢は驚いてしまい、直撃した。しかし一方、

咲；幻世「ザ・ワールド」

咲「今度は、止まったようね。」

動きを止められてしまった！

咲「さて、さっきの分をたつぷりと仕込んであげるわ。」

悟天の周りに大量のナイフを仕掛けた。そして、

咲「終わりよ。解除！」

周りのナイフは一斉に悟天の方へ向かって行った！

天「なっ！」

それでも高速移動でことごとく避けたが、

天「うっ！」

一本のナイフが右太ももに刺さった！その瞬間、悟天は危機を感じ  
気で全てのナイフを吹き飛ばした。

天「だああああ！」

悟天の右足からは鮮血が滴っている。

天「・・・くそお。」

咲「よく一本ですみましたね。」

気味の悪い笑顔で言った。気がつけば後ろに妖夢も居た。

天「はは、まいったな。」

咲「終わりです。」

妖「覚悟！」

その時！

霊「ちよつとあんた達、何してんの？」

咲「霊夢！」

妖「霊夢さん！」

急に2人は気を沈めた。何しろ霊夢が不機嫌そうだからだ。

霊「そいつに何かあったら私が困るんだけど。」

咲「まさか、この外来人は永住することになったの？」

霊「そういうこと。ここで引き下がってもらえるかしら？」

妖「・・・仕方ありませんね。」

咲「霊夢が言うなら引き下がります。では。」

2人とも先程とは違い素直に引き下がった。

霊「ぎ、帰るわよ。」

天「あ、ありがとう。ちよつと待ってて。」

八百屋の方へ飛んでいき、人参を受け取った。気がつけば残りの人参はあの2人が買っていったらしく、一本も残っていない。なんだよ。結局分けあえるじゃないか。

天「お待たせ。機嫌悪そうだけどどうしたの？」

霊「早苗が勝負を申し込んで来たのよ。」

「今の私なら霊夢さんにだって勝てます！」

とか言ってたわ。正直あのパワーアップには驚いたけど。」

天「(ギクツ)」

霊「ああいう面倒ごととは嫌いなよ。もつと腕を上げてから来なさいっての。」

愚痴を聞いているうちに神社に着いた。玄関あたりに来た時、

霊「そこで待ってて。」

と言って、人参の袋を持って、入っていった。暫くしてから包帯を持ってきた。

天「あつ、大丈夫だよこのくらい。」

霊「バカッ！大丈夫なもんですか！」

そう言って無理やり包帯をあてた。

天「痛い痛い！」

霊「にしても、なんで本気で戦わなかったのよ。本気だったらこんな怪我しなかったでしょうに。」

天「それは流石にかわいそうかなって。」

霊「はあ。とんだお人好しね。」

そんなことを言いながらもちやんと包帯を巻いている。

天「・・・、ありがとう。」

霊「感謝しなさい・・・その・・・、悟天。」

どうしたわけか赤面している。

天「えっ？今」

霊「さっ！ご飯の支度しよつと。」

天「・・・。ははっ。」

また、2人の距離は縮まった。 のか？

くくくくくくく

師「おお、随分と腕を上げたな霊夢。」

霊「えへへっ、やったあ！」

師「それに随分女らしくなってきたなあ。パンにも似てるかもな。」

霊「ん？パン？」

師「オラの孫さ。霊夢は今いくつだっけ？」

霊「12よ。」

師「そっか（確かあの時のパンもそれぐらいだったかな）。」

??? 「あの・・・」

師「ん？誰だ？」

霊「あなたは？」

??? 「魔法使いをやっつて、その、名前はー」

くくくくくくく



朝だ。

霊「・・・もう朝か。」

そして新しい1日が始まる。

・・・

天「霊夢く、やっぱり朝早いよお。」

霊「うるさいわね。いい加減慣れなさい。」

天「まだ2日目なんだけど。」

霊「は？」

天「いえ、なんでもありません。」

こんな話をしながら朝食を食べている。

丁度食べ終わる頃、

チ「おーい、兄貴いく。」

天「ん、早いな。学校とか行ってないの？」

チ「学校？何それ？」

天「勉強する所だけど。」

チ「それって寺小屋のことじゃないの？」

天「(昔のスクールみたいなどころか)あ、そうだった。今日は行かないの？」

チ「今日は休みだよ！だから修行しよ！」

霊「へく、あんたチルノに稽古つけてたんだ。」

天「まあね。」

チ「早く行こうよ兄貴いく。」

天「ちよつと待ってね。」

少し支度をしてから2人で修行しに出かけた。

霊「昼には帰って来なさいよー！」

天「はいはい。」

.....

修行を終え、神社に帰って来た。

天「ふう、いい汗かいた。あつ！洗濯物やんなきや！」

霊「それはやらなくていいわ。昨日のうちに殆ど片付いたし。それより、あんたにオススメの場所があるんだけど。」

天「えっ！なにに？」

霊夢は幻想郷の地図を出した。

霊「ここら辺に研究所みたいなところがあるから。ここに行ったらあんたの好きなものがあるだろうし。」

天「好きなものって？」

霊「修行するための装置とか。」

天「あ、そうなんだ。」

ここ数年、まともに修行していない。そのせいかあまり乗り気ではなかった。

天「それじゃご飯食べた後に行くよ。」

霊「え？作ってないけど。」

天「いいいっ！」

霊「嘘よバカ。」

クスツと笑った。

天「ははっ、良かった。」

そして食べた後、すぐに出発した。

.....

地図に書いてある通りに飛んで行くと、それらしい研究所が見えてきた。そこへ降りた。

天「ここかな。」

すると、研究所から人が現れた。いや、正確に言う人ではないが。

??? 「やあ、君が悟天君だね？」

天「えっ、どうして知ってるの？」

??? 「そりゃ情報が回ってきたからさ。まあ入ってよ。」

天「君は？」

にとり「河城にとり。河童さ！」

こうして研究所の中へ入って行った。そこには異様な光景が広がっていた。

天「なに、これ…？」

に「外の世界のヒーローってやつさ。外人なのに知らないのかい？」

天「知らないなあ。それに俺は普通の外来人とは違うみたいだし。」

に「そうなんだ。ま、このヒーローってやつも現実にはいないわけだけど。そこで、どうにか再現できないか研究してるわけだよ。」

天「俺の知ってるヒーローとはだいぶ違うなあ。」

そんなことより研究の器具よりグッズらしき物の方が目立つ。ハマっているのだろうか。

天「ああ俺もう帰らなきゃ。」

に「それと！」

天「？」

に「これを応用して修行するための装置も作ってるんだよ。まだ完全にはできてないけど。」

天「それってどんな？」

に「これさっ！」

そこには何かの扉があった。

に「ここに入ればコンピュータと一体化して、データにしかない相手と戦うことができるんだ。」

勿論この中で死んだら現実でも死んだことになるけど。ま、死にそうになったらその敵を外にいる私が消せばいいだけだから安心して。」

安心できない。にとりだからではなく、その装置そのものが扉が開いた。

??? 「ふう、終わったぜ。」

天「誰か出てきた。」

に「あ、おかえりく、魔理沙。」

魔理沙「この修行はほんとにいいな！いつもありがとうなにとり！」

に「お安い御用だよ。」

魔「ん？お前もしかして。」

天「やあ、俺は悟天。」

魔「うおおおおお！会いたかったぜ！」

天「え？・・・そっか、新聞で。」

魔「私は霧雨魔理沙！お前とずっと戦いたかったんだぜ！というわ

けだ。勝負しろ！」

天「ほんとみんな戦い好きだなあ。」

今さらだがサイヤ人の台詞ではない。

魔「場所を変えるから、じゃあなにとり！」

に「じゃあねく。」

天「ま、いつか。」

2人は近くの平地まで移動した。いや、3人である。

.....

に「こんな機会を見逃すもんですか！悟天君のデータを取ってあの装置に組み込まないと。」

本人は結構真剣である。

魔「見せてやるぜ。幻想郷No.2の力を！」

天「あ、霊夢の次なんだね。」

魔「うるさーい！悟天、後悔することになるぜ！」

天「う、うん。」

正直本気でやるつもりはない。

しかし！

魔「はあああ！」

天「!!」

魔「はあああああ！」

気が迸っている。髪が光り始めた。

天「！まさか！いや、でも！」

魔「はああああああああああああああ!!」

魔理沙の戦闘力は一気に上がり、目は先ほどより光り、髪も光っていた。髪型はそれほど変わっていない。髪型や目の色以外は超サイヤ人そのものだった。

魔「驚いたか!私が、超魔理沙だっ!」

どこかで見ただヤ顔である。

天「もしかして、本気でやらなきゃダメ?」

果たして、幻想郷No.2の実力とは如何なるものなのか!?  
そして、右足を負傷している状態で大丈夫なのだろうか?

第7話へ、続く!!

## 第7話「幻想郷はやっぱりすごい！裏で動き始めた謎の影」

くあらすじく

咲夜と妖夢がパワーアップしてしまい、ピンチに陥ってしまった悟天。しかし、そこへ突如霊夢が現れその場を収めたおかげで助かった。

しかし、咲夜の攻撃により足を負傷してしまった。だが、霊夢が看病してくれたのだ。

次の日、霊夢の勧めで河童の河城にとりの研究所へ行った。そこには修行するための装置があったものの、研究所の雰囲気から悪寒を感じた悟天は帰ろうとする。

とその時、修行装置から1人の少女が現れた。自称幻想郷N.O.2を名乗る霧雨魔理沙だ。決闘を申し込まれ、あっさり承諾し、場所を変えすぐに始めた。

様子を見てみると、なななんと！

魔理沙はまるで超サイヤ人のようなパワーアップをしてきたのであった！

本気を出さなくてはいけないのではないか？悟天よ！

### 幻想天霊伝説 第7話

魔「どうだ悟天！驚いたか！」

天「な、なにが、どうなって・・・。」

魔「？ その様子だと初めて見た顔じゃないな。どこで見たんだ？」

天「どこもなにも、俺の世界だけだと思ってたし、それに俺も・・・。」

魔「私が初めて見たときは霊夢だったな。霊夢も師匠から教わったらしいし。」

天「超サイヤ人をかい？」

魔 「超サイヤ人？なんだそれ？私はただの人間だぜ。」

天 「（謎が深まるばかりだ）」

魔 「もうこの話は終わりだ。こっちから行くぞっ！」

一目散に飛んできた！避けようとするも、

天 「いっ！」

足の傷が響いてしまい避けられなかった。

魔 「たあっ！」

天 「うわっ！」

攻撃により飛ばされたと思ったのもつかの間、とんでもないスピードで後ろに周り、上へ蹴り上げた！

魔 「はっ！」

天 「ぐわっ！」

そしてまた物凄いスピードで先まわりし、上から下へ叩き飛ばした

！

魔 「そーれっ！」

天 「があっ！」

そのまま地面へ叩きつけられた！そして、

魔；魔符 「スターダストレヴアリエ」

魔 「くらえっ！」

さらに追撃をキメた！



静かになり、倒れた悟天のところへ立った。

魔「ハツハツハツハ！この程度で手も足も出ないとはな！」

天「くっ……ははは。」

魔「ん？遂にいかれたか？」

天「いや、やつぱりすげえな、って思ってた。こんなに強い地球人が居たなんて。」

魔「褒め言葉として受け取っておくぜ。それで？降参か？」

天「まさかまさか。これだから本番だろ？」

魔「ふん、そんな強がりなんていらなげ。」

天「さあ？どうかな？」

ゆつくりと立ち上がり、一気に気を高めた。悟天の戦闘力はどんどん上がっていく。

魔「この感じ、師匠に似ている！」

天「だあああああああ!!!」

悟天の髪は金髪になり、一気に戦闘力を上げた！

天「そういえば言っでなかったね。俺はなれるんだよ。超サイヤ人  
に！」

魔「そ、そう来なくちゃ面白くない。」

天「さあ……」

「第2ラウンド始めよう!!」

.....

に「おっ！あれが悟天君の本気だね！しっかりデータを取らなくっちゃー！」

どうやら悟天が超サイヤ人になったことに喜んだのは魔理沙だけではないらしい。

に「戦闘力を計測しないと！・・・って、あっ」

もう始まっていた。始まる瞬間を見逃したのである。

に「あー！もう！戦闘力だけでもいいや！いくら悟天君が強くても魔理沙が簡単にやられるわけないし。」

と言ってる間も両者は激しく闘っていた。そして、戦闘力の計測が終わり、数値を見てみる。

に「!!? う、嘘だろ。」

数値を見たにとりは驚いた！あの魔理沙よりも悟天は上だったのだ！

に「まずい！魔理沙が殺されちゃう！・・・いや、ないかもしれないけど。まあとりあえず！」

魔理沙の方へ飛んで行った。にとりも誰かから舞空術を教わったらしい。

??? 「やっと見つけたわ。魔理沙♡」

どうやら闘っている悟天と魔理沙に向かっていている者にとりだけではないようだ。

.....

激しい闘いが続き、両者は止まって睨み合っていた。もう夕暮れで

ある。

天「どうした魔理沙。体力が落ちてるよ。」

魔「はあ、はあ、そんな、負け惜しみは、いらないぜ。」

天「負け惜しみ?」

魔「さつきから、お前の攻撃は、全然、効いてないぜ。お前も疲れただろ?」

天「・・・。」

実は相手が女の子ということもあり、手加減をしている。そのせいで、なかなか決着をつけられないでいる。とは言え魔理沙は痩せ我慢をしている。どうであれ手加減していると魔理沙は倒せないのだ。

魔「どっちにしろ、これで終わりだぜ!」

至近距離でありながら魔理沙は構えた。

魔「はああああ!」

天「なっ!気がどんどん上がってる!ならこっちも!」

魔;魔砲「ファイナルスパーク」

天;「かめはめ波」

魔「ファイナルスパーク!!」

天「波ああああ!!」

2つのエネルギーはとてつもない勢いでぶつかった!やや魔理沙がおしている。

天「なっ!おされてる?」

魔「いつけええええ!」

天「くっ、負けて、たまるかあああ！」

そんな中、にとりが到着した。

に「魔理沙！すぐに降参して！」

魔「は!?!なんで!?!今勝ってるだろ？」

に「説明は後！とにかく今は降s」

??? 「魔――理――沙――――ツ!!」

奇声にも似た声で何者かが飛んできた！

魔「げっ！アリス！」

ア「もう逃がさないわ――――！」

魔「すまん悟天！勝負はまた今度な！」

天「えっ？」

魔理沙が急に攻撃をやめたためにかめはめ波はそのまま直進し、魔理沙を追いかけるアリスに直撃した。

ア「あっはあああああん！」

天「あっ！」

アリスは倒れた。

に「大丈夫かな？」

天「ごめんっ！君大丈夫？」

大丈夫なわけがない。と思っていたが、

ア「ほおおおああああ!!」

天「えっ？」



に「・・・やっぱりそうなんだ。」

天「え?」

に「新聞見たときからいいやつだと思って思ったんだよ。信じてよかった!」

天「(助けに来たあたり信用してないんじゃない?)」

に「それにね!みんなのパワーアップの秘密がわかったよ!」

天「なんだって!」

に「どうやら、悟天君のサイヤパワーが対象者の中に入り込んで、サイヤパワーを維持しつつ対象者の色に染まるみたいだね。」

天「・・・つまり?」

に「本人がサイヤ人みたいになるってことだよ。」

天「そうだったのか!でもなんで俺じゃないとパワーアップできないの?」

に「本物のサイヤ人じゃないと移すことができないみたい。」

天「? どうしてにとりはサイヤ人を知ってるの?」

に「魔理沙からいろいろ聞いているからね。霊夢と魔理沙のお師匠さんはサイヤ人だったらいいし。だから修行を受けたあの2人だけがとんでもなく強かったんだろうね。」

天「俺より先にサイヤ人が来てたのか。あつ、そういえば魔理沙の姿が変わったあのパワーアップはなんなの?」

に「あれも君と殆ど同じさ。サイヤパワーを宿した者はサイヤ人と形質が同じになるんだよ。だから、あれは超サイヤ人と同じパワーアップをしてるのさ。」

天「超サイヤ人じゃないのに超サイヤ人と同じパワーアップか。じゃあ、なんて言うの?」

に「うゝん、超魔理沙でいいんじゃない?」

天「(にとりがつけた名前だったんだ...)」

に「もう暗くなってきたね。悟天君も帰りなよ。私は今日のデータをあの装置に組み込むから帰るよ。」

天「そっか、それじゃあ。」

2人はそれぞれ帰るべき場所へ帰っていった。

.....

帰ってみると、ボロボロな悟天の姿を見た霊夢はかんかんになって怒っていた。

霊「ちよつとなによその格好！」

天「魔理沙と手合わせして、それで。」

霊「誰が縫わなきゃいけないと思ってるのよ！」

天「え？自分で縫うけど。」

霊「口答えしない！貸しなさい！」

天「・・・自分でやるのに。」

こんな感じで、この日も何事もなく終わったのであった。

~~~~~

師「おお！魔理沙、おめえすげえな！」

魔「そうだろ？私は最強の魔法使いを目指してるからな！」

霊「・・・。」

師「でもよお、弾幕ばかりじゃなくてちゃんと組み手の修行もしなきゃダメだぞ。」

魔「強けりやいいんだよ！弾幕はパワーだぜ！」

師「霊夢も教えてやってくれよお。」

霊「私休憩する。」

師「？ どうした霊夢？」

霊「・・・なんでもない。」

師「・・・。」

魔「師匠！弾幕撃ってくれよ！」

師「お、おう。」

~~~~~

霊「・・・朝ね。」

それから悟天は、チルノの稽古をつけながら、幻想郷のいろんなところへ飛びまわっていた。もう一度紅魔館へ行ったり、迷いの竹林へ行ったり、地霊殿へ行ったり、たまににとりの研究所へ行ったり、手合わせしたりしていき、いろんな者と知り合いになった。

その中で、竹林で出会った藤原妹紅もサイヤパワーを手に入れたりしたのであった。

そして、寝込んでいたレミアは元気になり、悟天に勝負を申し込んでもいた。結果は予想通りではあるが…。

にとりの装置はそれから忙しくなった。悟天や魔理沙から装置のことを聞いたチルノとアリスを除くサイヤパワーを手に入れた少女達が、頻繁に使うようになったのである。そうしているうちに、少女達の間でも交流が深まり、仲間意識が芽生えていたのであった。

時の流れというのは早いもので、半年という月日はあっという間に流れていた。

第1章? 伝説の始まり?

〈完〉

? 「ドクター、あれの完成はいつになりますか?」

ドクター? 「あと半年といったところか。」

? 「にしてもドクターはすごいですね! あれの細胞の中にさらにバーダックとトランクスの細胞まで混ぜてしまうなんて。」

ドクター? 「元のデータがあったからな。これくらい容易い。」

? 「にしてもあの転送機は孫悟天を連れてきてしまったようですが大丈夫なんでしょうか。」

ドクター? 「なに、心配はいらん。たかが孫悟天だ。それに、もうじきか。4つの転送機が到着する筈だ。」

? 「あんなのがへこの幻想郷」に来て大丈夫なのでしょうか?」

ドクター? 「問題ない。孫悟天が来る以前の幻想郷よりも遥かに強くなっているようだ。簡単には滅ばん。あの4人程度で滅んでも



らっては困る。」

？「ドクターがそう仰るなら。」

ドクター？「くくく、楽しみだ。全ては、大いなる計画のためだからな。」

遂に動き出した謎の影。

果たして、大いなる計画とは？

あれとは何なのか？

この幻想郷に何が起ころうとしているのか？

第8話へ・・・続く!!!

## 第2章? 時空を超えた過去の強敵達?

### 第8話「あの日見た円盤!! 覚悟を決めた幻想少女達」

くあらすじく

魔理沙のままかの変身を見て、驚いた悟天。それだけではない。戦闘力も確かなものであり、地球人最強と呼ばれたクリリンなど足元にも及ばないほどの実力であった。悟天は止むを得ず超サイヤ人へ変身し、再度決戦を挑んだ。

一方それを見ていたにとりは、悟天と魔理沙の力の差を理解し、やめさせようと戦場へ向かい、説得するも撃ち合いの途中でやめる気配はしなかった。

そんな所に、皆さんお馴染みの変態アリスが現れ、魔理沙は逃げ出し引き分けに終わった。

そんな中、にとりは幻想少女達のパワーアップの謎を少し解いたのだった。

それから事件もなく、サイヤパワーを手に入れた幻想少女達は修行に没頭し、悟天はチルノと他数名と修行しながらいろんな所へ行っているうちに、半年という月日はあつという間に過ぎていたのであった。

#### 幻想天霊伝説

#### 第2章

? 時空を超えた過去の強敵達?

天「それじゃ、行ってくる。」

霊「はいはい。」

この日も弟子達に稽古をつけるために、早々と出掛けた。すでに1番弟子のチルノが待っていた。

チ「遅いよ兄貴い。」

天「いやいや、早すぎでしょ！」

時刻は午前7時半である。早起きは霊夢との生活によりできるようになっていた。しかし彼にはまだ荷が重い様子。

チ「みんな待つてるよ！早くいこ！」

天「わかったわかった。」

いつも通り、湖の近くへ向けて飛んでいった。

ル・ミア「あっ！にいちちゃんやつと来た！」

リグル「もく遅いよあんちゃん。」

2人の弟子が待っていた。他はまだ来ていない。そりやそうだ。この日は寺小屋が休みだから。

言い忘れていたが、この半年の間で噂は広がり、悟天に弟子入りする幻想少女が相次いだのだ。今では5人も弟子がいる。

天「いや、相変わらず早いなく。」

ル「まだ明けてすぐだから眠くないのだ。」

天「え？」

リ「私はたまたま早く起きたんだよな。」

チ「よーっし、始めるぞー！」

天「元気いっばいだな。」

それから1時間経ったあたりで他2人も到着した。

ミスティア「おはようございますく兄さん。」

大妖精「おはようございます、お兄様。」

天「あっ、来た来た。」

これでみんな揃い、修行を再開した。  
そして、2時間ほどはすぐに去ってしまった。

天「にしてもみんな強くなったな。」

強くなったのだが未だにサイヤパワーを手に入れたのはチルノだけである。何故なのかはにとりにもわからないままでいた。

リ「いくぞあんちゃん！」

天「あ、うん。」

5人；「合体かめはめ波」

ミ「吹っ飛ばー！」

い。  
ミステイアはたまに口が悪くなる。いや、元々こうなのかもしれない。

5人「波ああああ!!」

天「んっ！」

片手で止めにかかった。そして、

天「はあっ！」

かき消した。

大「お兄様はやっぱ強いなあ。」

ル「でも前より止める時間が長くなってるのだ。」

リ「おっ、それは成長だな。」

ミ「もうすぐで勝てるかもね！」

チ「一旦終わろう！夕方にまた修行しようね兄貴！」

天「おう！それじゃあまた。」

一旦湖から離れた。5人はまだ話している。

天「さて、人里に行つて団子でも食べるか。」

ゆつくり飛んで行つた。

.....

悟天達が修行をしていたその頃、にとりの研究所には妖夢とアリスがいた。勿論修行のためであるが、この2人が揃うとなるとどうしてもいかがわしい話にずれてしまう。

ア「それでねエ、男の人のアレを啜えると頭がポーツとしてきてねエ、」

妖「(ゴクツ)」

ア「アソコがきゅんきゅんしてエ、とおつてもHな気分になれるんですよオ♡」

妖「キヤー！／／／」

2人共顔を真っ赤にしている。

に「ちよつと、修行しない上にHな話するなら帰つてくれない？」  
ア「ちゃんと修行しますよ。魔理沙を捕まえるためにもオ。」  
に「.....」

悟天から既に聞いていた。アリスには性格を変えてしまう何かがある。それも研究中なのだ。

に「それならほら、早くバトルシミュレーターに入つて。」

この修行装置の名前である。この半年の間で決めたそうだと。

ア「私が先ねエ。」

妖「早く終わらしてくださいね。」

に「相手は誰にするの？」

ア「魔——理——沙——！」

に「はい」

そう設定し、修行を始めるのであった。実はこの時、他の部屋には  
霊夢も入っていた。

.....

人里へ向けて飛んでいた悟天は、同じく飛んでいる妹紅とすれ違っ  
た。

天「あ、妹紅。」

妹紅「あ、女たらし。」

天「まだその呼び方なの？」

妹「う、うるさい！この女たらし！」

こう呼ばれるようになったのも訳がある。今から4ヶ月程前に遡  
る。

この時、初めて妹紅は悟天と会い、サイヤパワーを手に入れた。ど  
うやって手に入れたかは成り行きである。

この時、妹紅はパワーを使いすぎてしまい、空中から落下してし  
まった。ガス欠で体はピクリとも動かなかったその時、彼にお姫様  
抱っこで助けられ、慧音の元へ届けられたという。

会う前から、女に対してデレデレしてる奴だと思っていたのだが、  
そんな奴にこんな助けられ方をされてしまったのだ。

天「それじゃあね。」

妹「ふんっ！」

そして妹紅は、にとりの研究所の方へ飛んで行った。

.....

一方、紅魔館では優雅な時間が流れていた。日が出ているため、レミリアの妹フランドールは屋内で遊んでおり、

門番の紅美鈴はスヤスヤ寝ており、

レミリアの親友のパチュリーとその助手の小悪魔は本を読んでいる、

メイド長の咲夜は紅茶を淹れていた。この日は修行を休んでいたからだ。

主人であるレミリアも、外を見て紅茶を飲みながらブーツとしていた。

咲「今日は天気がいいですね、お嬢様。」

レ「そうね。気持ち良い風だわ。」

湖の近くでは悟天の弟子と思しき5人の姿も見える。遊んでいるのだろう。

急に風が止んだ。

レ「!!」

咲「あっ！」

ーと、次の瞬間!!

ピカッ!!!ビリビリ!!

湖の近くの林の中で、眩しい光が放たれた。

咲「お嬢様、今は！」

レ「間違いないわ。孫悟天が初めて幻想郷に来た時と同じ光よ。」

咲「それに、にとりの研究所と守矢神社付近にそれぞれ1つずつ同じ光を感じました。」

レ「どうやら、孫悟天とは違って物騒な輩が来たみたいよ。」

咲「能力で見たんですね。」

レ「そう。あの林に美鈴を向かわせなさい。もし美鈴がやられることがあれば咲夜、あなたに行かせるわ。」

咲「かしこまりました。」

この後、美鈴は叩き起こされ渋々林の方へ向かったという。

レ「面白いことが、起きそうね。」

.....

リ「今の、なに？」

大「なんだか怖い。」

チ「兄貴と初めて会った時と同じだ！」

ミ「でも、こんなに胸騒ぎがするものなの？」

ル「ちよつと見てくるのだ。」

大「気をつけてね！」

.....

ルーミアはただ1人、光った方へ歩いて行った。2分歩いたぐらいで、人のようなものが倒れていた。その横にはあの円盤もあった。

ル「あれ？気を感じないのだ。ロボットなのか？それにこの丸いのは何なのだ？」

顔が紫色なのでそうだと思った。つづいたりしてみたが起きる様子はない。

.....

ミ「ルーミア遅いね。」



リ「やばいんじゃないのか？」

大「チルノちゃん、私たちも行こうよ。」

チ「そうだね。行こっか。」

4人が歩こうとした横を誰かが走り去った。

大「今のって。」

リ「ああ、あの居眠り門番だ。」

チ「早く行こ！」

4人も走っていった。

・・・

一方ルーミアは、

ル「あつ、やっと起きたのだ。」

??「・・・。」

やっとそれは起き上がった。今さらだが、異様な格好をしている。

ル「名前はなんていうのだ？」

人造人間15号「15号。」

ル「やっぱりロボットなのだー！ねえ、にいちゃんみたいに強いのか？」

15「孫悟空・・・。」

ル「孫悟空？誰なのだ？」

次の瞬間、何も言わずにルーミアを蹴った。

ル「あがつ！」

木にぶつかり止まった。見上げると、15号は手のひらをこちらに向けている。

ル「え？ま、待つのだ・・・。」

有無を問わずにエネルギー弾を発射した！

？「危ないっ！」

・・・

リ「また光った！」

ミ「あっ！」

そこには異様な格好をした男と、ボロボロになって倒れている美鈴と、その隣で泣いているルーミアがいた。

大「ルーミアちゃん！」

ミ「なんてことを・・・。」

リ「ルーミア、立てるか？」

ル「グスツ、うん・・・。」

チ「許せない！」

大「チルノちゃん、どうやらあの男の人はロボットみたいだよ。」

チ「それなら決まりだね！」

リ「もしかして・・・」

チ「え？」

リ「ん？壊すんじゃないの？」

チ「あ、そうそう！あたいら5人組ならこんなやつ木っ端微塵にできよ！」

大「チルノちゃん、木っ端微塵の意味わかってる？」

チ「わかんない！でも戦おうよ！」

大「チルノちゃんがそう言うなら。」

リ「おうよ！」

ル「門番の仇を取るのだ！」

ミ「修行の成果、見せてやろうよ！」

チ「みんな！行くぞ！」

15「ククク…。」

4人の中の誰1人として円盤には気づかなかった。

•••••

•••••

その頃、にとりの研究所前では、

妖「何ですか今のは。」

に「行ってみよう！」

ア「あはん♡待って〜。」

修行を終えたアリスとにとりと妖夢は光った方へ向かった。途中で妹紅に会った。

妹「さっきのって？」

に「今行くところ。」

妹「そんじや私も。」

ア「妹紅もそういうこと興味あるの〜？」

妹「燃やすぞ。」

ア「あん♡」

4人は森の中へ入っていった。そこには、肌の白い大きな男が横たわっていた。勿論、その横にはあの円盤もあった。

妹「なんだこいつ。」

妖「気を感じませんね。」

ア「人造人間ってところかしら。これってもしかしてオナh」  
に「この円盤ってもしかして！」

にとりは急いでその円盤を手を取った。

に「ちよつとこれ持って帰って研究してくる！悟天君がどうしてもこの世界に来たのかわかるかもしれない！」

一目散に帰っていった。

妖「さて、これどうしますか？」

妹「この変態に玩具にされる前にとつと壊そうぜ。」

ア「エー。」

妹「残念そうな顔するなよ。」

妖「!!離れてください！」

そう言った直後、その大きな男は起き上がり、エネルギー弾を3人に向けて発射した。

妖「くっ！」

妹「おっと！」

ア「あつはーん！」

妖夢は剣で払い、妹紅は手で払い、アリスは直撃した。アリスは静かになった。

妹「あの変態を1発で黙らせるとは・・・。」

妖「いつもやってるじゃないですか。」

??「孫悟空・・・。」

妹「暗号か？」

妖「人の名前のようにも聞こえました。」

妹「だとしたらそいつを守るためにもここで壊さなきゃな！」  
??「・・・。」

妖「14号？」

妹「あれの名前か？」

妖「はい、あれを見てたら頭に浮かんできました。よくわかりませんが、そういうことにしますか。」

妹「そうだな。あつ、にとりのやつ、結局スパイカメラを置いてきてるじゃねえか。」

気がつくと浮いているカメラがこちらを見ている。

妖「執念深いですね。」

14号「・・・、殺す。」

妖「それでは、魂魄妖夢ー」

妹「藤原妹紅ー」

妖&妹「参るっ!!」

・・・

一方、守矢神社付近の妖怪の山の麓では、

権「あわわ、何ですかこれ？」

権の目の前に、1人の男と、あの円盤が光を放ち、急に現れた。

権「この男の人、結構カッコいいかも。」

じーっと見つめているが、起きる様子はない。

この光は、文も気づいた。

文「あやや、今の光は妖怪の山の近くですね。これはスクープかも！」

上司「その前に、はい、この書類片付けて。」

文「急急急！それどころじゃないのにく。」

書類に追われた。

・・・

守矢神社では、

神「今の、気づいたか？」

諏「うん、良くないことが起きたね。」

早「どうしました？」

神「とんでもないものが入ってきた。それも3体。1体は妖怪の山の近くにいる。」

早「え！でしたら。」

諏「うん、早苗、行ってくれるかい？」

早「わあっ！勿論です！」

神「気をつけるんだぞ。今回はただの妖怪じゃないからな。」

早「わかってますっ！行ってきまーす！」

諏「怪我しないようにね。」

神「・・・(今の早苗なら大丈夫か)。」

子を心配する親の気持ちである。

・・・

じーっと見つめていること3分、遂に起き上がった。

権「うわっ、起き上がった。」

??「・・・お前は誰だ。」

権「私は犬走権。この山の警備をしています。」

13号「俺は13号。孫悟空を知らないか？」

権「孫悟空？わかりません。文さんの新聞社に行けばわかるかもしれませんけど。」

13「そうか。では早速。」

権「ちよつと待ってください！勝手に入るのはダメです！」

13 「・・・そうか、残念だ。」

右の手のひらを権に向け、エネルギーを集中させた。右手が赤く光った！

権「なっ！」

・・・

早「あつ、あれですね！」

麓に到着した。そこにはボロボロになって倒れている権がいた。

早「権さん！あなたがやったのですか？」

13 「どうやらお前も邪魔者らしいな。」

早「何が目的ですか！」

13 「孫悟空を殺すことだ。」

早「そんな人はここにいません！ですが、人を殺すのであれば私が相手になります！」

13 「小娘が。」

早「はああああああ！」

気を高めた。

13 「ほう。お前はまだやれるらしいな。」

早「あなた、見たところ人間ではありませんね。アンドロイド、でしょうか。それなら心置き無く闘えます！」

13 「ほざけ。」

早「たあっ!!」

遂に、3箇所で大決戦が始まった！

果たして、幻想少女達は、かつて悟空達を苦しめたこの強敵に打ち

勝つことができるだろうか？

悟天は今、人里で団子を食べているぞ！

第9話へ・・・、続く!!!



## 第⑨話 「必殺！妹紅怒りの一撃！もう1人の侵略者」

くあらすじく

悟天が幻想郷へやってきて半年程経った頃、「異変」と思しき事態が起きた。それは、悟天と同じであろう方法で外来人が3人もやってきたことである。しかし、悟天とは違い暴力的であった。

しかもその3人とは、かつて別次元で悟空達を苦しめた人造人間13号、14号、15号であった。

霧の湖付近の林で15号と闘うチルノ、大妖精、ルミア、ミスティア、リグル

にとりの研究所付近で14号と闘う妖夢と妹紅

守矢神社付近の妖怪の山の麓で13号と闘う誰か

それぞれで闘いが始まったのであった！

一方主人公の悟天は人里で団子を食べているぞ！

幻想天霊伝説 第⑨話

？「紫様ー！」

紫「なにようるさいわね。」

？「それが大変なんですってー！」

紫「藍、今昼寝中なの。邪魔しないでくれる？それに霊夢がなんとかしてくれるでしょ。」

藍「その霊夢がまだ気づいてないんです！しかも3箇所に見れたんですよ！」

紫「他の妖怪や魔理沙に任せなさいな。」

藍「あつ！もう1人現れました！4人とも霊夢や魔理沙でないと勝てないんですよ！孫悟天でも流石にこの数やっぱりむ」

紫「それを早く言いなさいよ！」

藍「ええ！」

藍は逆に吃驚（びっくり）してしまった。

紫「うくん、悟天君が来てから周辺の妖怪や人間は強くなったもの

の、こんなに早く来られては…。」

藍「どうしますか？」

紫「あの4体がいなくなるまで見張るわ。もし被害が大きくなるようなら、この私がスキマで幻想郷から追放するわ。」

藍「(珍しく紫様がやる気だ。)」

.....

天「今の、ものすごい光だったな。何だったんだろう。はむっ」

我等の主人公は悠長に団子を食べていた。最後の団子を食べた頃に少し変化があった。

天「んっ！3箇所でみんなの気が高まった。しかも1箇所はチルノ達だ。まずい、助けに行かないと。妖夢や妹紅や…、とかが本気で闘ってるならチルノ達に勝ち目はない！」

弟子達が心配になり、助けに行こうとした、次の瞬間！

ピカッ!!ビリビリ!!

天「なっ、なんだ!?!」

今度は人里の寺小屋の方で眩い光が放たれた。このままでは一般人のみんなが危ない。

天「くそお。・・・チルノ達を信じるしかないか。」

チルノ達が勝てることを信じ、光が見えた方へ飛んでいった。勘定はちゃんと置いていった。

.....

その頃湖の近くの林では、

大「チルノちゃん、まずどうしたらいいの？」

チ「うーんとね、そうだ！みんな！散らばって！作戦通りに！」  
4人「わかった！」

言われた通りにみんな散らばった。

チ「くらええ！」

チ；氷符「アイシクルフォール」

チ「アイシクルう、フォール！」

15 「フン。」

15号はガードした。全く効いている様子はないが、チルノはやめなかった。

チ「負けないぞ！はああああ！」

15 「ククク」

チ「はああああ！」

15 「フン、ハアツ！」

腕を勢いよく広げ、アイシクルフォールをかき消した。

その時！

リ「だあっ！」

ル「やあっ！」

リグルは後ろから15号の足を回し蹴りし、バランスが崩れたところ  
にルーミアが目暗闇を擦りつけ、木陰に隠れ気を溜めていた大妖  
精とミスティアが、

大&ミ「合体かめはめ波」

大&ミ「波あああああああ！」

枝の上から暗闇で視界を奪われた目に向けてかめはめ波を発射した！

15 「グアアツ！」

命中した。4人はチルノの近くへ集まった。

大「やったね！チルノちゃん！」

リ「作戦成功だな！」

ミ「ドキドキしたく。」

ル「門番の仇をとったのだ！」

チ「はあ、はあ、へへっ、どんなもんだい！」

煙が晴れると、15号はまだ壊れていなかった。

しかし一部損傷しており、サングラスの右レンズは壊れ、中の機械がむき出しになり、帽子は殆ど壊れていた。

リ「お、おい、嘘だろ。」

ミ「まだ、倒れてないの？」

ル「あ、あ」

大「チルノちゃん！この次の作戦は？」

チ「・・・ない。あれで倒せると思ってたから。」

大「そんな…。」

15 「ククク。」

不気味に笑うと、ボロボロの帽子を投げ捨てた。

まだ普通に動けるといことが、最大の誤算である。

・・・

その時にとりの研究所付近では、

妖「たあっ！」

妹「はあっ！」

2人は一斉に14号目掛けて飛んでいった。  
しかしぶつかると寸前で、

14「フンッ！」

妖「うっ！」

妹「あっ！」

妖夢は殴り飛ばされてしまった。

妖「(これほどパワーがあるとは…、油断した…!)」

少しくらいは我慢できると思ってしまったのである。

妹「てめえ！」

妹；蓬菜「凱風快晴ーフジヤマヴォルケイノー」

至近距離でスペルを使った。

14「グッ！」

妹「よっしゃいくぜっ！」

怯んだ隙を突き、ラッシュした。10何発攻撃して最後に、

妹「はっ！」

蹴り飛ばした。が、思うようには行かず、5M程度しか飛ばせな  
かった。

妹「へっ、随分タフじゃねえかお前。」

14「……。」

妖夢はこの黙った一瞬で斬りかかった！

妖「はあっ！」

しかし妖夢の一太刀を手の甲で止めた！

妹「な、なんてこった。妖夢の一太刀を手の甲で止めちまうなんて。」

妖「くっ、まだまだ！」

何度も斬りかかったが全て止められてしまい、

14 「フツ！」

妖「がっ！」

またしても殴り飛ばされてしまった。隙をつき、後ろに周った妹紅は頭部に蹴りをいれようとしたが、

妹「なっ！」

足を掴まれ投げられた。

妹「ぐえっ」

何本もの木にぶつかり折ってしまい、やっと止まった。

妹「げほっ、不意打ちは効かないか。」

妖「どうすれば…。」

•••••

各地で激戦を繰り広げる中、悟天は光が放たれた場所に到着した。多くの野次馬が囲んでいる。そこには円盤と頭が異様な形をした謎の宇宙人が横たわっていた。

村人A「こりやなんでい？」

村人B「見たことねえ円盤だなあ。」

村人T「うわすげw」

この時、光が放たれたから既に2分経っていた。

天「みんな、どいてどいて。」

村人C「あつ、悟天さんだ！」

女A「きゃー！悟天さんよー！」

悟天ファンを名乗る女達4，5人が集まった。

天「いやゝはははは、今それどころじゃないんだよ。」

流石都会育ちである。これだけの女性に囲まれても動じない。

女B「悟天様サインしてください！」

天「わかったわかった。ちよつと待ってね。」

サインをしようとした瞬間、宇宙人が起き上がった！

???  
「;デスビーム」

天「！ 危ないっ！」

女B「きゃっ！」

女Bを抱き抱え、避けた。が、

村人T「ぐへっ！」

別の村人に命中した。

天「大丈夫かい？」

女B「はい、なんとか…。」

女は赤面している。他の村人は撃たれた村人に集まって騒いでいた。

村人D「うわあ！血だ！」

どうやら血を見ることは珍しいようだ。いかにこの人里が平和かが窺える。

???「よく避けたな。」

天「・・・お前は誰だ！」

クウラ「俺はクウラ。地上にいる孫悟空を殺しにきたんだが、何処だ？」

天「何の話をしている！お父さんはここにはいないぞ！」

ク「？どういうことだ？それに他の奴らも見当たらないな。」

天「他の奴ら？」

ク「地獄に穴が開いたからな。地獄にいる奴ら全員で孫悟空を殺しにかかった。フリーザとセルだけ何故が残ったがな。」

天「地獄に穴？まさかあの時の！」

ク「あの時？どうやらあれからだいぶ時間が経ったようだな。俺からしたら一瞬だったが。」

天「思い出した。いろんな奴がやってきてたけど幾つかの気や気配が突然消えていた。ウーブ君とかにやられたのかと思ってたけど、俺と同じように別次元に飛ばされていたのか！」

ク「事情はよくはわからんが、お前は孫悟空の息子だな。」

天「その通り、俺は孫悟天。お前を倒してやる！」

ク「ククク、見くびってもらっては困るな。地獄とはいえ少しは上達したんだ。先に死ぬのはどっちかな？」

天「言ってる。だああああ！」



超サイヤ人に変身した。

ク「ほう、流石は孫悟空の息子だ。そこなくてはな。」  
天「悪いがここで闘うには分が悪い。付いて来い！」  
ク「・・・、いいだろう。」

かくして2人は人里を離れ飛んでいった。

村人A「頑張ってくれよー！悟天さーん！」

村人B「本気出すと金髪になるって本当だったんだ。」

村人C「あの新聞も捨てたもんじゃねえな。」

村人T「げふっ！グツドラック！」

・・・

ここは守矢神社付近の麓。両者は既に少しづつかっている。

早「居ますからねっ！私やられてないですからねっ！」

13「何の話をしている…。」

早「あなたには関係ありません！覚悟！」

早；秘術「グレイソーマタージ」

早「はあっ！」

弾幕を連続で浴びせた！が、

13；「アンドロイドバリアー」

全て防いだ。

早「なかなかやりますね。ならこれはどうですか！」

早；奇跡「客星の明るい夜」

早「くらいなさい！」

13「何度やっても同じだ。」

13；「アンドロイドバリアー」

またしてもバリアを張り、全ての攻撃を防いだ。バリアをといて正面を見てみたが、

13 「ん？何処へ行つた。」

早 「ここですよ！」

後ろから奇襲をかけた！

13 「なにつ！」

早 「だだだだだだだ！」

連続攻撃を決め、

早 「はあっ！」

吹っ飛ばした。そして、

早 「トドメです！」

早；大奇跡 「八坂の神風」

早 「はあああああ！」

最後に一撃をくらわした。

早 「ふふつ、どんなもんですか。にしても壊れてないとはやりませぬ。」

13 「ククク。」

早 「？何がおかしいんですか？」

13 「いやいや、孫悟空やその仲間達以外にもこんなに手応えのある奴がいると思うと楽しみでな。」

早 「……。」

……

ミ「どうしよう！どうしよう！」  
リ「どうしようって言われても。」  
ル「！来るのだ！」

15；「F・Fスパークキャノン」

連続エネルギー弾が飛んできた！

大「うわっ！（ピチューン）」

ミ「ああっ！」

リ「いっ！」

チ「ぐっ！ぐっ！」

大妖精は攻撃に耐えきれず消えてしまった。

ミスティアとリグルは1発でノックアウトしてしまった。

ルーミアは暗闇に隠れ、やり過ごした。

チルノは耐えきつたが、今にも泣きそうである。

ル「もう、終わりなのだ…。」

チ「ぐすつ、まだ負けてないぞ！兄貴が言ってたんだ。最後まで諦めちゃいけないって！そして、泣いちゃ、いけないって！」

15「ククク」

ゆつくりと残った2人に近づいてきた。ルーミアは既に放心状態である。チルノは震えながらも構えている。

もう目の前まで迫ってきた。

15「へっ！」

チ「あがっ！」

蹴り飛ばされ、木にぶつかった。それでも、

チ「か、かかってこい！」  
15「ククク」

小さな少女は諦めなかった。  
ここで、奇跡が起きた！

?「よく頑張りましたね、あなた達。」  
?；幻世「ザ・ワールド」

その声が聞こえた途端、15号が止まった。

チ「え?え?」

咲「ただのアホの子かと思ってたけど、よく頑張ったわね。悟天さんの修行が身にしみてる感じがするわ。」

チ「あっ!メイド長!」

咲「今は時間が止まっています。さあ、お友達を紅魔館へ運んで。」

ル「え?助かったのか?」

チ「ルーミア、早く運ぶよ!」

ル「?わかったのだ。」

ルーミアは状況がわかっていない様子であったが、すぐに動いてくれた。

チ「門番は?」

咲「もう運びました。」

チ「1人で大丈夫?」

咲「大丈夫よ。あなた達のおかげで、もう1人で勝てるわ。」

チ「はあ!お願いします!」

颯爽と運んでいった。

咲「もういいかしら。解除！」

15 「アツ、？」

咲「今度の相手は私です！かかってきなさい！」

15 「ククク」

.....

早「・・・何を企んでいるんですか。」

13 「さあな。だがこんなもので終わっても面白くないからな。」

途端に高く飛び、早苗に向けてエネルギー弾を連射した。

早「はっ！はっ！、そんなもの、当たりませんよ！」

13 「それはよかったな。」

早「？」

下を見てやっと気づいた。倒れている椀に何発も当たっていたのだ。

椀「あつ、がはっ…。」

早「！椀さん！」

慌てて飛びより呼びかけた。その瞬間を13号は見逃さなかった。

13 「ハハハ！バカめ！」

13 ; 「S・Sデッドリイボンバー」

早「しまった！」

まだ避けることはできた。しかし椀を抱えたまま避けきるのとは不可能だった。椀を守るため、13号の攻撃を背中で止めようとした！

早「あゝっ、うわああああ！」

間一髪で止めることができた。その見返りは大きなものになってしまったが。

13 「貴様も、孫悟空のように甘いな。そんな死にかけの命を助けて何になる。」

早 「大切な、お友達です！私の数少ない、大事なお友達です！」

13 「ふん、くだらん。そのせいで2人揃ってあの世へ行くことになるんだぞ。」

早 「そうは、させません。あなたなんか、誰も、殺させません！」

13 「ふん、じゃあな。」

2人に向けてエネルギー波を発射しようとしたその時！

？；岐符「天の八衢」

ものすごいスピードで弾幕が飛んできた！

13 「ぐうつ！今度はなんだ。」

この隙に早苗は権を抱き抱え、距離をとった。

早 「あ、文さん！」

文 「ふう、どうやら早苗さんは無事の様子ですねえ。」

早 「・・・でも、権さんが・・・。」

文 「え？」

ぐつたりと倒れ伏した権を見て、一瞬絶句した。

文 「・・・権？」

権 「文さん。すみません、麓を、守れま、せんでした・・・。」

文 「いいえ、あなたは充分守ってくれましたよ・・・。」

権「へへ、文さんに、褒められ、ると、がはっ、嬉しい、です。」  
文「もう喋らなくていいです！」

権は目から滴をこぼしていた。

権「文さん、あとは、お願い、しますね。」

文「権!!」

権は目を閉ざしてしまった。気は無いくらい小さくなっている。

文「・・・。」

13 「お別れの挨拶は済んだか？貴様も邪魔をするなら容赦は」

文「許しません、よくも、よくも…！」

13 「?なんだ」

空は曇っていないのに雷が落ちた！

早「え？私、曇らせてないですよ？」

文「よくも、よくも!!」

森がざわついた。気候が明らかに変化している。

早「文さんの気が、どんどん…。」

文「よくも権をつ！」

・・・

チ「あれ？ちよつと暗くなってきた。」

大「こんなこと、今まで一度もないのに。」

倒れた2人の前で2人は空を見上げていた。大妖精はまだ復活していない。

・・・

一方、みんなを逃し、1人で闘っていた咲夜もその変化に気づいた。

咲「こ、これは。まさか文さんの。」

15「キイツ！」

咲「くっ！」

両手にナイフを持って闘っているため、15号の手は傷だらけであつた。咲夜は、至って冷静であつた。

.....

悟天は、幻想郷に一切の被害を出したくなかつたので、地球の反対側まで飛んでいった。

不思議なことに、クウラは付いてきていた。

天「ここら辺でいいだろう。始めようぜ。」

ク「超サイヤ人、今度は負けないぞ！」

天「だあつ！」

ク「かあつ！」

両者は激しくぶつかった！

その闘いは地球を震わせていた。

天「はっ！どりやあつ！」

ク「ぐああつ！」

天「せいっ！」

ク「ごはっ…！」

明らかに悟天が優勢だつた。それもそのはず、彼は既に幼少の頃から超サイヤ人に変身できている。それからの成長も合わせると、クウラに勝ち目はなかつたのだ。

ク「な、何故だ。何故、これほどの差が。」



天「もう終わり？それならもう地球から出てってほしいな。ここに  
お父さんはいないし。」

ク「この俺に、ぬけぬけと出ていけど？」

ク「ふぎけるなあっ！」

天「もう、うるさいなあ。」

ク「こうなったら！」

そう言うと、更に高く飛び、右腕を上げ、人差し指をつきあげた。

天「何をやる気だ？」

ク「ハツハツハ！これでこの星も終わりだっ！」

ク；「スーパーノヴァ」

その指から、凄まじいエネルギーが溢れ出した！

天「！」

ク「この星諸共、消えてなくなれっ！」

それを悟天目掛けて投げた！

天「くっ！何をしている！こんなもの、はね返すのにそんな時間は  
かからないぞ！」

ク「ククク…」

天「なんで、笑っている…？」

ク「貴様は知らんだろう！この俺が瞬間移動を使えるということ  
！」

天「!!まさかっ！」

クウラは、村人の気を探し、見つけ出した。

ク「ハツハツハ!!さらばだっ！」

天「考えたなっ！ちくしよおおお!!」

クウラは一瞬で消えた。

天「うわっ、くっ！はあっ！」

一気にはね返し、幻想郷まで急いで飛んだ。

天「人里のみんなが危ない！間に合ってくれえ！」

・・・

妹「ダメだ。正面からじゃ攻撃が効かねえ。しかも不意打ちも効かねえ。どうすりゃいいんだ。」

ここでは、見合った時間が他より遥かに長かった。14号はそうでもないが、2人の集中力はきれかかっていた。痺れを切らし、妖夢は正面から突っ込んだ！

妖「だあっ！」

左腕で斬りかかった！が、ガシッ！

右腕でしっかりと掴まれてしまった！

妖「くっ、くそお！」

14「フン…。」

睨み合ったまま止まっている。しかし力はお互い抜いていない。

妖「ぐぐぐ。」

14「クウ…」

妖「負けて、たまるかあっ！」

14「！」

残っていた右腕の楼観剣で一気に14号の右手を斬った！

14「ガアツ！エ、イツ！」

妖「ぐあつ！」

14号も負けじと左の拳で殴り飛ばした。妖夢は岩場にぶつけられた。岩も大破した。

妹「大丈夫か妖夢！」

妖「はは、3発でノックアウトとは…、防御の修行をサボってしまつたせいですね…。」

妹「その分、攻撃で成果が出てるじゃないか。あんな堅いやつの右手を斬つちまうなんてよ。」

妖「えへへ。」

妹「ん？なんだ？」

妖「これは、文さんの気？」

14「グウウウ…。」

妹「喋ってる暇はなさそうだな。まさかこんな所でお披露目するところになるとはな！」

妖「妹紅さん、いったい何を。」

•••

咲夜と15号は見合っていた。そして構え、

咲「はあつ！」

15「ハアツ！」

お互いぶつかり、突き抜けた！

咲夜は突き抜けたまま構えている。

15号は振り返り、不気味な笑みを浮かべながら歩いてきた。

15 「ククク」

咲「・・・。」

15 「ククク、ク、ク…ク…」

歩いて来る途中、15号の頭は綺麗に斬り落とされ、自身の手の上に落ちた。

ドカーン!!

そして、爆破した。

咲夜、美鈴、リグル、ミスティア、ルーミア、大妖精、そしてチルノの7人が手にした見事な勝利である。

空の夕日は紅に染まろうとしていた。

咲「ふう、後日あの5人にはお礼をしましょうか。文さんが気になります、闘いはもう疲れましたし、お嬢様のデイナーの準備でもしましょうか。」

こうして、超戦士は自分の帰る場所へ帰って行った。

・・・

妹紅は腕を交差し、自身を灼熱の炎に包んだ！

そして、肘を曲げ、両腕を左右に広げ、構えた！

妹「うおおおおおおお!!」

妖「妹紅さんの気が、上がっていく!」

妹；「フェニックスダイナマイト」

妹「フェニックス、ダイナマイト!!」

炎を纏ったまま、14号に突撃した。

14 「ガッ！」

右腕で殴ろうとしたが、その腕の先には手がない。

妹「もらったあ！」

14号にしっかりとしがみつき、あつという間に、  
ドツカーン!!!

14号諸共粉々に吹き飛んだ！

妖「!!妹紅さん！そんな、自爆だなんて…。」

泣きそうになっていた。すると、破片と肉片の集まりから、肉片だけが光り集まった。

妹；「リザレクション」

そして、光の中から先ほどと同じ構えの状態で、生きている妹紅が現れた。

妹「くう…、効いたぜ。」

妖「妹紅さん！ど、どうして？」

妹「あれ？知らなかったつけ？私は不老不死なんだよな。だから捨て身にしてもこの通り。体力は減るけどな。」

妖「よ、よかった…。死んだままだったらどうしようかと。」

妹「おいおい、泣きそうになるなよ。文の方が気になるが、もう私は疲れた。今夜はにとりに泊めてもらおうぜ。」

妖「そうですね！…あれ？アリスさんは？」

妹「ん？そーいやいなくなったな。まあいつか。」

妖「あの人なら大丈夫ですね。」

妹「そんじや、帰るぞ。」

妖「はいっ！」

かくして、ここでも幻想少女は勝利を収めることができた。

不死鳥の勇者と、銀の勇者は、肩を並べ、林の中を歩いていった。

.....

13 「なんだ、なんだというんだ。小娘風情が。」

文「うううううううう!!」

早「あ、文さん！」

《x b i g》文「があああっ!!!」

猛獣の様な叫びを上げた直後、気は逆り、髪が少し逆立ち、虹彩は真っ赤に染まった！

文「早苗さん、椀を早く、永遠亭へ。」

早「文さんは、1人で大丈夫なんですか？」

文「私の理性が残ってるうちに、とつとつれていけっ！」

早「は、はい。」

文は今まで、なんだかんだ敬語で喋っていたが、その敬語はなくなっていた。

文「お前・・・、覚悟、できてんだらうなあっ!!」

13 「あ・・・、あ・・・。」

13号は、あまりにももの気迫で、震えてしまった。

果たして、文はこのまま勝ち抜くことができるのか？

悟天は間に合うのだろうか？

第10話へ・・・、続くっ!!!!

## 第10話 「圧倒的超魔理沙！謎のドクターの企み」

くあらすじく

遂に、3箇所では幻想少女達の決闘、いや、死闘が始まった。

霧の湖付近の林では、悟天の小さな弟子達5人が見事な連携を決め15号に傷を作るも、あと一步及ばなかった。しかし危機に駆けつけた咲夜により倒された。いや、仕上げをしたのである。

にとりの研究所付近では、妹紅と妖夢が防御に優れた14号に対して果敢に立ち向かった。妖夢が何度打ちのめされようとチャレンジしたため、14号の右腕を斬った。そして最後に妹紅が研究所で身につけた必殺技で大勝利を収めた。

一方人里でも同じ光が放たれ、悟天が駆けつけるとそこにはあのクウラがいた！それも地球をメチャクチャにした時にいたのである。地球の反対側まで移動して闘ったが、クウラは決着のことなど捨て、悟天を置き去りにして瞬間移動で人里へ戻ったのだった。

守矢神社付近の麓では、幻想少女達の中で1番修行をした早苗がたった1人で巨悪と闘っていた。修行の甲斐があり手堅く攻撃できたが、杖を庇い体力を失ってしまう。そんな中颯爽と文が現れ、加勢してくれると思っていたが、何やら様子がおかしい。それだけでなく、激しい怒りの末、姿が少し変化したではないか！

悟天よ、間に合うか!?

文、いったい、どうしたというんだ。

幻想天霊伝説 第10話

急いで幻想郷へ飛んでいる悟天が、5000キロの距離を通過した頃、ある変化に気づいた。

天「……この気は、文か？なんてパワーアップだ。天狗だったつけ、そのせいかわかんないけど、幻想郷に近づくにつれて曇ってきたな。雨が降ってないといいけど。」

彼の言う通り、どんどん天気が崩れてきている。しかし彼が感じ

取った変化はそれだけではないようだ。

天「これは、クウラか？誰かと闘っている。相手は、誰だ？文に引けを取らないぐらい物凄いパワーだ。みんな気付かないのか？」

本当はみんな闘いにより疲弊し、普段の感覚がないだけである。

天「いったい、誰なんだ？」

淡々と独り言を並べながら、飛んでいった。

・・・

13号はただ立っていた。目の前の光景に整理がつかなかったからである。だが、慌てていたのもここまで。急にくると方向を変え、棍を抱える早苗に向かってエネルギー波を発射しようとした。

一瞬だったにも関わらず、気がついた時には既に文は目の前に来ていた！

13「なにっ！」

と言いかけたが、問答無用で腹にパンチされた。

13「うごっ！がああ…！」

文の腕は、13号の腹を貫いていた！

文「いいかげんにしろ・・・このクズやろう・・・。」

13「あゝ、がつ」

文「弱き者を散々痛ぶりやがって・・・動けない相手を・・・。」

ここでやっと腕を引き抜いた。風穴が開いている。文の気は収まっていない。



文「お前、人造人間か。」

13「あああ、うっ」

文「まだ壊れないか。無駄にしぶといな。」

13「ち、調子に乗るなよ。」

文「・・・いて。」

すると、何処からともなくガラクタが飛んできた。その一部が文の頬に当たったのである。

それだけではない。そのガラクタは全て13号に集まっているではないか。

13「この程度で終わったと思うな。これぐらいは計算済みだ。そして、お前がいい気になっていられるのも今のうちだ！」

見る見るうちに、破片は13号の身体に溶け込んでいった。文は、黙って見ていた。これから13号がパワーアップすることは推測できていたが、このまま壊しては権の仇は取れない。一か八かである。

13「ハハハ！その判断が命取りになるんだぞ！」

文「・・・。」

そして最後の破片、いや、最後だけはパーツに見える。それが溶け込んだ瞬間！

13「うおおおおお！」

文「・・・。」

上半身の服は消し飛び、髪が橙色へ、肌が青色へ変色した。そして、身長も3メートル程にまで大きくなり、体格もそれに合わせてでかくなった。それだけではない。先ほど開けた穴が塞がってしまったで

はないか。ここで、  
合体13号の完成である。

13 「待たせたな。これが俺の本気だ。」

文 「待たせやがって。私の怒りはまだ収まってないんだ・・・。」

13 「ほう。」

文 「壊れても知らないぞ!!」

既に夕日は紅に染まっていた。

・・・

一方、クウラは全く面識のない相手と闘い、倒した後であった。その相手に場所を移されたため、今魔法の森にいる。

ク 「はあ、はあ、あいつは何だったんだ。人里を襲おうとした途端、急に現れやがって。あいつは、地球人か？しかしそうだとするとあの気迫、そして目はまるでサイヤ人。いや、孫悟空だった。」

かなり息が上がっていた。苦戦を強いられたようである。

？ 「よう！お前さっきまで人里にいなかったか？」

ク 「！お前は誰だ？」

魔 「私は霧雨魔理沙！普通の魔法使いだ！」

ク 「魔法使い、だと。」

魔 「？なんで驚いてるか知らねえが、時間も遅いんだ。霊夢に手柄を取られる前に倒させてもらうぜ！」

ク 「ま、待て！俺はただの外来人だ！」

人里の人間が言っていたことをそのまま言った。これを言えば危害は加えられないと思ったのである。助かったところで感謝はしないが。

魔「知ってるぜ。人里を襲おうとしたんだって。気でわかったからな。」

ク「気だと？お前、孫悟空を知らないか？」

魔「うるせえ！知るかそんなやつ！」

ク「待て！」

魔「はああああ！」

彼らの間でも正式には決まってるじゃないが、今は「超化」としておこう。瞬間で超化し、

魔；恋符「マスタースパーク」

魔「マスパ！」

ク「ぐああああ!!」

一瞬で決着をつけた。台詞の通り、全然本気でやっていない。クウラの破片が魔法の森へ落ちていった。勿論破片なんか気にする筈がない。しかし、これがさらなる恐怖を生むとは知らない魔理沙であった。

魔「ふん、ちよろいもんだぜ。．．うおつと！」

急に雷が落ちてきた。紙一重で避けてしまうとは流石幻想郷No.2である。

魔「雷？そーいや文の気がすごいことになってから天気不安定だったな。ちよつと参加するか！」

こうして、超化をとかずに箒に乗り守矢神社付近の麓へ飛んでいったのであった。

．．．．．

？「ドクター、どうやら無事、3つの転送機がこちらに戻ってきました

した。」

ドクター？「ようやくか。1つはどうした？」

？「河童の河城にとりに取られました。」

ドクター？「ふむ、まあよい。プレゼントしてやろう。」

？「それと…」

ドクター？「どうした。」

？「ドクターゲロの人造人間14号、15号はもう倒されてしまいました。今情報が入りました。クウラもやられたとのことですよ。」

ドクター？「たった数時間ですか。やはり孫悟天に倒されたのか？」

？「いえ、何れにしても幻想郷の小娘どもに倒された模様です。」

ドクター？「小娘、か。やるではないか。13号はどうした？」

？「先ほど合体に成功し、今は天狗の射命丸文と戦闘中です。」

ドクター？「あの天狗の小娘が1人で闘っているのか？」

？「はい。どうやらドクターが望んだパワーアップを成し遂げたようです。」

ドクター？「素晴らしいじゃないか！孫悟天のサイヤパワーはこれほど強大なものであったか。ここに来たのがやつでよかつたな。そうだ、忘れるところであった。クウラは誰にやられた？」

？「・・・トドメは霧雨魔理沙がさしました。」

ドクター？「孫悟天を置き去りにしてそれからはどうした？」

？「それが・・・。」

ドクター？「どうした、言わんか。」

？「何者かがクウラを苦しめたようですが、それが誰か確認できませんでした…。」

ドクター？「確認できないだと？私が作ったカメラがか？」

？「どうやらカメラの存在がバレてしまったようです…。細工されました。勿論撤収しましたが。」

ドクター？「我々の存在は博麗霊夢にも気付かれていない筈。後に我々の脅威となるかもしれん。この異変が終われば詮索するぞ。」

？「了解いたしました。」

ドクター？「にしてもこのまま13号が倒されてしまうのは面白く

ない。一応訊くが、持ってきたか？」

？「勿論ですとも。クウラの破片でございませう？」

ドクター？「ククク、流石だ。この破片の一部を少しばかりいじるとしよう。ドクターゲロの人造人間に合うように、な。」

.....

その頃紅魔館では、

レ「もう少しで暗くなるわね。」

咲「ただいま戻りました。」

レ「どうに帰ってきてたでしょう？ご苦労だったわ咲夜。あなたも随分と腕を上げたわね。」

咲「入浴した後、新しい服に着替えてました。いえ、勝てたのは悟天さんの弟子達とそれを守った美鈴のおかげです。私は仕上げをしただけです。」

レ「そう。にしても妖怪の山はすごいことになってるわね。」

咲「はい。大気が揺れています。人造人間の方も力をつけたようです。」

レ「面白くなってきたじゃないの。夜になってまだ終わってなかったら私も見にいこうかしら。」

咲「その時はどうかお気をつけて。」

レ「ふふ、ありがとう。」

至って穏やかであった。

.....

激戦区では、なかなか決着をつけられないでいた。

13 「はあ、はあ、その程度のパワーでは、この俺を壊すことにはできないぞ。」

文「はあ・・・、はあ・・・。」

とは言うものの、散々痛めつけられている。何枚もスペルカードを使われた結果だ。

文にもう少し体力があれば決着がついていた。無理もない。これほどのパワーアップを制御しただけでも評価できるのに、ここまで持ちこたえたのだ。年の功であろう。

文「・・・やめだ。」

13 「なんだと。」

文「もう私の気はすみました。ここで引き下がるとします。」

13 「俺から逃げると言うのか？」

文「まさかまさか、まだ気付きませんか？」

13 「なに？」

文「もうじき到着します。幻想郷No.2が。」

横を見ると、それが見えてきた。箒に乗った、気の進る金髪の少女だ。

魔「あつ！あの2人か！」

文「やつと来ましたか。」

魔「やつと着いたぜ。って文、お前もなれたんだな！」

文「これで、少しは魔理沙さんに追いつきましたかね。」

文はニヤリと笑った。

魔「ありがとな文！私が来たからにはもう安心だぜ。あとは私が壊しておいてやるからな！」

文「魔理沙さんならできそうですね。改めて霊夢さんや魔理沙さんの強さがわかります。」

魔「事情は気であわかってるぜ。早く永遠亭に急いだらどうだ？」  
文「！・・・感謝します！」

超化をとかない状態で初めて笑顔になった。そしてものすごいスピードで永遠亭へ飛んでいった。

魔「さーて、次は私の番だぜ！ま、お前に勝ち目はないけどな！」  
13「ほぎけ！」

勢いよくぶつかりに行くも、

魔；星符「メテオニツクシャワー」

魔「メテオニツク、シャワーー！」

13「ぐおお！」

簡単に弾かれてしまった。

魔「ま、こんなもんだよな。」

実は13号の腹に命中し、大ダメージを受けただけである。腹は修復されたものの、文のパンチはよく効いたようで、響くのである。

・・・

ドクター？「できたぞ。」

？「流石！早いですね！」

ドクター？「私にかかればこんなものだ。」

？「ドクターって本当は一人称は私ではないんでしょう？なんで変えたんですか？」

ドクター？「いつまでも儂と言っているのはジジくさいからな。喋り方も若い頃に変えたのだ。」

？「そうでございましたか！それで、この改造した破片はどうやって送りますか？」

ドクター？「お前が直接渡してこい。〈奴〉にもいい刺激になるだろうからな。」

？「かしこまりました。では」

破片を持った瞬間、その助手？の身体は砕けるかのようにバラバラになったかと思えば、消えてしまった。

読者の皆様なら知っている、ジャンネンバのような移動である。

.....

レ「.....そろそろ私も行こうかしら。」

咲「でしたら、デイナーは少し遅らせるとします。」

レ「別にいいわよ。今日中には決着が着くわ。」

??? 「お姉様！私も行きたい！」

そう言ったのは、レミリアの妹のフランドール・スカーレットだ。

レ「フランは残ってなさい。危険よ。」

フ「そんなことないもん！」

レ「残りなさいってば。」

フ「やだやだ！私だって力になれるもん！」

この時、少しレミリアの表情が引きつった。

レ「駄目と言っているでしょ。今となつては咲夜よりも弱いんだから話にならないわ。」

フ「うっ...。」

フランは黙ってしまった。

レ「それじゃあ行ってくるわ。あとあの子達を頼むわ。」

咲「行ってらっしゃいませ。お任せください。」

フ「.....。」

ゆつくりと館内の階段を降りて行った。あの子達とは勿論、チルノ達である。

.....

13 「がああ！」

魔「はっ！」



13 「ぐっ！」

何度かかっても、変身している魔理沙には通用しないのだ。

13 「ちくしよう、ちくしよおおお！」

魔 「そろそろ壊していいか？お前、見た所人造人間みたいだな。幻想郷に害をなす装置を壊すのはいいことになってるんだ。」

13 「ぐぐぐ…」

その時!!

? 「お待ちくださいアい。」

魔 「な、なんだ!？」

? 「初めまして、霧雨魔理沙さん。」

魔 「誰だお前は!？」

? 「わたくしですかあ？フツ、今は内緒でエす。そのうち教えますよオ。」

身体が組み立てられるような、ジャンバのような現れ方をし、異様な姿をした男が13号の後ろに現れた。

果たしてこの男は何をしてくるのか？

油断しきった魔理沙は大丈夫なのか？

第11話へ続く…。

## 第11話 「究極合体！ やつと来た幻想郷NO. 1」

くあらすじく

闘いに勝利し、各々の帰る場所へ帰っていく中、守矢神社付近の麓ではまだ終わっていないかった。文を激怒させてしまった13号は、パワーアップした彼女には歯が立たず腹に風穴を開けられてしまった。しかし13号にもまだ策があり、14号と15号の破片を取り込みパワーアップし追いついた。結果は互角で、決定的な瞬間は訪れなかった。

一方、人里を襲おうとしたクウラは謎の少女に苦戦を強いられ、突然現れた魔理沙によって木っ端微塵にされてしまう。そこで決着をつけられなかった2人の中に魔理沙が混ざり、文は魔理沙に任せることにし、永遠亭へ飛んでいった。

13号は、かの師匠の元で何年も修行した魔理沙には勝てなかった。

トドメを刺されようとした時、謎の男が現れた！

いったい、この男は何者なのか？

何をしに来たのか？

幻想天霊伝説 第11話

魔 「誰だか知らないけど、こいつの味方するならお前も容赦しないぜ！」

？ 「おやおや怖いですねエ。ふむ、わたくしは味方ではないですねエ。勿論、あなたのような小娘の味方でもありません。」

魔 「ちっ！ウザい喋り方だな！」

？ 「ありがとうございます。」

魔 「ウゼエエ!!」

？ 「勿論、あなたをただ罵りに来たわけじゃありませんよお。だってえ、胸なしの時点でグヒヤヒヤヒヤッ！」

魔 「う、うるせえ!!こ、これでも、Bぐらいはあるぞー！」

？ 「さて本題を始めましょうかねエ。」

魔 「人の話を聞けっつてんだよ！」

? 「13号さアん、あなた、この小娘に勝ちたいですよねエ? 痛ぶりたいですよねエ?」

13 「・・・。」

? 「勝ちたいですよねエ!!」

13 「!あ、ああ。」

謎の男は威圧をかけた。13号はこの男の実力に直感で気づいたのだ。

魔 「おっと、簡単にはさせないぜ!」

魔; 恋符 「マスタースパーク」

魔 「マスタースパーク!!」

謎の男だけに命中した。が、

? 「おやおや、何かしましたかア?」

魔 「・・・えっ?」

全く効いていない様子であった。

魔 「そんな、どうなって・・・。」

? 「13号さアん、これを取り込んでくださアい。大丈夫ですよ、取り込めるようになってますのでエ。」

13 「わ、わかった。」

謎の男が渡した破片は13号の体内に吸い込まれていった。

途端に!!

13 「ウオオオオオオオオオ!!」

気が溢れ出した!

魔「な、なんで人造人間から気を感じるんだ!?それに、これは!?」  
帽子を必死に抑えている。

?「グヒヤーヒヤツヒヤツヒヤツ!流石はドクター!大成功でエス  
!」

どんどん13号の戦闘力が上がっていく。そして、近くの雲は全て  
消し飛んだ。

?「それじゃ、頑張ってくださいアい。」  
魔「あつ、待て!」

言った時には遅かった。空間移動で消えてしまったのだ。

13「さあ、始めようか!!」

ここに、究極合体人造人間13号が完成してしまったのである。  
.....  
に「す、すごい。わからないことだらけだ。」

あれからずっと円盤の分析をしていた。わからないことだらけだ  
ということに気づいた彼女もなかなかだが。

妹「お〜い、にとり〜。」

に「あつ、妹紅と妖夢。」

妹「今回は泊めてもらうぜ〜。」

に「いや〜随分とやられたね。2人とも服がボロボロじゃん。」

妖「(3発でやられたなんて言えない)」

妹「まあな。でもにとりが見せてくれたデーブイデーってやつだっ

け？あれに映されてた技を使ったら勝てたぜ。」  
に「おお!!でしょでしょ!」

大喜びしている。実際そうなのでこれ以上はつつこまない妹紅であつた。

妖「!!何ですかこの気は!」

妹「おいおい、もう私は疲れたぞ…。」

急にとてつもない気を感じ取った。

に「直感だと、魔理沙と同じくらいか。魔理沙が馬鹿やらなきやい  
いけど…。」

その時、プシューつと音を立て、バトルシユミレーター扉が開いた。中から強者の風格を持った1人の少女、博麗霊夢が出てきたのだ。

霊「ふう、今日はこれで終わりにするわ。」

に「あつ、霊夢!ちようどいいところに。」

霊「どうしたの?」

霊夢が知らないこれまでの経緯をざっくり説明した。

•••••

魔「はああつ!」

物凄いスピードで背後に回り、頸にキックをかました。

13 「何かしたか?」

魔「!くそっ!」

魔;星符「メテオニックシャワー」

魔「こいつでどうだ！」

13号はガードのポーズだけとった。全て命中したのだが、

13「もう星の出る時間かな？もう暗いからな。」

魔「馬鹿にしやがってええええええ！」

怒った魔理沙は正面から殴りにかかった。ラッシュを続ける彼女に対して、全て太い腕で受け止め、ただ笑って見ているのであった。

魔「はあ、はあ、なんで、効かないんだ。」

13「俺もよくわからんが、防御力が格段に上がったようだ。お前の攻撃がちつとも痛くないぞ。」

魔「くそお！どうなってんだよ！」

13「ふんっ！」

魔「ぐっ！」

突然パンチしてきたので、ガードした。

魔「いつてえ！なっ！」

13「くらえええ！」

13；「フルチャージデッドドリイボンバー」

早苗に放った時よりも数10倍のパワーだ！

魔「けっ！」

魔；恋符「マスタースパーク」

魔「マスタースパーク!!」

2つの攻撃がぶつかつた。てつきり魔理沙が押されるものと思われたが、お互い一步も引けを取らなかつた！

魔「あれ？意外といけるぞ！このまま、はああっ！」

13「ククク」

魔「いつけええ！」

なんとか気合で押し出した！が、そこに13号はいなかった…。

13「かかったな。」

魔「えっ！」

腰に強烈なパンチをかました。

魔「がつ！」

落ちないよう髪を掴んだ。そして、何度も右フックをかました。

13「おいおいどうした！さっきまでの威勢はどこにいった！」

魔「がつ！ぐっ！いつ！」

口からも、鼻からも血を流した。

魔「あ…ぐ…。」

13「へっ！」

魔「ぐえ」

髪を手から離し、そのまま地面へ落ちていった。魔理沙の超化は解けてしまった。13号も降りた。

13「ハハハ！か弱い乙女のようになってしまったな！」

魔「う…ぐ…。」

今にも泣きそうになっている。

13 「まだだ。もう少し痛めつけてから殺してやる。」  
魔「ぐす．．、れい．．む．．。」

絶体絶命のピンチ!!

レ「．．!!」

．．．．  
天「暗くなってきた！急がないと！」

まだ1万2000キロを通ったばかりであった。

天「にしても天気の変動がすごいなあ。急に荒れたと思ったら今度は雲が1つも無くなった。幻想郷は大丈夫かな？」

その時、魔理沙の気が小さくなった。

天「！まずい！間に合ってくれ！」

引き続き、幻想郷へ急いだ。

．．．．  
に「ということなんだよ。」

霊「ふくん。」

事情を聞き終えた。

霊「今回は結構ヤバイ異変ってことはわかったわ。でもあとは魔理沙がやってくれる．．あっ！」

に「魔理沙の気が、小さくなってきた…。」

妹「おいおいヤバいんじゃないの？」



妖「魔理沙さんが！」  
霊「・・・しようがないわね。」

そう言った瞬間、表情が一気に変わった。

に「行くんだね。」

霊「お風呂入りたかったけどね。」

に「アレは持つてる？」

霊「もちろん。じゃないと魔理沙が闘えなくなるかもしれないからね。そうだったら全部私が異変解決しなくちやいけないじゃん？面倒なのよね。」

に「ははっ、霊夢らしいや。」

霊「それじゃあね。」

指を額に当て、一瞬で消えた。

に「頼んだよ、霊夢。」

・・・

その頃、永遠亭では、

権「・・・あ、文さん？」

文「権!!」

横になっている権に抱きついた。

権「あ、私、生きてるんですね。」

早「いや、よかったですよ。」

権「文さん、あいつは。」

文「大丈夫ですよ。魔理沙さんが代わってくれましたから。」

権「なら安心ですね。」

早「あの、ちよつと。」

権「文さんがあんなに強くなつてしまふなんて。どんどん遠くなつちやうなあ。」

文「そんなこと言わないでくださいよ。」

早「文さん。」

権「雲1つない空ですね。」

文「あやや？さつきまであつたのに。」

早「文さ」

文「うるさいですよ。」

早「だつて魔理沙さんの気が小さくなつてるんですもん！」

文「それを早く言いませんか！」

早「ええ…。」

文「でも、権が心配ですし。」

権「文さん、私は大丈夫だから、魔理沙を助けてあげて。」

文「権。」

権「文さん、幻想郷を、頼みましたよ。」

早「それに私がいいますから何もしんば」

文「わかりました。行つてきます。」

そう言つて、もう1度超化し、一目散に飛んでいった。

早「ハアツ☆」

•••••

13「へッへッへ、おらっ！」

魔「あああ、あがっ」

首を絞め始めた。勿論ここでは殺さないつもりでいる。

13「おっと、まだ死ぬなよ。」

魔「ゲホッ」

泡を吹き、既に意識すらなくなりかけている。

1 3 「もう1度だ。おらっ！」

魔 「あああ…」

1 3 「遺言を聞いてやる。言え。」

魔 「れい・・む・・にい・・ちゃん・・助け・・て・・」

1 3 「ハッハッハッハ！もう遅い！誰も向かって来ないぞ！」

魔 「……。」

1 3 「さて、そろそろトドメだ。どうやって殺されたいんだ？」

魔 「…。」

1 3 「俺は優しいんだ。首を引っ張ってもいでやる。」

魔理沙に手を伸ばした、その時!!

1 3 「なにっ！ぐおっ！」

突如目の前に現れた少女によつて、顔面を蹴られ飛ばされた。

霊 「生きてる？魔理沙。」

魔 「…!!」

1 3 「貴様、誰だ！」

霊 「私は博麗霊夢。巫女よ。にしても随分とやってくれたわね。」

1 3 「ふん、貴様もすぐ同じ目に合わせてやる。」

霊 「どうかしら？」

1 3 「今なら逃してやっても」

霊 「はああああ!!」

1 3 「!!」

霊 「だあああつ!!」

霊夢はすぐに超化した。髪は少し赤っぽくなり、少し逆立ち、赤いオーラを放った。

霊「魔理沙、これ食べて。」

倒れている魔理沙の横にある豆を投げた。

霊「さ、始めましょ。」

この時、13号は思った。この少女こそ、幻想郷No. 1だと！  
夜になりかけている。

第12話へ続く…。

## 第12話 「決着！間一髪の大勝利」

くあらすじく

男の目的は、13号のさらなるパワーアップであった。半ば強引にパーツを渡し、早々と立ち去ってしまった。

さらなるパワーアップを遂げた13号には、魔理沙の攻撃は何も効かなかった。パワーも上がったらしく、ガードした魔理沙にもダメージを与えた。万事休すかと思われたが、技の撃ち合いではなんとか魔理沙が押した。それが仇になった。

一方、樫が目を覚ました。13号の変化に気付いた文は、樫に説得され、戦場へ再び飛んでいった。

魔理沙は完膚なきまでに痛めつけられ、殺されようとしていた。だが、突如目の前に現れた霊夢により、阻止された。

幻想郷No.1よ、幻想郷を救えるか!?

幻想天霊伝説 第12話

魔「・・・え...?」

霊「それを食べれば元気になるわ。傷も癒える。」

しかし、腕が動く筈もなかった。投げた豆すら掴めていない。

霊「まったく、しょうがないわね。」

魔理沙に食べさせようとした。13号はこの機を逃さなかった。

13「そんな小娘に構ってる場合かつ!」

背後からフックをしたが、

ヒュンッ!

寸前で躲された。それだけでなく、横からキックされた!

13「ぐおっ!」

10mほど飛ばされた。

霊「ほら、早く。」

魔「あ…。」

霊夢は無理やり魔理沙の口の中に押し込んだ。

霊「ほら、ちゃんと噛んで。」

カリカリ、ゴクツ

魔「えっ?えっ?」

13「!!」

急に体中の痛みが消えた!

魔「ど、どうなってんだこれ!？」

先ほどとは打って変わってぴよんぴよん跳ねている。

霊「仙豆っていうの。師匠が作り方教えてくれてね。作るには何年も時間がかかるから、今までの異変の時はなかったの。」

魔「そうだったのか!やっぱ師匠はすげえぜ!」

13「…。」

こうして、魔理沙は復活した。

魔「私たち2人が揃えば、怖いもんなしだぜ!」

霊「魔理沙は下がって。」

魔「ちよっ!またいいところ取りか?」

霊「死にかけたくせによく言うわ。」

魔「うっ…。」

霊夢は1人、前へ出た。

13 「お前1人で、だと？」

霊 「そうよ。小手調べにね。何か不満かしら？」

13 「小娘が1発や2発でいい気になりやがって！があっ！」

霊 「！」

果たして、霊夢は1人で勝てるのか！？

.....

? 「ただいま戻りました。」

ドクター 「ご苦労だった。成功したようだな。」

? 「あなた様のことですから。失敗などないでしょう。」

ドクター 「前から思ったのだが、」

? 「何事でしょう？」

ドクター 「私以外の者と話す時は、あんな喋り方なのだな。」

? 「勿論で御座います。ドクター以外の者など、行き遅れた猿となんら変わりません。ですから、丁寧に話す必要などありません。」

ドクター 「ククク、それは結構だ。私以外は猿、とな。」

? 「1人で技術の融合に成功したのは、ドクターだけですから。」

ドクター 「当たり前だ。よそ者を排除、或いは、そのよそ者に忠誠を誓い己を排除など、愚の骨頂だ。」

? 「仰る通りで御座います。」

ドクター 「そうだろう？さて、最後まで13号を観察するのでしょうか。」

? 「わたくしはお茶を淹れてまいります。」

ドクター 「おう、頼む。」

? 「では。」

謎の男は退室した。

ドクター 「楽しませてくれよ。私の13号よ。」

・・・  
文「物凄い気ですね。私が介入していいんでしょうか…？」

先ほど出発した文は、激戦区へ向かっていた。永遠亭で休憩していたため、体力は全開であった。

文「この気は、私がさつき相手をした人造人間？なんてパワーアップをしてるんですか！」

ここで怒っても聞こえない。

文「あの時、あと少し体力が残っていれば、トドメをさしてこんなことにはならなかったのに…。」

少々罪悪感を覚えた天狗少女であった。

・・・

13 「かつ！はっ！だっ！」

霊「！」

13号は霊夢に向かってラッシュを続けている。しかし、未だに1発も当たらない。それどころか、ヒュンツ！

霊「はっ！」

13 「ぎいっ！」

躲され反撃を喰らっている。

霊「・・・、あんたまさか。」

13 「？」

お互い止まった。霊夢は続ける。



霊「あんた、私に1回パンチしてみて。」

13「は?」

霊「早くしなさい。じゃないとこっちから行くわよ。」

13「・・・ほざけっ!」

霊「!!」

13号は右腕に力を入れ、全力でパンチした!が、

霊「やっぱり。あんたって防御力だけなのね。」

13「なん、だど?」

手で受け止めた。

霊「おかしいと思ったのよ。遅いのにして魔理沙が負けたんだろうつてね。あんた、防御力だけは一流よ。」

13「・・・。」

霊「でもね、決着を付けることはできるわ。私が全力の攻撃をすればあんたは消える。覚悟なさい。」

13「・・・ハハハハハ!」

霊「何が面白いの?」

13「貴様は誤解している。例えお前に効かなくても、他には効くということをお忘れしている。」

霊「は?」

13「例えば、この星とか、だな。」

霊「!まさか!」

13「その通り!俺はこの星を消し飛ばす技を連続で出せる。お前が止めている間にこの星は木っ端微塵だ!」

霊「そんなこと、させるわけ」

13「;アルティメットデッドドリイノウア」

わずか数秒で作りあげてしまった。

13 「さあどうする。こいつを放った後に俺を攻撃するのもいいが、この星はどうなる?」

霊「あんたなんて私1人でどうにでもなるわ。それは魔理沙に任せろし。」

13 「この俺が、お前の最大パワーまで待っていると思うか?」

霊「ちっ!どうすれば...」

魔「霊夢!私も一緒に攻撃するぜ!」

霊「何言ってるの!あれはどうするのよ。」

魔「それは...」

ちようどこのタイミングで、文が到着した。近づいた時に超化をといたらしく、普通の姿だ。

文「ふう、間に合いましたね。」

霊「文!どうしてここに?」

文「話は聞こえてました。私があれば止めますからお2人はあの人造人間を壊してください!」

霊「あんたに任せられるわけないでしょ。」

文「だあああっ!!」

ヴンツ!

即座に超化した。

霊「文、その気は」

文「説明は後です!さあ、ぶっ壊しちやっってください!」

霊「...、わかった。」

13 「お前はさっきの。最早貴様ではこれを止めることはできんぞ!」

文「そうですか?やってみなくちゃわかりません!」

4人は一気に戦闘力を上げた！

霊「行くわよ魔理沙！」

魔「おう！霊夢！」

霊；霊気「博麗かめはめ波」

魔；魔砲「ファイナルスパーク」

霊「かーめーはーめー、」

魔「ファイナル、」

13「吹っ飛べ!!」

13号は、妖怪の山へ向けて投げた。そして、

霊「波あああああ!!」

魔「スパーク!!」

2人の攻撃は13号へ直撃した。13号は太い腕でガードしている。

文「はあああ!!」

文は13号の攻撃を受け止めた！

文「ぎぎぎ。」

13「ぐうう!!」

霊「きいつ！」

魔「ぐぬぬ！」

互いに一步も譲らなかった。

すつかり夜になっていた。

•••••

に「な、なんて闘いだ。今までの戦闘データを遥かに超えている！」

こんな状況だというのに、カメラを使って必死にデータをとっていた。この星の命運などどうでもいいといった感じだ。

妹「おいおい、やばいじゃん！なんでデータなんてとってんだ。」

に「そりゃあ、生きてる限りは必死になりたいでしょ。」

妹「は？」

に「もしこれで助からなかったら、今までの研究は全部消えるでしょ。そんなこと考えても仕方ないじゃん。だから、生きてるうちに沢山とるのさ。」

妹「・・・そうか。すまん。」

妹紅は不老不死だ。それ故わからないのかもしれない。

に「・・・あつ！この反応は！」

妹「今度はなんだ？・・・あつ！」

妹紅も何かを感じとったようだ。

・・・

霊「くっ！」

魔「し、しぶといな！」

13「その言葉、そっくりそのまま返すぞ。」

霊夢は本当の全力を出せていない。13号が待つてくれなかったからだ。

3人はまだ競り合っている。しかし、1人は違った。

文「うつ、ああ！」

霊「文！」

13「どうやら、ここまでのようだな。」

勝利の笑みを浮かべた。

魔「くそっ！ここまでかよっ！」

霊「魔理沙！集中して！」

文「うっ！すみま、せん」

ノヴァに弾かれ、山の斜面へ飛ばされた。

魔「ち、ちくしよおおおお！」

13「ハハハハハ!!さらばあ！」

万事休すと思われた。霊夢ですらそう思った。

しかし！

ドンッ!!

ノヴァは止まった！

霊「!!!」

魔「なんだ！」

?「はあ、はあ、どうやら間に合ったみたいだね。」

止めていたのは、我らの主人公、孫悟天であった！

13「き、貴様は!!」

天「みんな、待たせちゃったね。」

霊「悟天！」

魔「に、悟天！」

天「2人とも！これは俺に任せて！」

霊「わかった！」

魔「よっしやあ！」

この時、13号はわずかに腕の構えが緩んだ。  
そこへ!!

レ；神槍「スピア・ザ・グングニル」

一本の槍が、13号の腹目掛けて飛んでいった!

13「ぐおお!」

いとも簡単に、穴が空いた。

レ「やつと腹を見せてくれた。これであんたは終わりよ。」

魔「レミリア!」

霊「味な真似してくれるじゃないの。」

レ「さあ、トドメをさしなさい!」

13「ば、馬鹿な…。」

構えている腕すら剥がれてきた。

天「よし!できるかわからないけど俺だって!(トランクス君と  
編み出した、あの技で!)」

天；「ビクトリーキャノン」

天「だああああああつ!!」

霊「波ああああああつ!!」

魔「があああああつ!!」

13「が…そんな…ご…く…う…。」

13号は、跡形もなく消し飛んだ。  
ノヴァは、星の外へ押し出された。

天「ふう、疲れたあ。」

霊「・・・。」

魔「やったぜえ!!」

レ「ふふ。」

・  
・  
・  
・

に「やったあ!」

妹「よっしゃあ!!」

妖「なんとか、勝てたみたいですね。」

・  
・  
・  
・

咲「流石は、お嬢様です。」

美「あ、やったんですね。」

チ「わーい!」

・  
・  
・  
・

霊「あなた、いいタイミングで来てくれたわね。」

天「たまたまさ。」

魔「さっ! 帰ろうぜ! 今夜は無理そうだから明日宴会しようぜ!」

天「おっ、いいねえそれ!」

霊「ちよつと、私嫌なんだけど。」

魔「霊夢は片付けが嫌なだけだろ。」

霊「そうだけど。」

天「まあいいじゃないか。」

霊「ふんっ。」

見事、大勝利を収めた悟天たち!

空は、満天の星空であった。

第13話まで続く

## 第13話 「遅いぞ悟天！みんなで宴会」

くあらすじく

霊夢が到着し、一気に優勢に持ち込めた幻想少女達。しかし、13号のタフさは霊夢の予想以上であった。

ここで13号は、ある賭けを提案した。

星を見捨て自分を倒すことに集中するか、星を守ることに集中するか、である。

ちようどいい時に文が到着したため、星は彼女に任せ、復活した魔理沙と共に13号を討つことに専念した。協力した訳は、霊夢のフルパワーを出させてはくれなかったからである。

ところが文は耐え切れず、星はおしまいかと思われたが、我らの主人公孫悟天が食い止めてくれたのだ！

それだけではない。隠れていたレミリアは、彼の登場で怖気付いた13号の一瞬の隙を突き、腹に穴を開けたのだった。

これにて、星は守られたのである。

さあ、異変も終わり平和が戻ったので、楽しい楽しい宴会だ！

幻想天霊伝説 第13話

くくくくくくくく

霊「うえくくん！」

チ「こんな弱い博麗の巫女なんて初めてだな！」

霊「ごめんなさい！ごめんなさい！もう痛いことしないでえ。」

チ「やっぱ人間なんてこんなもんか。あたいの相手なんて務まる訳ないね！あたいったら最強ね！」

妖精A「巫女いじめるの楽しいな。」

妖精B「いいぞもつとやれ。」

妖精C「自分から喧嘩売つといて、これだもんなあ。」

妖精達は、胸を張ったり、楽しんだり、呆れたりしていた。

そんな中、1人の男が現れた。



?? 「おめえたち、弱い者いじめは良くねえぞ。」

チ 「ん？おじさん誰？」

妖精A 「何だろう、この不思議な感じ。」

妖精C 「人間、じゃないよね。」

人間の姿はしているのだが。

?? 「オラのこととはともかく、もうその辺にしてくれねえか？」

妖精B 「いやだもつとやりたい。」

チ 「えーつと、この最強のあたいに勝ったらやめてもいいぞ！」

?? 「……。」

その男は、無言でチルノの頭を撫でた。すると、

チ 「あれ？なんだろ、この気持ち。」

チルノの表情が、先ほどよりも明るくなった。眩しいぐらいだ。

?? 「もうこんな悪いことしたら駄目だぞ。」

チ 「うん！ごめんね、小さな巫女さん。」

霊 「ぐすつ。」

チ 「帰ろつ、3人とも。」

4体の妖精は帰っていった。

?? 「おめえ、大丈夫か？」

霊 「うわくくくん。」

?? 「泣いてたらわかんねえぞ。」

霊 「痛いもん！痛いもん！」

?? 「ははっ、そんなに元気なら大丈夫そうだな。」

霊 「えぐつ……。」

?? 「それはそうと、おめえは悔しくねえか？」

霊 「え？」

?? 「負けっぱなしは嫌じゃねえか？」

霊 「・・・嫌だけど…。」

?? 「そんじゃ、オラと修行しねえか？」

霊 「修行？」

?? 「強くなるための特訓みてえなもんさ。どうだ？」

霊 「・・・うん、する！」

?? 「よし、そんじゃ決まりだな。そういやおめえの名前は？」

霊 「博麗、霊夢。おじさんは？」

?? 「オラか？オラは…。」

~~~~~

目が覚めた。

霊 「・・・、そうだったわね。師匠と初めて会ったのは。」

どうやら疲れた様子だ。

霊 「あ、悟天起こさないと。」

.....

昼頃、霊夢、魔理沙、文、レミリア、それから紫が博麗神社に集まり、宴会の会場を何処にするか話し合った。何故紫が混ざっているのかはわからないが。

霊 「さて、何処がいい？」

魔 「そりゃあ勿論博麗神」

霊 「嫌よ。」

紫 「博麗神社は飽きたから私は霊夢に賛成。」

霊 「やかましい。」

魔 「じゃあどうするんだ？にとりの研究所は狭いから嫌だぜ。」

レ 「紅魔館もやめてほしいわ。美鈴が怪我してるし、咲夜も疲れて

るから。」

文「文々。新聞も今、記事で忙しいのでやめていただき」

霊「あんたの所は緊急事態でもない限り行かないわ。」

文「なんか貶されたような…。」

紫「となるとやっぱり…。」

魔「守矢神社だな！」

早「おーい！」

霊「…。」

早「嫌でえす！」

文「守矢神社にしましょうか。」

レ「異議はないわ。」

早「ハアツ☆」

紫「決まりね。」

早「待つてください！今回あの人造人間にトドメを刺したのは誰か
思い出してください！」

霊「ちよつと早苗！」

魔「そういえばそうだな。私はトドメを刺したことになってないん
だろ？霊夢。」

文「(ニヤニヤ)」

本当は、某新聞により霊夢が倒したことにされただけなのだ。勿
論、霊夢はこれに対して文句を言わなかったのである。

霊「ぐぬぬ。」

レ「まあ私は紅魔館じゃなければ何処でもいいんだけど。」

早「決まりですね。」

ウザい笑顔を見せつけた。

そんなわけで、宴会会場は博麗神社になった。

・
・
・
・
・
・
・
・

夜になった。宴会の準備は3割が悟天、7割は霊夢がした。

3割しかできなかつた理由はというと……、

　　6時間前

天「よし、みんな休憩しよう。」

大&ミ「はい。」

リ「うくん。上手くないなあ。」

ル「……。」

チ「もう?」

相変わらず、チルノは元気はつらつだ。

リグルは悩んでいるように見える。

ルーミアは昨日の戦闘のショックで、修行をできないでいた。

天「ははっ、チルノは元気なあ。」

チ「うん!もつと強くなりたいもん!」

大「チルノちゃんには敵わないよ。」

天「ごめんね、みんなを助けられなくて。」

リ「まあ、勝てたから大丈夫ですよ。」

天「妖精以外の3人は、怪我とか大丈夫なの?」

ミ「いったいよ。」

大「私は妖精なので大丈夫です。」

リ「もう大丈夫、いてて。」

ル「……。」

天「ルーミアは、暫く休んでて。」

　　そう言い、頭を撫でた。

チ「今日は暑いし紅魔館で休憩しようよ。」

天「今入って大丈夫かな?」

咲「お嬢様から許可が下りましたよ。」

天「うわ、時間停止で聞いてたのか。」

大「じゃあお邪魔します。」

ミ「邪魔するぞ。」

リ「ういーす。」

一行はそれぞれ休憩した。

そんな中、

レ「悟天、ちょっといいかしら？」

天「ん？なんだい？」

レ「あなたに会わせたい子がいてね。」

そう言い、地下に案内した。扉がある。

天「ここに誰かいるの？」

レ「ええ。」

天「随分と隔離されてる気がするけど。」

レ「前までは隔離してたわ。守るためにね。」

天「・・・。」

自分が来る前の紅魔館で何があったか、なんとなく察した。

レ「ほら、連れてきたわよ。」

???「・・・。」

天「君かい？俺に用があるってのは。」

その少女はもじもじしている。

レ「自分で言いなさい。私は何も言っていないわよ。」
???「・・・。」

赤面している。恥ずかしいのだろうか。

チ「兄貴い、もう始めようよ。」

遠くから聞こえた。

天「ちよつと待っててー！すぐ行くからー！」

行こうとした時、少女は悟天の袖を掴んだ。

??? 「わ・・・わ・・・」

レ「・・・」

フラン「私、フラン！そ、その、私も、修行したいの。いい？」

天「・・・うん！ほら、一緒に行こう！」

フランの手を握り、走っていった。

レ「フラン、ようやく喋れるようになったのね。」

姉は薄ら笑いを浮かべた。

くく

と、しつかりとした闘い方を教えるのに時間がかかったわけだ。

天「いや〜ごめんね霊夢。」

霊「フンっ！」

御機嫌斜めのようなだ。会場がここと決まった時からだが。だいたいのメンバーが集まった。

魔「よおーし、それじゃあ始めようぜ！」

紫「せーのっ、」

「カンパニー!!!」

宴会が始まった。紅魔メンバーと地霊殿メンバーはまだ来ていない。神社だけだと狭いので、野外も使っている。

魔「うめえな！この肉！」

霊「食べ過ぎると太るわよ。」

早「霊夢さん、既に魔理沙さんは」

魔「早苗え、ちよつと話があるんだけどお。」

早「すいませんすいません！」

メインは焼肉のようだ。

妖「私は肉など食べません。武人の心に反します。」

妹「そう言うなって。ほら、たん塩食ってみろ。」

妖「いいえ食べません。」

妹「ほいつ」

妖「むぐつ」

無理やり押し込んだ。

妖「んんん！」

みるみるうちに笑顔になっていく。

幽「あらあら、気に入ったようね。」

妖「そ、そんなこと、ありません！」

この人物は妖夢の主人の西園寺幽々子。このように、異変に関係な

くても参加していいのだ。

チ「うわあ、これうんまいねえ…。」

大「わわわ、溶けてるよチルノちゃん！」

ル「肉は最高なのだ。」

ミ「食べる側も悪くないですね。」

リ「なんか、複雑になるな。」

ル「なんでなのだ？」

リ「これ基本牛の肉だろ？お前ならいいかもしれんが、私やみすちーは原型があれだから。」

ル「細かいことは気にしちやダメなのだ。」

リ「・・・そうだな。」

文「あやや、肉は最高ですね。」

霊「あんた烏でしょ。」

文「天狗なので問題はな」

??「おい天狗う、こつち来いよく。まさか今回は私たちの酒が飲めないとは言わないよな？」

文「あーいやいや、言うわけないじゃないですか。」

霊「地霊殿メンバーも来たみたいだから頑張つてね。」

文を連れていった人物は、鬼の四天王の1人伊吹萃香。勿論彼女はサイヤパワーは宿していないので今では文より力は劣るのだが、文はこのやり取りを大事にしてるらしく大人しく連れていかれるのだった。

??「すみません、また呼んでもらつて。」

霊「いいのよ。いつも言ってるでしょ。こういうのは人数が多い方がいいんだから。」

この人物は古明地さと。地下にある地霊殿の主人だ。他にも妹

のこいし、鬼の四天王の1人星熊勇儀、水橋パルスィ、ペットの火焰猫燐と霊鳥路空が来ている。

こ「……。」

天「ん？」

じーつと悟天を見つめている。

こ「私こいし。お兄ちゃん酒に強そう。」

天「はは、そうかなあ。」

悟天は酒に強い方だ。すぐに見抜くとは只者ではない。

こ「お兄ちゃん、前に博麗神社にいたおじさんに似てる。」

天「へえ。名前は知ってる？」

こ「それは知らない。話したことないから。」

天「そうなんだ。前から思ってたけど、その人が誰か気になるなあ。」

霊「……。」

天「霊夢は覚えてないんだっけ？」

霊「うん……。」

天「でも、そんなことあるかなあ。」

霊「私にもわからない。ずっと暮らしてきたのに顔と名前がどうしても思い出せない。」

天「変だなあ。」

こ「にしてもお兄ちゃん、私が能力を使ってるのにどうして私と話せるの？」

天「能力？」

こ「へ無意識を操る程度の能力を \surd 持っているの。だから使ったら誰も私に気付かないの。」

天「その能力ってやつはみんな持ってるの？」

こ「たぶん。」

天「面白そう。霊夢は？」

霊「へ主に空を飛ぶ程度の能力」よ。」

天「魔理沙は？」

魔「ん？へ魔法を使う程度の能力」だぜ。」

天「確か咲夜は」

咲「へ時を操る程度の能力」です。」

天「うわっ、びつくりした〜。」

霊「あ、来たのね。」

レ「お邪魔させてもらうわ。」

魔「あれ？フランは？」

咲「修行でお疲れになったのでお休みになっています。」

魔「何したんだ？に、悟天。」

天「サイヤパワーが宿ったらしくて…。」

咲「お嬢様もそうでしたから仕方ありません。」

魔「咲夜つてに、悟天に対して敬語なんだな。」

咲「歳上だからね。」

天「咲夜つて…。」

咲「19です。お嬢様から悟天さんは23と聞いています。」

天「なんで知ってるんだらう。」

レ「へ運命を操る程度の能力」よ。あなたの過去を見たの。」

天「俺のプライバシーは…。」

レ「うふふ。私次第よ。」

悪びれる様子はない。

天「チルノは？」

チ「へ冷気を操る程度の能力」だよ！」

天「そのまんまなんだね。」

チ「どうだ兄貴！すごいだろ！」

天「うん・・・、そうだね。」

早「私はへ奇跡を起こす程度の能力〈を〉持ってますよ！霊夢さんとは質がちが」

霊「悟天はなんか能力はあるの？」

天「んゝ、なんだろうね。気を操る程度の能力かな？」

早「ハアツ☆」

魔「それならみんな使えてるぜ。」

天「だよなあ。」

に「もしかしたらみんなのパワーアップに答えがあるかも。」

天「また急だなあ。」

に「やっと私の番が回ってきたよ。霊夢もそう思うでしょ？」

霊「確かにね。私や魔理沙がサイヤパワーを宿した時よりみんな遙かに強いわ。」

魔「私も文があれに变身できた時のパワーは驚いたぜ。」

に「何か心当たりはない？」

天「うゝん。」

に「それはそうと、魔理沙はなんで悟天君を呼び捨てなの？」

魔「？変か？」

に「だって悟天君のことを2人で話す時つてにいちやんって呼んでて」

魔「わあああああ!!」

顔を真っ赤にして叫んだ。

天「そうなの？」

霊「へえゝ。」

霊夢はニヤニヤしている。

に「え？そんなに知られなくなかったの？」

魔「ちきしよお、言っておけばよかったぜ…。」

天「俺は別に構わないけど。」

魔「え？」

天「だから、にいちゃんって呼んでもいいよってこと。」

魔「・・・ほんとか？」

天「そりゃ6つも離れてるし、変じゃないよね。」

早「魔理沙さんも可愛いですね。」

魔「ちよつと待て、なんで知ってるんだ？」

早「ハアツ☆」

天「霊夢が教えてくれて。」

魔「れーいーむー？」

霊「魔理沙、後ろ。」

魔「は？」

ア「魔ー理ー沙ー！ー！」

魔「うわっ！出やがった！」

ア「今日こそあなたの初めてを奪うわア！」

魔「かあっ！気持ちわりい！やだお前！」

ア「アアアアア！」

魔「すまん、ちよつと席を外すぜ！あと早苗、覚えてろよ。」

早「ええ！無☆視されてると思ったのにく。」

魔理沙は外へ逃げていった。

天「そっかあ、妹分か。」

霊「忙しいやつね。」

天「・・・。」

霊「どうしたの？」

天「いや、あのアリスの目、あの時に見たのと同じだなんて。」

霊「あの時？」

天「人に寄生することでその人を操る敵と闘ったことがあってさ。それと同じなんだ。」

霊「誰かに操られてるってこと？」

天「たぶん。」

に「あ、そうだ悟天君。」

天「なに？」

に「例のすごい戦士が誰かわかったよ。」

霊「例のすごい戦士？」

天「クウラが魔理沙と会う前に闘った相手のこと。で、誰だったの？」

に「やっぱり、アリスだった。」

霊「!!」

紫「!!」

天「気の質が変わってたけど、やっぱりか。」

に「それ以外にありえないんだよ。アリスだけ傷だらけだったし。」

天「俺たちが知らないうちにアリスもその超化ってやつになってたんだよね？」

に「そう。そこから何が起きたかわからないけど、しっかり闘えてたみたい。」

天「そうか。このことはまた今度ゆっくり話すか。」

に「そうだね。」

紫「あくあ、私の幻想郷がどんどん戦闘の国みたいになっていくわす。」

霊「あんたの幻想郷じゃないでしょ。」

紫「えへへ。」

霊「可愛くない。」

天「あはは、仲良いね。」

紫「そりや、霊夢が6歳になるまでは私が世話してたし。」

天「そうなんだ。親は？」

紫「・・・複雑なのよ。」

天「ごめん。」

霊「はい、暗い顔しない。じゃんじゃん飲んで買って！」

それから数時間、楽しい時間が流れた。

悟天はというと、勇儀や萃香と飲み比べをしたり、幽々子と大食い

対決をしたのであった。

楽しい時間というのは流れるのが早いもので、殆どの幻想少女達は酔って寝てしまった。飲み比べが祟ったのか、悟天も寝てしまった。た。

悟天が目を覚ますと、みんな気持ち良さそうに眠っている。

天「あれ、霊夢と魔理沙がいないな。」

気を探ってみたところ、どうやら神社の屋根の上にいるらしい。行こうとしたら、話声が聞こえた。

魔「その、ありがとうな、霊夢。」

霊「あんたがいなかったら異変解決が面倒になるから助けただけよ。」

魔「はは、霊夢らしいぜ。」

霊「今度油断したら助けないからね。」

魔「もう油断はしないぜ。痛かったからな。」

霊「ならいいわ。」

魔「それに、霊夢を殺せるのは、私だけだからな。」

霊「あんたを殺せるのも私だけよ。」

お互いの拳を軽くぶつけた。

魔「にしても霊夢、にとりに聞いたけど、その時の私は相当惨い姿だったらしいけど、なんで動じなかったんだ？」

霊「慣れ、かしらね。」

魔「そんな惨い異変たくさんあったか？」

霊「紫と幻想郷の外側の土地に行ったことがあったのよ。それはそれはひどい有様だったわ。」

魔「へえ。地名とかわかるか？」

霊「えっと、チャインってところだったと思うわ。その国が幻想郷

を侵略しようとしてたから、私と紫で軍隊を壊滅させたの。」

魔「普通に言ってくれるな。」

霊「力はなかったから。」

魔「そうだ、霊夢はにいちちゃんのことどう思ってるんだ？」

霊「き、急に何よ。」

魔「半年ぐらいつと一緒なんだろう？そりや恋仲にもなるかなって思ってた。」

魔理沙は楽しそうだ。

霊「別になんでもないわ。ただの同居人ってところね。」

魔「ちえっ！つまんねえの。」

霊「そういうあんたは悟天のことどう思ってるのよ。」

魔「にいちちゃん、かな。私は独り身だし。」

霊「魔理沙の親もなかなかひどいわよね。」

魔「子どもを捨てるような親は親じゃないぜ。」

霊「ま、そうね。」

魔「だから私は、本当の兄貴として見てるぜ。」

霊「そう。」

魔「にいちちゃんとの進展、楽しみにしてるぜ。」

霊「あれと恋仲とか絶対ありえないから。」

天「(傷つくなく。)」

物陰に隠れ、話を聞いていたのだった。

こうして、宴会は無事終了した。

片付けは、霊夢が6割、悟天が4割であった。

.....

？「ドクター、この度はお疲れ様でした。」

ド「ああ。」

？「13号のデータは如何致しましょうか？」

ド「一応保存しておけ。クウラの細胞はまた使うぞ。」

？「アレと何方を先に使いますか？」

ド「アレを先に使うとしよう。」

？「しかし、アレはあと数年かかるのでは？」

ド「問題ない。闘ってるうちに勝手にパワーアップするだろう。」

？「そうですね。力が少し足りないだけで形は出来上がってますからね。」

ド「忘れるところだった。核にプロテクターは張ったか？」

？「勿論です。丈夫にできてますよ。」

ド「これが肝心だからな。さて、半年後に解き放つか。」

ド「セルよ。」

第2章？時空を超えた過去の強敵達？

〈完〉

第14話へ、続く…。

第3章? 幻想少女強化計画?

第14話 「プロジェクト 開幕」

に「皆さん、こんにちは。ご存知河城にとりです。あらすじはどうしたって? 宴会は直接読んだ方がいいと思いますよ(ドヤア)。」

「それはさておき、どうして私から始まったか、気になるでしょう? それは他でもない。この章は…、私が主役だからさ!」

デデーン!!

「いやほんとだよ! 誰? 嘘でえす! って言ったのは。」

「勿論、私がサイヤパワーを手に入れて霊夢達と一緒に闘うわけじゃないさ。頭脳派だからね。私は闘う人材を育てるのが好きなんですよ。」

「というわけで、私が幻想郷の少女達を強くするから、主役になったってわけさ! よろしくね!」

幻想天霊伝説 第14話

妖「にとりさん、カメラに向かって1人で何してるんですか?」

呆れた顔で見ている。

に「それは言っちゃダメだよ。って妖夢じゃん! いいところに来てくれた! ほら、一緒に喋って!」

妖「ちよ、なんで私が。」

に「だつて妖夢つてメタいじゃない? こういうトークは全部妖夢に任せたいくらいなんだよ。」

妖「メタい? 私がですか?」

に「誰よりもメタいよ。」

自覚がなかったらしい。

妖「そうですか…。私はただ作者の」

に「そこらへんだよそこらへん！」

妖「もうわかりません。」

に「ああ、もういいや。」

妖「ところで、強くするとは具体的にどんなことをするんですか？」

に「それはまだ妖夢にも言えないなあ。強化対象だし。」

妖「強くなる方法を教えないのに強くなれるんですか？」

に「それがなれるんだよなあ。」

妖「嫌な予感がします。」

に「それはそうと、あの異変からどれくらい経ったっけ？」

妖「1ヶ月くらいですかね。だんだん暑くなってきましたね。」

に「そうか、もう1ヶ月か。早いもんだね。」

妖「にとりさんが思い浮かべてるのはにとりさんが作ったゲームのことですよね？」

に「あ、バレた？宴会の2日後にリリースしたからね。」

妖「テレビゲーム、でしたよね。テレビすら幻想郷には画期的なものだったのにゲームまで作ってしまうとは。」

に「それに格闘系にしてよかったよ。ちょうど異変の後だったから人里のたくさんの人が見にきたんだよねえ。」

妖「あんまりゲームの話ばかりしてもダメですよ。」

に「あ、そうだった。」

「超化、だっけ。文がなれるようになったからみんな追い付こうと必死なんだよね。これの名前は考えておかないといけないね。」

妖「そうですね。1ヶ月だけで超化を成し遂げた方もいますし。」

に「レミリアのことだね。流石はカリスマって感じ。」

「13日目に満月になるように計算して、自分を人間の血の中に閉じ込めて、13日目の夜で一気に気を解放したらなったもんね。」

そう、文の次に超化を成し遂げたのである。

妖「吸血鬼ならではの発想ですよね。」

に「そうだよ。じゃあ半人半霊は」

妖「ありません。」

に「だよね。ははは。」

妖「にしてもその人間の血って…。」

に「そこには触れないで行こう。」

妖「デスヨネ。」

に「あと、サイヤパワーを宿した人もいるよね。」

妖「フランさんとこいしさん、ですね。」

に「そうそう、悟天君と修行したからだね。こいしちゃんは最近見かけないけど。」

妖「おそらく能力を使ってるからですね。」

に「あ、だから見えなくなったんだ。」

妖「今となっては他の弟子たちにも見えてないでしょう。」

に「だろうね。」

妖「私も早く、超化できるようになりたいです。」

に「その為にも、だよ。ちよつと出てっけてくれる?」

妖「な、なんですか急に。」

に「もう始めるの。」

妖「始めるって何をですか?」

に「あ、アリスだ。」

妖「えっ!?!」

反射でドアを見たが、

ガンツ!

妖「あっ…。」

気絶させられてしまった。

に「ごめんね、こんなことさせちゃって。」

霊「いいわよ別に。これでみんな強くなれるわけでしょ?」
に「勿論さ。」

霊「ふふ、頑張りなさいよ。準備は整ったみたいだし、私は帰るわ。」
に「ありがとね。」

研究所から出ていった。

に「さてと、やっと本題に入れそうだね。」

「それじゃあまず1人目、始めようか。」

.....

咲「・・・あれ？私は・・・。」

目を覚ますと、いつものように自分のベッドの上にいた。

咲「確か、お嬢様と一緒にティータイムを楽しみながら、面接しにくる人を待っていた筈ですが。」

他にも不審な点がある。メイド服のまま寝ていたということだ。

咲「近頃は芯のある人間が来なくなったとお嬢様が仰ってたけど、何故だろう。大丈夫な気がする。」

根拠はないが、今日面接に来る人間に少し期待していた。

咲「！ 気が乱れてる。ホールだ！」

能力を使ってすぐに駆けつけた。少々遅かったのだが。

来てみると、館内はボロボロになっていた。

咲「これは・・・。」

美「咲夜、さん。逃げて・・・。」

と言いかけたところに、エネルギー弾が飛んでき、美鈴に直撃した。
ドーンッ！

咲「美鈴！」

既に、息はなかった。

前方を見ると、見覚えのある影があった。

咲「あんたは！」

15号であった。

咲「どうして、あの時、壊したのに！」

15「ククク」

咲「!!」

咄嗟にナイフを投げたが避けられた。いや、15号が何かに吸い込まれた。

咲「まさか！」

吸い込まれた先へ走った。

そこには、にとりの撮影映像で見た合体13号がいた。

咲「な、なんで…。だって、あんたは霊夢や魔理沙が。」

13「ガア！」

容赦無く襲ってきた！

咲「くっ！」

右手に握っていたナイフで首を飛ばそうとしたが、

カンッ!

咲「なっ!」

13 「ククク」

ナイフの刃が折れた。

13 「ガア!」

咲「づっ!」

腹に強烈なパンチをうけた!そのまま縮こまってしまった。

咲「う、こんなところで…。」

改めて気を探ったところ、誰の気も感じ取れなかった。もう生きているのは、自分だけなのかもしれない。

13 「ククク」

咲「お嬢、様。」

レ;神槍「スピア・ザ・グングニル」

レミリアが不意打ちをかまし、煙が上がった隙に咲夜を助け出した。

レ「大丈夫?咲夜。」

咲「お嬢様!うっ」

レ「咲夜はここで休んでなさい。」

咲「でも。」

13号は待たなかった。問答無用でレミリアに襲いかかった!

レ「ふん、はあっ!」

攻撃を躲し、顔面に一撃を食らわしたが、全く効いていなかった。
13号はニタニタ笑っている。

咲「(何故、お嬢様は変身しないのかしら)」

13「ガア！」

レ「ぐあっ！」

上から地面へ叩きつけた！そして、

13「死ねえ!!」

右手から勢いよくエネルギー波を発射した。爆風で咲夜も吹き飛ばされた。

咲「うわあっ！」

・・・

気絶してたらしく、目が覚めると13号はいなくなっていた。
だが、見たくないものは見えてしまった。

咲「お嬢、様？」

先の方に、動かなくなつたレミリアが倒れていた。
ゆっくりと近づいた。

咲「お嬢、様……」

目の前まで来た。耐えきれず、目からは涙が溢れ出してしまった。
それでも呼びかける。

咲「お嬢、様……」

抱き寄せたが、やはり動かない。レミリアは白目をむいている。

咲「お嬢様、お嬢様」

強く抱きしめても、何も変わらなかった。

咲「お嬢様、お嬢様ああああ!!」

「うわああああ!!」

大声を出して泣いてしまった。

その声に気付いたのか、天井を壊し、13号が現れた。

13「ククク」

咲「ああああ!!」

咲夜の気が、どんどん膨れ上がってきた!

13「ナニツ!」

ピコンツ、ヴンツ!!

「うわああああ!!」

次の瞬間、瞳の色は明るくなり、髪も少し逆立ち、迸る衝撃波を放った!

13「ア…。」

咲「!!!」

13「ウツ」

ギロっと睨んだのも束の間、折れてない残りのナイフで逆襲を始め

た！

咲「グッ！」

13「ガア！」

胸部に斬りつけた。

咲「アゝア！」

13「ウア！」

怒り狂ってしまった。もはや誰にも止められない！

咲「ウツ！アア！ダツ！ハツ！ハツ！ハアゝツ！」

13号がどんどん斬られていく。

咲「ギッ！ガア！アアゝ！ハツ！」

もう、出した声と斬りつけた回数が合っていない。口以上に腕が速く動いている。

既に、13号の腕と首は無くなっている。

咲「ハアゝツ！アゝツ！ガアゝ！」

「ウゝアゝアゝアゝアゝアゝアゝ!!」

最後に、13号の巨体を半分に斬った。

咲「はあ．．．はあ．．．」。

文が倒せなかった敵を、一方的に倒してしまった。

咲「・・・うう、お嬢、様…、みんな…」

また泣いてしまった。無理もない。一瞬にして家族を失ったのだから。

穴が開いた天井から、冷たい雨が降り注いだ。慰める者は、もういない。

咲「う・・・ぐ・・・。」

泣いているが、超化は暫く解けなかった。

? 「はい、これにて終了！お疲れ様〜！」

咲「・・・??」

第15話へ、続く…。

第15話 「因縁を断ち切れ！」

幻想天霊伝説 第15話

妖「・・・ん？ここは…。」

気が付くと、見知らぬ荒野の真ん中で倒れていた。服も少々痛んでいる。

妖「思い出せない。私は、闘っていたのか？」

ここは明らかに戦場だ。壊れた旗や武器がある。

妖「！ 何か来る！」

遠くから無数の気を感じた。

それは、妖精軍団であった。それだけではない。一体一体が今のチルノくらいの気を持っている。

妖「こんなに強い妖精がこの数ですか。」

次の瞬間、妖精軍団は妖夢目掛けて一斉に掛かった。

妖「これでも、あれからずっと修行してきたんです。」

ゆっくりと2本の刀を抜いた。

妖「倒せるものならー」

「倒してみなさいー」

気を高め、妖夢も駆け出した！

妖「はっ！たあっ！」

大量の妖精を一太刀ずつ斬っていった。妖精達は妖夢のスピードについて行けず、反撃すらままならない。

妖「やつ！せいっ！」

みるみるうちに減っていく。

見上げると、離れて気を溜めていた10人の妖精が一気にエネルギー波を発射した。

しかし、避けようとしなかった。

妖「それくらいなら！」

妖；断命剣「瞑想斬」

妖「はああっ！」

エネルギー波を両断した！

二手に分かれたエネルギー波は地面に当たり、爆発し埃が舞った。

煙となった埃から一気に飛び出し、残り十数人の妖精達に斬りかかった。

妖；人鬼「未来永劫斬」

1人残らず斬り裂いた。

妖「こんなものですかね。でも、こんな状況前にもあったような。」

ぼやいていると、遠くから何か歩いてくる。大柄な男だ。

妖「!!」

忘れもしない。それは彼女を3発で倒した14号だったのだ。

・・・

天「いや、今日も人里は賑やかだなあ。」

霊「感心してないで荷物持ちなさいよ。」

天「ええ、霊夢もなんか持ったら？」

霊「私はか弱い乙女よ。あんたが全部持ちなさい。」

天「そんなあ。」

悟天と霊夢は買い出しに行っていた。

天「にしてもさつきは何処行ってたの？」

霊「にとりの手伝いよ。」

天「どんな？」

霊「悟天には言わないように言われたわ。」

天「ええ！なんで？」

霊「口が軽そうだからって言ってたわよ。」

天「そんなに隠す事なのかなあ。」

霊「知らないわ。」

そんなことを話しながら歩いていると、あることに気付いた。

天「そーいやくこの世界に老人の方はいないの？」

霊「いるわよ。そこにいるじゃない。」

目の先には、白髪で垂れ目の男性がいる。しかしシワがない。

天「あのお兄さんのこと？」

霊「そ。」

天「髪が白いだけじゃん。」

霊「あれがここの御老人。外の世界とかはもつと弱々しくなるらしいわね。そこらへんはほんとかこの住人でよかったわ。」

天「老けたら嫌だもんね。サイヤ人は老けにくいけど。」

霊「はあ？それどういうことよ!？」

天「いや〜へへ。」

霊「はいあれも買うわよ。」

天「ごめんって〜。」

紫「2人ともラブラブじゃないの〜。」

天「うわ！吃驚したあ。」

突然、2人の間にスキマを作って現れた。

霊「は？誰がこんな奴とラブラブしなきゃいけないのよ。」

天「相変わらず辛辣だなあ。」

霊「思ったことをそのまま言っただけよ。」

紫「・・・それでいいのかしら。」

霊「ふんっ。」

天「ま、まあ次行こうよ。」

霊「それじゃあれね。」

天「へいへい。」

紫「・・・(このままだと、また失うわよ、霊夢)。」

こうして、1人の男は1人の女に振り回されるのであった。

・・・

文「う〜ん、上手くいきませんね〜。」

権「文さん、また例の変身の特訓ですか？」

文「はい、あの力を自在に操りたいので。」

文はいつでも超化することができなかつた。

無理もない。あの孫悟空ですら自在に操るために別の星で修行していたのだから。

権「それにしても、どうしてそんなに頑張るんですか？」

文「今まで届く筈もなかった霊夢さんに追いつく千載一遇のチャン
スですから。」

椀「別に追いつかなくても。強い方増えましたし。」

文「それじゃ駄目なんです。」

椀「なんでですか？」

文「それはやっぱり…」

空を見上げてこう言った。

文「見守りたいからですよ。一番近くで。」

・・・

に「いやゝ順調順調。」

なにやらモニターを見ている。

ビー、ビー

に「ん？誰だろ。」

電話らしきものをとった。

?? 「もしもし、にとり様でしょうか？」

に「そうだよ。そんなにかしこまらなくていいのに。」

?? 「いえ、世話になっている身でもあるので。」

に「私と君たち月人の仲でしょ？気にしなくていいって。」

?? 「有難う御座います。」

「早速ですが、例の兵器はできたでしょうか？」

に「うん、もう直ぐできるよ。」

?? 「本当ですか！」

に「もうちよつとみんなの様子を見たかったところだけど、急いで
いるんならしようがないよね。」

?? 「思ったのですが、どうして我々に協力してくださるのですか？」
に「戦争ではこちらにも迷惑かけたからだね。」

「私1人でも、月の都と仲良くできるきっかけになればと思つて。」「恩にきます。私も彼女らを傷付けてしまい申し訳ありません。」「に「戦争だから仕方ないよ。」「?? 「それでは、次は取引の際に会いましょう。」「に「それじゃあね。依姫。」

•••••
妖「こんなことがありますか？」

状況もわからない上因縁の相手と出くわすとは、流石の妖夢でも予測不可能であつた。

妖「も、もうあなたなんかには負けませんよ！」

腕が震えていた。あれから1ヶ月修行したとは言え、あの敗北の恐怖は勝たねば消えない。

妖「た、たあつ！」

14 「ンツ！」

勢いだけで斬りかかった。パンチを3回避け背中を斬りつけようとしたが、
カンツ！

妖「うつ」

力が入らず斬れなかった。その隙を突かれ、

14 「ガアツ！」

妖「うあゝっ！」

またしても殴り飛ばされてしまった。

妖「・・・もうっ！なんで・・・」

肉体への痛みはあの時ほどはないが、精神への痛みは大きかった。

妖「どうして・・・、どうして・・・。」

悔し涙を流した。敵はすぐそこまで迫ってきている。

その時、師の言葉を思い出した。

妖忌「いついかなる時においても、迷ってはいけない。」

「お前には白楼剣がある。もし、自分を見失い取り乱してしまった場

合はー」

「その刃で迷いを断ち切れ」

妖夢「迷いを、断ち切る・・・」

自分の中で、震えている己を白楼剣で斬った！

妖夢？「あなたは、もう大丈夫よ。自信を持って。」

妖夢「・・・。」

臆病な人物が溶けるように消えた。

その瞬間、体の震えが止まった。

14 「ガアッ！」

構わず殴りかかってきた。

が、その大きな拳を小さな手のひらが防いだ!!

妖「もう、あなたは怖くありません。」

ヴンッ！

ゆつくりと顔を上げながら、気が一気に上がった！
髪に変化はなく、瞳の色が明るくなり、銀のオーラを解き放ったの
だ！

妖「!!!」

14「アツ」

シャツ!!

一瞬だった。14号が声を出した時は既に、上半身と下半身は分か
れてしまったのだ。

ス・

超化を解いた。いや、解けた。

妖「・・・おかしい。やっぱり何かおかしい。」

少し考え込んでいた矢先、

?「はい、ノルマ達成！もういいよ。」

妖「・・・クスッ、そんな気がしました。」

銀の勇者はニヤリと笑った。

・・・

一方紅魔館では、ある人物の面接をしていた。

レ「それじゃあ、入っていいわよ。」

??「失礼します！」

ノックをし、入室した。ドアもしっかり閉め、椅子の横まで歩き立
ち止まった。

レ「いいわよ。座って。」

??「はい、失礼します。」

レ「ふふ、それじゃあ改めて訊くわ。お名前は？」

??「えーと…」

レイ「レイです！」

第16話まで、続く!!!

第16話 「再び燃え上がった炎」

妹「・・・あれ？私は、何処にいるんだ？」

夜寝て起きてみると、まだ夜であった。夜空を見上げている筈だが、自分の身体が見当たらない。

妹「もしかして私、ようやく死ねたのか？」

しかしこの風景に見覚えがあった。

いつだろう？

妹「この月、そしてこの丘。まさか！」

タイミングを見計らったかのように、1人の少女が丘へ歩いてきた。

その少女は紛れもなく自分自身であった。

妹「あつ！やめろっ！その丘を掘り起こしたら駄目だ！」

声が聞こえてないのか全く手を止めようとしなない。

そして、例の薬を掘り出してしまった！

妹「やめろっ！やめてくれ！それを飲んじやいけないんだ!!」

少女は不思議そうに眺めた後、蓋を回した。

「やめてくれえっ!!!」

意識は少女に接近しているが、触れることができない。同様に声も届かない。

妹「くそっ！」

少女を何度も殴っているつもりだが、その腕すら見えない。

少女は薬を飲み干してしまった…。

妹「……。」

少女は去っていった。彼女は泣いていた。

妹「…なんで、ムキになってんだろうな、私。過去はもう変えられないって、わかってる筈なのに…。」

そう。妹紅はこうして不老不死になり、へ老いることも死ぬこともない程度の能力を手に入れたのだ。

幻想天霊伝説 第16話

妹「あれ、意識が。」

景色がどンドン移り変わった。まるで早送りのようだ。

妹「この時何してたっけな。」

流れる情景を見ても思い出せない。特に何もしていなかったのだろう。

すると、急に流れが止まった。

妹「ん、そういえばそうだったな。」

それは、自分が妖怪退治をしている様子だった。能力故に無敵だったのだ。それだけでなく、元々呪われたような存在だったので呪術も彼女には効かなかったのだ。

妹「はは、懐かしいな。まだあの時は妖怪退治してれば報われて死ねるとか思ってたっけな。」

彼女の言う通り、それを信じて300年程妖怪退治を続けてきたのだがこの通り死ななかつた。なのでまた約300年間、退屈な時を過ごしたのだった。

退屈だった歴史も早く流れ更に300年が過ぎた辺りで、

妹「!!」

自分をこんな身体にした原因の人物、蓬莱山輝夜との再会だった。輝夜は本来月人であり、同じように薬を飲んでいたので不老不死だった。

妹「あの顔見ると虫唾が走るな。」

2人は殺し合っていた。

とは言え双方共に死ねないので、殺しては生き返り、死んでは蘇つての繰り返しであることは本人らもわかっていた筈だったが、お互いに許せない何かがあったのだ。

妹「・・・っけ!」

気を損ねてしまった。

そこからまた、景色が流れていった。

妹「そーいや何かした記憶はねえな。ここ最近になるまで。」

と言った途端、親友の上白沢慧音との出会いが映った。

妹「あつ。」

表情が明るくなった。それは、次の光景を見ても変わらなかった。

妹「こ、これは。」

博麗霊夢との出会いだ。自分を苦しめたのは輝夜に続いて2人目だったのだ。

立っていたのは妹紅であつたが。

妹「そっか。ギリギリ勝ったんだっけ。白黒魔法使いもなかなかだったなあ。あの時は。」

頭に『第二次月面戦争』を思い浮かべた。

妹「あの時、はつきりした。もう私じゃ白黒魔法使いはさておきあの博麗の巫女には勝てねえって。」

「月の軍の隊長と互角に渡り合えるなんてな。」

嬉しいような悲しいような…。

次のシーンで思わず頬を赤らめた。

妹「あ…。女たらし。」

孫悟天との出会いだ。

く6ヶ月前く

天「いやく参ったなあ。」

妹「おい！あんた大丈夫か？」

天「大丈夫なことは大丈夫なんだけど、道に迷っちゃって。」

妹「それなら私が案内してやる。」

天「おっ！サンキュー。」

「俺は悟天。君は？」

妹「藤原妹紅だ。話は変わるが、さつき竹林が吹き飛ばされてるのを見たんだが、知らないか？それで心配になってさ。」

天「あ、それは俺だよ。これで道が見えるかなって。」

妹「なんだと…?」

天「えっ、なんで怒ってるの?」

妹「当たり前だろ。竹林荒らしやがって。」

「さては妖怪だな?」

天「妖怪じゃないって!もうちよつと俺の話を」

妹「妖怪退治は久しぶりだが、ここで倒させてもらうぞ!」

天「はは、やっぱ幻想郷って好戦的だな。」

妹「笑ってんじゃねえ!」

天「うわっ!」

殴りかかってきた。驚いたのはそれだけではない。その動きにはしつかりした骨格が出来上がっていたのだ。

天「へえ、やるじゃん。」

妹「喋ってる場合か!」

天「ぐあっ」

腹に一発入った。が、

天「なんちやって。」

妹「なにっ!」

妹紅の腕を掴み、気合いを込め投げ飛ばした。

妹「うわあああ!」

天「これなら怪我もしないだろ。」

しかし、妹紅は空中で止まった。さらに、

妹「はああああ!!」

天「ええええ!」

サイヤパワーを吸収したのだ。

妹「なんだこれ? パワーが、溢れて。」

天「またか!」

妹「よっしやんぜ!」

一気に気を高めた。

妹「はああああああ!!」

天「な、なんて子だ。文よりも強いぞ。」

妹「くらえっ!」

突撃してきた。油断したせいで、彼女の拳は彼の頬にめり込んだ。

天「ぐわっ!」

妹「はっ!」

左脚で腹を蹴った。

天「ぐあっ!」

さらに左フックをかまそうとしたが、

妹「ほらっ!」

天「おっと」

右手で止められた。

天「ふっ、やるじゃん。」
妹「そりやどうも。」

お互い距離をとった。

天「それじゃ、俺もちよつと本気を出そうかな。」

妹「本気？」

天「はああっ！」

ヴンツ!!

超サイヤ人へ変身した。

妹「!! その姿は！」

天「あ、魔理沙と似てるけど違うぞ。」

妹「いや、博麗の巫女にも似てるんだ。」

天「やっぱ霊夢もなれるんだね。」

妹「だけど、私は負けないぜ。はあああああ!!」

勝つために気をさらに上げた。

天「! やめろっ! 人間じゃないやつがサイヤパワーを宿した後に
使いすぎると壊れる！」

妹「言っただけじゃなかったか。私は不老不死なんだよ。」

天「なんだって! でも、」

妹「今はなんとしてでもお前を倒す！」

天「・・・。」

妹「行くぞっ! 覚悟しろっ！」

悟天はわかっていた。いくら妹紅でも自分を倒すことはできない
ということ。既に体力の消耗が始まっているということ。

妹「あれ？力が入んねえ。」

天「やめといた方がいいよ。」

妹「うるせえ！」

天「・・・。」

妹「ぜつたい、おまえを・・・たお・・・す・・・。」

気が小さくなり、落下した。

天「あつ、危ない。」

ス・・・

超サイヤ人を解き、妹紅をキャッチした。
人がいないか周りを見渡した。

天「そつか、飛ばばよかつたんだ。」

今なら人里が何処にあるかが見える。

天「・・・送っていくか。」

妹紅をお姫様抱っこした。

実はこの時、早い段階で目を覚ましていた。

くく

妹「・・・ちえつ。」

赤面しそつぽを向いた。

これを観なくても覚えている。彼の腕は、温かかったのだ。
そう、彼女は永い人生で初めて恋をしたのだ。

妹「この、女たらしめ。」

微笑みながら言った。今、全てにおいて人生が楽しいのだ。

妹「そういえば女たらしは博麗神社で住んでるんだっけ。」

2人で行動しているところをよく見かける。ただ、あまり仲が良さそうには見えない。

妹「ムカつくぜ…」

自分と一緒にいけないのに、一緒にいる霊夢の態度に腹を立てていた。

妹「女たらしだけど、あんないいやつも大事にしないなんて…」

気が一気に上昇した！

ヴウウンツ!!

妹「ムカつくぜつ!!!」

瞳の色が明るくなり、橙のオーラを放った。

妹「超えてやる。博麗の巫女を超えてー」

「あいつを奪ってやる!!」

決意した。強くなるための目標が決まったのだ。

この雰囲気をぶち壊すかの如く、あの声が聞こえた。

? 「はい、目標達成! お疲れ様々。」

妹「こ、この声は。」

知っている声のようだ。

.....

レミ「それじゃあまず、なんでここで働きたいと思ったの？」

レイ「レミリアお嬢様の為に何かできたらなと思ったからです！」

レミ「ふくん。ご趣味は？」

レイ「絵を描いてます。」

レミ「へえ。仕事の希望はあるかしら？」

レイ「門番の仕事を希望したいです。」

レミ「そう。ここはあまり人間はいないけど、仲良くできるかしら？」

レイ「はい！勿論です！」

レミ「ふふ。じゃあ、最後に質問よ。」

レミリアは急に血相を変えた。吸血鬼の目だ。

レイ「(ゴクリ)」

レミ「あなたは、紅魔館のために死ぬと言われたら、死ぬる？」

レイ「...それがお嬢様の為になるなら喜んで。」

レミ「...結果は出たわ。」

レイ「(ドキドキ)」

.....

妖「やはり、あなたでしたか。」

に「あ、バレてた？」

妖「あなたの好きなシチュエーションですからね。」

に「確かに妖夢にはバトルシミュレーターで100人斬りとかやらせたもんね。また腕上げたんじゃない？」

妖「それは恐縮なんですけど、なんで妹紅さんと咲夜がいるんですか？2人とも寝てるようですけど。」

に「妖夢と同じことをしたのさ。ジャンルは違うけどね。」

「妖夢は〈迷いの根絶〉がテーマで、咲夜は〈怒り〉、妹紅は〈決意〉だよ。」

「あと2人とも疲れて寝てるの。」

妖「よく考えてますね。」

に「霊夢さんから聴いたけど、あの姿へ変身させるには感情の爆発らしいから、どうやったら効果的か考えたんだよね。」

妖「私が最後までいいですけど、順番はどうなっているんですか？」

に「まずは妹紅、その次咲夜、最後に妖夢だよ。」

妖「読者が困惑しますよ。」

に「はいそういうメツタイこと言わない。」

妹「・・・ん。身体が石のようだ。」

咲「ここは、現実ですか？」

に「覚えてないの？もう戻ってきてるよ。」

妹「そうだったな。」

咲「お嬢様は、死んでないんですね？」

に「勿論さ。」

咲「・・・。」

妖「ぷぷっ、それにしても咲夜さんとあろう者でも泣くんですねえ。」

軽く笑っている。

咲「う、うるさい。」

妖「あれ？らしくないですね。」

に「そりゃそうさ。」

妹「いったい何したんだよ。」

に「後ほどね。」

妖「この度はお世話になりました。ありがとうございます。」

に「礼には及ばないよ。」

妖「それでは私はこれで失礼します。」

に「ばいばい。もう夕方だから早く、いや、速く帰った方がいいよ。」

妖「うわあっ！幽々子様ー！」

彼女は18時までには御飯を作らないとお仕置きされるのだ。

に「間に合うといいね。」

妹「そんじや私も帰るぞ。」

に「じやあねく。」

咲「・・・。」

に「?帰らないの?」

咲「お嬢様を殺す演出はどうかと思いますよ。」

口は笑っているが目が笑っていない。

に「ちよ、ちよつと待つてよ。こうでもしないと変わらなかったんだよ。」

咲「それで?」

に「実際大成功だったじゃん!もう少し考え直した方が」

咲;メイド秘技「殺人ドール」

に「ぎやああああああ!!」

・・・

その頃悟天は神社に戻っていた。が、それも束の間、フランとの修行序でとしてレミリアに食事の招待券を貰っていたのだ。

天「それじやあ紅魔館に行ってくる。」

霊「行つてらっしゃい。」

天「霊夢は行かなくていいの?」

霊「私は招待されてないわ。魔理沙も同じみたいだし、あんたじやなきやいけないんじゃない?」

天「確かにそうかも。留守番よろしくね。」

霊「はいはい。」

夕焼けの中、紅魔館へ向けて飛んで行った。

美「あ！咲夜さん！お帰りなさい！」

美鈴は元気だが、咲夜は元気そうではなかった。

美「面接は終わったそうですよ。」

咲「そう。」

ゆつくり館へ入って行った。

・・・

レミ「ほう、あなたの紅茶、なかなか美味しいじゃないの。」

レイ「ありがとうございます！」

レミ「流石に咲夜には勝てないけど。あ、帰ってきたみたい。」

ドアの前にいるようだ。

レミ「もう終わったから入っていいわよ。」

咲「失礼します。」

レミ「お疲れ様。どうだった？」

レイ「ほんとに殺されるかと思った」

咲「お嬢様、ですよね？」

レミ「そうよ。どうかしたの？」

咲「・・・その・・・」

「抱いて、くれませんか？」

レミ「あら、珍しいこと言うじゃない。咲夜がそう言うの何年ぶりかしら。」

咲「・・・」

レミ「ほら、おいで。」

咲夜の方が身体は大きい、その時のレミリアは咲夜よりも大きくみえる。

ギョツ

咲「お嬢様、お嬢、様…。」

声が震えている。

レミ「よしよし、よく頑張ったわね。」

「うわああああああん!!」

堪えられず泣いてしまった。

レミ「おやまあ、なんで泣いてるの？」

咲「だって、だって…!」

訳を聴いたレミリアは後日、にとりを襲撃したそうなの。

・・・

美「あっ！悟天さん！」

天「やあ美鈴。」

美「お待ちしてましたよ。どうぞ！」

天「うん。」

辺りは暗くなってきた。

ホールに入るとフランが待ち構えていた。

フ「悟天お兄様いらっしやい！」

天「フランちゃん！あれからすっかり大丈夫かな？」

フ「うん！もう元気！早く修行しようよ。」

天「これだけ暗かったら大丈夫かな。」

フランと一緒に外へ出た。そこには庭の手入れをしているレイがいた。

天「あれ？君は？」

レイ「新入りのレイって言います！どうぞ、よろしくお願いします！」

天「おっ！随分と元気だね。君は人間だっけ？」

レイ「はい、人間です。悟天さんはサイヤ人との混血なんですよね？」

天「!! どうしてそれを？」

レイ「あなた達の世界を本で覗いたことがあるんですよ。この幻想郷に来る前の話ですがね。」

天「ま、待って！本？来る前ってどこまで？」

レイ「あなたのお父さんが神龍と共に何処かへ行ってしまったところまで知っています。勿論、悟天さんが生まれる前の事も。」

天「・・・本物だ。」

レミリアでもない限り、父が飛び立ったことなど知るはずがない。それに、新人にこんなことを彼女が言うだろうか。

天「世界って、広いね。」

レイ「そうですね。ですが、そこが面白いんです！」

天「そうだね。お父さんは何処に行ったんだらうなあ。」

フ「お兄様、早くしようよ。」

天「あ、ごめんごめん。」

軽い運動程度の修行をした。

少しした後、レミリアの声が聞こえた。

レミ「みんなホールに集合しなさい！歓迎会を始めるわよ！」

天「そっか。今日は歓迎会だったんだ。咲夜が疲れてるみたいだったけどよく作れたなあ。」

フ「みすちーも来てくれたんだよ。」

悟天の弟子たちとフランは既に仲間だ。

天「へえ、ミステイアも来てくれたんだ。楽しみだなく。」

ホールにはみんな集合しており、レミリアが案内した。

レミ「それじゃあみんな玉座の間に来て。」

天「え？何するの？」

レミ「秘密よ。」

皆玉座の間へ入った。玉座にはレミリアが座っている。

レミ「レイ、こっちに来なさい。」

レイ「はい。」

5段程度の階段を上がり、玉座の前で跪いた。

レミ「これからあなたは、紅魔の一員よ。忠誠を誓いなさい。」

レイ「はい、これから紅魔館の為にこの身を捧げます。」

天「(こんなしきたりあったんだ)」

レミ「わかるわ。あなた、素晴らしい能力をもってるわね。」

レイ「・・・。」

レミ「私から名を授けるわ。あなたの名はー」

「レイ・ブラッド、よ。」

レイ「…闇の力使えそうですね。」

レミ「?。」

こうして、レイは紅魔館の一員となり、苦楽を共にすることになった。

さあここからは楽しい食事の時間だ。お馴染みの紅魔メンバー以

外に数名の妖精メイドの姿も見受けられる。

天「やっぱりミスティアの料理は美味しいね！」

ミ「いや、そんなことないですよ。」

咲「いえ、なかなか美味しいですよ。」

ミ「咲夜さんありがとうございます！」

実に嬉しそうだ。

美「いや、久しぶりですね。こんな豪華な食事は。」

咲「その代わり明日からみっちり働いてもらうわよ。レイくんと一緒に。」

美「え！あの子門番やるんですか？」

咲「そう希望してたらしいわ。」

美「そうですかそうですか！なら早速レイくんに昼寝の極意を」
グサツ！

頭にナイフが刺さった美鈴は倒れた。

天「はは、相変わらずだな。」

咲「いつまで経ってもこうなんですから。」

天「あれ？咲夜疲れてる？」

咲「あら、よくわかりましたね。」

天「そりゃあね。あまり無理しちゃダメだよ。」

咲「ありがとうございます。」

レミ「ちよつといいかしら。」

天「ん？いいけど。」

レミ「あなた、見た目によらず食べ方が綺麗ね。」

天「ははっ、まあね。」

「都会育ちだから当然だ。」

レミ「あと、さっきのレイとのやりとりを見させてもらったわ。」

天「あつ…。」

レミ「レイはあなたの過去やあなたが生まれる前のことを知っているそうね。」

天「(まずい)」

レミ「どんな脅しに使おうかしら。」

天「まあ、ほどほどにね。」

レミ「ふふ。」

弱みを握られてしまった、のだろうか。

天「レイくと似てるね。」

レミ「そうかしら？」

天「ま、いいけど。」

レミ「何にせよ、また紅魔館が賑やかになるわ。」

天「俺もその方がいいと思う。あと、なんで俺だけ招待したの？」

レミ「あなたを招待すれば、レイにもあなたにもいい刺激になるとわかっていたからよ。」

天「その辺はお見通しってことか。」

彼女には頭が上がらない理由である。

パチュリー「う、胃がもたれた…。」

小悪魔「え！大丈夫ですか!？」

この魔法使いはパチュリー・ノーレッジ。隣にいるのは助手の小悪魔。

パ「食べ過ぎ、かしらね。」

小「今日はそんなに沢山作られてないですよ。」

パ「グラタンがダメだったかしら。」

小「え…、それ私も食べましたよ。」

パ「え…。」

この後、他数名もトイレへ駆け込んだという。

こうして、無事？歓迎会は終了した。

悟天やミステイアは帰っていった。

レミ「レイ、あなたの部屋は二階の咲夜の隣の部屋ね。」

レイ「わかりました！」

レイは二階へ上がっていった。すれ違いで咲夜が降りてきた。

咲「お嬢様。」

レミ「？ どうしたの？」

咲「差し出がましいのですが、一緒に、寝てはくれませんか？」

レミ「そう言うと思って枕は2つ用意したわ。」

咲「流石はお嬢様です。」

とても嬉しそうだ。

かくして、紅魔館のちよつと特別な1日は終わった。

•••••

に「いいデータが沢山取れて嬉しいばかりだよ。うへへ。」

「あ、まだ3章は終わらないよ。次はあの人かな。」

第17話まで続くよ！

第17話 「だいたい人間な5人のガールズトーク」

くあらすじく

究極13号との闘いからはや1ヶ月、にとりは幻想少女のパワーアップを目標に、霊夢やレミリアの協力の下ある計画を進めた。

霊夢からパワーアップの条件は感情の爆発と聴いたため、各少女の不意を突き気絶させ、バトルシユミレーターにぶち込み現実かのよう
に思わせ、感情を爆発させるという計画だ。

にとりは対象者それぞれの性格を把握していたため、何をすればそうなるかわかっていた。

彼女の思惑通り、妹紅、咲夜、妖夢は見事超化という形でパワーアップを成し遂げたのであった！

妹紅は生きる目標が決まり、妖夢には感謝され、咲夜からは襲撃された。

話は変わってその後、レミリアに気に入られたレイが紅魔館の一員となつたため、歓迎会を開くことになった。

ミスティアは料理担当で、悟天だけが招待された。

こうして1日が終わり、さらに3ヶ月の時が流れたわけだが、まだこのプロジェクトは終わっていないようだ。

次は誰だろうか。

幻想天霊伝説 第17話

ガシツ！バシツ！ドンツ！

紅葉が始まった頃もなお、悟天は弟子たちと修行していた。

今では7人もいる。ただ、年齢はさておき見た目はみんな幼い。

何故だろうか??

天「いや、流星だなあこいしちゃん。もうこんなに上達しちゃうなんて。」

こ「えへへ、悟天お兄ちゃんに褒められちゃった！」

チ「ぐぬぬ。」

その笑顔を見て悔しがっている。

大「仕方ないよチルノちゃん。私たち妖精だから。」

チ「妖精だって、強くなれるもん…。」

大「チルノちゃん…。」

チ「大ちゃんは悔しくないの？さいやばわーを持ってないの大ちゃんだけだよ。」

大「私は、妖精だから仕方ないかなって。チルノちゃんみたいに強くないし。」

そう、ルーミアもミステイアもリグルも既にサイヤパワーを宿している。チルノもあつという間に追いつかれてしまったのだ。

チ「…見ててね大ちゃん。」

大「え？」

チ「あたい、いつか必ず、兄貴の一番弟子になってみせるから！」

大「チルノちゃん…。」

彼女は本気だ。

天「それじゃあ、俺以外のみんなで組手してみて。」

こ「いいよ。」

ル「やるのだ！」

ミ「うん！」

リ「やるやる！」

チ「や、やるぞ！」

大「私はちよつと…。」

天「わかったよ大ちゃん。フランちゃんがいればちよつとよかったんだけど仕方ないか。」

今は昼だ。吸血鬼にとっては修行どころではない。

チ「あたい、こいしとする！」
こ「え、余りつてことで悟天お兄ちゃんとしたいんだけど。」
チ「まずこの最強のあたいに勝ってからだ！」
こ「ま、いいけどね。」

こいしは余裕の表情だ。

ル「チルノ大丈夫なのかー？」

リ「流石に分が悪いんじや…。」

天「ま、見てみようよ。」

ミ「じゃあ私はルーミアと。」

ル「やるのだ。」

リ「私あんちゃんとかよ…。」

天「大丈夫だって、本気は出さないから。」

というわけで、1組ずつ始めることになった。
まずはチルノとこいしだ。

チ「だあつ！」

シュツ！シュツ！シュツ！シュツ！

悉（ことごと）く躲されてしまっている。

こ「それ本気？」

チ「はあ…はあ…まだま」

こ「それっ」

ドンツ！

チ「あ、っ！」

張手で飛ばされた。

それでも転ばないように立った。

チ「いつて〜！」

こ「ほらほら、早くかかってきてよく。」

チ「うっ、うわあっ！」

こいしへ飛んでいき再びラツシュした。

シュツ！シュツ！シュツ！

こ「遅い遅い。」

躲される中、

チ「はっ！」

ドゴツ！

こ「うっ！」

天「！」

こいしの腹に一撃をかました！

こ「このっ！」

チ「うわっ！」

チルノに回し蹴りを決め、勝負がついた。

チ「いてて。」

リ「すげえ、こいしに一発喰らわした。」

大「すごいよチルノちゃん！」

こ「・・・。」

天「一瞬だったけど、いい試合だったね。」

「チルノ、君やっぱすごいよー！」

チ「え、ほんとに？」

天「うん、力の差を縮めるいい動きだったよ。」

チ「！ やったー！」

嬉しさのあまり飛び上がった。

天「こいしちゃんもすごいよ。3ヶ月くらいでこんなに強くなるなんて。大したもんだよ。」

そう言い頭を撫でた。彼女は満足気な笑顔を見せる。

チ「あ！ずるいぞ！」

こ「まく勝ったの私だし。」

チ「うう。」

天「まあまあ喧嘩しないで。」

この後、ルーミアはミスティアに勝利し、リグルもなかなかの上達ぶりを見せつけた。

・・・

ここは昼の博麗神社。

霊「魔理沙遅いわね。」

咲「休暇を貰った私より遅いのは問題ね。」

妖「まだ寝てるんじゃないですか？」

早「もう魔理沙さんほつといて始めま」

魔「よう！遅れてごめんだぜ！」

霊「遅かったじゃないの。」

咲「もう1時よ。」

妖「髪ボサボサですし。」

早「ハアツ☆」

魔「さつき起きたんだぜ。髪を直す時間はなかったぜ。」

霊「あんたほんとに女？」

咲「気品が足りないわね。」

妖「女子力は大事ですよ。」

早「そんなんじやモテませんよ。」

魔「早苗ちよつと面出ろ。」

早「なんで私だけ。」

妖「ははは。」

霊「さ、全員揃ったしお茶会始めるわよ。」

咲「やっとな。」

妖「このメンバーが集まるってそうそうないですよね。」

魔「貴重だな。」

早「それじゃあガールズトークっぽく私から1つ質問を」

霊「みんな最近どう？」

早「ハアツ☆」

魔「ん、私はあまりうまくいってないな。」

霊「あら、珍しいじゃない。」

咲「修行のことでしょう？」

魔「まあそうなんだが。」

霊「咲夜はどうよ。」

咲「順調よ。今なら魔理沙と互角に渡り合えるんじゃないかしら。」

妖「などと、その気になっていた咲夜さんの姿はお笑いですね。」

魔「流石にそれはないな。」

咲「そんなに言うなら手合わせしてみる？」

魔「今はやめとこうぜ。」

咲「いや、魔理沙じゃなくて妖夢。」

妖「上等ですよ。やれるものならやってごらん下さい。」

睨み合っている。

早「ちよ、ちよつと！落ち着いてくださいよ。」

霊「あんたら2人はそこまでにして。」

咲「ごめんなさい霊夢。」

妖「申し訳ありません。」

早「じゃあ次は私が」

魔「紅魔館のレイってやつは元気か？」

咲「元気よ。美鈴の悪い癖が染み着き始めてるけど。」

早「ハアツ☆」

霊「見た目は好青年って感じよね。」

妖「咲夜さんの指揮下なんて勿体無いくらいです。」

咲「あら、あなたの所の大食い幽霊のお世話よりはマシだと思うけど？」

妖「幽々子様にそんな言い方は良くないと思いますよ。」

咲「あら、何か間違ったこと言ったかしら。」

妖「なんですって。」

咲「何かしらあ？」

またしても睨み合う。

魔「どうしてこうなった。」

霊「はあ…、それで、レイ君は紅魔館に馴染めてるの？」

咲「温厚な人だからだいたい馴染めてるわよ。妹様ともすぐ仲良くなっただし。」

魔「フランと？なかなかいいやつだな。」

妖「そういえばフランさんは悟天さんと修行してますね。」

咲「そうなのよ。悟天さんのおかげで攻撃に骨格が出来上がっていて嬉しいわ。」

霊「悟天にとっては全然修行になってないけどね。」

魔「最近にいちちゃんに対して当たりが強くないか？」

霊「まあね。ここ数ヶ月家事をあまりしないのよ。」

咲「それは大変ね。」

妖「そんな一面もあるんですね。」

早「あれ？出稼ぎとかしてませんかでしたっけ？」

霊「そうなの？」

魔「そういえばそんなことしてたような。」

霊「私の暮らしがあまり変わってないからどうでもいいわ。」
妖「・・・なるほどですね。でも気を付けてくださいね、霊夢。」
霊「？」

この時の霊夢には、妖夢が何を言っているのかわからなかった。

霊「そういえば最近の萃香知ってる？」

妖「いつの間にかサイヤパワーを宿してましたね。」

魔「飲み比べ以外でいちちゃんと絡み有ったっけ？」

霊「それが実は・・・」

くく

天「それじゃあ今回はこれで終わりっ！」

弟子達「はーい！」

弟子達が帰った後、

萃「お、おい悟天。」

天「あ、萃香ちゃん。」

萃「ちゃん付けで言うなー！」

天「ところでどうしたの？」

萃「・・・ちよつと、用があつてな。」

天「なに？」

萃「私に・・・」

天「？」

萃「サイヤパワーをくれないか!？」

天「どうしたの急に。」

萃「みんなサイヤパワー持つてるだろ？私にはないからどうやっても追いつかないんだ。」

涙ぐんでいる。

萃「このままじゃ、鬼の尊厳がなくなっちゃうんだよ！」

天「大変だね。」

萃「だから、サイヤパワーくれよ。」

天「あれ妖怪が吸い込んだら数日倒れるそうだからやめた方が」

萃「頼むよ悟天！」

半泣きの状態で抱きついてきた。断る理由などあろうか。

天「わ、わかった。わかったから落ち着いて。」

萃「ぐすつ、あんがと。」

天「それじゃあじつとして。」

くく

霊「つてことがあったらしいわ。」

魔「だはははは!!」

大笑いしている。

咲「妖怪は苦勞するんですね。」

妖「なんで私は…。」

早「元が人間だからじゃ。」

妖「なるほどですね。」

霊「そんなに笑っていいのかしら？」

魔「?なんだよ。」

霊「だつてこの前悟天にお使い頼んだ時帰りに魔理沙が悟天に抱きついているのを私見たんだけど」

魔「わあああああ!!」

咲「くすつ、可愛いじゃない。」

妖「乙女ですねえ。」

早「甘えん坊さんですね。」

魔「う、うるさい! 早苗後で奢りな。」

早「そんなく。」

霊「話を戻すけど、妖夢は修行の方はどう？」
妖「私も調子いいですよ。超化維持もできるようになりましたし。」
咲「私は最初から維持できるけど。」
妖「いちいち口を出すのどうかと思いますよ。」
咲「そんなことで喜んでいては駄目ってことよ。」
妖「大きなお世話です。」

ギロリ。

早「お2人は仲悪いですよね。」
霊「そのうち仲良くなるわよ。」
魔「霊夢、みんな成長早くねえか？ 私たちなんて超化維持ですらもつと時間かかっただろ？」

霊「確かにそうね。なんでかしら。」

早「悟天さんに秘密があったりして。」

魔「まつさかく。」

咲「・・・。」

霊「次の話いくわよ。」

早「・・・。」

霊「あれ？ いいの？」

早「あ、別にいいですよ。私は魔理沙さんよりもうまくいってないので。」

霊「それは悪かったわね。」

魔「そ、そうだ。早苗さつき何言いかけたんだ？」

早「よくぞ訊いてくださいました！」

急に元気になった。

早「皆さん、恋をしていますか!？」

咲「してないわ。」

妖「いえ。」

魔「恋はしてないな。」

霊「何それ美味しいの？」

早「ええ…。」

こんな女子会があるだろうか。

魔「霊夢にはいちちゃんがいるだろ。」

霊「あんなのに恋するわけないでしょ。」

咲「意外と悟天さんとは脈無しのよね。」

妖「意外ですね。とつくに恋に落ちたと思っていましたか。」

早「霊夢さん不器用ですから仕方ないですよね。」

霊「早苗、今ならぶっ飛ばしてあげるけどどうする？」

早「それは勘弁してください！」

魔「咲夜はいねえの？気になる人とか。」

咲「仕事で忙しいから考えてられないわ。」

妖「そりやあなたみたいなのヤクザメイドじゃ無理ですよ。レイ君も

美鈴さんに取りられて終わり。はい残念。」

咲「首を搔つ切って2度と喋れなくしてあげようかしら？」

妖「やれるものならやって」

ゴツツ！ゴツツ！

咲夜と妖夢は座ったままちやぶ台へ倒れた。

たんこぶができています。

早「霊夢さん怖い。」

魔「霊夢らしいやり方だな。」

霊「うっさい。」

早「痛そく。」

霊「まったく、いい加減にしなさいっての。」

早「なんでこんなに仲悪いんですかね。」

魔「文化の違いじゃねえか？」

霊「私はうるさいのが嫌なだけよ。」

魔「そーいや早苗は恋してないのか？私はまだしてないけど。」
早「私もまだですね。今が満ち足りているので。」

魔「満ち足りてるっていうと？」

早「今こうして大好きな先輩達とお話できるってことです！」

霊「ふ、ふん。可愛いこと言うじゃない。」

魔「うわ！霊夢がデレたぞ！」

霊「うるさい！」

早「これは文さんに報告ですね。」

霊「あんたもこぶ作ってほしいわけ？」

早「う、嘘ですって！そんなこと言うわけ」

文「写真もう撮りましたよ。」

窓の外に文がいた。

魔「あ、ドンマイ霊夢。」

文「それでは明日の朝刊で。」

霊「こらあ！待ちなさい！」

文を追いかけるため神社を出た。

早「ああ、これはもうお開きっばいですね。」

魔「だな。咲夜と妖夢も寝てるし私らも寝るか。」

早「お2人は寝てるんじゃないやなくて気を失つてると思っただけ。」

魔「細かいことはいいんだぜ。おやすみとつつあん…。」

早「どっかで聞いたことあるセリフですね。じゃあ私も寝ますう

…。」

こうして、ガールズストークはお開きとなった。

.....

その晩のこと。

に「これで完成のはず。アリス、起きてる？」

ア「眠れるわけないでしょオ。ムラムラしてしようがないんだからア。アハハハ。」

に「薬できたから、ほら飲んで。」

ア「なアにこれエ、媚薬？」

に「記憶も飛んでるんだな。もうそういうことでいいから早く飲んで。」

ア「アリス、イツキマアす！」

一気に飲んだ。すると！

ヴンツ！！

超化した！

ア「ふう、やっと正気に戻れた。ありがとね、にとり。」

に「記憶も飛んじやうんだから疲れたよ。」

ア「ごめんね。この呪いもどうかししないとね。」

に「治し方はパチュリーに訊いたりしてるけどまだわからないんだってさ。」

ア「この呪いさえなければ、今すぐにでもあいつを撃てるのに。」

に「あまり喋らない方がいいよ。何処で聞かれてるかわからないし。」

ア「それもそうね。こんなに月が綺麗なんだし、修行が上手くいく気がするわ。」

に「レミリアみたいなこと言うね。確か今は中秋の名月だったと思うよ。」

ア「まあ、どうりで。」

に「今度は咲夜も連れてくるよ。アリスの立体浮遊術を覚えたいって昔言ってたから。」

ア「そうね。」

なんと、アリスの本性は淫乱魔法使いではなかったのだ！
アリスが言うあいつとは？

・・・

ド「いよいよ完成か。」

？「ここまで長かったですね。お疲れ様です。」

ド「本命はこれではない。あちらの方は既に10年経っている。」

？「それも完成が近いのでしヨウ？一刻一刻とドクターの夢が近づきますね。」

ド「その為にも、セルを使う。」

「私の夢への道は、ここからだ。」

第3章？幻想少女強化計画？

〈完〉

第4章? 冬の大侵略? 第18話 「大喧嘩!?! 離れた2人」

くあらすじく

究極13号を倒してからの7ヶ月間、幻想少女達は各々の鍛え方で修行を続けた。

その期間にしては成長が早い気がするが、それはまだ解明されていない。

それにしても、ガールズトークができる程の平和だったのだ。そろそろとんでもない何か起きてもおかしくない。

と思った矢先、例のドクターが動きだしたぞ!

今回も太刀打ちできるか幻想少女達!?!そして、孫悟天!

幻想天霊伝説 第18話

季節は冬、まだ真冬ほど厚くはないが幻想郷には雪が積もっていた。氷の妖精や妖怪は大喜び。

そんなある日のこと。

霊 「悟天、洗濯物干して。」

天 「まだ雪降ってるし寒いよ。」

悟天はこたつで丸くなる。

霊 「もう止んでるわよバカ。」

天 「そんな言い方ないだろ。」

ムクリと立ち上がり洗濯物を干した。

霊 「次はお皿ね。」

天 「あ、俺人里に用があるから行ってくる。」

彼の口からは一言も出したことがない出稼ぎのことだ。しかし、

霊「また遊びに行くんでしょ。知ってるんだから。」

天「・・・遊びには行かないよ。」

確かに遊びに行く時はある。ただ、弟子達との修行以外で外出した時に遊んでいる割合は4割であることを彼女は知らない。

霊「嘘はいいの。早くして。」

天「・・・。」

悟天はこの時、怒りを抑えられなかった。日頃の霊夢の態度、寒さ、疲労のせいでコントロールが効かなくなってしまうのだ。

「いい加減にしろっ!!」

霊「!!」

怒鳴り付けた。それでも収まらなかったが、同時に彼女をも怒らせてしまった。

霊「なんですって…!!」

天「もう我慢できない! 霊夢にはうんざ」

ドンツ!

天「うっ!」

悟天は外へ殴り飛ばされ木にぶつけられた!

天「がはっ!」

ドドド

木に積もっていた雪が彼を覆った。

ヴンツ!!

霊夢は即座に超化した。

霊「上等じゃないの。あんたのイカれた根性叩き直してあげるわ
！」

ヴンツ!!

天「だあああつ!!」

彼も超サイヤ人に変身し、雪を吹き飛ばした。

天「腐れゲス巫女が調子に乗るなよ！」

霊「!・・・もう一回言ってみなさい!!」

世紀の大喧嘩が、始まる!!

・・・

ド「気分はどうだ？」

??「・・いい気分だ。」

ド「セルよ、お前の使命はなんだ？」

セ「幻想郷を占領すること。邪魔をする者は、全て殺す。」

ド「完璧だ。完全体の状態を目標に作ってしまつて戦闘力はオリジナルより劣ってしまったが、上出来だ。」

?「ドクター、設定した転送機がもうじきこの時間に到着しますが、如何致しましたよう?」

ド「そうだった、忘れていた。アレの製作に夢中になっていたのにな。」

?「アレとは、アレですか?」

ド「勿論だ。セルではない。」

セ「・・・。」

ド「その転送機には、何が乗っている?」

?「別の次元から捕らえた実力者です。ドクターのデータにもある人物ですよ。」

ド「ほう、と言うと。」

? 「銀河の暴れん坊と言われた連中です。1人不在ですが。」

ド「まあよい。話は戻るが、その連中が少し暴れた後にセルを放つ。その後、〈簡易版〉を放つ。」

? 「そんなこととしてしまわれては、誰か死ぬんじゃないですか?」

ド「クク、いいのだよ。ここで死ぬのならそいつはそこまでだ。」

? 「・・・ん? 幻想郷で何か起きてますね。」

ド「何ようだ?」

? 「おやおやおや、博麗霊夢と孫悟天が喧嘩してますね。」

ド「・・・、何だと?」

? 「激しくぶつかり合ってますよ。博麗霊夢は殆ど本気ですね。孫悟天は少々遠慮してる様にも見えますが。」

ド「トップ2がまさかの喧嘩とはな。幻想郷侵略も近いな。」

? 「いやはや、この程度でしたか。作戦変更しますか?」

ド「いや、このままでいいだろう。」

? 「かしこまりました。」

ド「転送機が到着したら作戦開始だ。いいな?」

セ「了解だ。」

ド「さあ、私に底力を見せてみる、幻想郷よ。」

・・・

バシッ! ガツッ! ガンッ! グリッ!

博麗神社の上空で闘っていた。何のためだろうか。

霊「ふんっ!」

天「くっ!」

ガシッ!

蹴ってきた足を手で捕まえた。

天「おりゃあっ!」

霊「うわっ!」

一回転して投げ飛ばした！が、
ヒュンツ！

瞬間移動で悟天の後ろをとった！

天「なにっ！」

霊「はっ！」

ドガンツ！

地面へ叩き落とした。

天「があっ！」

バキバキ！

鳥居付近の参道に衝突した。爆弾でも落とされたかのように亀裂が入りぐしやぐしやになった。

天「!! 行ってえ！」

左の頬に傷を負った。鮮血が滴り雪が赤く染まる。

霊；霊気「博麗かめはめ波」

天「おいおい容赦なしかよ。それなら俺だつて！」

天；「ビクトリーキャノン」

霊「はああああ!!」

天「だああああ!!」

ドンツ！

最初は互角に見えたが、徐々に悟天が押した。

霊夢はここ数ヶ月、気を使った修行を全くと言っていいほどしなかったから当たり前だ。

天「はああああ!!」

霊「うっ！」

押し負け、ビクトリーキャノンをもろに受けた。

・・・・・・
文「あやや、この気は！」

察知した。この距離なのに流石だ。

文「もしかしてお2人が？急がないと！」
ヴンツ!!

上司には取材ということにして、全速力で博麗神社へ飛んでいった。

・・・・・・
天「・・・・。」
霊「・・・・。」

神社の前で睨み合っていた。お互いボロボロだ。

ス・・
天「・・じゃあね。」
霊「・・・・。」

この時、2人とも言わなければいけないことを言えなかった。

悟天は神社に入り支度をし、左の頬をおさえ飛んでいってしまった。

序でに着替えもした。

霊「いいわよ。あんなのいなくなつて。」

そう言いこたつに入るのだった。

・・・・・・
レミ「・・・・！」

レミリアは自分の能力で、少し先の未来を見ていた。
怖ろしい光景だった。

咲夜や他数人が、瓦礫の中無造作に死んでいる未来が見えたのだ。
不思議なことに霊夢の姿はなかった。

悟天が立っているのが見えたあたりでビジョンがプツリと切れて
しまった。

レミ「そ、そんな…。」

今まで、ビジョンが途中で切れたことがない。身体の調子が悪いわけでもない。いや、これを見たせいで体調は悪くなった。

咲「お嬢様、大丈夫ですか？」

レミ「…ええ、大丈夫よ。」

咲「顔色は悪く見えますけど。」

レミ「ちよつと、変なのが見えてね。紅茶を淹れてくれるかしら？」

咲「かしこまりました。」

秒で持ってきた。

咲「お待ちせしました。」

レミ「ありがと。…咲夜。」

咲「何でしょう？」

レミ「貴女は私の命令を聞けるかしら。」

咲「何なりと。」

レミ「死ねと言つても？」

咲「勿論です。」

レミ「ふふ、私がそんな命令する筈ないってわかっているんでしょ？」

咲「まあ、はい。」

レミ「流石咲夜だわ。そこで1つ命令なんだけど。」

咲「はい。」

レミ「好きなら誰でも構わないわ。貴女は人を愛しなさい。」

咲「人を、ですか？私は既に霊夢や魔理沙を愛してますよ。」

レミ「そうじゃなくて、所帯を持ちなさいということよ。」

咲「結婚しろということですか？」

レミ「そう。その人を私よりも愛しなさい。」

咲「お嬢様よりも愛せる人物などいないと思います。」

レミ「案外そうでもないわよ。近くにいるでしょ？」

咲「それは…。」

頭にレイが浮かんだ。しかし、咲夜にとってレイは全く恋愛対象ではなかったのだ。

レミ「私の命令、聞けるわね？」

咲「…了解しました。」

浮かない表情で頷いた。

一方大図書館では、レイが何やら絵を描いている。

フ「ねえレイ、何描いてるの？」

レイ「僕の憧れの人です。と言っても会ったことは無いんですけどね。」

フ「へー、なんで憧れなの？」

レイ「生き様に惚れたんです。この人みたいになりたいなあって。」

フ「そうなんだ。腕が無いけど痛くないのかなあ。」

子どもらしい意見だ。腕が無いことはショッキングだったのだろう。

レイ「痛かったと思います。でもヘツチャラな顔するんですよ。」
「僕はこの人のそういうところに憧れたんです！」

フ「ふくん。一回でいいから会ってみたいね。」

笑顔でそう言った。

レイ「はい！その時は妹様も是非ご一緒に！」

小「おいうるせえぞ人間！」

急に胸ぐらを掴んできた。

レイ「は、はい！すいません！」

フ「やめてこあ！ただでさえ頭にナイフ刺さってるのに。」

ということは進行形で美鈴にも刺さっている。

パ「小悪魔もそろそろ名前で呼んであげたら？」

小「私も名前ないんですけど…。」

パ「ああ、それで。」

名前をもらったレイに嫉妬しているようだ。

・・・

文「霊夢さん！何かあったんです、か？」

神社に入ると、こたつに入りながら横になっている霊夢がいた。

文「あやや？何事もなかったっぽいですね。」

「ここら辺で何かありませんでしたか？よければその取材を…」

霊「ゲホッ、ゲホッ」

霊夢の顔は真っ赤だ。

文「風邪ひいてるじゃないですか！布団まで運びますよ。」

霊夢を抱えて寝室に連れて行き、おしぼりを持ってきた。

文「まったく、霊夢さんが風邪だなんて2年前のあの日以来ですね。そんな寒い格好で外を歩くからですよ。」

「それに体力が落ちてますよ。やっぱり何かあったんですね。」

霊「・・・うう。」

文「あややや？」

霊夢は泣いていた。

霊「文、どうしよう。私、またやっちゃった。」

文「・・・。」

霊「私、また1人になるのかな・・・。」

文「・・・大丈夫ですよ。元気になったら悟天さんに謝りに行きましょ。」

霊「ぐす・・・、それは、やだ。」

文「急急急！なんでですか？」

霊「だって、悟天が悪いの。私の苦労も知らないで。」

文「それはお互い様ですよ。」

霊「え？」

文「悟天さん、夏の終わり頃は月に招待されていたのでよく遊びに行っていましたけど、ここ数ヶ月はよく出稼ぎに行っていましたよ。」

霊「・・・それほんと？悟天から聞いたことないけど。」

文「霊夢さんが苦労していることを知ってたんだと思いますよ。」
「お2人とも不器用さんですね。」

霊「・・・悟天が謝るまで謝らないから。」

文「まあ、今はゆっくり休んでくださいね。」

霊「うん・・・。」

巫女は目を閉じた。

・・・
その頃悟天は、地霊殿の前にいた。

天「来たのはいいいけど、さとりちゃんOKしてくれるかな？」

門の前で迷っていると、

こ「あ！お兄ちゃん！」

後ろから抱きつかれた。

天「うわっ、ビックリした〜。」

こ「修行は冬休みなのに来てくれて嬉しい！」

天「まあ、いろいろあってね。泊めてくれたりしないかな？」

こ「いいと思うよ〜。お姉ちゃんには後で言っとくから入って！」

天「いや〜悪いね。」

こ「ん？ほっぺたどうしたの？」

手を抑えている頬を見て言った。

天「あ〜、転んだだけだよ。」

こ「あ〜、嘘だあ。」

天「はは、よくわかったね。」

こ「こっち来て。手当してあげる。」

手を引っ張って部屋へ走った。

燐「あれ？こいし様？」

こ「ちよっとその空き部屋使うよ〜。」

燐「え！さとり様には通してますか？」

こ「後で〜。」

燐「はあ…。」

ところが空き部屋には行かず、別の部屋へ入った。

天「あれ？空き部屋そつちだよ。」

こ「まずこつち。」

そこは何やらお洒落な部屋だ。

椅子に座らされ、救急箱を持ってきた。

天「ここは？」

こ「私のお部屋。」

天「へへ、いて！」

濡れたティッシュで頬に付いた血や埃を拭いてきた。

こ「我慢してねえ。ここからが本番なんだから。」

天「う、うん。」

こ「消毒液塗るよ。」

天「いたた！」

こ「この傷結構深いねえ。元どおりにならないかも。」

天「ま、いいや。」

こ「あ、消毒液なくなっちゃった。」

天「もう要らないんじゃない？」

こ「じゃあ私がペロペロしてあげる。」

天「無視された…。ペロペロ？」

こ「お姉ちゃんが言ったの。血が出たら唾を付けたらいいって。」

天「それ自分にやるやつじゃ…。」

こ「お兄ちゃん、じつとしててね。」

天「わっ！待って待って。」

こ「早く治さないと。」

天「俺はもう大丈夫だから。」
こ「だるめ。早く治ってほしいもん。」
さ「こいし、悟天さんの容態はどう？」
こ「あつ」
さ「あつ」
天「(ナイスさとりちゃん!)」
さ「何してるのこいし!」
こ「ペろペろして治してあげようとしてるの。」
さ「は?」
こ「前にお姉ちゃん言ってたじゃん。睡を付けたら治るって。」
さ「それ自分にやる時よ!悟天さんに迷惑かけたらだめ!」
天「(迷惑って言うほどじゃないけど)」
こ「そんな嫌そうな顔してないけど?」
さ「・・・、とにかくもうやめなさい。あとは私がやるわ。」
こ「えー、ガーゼ貼るだけだよ。」
さ「空き部屋へ連れて行く序だよ。」
こ「むー。」

ようやく部屋に入ることができた。

さ「まったくこいしときたら。」
天「泊めてくれるの?」
さ「ここまで来て帰れなんて言えないでしょ。」
天「さつすがさとりちゃん!」
さ「ちゃん付けで言わないでください!」
天「?なんで?」
さ「その、恥ずかしいですから。」
天「そっか、悪い悪い。」
さ「はい、ガーゼ貼りますよ。」
天「うん。」
さ「・・・霊夢さんと喧嘩したそうですね。」

天「心読まないでよく。」

さ「いいえ、貴方が身体に力を込めていたら心は読めませんでしたよ。本当は読んで欲しかったのでしよう?」

天「・・・。」

さ「落ち着くまでここに居ていいですからね。」

天「ありがとう。」

さ「こいしが世話になってますから。」

天「大したことしてないよ。」

さ「いえいえ、あの子が他人にぺろぺろしたいだなんて大胆なことを言ったのは初めてですよ。」

天「そうなんだ。」

さ「貴方がよければ、これからもこいしと仲良くしてくださいね。」
天「勿論だよ。」

というわけで、暫く泊めてくれることになった。

こ「そっか、お兄ちゃんを傷付けたのは霊夢か。」

「絶対許さない。」

盗み聞きをしてしまった。

・・・

に「悟天君の能力、わかったかもしれない!」

紫「ほんとに!?!」

に「うわっ、ビックリした。」

紫「もうすぐ冬眠するんだから早く教えてくれないかしら?」
に「わかったわかった。それでね・・・」

・・・

・・・

その晩のこと。

天「いや〜夕食までご馳走になって申し訳ないなく。」

1人で部屋に居ると突然、謎の空間が現れ、

紫「やつほー。」

天「うわあ！」

紫「そんなに驚かなくてもいいじゃない。」

天「紫さんもうちよつと普通に現れても…。」

紫「これが私の現れ方よ。」

天「お願いした俺が間違いだつた。」

紫「悟天くん、霊夢と喧嘩してたわよね？」

天「やっぱり知ってたんだね。」

紫「仲裁するつもりはないけど、少し話を聞いてくれないかしら。」

天「お説教はちよつと…。」

紫「違うわ。霊夢の過去よ。聞いてくれるかしら？」

天「明日でいい？もう眠いから。」

紫「くす、こんな時もマイペースなのね。眠いのは私もなんだけど。」

天「褒め言葉として受け取るよ。」

こうして、いつもより長い一日は終わった。

このまま2人は離れたままになってしまうのだろうか？

第19話へ続く…。

第19話 「危ない悟天！紅魔の危機」

くあらすじく

冬のある日、悟天と霊夢は大喧嘩をしてみました。きっかけは、お互いの認識の違いである。

左の頬に傷を負った悟天は、博麗神社から出て行ってしまった。行くあては幾つかあったのだ。彼の人脈の広さには驚かされる。

向かった先は地霊殿。主人からの許可ももらい、暫く住ませてくれることになった。

一方霊夢は、出て行かれたショックで風邪をこじらせてしまった。文が駆けつけてくれたため、大事には至らなかった。

このまま、離れ離れになってしまうのか？

幻想天霊伝説 第19話

霊「・・・うーん。」

巫女は目を覚ました。身体はまだ重かった。熱は下がっていないようだ。

文「あ、起きましたか。」

霊「え？文？」

文「そうですよ。」

霊「仕事は？」

文「有給もらったんですよ。」

霊「で、でも。」

文「霊夢さんのことですから。お気になさらず。」

霊「・・・そう。」

文「その代わり、元気になったら仲直りしてくださいね。」

霊「そ、それは…。」

文「今となつては悟天さんと霊夢さんの2人が揃ってないと博麗神社ではありませんから。」

「人里の皆さんもそう思ってますよ。」

霊「……。」

ここまで看病してくれた文に、仲直りはしないとは言えなかった。

……
天「……ん、朝か。」

ぐっすり眠ったようで、目覚めは良かった。

寝る時は少々寒かったのだが、何故だか暖かい。横を見てみるとその理由がわかった。

天「！ こいしちゃん!？」

こ「むにやむにや。」

悟天の腕にしがみつきながら此方もぐっすり眠っている。

天「起こしちや悪いし仕方ない、か。」

再び横になった。

今気付いたのだが、頬のガーゼが取れている。

天「寝相悪かったかなあ。」

それだけでなく、何やら頬が湿っている。

いやいやまさか。

こ「お兄ちゃん何もしないんだね。」

天「あ、起きてたんだ。寝てると思ってたからね。」

こ「そうじゃなくて、私をめちゃくちゃにしないんだねって。」

天「こんな小さい子にはしないよ。」

こ「そうなの？お姉ちゃんは、男はそんなことばかり考えてるって言うってけど。」

天「何教えてんのさとりちゃん…。」

こ「お兄ちゃんと会ってもお姉ちゃんは警戒しなかったから、何も
しないかな〜って思ってたけど。」

「私はされてもいいよ、お兄ちゃん。」

くつついているので、こいしの鼓動が早くなっていることがよくわ
かる。

天「も、もうご飯食べようよ!」

こ「あつ。」

腕を振りほどき、さつさと着替えて部屋を出てしまった。

こ「やっぱり、霊夢のことを忘れられないのかな〜。」

「でも大丈夫だよ。そのうち、忘れさせてあげるから。」

悟天が手を出さなかった理由をわかっていない様子だ。

・・・

朝食の時間だ。

天「地底の料理は地上に負けないくらい美味しいね!」

さ「そう?ありがとうございます!」

天「さとりちゃんが作ったの?」

さ「そうですよ。頑張った甲斐があったわ。」

天「ほんとに美味しいよ!」

さ「でも、霊夢さんには敵いませんよ。」

天「・・・そうだとしても、たぶん戻らないよ。」

さ「駄目ですよ。喧嘩の後は仲直りしませんと。」

天「いいよ、あんな分からず屋。俺の気持ちも知らないで。」

さ「・・・ごめんなさいね、こんな話をしてしまって。」

天「いやいや。」

こ「私もお料理しようかな。」
天「ほんとに！楽しみだなあ。」
こ「私頑張るから！（お兄ちゃんのためにも）」
さ「（こいしの方が心配だわ。）」

悟天への異常な愛情には気付いていた。

さ「あれ？悟天さん頬の傷が癒えていますね。」

天「あつ、そう言えば痛くないな。」

さ「傷跡は残ってますけど。何かしましたか？」

天「俺は何も…。」

こ「うふふ。」

さ「まさか、こいし？」

こ「お兄ちゃんが寝てる間にぺろぺろしたら治ったよ。」

天「ええ！」

さ「・・・妖怪だからかしら。」

姉でも知らないようだ。妖怪とは不思議なものだ。

天「それじゃあ紅魔館に行ってくる。」

さ「行ってらっしゃい。」

こ「何しに行くの？」

天「ちよつと遊びに。」

こ「霊夢は居るの？」

急に笑顔が消える。

天「居ないんじゃない？居たら帰るし。」

こ「ならいいよ！」

パアツと笑顔になる。

このように表情がころころ変わっている。

さ「悟天さんなら大丈夫よ。うん、きつと大丈夫。」

何故紅魔館へ行くのかは、心を読んだのでわかっていた。いや、悟天が読ませたのだろう。

・・・

早「はああああ！」

神奈子「もう少しだ早苗！」

諏「もうちよつと！」

早「はああああ……。」

神「また駄目か。」

諏「いとこまでいつてるのに。」

早「はあ…はあ…。」

今日も超化の特訓をしていた。彼女はまだ変身できないのだ。

諏「にとりの装置でも超化できなかったよね。何でだろう。」

神「うーん。」

早「私には、才能がないのかもしれないですね…。」

神「そんなことはない！お前は立派な現人神だ！」

諏「そうだよ。元気出して！」

早「…はい。」

苦笑いを浮かべた。

・・・

美「さつむー！まだ慣れませんね。慣れたら居眠りでき」
咲「何か言ったかしら？」

また突然現れた。

美「うわっ！いやー！何も言ってますん！」

咲「そう？もし、慣れたら居眠りできる、とか言ってたのならまた何かしないといけなのだけど。」

そう言い笑顔でナイフを突き付ける。

美「そんなこと言うわけないじゃないですかー！」

天「はは、2人とも相変わらずだなあ。」

美「悟天さんだ！」

咲「あら悟天さん。今日はどういったご用件で？」

天「ちよつと咲夜に用があつてね。今話せる？」

咲「あと少しだけお仕事が終わればできますよ。少々待ってもらふことになりますけど。」

天「いいよいよよ。館に入ってもいい？」

咲「構いませんよ。どうぞ此方へ。」

天「ありがとう。」

悟天と咲夜は館に入った。

それから暫くして、

美「早く交代時間にならないかな〜。」

レイとの交代時間はもう少しだ。

その時!!

ピカッ!!!ビリビリ!!

またしても湖付近の林で光が放たれた。

美「!!」

美鈴は構えた。

•••

咲夜は仕事を終えた。2人は咲夜の部屋に移動した。

天「ここでもいいの？」

咲「いいわ。話、してちょうだい。」

天「それじゃあ。咲夜は妖夢と仲悪いのになんで一緒にいれるの？」

咲「確かに仲悪いわよ。だけど、喧嘩するほどってやつかしら。嫌い合ってるけど、認め合ってるのよ。」

天「嫌い合いながら、認め合いながら、か。」

咲「霊夢と喧嘩したのでしょうか？」

天「レミリアから聞いたんだね。」

咲「あら、察しがいいこと。」

天「プライバシーの欠片もないなあ。」

はははと2人は笑う。

咲「霊夢はああ見えて不器用だから、あなたから謝ってあげて。」

天「・・・考えておくよ。」

咲「霊夢は、泣いていたらしいわよ。」

天「え？」

ピカツ!!ビリビリ!!

天「あ！」

咲「!!」

天「ちよつと見てくる！」

咲夜はもういなかった。

天「能力とかずるいよ。」

・・・

遅れて到着した。美鈴は無事のようにだ。

天「何も無いの？」

美「それが…、襲ってこないですよ。」

「あの林辺りに4人の気があったんですけど、1人は妖怪の山の方へ行きました。気の大きさがわかりませんが。」

「どうやら相手はある程度気のコントロールができるようだ。」

美「3人は残ってるんですけど、一向に動こうとしないですよ。」

天「うーん、なんでだろ？」

美「きつとあれですよ。咲夜さんの怖ろしさに勘付いて動けないんですよ。」

咲「何か言いました？」

ナイフを突き付ける。

美「ひー！なんでもありません！」

天「悪い奴じゃないかもしれないよ。俺みたいに。」

咲「それも一理ありますね。」

レミリアはこの時、レイを使ってパチュリーを呼び出したという。

天「咲夜がいれば大丈夫だろうし、俺もう行くよ。」

美「あ、お疲れ様です。」

咲「それでは。」

天「ありがとうね。」

咲「礼には及びません。」

地霊殿へ飛んでいった。

咲「私は館に戻ります。何かあったら、ね。」

美「了解です！」

咲夜は戻った。

•••
文「霊夢さん、これ食べてください。」

おかゆを持ってきた。

霊「ありがと。」

文「人参のおかゆですよ。」

霊「！ いらない。」

文「あれ？人参と知った瞬間どうしたんですか？」

人参が嫌いなのではない。文は勿論わかって言っている。

悟天が幻想郷で初めて買ってきたものだ。

霊「お腹空いてないからいい。」

ぐー

腹は正直だ。

文「ほらほら、食べて早く治しませんと。」

「それに、また何かが幻想郷に入り込んだみたいですよ。」

霊「え！」

文「霊夢さんが寝てる間に何か来ましたよ。異変解決しませんと。」

霊「寒いからどっちにしろ出たくないんだけど。」

文「ゑゑゑ！」

•••••

く昼過ぎく

に「うんうん、順調順調！」

にとりはモニターで植物らしきものを見ている。

妹「そこだ！よし！よっしやああ！」

妹紅はテレビを見ている。にとりによると、30分の特撮映画というものらしい。

に「面白いでしょ？紫さんには感謝だよ。」

妹「それに、これのおかげであの技をあみ出せたしな。」

に「妹紅さんの才能でもあるよ。」

妹「そりやどーも。」

に「それに、また新しい技を習得したんだって？」

妹「おうよ。しかも運のいいことに、それをご披露することができ
るかもな。」

に「え？．．あ。」

探知機を見てみると、外来人の反応があった。

に「行くの？」

妹「場合によってはな。」

．．．

天「やっぱり地霊殿の料理は美味いや！」

さ「今回は勇儀さんが作ってくれたんですよ。」

天「え！勇儀って料理できるの？」

勇「失礼だな！私だって料理くらいできるぞ！」

天「へえ、人は見かけによらないもんだね。」

こ「早く料理できるようにならないと…。」

さ「そんなに急がなくていいわよ。」

この時、地霊殿の前に何者かが現れた。悟天はその気を察知した途
端、嬉しさに飛び上がりそうになった。

天「この気は！」

さ「知り合いですか？」

天「知り合いなんでもんじゃないよ。これは、父さんの気だ！」

瞬間で食べ終え、ダイニングから飛び出した。

勇「なんか妙じゃねえか？」

さ「はい。今門の前にいる人物は確かに悟天さんの気に似ています。」

「ですが、それにしても嫌な予感がします。」

勇「・・・ちよつと行つてくる。」

さ「どうかお気を付けて。」

こ「私も行こつと。」

こいしは今能力を使っている。

・・・

天「父さん！」

門まで来たが、父の姿はない。

天「変だなあ。さっきまで居たのに急に消えちゃった。」

「気のせいだったのかなあ。戻ろつと。」

戻ろうと地霊殿の方へ向いたまさにその瞬間、背後に父の気を感じた。

今度こそは間違いない。

天「父さ」

??;「デスビーム」

ビツ!!

天「づっ！」

振り返った瞬間、右胸を貫かれた。
撃たれた悟天はそのまま倒れ伏した。

天「がっ・・・お前は・・・何者だ・・・」

??「私か？私の名はー」

セ「セルだ。」

天「・・・？セル？」

セ「そうか。孫悟天は知らなかったな。」

「私は、お前が生まれる前に孫悟空達を苦しめたセルの、バージョンアップだ。」

天「まさか・・・兄ちゃんが、倒した、人造人間って・・・」

セ「その通りだ。しかし、この世界には当の本人はおるかサイヤ人はお前しか居ない。」

「だがそのお前すらこのザマだ。」

天「く、くそお・・・」

口からも血を流している。

セ「あまり喋らない方がいいぞ。死が早まるからな。」

天「はあ・・・はあ・・・」

虫の息だ。

セ「呆気なかったが、侵略のためにもトドメを刺すぞ。」

勇「待ちな！」

勇儀が到着した。

セ「これはこれは、鬼の四天王の一人が何用かな？」

勇「そいつは殺させねえぜ。どうしても殺したかったら、私を倒してからにしろ！」

セ「クク、貴様ごときがこの私を倒そうと？」

「できるものならやってみるがいい。」

勇「こいし、居るんだろ？悟天を連れて行きな。」

こ「わかってたんだ。」

勇「伊達に鬼はやってねえよ。早く行け。」

こ「う、うん。」

天「無理、だ。に、逃げ、るんだ…。」

勇「私を、なめんじやないよ。」

セ「ククク、少しは楽しませてくれよ。」

•••

時同じくして、レイは紅魔館の門に来た。

レイ「美鈴さん、交代ですよ。」

美「レイ危ない！」

レイ「え☒」

ドカーン!!

突如複数のエネルギー弾が飛んできた！

美鈴はレイを庇ったせいで一瞬で傷だらけになった。

レイ「メ、美鈴さんツ!!」

「やつと居なくなつたな。」

「これで占領できそうだ。」

「始めましょうか。」

レイ「お前たちは！」

「ビドーにゴクア、ブージン！お前達が何故この世界にいるんだ☒」

ビ「そうか、お前もこことは違う俺たちと同じ地球から来たんだな？」

レイ「いや、僕はお前たちの住む世界とは別の世界から来た。なぜ美鈴さんを攻撃したんだ！」

ゴ「占領するからに決まってるだろ。まさか、お前1人で俺たちと闘うとは言えないな。」

ブ「(また別の世界？何故この坊主は俺たちのことを知っている

?)」

レイ「もしそう言うつもりならどうする?」

ビ「面白い。あのデブは一瞬だったが貴様はどこまでやれるか確かめ」

咲；紅符「殺人ドール」

ブ「ふんっ!!」

複数のナイフをブーজনは指から出した糸で全て止めた。

咲「やるじゃないですか。」

ゴ「抵抗する者がいたか。そう来なくてはな。」

咲「はあっ!」

ヴンツ!!

咲「レイ、あなたは館へ逃げなさい。パチュリー様が霧の準備をなさってます。私が時間を稼ぎますから早く!」

レイ「僕も戦います!咲夜さんを置いて逃げるなんてできません!」

咲「あなた、闘えるの?里の人間とあまり変わらないようだけど。」

レイ「僕は奴らの技を知っています。少しくらいなら力になれるはずです。」

咲「・・・あなたを助ける余裕はないと思うけれど、いいわね?」

レイ「はい。僕にかまわず戦ってください。」

咲「わかったわ。それじゃあまず、美鈴を中へ連れて行ってくれるかしら?」

レイ「了解です!」

美鈴を抱え連れて行った。

ブ「結局お前1人というわけか。」

咲「そうですね。」

ビ「・・・殺るぞ。」

まさかの展開、悟天が不意打ちに倒れてしまった！

勇儀は太刀打ちできるのだろうか？

咲夜の運命は？

第2の侵略が、始まるっ！！

第20話へ続く…。

第20話 「鬼と人間 それぞれの隠された力」

くあらすじく

大喧嘩から1日が経ち、霊夢は風邪のため文と神社に籠っており、悟天は一時地霊殿に泊まっていた。

比較的元気だった悟天は紅魔館へ行き、咲夜にアドバイスを求めた。

そんな中、何者かが転送され緊張が走ったものの、何も起きなかったため悟天は地霊殿へ戻った。

この選択が紅魔をピンチにする。

やって来たのは、ビドー、ゴクア、そしてブージンであった。対応できるのは超咲夜1人といった状況だ。

戻った悟天の方へも誰かが来た。悟天は父だと思って出迎えたが、その人物はセルであった。セルを知らない悟天は、父の気を感じて騙されたのだ。

幸い、すぐに勇儀とこいしが駆け付けてくれたのでトドメは刺されずにすんだ。しかし、闘えるのは勇儀だけだ。

勝てるか咲夜！勇儀！

大丈夫か悟天！霊夢！

幻想天霊伝説 第20話

チ「大ちゃん大丈夫？」

大「復活したから大丈夫だよ。」

チ「さっきの3人、強かったね。兄貴から教わったあたいのビクトリーキャノンが効かなかったよ。」

大「紅魔館、大丈夫かな…。」

悟天が館から離れても襲撃が遅かった理由だ。

・・・

セ「それで、その程度の実力で私にどう張り合おうと言うのかね。」
勇「やっぱり、普通に殴っても勝てる相手じゃないか。」

セ「あと3分だけなら待てるが、打つ手がないのならさっさとどき

たまえ。」

勇「へへ、3分もいらさないよ。」

セ「なんのハツタリだ？」

勇「私の能力にかかれば、お前を吹っ飛ばすくらい一瞬だ。」

セ「ククク、遂には鬼すら嘘をつくようになったか。哀れだな。」

勇「ふん、はああっ！」

ボウ!!

勇儀はへ怪力乱心を持つ程度の能力をを使い、パワーアップした！

セ「ふははは！パワーに頼った変身か！サイヤパワーすらない貴様がそれを使ったところで私には勝てんぞ！」

勇「・・・。」

勇儀は真顔になった。

セ「終わりだ、星熊勇儀ッ！」

物凄いスピードで右ストレートを当てようとしたが、

セ「なにつ！」

避けられた！それだけでなく、

勇「オラアツ!!」

ドゴツ!!

セ「ぬああああ!!」

セルを殴り飛ばし、地底の天井を突き破った！

勇「はあ・・・はあ・・・。」

シユウ・・・

勇「能ある鷹は爪を隠すって、言うだろ？もう居ねえけど。」

そう、勇儀はここ最近で悟天からサイヤパワーを貰っていたのだ。パンチを避けたのは、鬼が長年培った戦闘技術だ。

勇「戻るか。悟天が心配だからな。」

・・・

ビ；「ブレイブガトリング」

咲「無駄よ！」

時間を止め攻撃を全て避けた！

ビ「なにつ！」

斬りかかったが、

ゴ「おっと！」

ガキンツ!!

咲「くっ！」

ナイフよりも大きい剣で止められた！

ビドーはこの隙に、

ビ「はあっ！」

咲「ぐっ！」

咲夜の横腹を蹴った。

咲「小癩な！」

ブ；「サイキックブレス」

エネルギーで作った2本の剣が飛んできた！

咲「なっ！・・はあっ！」

ギンツ!!

両手で持った2本のナイフで弾いた！」

ブ「ほっほっほ。」

咲「はあ・・はあ..。」

ビ；「ブレイブガトリング」

咲「うっ！」

避ける余裕がなくガードした。

ゴ「さっきまでの威勢は何処へ行ったのだ？」

ビ「ククク」

咲「（霧はまだですね。お嬢様、早く!）」

苦戦を強いられている。

.....

天「はっ::はっ::。」

さ「悟天さんしつかりして!」

こ「.....」

勇「おいおいヤバいじゃねえか。」

右胸をやられたため、呼吸がままならない。

こ「ユルサナイ。あいつ殺す。」

勇「:(さとりからは聞いてはいたが、こいしは重症だな。お前が悪いんだぞ悟天。そんなに強いのに真っ直ぐすぎるんだ)。」

「心配しなくても、地上の連中が勝てなかったら闘うことになるぞ。」

こ「こつちに来るの?」

勇「場合によっちゃやな。次は私じゃ守りきれないぞ。」

こ「大丈夫だよ。」

ここまででは笑顔だったが、

「私が殺すから。」

急に真顔で言った。

さ「・・・無理はしないでね。悟天さんを簡単に倒してしまった敵だから。」

こ「大丈夫だよお姉ちゃん。」

勇「(正直、地霊殿はこいしにかかっている。次は私じゃ無理だ。)」

天「・・・。」

さ「あら、寝てしまったようね。」

こ「寝顔可愛い♡」

勇「部屋から出るか。外も心配だしな。」

こ「気は消してね。察知しちゃうから。」

勇「よく知ってるな。」

こ「お兄ちゃんが教えてくれたの。身を隠したい時は気を消してつて。」

さ「ほんとにお兄ちゃんっ子ね。」

こ「えへへ。」

3人は部屋から出て行った。

天「・・・居るんでしょ?」

紫「あらまあ、よくわかったわね。」

天「そんな気がしただけ。なんか用?」

紫「今こそ霊夢の過去を話そうと思って。」

天「このタイミングで?」

紫「今だからでしょ?」

天「わ、わかった。」

.....

セ「小賢しい。奴もサイヤパワーを宿していたとは……。」

吹っ飛ばされたセルは、地上にいた。少し考えた後、

セ「丁度いい。今のうちにセルジュニアを量産して侵略を進めてやる。」

グツ、ググ・

セ「ふんっ!!」

ボツ

ボボボツ

ボボボツ

ボボボツ

ボボツ

なんと、自分の分身であるセルジュニアを12体も生み出したのだ！

セ「さあ、散らばれ！」

セJ r. 「ギギツ！」

各地に散らばった。

セ「さて、私はドクターの命令通り河城にとりの研究所を破壊するとするか。」

「まあ、孫悟天の抹殺を先にしろと言われていたがいいだろう。私は娯楽が好きだからな。」

独り言を淡々と並べている。

セ「それに、研究所には強い気が1つあるな。楽しみだ。」

全速力で飛んで行った。

・・・

文「・・・騒がしくなりましたね。」

霊「始まったわね。」

具合が悪いながらもそれくらいはわかった。

文「私、行つてきますね。妖怪の山にも何やらとんでもない輩が入り込んだみたいなので。」

霊「もう行くの?」

文「本当は霊夢さんが動けた方がいいんですけどね。」

霊「寒い。」

文「それじゃあ行つてきます!」

ビュンツ!!

また一人になった。

霊「・・・大丈夫よ。私が行かなくても。」

・・・

小「やめな! あんたじゃ咲夜さんの足手まといだ!」

小悪魔はレイを掴んで離さない。

レイ「嫌です! 離してください!」

美「そうです! 霧が完成するまで待つしかありません!」

レイ「それまで待つてられません!」

妖精メイドA「もし霧が完成する前に咲夜さんがやられたら...」

妖精メイドB「それならお嬢様や妹様が闘えるようになるね!」

妖精メイドC「だけど屋根を破壊されたら?」

妖B「・・・」

妖A「それ以前に咲夜さんが殺されちゃうなんてやだ!」

妖C「どうすりやいいんだよ…。」

レイ「くそっ！」

そんなパニックの中、レミアアがやってきた。

小「え？お嬢様？」

美「霧は？」

レミ「パチエが頑張ってるからもう少しよ。」

「…レイ。」

レイ「お嬢様…？」

レミ「貴方が咲夜を助けに行きなさい。」

妖A「ええ！」

妖B「人間には無茶ですよ！」

妖C「下っ端の定めか…。」

名前がある時点でレイと妖精メイドは同格ではない。

レミ「今こそ貴方の能力を試す時よ。…できるわね？」

レイ「…やってみせます。」

レミ「今こそ、紅魔に命を捧げなさい！」

レイ「はいっ!!」

レイは玄関を出た。

美「どうか、死なないで…！」

・・・

紫「霊夢はね、最初はどこの子かもわからない孤児だったのよ。」

天「!!」

紫「勿論外の世界の話だけど。私は可哀想だったから引き取ったの。その頃はまだ5歳だったわね。」

「そして、名前も私が付けたの。」

天「紫さんが付けたんだ。」

紫「そして同じ頃、先代博麗の巫女がチャインに挑んで戦死したの。」

天「チャインって？」

紫「この星の幻想郷ではない部分の帝国の名前よ。」

天「初めて聞いたよ。」

紫「やっぱり霊夢は言わなかったのね。」

「そこで私は、霊夢を博麗の巫女に就かせたの。」

「最初は面倒みたりしたけど、いつまでもそうしてたら幻想郷は守れない。だから一年経った頃私は姿を消したの。」

「でも所詮は一年しか修行を積んでいない人間。妖精にも勝てなかったわ。」

「そんな時、異世界からある男が現れたの。その方が、霊夢のお師匠さんよ。霊夢が6歳の時ね。」

天「……。」

紫「それからはお師匠さんがずっと修行をなさってくれたの。霊夢は凄く嫌がったのよね。あの子修行嫌いだから。反対にお師匠さんは修行大好きだったからよく付き合わせたの。」

「霊夢は嫌々修行してたけどどんどん強くなったわ。」

「私は嬉しかった。修行のおかげで今まで手も足も出なかった妖精や妖怪に難なく勝てるようになったの。霊夢に解決できない異変はなかったわね。」

「それに8歳になる頃にまた変革が起きたの。霊夢がお師匠さんのサイヤパワーを吸収して自分のものにしたの。ここで人間のレベルは遥かに超えてしまったの。さらにサボリ癖が付いたけど。」

天「じゃあ紫さんは知ってたんだ。」

紫「そうよ。」

「それから半年経ったある日、魔理沙が弟子入りを志願したの。お師匠さんは勿論許可して、2人で修行することになったの。」

天「だからあんなに仲良いんだ。」

紫「その通り。」

「10歳になった時には鉄人になってたのよ。だから、へありとあらゆるものを破壊する程度の能力」を前にしても効かなかった。」

「次の年の冬はもつと驚いたわ。霊夢が、変身できるようになったの。お師匠さんによると通常の50倍のパワーアップですって。」

「だから次に起きた異変でへ死を操る程度の能力」を持った幽々子の力も通用しなかったの。第一次月面戦争で片腕となるほどの戦力だった幽々子が負けたのよ。」

「それからちよつとして魔理沙も変身できるようになったわね。」

「それから6年間いろんな異変があつたけど霊夢は軽々と解決していったわ。」

「だから6年目で霊夢や魔理沙や他数人を呼んだの。霊夢には私から1つ技を伝授したわ。それが、神降ろしよ。」

天「神降ろし?」

紫「八百万いると言われる神々の中から一時的に1人降ろして自分に宿すということ。そうして清めないと月に侵攻できないから。」

「それを教えた上でもう一度月に挑ませたの。まあ、闘って勝つことが目的じゃなかったのよね。」

天「そっさいやどうやって月に行ったの?」

紫「私が境界を操って月の裏側まで送ったの。」

「闘った理由は、幻想郷の成長を見せつけるためだったのよ。結果は私の予想の斜め上をいったわ。」

「魔理沙はやられたけど、霊夢はあの綿月依姫と互角に渡り合ったの。もしかして月の侵略が上手く行くんじゃないかと思つたわ。」

「だけど私の読みは甘かった。技量は天と地ほどの差があつたことを忘れていたの。霊夢も依姫も体力はギリギリだったけど依姫は技に余裕があつたの。」

「そんな時、お師匠さんが月に交渉してくれたの。見逃してくれないかって。どうやって月の都に入ったのかはわからないわ。人間は入れない筈だから尚更わからなかった。」

「ここで戦争は終わったの。立っていたのは霊夢だけだったわ。それでも霊夢は悔しかったんだと思うの。」

天「そうだね。頑固なところあるし。」

紫「その年にね、突然お師匠さんが居なくなったの。」

天「え！なんで!？」

紫「私にはわからない。とにかく霊夢はショックだったみたいで、珍しく熱を出したの。今と同じ熱よ。」

天「……。」

紫「あの子、強いけど寂しがりなの、わかるでしょ？貴方が出て行った後、泣いてたのよ。」

天「!!」

紫「霊夢が何を言ったか知らないけど、悟天くんの存在は大きいのよ。だから仲直りを」

天「ぐー」

紫「え？寝たの？いや、聞いてたわよねうん。」

「眠いし、早く帰ろうっと。」

悟天は傷のこともあり、深い眠りについた。

・・・

咲「はあ……、はあ……。」

ビ「おやおや、もう終わりか？」

ゴ「ハツハツハ、まだ俺は本気を出してないぞ。」

ブ「もう殺しましょうか。」

咲「お嬢様、申し訳ありません。」

ビ；「ブレイブガトリング」

ゴ；「フルパワーエネルギー波」

ブ；「サイキックブレス」

絶体絶命のピンチ！しかし！

??；「爆魔障壁」

ドカーンッ!!

ゴ「呆気なかったな。」

ビ「フン・・・なにつ！」

膝をついていた咲夜は無事だった！

咲夜の前には、バリアーを張ったレイが立っていた。

レイ「間に合った…。」

咲「レイ！」

レイ「大丈夫ですか？」

咲「その気は？」

今のレイの戦闘力は、闘う前の咲夜と同じであった。

レイ「この能力のは後で詳しく話します。」

咲「そう、ですね。そ、その、助かりました。」

レイ「いえ、こちらこそ一人にさせてすみませんでした。」

ブ「なんだこれは！」

ビ「本当にさっきの坊主なのか？」

ゴ「この際どうでもいい。2人まとめて殺してしまえ。」

咲「・・・レイはちよび髭をお願い。」

レイ「わかりました。任せてください。」

パ「レミイ、あと5分で霧を出せるわ。」

レミ「わかったわ。」

幻想郷各地に散らばったセルJr.

にとりの研究所を目指すセル

紅魔館前での激闘

果たして、トップ2が動けない状態で幻想郷はこれらを制覇できるのか？

第21話へ・・・続く!!!

第21話 「幻想郷大混乱」

くあらすじく

悟天が倒されセルと闘うことになった勇儀。己の能力を使いパワーだけを大幅にアップさせ、見事セルを地上へ吹っ飛ばし其の場凌ぎを成功させた。

地霊殿へ戻ると、悟天は重症であった。さどりの治療を受けなんとか意識は保てているが、闘える様子ではない。

地霊殿のメンバーが部屋を出てすぐ紫が現れ、霊夢の過去を聞かされた後、悟天は深い眠りについた。

一方、紅魔館前では3対1という不利な状況で咲夜は懸命に闘っていた。

パチュリーは霧を作り出すのに必死。他の者は強大な敵を前に身動きが取れない状況だ。

そんな中、レミリアに許可をもらったレイはたった一人で咲夜の応援へ駆け付けた！彼には秘策があるらしいが果たして。

その頃、吹っ飛ばされたセルは、12体のセルJr.を生み出し、本格的に侵略を開始した。

地霊殿へ3体

永遠亭へ2体

魔法の森へ2体

白玉楼へ2体

紅魔館へ1体

妖怪の山へ1体

人里へ1体

本人はにとりの研究所へ

それぞれ散らばった。

この危機に対し文は動いた。行き先は勿論妖怪の山だ。霊夢は熱が下がらないのでまだ動けない。

しかし、このタイミングで〈簡易版〉も動き出した！

頑張れみんな！

早く動いてくれ悟天！霊夢！

幻想天霊伝説 第21話

幽「妖夢く！」

妖「・・・。」

幽「もう！座禅なんてしないで助けてよ。」

妖「・・・。」

幽「ここ数ヶ月座禅しっぱなしじゃないの。もういいでしょ？」

妖「・・・。」

幽「今とんでもない敵が来てるんだって。」

妖「なんでそれを早く言わないんですか！」

幽「わっ！」

妖「幽々子様のことですからまたお腹すいたとかだと思ってたんですけど、」

「！強い気が2つも。」

幽「私じゃ倒せないのよ。」

妖「そのようですね。幽々子様、1つお願いがあるんですけど。」

幽「あら？何かしら？」

妖「食べる物を、くだ、さい…。」

倒れた。

幽「いくら半人半霊だからって何も食べなかつたらそうなるわよ。しょうがないわね、って言ってる場合じゃないわ！」

庭に成っている桃を妖夢の口へ放り込んだ！序でに自分も食べた。

妖「んん！復活しました。」

幽「それじゃ頼んだわよ。」

妖「はい、修行の成果、お見せします。」

妖夢はただ一人、セルJr. 2体に立ち向かった。

・
・
鈴「お師匠様！なんかヤバそうなのが向かって来ます！」
永「そのようね。今こそウドンゲの力を試す時ね。」
鈴「私の力って言うよりお師匠様の薬の効果ですね。」

永遠亭の院長の八意永琳とその弟子の鈴仙・優曇華院・イナバだ。
薬とはなんだろうか？

永「敵側が2人も来てくれるなんて素晴らしいお客様ね。」

鈴「私に任せつきりで大丈夫ですか？」

永「大丈夫よ。問題ないわ。」

鈴「(あ、まずい。)」

嫌な予感がするウドンゲであった。

・
・
魔「ん？何か来るな。」

寝巻きのまま家の中をうろついている。

気だけでそれが良くないものであることは察した。

魔「これから朝飯食おうと思ったのに邪魔しに来るとは。早く食わなきゃいけないじゃないか。ま、もう昼なんだがな。ハハッ」

1人で喋っている。

・
・
ボ「クク、まずはこの山を我が手に入れようか。」

ビドー、ゴクア、ブージンとは別行動をしたボージャックだ。

飛ぶのをやめ、最初は歩くことにした。

椀「な、何ですかあなたは！」

ボ「ほう、随分と気持ちの悪い挨拶だな。」
権「見ればわかります。あなたは悪者です！」

本当は大抵の人物に同じことを言ってる。

ボ「単刀直入に言う。今からこの山はこの俺がいただくぞ。」

権「なんてことを！そんなことはさせませんよ！」

権；狗符「レイビーズバイト」

全て当たったが、

ボ「効かん。占領は簡単そうだ。」

権「くっ、どうすれば。」

効かなかった。

ボ「取り敢えずお前は邪魔だ。消えろ。」

「右手に気を集中させたその時！

ドゴツ!!

ボ「ぐおっ！」

突然左の頬を殴られた！

権「文さん！」

文「ふう、どうやら間に合ったみたいですね。」

超化している。

ボ「・・・貴様はまだやれるらしいな。」

文「殴られた人が言える言葉じゃありませんね。」

ボ「ふん、すぐに力の差をわからせてやる。」

文「樵、山の妖怪達を避難させて。」

樵「わかりました。」

ボ「掛かってこいよ。」

文「それじゃあ、遠慮なく！」

セルJr. が向かって来ていることに文は気付かなかった。

・・・

神「早苗、行かなくていいのか？」

早「いいです。私が行っても足手まといなので。」

諏「・・・。」

そうなのだ。早苗はまだ超化できないのだ。それだけでなく、今では超化はできないものの萃香よりも弱い。

諏「文だけでは今来てる奴には勝てないよ。それにもう1人向かって来てる。」

神「お前も行かないと駄目だ。」

早「恥ずかしいです。行きたくありません。」

ここ数ヶ月、彼女はこのコンプレックスに悩まされている。

・・・

ゴ「また貴様と相手をしなければならぬのか。」

ブ「さつさと殺しましょうか。」

咲「できるものなら、やってごらん下さい。」

咲；幻世「ザ・ワールド」

時を止め、

咲；符の壺「連続殺人ドール」

先ほどよりもナイフの数を増やした。

咲「・・・解除！」

ブ「ふんっ！」

またしても超能力で殆どのナイフを止めた。

ゴ「はっ！はっ！」

カンツ!! キンツ!!

残ったナイフを弾いた。

咲「やっぱりあんた、見えているわね。」

ブ「さあ？何のことでしょうね。」

ゴ「随分と息が上がっているな。逃げることを考えた方がいいんじゃないのか？」

咲「いいえ、これで十分です。」

ゴ「何だと？」

・・・

ビ「この俺がこんなガキと遊ばなければいけないとはな。」

レイ「見た目で判断するのは良くないぞ。」

確かにレイはどちらかと言えば小柄な方だ。対するビドーは大柄と言える。

レイ「一撃だ。一撃で終わらせる。」

ビ「何だと...？」

「調子に乗るなあっ!!」

全力で飛んで来た！しかしレイは、動じなかった。
片手を前に出し、

レイ；「ビッグ・バン・アタック」
レイ「ビッグ・バン・アタック!!!」
ビ「な」
ドツカーン!!

言う間も無く倒された！

レイ「ガキだから弱いなんて決まりは無いんだぜ。」

そしてすぐに咲夜の横へ来た。

咲「こういうことよ。」

ゴ「まさか、ビドーがガキに一瞬で…。」

ブ「もう手加減はしませんよ。」

レイ「咲夜さん、セルJr. がこっちに来ています。僕の手もあと8分しか保たないので早いところ倒してしまいましょう。」

咲「セルJr. ？よくわかりませんが新手ということですね。」

「慎重に行きましょう。私はあまり体力が残ってません。」

霧完成まで、あと3分。

・・・

勇「何か、来るな。」

こ「3体来る。」

勇「悟天はどうだ？」

さ「今は眠ってます。」

勇「くそ、こんな時に。」

さ「おそらく悟天さんを狙っているものだと思います。」

勇「だろうな。」

空「私も闘うよ!」

燐「あたいらだって闘える。」

勇「駄目だ。空はここ(門前)で核エネルギーを使うと危険だし、燐

にはあまりにも危険だ。」

空「で、でも！」

さ「お願い、悟天さんの看病にあたつて。」

燐「・・・わかりました。行くよ、お空。」

空「・・・うん。。。」

さ「いい子ね。」

さとり、空、燐は地霊殿へ戻った。

勇「よおし、私ら2人で頑張るか！」

こ「うん！」

セルJ r. 到着まで、そう時間はない。

・・・

セ「さて、ここが河城にとりの研究所か。」

入り口まで到着した。

この時、妹紅が木に隠れていたことを察知していたが、気付かないふりをして中へ入っていった。

セ「邪魔するぞ。河城にとりはいるか？」

に「ん？」

セ「単刀直入に言おう。この研究所を破壊させてもら

に「わあ！君バイオ型人造人間？すごい！」

セ「・・・は？」

に「ちやんと動くバイオ型人造人間初めて見たよ。ねえ、触つてもいい？」

セ「き、貴様何を」

に「それじゃあ遠慮なく。」

誰もいいとは言っていない。

セ「・・・あの・・・」

に「へえ、ちゃんと生きてる感じがする。誰が君を作ったの？」

セ「いい加減にしろっ！」

に「え？何で怒ってるの？」

セ「いいか、私はこの研究所を破壊しに来たんだぞ。もう少し緊張感を持ったらどうだ！」

に「えく、それはやだね。まあ破壊されても、また作ればいいし。」

セ「勿論また破壊するぞ。」

に「それならまた作るだけ。そうでしょ？」

セ「・・・」。

呆気にとられてしまった。

セ「調子が狂った。もういい。」

研究所を出てしまった。

セ「いったい、何なのだ。まあよい。予定通りに」

妹「おい、何処行くんだ？」

セ「おっと、気付かなかったなあ。」

妹「嘘つけ。気付いてただろ。」

セ「長年培った知恵というやつか。面白い。」

妹「質問を無視すんじゃないやねえよ。博麗神社に行くのか？」

セ「これは失敬。それはまた後だ。」

妹「神社なら別にいいが。」

セ「クク、次は地霊殿だ。そこには孫悟天がいる。勿論、殺しに行く。」

妹「!!」

セ「どうした？急に顔が怖くなったぞ。」

妹「行かせねえよ。・・・お前が死ぬ!!」

ウンツ!!
変身した。

セ「ほう、今の弱い身体の私のパワーなら、互角に闘えそうだな。」
妹「言ってる。」

ここでも、死闘が始まった。

・・・

霊「一気に、敵が増えた。」

横になっている霊夢はやっと危機感を覚えた。

霊「にしても寒いわ。何か暖かいものは…。」

押入れを漁っていると、あるものが出てきた。

霊「あつ、これ…。」

紫色のマフラーだ。これには思い出がある。

くく

霊「さ、帰るわよ。」

天「あ、ちよつと待って。」

霊「なによ、早く帰りたいんだけど。」

呉服屋に立ち寄った。悟天は何かを探してる。

天「えつと、あつた。」

何か買ってきた。勿論自分のお金でだ。

天「はい、これ。」

霊「なによこれ。」

袋に入ったまま渡した。

天「開けてみて、ほらほら。」

霊「マフラー？」

天「そろそろ寒くなるからね。受け取ってくれるかな？」

霊「・・・ま、貰える物は貰っとくわ。」

くく

しかし、今まで一度も巻いたことがなかった。

霊「紫色って絶対狙ってるわよね。いっつも紫色のズボン履いてるし。」

とは言うものの首に巻く。

霊「あったかい…。」

「そういえば、悟天は何処かしら？」

先ほどパツと探したが見つからなかった。今度は念入りに気を探す。

霊「!!」

ここで漸く悟天がピンチであることに気付いた。

霊「行かなきゃ…!」

ふらふらしながらあるものを探す。

・・・

ここは人里。少数の人間は何か始まったことに気付いているが、里

は至って平和だ。

村人T「のどかだなあ。」

平凡な格好、猫背、そしてポケットに手をつ込みながら歩いているのが特徴な村人だ。

村人a「おい！なんだあれ!？」

T「んん？」

人の形をした何かが飛んでくる。

次の瞬間、

ドォーンツ!!

物凄い勢いで着地した!

村人b「うわっ！なんだ!？」

セルJ r.「ギギッ」

T「セ、セルJ r. …。まずい、今は闘える人材が人里にいない!」

セルJ r.「ギギッ!」

ズツ!!

気弾で建物を1棟破壊した。

村人c「逃げろー!」

T「・・・大変だ。」

村人達は逃げ惑う。

??「やめなさい!」

セルJ r.「?」

生徒「先生逃げようよお。」

??「大丈夫よ。先生は負けないから、みんなは早く逃げなさい。」

生徒「でも…。」

??「早く！」

生徒「…うん。」

生徒達は逃げた。

T「あれは慧音か。駄目だ。サイヤパワーがない慧音じゃ勝てない。」

慧「そこまでよ。」

セルJ r. 「(ニヤア)」

Tは隠れて見ていた。闘えないのもそうだが、ある存在を待ちわびているからだ。

•••••

妖「なかなか、やるじゃないですか。」

セルJ r. 1「ギギッ」

セルJ r. 2「ギッギッギ」

再生できるセルJ r. は斬っても斬ってもキリがなかった。

体力減少とダメージがのしかかる。

妖「今の幻想郷の状況を見るに、誰も助けにはこれなさそうですね。

私一人でなんとかしなければ…。」

•••

鈴「いてて…。」

セルJ r. 1「ギヤアッ！」

セルJ r. 2「ギイイツ！」

セルJ r. 2体は荒れ狂っている。ウドンゲの能力だ。セルJ r. 2体を狂気状態にしたのだ。

鈴「やっぱりお師匠様はすごい。あの薬のおかげでこんなにパワーが上がった。」

「今ならもしかして霊夢さんにも…、うひひ。」

なんと！薬の効果で超化を成し遂げたのであった！

鈴「狂ったからわかった。あんたらの弱点は…」

「頭の中の核だっ!!」

鈴；「真・幻朧月睨（ルナティックレッドアイズ）」

セルJ r. 1「ギアッ！」

核ごと頭を砕き、セルJ r. 1体を倒した！

鈴「にしても暴れすぎ。玄関、めちやくちやじゃないか。お師匠様に、叱られないと、いい、な…。」

疲労でウドンゲも倒れた。

セルJ r. 2「ギッ？」

ウドンゲが倒れたことで目を覚ましてしまった。
ウドンゲピンチ！

…

文「…やりますね。」

ボ「フン。」

文「互角つてところですね。早くケリをつけないとまた…。」

ボ「互角？違うな。俺はまだまだ余裕だぞ。俺はあと1回へんし」

セルJ r. 「ギギッ」

セルJ r. ；「魔貫光殺砲」

文「うわっと！」

紙一重で避けた。

セルJ r. 「キッ」

ボ「なんだ貴様は。」

セルJ r. 「ギギッ」

ボ「ほう、そうか。余裕があるのに味方とな。」

文「ええ…。」

セルJ r. はボージャックに敵意を見せなかった。今の一瞬でそれを伝えたのだから知能指数は高い。

文「流石にまずいですね。」

・・・

レイ「咲夜さん！」

咲「・・・。」

目から血を流している。

レイ「…!!?」

咲「大丈夫よ。心配しないで。」

レイ「大丈夫じゃないですよ！何とかして早く手当てしないと…！」

ブ「何処を見ている！」

急に襲い掛かって来た！

レイ「ツ!!? まずい！」

咲；幻世「ザ・ワールド」

咲「ザ・ワールドオ！」

時は止まった。

咲；メイド秘技「殺人ドール」

止まったブージンの周りに又しても大量のナイフを仕掛けた。
しかし、ブージンには見えている。

咲「解除オ！」

ブ「クツ！」

ザクツ!!ザクツ!!

至近距離だが超能力でナイフを殆ど止めた。仕掛けるスピードもかなりのものだった故、腕や脚に何本か刺さった。

レイ「助かりました。無理させてしまったてすみません…。」

咲「あら、レイにも見えてるのね。」

ゴ「…。」

ゴクアだけは付いていけない。それもそうだ。

ブ「ホオア！」

やられたフリをし、右手を光らせ再び咲夜に襲い掛かる。
真横にいるのだがレイでも間に合わない！

レイ「さ、咲夜さんツ!!」

ブ「…ア…。」

驚いたことに、既に咲夜の左手に握られたナイフがブージンの左胸を貫いているではないか！

咲「周りのナイフに気を取られすぎよ。哀れね。」

ブ「…。」

ブーゼンはその場に倒れ伏せ白目をむいた。
息がないことは言うまでもない。

レイ「や、やった！やりましたね！」

咲「そう、ね。ありがとう、とう…。」

ス…

咲夜も倒れた。

血の気がなくなっていることは見ればわかる。

レイ「さ、咲夜さー…んツ!!?!?!」

それだけではない。向かって来たセルJr.も到着してしまった。

ゴ「何者だ。」

セルJr.「ギギツ」

ゴ「ふむ、敵意はないとな。残念だったな小僧。」

レイ「くそつ、万事休すか…。」

現実是非情なもので、あれからまだ1分しか経っていない。

霧完成まで、あと2分…。

各々ピンチに陥る幻想郷。

しかし、それと力の数が合わない。

彼らは無事、生き延びることができのだろうか？

悟天はまだ起きない。

第22話へ、続く…。

第22話 「未来から来た魔法使い」

くあらすじく

セルJr. が各地に散らばり、幻想郷は大混乱。何も心配することなく過ごしている者など誰一人いなくなってしまうた。

妖夢は体力だけをどんどん蝕まれ、

ウドンゲは1体倒すももう1体を前に戦闘不能、

桁違いな相手と交戦する慧音、

歯が立たない敵に味方が増え絶体絶命の文、

何やらまだまだ余裕が残っているセルに立ち向かう妹紅、

霧が未完成なのに咲夜が倒れ2対1に追い込まれたレイ、

明らかに手数が足りていなかった。

悟天よ、霊夢よ、早く来てくれ！

幻想天霊伝説 第22話

妹「おらあっ！」

セ「ふん。」

パシッ

いとも簡単に払われてしまう。

そう、先ほどから一度も攻撃が通っていないのだ。

妹「くそっ！なんでだ!?!お前と私じゃあまり戦闘力は変わらない筈なのに……！」

セ「経験の差だ。私には数多くのサイヤ人の細胞が組み込まれている。オリジナルよりも多くの種類をな。」

妹「なに?」

セ「私は人造人間だ。お前たちとは細胞からまるで違う。そこをどきたまえ。私は孫悟天を殺さなければならぬ。」

妹「通すかよ。お前みたいな奴には絶対させねえよ。」

セ「ならば気絶させるしかあるまい。」

妹「殺さねえのかよ。」

セ「意味がないからな。」

妹「なんだよ知ってんのかよ。」

セ「さあ、お遊びはもう終わりだ。」

妹「・・・まだだ。」

セ「？」

妹「まだだあっ!!」

妹；「フェニックスダイナマイト」

ボウツ!!

セ「自爆か、くだらん。」

しかし、一向に突撃してこない。それどころか、自爆の炎を制御している。

セ「貴様まさか。」

妹「その通り。この力ならお前を倒せる!」

セ「少しパワーが上がった程度で、この私を倒せると思うかね？」

妹「燃えろ、虫けら。」

セ「分かっているぞ。強い衝撃を与えたら爆発するのだろうか？」

妹「へえ、分かっているじよねえか。じゃあ、どうやって闘う?」

セ「ふん、すぐにわかることだ。」

妹「それじゃあ・・・、覚悟しやがれっ!」

魔；魔符「ミルキーウェイ」

セ「うっ!」

突然の弾幕をガードした。

魔「よう!待たせたな!」

妹「待ってねえよ!ここからだっただのに!」

セ「霧雨魔理沙、か。セルJr.はどうした?」

魔「よくわかんなかったけど、変な青い奴ならさつき喧嘩売ってきたからパツと終わらしたぜ☆」

既に魔理沙は超化している。

セ「ぐ、ドクターから聞いていたが流石だ。もう1体はどうした？」
魔「もう1体？知らないぜ。」

セ「(何故だ。何故既にもう1体も倒されているのだ。誰がやった？) まあいい、この私を倒せるかな？」

妹「お前本気で言ってるのか？魔理沙の力を知らないからだと思うが、この状況でお前に勝ち目はないぞ。」

セ「ククク、それはどうかな？」

妹「というわけだ。気が変わったんでな！」

全身の火を紅蓮の炎に変えた！

セルはぐつと構えるが、

魔；魔符「スターダストレヴアリエ」

セ「ぎいつ！」

なんと、横から弾幕が飛んできたのだ。

気がついた時には、妹紅ががっしりしがみついている。

妹「あばよっ！」

セ「し、しまっ」

ドツカーン!!!

妹紅は粉々になり、セルは辛うじて足や頭は無事だが、胴体は殆ど吹き飛んだ。

セ「残念だな。私は再生できる。少しだけ時間を使えば元通りに」

魔；魔砲「ファイナルスパーク」

魔「ファイナルスパーク!!」

セ「なっ！ぎえええ！」

セルは、完全に吹き飛んだ。

魔「装填が早いのが私の自慢だぜ！」

妹；「リザレクシヨン」

妹「やったか？」

魔「まあな。緑色に光るんかが飛んでいった気がするけど気のせいだな。」

残念なことに、2人でフラグを連立させてしまった…。

この後どうなるかは読者の皆様なら予測が容易であろう。

・・・

霊「・・・あつた。」

袋を取り出した。中身は勿論、

霊「あまり多くないから使いたくなかったけど…。」

カリカリ、ゴクツ

仙豆だ。

霊「さて、行こつか。」

額に指を当て、瞬間移動した。

やつと、霊夢が動き出したのだ!!

・・・

妖「・・・どうすれば…。」

セルJ r. 1 「ギギツ」

セルJ r. 2 「ギツギツギ」

妖「こうなったら、一か八か。はあっ!!」

ドンツ!!

剣を勢いよく地面に突き刺し、一瞬だけ地面を揺らした。

セルJ r. 1 「ギッ！」
セルJ r. 2 「ギギッ！」

その隙を突き、片方のセルJ r. へ飛び掛った！

妖「たあっ！」

妖；人鬼「未来永劫斬」

ザッザッザッザッザクツ！！

妖「！！」

明らかに最後だけ手応えが違った。途端、セルJ r. の気が完全に消えた。

妖「そうか！頭の核が弱点だったんですか！頭に何かあるとは思ってましたがそれだったとは。」

分かったのなら最初からそうしてほしい。

妖「じゃあもう一体も核を斬ってしまえば」

セルJ r. 1；「かめはめ波」

セルJ r. 1 「ギイ！」

妖「うがっ！」

ドゴオ！！

白玉楼の扉に叩きつけられた！

妖「未熟、ですね。油断を…。」

セルJ r. 1 「ギッギッギ！」

ギユンツ！！

セルJ r. 1 「ギイ？」

幽「ぐう！やっぱり効かない。」

幽々子は〈死を操る程度の能力〉を使いセルJ r. を死なそうとす

るも、力の差がありすぎた…。

セルJ r. 1 「ギツギツギ」

ニヤリと笑い、幽々子へ襲い掛った！

妖「幽々子様ー!!」

・・・

ゴリツ!!

文「があああつ！」

文は、岩壁にめり込んだ状態で飛ばれている。超化はどうに解けている。

ボ「おやおや、もう動けんか。」

セルJ r. 「ギギギ」

文「・・・ゲホッ」

?? 「おいあんたら。」

ボ「？」

萃「私は伊吹萃香。山を荒らす奴は私が許さないよ。」

セルJ r. 「ギツギツギ」

文「なんで、避難を…。」

萃「頑張ってるあんたを置いて行けるわけないだろ？」

「はあつ！」

最初から本気を出した。サイヤパワーは持っているものの、力の差は見切っているからだ。

そして、勝てないことも。

ボ「何かと思えば雑魚か。おい、相手をしてやれ。俺はこいつが喋らなくなるまでいたぶってやる。」

セルJ r. 「ギッ！」

文 「はああっ！」

ヴンツ!!

ボ 「うおっ」

文 「まだ、くたばりませんよ。」

ボ 「そうか、では俺も、はあっ！」

ゴオオツ!!

ボージャックも変身した！

文 「!!」

ボ 「いいぞ、その絶望に満ちた顔。では、始めようか。」

セルJ r. 「ギツギツギ」

萃 「さて、どうしようかね。」

萃香の頭の中に、解決策はない。

・・・

一方、紅魔館がピンチであることは言うまでもない。

レイ 「霧が完成するまであと2分…時間を稼ぐしかない。」

咲夜を抱え、付近の林へ飛び出した！

レイ 「ついてこい！」

セルJ r. 「ギギッ！」

ゴ 「逃がすか！」

舞空術は霊夢から教わった美鈴から教えてもらった。

能力を発動しているレイのスピードはセルJ r. 以上だ。容易に距離を置くことができる。

レイ 「ここなら大丈夫だろう。」

一旦咲夜を木のそばに寝かせた。
少し経つと、セルJ r. が見えた。ゴクアは何故か遅れている。それだけでなく剣もなくなっている。

セルJ r. 「ギギッ！」

レイ「今だ！」

レイ；「魔貫光殺砲」

レイ「一本道なら避けられないだろ！まとめて消えろーっ！！」

セルJ r. 「ギッ！」

ゴ「ぬう！」

見事セルJ r. の核を貫いた！レイは勿論、セル及びセルJ r. の弱点を知っているから当然だ。

しかし、ゴクアは両手で止めた。

レイ「ぐ……ぐぐぐ……!!？」

ゴ「ぐう！…はああっ!!」

ゴオオツ!!

変身して身体が膨張し、レイの攻撃をかき消した！

そして、周りの木々も消し飛んだ！

ゴ「どうだ。剣がなくてもこの差はどう埋める？」

レイ「くそっ！今の僕では歯がたたない…」

ゴ「はあっ！」

ドゴオ!!

レイ「ぐっ！」

レイを遥かに上回るスピードで殴打した！たちまちレイは吹っ飛び木を2本折って漸く止まった。

レイ「力が違いすぎる…どうすれば…。」

能力で戦闘レベルが上がったとは言え、体力は減る。それがあればもっと違った結果になったのだが。

ゴ「そこではよく見えんだろう。」

レイに近寄り、首根っこを掴み、咲夜の近くへ放った。

ゴ「よく見ておけ。お前が守ろうとした女が砕ける姿をなあ！」

目から血を流した少女に対し、拳を大きく振りかぶった！

レイ「や、やめろーっ!!」

この声を聞いた後に殺そうとしたことが仇となった。

レミ；紅符「スカーレットシユート」

ゴ「うぐっ！」

隙だらけであったため、後方へ少し吹っ飛んだ。

間一髪で咲夜は助かったが、レミアの身体の所々が焦げている。霧が完成するまであとどれくらいであろうか。彼女にとっては残念なことに、空は快晴だ。

レイ「お、お嬢様！」

レミ「はあ・・はあ・・、レイだけでも、無事でよかったわ。」

超化しているが、あまり長期戦には期待できない。

彼女を見れば一目瞭然だ。

レイ「僕も手伝います。一気にカタをつけてしましましょう。」

レミ「ふふ、戦闘力が私と同じになったわね。本当に不思議だわ。」

レイの戦闘力は、彼自身の能力により超レミリアと同じになった。謎が深まる一方だ。

と、考えてもいられない。こうしている間にもレミリアの肌は焦げていく。

レミ「ちよつといいかしら？」

レイ「はい。何でしょうか。」

カプツ

レイ「え？」

急に腕を噛まれ、血を吸われた。

レミ「ご馳走さま♡」

レイ「な、何をするんですか！」

レミ「ちよつとした、下準備よ。」

ゴ「何をごちやごちやと。こちらから行かせてもらうぞ。だあつ！」

レミ「ふん、」

レミ；神槍「スピア・ザ・グングニル」

レミ「覚悟なさい！」

右手に自慢の槍を掴んだ。こう見えて、最後の力だ。これで倒さなければ本当に終わる。

しかし！

ゴ「!!」

レミ「？」

殺気を感じ取り、ゴクアは止まった。

その次は一瞬であった。

??;「フルパワーデスビーム」
ビツ!!

レミ「あがつ!」

レイ「何っ☒」

レミリアは謎の一撃により、右腕を貫かれ、その腕は地面に落ちた。

レミ「あゝあゝあゝあゝ!!」

レイ「お嬢様!!?」

??「ククク、自分で言うのもなんだが いい狙いだ。」

そいつは、ゴクアの横に舞い降りた。

ゴ「何者だ。」

??「安心しろ。私はお前の味方だ。それ以上でもそれ以下でもない。」

その姿、レイが元いた世界では知らぬ者などいない、恐怖そのものである。

レイ「お前は…セル!」

簡易版セル「ほう、私を知っているとはな。光栄だ。」

「レミリアのためにも言っておこう。私は、ドクターによって作られたオリジナルのセルのコピーだ。簡易版、とドクターは言っていたが、オリジナルのセル完全体と同程度の戦闘力を持っている。」

「その圧倒的パワーで、数々の幻想郷を一人で滅ぼしてきた。もうドクターにも簡易版とは言わせんぞ。」

レイ「数々の…?まさかお前!!?」

簡セ「お察しの通りだ。何処に何があり誰がいるかも熟知してい

る。」

「そして、何人ものレミアア・スカーレットや十六夜咲夜を殺してきた。お前の知っている大事な仲間も何回殺したか私も覚えていない。ハッハッハッハ！」

レイ「き、貴様アーーー!!?」

レミ「!!」

レミアアは、久々に腕がないという感覚が蘇り、痛みもがきながらもセルの話の聞いている。

霧完成まで、あと…。

・・・

勇「！来たぞ！」

こ「・・・。」

地底にはなんと、3体ものセルJr. が向かって来た。
悟天を本気で殺したいらしい。

勇「おいおい、あのちっせえのものなかなか手強そうだな。これはまいったなあ。」

こ「ユルサナイ。」

「絶対殺してやるーっ!!」

ヴンツ!!

激しい怒りにより、こいしは超化した！

帽子は飛んでいき、瞳が明るくなり、髪は他の人物よりも逆立っている。

勇「こいし、お前。」

こ「!!」

ドツ!!

急にセルJr. 達へ飛びかかった！

勇「お、おい！」

セルJ r. 1「ギイツ！」

腹に拳を入れられ吹っ飛び、地底の壁に叩きつけられた！

セルJ r. 2「ギツ！」

セルJ r. 3「ギギツ！」

こ「貴方達、一人も生かして返さないわ。ここで死んで。」

暴走に近いが、大丈夫なのだろうか？

・・・

神「早苗。」

早「・・・はい。」

神「今、文と萃香が命をかけて闘っている。お前はそれでいいのかわか？」

早「行つても無駄です。見守ることしかでき」

神「馬鹿者!!!」

早「!!」

神「あの2人が何のために闘っているかわかるか？この妖怪の山、そしてそこに住む愛する者たちを守るためだ！」

「お前はただ見ているだけか！」

早「闘いたいですよ!!!」

神「！」

早「私だつて、力さえあれば今すぐにでも向かいます。でもその力がなければどうしようもないじゃないですか！」

早苗は泣いてしまった。

諏「力、か。それなら、やるしかないね、神奈子。」

神「・・・そうだな。早苗にここまで覚悟があるなら、やろう。」
早「？」

そう言うと、神奈子と諏訪子は早苗の背に手を当てた。
するとなんとという事だ！2人は光だし、その光はどんどん早苗の体
内へ流れ込んでいくではないか！

早「神奈子様！諏訪子様！いったい何を!？」

諏「守矢の切り札さ。私たちは早苗に溶け込む。つまり、私たちの
力の全部を早苗に託すってことだよ。」

「これで力は手に入る。」

早「！そんなことしたら!？」

神「しのごの言うな。黙って従いな。」

「ただ、約束してくれ。」

早「何をですか?」

「必ず勝て。それだけだ。」

早「神奈子様――！諏訪子様――!」

完全に光となり、その全てが早苗に溶け込んだ。
そして…、

早「うわああああ!!」

ウンツ!!

遂に、超化を成し遂げた!

早「・・・行つてきます!」

涙を拭き、全速力で仲間の元へ飛んだ!

・・・

T「やっぱりダメだ。傷すら付いてない…。」

ずっと隠れて見ているこの男は、分析だけして加担はしなかった。力がなさすぎる。

慧「く、くそお…。」

セルJ r. 「ギツギツギ」

慧音は膝をついている。スペルカードは使い果たし、体力も限界。身動きすらままならない。

生徒A 「先生ー!!」

生徒B 「あたしらも闘うよー!」

T 「!!」

口元が震えながらも、2人の勇敢な生徒が立ち向かった!

セルJ r. 「ギイ」

ニヤリと笑う。両手に気を溜め、生徒を殺そうとした。

T 「やめろお前ら!逃げろっ!」

この腰抜けも遂に動き出した。

その時!!

ヒュンツ!!ドグリツ!!

この場にいる誰もが、一瞬何が起きたかわからなかった。気が付いた時には、破壊された家屋へセルJ r. が吹っ飛ばされていた。

そして、慧音の目の前には、紫色のマフラーを巻いた一人の気高き少女が立っていた。

霊 「慧音、生きてる?」

慧 「まあ、なんとかな。」

「すまない、足止めもできなかった。」

霊「いいのよ。このレベルの異変は今までで一度もなかったわ。」

霊夢の体調不良も含めて、である。

慧「それにしても、今何をした？」

霊「わからなかった？瞬間移動でここへ来て蹴り飛ばしただけよ。」

T「流石の化けもんだな。」

生徒A「先生大丈夫!？」

生徒B「うわーんよかったよー！」

2人の生徒は泣いて慧音に抱きついた。

霊「さてと。」

セルJ r.「ギ…ギ…」

霊「一蹴りでこれかしら？大したことないわね。」

「でもね、私忙しいの。」

ヴンツ!!

霊「ほつといたら何するかわかったもんじやないわ。ここで消えなさい。」

セルJ r.「ギイ…」

冷徹な面構えをした少女に対して震えている。

慧「待ってくれー！」

霊「なに？」

慧「このまま殺すのもお前らしくないだろ？あとは私に任せてくれないか？」

霊「殺されても知らないわよ。」

と言いながらも、見守っている。

慧音は立ち上がり、ゆつくりとセルJ r. へ歩み寄った。2人の生徒の肩を借りながら。

慧「なあ。」

セルJ r. 「?」

慧「見たところ、お前は悪い奴ではない。少なくとも私の見解ではな。どうだ?」

「私の生徒にならないか?」

セルJ r. 「・・・。」

慧音は手を差し伸べた。セルJ r. は不思議そうな表情を浮かべている。

そつと手を伸ばし、彼女の温かい手を握った時、表情は変わっていないが涙を流していた。
ス・・・

霊夢は超化をといた。

慧「さあ、行こうか。他のみんなが待ってる。」

生徒A 「はい!」

先生B 「うん!」

セルJ r. 「・・・ギ。」

霊「こんなこともあるのね。」

「(産み出された分身のような奴でこうなるなら、もしかしたら。いや、そう上手くは。。。)」

慧「他は行かなくていいのか?」

霊「そうだったわ。そうね。親玉のところへ行くわ。」

慧「気を付けてな。」

しかし、霊夢は指を額に当てない。

慧「?どうした?」

霊「瞬間移動はしなくていいわ。それにこれするとお腹空くの。」

慧「おう、そうか。」

霊「あとは頼んだわよ。」

慧「ああ。」

ドツ!!

勢いよく飛んで行った。

・・・

鈴「・・・ここ、は？」

永「気がついたかしら？」

鈴「あれ？私、生きてるんですか？」

永「ええ。」

鈴「じゃあ、あと1体は!？」

永「私が倒したわ。ウドンゲのおかげよ。」

鈴「私、1体倒してぶっ倒れただけなんですけど・・・。」

永「いいえ、あなたは敵の弱点を見つけてくれたわ。だから私はそこを射抜いただけ。」

鈴「射抜くって。。。お師匠様はやっぱ強いですね。」

永「ふふ、褒めても何もあげないわよ。」

てる「鈴仙は死んでもよかったけどね。」

この少女は因幡てる。永遠亭に住む妖怪兎だ。

永「あとでお仕置きね。」

て「イヤア！」

かくして、永遠亭には平和が戻ったのであった。

・・・

妹「にしても疲れたな。帰るか。」

魔「私はどっかへ加勢しに行くぜ。」

妹「そうか。じゃあまたあと」

ビツ!!

魔「なっ！」
妹「・・・がはっ。。。」

心臓を貫かれ、妹紅は倒れた。

魔「誰だ！」

セ「久しぶりだな、霧雨魔理沙。」

魔「う、嘘だろ？だって、完全に消した筈じゃ。」

セ「私の核には、プロテクターが張つてある。核に傷など入るわけがないのだよ。」

「プロテクターに傷を入れたことは褒めてやるぞ。」

魔「ふざけんな！もう一回消し飛ばしてやる！」

セ「残念だったな。今の復活で、オリジナルのセルの完全体と同程度の戦闘力まで上昇した。サイヤ人の細胞のおかげでな。」

「貴様に勝ち目はない。」

魔「うるせえ！わかんねえことごちやごちや言いやがって！またここに来たことを後悔させてやる！」

果たして、魔理沙に勝ち目はあるのか？

・・・

レミリアは右腕の断面をおさえながら、空をちらりと見てこう呟いた。

レミ「私は、外の世界から忌み嫌われ迫害を受けた。それから追われて幻想郷に辿り着いた。」

「そして今度は幻想郷か？・・・ふざけるなあ。。。」
ヴンツ！！

レイ「このままだと全滅だ…霧は…」

空を見上げると、霧が完成していた！

「ふざけるなあっ!!」

カツ!!

紅く激しいオーラを放ち、髪も紅く染まった!

ゴ「な、なにいい!」

簡セ「うおっ!なんだ!」

レミ「覚悟しろ、お前ら。」

レイ「凄いパワーだ…!これならもしかしたら…!」

右腕はどうに止血し、火傷も消えていた。

・・・

萃「はは、超化ってやつも、訊いておけば、よかった、な…。」
バタツ

セルJr.「ギツギツギ」

萃香は倒されてしまった…。

文「・・・。」

そして、文も。

ボ「ふん、もっと叫び声を聞かせろ。」

蹴り上げたが、何も言わない。

ボ「ただ殺すのも飽きた。人質として、いや、欲を満たすための奴隷にするのもいいな。ハハハ!」

―その時!―

ボ「なっ!」

セルJ r. 「ギイツ！」

急な突風に吹き飛ばされた！

ボ「誰だ！」

其処には、風を司る神、いや、現人神がいた。

・・・

??? ; 恋符「マスタースパーク」

セルJ r. 1 「ギツ！」

突然何処からか放たれたマスタースパークをセルJ r. 1は咄嗟に避けた。

幽「！よくわかんないけど助かったわ。」

妖「？魔理沙？いや、何か違う。」

??? 「時間がないんすよ。ちやつちやと終わりにしましょか。」

セルJ r. 1 「ギギツ！」

??? ; 「マスターキャノン」

八卦炉から、とてつもない威力のエネルギー弾を発射した！

セルJ r. 1 「ギ」

ドツカーン！！

一瞬にして粉碎された。

??? 「それじゃ、まだやることあるんでまた後で。」

魔理沙に似た服装をした金髪の少女は、魔法陣を出してテレポートした。

妖「魔理沙じゃない。けど、気はそつくりだった。」
「それに、あれは私たちのような超化じゃない。」
「あれは多分、超サイヤ人だ。」

謎の金髪少女の登場により、白玉楼は救われた。

魔理沙は大丈夫なのか？

こいしの暴走は吉と出るか凶と出るか？

レミアアの身にいったい何が起こったのか？

早苗が手に入れた「力」はどれほどなのか？

謎の金髪少女は誰なのか？

第23話へ、続く!!

第23話 「セル激怒！こいしの仲間割れ」

簡セ「私はセル。名も知らないドクターによって造られたコピーらしい。事実、私には孫悟空とピッコロとフリーザの細胞しか混ぜられていない。オリジナルはもつと混ぜられているという。」

「だが、そんなことは知ったことではない。私はドクターの指示通りに動き、全て精密にこなしてきた。例えば、どんなことであろうと。」

「だから、私の手は血で染まっている。何人同じ人物を殺し、大地を火の海に変え、滅ぼしてきたかは定かではない。なのに、滅ぼして帰ってきてでもドクターは喜ばなかった。」

「ここもこの程度の力か、と肩を落としてドクターは言う。」

「私にはどういう意味かなど興味が無い。自分の手の色も、ましてや命も空間もどうでもよい。」

「ただ、ドクターに認めてもらえれば、私はそれだけでいい。そう、それだけなのだ。」

セ「私はセル。名も知らないドクターによって造られたバージョンアップだ。オリジナルに混ぜられていた細胞に加え、トランクスとバーダックの細胞も混ぜられている。核にはプロテクターが張っており、少々のことでは壊れない。要するにプロテクターがなくならない限り私は不死身だ。」

「だが、私が今生きている意味がわからない。生まれて一週間すら経っていないから仕方ないのかもしれないが、私はへオリジナルのバージョンアップへであってへ私へではなかった。」

「頭の中へドクターが語りかける。何故一人も殺していないのだ？、と。」

「ある細胞は言う。闘うのはワクワクするだろ？、と。」

「沢山の細胞の中のいくつかが私に言う。殺すのはいけないことだ、と。」

「別の細胞は言う。さつさとゴミは殺してしまいなさい、と。」

「頼む、誰でもいい。私を、見つけてくれ。」

勇「まさか、超化つてやつに成ただけであそこまで強くなるなんてな。鬼の私も吃驚だ。」

「あとは、どれほど耐えられるかな。あれは殆ど暴走だから体力がいつまで持つか…。」

こいしは、見事な闘いぶりでセルJ r. 3体を圧倒していた。

こ「はあ、っ！」

セルJ r. 2「ギイツ！」

最後の1体が倒れたと思った矢先、3体とも立ち上がったではないか！

勇「倒れては立ち上がって、の連続だ。どうなってる？既に腕や脚は何本も折れている筈だ。」

地霊殿チームの一番の弱点は、セルJ r. に対して何の知識も持っていないことだ。さらに、咲夜や妖夢のように勘が鋭い人材もいない。

勇「とにかく、今は全てこいしにかかっている。さっきの奴、セルつて言ってたな。そいつが来るまで体力を温存させないと。」

「今のこいしならセルに勝てるかもしれない。」

勇儀はセルのパワーアップを知らない。

•••

魔；星符「メテオニックシャワー」

魔「くらえっ！」

セ「ふん。」

華麗に躲されてしまう。

魔「ちっ！ならこれはどうだ！」

魔；魔符「スターダストレヴァリエ」

魔符「ミルキーウェイ」

星符「ドラゴンメテオ」

魔「とっておきの三段弾幕をくらええ！」

弾幕が多すぎるため、目を開けられないほどに眩しい。

セ「!!」

ドドドドドドツ!!

避けようとするも、その殆どが命中した！

魔「おらおらおらおらっ！」

セ「ぎっ！ぐっ…」

セ；「パーフェクトバリアー」

セ「ぶるああああ!!」

魔「なっ！」

バリアーの威力は凄まじく、全ての弾幕がかき消されてしまう。

魔「やばっ！」

バリアーはどんどん広がり、魔理沙に命中した。咄嗟にガードしていなかったらどうなっていただろうか。

セ「……。」

魔「はあ…はあ…、どうだ、今のは効いただろ？」

セ「・・・」

「ふざけるのも大概にしろっ!!」

魔「!!?」

まさかの台詞で怒鳴った!

魔「は? 私は本気だぞ!」

セ「何が本気だ。あんな玩具を次から次へと使いやがって。」

「この私を誰だと思っっている! セルだ! オリジナルを超える究極人造人間セルだ!」

魔「お、玩具?」

セ「私には大して効いていないのだ!」

「その証拠に、マスタースパーク以外の弾幕をいくら使っても疲れんだろう!」

魔「そ、それがなんだってんだよ。」

セ「まだわからないか。ならば教えてやろう。」

「これが、本気というものだ!」

セ;「連続ライオットジャベリン」

両の手で気をため、エネルギー弾を6連続放った!

セ「そらそらそらそらそらそら!」

魔「うわっ!」

3発は避けたが、残りは当たってしまった。

魔「ぐっ…あ…。」

ス…

セ「立て、まだ動ける筈だ。」

魔「く、くそお…今の、速くて避けきれなかった…。」

セ「まあ、私に一瞬でも本気を出させただけでも十分だ。」

「消えておけ。魔理沙。」

右の手のひらを魔理沙へ向け、気を集中した。
その時！

セ「！ くっつ！」

ドーンツ！！

セルは何かを察知し、後ろへ下がって避けた。
地面にめり込んでいたのは、直径50cmほどの陰陽玉であった。

霊「何してんよ魔理沙。」

魔「す、すまねえ。」

霊「ま、いつものことだからいいわ。」

「あんたが、今回の異変の主犯かしら。」

セ「博麗霊夢、待っていたぞ。あとは貴様を殺せば任務完了だ。」

霊「質問に答えてくれないかしら。」

セ「これは失礼。如何にも、私がこの異変の主犯のセルだ。さあ、どうする？」

霊「決まってるでしょ。退治させてもらうわ。」

セ「殺すか？」

霊「・・・。」

セ「どうした？ドクターの話によるとこんな質問は即答だということだが。」

霊「あんたには関係ないわ。」

セ「まあよい。お前なら私を楽しませてくれるのだろうか？」

霊「完膚なきまでに叩きのめしてやるわ。」

「2年ぶりに、本気を出してあげるから。」

魔「(霊夢が、久々に本気を・・・?)」

セ「それは頼もしい。見せておくれ、貴様の本気を。」

霊「・・・。」

ヴンツ!!

微動だにせず超化した!

霊「はあああ!」

セ「・・・」

霊「はああああっ!!」

セ「ふん。やはりさつき感じた気よりはさほど大きくはならないよ
うだな。」

気は最大まで高まった。しかし、まだ準備完了ではないようだ。

霊「はっ!!」

セ「?」

先程の陰陽玉に加え、もう1つの玉が現れ霊夢の周りをぐるぐる回
りだした!

セ「・・・これが、貴様の本気か。」

霊「せいぜい足掻きなさい。」

セ「いいだろう。ならば此方も最初から本気で行かせてもらおう。」
「はあああああっ!!」

いよいよセルも羽を開き本気を出した!

魔「い、今のうちに、妹紅を連れて離れねえと。」

蹠踉（よろ）めきながら妹紅に近寄り、彼女を抱え立ち去った。

霊「あら、逃してくれるのね。」

セ「お前を倒した後でも十分だ。」

霊「私を、超えられるかしら？」

セ「超えてやるとも。」

「シヨ一の、始まりだ。」

・・・

今度は打って変わって紅く激しいオーラを放ち続けている。

レミ「・・・成功ね。」

咲「（・・・ピクツ）」

レイ「お嬢様、その姿は一体…？」

レミ「貴方の血のおかげよ。でも、あまり吸わなかったからこの状態でいられるのもほんの少しだけでしょうけど。」

レイ「その姿なら勝てるんですか☒」

レミ「ふふ。ええ、あっさりだね。」

簡セ「何をごちやごちやと。どらあつ！」

寸前で躲した！

レミ「邪魔よ。」

簡セ「な」

ザクツ!!

千切れた自分の右手が持っていたグングニルを左手にとり、セルの上半身を分断した！

レイ「すごい…これなら勝てる！」

ゴ「調子に乗るなよ！」

レミ「あつそ。」

紅い閃光が走ったかと思えば、レミアアを確認した時は既に目の前だった！

ゴ「は、はや」

レミ；夜符「クイーン・オブ・ミッドナイト」

レミ「眠りなさい。」

ゴ「ぐあああああああ……」

林の奥へと吹っ飛ばした！

レイ「や、やった！」

レミ「！ レイ！ぼーつとするな！」

レイ「え☒」

レイの背後には、先程真つ二つにされた筈のセルが立っていた。

レイ「そうか、セルは再生できるんだった。」

簡セ「死ねい！」

レイ「しまっ……」

レミ「レイ！」

咲；傷符「インスクライブレッドソウル」

急に目の前へ現れた咲夜が、目を真つ赤にしナイフで連続斬撃をくらわせた！

簡セ「なにいつ！」

ザザザザザザザツ！！

簡セ「くゝあゝあゝあゝ！」

簡易版セルが振りかざした右の拳は細切れになり、胸部も無数の切り傷を負った。

だが、咲夜が動けたのもそこまで。

バタツ

咲夜は何も喋らず倒れ伏した。

シユウウ・・

レミリアも時間切れのようだ。

レミ「変身が解けた！レイ！貴方がやりなさい！」

「咲夜は私が退けるわ！」

レイ「ぼ、僕がですか☒」

レミ「そうよ！咲夜の努力を無駄にする気!？」

レイ「わかりました。やってみます！」

レイはバク転で距離をとり、レミリアはセルが再生している隙に咲夜を抱え離れた。

レイ「これで終わらせる…。」

レイ；「超かめはめ波」

レイ「跡形もなく消え去れー！ツ!!?」

右腕だけで、特大のかめはめ波を打ち放った！

簡セ「ぐぬぬ…！」

「何故だ、脚は大して損傷していない筈なのに、何故動かん…！」

かめはめ波はどんどん近づく。

簡セ「まさか、17号と18号か!?!」

もう目の前だ。

セルは2人の人造人間の意思を感じ取り、絶望した。

簡セ「震えて、いるな…。17号18と号にはあの少年が、あの技がどう見えるのかはわからんが。」

「(最後はお前達に、邪魔されるとはな。)」

かめはめ波に飲み込まれた！

簡セ「ちくしよおおお………!!!」

完全に消えた。核も何も残さず。

レイ「ふう…終わった…。」
ピリッ

レイの能力も、ここで時間切れとなった。

レミ「咲夜！起きなさい！咲夜！」

レイ「咲夜さん！しっかりしてください！」

咲夜からは気も血の気も感じない…。

・・・

ボ「ふん、あのチビを吹っ飛ばしたくらいでいい気になるなよ。」

早苗は、ボロボロになった文を見つめて言った。

早「…これはあなたがやったんですか？」

ボ「だとしたらなんだ？」

早「そうですね。」

「……で退治させていただきます。」

そう言い放ち、一瞬にしてボージャックの目の前へ接近した！

ボ「なにつ！」

ドガツ!!

ボ「ぐあぁっ！」

彼は一瞬何をされたかわからなかった。自分の顎を摩り、空中に
いることがわかり、蹴り上げられたのだと理解した。

ボ「小癩な。」

早「残念ですけど、容赦はしませんよ。」

ボ「なんだと！うおおおっ！」

気を最大まで解放した。

ボ「2度もガキにやられてたまるか！」

「どんな手を使つてでもお前を殺してやる！」

早「ああそうですか。」

ボ「どこまでも、ムカつくガキだ！」

ボージャックは完全にキレた。

ボ「だぁっ！」

早「はっ！」

撃ち合いを始めた！

ガシッ！バシッ！ドゴツ！バキッ！

ボ「オラオラどうした！さっきの威勢はどこ行った！」

ビシッ！ガキッ！ゴリッ！

早「くっ！（やっぱりパワーは向こうが上。勝てる、かな。）」

「（いや）・・・勝つんだ!!」

ビュウウツ!!

ボ「ぬうつ！」

突風を放った！だが、敵は吹っ飛ばない。距離だけは取れた。

ボ「貴様、なかなかやるな。」

早「・・・。」

ボ「ここまで互角の勝負をしたのは久しぶりだ。」

「こんな闘いを、邪魔されたくはないよ、な!!」

ボツ!!

早「？」

いきなり、エネルギー弾を地面に落とす。

しかしエネルギー弾が飛んで行った先をよく見ると、倒れた文の横にアリスがいるではないか！

早「え！アリスさん!!」

ア「！しま」

ドカーンツ!!

・・・

魔「な・・・あ・・・。」

魔理沙は妹紅をにとりの研究所へ運び、にとりが飛ばした複数のカメラの映像を観ていた。

そこに映っていたのは、ブレてよく見えない霊夢とセルの戦闘であった。

魔「・・・見えねえ…、私ですら。」

「どっちが優勢なんだ？」

に「あ、それはそのうちわかるよ。」

魔「なんでわかるんだよ。」

に「戦闘ステータスは随時取っているからね。」

魔「いつの間にそんな装置を。」

に「前からあつたさ。最近使う機会が増えたただけだよ。」

魔「そうか。そういえばなんで萃香がいるんだ？」

に「たぶんアリスが魔法で転送したんだと思う。」

魔「え！じゃあ萃香は既に汚されて…。」

に「あ、魔理沙にはまだ言つてなかったね、アリスのこと。」

魔「え？」

妹「…また死ねなかつた…。」

研究所は比較的平和なようだ。

・・・

バシッ!!ヒュンツ・・・

バキッ!!ヒュンツ

ゲシッ!!

セ「ぎいっ！」

ザーツ

霊「・・・。」

コトツ

2人とも地に足をつけた。

セ「はあ・・・はあ・・・(陰陽玉が邪魔だ。あれのせいで気弾も拳もなかなか通らん)。」

霊「どうしたの？まさか終わりじゃないでしょうね。」

セ「まさかまさか、私はまだまだ余裕だとも(あれを無くさせるか、私にもっとパワーが必要だ。どうしたものか、?)。」

霊「なに余所見して」

ドオーンツ!!

霊「な！なにっ!？」

霊夢の目の前に何かが風とともに落下してきた！

セ「！ 今だ！」

セ；「太陽拳」

セ「太陽拳!!」

霊「しまった！」

目をつぶっておらず、セルの不意打ちは成功した。

セ「来いっ！」

セ；「瞬間移動」

霊「くっ！」

飛んできた何かを抱え、セルは何処かへ消えてしまった。
そうとは気付かず、目を瞑ったまま霊夢は構えた。

霊「(さっきのは、あいつの分身ね。なんでこんな所に?)」

気でそれがセルJr.だとわかった。
目が見えるようになった時には、何も残っていなかった。

霊「ま、まずい! いったい何処へ...!」

額に指を当て、必死に探した。

霊「! 其処は駄目っ!!」

ヒュンッ!!

果たして、セルが向かった先とは...

...

ア「...あれ? 私、無事なの?」

目を開けてみると、身の周りにはバリアーが張っていた。

??? 「間一髪つすね。間に合ってよかったつすよ先生。」

ア 「・・・え？」

そして目の前には、魔理沙にそっくりな少女が立っていた。

ボ 「な、なんだと！」

早 「魔理沙、さん？」

ア 「先生って？」

??? 「あ、時間ないんでまた後で。先生は今のうちに文さんを助けてください。」

魔方阵を出し、再びレポートした。

ア 「そうだ、私も魔方阵を出さないと。」

ボ 「させるか！」

ドゴツ!!

ボ 「ぐおっ！」

早 「どこ見てるんですか？あなたの相手は私です！」

腹にパンチを入れた！

アリスは文を連れ脱出した。

ボ 「くっ・・・もういい！この山ごと吹き飛ばしてやる！」

ボ ; 「ギヤラクティックバスター」

持っているエネルギーを全て両手に集めた！

早 「負けませんよ！」

早 ; 大奇跡 「真・八坂の神風」

目を閉じて、風を纏い、右手に意識を向けた！
今、決着がつこうとしている！

・・・
こ「かあ・・・はあ・・・」
セルJ r. 1「ギギ」

立っているセルJ r. はもう1体だけだ。2体は死んでないが倒れたまま動かない。

勇「気が小さくなったと思ったら起き上がらなくなったな。」

「おそらく、残った気で折れた骨を治していたんだろう。」

うん、いい推理だ。

勇「とは言えこいしも随分疲れている。ここは私が相手しようか。」
「いっしょー」

こ「まだだよ。1匹残ってる。」

勇「こいしには休憩してほしい。まだセルが残ってるだろ？そつちの相手を頼む。」

こ「・・・わかった。」

勇「いい子だ。これを飲んでくれ。」

瓶を渡した。

勇「さとりがくれた元気が出る代物だ。少しは回復するだろうね。」

こ「お姉ちゃんが。」

勇「そうさ。」

ゴクツ

こいしの体力が少し回復した。

勇「さてと！」

ボウツ!!

勇「さあ、かかってきな！」

セルJr. 1「ギギツ！」

物凄いスピードでパンチをしてきたが、ひらりと身を躲した！

セルJr. 1「ギツ！」

勇「私は何年生きてると思ってんだい！あんたの攻撃なんて簡単に避けられるぞ！」

腹に蹴りを入れて終わらせようとした、が!!

ヒュンツ

勇「なにつ！」

死角に突如セルが現れた！

セ「どらあつ！」

ドゴツ！ドオーンツ!!

「ぐあつ!!」

右肘を振り降ろし、地面へ叩きつけた！

シュー・

一発でノックアウトした。

こ「！ 勇儀お姉ちゃん！」

セ「先程のお返しだ。」

「・・・この倒れたセルJ r. は、お前がやったのか？」

こ「ううううううう！」

セ「おやおや、私の話は聞こえているかね？」

こ「お兄ちゃんをよくもオ！」

セ「お兄ちゃん？」

「うわあああ！！」

ヴンツ!!

セ「なるほどなるほど。貴様で間違いないようだな。」

こ「コロスコロスコス！」

セ「これから博麗霊夢も来るだろう。こいつには気を少し分けて、」

左腕で抱えていたセルJ r. に気を分けた。

セ「残り2体に分ける余裕はない。はっ！」

ボツ!! ・ ・ ドカーンツ!!

粉々になるよう破壊した。

セ「これで、なにつ！」

振り向くとこいしの右手は目の前まで迫っていた！

ドゴツ!!

セルJ r. 1 「ギギイツ！」

ドシヤツ!!

さつきまでこいしと闘っていたセルJ r. が庇った。そのまま飛ばされ地底の壁に激突した。

セ「あれもここまでか…。」

ボツ!! ドカーンツ!!

またしても分身を破壊した。

セ「お前は下がっておけ。私がさっさと終わらしてやる。」

セルJr.「ギギッ」

こ「はぁっ！」

ガシッ!!

こ「!!」

セ「ほう、なかなかのパワーだ。」

こいしのパンチを片手で受け止めた。

セ「忘れていた。今私は本気を出していたのだったな。」

勇「お前、どこで、そんな強く…。」

セ「なに、ちよつとしたパワーアップだ。どりやっ！」

ドッ！

こ「うがっ！」

左の拳でまともにくらった。

セ「すまないな、手加減はしたのだが。」

こ「うう…。」

セ「私は其処の館にいる孫悟天に用がある。どけてもらえれば命だけは助けてやるぞ。私の最終目標は侵略なのだからな。」

こ「それは、させない…！」

セ「そうか、では」

ヒュンッ

セ「なっ！」

ドゴオ!!

セルは咄嗟にガードした！

セ「貴様もその技を使えたのか。」

霊「だからなによ。」

勇「・・・霊夢！」

霊「あら、無様な格好ね。」

勇「うるせえ。」

こ「・・・!!」

霊「さて、やられる準備はいいかしら？」

セ「ただではくたばらんぞ。」

こ「レイムーンツ!!」

霊「え?・・・!」

セルではなく霊夢に向かって飛んできた!

こいしは敵ではないので慌てて陰陽玉を消した。

ゲシツ!!

こ「ぐっ!」

足ではらうも敵は1人ではない。

セ「どらあっ!」

ドンツ!!

霊「うわっ!」

セ「待っていたぞ!陰陽玉を消す時をなあ!」

バシツ!!ゴキツ!!ゲシツ!!ドゴツ!!

すかさずラッシュユされるも霊夢はガードできない!

霊「くっ!だあっ!!」

ビュウツ!!

セ「ぬう!」

気を放出しセルを吹っ飛ばした。

霊「はあ．．はあ．．。」

セ「陰陽玉がなければ大して差はないな。そこをどけ。私はお前より先に孫悟天を殺さなくてはいけない。」

こ「ハッ、アッ!!」

ドゴッ!

セ「ぐっ!どりやっ!」

バシツ!!

こ「うわっ!」

セ「ふん、そこをどけば今は楽だぞ。寧ろ行かせたら後で私を倒せるかもしれないのだが、どうだ?」

霊「駄目に決まってるでしょ。」

「まだ悟天に、謝ってないんだから。」

セ「喧嘩のことか。何故謝る。貴様は自分が悪いとは思っていないのだろう?」

霊「あんたには関係ないわ。」

セ「またそれか。」

霊「とにかく何としてでも、」

「ここは通さないわよ。」

簡易版セルを倒した紅魔一行。しかし、咲夜は無事なのか?

いよいよ覚醒した早苗とフルパワーボージャックの決着はつくのか?

謎の魔法少女は何者なのか?

霊夢は地霊殿を、悟天を守り抜けるのか?

第24話へ、続く…。

•••

天「．．．、ここは?パオズ山の家?」

チチ「あ、起きたただか?」

起きてみると、実家のソファで横になっていた。

第24話「2nd STAGE」

↳第4章のこれまでのあらすじ

← 悟天と霊夢が大喧嘩する。

← 霊夢が風邪をひき、文がつきつきりで看病する。

← 悟天、地霊殿で一泊する。

← 悟天、紅魔館へ行く。

← ザンギヤ以外のボージャック一味が転送される。

← ボージャックだけ妖怪の山へ行き、残りは紅魔館へ。

← 異常無しということで悟天は地霊殿へ戻る。

← セルが放たれる。

← チルノと大妖精がやられる。

← 悟天、セルに敗れる。

← ビドー、ゴクア、ブージンが紅魔館を襲撃。

← レミリアがパチュリーに霧を発生させるよう頼む。

← 咲夜、レイを避難させ、一人で闘う。

← 勇儀、セルを地上まで殴り飛ばす。

← 咲夜、苦戦する。

← セル、12体のセルJr. を幻想郷その他に放ち、本人はにとりの研究所へ。

← 文、妖怪の山へ。

← レイ、レミリアに許可をもらい咲夜の所へ加勢する。

← 悟天、紫から霊夢の過去を聞かされる。そして寝る。

← 幽々子、白玉楼で2体のセルJr. と抗戦するも勝てず終い。

← レイ、能力を発動し咲夜を援護。

← ドクター、簡易版セルを放出。

← 妖夢、座禅を中断させられ2体のセルJr. と闘う。

← ウドンゲ、永遠亭へ向かってくるセルJr. 2体を事前に察知する。

← 魔理沙、起きる（昼）。

← 妖怪の山麓に着いたボージャックは権と交戦。

← 文、応援に駆けつけ権を逃がす。

← アリス、セルJr. 1体を倒す。（残り11体）

← 早苗、闘いを躊躇する。

← 魔理沙、セルJ r. 1体を倒す。(残り10体)
← 咲夜の時間稼ぎのもと、レイはビドーを倒す。
← 悟天、眠る。こいしと勇儀は外で待機。
← セル、にとりの研究所に到着。
← にとりを殺せず研究所を後にする。
← セル、妹紅と死闘。
← 霊夢、悟天から貰った紫マフラーを着用。
← 人里に居るTの近くにセルJ r. が現れ、慧音が抗戦。
← ウドンゲ、セルJ r. 1体を倒すも体力の限界。残り1体は永琳が倒す。(残り8体)
← 妖怪の山麓にセルJ r. 1体が到着。文ピンチ。
← 咲夜、力を振り絞り絞リブージンを倒すもダウン。
← さらにセルJ r. 1体も到着。
← 妹紅の元へ魔理沙が来る。
← 魔理沙、妹紅、一度はセルを倒す。
← 霊夢、仙豆を食べ風邪を治し、人里へ。

← 謎の魔法少女、冥界付近に現れる。

← 妖夢、まぐれでセルJ r. 1体倒すも、もう1体に倒される。(残り7体)

← 謎の魔法少女、幽々子を助けセルJ r. を撃破。(残り6体)
そのままワープ。

← 文のピンチに萃香が駆け付ける。
ボージャックが本気を出す。

← レイ、咲夜を庇いながらセルJ r. とゴクアを林へ誘導。

← ルーミア、ミスティア、リグル、ゴクアの剣を奪う。

← レイ、セルJ r. を貫通。(残り5体)

← ゴクアが本気を出しレイピンチ。

← レミリアが焦げながらも助けに来る。

← レイの血を吸う。

← 簡易版セルにより、レミリアの右腕は胴体と泣き別れとなる。

← 地霊殿へ3体のセルJ r. が来襲する。

← こいし、初の超化。

← 早苗、神奈子と諏訪子に力を託され初の超化。麓へ。

← 慧音、セルJ r. に倒されかけるも霊夢の到着により間一髪で助か

る。

← 慧音の説得で、セルJ r. は生徒に。(残り4体)
← 霊夢、セルの元へ。

← セル、パワーアップし復活。

← 紅い霧完成。

← レミリア、独自の進化！

← 文、萃香、敗北。

← 早苗、到着。セルJ r. は突風で飛ばされる。

← こいし、セルJ r. 3体を相手に好戦。

← 魔理沙、少しは追い詰めたものの敗れる。
霊夢爆誕！

← 魔理沙、妹紅を抱え研究所へ避難。

← レミリア、簡易版セルを切り裂き、ゴクアを撃破。

← レイのピンチに咲夜が最期の力を使う。

← レイが簡易版セルにトドメを刺す。

← アリス、魔法で萃香を研究所へ転送。

← 早苗、ボージャック、奮戦。

← ボージャック、アリスに気付き攻撃。

← 謎の魔法少女がアリスを守る。

← 霊夢、セルに圧倒するも飛ばされたセルJ r. のせいでセル諸共地
霊殿へ逃げられる。

瞬間移動で追い掛ける。

← こいし、事実上セルJ r. 2体を倒す。

← 残り1体を勇儀が相手しようとした矢先、瞬間移動で現れたセルに
一撃で倒される。

← セル、動けなくなったセルJ r. 3体を消し飛ばす。(残り1体)

← 霊夢、セルと対峙するつもりがこいしとも交戦。

← 悟天、パオズ山に？

← 現在。

幻想天霊伝説 第24話

とんでもない敵を倒したレミリア、レイ、咲夜。
しかし、その代償なのか咲夜の命は今、消えようとしている。

レミ「生きなさい！生きるのよ！」

咲「」

レイ「……。」

咲夜は息をしていない。

レミ「レイ！なんとかしなさい！」

レイ「……なんとかするにも、もう咲夜さんは……。」

レミ「……、咲夜ア！」

声が霞んできている。体力が残ってないのはレミリアも同じだ。

レイ「……………」

油断した自分を守って死ぬとすると、複雑な気持ちになった。それをぶち壊すような声が飛んできた！

??? 「生きてるっすかー!？」

レミ「!？」

レイ「誰だ!？」

魔理沙に似た魔法少女が飛んで来るではないか！

??? 「うわ、ギリギリっすね。ちよつと待っててくださいね。」

何やら呪文を唱えている。唱え終わると、咲夜に手をかざした。

??? 「ほいつ。」

一瞬、咲夜が赤く光ったかと思うと、彼女に血の気が戻った！

レミ「えっ?？」

??? 「これでもう大丈夫っすよ。」

レイ「い、一体何をしたんですか?？」

??? 「輸血魔法をかけただけっす。血は戻ったんで後の治療は頑張つてほしいっす。」

レミ「!？」

「レイ、速く運びなさい。私は片腕しかないわ。それに、まだやることがあるから。」

レイ「分かりました!？」

??? 「できれば私も運んでほしいっすね。もう、眠くて、どうにも、な

らな…。」
バタツ

急に眠った。

レミ「…任せたわよ。」

さつさと飛んで行ってしまった。

レイ「仕方ない、一緒に連れて行くか。訊きたい事もあるし。」

2人を抱え紅魔館へ歩いた。

そう、女の子2人を抱えているのだ。

レイ「…何だか誘拐犯みたいだな…ハハツ。」

魔「ちよつ、こいしのやつ何してんだよ！」

に「原因はよくわからないけどまずいね。」

魔「くそつ、体力が残っていれば助けに行けるのに…！」

「ちよつと地霊殿に電話しよつと。」

何もできない自分を恨んだ魔理沙であった。

…
…
…
さ「霊夢さんが危ない。悟天さん、早く起きて！」

これまで起きることを祈っていただけのさとりであったが、ある異変に気付いた。

さ「…心が閉ざされてる？だとしたら大変！寝たきりになったまま戻らなくなってしまう！」

何ということだ。

・・・
その頃霊夢は、徐々に押されていた。

セ「さぞかし辛かろう。」

「弱くはないが手加減しなければならぬ相手、そして全力で闘わないと勝てない相手、同情するぞ。」

霊「うるさいわね。あんたもあんまり変わらないでしょ。」

セ「いいや違うとも。」

横からこいしが襲いかかったが、

セ「ふんっ！」

バシッ!!

こ「ぐっ！」

セ「私はどちらに対しても手加減する必要がない。」

「さあどうする?ここを通してくれたら、お前や他の者は私がドクターに頼めば命だけは助けてもらえるぞ。」

霊「許しなんていらぬわ。はあっ」

右手にエネルギーを溜め、

霊「あげるわ。」

ビュンツ!!

セルに向かって投げた!

セ「ふん。」

パシッ

造作もなく弾いた。

弾かれた気弾は地底の天井を突き破り、はるか空の彼方へ飛んで行った。

セ「・・・何をした？」

霊「さあね。」

ドゴツ！

霊「うゝっ！」

こいしの一撃が腹に入った！

霊「（能力ね。全然気付かなかったわ。でも、これで…！）」
バツ！！

こ「あがつ！」

こいしの腹に張り手した。
そして、

霊；宝具「陰陽鬼人玉」

こ「うわあああつ！！」

バタツ

ス・・・

こいしは倒され、超化も解けた。

霊「勇儀、こいしを頼んだわよ。」

勇「普通怪我人に任せるかよ。こう見えて肋骨何本かやられたんだぞ。」

霊「早く。」

勇「つけといてやる。」

若干ボージャックが押している。

早「そ、そんな…。」

ボ「諦めろっ！」

その時！

神奈子「負けるな早苗！妖怪の山は、幻想郷はお前が護るんだろ！」

諏訪子「大丈夫！私たちも一緒だから！」

早「な、なんで？」

力が加わった訳ではないが、無性に力が湧いてくる。

早「はああっ!!」

ドオオオツ!!

ボ「んん！まだそんな力が残っていたか。だが同じだ！」

「うおおおお！」

ボージャックはまだやれそうだ。

・・・

天「・・・母さん？」

チチ「どうしただ、えらく疲れたみてえだけんど。」

天「・・・いや、何でもない。ちよつと長い夢見てた。」

「お腹空いたから何か作ってくれない？」

チ「そうだなあ。それじゃあパオズイモリの姿焼きはどうだか？」

天「うわあ！それ大好物！」

チチは早速作り始めた。

待っていると、上の方から声が聞こえる。

さ「悟天さん！早く起きてください！」

天「この声はさとりちゃん？俺まだ寝てるのかな？」

さ「何言ってるんですか。そこそ夢の世界ですよ！」

天「え？だって、母さんはそこにいるじゃないか。」

さ「とにかく、今地霊殿前は大変なんですよ！」

天「・・・もうちよつと寝ようかな。」

さ「霊夢さんがあなたの為に闘っているんです！」

天「霊夢？」

さ「悟天さんの為に必死なんですよ。早くこつちへ！」

天「なんで、俺なんかを。」

チ「どうしたただか悟天。できたべよ。」

天「やったあ！」

さ「ちよつと。。。」

・・・

レミ「・・・あら？」

目的の場所へ行くと、ルーミア、ミスティア、リグルがいた。

ル「あ、紅魔館の主人なのだ。」

ミ「た、助けたりしてませんよ！」

リ「え、右腕ないじゃん！」

レミ「退きなさい。こいつの命運は私が決めるわ。」

其処には、木にもたれかかったゴクアがいた。

闘う力は彼に残っていない。

ゴ「俺は貴様に負けた。だが、ボージャック様がいる。ボージャック様にかかれば貴様など。」

レミ「それって妖怪の山の方にいる奴かしら。守矢の巫女と接戦になってるみたいだけど。」

ゴ「ボージャック様が、接戦だと・・・！」

ゴクアは、前世でトランクスに倒されているため孫悟飯を知らない。

レミ「地底には霊夢もいるし、あんたのボスじゃ大したことはできないわ。」

ゴ「・・・殺せ。」

レミ「・・・。」

大「こ、殺すとか駄目ですよ!」

リ「そうだよ。もうちよつと考えてあげても。」

ル「・・・。」

ルーミアは人のことを言えない。

レミ「残念だけど、トドメを刺すわ。こいつは咲夜を殺しかけたのだから。」

「放っておいたら、咲夜は殺されていたわ。」

大「で、でも…。」

リ「・・・行こうぜ。」

ル「(コクツ)」

3人は去って行った。

レミ「せめて、次はもつとマシな人生を歩みなさい。」

ゴ「ボージャック様、どうかご武運を…。」

ザクツ!!

首を引つ掻き、楽にさせた。

レミ「私も甘くなったものね。霊夢のせい、ね。」

霧も晴れてきたので速やかに帰った。

•••

早「くっ！んん！」

神「諦めるな！」

諏「もう少しだよ！」

ボ「無駄だ！」

あと一息押せばボージャックの勝ちだ。

しかし！

ア；魔符「アーティフルサクリファイス」

ボ「ぐおおっ！」

ボージャックの背後からアリスが奇襲をかけた！

ア「はあ、はあ、やられたままでは、帰らないわ。」

ボ「貴様あ！」

神&諏「今だ！」

早「はあああああああつ！！」

ズオオオオオツ！！

一瞬の隙を突き、神風は一気に押し返した！

ボ「なにい！」

突風に吞まれ、完全に身動きが取れなくなった！

現人神は突風と共にボージャックへ突っ込む。

早「終わりだああああつ！！」

ドオツ！！

早苗の拳が彼を貫いた！

ブオオオオオツ!!

激しい嵐は彼を完全に消した！

消えかかっていた紅い霧は風により完全に消えた。

早「勝つ…た…。」

ス…

ア「おっと。」

落ちていった早苗をアリスがキャッチした。

ア「超化の薬が切れる前に連れて行きましょうか。」

「にしても超化って名前、なんか嫌ね。」

にとりと作者が傷つく言葉を最後にかまして飛んで行った。

・・・

レミリアが紅魔館へ帰ってきた。

レイ「お嬢様、おかえりなさいませ！」

レミ「ご苦労様。今日は随分と身体が汚れたわ。」

レイ「では、お風呂になさいますか？」

レミ「そうね。貴方も来れるかしら？」

お？

レイ「えっ、はい。」

レミ「私は今片腕しかないから不自由なの。」

「一緒に入れとは言わないわ。私の身体を洗いなさい。」

おお？

レイ「は、はい!!」

レミ「(くすっ)」

そんなわけで、脱衣所に着いたわけだ。

レミ「服は自分で脱ぐわ。」

レイ「ぼ、僕は後ろ向いておきますね。」

くそっ！

レミ「いつもは咲夜にやってもらっているのだけれど、やっぱり恥ずかしいわね。」

「さあ、入るわよ。」

勿論全裸だ。

レイ「タオルとか巻いちやダメですか…?」

レミ「邪魔になるから駄目よ。」

「それとも、小さい女の子の裸を見て興奮したりするの?」

意地悪だ。

レイ「そ、そんなわけないじゃないですか!」

レミ「ふふ、冗談よ。」

悟天が苦手な理由だ。

まずはシャンプーで小さい頭を洗う。

レミ「ん♡上手ね。」

レイ「ありがとうございます！かゆい所があれば言ってくださいね。」

湯けむりのおかげでレミアの身体は殆ど見えない。頭は難なく洗い終えた。

ここで緊急事態だ。洋館なだけあって垢こすりがない！

レイ「あの、垢こすりがないんですが、どうすれば…」

レミ「勿論手で洗ってもらうに決まってるじゃないの。」

50mの壁より高いハードルだ。

レイ「て、手ですか☒かなり道徳的に問題ありそうな感じですけど…」

レミ「主人の命令は絶対よ。それに、誰かさんが幻想郷では常識に囚われてはいけませんとか言ってたから問題ないわ。」

レイ「そそ、そうでしたね！では失礼します！」

これは幻想郷だから許されることだ。外の世界のレミアファンが見たら何と言うだろう…など気にしないでいいのだ。

それはそうと、やはり胸部などは避けて洗っている。

レミ「…ちゃんと洗ってほしいのだけれど？」

レイ「やっぱり胸とかはまずいかなあつて…そこは片手でも洗えませすし。」

レミ「ふふっ、それもそうね。からかいすぎたわ。」

レイ「(ふう、危ない危ない…)」

改めて腕の断面を見ると、痛々しい。本人はもう痛くないようだが、泡とともに血も流れている。

レイ「…手、大丈夫なんですか？」

レミ「今は完全に神経を切ってるから何ともないわ。ありがとう。」

その後、湯船に浸かり上がってきた。身体を拭かなければならないので、レイは洗面所で待っていた。

レイ「手を治す方法は無いんですか…？」

レミ「あるわよ。私は再生できるから。体力がないとうまくできないの。」

レイ「再生できるんですね！よかった…！」

レミ「そこまで喜ばなくても。」

レイ「そりゃあ喜びますよ！治るかどうか心配だったんですから！」

レミ「ふふ、ありがとう。」

こうして、レミアの入浴は終わった。

・・・

霊「はあ・・・はあ・・・考えたわね。」

なんとセルJr.すら倒せていなかった。

そのはず、接近戦はセル、遠隔攻撃をセルJr.と上手いこと分けられていたのだ。

セ「体力温存はさせんぞ。そろそろ全エネルギーを使え。」

霊「なんであんななんかに。」

セ「それならそれでいいんだ。私は孫悟天を殺すことに集中するとしよう。」

霊「!!」

セルは、本気で殺したいとは思っていない。自分を見つける為に必死なだけなのだ。

霊「はあああつ！」

ヴンツ

セ「そう来なくてはな。」

悟天よ、速く戻ってきてくれ！

もうお前しか頼れないのだぞ！

・

天「やっぱり美味しいな！」

さ「……。」

「いい加減にしてくださいっ!!」

天「！」

今まで聞いたことのないさとりの大声を聞いた。

さ「霊夢さんは貴方だけの為に命をかけているんですよ！」

天「いや、あんなことあったし……。」

さ「後で怒られるかもしれないですけど、遠くから霊夢さんの心を読みました。」

「霊夢さんは、悟天さんに謝ろうとしているんです。」

天「な！」

さ「もう苦しむ霊夢さんを見たくありません。」

「地上も大変だととりさんから聞きました。貴方しか闘えないんです。お願いです！」

天「……。」

悟天は怒った。いつまでも強がった愚かな自分を。

天「母さん。」

チ「どうしたただか？」

つつていた目を柔らかくし、

天「ちよつと、行ってくる。」

さ「悟天さん……！」

チ「・・・行ってこい。好きなようにやるのが一番だべ！」

天「ありがとう。」

家を出て、

バシユツ!!

青空高く飛び上がった。

空を見ると、父の言葉を思い出す。

くく

悟空「悟天、おめえの名前は どうして悟天か知ってつか？」

天「なんでだっけ？」

悟「それはな、オラよりも高く、強くなって欲しいって思ったからだ。」

「て言っても最後に名前を考えたのはチチだけだな。」

天「ははは。」

悟「だからよ、おめえには〈空〉よりも高い〈天〉を目指して欲しいんだ。」

「オラが居なくても、地球は大丈夫なくらいにな！」

くく

さ「悟天さん、こっちですよ！」

天「・・・わかった！」

声のする高い空へ一目散に飛んだ！

天「霊夢！今行くぞ！」

「だああああああつ!!」

右手を上げ、暗くなった空に届こうとした瞬間！

ヴンツ!!バチツ!バチツ!

気が付くと、ベッドの上にいた。

寝室は酷く荒らされている。

天「これはいったい…。」

さ「悟天さんの、気ですよ…。」

天「あ、やっぱり。」

さとりも吹っ飛ばされている。

天「にしても、今までにないこのパワーは…?」

さ「知らない、ですよ。」

天「もしかして、これは兄ちゃんが成れた…。」

そう、超サイヤ人2だ!

天「さとりちゃんありがとう、俺を戻してくれて。」

さ「いえいえ、嫌われ者のせめてもの情けですから。」

天「そんなことないよ。」

笑顔のまま、さとりは眠った。

天「さて、行くか。」

•••

霊「!」

セ「! これは、孫悟天の気か?信じられん。」

門前でも気付く程のとてつもない気だ！

霊「無事でよかった。」

セ「隙ありっ！」

油断した霊夢に襲いかかった。が！

ドゴツ!!

セ「ぎいつ！」

それを上回るスピードで悟天が殴り飛ばした！
あまりにももの威力で、一瞬立てなかった。

バチツ！バチツ！

天「間に合ってよかった。」

霊「・・・。」

いざとなって何も言えなくなってしまった。

セルJ r. 「ギイツ！」

セルJ r. ；「かめはめ波」

かめはめ波を溜めながら飛んできたが、

天「はっ！」

ドオオツ！

セルJ r. 「ギ」

ドカーンツ！

セ「くそお。」

右手から出したエネルギー波で容易く倒した。

そしてセルはすぐに理解した。今の悟天には敵わないということ
を。

ドクター「セル、聞こえるか？」

セ「ドクターか。どうやって話しかけている？」

ド「お前の核のプロテクターには通信機能も搭載しておいた。傷を
入れられたみたいだな。音質が悪い。」

セ「すまない。」

天「誰と話してるんだ？」

セ「貴様には関係ない。」

「それで、何の用件だ。」

ド「今から自爆しろ。」

セ「なんだと？」

ド「心配しなくてもよい。爆発しても核はプロテクターに守られ
る。」

「核にインプットされていると思うが、そうして復活すれば更にお前
は強くなる。それでいて自爆の威力は星が消えないように抑えてい
る。オリジナルは星を消す威力を持っていたからな。」

セ「・・・了解した。」

途端にセルは膨らみだした！

天「！　なんだ？」

セ「貴様に勝てないことはよくわかった。だから私は自爆すること
にした。お前らまとめて吹き飛ばしてやる！」

天「なんだと！」

セ「ハッハッハ！」

霊「・・・まさかこんな形ですることになるなんてね。」

霊夢はぱんぱんに膨れ上がったセルに近付いた。

天「何をするんだ？」

霊「瞬間移動でこいつごと宇宙へ行く。それなら自爆の影響は受けないでしょ。」

「さつき見つけやすい気弾を放ったから星に危害は加えなくて済むし。」

天「でも、霊夢は？」

霊「大丈夫よ。」

セルの体に手を当てた。

セ「なに！やめろ！」

天「やめるんだ！」

霊「また後でね。」

ヒュンツ!!

意識を宇宙へ向け、霊夢を探した。見つけたと思った矢先、セルも霊夢も気が途絶えてしまった…。

「霊夢——!!」

その咆哮は地底全体を揺らした。

・・・

に「嘘！霊夢がいない！」

魔「気を感じない。まさか…！」

妹「……。」

・・・

多大な犠牲を払い、闘いは終わったと思われた。しかし！

ヒュンツ!!

ヴンツ!!バチツ！バチツ！

天「なっ！」

セ「お待たせしたな。」

読書の皆様ならお察しであろう。セルはパーフェクトとなって戻ってきてしまった。

セ「終わりだ孫悟天。貴様では私に勝てん。」

天「それはどうかな？」

何やら自信がありそうだ。

遂に、悟天は帰ってきた。

果たして、超サイヤ人2となった悟天はパーフェクトセルに対抗できるのか？

いよいよ第4章最終決戦だ！

第25話 「セルの嘆き」

くあらすじく

謎の魔法少女の輸血魔法のおかげで、咲夜は一命を取りとめた。
レミリアはゴクアにトドメを刺した。

その頃早苗は、アリスの一撃もあり、己の力でボージャックを倒したのであった。

一方霊夢は、セルを相手に苦戦を強いられ、体力が落ち窮地に追いやられる。

そんな中、さとのりの援護により夢から脱出した我らの主人公は、超サイヤ人2へ進化し霊夢の元へ駆けつけた。

セルはドクターの指示により自爆を決意。

しかし、自分が霊夢に投げられたあの気弾を弾いたことにより、霊夢がセルごと瞬間移動で宇宙空間にあるその気弾へ連れて行ったため、幻想郷を吹き飛ばせなかった。

だが、ドクターの計画通りセルはパーフェクトとなって悟天の前に現れる。

かつて悟飯が1人で倒せなかった強敵のバージョンアップに、勝てるのか？悟天！

幻想天霊伝説 第25話

バチッ！バチッ！

セ「大幅にパワーアップして自信満々なのはわかるが、こうなってしまうた私には敵わんぞ。」

「なにせ、パーフェクトとなった私のオリジナルは、お前が今成し遂げた超サイヤ人2の孫悟飯を超えたのだからな。」

バチッ！バチッ！

天「それは闘ってみてから言った方がいいんじゃない？」

セ「ほう、あくまで私に刃向かうか。」

「後悔するなよー！」

バキッ！！

ガッツ！！

バシツ!!

3連続で両者の攻撃がぶつかり、地底全体に爆音が響いた。

セ「ほう、口だけではないらしい。」

「私のスピードについてこれるとはな。」

天「ここじゃ存分には闘えないね。場所を変えない?」

セ「・・・いいだろう。」

話の口調ではわかりにくいだが、悟天は必死に怒りを抑えている。

天「付いて来い!」

バシユツ!!

セ「ふん。」

バシユツ!!

2人はあつという間に地底から外へ出た。

空は紅に染まっている。

天「もつと先だよ。なんで止まってるんだ?」

セ「貴様のやりたい事などお見通しだ。」

「幻想郷で闘いたくないのだろうか?被害を出さない為にな。」

天「!」

セ「凶星か。クウラの時もそうだったな。」

「この星の幻想郷ではない場所で闘えば、星が壊れない限り幻想郷は無事だからな。」

「クウラと同じように瞬間移動でお前を置いていくのもありだが、時間稼ぎをされ他の者に何かされるのは困る。」

天「・・・。」

セ「そう好きにはさせんぞ。覚悟するが!」
ヒュンツ!!

セ「なにつ！」

ドゴツ!!

セ「ぎいつ!!」

瞬時にセルの背後に回り、殴り飛ばした！

天「だあつ!!」

ドゴツ!!

セ「ごおあつ!!」

天「せいっ!!」

ドガツ!!

セ「ぐがっ!!」

連続攻撃をかまし、そのまま幻想郷外へ行った。

・・・

霊「・・・間一髪だったわ。」

なんと！霊夢は生きていた！

全身が少々透けている。

霊「これって、宇宙空間でも死なないみたいね。」

彼女が使った術、それは、「夢想天生」である。

これによりセルの自爆を回避したのだ。

霊「爆発で気を失ったけど、あいつは死んだかしら？」

どうやら宇宙空間には居ないようだ。

地球へ戻る為に気を集中させた。驚いた。悟天も居ないではない

か！

霊「！ 何処にいるの？」

まさかとは思ったが、幻想郷外を探ると見つかった。さらにセルも居たからなお驚いた。

それだけでなく、セルは自分では勝てないくらい強くなっていたのだ。

霊「悟天が一人で闘っている。でも、私じゃ足手まとい。」
「・・・戻れない・・・。」

足手まといと言った理由はある。

・・・

ドツ!!ヒュンツ・・・

ダツ!!ヒュンツ・・・

ガツ!!ヒュンツ・・・

バキツガリツドゴツグリツ!!

ドツゴオオオンツ!!

セ「はあ・・・はあ・・・。」

天「はあ・・・はあ・・・。」

そう、互角だったのだ！

セ「何故だ。互角なわけが・・・。」

天「へっ、今ので息切れ？拍子抜けだなあ。」

セ「ふん、そう言う貴様も胸に手を当てているが、具合でも悪いのか？」

天「君がやったんだろ。」

「霊夢は死んだのか？」

セ「おそろくな。体力が落ちた状態であの爆発を喰らえば無事では
すまない。」

天「・・・俺はまだ、霊夢に・・・」

「謝ってないんだぞ!!よくもおお！」

ヴンツ!!バチツ!!バチツ!!

抑えていた怒りを放出した!

セルにはその感情がわからなかった。

セ「何故怒っているのか、私にはわからない。」

天「なんだと・・・!」

セ「本気だ。」

「それはさておき、私は今どんな気持ちで闘っていると思う?」

天「知らないよ。」

セ「貴様は私を許せないから闘っているだろうが、私は遂に闘う意
味を失ってしまった。」

天「?」

セ「私は核にあるプロテクターでドクターと通信していたのだが、
ドクターに自爆しろと言われた。」

「それはどう言うことかわかるか?」

天「捨てられたのか?」

セ「その通りだ。戻ろうにも戻れない。やりたくなかった侵略も必
要無くなった。」

「生きる意味が無くなったのだ!」

天「・・・。」

セ「わかるか!この苦しみが!」

「だからせめて、貴様だけでも倒す!」

セ;「龍翔拳」

セ「ずああっ!」

突撃してきた！が、悟天は動じず、

天「それなら、受けて立つ！」

天；「セカンドストライク」

セルの1発目の攻撃を躲し、

ドゴオツ!!

セ「があっ！」

1撃を与え、

ドツ！ドツ！ドツ！ドツ！ドツ！ドツ！ドゴツ！

5連撃し、蹴り上げ、

天「波ああっ!!」

蹴り上げたセルへかめはめ波を放った！

ここまでは、悟天の新たな必殺技だ！

セ「ぐ、まだだ！」

セ；「フィニッシュバスター」

セ「フィニッシュバスター!!」

ドオオオツ!!

激しくぶつかったが、決着に時間はかからなかった。

天「だあああ!!」

セ「ぬあああ!!」

「怒り」は「嘆き」に勝った。

・・・

霊夢は浮かんだまま暫く考えたいた。

悟天にはまた後でと言ったが、もう瞬間移動で地球へ戻る体力がない。

夢想天生をとけば、たちまち真空空間へ放たれる。このまま死んでもいいとすら考えていた。

しかし、

霊「(未練を残したまま死ぬのは嫌。)」

「(まだ、謝ってないんだから。)」

「(それに、あいつは、もう失くしたくない。)」

「大事な、人：!!」

「ヴンツ!!バチツ!バチツ!

「うわあああああ!!」

なんと!霊夢はまるで、超サイヤ人2のような進化を遂げたのだ!
体力も一気に回復した。

霊「・・・そこね!」

ヒュンツ!!

・・・

セ「ぐ・・・あ・・・」

セルはボロボロになった。

天「・・・やめよう。」

セ「なに?」

天「もう俺の気は済んだ。これ以上やりたくない。」

セ「ククク、ここが何処だと思う？」

天「さあ？」

セ「私も今気付いたが、ここは妖怪の山だ。」

天「！」

セ「どうやら、闘っているうちに戻ってきてしまったらしい。」

「とは言えこの妖怪の山は幻想郷の外側だ。ここからでは誰も見えない。」

天「何をするつもりだ？」

セ「侵略は諦めよう。だが、破壊させてもらう。」

セ；「ファイナルフラッシュ」

悟天へ手を向けた。

セ「どうする？避けてもいいが、その後ろには何がある？」

背後へ気を集中させると、人里があった！

天「ちっ！させないぞ！」

かめはめ波で対抗しようとしたが、上手く気が溜まらなかった。

天「まさか、余裕だっと思ってたけど本当は体力が残ってなかったか！」

しかし、それはセルも同じであった。

セ「これが（私の攻撃の）最後だ。」

「ファイナルフレーザーッシュ！！」
ウオツ！！

天「こうなったら、俺の命に代えてでも！」

全身で受け止めようとした、その時！

ヒュンツ!!

霊；夢境「二重大結界」

カツ!!

天「うっ！なんだ!？」

セルのファイナルフラッシュは、突如現れた結界により完全に止められた！

セ「な、なに…!？」

天「え…?」

バチツ！バチツ！

セルまでもが目を疑った。

其処には、死んだ筈の巫女がパワーアップして帰ってきたのだから。

霊「あら、2人ともヘトヘトね。」

天「…本当に、霊夢なのか?」

霊「そうよ。」

セ「信じられん。あの爆発だぞ!」

霊「避けただけよ。」

セルは絶句した。今の一撃で少なくとも悟天は倒すつもりだったが、止められた上超サイヤ人2に匹敵する力を持った者がもう1人現れては流石に勝ち目はない。

霊「さてと、あんたはどうやって退治されるのがお望みかしら?」
セ「…。」

天「待ってくれ霊夢。」

霊「何よ。」

天「ここは俺に任せてくれないか？」

霊「なんでよ？」

天「大丈夫だから。」

霊「好きにすれば。」

天「ありがとう。」

ス・・

超サイヤ人2をとき、セルの前へ出た。

天「セル。」

セ「なんだ、自分でトドメを刺したいか？」

天「違うよ。訊きたいことがあるんだけど。」

セ「今なら何でも答えてやる。」

天「そのドクターとはもう連絡取れないの？」

セ「無理だ。自爆で完全にプロテクターが壊れてしまったからな。」

天「そうか。だったらさ、君も幻想郷の一員にならないか？」

霊「は？」

セ「なんだと？」

天「俺だって最初からここに居たわけじゃないし、それにセルはもう敵じゃないだろ？」

セ「それはどうかな？」

天「俺にはわかる。」

「幻想郷の一員になってさ、自分を探すのもありじゃないかな？」

霊「(何の話?)」

悟天はセルへ手を差し伸べた。

セ「・・・。」

「・・・本当に、いいのか？」

天「少なくとも俺はね。他にもいいって言う人いるんじゃないかな？」

セルの頭にはにとりが浮かんだ。

セ「……。」

グツ

セルは受け入れ、握手した。

天「よろしくね。」

セ「此方こそ、宜しく頼む。」

こうして、先程までは脅威であった人造人間は、悟天の、いや、幻想郷の仲間へとなっていく決意を固めた。
気がつくのと、後ろに霊夢は居なかった。

……

セルは悟天と共に、にとりの研究所へ向かった。もう夜だ。

天「にとりー、いる？」

に「やあ悟天君。あつ！横に居るのつてもしかして！」

セ「……セルだ。」

に「うおー！入って入って！」

天「よく敵視しなかったね。」

に「そりゃモニターで握手するところを見てたからね。」

天「？　なんで其処に妹紅が隠れてるの？」

妹「言うなよ女たらし！」

出てきた。

に「私がやられそうになったら攻撃するから、だって。」

セ「ほう、疲れているとは言え、貴様に負ける私ではないぞ。」

妹「言ってる。」

天「落ち着いてよ。もう敵じゃないんだから。」

妹「あれで信じると思うか？これだから男は。」

セ「私は男でも女でもないぞ。」

妹「うるせえ！」

に「仲良いね。」

セ&妹「絶対ない。」

だから言われるのに。

天「早苗はどうしたの？」

ベッドで横になっている。

に「地上でもなかなか大変だったんだよ。そのことはまた後ほど。」

天「わかった。」

「アリスはなんで檻に入れられてるの？」

に「超化維持の薬の効果が切れたから。」

ア「悟天さアーン！一緒に遊びましょうよオ！」

天「俺帰るね。」

に「じゃあね。また明日。」

ア「無視とかキツツイ♡」

地霊殿へ飛んで行った。

.....

地霊殿にて。

天「勇儀、今回はありがとね。」

勇「そのせいで肋骨をやられたけどな。」

天「大丈夫なの？」

勇「痛まない程度に治すなら1日で治る。」

天「鬼の生命力ってすごいなあ。」

その横にはこいしが眠っている。

天「大丈夫かなあ。」

さ「2日もあれば大丈夫です。」

天「そっか。さとりちゃんは？」

さ「このくらい平気ですよ。」

所々絆創膏（ばんそうこう）を貼っている。

さ「だいぶお疲れだと思えます。温泉でも如何でしょうか？」

天「あ、そういえばあるんだっけ？」

さ「はい、すぐ近くですの。」

天「それじゃあ行ってくる。」

さ「行ってらっしゃいませ。」

・・・

温泉の看板を見ると、混浴と書いている。

天「まあ誰も居ないと思うけど。でっかい音立てたし。」

一応探ったが、やはり誰の気も感じない。

中へ入り、服を脱いだ。服は棚にしまった。

一応手拭いは持って行った。

天「うわー広いなあ。」

客が居ないからなおそう感じただろう。
かけ湯して、湯船に浸かった。

天「はー、いい湯だなあ…。」

ザパッ

天「？」

湯けむりでよく見えないが、奥で音がした。

天「誰？」

気は感じない。いや、気を消しているのだろう。
音がした方へ近づくとそこには、

霊「なんでこっちへ来たのよ！」

天「え！霊夢!？」

霊夢が居た。

霊「気まで消したのに最悪！」

天「消すから気付けないんだろ！」

小さい口喧嘩をして、2人とも距離を取り、湯船に浸かり岩に背中を付けた。

天「……。」

霊「……。」

天「霊夢、その……。」

霊「・・・。」

「ごめんっ!!・・・!」

お互い同時に謝った。

霊「なんで同時なのよ。」

天「言おうとしたじゃないか。」

霊「はあ・・・頬の傷は大丈夫なの?」

天「問題ないよ。俺こそ、いろいろごめん。」

霊「謝るべきなのは私よ。あのマフラー、出稼ぎのお金で買ってくれたんでしょ?」

天「なんで知ってるの?」

霊「文から聞いたの。」

天「やっぱりバラしたかあ。」

「でも付けてくれてて、嬉しかったよ。」

霊「・・・そう。」

実は照れている。

天「博麗神社に帰っていい?」

霊「いいというか、帰ってきなさい。」

「あんたが居なかったら、誰がコタツに入ってる私にお茶を淹れてくれるのよ。」

天「それぐらい自分でしてよね。」

霊「ふふ。」

天「ははは。」

和やかになったのもつかの間であった。

パシヤッ

天「ん?」

霊「まさか！」

文「あやや、これは奇遇ですね。まさかお2人が混浴に入っているとは！」

「思わず写真撮っちゃいましたあやややや。」

気がついたら、悟天の前の岩にカメラを構えた文が居た。

にしても気を消して音も立てないように忍び寄ってきた癖によく言う。体中傷だらけなのによくできたものだ。

それに高笑いしている。ウザい。

霊「焼き鳥にされる準備はできたかしら。」

文「急急急！避難だあつ！」

霊「待ちなさい！」

文「お助けください！」

天「文、俺は助けないよ。」

文「と見せかけほいつ。」

霊「きやつ」

扇子で少し風を起こし、霊夢を後ろへ倒した。
勿論その後ろには、

天「え」

ザパアツ！

悟天がいる。

文「あつ…。」

霊「…(カーツ！)」

天「ちよ…。」

2人とも顔が真っ赤だ。

まるで霊夢が悟天の上に乗っているかのようになっているのだ。
悟天も突然すぎた為、平常心を保てない。

パシヤツ

文「で、では私はこの辺でさような」

霊「何処へ行くの？話をしましょうよ。」

首根っこを掴み、不気味な笑顔で言った。

文「あやややや！首が！文屋の首が！」

霊「悟天、後でね。」

天「う、うん。」

そのまま脱衣所へ行った。

天「・・・柔らかかったなあ。」

「そうだ、さとりちゃんに神社へ帰ること言わないと。」

時間を置いてから悟天も上がった。

こうして、長い一日は終わった。

次回は宴会だ！

第26話 「バトルと鍋パーティー 前編」

くあらすじく

激戦の末、悟天はセルを追い詰めた。しかし、セルが最後のエネルギーを使い人里ごと悟天を消そうとした。

その時、パワーアップし生きていた霊夢が結界で悟天を護ったのだ！

勝負はついたが、悟天はここでセルに幻想郷の一員になることを提案する。にとりのおかげもあって、セルは幻想郷の一員となった。そして、悟天と霊夢は仲直りをしたのであった。

幻想天霊伝説 第26話

朝がきた。

朝日が紅魔館を優しく照らす。

レイ「いい朝だ。」

座って寝ていたレイは目を覚ました。咲夜はまだ起きない。

前述しているが、レイの部屋は咲夜の部屋の隣だ。

毎晩、無駄無駄無駄と隣から声が聞こえていたが、前夜は聞こえなかったので心配になり、こうして付きつきりで看病をしている。

レイ「咲夜さん大丈夫かな…。」

グツ

咲夜の右手を握った。

レイ「ゆつくり休んで、また皆さんに元気な顔見せてくださいね。」

聞こえたのかはわからないが、

咲「…んん…。」

レイ「…!!？」

咲夜は目を覚ました。

レイ「咲夜さん！」

咲「・・・？レイ？」

レイ「よかった！具合はどうですか？」

咲「まだ頭が痛いわ。酸欠かしら。」

レイ「一度外の空気を吸うといいかもしれないね。僕も起きたばかりですし、一緒にどうですか？」

咲「そうね。そうするわ。」

「ところでレイ、なんで、ずっと私の手を握っているのかしら？」

レイ「あつ、すいません！心配で仕方なくてつい…。」

咲「いえ、いいのよ。」

「もう少し、このまま置いて…。」

レイ「…はい！」

寒い朝だが、暖かかった。
が、

フ「咲夜ー、調子はどう？」

フランが急に入ってきた。

レイ「い、妹様！」

咲「妹様ですか。調子はそこそこいいですよ。」

フ「無事でよかったです。」

「ねえねえ、レイはなんで咲夜の手を握ってるの？」

レイ「これはその、指相撲です！指相撲をしてたんですよ！」

察してくれたのか咲夜もそれらしい様に指を動かした。

フ「咲夜と指相撲？レイって意外と強いんだね。」

「私とも指相撲やろうよ。」

レイ「(ヤバイぞ、妹様と指相撲なんかしたら指が木っ端微塵になつてしまう…!!?)」

フ「ほらほら。」

今まさにレイの手を掴もうとしている。

レイ「あつ！そういえば庭の手入れを任されていたんでした！ね、咲夜さん？」

咲「そ、そうね。そろそろ行きましようか。」

「妹様、私は今身体が不自由ですのでレイも同行させます。ご了承くださいませ。」

フ「ぶー。」

レイ「すみません妹様、またの機会に。」

フ「今度絶対だからね。」

これは助かったのか？

•••

咲夜に肩を貸しながら、寒い庭を2人で歩いた。

咲「はあ、はあ、ごめんなさいね、まともに歩けなくて。」

レイ「病み上がりなんだから仕方ないですよ、気にしないでください。」

咲「ふふ、ありがとう。」

一度止まり、花壇を眺めた。冬の花が咲いている。

レイ「綺麗な花ですね、心が安らぐ。」

咲「あれはノースポールね。綺麗に咲いてるわ。」

ノースポールとは、12月から咲き始める白い花のことだ。

レイ「ノースポールっていうんですね、優しそうな名前だなあ。」

優しく風が吹いた。

穏やかな時間が流れていた、のに…

魔法少女「いや〜これが本物つすね〜。」

昨日助けた謎の魔法少女が空気を壊した。

レイ「うわっ！なんだいきなり！」

魔法少女「あ、昨日はありがとうございました、レイおじさん！」

レイ「いえいえ…って誰がおじさんだ！」

咲「くすっ」

魔法少女「あ、まだお若い時代でしたね。」

「咲夜さんが助かってなりよりっす。」

何故咲夜だけさんづけなのだろうか。

レイ「ありがとう、あなたが居なかったらどうなっていたか。」

咲「…お若い時代、とは？」

魔法少女「あ、言い忘れてたっすね。」

「どうゆう訳かわかんないっすけど、私は未来から来たみたいっす。」

レイ「未来☒じゃあ、あなたは未来の僕を知っているのですか☒」

魔法少女「幾らか知ってるっす。咲夜さんのことはあんまりわかん

ないっすけど、レイおじさんには世話になったっす！」

「他に何か知りたいことってあるっすか？」

レイ「今、幻想郷で何が起きてるのか教えてほしい。」

魔法少女「おお、核心的なことを訊くつすね。」

「ズバリ言いますと、ある科学者が幻想郷を侵略しようとしてるつす。」

レイ「科学者…？僕らが戦ったボージヤック一味やセルも、そいつと何か関係が？」

魔法少女「やっぱレイおじさんは勘が鋭いつすね。」

「その通りつす。殆どはその科学者が関係してるとつす。」

レイ「奴らが現れたのはそいつのせいだったのか…その科学者の居場所はわかりますか？」

魔法少女「いや、私は教えられなかったつす。」

「あ、あと敬語じゃなくていいつすよ。私らの仲じゃないつすか。」

知らんがな。

レイ「僕はまだ、あなたの事全然知らないんだけどなあ…まあ、いや。」

魔法少女「私の身元とかは今夜の宴会まで内緒つす！」

「それじゃあ私は会いたい人がいるのでこちら辺で。お2人のラヴげふんげふん、穏やかな時間の邪魔しちゃ悪いんで。」

咲「レイ、今だけあの子への攻撃を許可します。」

レイ「了解です！よし、おじさん遠慮しないぞ〜！」

魔法少女「うわ！懐かしのノリつす！逃げ」
ポウツ！！

能力を発動した！

魔法少女「え！ガチつすか!？」

レイ；「スーパーゴーストカミカゼアタック」

レイ「スーパーゴーストカミカゼアタック。」

魔法少女「イヤアアアアアアア！」

箒に乗って一目散に飛んで行った。

咲「やっと静かになったわね。」

レイ「朝からこの調子だと、騒がしい一日になりそうですね。」

咲「そうね。たまにはそういうのもいいけれど今は、ね。」

レイ「せっかくだしい雰囲気だったのに…なんちゃって。」

咲「あら奇遇ね。私もよ。」

レイ「えっ、な、なんだか照れちゃうなあ。」

咲「な、なに照れて」

ドカーンッ!!

遠くで爆発音がした。おそらく先ほどの攻撃が炸裂した音だ。

レイ「あーっ!しまった!」

咲「…許可したのは私よ。気にしないで。」

「それに、どことなく魔理沙に似てたから大丈夫よ。」

レイ「で、ですよね!大丈夫ですよね!うん!」

無事だったからよかったものの。

小悪魔「咲夜さーん、食事の用意が整いましたよ。」

咲「行きましょうか。」

小悪魔「おいレイ早く帰ってこい!」

レイ「はい!すぐ行きます!」

紅魔館の朝でした。

•••

場所は変わって守矢神社。

早「ん・んん…。」

「朝、ですね。」

にとりの研究所で治療を受け、終わった時は真夜中であつたが守矢神社へ帰っていた。

早「起きてくださ…、もう一人でしたね。」

「よおし、神奈子様と諏訪子様の分も頑張つていかないと！」

神「誰の分だつて？」

早「…え？」

諏「今日もいい朝だね、早苗。」

障子の前には、

2人の神が出迎えていた。

早「あ・あ・あ。」

神「誰が死ぬつて言つたんだ？ 私たちはきつかけを与えただけだぞ。」

諏「うわあ、神奈子それはないわ。居なくなる感じ出しといて。」

「まあ、私ものつただけだ。」

早「なあんだ、やっぱり居たんですね！ 今のはお2人を騙すための嘘なんですから！」

神「あれ？」

諏「元気そうで良かったよ。」

早「それじゃあご飯支度しますので待っててくださいね。」

早苗は一人、台所へ向かった。

早「はあ、まったくお2人ときたら。」

「生きてて、良かった…。」

笑顔ではいたが、目からは耐えきれず涙が溢れていた。

・・・

チ「兄貴ー！修行しよーよー。」

天「ちよつと待ってね。」

チルノは早起きなもので、全ての支度を済ませて博麗神社へ来ていた。

霊「昼には帰って来なさいよ。」

天「わかったわかった。」

霊「一回でよろしい。」

天「いちいち言わなくてもいいじゃないか。」

チ「喧嘩は良くないよ！兄貴が言ってたもん。」

天「うっ。」

霊「まあ、行ってきなさい。」

天「あ、うん。」

こうして修行へ出かけた。

文「あやや、また勃発するかと思いましたよ。」

霊「居るのはわかってたわ。」

文「小さな喧嘩なのに負けず嫌いなお2人ですね。」

霊「うっさい。」

文「でも、そんなお2人だからホツとしました。」

霊「何よそれ。」

文「貴方達らしいということですよ。」

霊「・・・あっそ。」

文「それでは私は用事がありますのでおさらば！」

霊「はいはい。」

「どうやら悟天と霊夢への心配は無用のようだ。」

・・・

セ「もう10時だぞ。そろそろ起きろ。」

に「もう少し…。」

セ「まったく。」

魔「ようにとり！起きてるか？」

「あー！」

セ「おっと、霧雨魔理沙は知らなかったな。」

魔「お前、まだ生きてたのか！」

ヴンツ！！

セ「話は聞かぬか。それもいいだろう。」

魔「にとりに手は出させないぜ！」

に「もううるさいなあ。」

魔「離れるにとり！」

に「何が？」

「あ、セルおはよう。」

セ「もう遅いのだが…。」

魔「は？どういうことだぜ？」

ス・・・

に「魔理沙は帰ったから知らなかったね。実はね…」

一連の流れを伝えた。(少女説明中)

魔「私は信用できないな、こんな奴。」

セ「私はそれでも構わんがな、貴様の信用など要らん。」

魔「何を！」

に「魔理沙落ち着いて。セルも憎まれ口叩かないの。」

魔「ちっ。」

セ「ふん。」

文「こんにちは！ちよつと用事があるんですけど…」

「あやや？魔理沙さんがこんな時間に起きてるなんて珍しいですね。」

魔「うるさいぜ。」

セ「用とはなんだ、射命丸文。」

文「あ、そうでしたね。」

「セルさんの力を取材したいと思ひまして。」

セ「要するに手合わせということか。」

文「その通りです！（一番の理由は宴会まで暇だっただけなんですけどね。それは伏せておきましょうか）」

セ「しかし、はつきり言うとお貴様では全く相手にならない。」

文「グサツと言いますね…。」

セ「とは言え、私もサイヤ人の細胞を持つ人造人間だ。戦闘に興味はある。」

「もつと仲間を呼んでこい。そうでなくてはな。」

魔「何言ってるんだ、私と文でかかればお前なんて」

セ「言わなくてはいけないか？」

魔「くそつ。」

文「でしたら私は1人呼んできますね。」

文は守矢神社へ向かった。

セ「魔理沙は何もしなくていいのか？」

魔「1人は向こうから来るぜ。」

と言って少し経つと、

妹「よっ、にとり。つてお前まだ居たのか！」

セ「私は今のところはここに住んでいる。貴様には関係ない。」
妹「お前が居たら邪魔なんだよ。」
セ「どう邪魔だと言うのだ？」
妹「それは…。」

特撮番組のことだ。観ているところを人に見られるのは恥ずかしいらしい。

妹「とにかく邪魔なんだ。」

セ「わからぬ。」

魔「ちようどいいところに来てくれたぜ。」

妹「なに？」

魔「複数の連中と手を組んでセルを倒そうってわけだぜ。」

妹「お！そいつはいい。乗った！」

セ「ふん。」

「その檻に入っている魔法使いは仲間に入れなのか？」

魔「アリスか…。にとり、薬あるか？」

ア「お〇お〇おんぐ」

に「えっと、まだあるね。使いなよ。」

魔「サンキュー。アリス、これ飲め。」

ア「睡眠薬かしら〜？」

魔「黙って飲め。」

ア「魔理沙ってば積極的♡」

ゴクツ

ヴンツ!!

ア「あれ？魔理沙じゃないの。」

魔「戻ったぜ。」

セ「どうなっているのだ…。」

に「アリスはね、呪いがかかっているの。」

「ある技を編み出した副作用らしいよ。本当はこの副作用を止められた筈だったんだけどね。」

セ「止められただと？」

ア「そうよ。技を編み出してから誰にも会わなければその呪いは発動されずに済んだ。だから私はずっと家にこもっていたの。」

「でも4年前のある時、お使いを頼んだ上海人形が戻って来たからドアを開けて籠を手にとった瞬間だったのよ。」

「何が起きたかわからなかったわ。急に暗くなったと思ったら私は空中に居て、飛んでいた魔理沙とぶつかったの。」

セ「なんだと。」

ア「そのせいで呪いがかかって、記憶も通じていない汚れた私が生まれてしまったの。」

魔「汚れてるのレベルじゃないぜ。」

に「これもセルのドクターの仕業と予測してるけどね。」

セ「いや、それは有り得ない。」

に「え？なんで？」

セ「4年前といえば私はまだまだ身体は作られていなかったが、そんな状態でもドクターの研究内容くらいは少し見聞きしていた。」

「だが当時、アリスのことなど一切触れていなかった。寧ろマークしていたのは博麗霊夢と霧雨魔理沙だけだ。アリスをマークし始めたのはクウラとの戦闘からだ。」

「ドクターの隣に居た奴もドクターの指示がない限りそんな勝手な真似はしない。」

に「！ てつきりセルのドクターかと思ってた。」

ア「その科学者はどこで聞いているかわからなかったから今まで伏せていたけど、そうじゃないとなると隠す必要もないわね。」

魔「じゃあ、一体誰が？」

妹「うーん。」

に「どうやらこれも調べないとね。」

魔「ああ。霊夢にも相談してみる。」

文「皆さーん、連れてきましたよ。」

早「こんにちは。」

一同「・・・。」

早「ハアツ☆」

セ「・・・お前はそういう人物らしいな。」

早「違いますからね！」

魔「とにかく、役者は揃ったな。」

に「確認するね。」

「魔理沙、さな…、妹紅、文さん、アリス、が参加だね。」

早「ハアツ☆」

ア「え？私も？」

魔「当たり前だぜ！」

セ「ほう、随分と面白いメンバーが揃ったな。」

魔「覚悟しろよ、セル！」

に「それじゃあみんなバトルシミュレーターに入って。他所でやる
と被害が出るから。」

こうして、5対1の勝負が始まろうとしていた。

・・・

人里では、一つの店が宴会の準備をしていた。

今回も大人数になると予想し、早めに始めている。

村人A「ミステイアさんまだ来ねえのかなあ。」

村人B「悟天さんの稽古だよ。」

村人C「ミステイアさんにはムキムキになって欲しくないなあ…。」

T「・・・。」

Tは黙って物資を運んでいる。喋ることが面倒なのだろうか。

A「Tはどう思う？」

T「本人がいいならいいんじゃない？」

B「そういえばさ、俺昨日間近で霊夢さんのキック見ちやつたんだよ！」

C「マジか！俺も見たかつたあれ？なんで見てたんだ？みんな避難してただろ？」

B「あつ∴。」

A「まったく、慧音先生助けるとかしろよな。」

この中に傍観者はもう1人いる。

C「T、お前の顔を見て思ったんだが、お前って老けないな。」

A「それな。」

T「いいだろ（ドヤア）。」

B「ま、お前が綺麗でも意味ないよな。だって結婚とか考えてないんだろ？」

T「俺は結婚なんてできないよ。」

C「そうかなあ、そうかもな！」

老けない理由はあるが、伏せた。
以上が人里男衆の雑談だ。

•••

チ「はっ！とりやつ！」

大「えいつ！」

天「んっ！ほっ！おっと！」

ミ；声符「真・梟の夜鳴声」

リ；螢符「真・地上の流星」

ル；月符「真・ムーンライトレイ」

3人が一斉にスペルカードを使った。

天「はあっ！」
ヴンツ!!

超サイヤ人に変身したと同時にスペルカードを吹き飛ばした。

天「うん、バツチリ!ちゃんとスペルカードに気を混ぜられているね。」

ミ「どんなもんだい!」

リ「やった!」

ル「でも弾かれてるのだ。」

大「仕方ないよ、昨日の闘いでお兄様はさらに強くなったんだから。」

チ「見たい!」

天「しようがないな。」

ヴンツ!!バチツ!バチツ!

5人「おおお!」

天「霊夢ときとりちゃんのおかげでやつと成れたんだ。父さんや兄ちゃんは超サイヤ人2つて言ってたっけ。」

チ「カッコいい!」

リ「すげえ。」

ル「すごいのだ!」

天「そういえばみんなはなんで俺の修行を嫌がりもしないで受けるの?」

チ「さいきよーになりたいから!」

大「チルノちゃんに少しでも追いつきたいからです。」

ミ「お客さんを守る力を付けるためです。」

リ「なめられないためかな。」

ル「食べたいものを食べるためなのだ。」

天「へく、みんないい志だね。ん?ルーミアはなんて言った?」

ミ「そろそろ宴会の準備をしなきゃいけないので今日はこの辺で切り上げますね。」

天「うん、お疲れ。」

大「チルノちゃん、私たちも宿題やらないと。」

チ「えーやだー。」

ル「私も一緒にやるのだ。」

リ「じゃ、便乗で。」

天「みんな今日もありがとう。」

皆それぞれやることをしに行った。

天「こいしちゃん、何でずっと隠れてたの？」

こ「一人がいいから。いや、悟天お兄ちゃんと2人きりがよかったから。」

天「うーん。」

霊夢からはこいしの教育をしつかりするよう言われた。それはさとりも同じことを頼んでいる。

天「こいしちゃん、いいかい？」

こ「なに？」

天「チルノ達はみんなこいしちゃんの友達、いや、仲間だ。時にはみんなで力を合わせなきゃいけないんだ。」

「だからさ、みんなで修行しようよ。」

屈（かが）んで頭を撫でた。

こ「むー。」

天「さて、もう霊夢も怒る頃だし帰るか。」

こ「なんで、あんな神社に戻っちゃうの？」

天「え？俺の帰る場所だからさ。」

こ「地霊殿と一緒に暮らそうよ！」

天「（まいったなあ。ここでただ突き放すとかえって悪い結果に

なっちやうからなあ。よし。」

「こいしちゃん、俺たちはあまり一緒に居ないからこそ会った時の喜びがあるんだ。」

「一緒に暮らしちゃったらその喜びもなくなる。修行に行きたいと思わなくなってしまうよ。」

こ「そんなのやだ。」

天「でしょ？だから俺は地霊殿には住まない。いいね。」

こ「・・・うん、わかった。じゃあね、お兄ちゃん。」

飛んで行った。

天「あつ、早く帰らないと。」

バシユツ!!

後編へ続く。

第27話 「バトルと鍋パーティー」 後編

昼過ぎ。

霊 「また遅かったじゃないの！何してんのよ！」

天 「ごめんごめん、こいしちゃんを説得してて。」

霊 「ああ、それならいいわ。」

天 「あれ？それはいいんだね。」

霊 「まあ、ね。」

「人里へ行って壊された家屋の修理しに行くわよ。」

天 「昨日被害が出たんだね。」

霊 「そ、そうよ。」

確かにセルJr.に破壊された家屋があるが、セルJr. 本体を蹴り飛ばして壊した物件については言えなかった。

霊 「さ、行くわよ。」

天 「うん。」

•••

此方は昼の紅魔館。

美 「レイー、昼食の時間だよ。」

レイ 「やった！すぐ行きます！」

美鈴が門番をしていたレイに呼びかけた。

ダイニングへ移動すると、みんな集まっていた。

レミ 「お勤めご苦労様。」

右腕が元通りになっている。

レイ「あ！お嬢様、治ったんですね！」

レミ「ええ。美鈴とレイが門番をしてくれたおかげよ。」

レイ「いやあそんな、元に戻ってよかったです！」

レミ「ふふ。」

小「おらあ！さっさと座れえ！」

レイ「は、はい！すいません！」

大きなテーブルには主に洋食が並べられている。妖精メイドが作ったものだ。

レミリアの席には納豆ご飯が置いてある。

レイ「お嬢様は納豆好きなのかあ。」

咲「そうよ。日本という国の食べ物らしいわ。」

レイの隣の席に咲夜がいる。

レイ「咲夜さん、お嬢様元気になってよかったですね。」

咲「ええ。私も早く元気にならないと。」

食事を始めた。

咲「レイ、そこにあるベーコンを取ってくれるかしら？」

レイ「いいですよ。」

まだフォークを自由に使えないようだ。

レイ「大丈夫ですか？僕が口に運びましょうか？」

咲「あら、大胆ね。でも今はありがたいわ。」

口を開けて待っている。

レイ「大胆だなんてそんな、セル達と戦った時に助けていただいたお礼ですよ。」

食べ物をお口へ運んだ。

妖精メイドたちはヒソヒソ話をしている。

レミリアはご機嫌そうだ。

美「あんなに怖い咲夜さんでもこんな一面があるんですね。」

咲「中国、治った後私に殺られるか、食後レイにやられるか、選ぶなさい。」

美「ええ！」

笑顔のまま言った。

レイ「アハハッ、それだけ元気ならあまり心配はいらないみたいですね！」

咲「ふふ。」

賑やかな食事で御座いました。

・・・

セ「・・・これは…。」

シミュレーターで再現された場所、それはセルゲーム会場であった。オリジナルはここで孫悟飯に倒されたのだ。

魔「何ぼーつとしてるんだ？」

セ「・・・。」

魔「ちっ、シカトかよ。シカトは早苗だけで充分だぜ。」

早「全然よくないですよ！」

妹「ま、4人で頑張るか。」

早「ちよ」

文「少し傷が残ってますが、足手まといにはなりません！」

早「ハアツ☆」

ア「みんなふざけないで。時間切れになったら私のこの形態は解けちゃうのよ。」

魔「そうだったぜ。」

早「(もしかして常識人は、アリスさんしかいないの?)」

早苗も常識にとらわれていない。

魔「行くぜ！」

4人「はああっ!!」

ヴンツ!!

4人は一斉に変身した。

早「あっ、できた！」

セ「悪いがにとりが心配なのでな。最初から本気でいかせてもらうぞ、はああっ!!」

ヴンツ!!バチツ!バチツ!

ア「! 何よこれ！」

文「ボージャックなんかとは、桁が違う！」

早「悟天さん、霊夢さん、魔理沙さんは、こんなとんでもない敵と闘ってたんですか…!」

妹「私が1回休みになった時より強くなってやがる！」

魔「今度は負けないぜ！」

セ「・・・来い！」

バシユツ!!!

5人一斉にかかった！と思われたが、アリスはその場で何やら呪文を唱え、妹紅は構え、

妹「おらあああつ!!」

ボオオツ!!

セルと闘った時一瞬変身した自爆エネルギーを制御した形態へ変身した!

一方、向かった3人の内最初にセルへ向かったのは、5人の中でスピード1番の文だ!

文「はっ!」

セ「どりゃあ!」

セルはカウンターを狙ったが、

ヒュンツ!

セ「なにっ!」

文「たあつ!」

ドゴツ!

文の攻撃は来ず、もの凄いスピードで背後へ回られキックされた!それだけでなく、キックした文は持ち前のスピードですぐセルから距離をとった。

攻撃は終わらない。

魔;彗星「ブレイジングスター」

魔「後ろ見てるんじゃない!」
ドオツ!!

セ「ぐっ!」

決まった！相手へ突進し、突き抜ける技だ。

早；奇跡「客星の明るい夜」

早「あと1人誰か忘れちゃいませんかってんですよ！」

ドドドドツ！

セ「・・・。」

早「あれ？」

当たってはいるのだが、どうやら効いていない。

セ「昨夜、にとりが撮影した映像でお前の闘いを観た。映像のお前は真の闘いをしていたが、今はまるで違う。」

「どういふことかわからんが、期待外れだな。」

早「な、何をー！」

セ；「バーニングアタック」

セ「バーニングアタック!!」

早「は、はや」

ドゴオン!!

魔「早苗ー！」

文「早苗さん！」

煙が舞い視界が悪くなった。この状況でいち早く動いたのは、

妹「くたばれえ！」

ドゴツ!!

セ「おっつ！」

妹紅だ。

セルの腹に拳を埋め込んだ！

セ「今までで一番ダメージがあつたが、所詮その程度だな。」

妹「何言つてんだ、ここからがメインだ。」

ポオオオツ!!

拳を腹に埋め込んだまま、全身を炎で包んだ!

セ「なにっ!こんな早くに自爆だと!」

妹「普通に戦略練つても勝つのは難しいことくらい、今の見てりや誰でもわかるだろ?」

流石妹紅。永い時の中を過ごして得た戦闘センスだ。

妹「いくぞ!」

セ「ふん!ここから脱出するくらいなんともな」

ア;「真・抜け殻五重奏」

地面の下から、気の込められた無数の弾幕が放たれた!

セ「ぐおお!地面の下に魔方陣だとお!」

ア「そうよ!文さんが攻撃すると同時に見えないよう仕掛けたのよ!」

妹「いって!私にもダメージあるじゃねえか!」

「まあ、あばよ。」

セ「ちくしよ」

ドツカーンツ!!

妹紅は跡形もなく吹き飛んだ。しかしセルは、

セ「ぐ・・・ここからの再生など...!」

身体の表面は灼け爛(ただ)れ、普通なら生きていたとは言えない。

が、再生しようとしている。

魔「待つと思ったか！」

魔；魔砲「ファイナルスパーク」

セ「ま、待て！」

魔「とつくに溜まってたぜ！消えろーっ！」

ゴオオ！

セ「なんちやって！」

魔「えっ？」

グバツ！！

ヒュンツ！！

魔「なっ！後ろ!？」

ドゴツ！！

魔「がはっ！」

ス・・バタツ

なんと！爛れた身体を一瞬で再生し、それで終わらず瞬間移動で魔理沙の背後へ回り、一撃で再起不能にしたのだ！

セ「残念だったな。私はオリジナルとは何もかも違うのだ。」

妹「リザレクション」

妹「やったか？」

文「それフラグってやつですよー！」

セ「いや、お前との勝敗はもうついている。」

セ；「魔空包囲弾」

セ「これが、スピードの封じ方だ。」

気がつくくと、文の周りには無数の気弾が浮いていた！

妹「おい！ぼーっと思ってないでお前もなんとかしろよ！」

ア「ごめん、さっきの攻撃で体力全部使っちゃったわ…。」

超化維持でやつとらしい。

セ「終わりだ！」

ドドドド!!

文「うわ!!」

ス・・

妹「文ー!!」

文は倒された。

セ「まだやると言うのかね？」

妹「く、くそお。」

ア「これまでね。」

ス・・

妹紅だけが超化を解いた。アリスは解いたら一大事だ。

セ「ほう、潔いな。」

妹「私は勝てる鬪いにしか全部は使わねえよ。」

セ「それも悪くない考えだ。」

妹「お前に褒められても嬉しくねえよ。」

ア「にしても、殺さないのね。」

セ「にとりが悲しむからな。」

妹「(にとりの奴、1日でどうやってセルを手懐けたんだ?)」

セ「お喋りはこのくらいでいいだろう。この空間から出るぞ。」

妹紅は文を、アリスは魔理沙を抱えた。

妹「おい、手が足りねえんだ。早苗を抱えてやれよ。」

セ「何故私が。」

に「セルー、運んであげてー。」

アナウンスが入った。

セ「・・・仕方あるまい。」

ア「ほんとになんでも言うこと聞くのね。」

セ「私はにとりの言うことしか聞かんど。」

妹「まるで召使いだな！ハハハ。」

セ「覚えている藤原妹紅。」

妹「すまないが私はすぐ忘れるぞ残念だったな。」

セ「ちっ」

ア「ほんとに仲が良いのね。」

セ&妹「黙れ。」

妹「なっ、台詞被せてくるんじゃねえ！」

セ「それはお前の方だ。私は言葉を変えたぞ。」

仲が良いようで。

・・・

人里で家屋の修理をしていた悟天と霊夢。2人は驚きのスピードで取り込んでいた！

既に一つの家屋が修理完了なのである。

天「ねえ、ペース早くない？」

カンツ！

霊「こうでもしないと今夜までに間に合わないわよ。」

カンツ！

2人とも金づちを一回叩くだけで釘を刺している。ペースも人間の大工のレベルではない。

大工A「いや、助かりましたよお2人さん。」

大工B「あとは儂等（わしら）に任せてくださいえ。」

霊「そう？まだ骨組みしかできてないんだけど。」

数時間で2件の骨組みを作り上げただけでもすごい。

天「まあこう言ってるんだし、お言葉に甘えようよ。」

大工C「旦那の言う通りですぜ。昨日は幻想郷のために闘ってくれたんですしゆっくり休んでくださいや。」

霊「そ、ありがと。ってこんなの私の旦那じゃないわ。」

天「ははは。」

大工C「そうですかい？お似合いだと思いませんぜ。」

霊「どうだか。」

天「俺フランちゃんとの約束があるから行くよ。」

霊「あんたあまり修行は好きじゃないのによく付き合えるわね。」

天「修行したいって言うってくれるからね。それじゃあ。」

バシユツ！

霊「ま、私も行くんだけどね。咲夜に用があるし。」

ヒユンツ!!

瞬間移動で悟天より一足早く紅魔館へ向かった。

•••

セルや魔理沙たちはバトルシミュレーターから出た。

に「みんなお疲れー。セル強いでしょ。」

魔「お前が作ったものじゃないのぜ。」

妹「惨敗は確かだな。こいつはあまりダメージを負ってないみてえだし。」

早「悟天さんはこんな凄い敵と闘ってたんですね。」

文「あの時の早苗さんでもの凄いパワーアップだと思ってましたのに…。上には上があるものですね。」

セ「お前たちは、上を目指したいか？」

妹「少なくともお前よりはな。」

魔「当たり前だぜ！」

ア「そうよ。」

文「霊夢さんに置いてかれたくないですからね。」

早「勿論私だって強くなりた」

セ「では先ず、本気で闘う時は弾幕を基本使うな。」

早「ハアツ☆」

セ「弾幕を意味あるものにしたければ、弾幕一つ一つに気を込めるのだ。だから博麗霊夢は本気で闘う時、弾幕を使わない。」

「それと刃物を使う者は別だ。本人の意思次第で気とは関係なく殺すことができる。」

魔「一つ一つに？体力が持たないぜ。」

セ「だからやめろと言っているのだ。おっと、霧雨魔理沙から弾幕を取り上げたら何も残らないな。」

魔「なんだとお!!」

殴りにかかったが妹紅が止めた。

魔「この野郎！妹紅離せよ！」

妹「落ち着け。無駄に痛い思いをするだけだ。」

魔「ちっ！」

セ「ただ霧雨魔理沙、お前はマスタースパークの類の弾幕にはしっかり気を込めているみたいだな。あの時の私の言葉はそういう意味だ。」

魔「・・・。」

早「（神奈子様と諏訪子様と合体してた時の私は、無意識で気を込めてたんだ。やっぱりお2人は凄いなあ。）」

セ「藤原妹紅は分かっていたようだな。」

妹「望んでないのに長生きしたからな。年の功ってやつだ。」

セ「そこでだ。お前たちがその気なら、私が幾つか技を教えてやろうと思うのだが、どうだ？」

5人「!!」

.....

霊「相変わらず寝てるわね。」

レイと交代した門番を見ての感想だ。

霊「・・・邪魔するわよ。」

門を素通りして館内へ入った。

小「あ、霊夢さん。」

霊「咲夜はどこ？」

小「自室で安静にしています。」

霊「そう。ありがとう。」

廊下の奥から誰かが走ってくる。

フ「お兄様ー!」

霊「あら、フランじゃないの。」

フ「なあんだ、霊夢さんか。」

霊「悟天ならもうすぐ来るわよ。」

フ「ほんとに!?!」

ボタンッ

紅魔館の扉が開いた。

天「フランちゃん、いる？」

フ「お兄様！」

霊「遅かったわね。」

天「やつぱり瞬間移動使ったんだね。全速力で飛んだのに追い越されるわけだよ。」

フ「お喋りしないで修行付き合ってよー。」

天「わかったわかった。」

霊「私は咲夜の様子を見に行くわ。」

天「うん。」

・・・

コンコン

霊「咲夜、入っていいかしら？」

咲「霊夢？いいわよ。」

ガチャツ

入るとベッドで横になっている咲夜の隣にレイが座っている。

霊「あ、あんたもしかして。」

レイ「ん？どなたですか？」

霊「会うのは初めてね。私は博麗霊夢。博麗の巫女よ。」

レイ「霊夢さんですね！僕はレイです。紅魔館で働かせていただいています。」

霊「噂には聞いてたわ。」

「ところで、咲夜はどうしたの？」

レイ「この前、とんでもない奴らが紅魔館を襲ってきて…その時に大怪我を…。」

霊「紅魔館も襲撃されたって聞いてたけど、まさか咲夜が倒れるとはね。」

咲「不覚だわ。情けないことにレイがいなかったら犬死するところだったのよ。」

霊「あんたが犬死？それにレイ君が助けたって？」

レイ「殆どお嬢様のおかげですよ。僕は少しお手伝いをしただけです。」

霊「見た感じ普通の人間だものね。生きてただけですごいわ。」

咲「いえ、半分はレイが倒したわ。自分の力で。」

レイ「勝てたのは能力のおかげですよ。普通に戦えばすぐに殺されてました。」

霊「そう言えばレイ君の能力は誰からも聞いてなかったわね。教えてくれるかしら？」

レイ「僕は頭に描いたものを実現させることができます。結構便利な分、条件もありますがね。」

霊「描いたものを実現させる程度の能力でとところかしら。力まで実現できるの？」

レイ「はい、できますよ。ただし直接見た戦闘力しか実現できません。」

霊「なるほど、力負けはしない訳ね。．．強くない？」

レイ「その代わり制限があつて、実現できるのは10分だけで1日3回しか使えないんです。」

霊「そう、なのね。」

咲「難しい能力ね。」

レイ「まあ、便利な能力に制限があるのはよくある話です。」

霊「ま、期待してるわよ、レイ君。咲夜をよろしく。」

咲「．．．。」

レイ「はい！お任せください！」

コンコン

レミ「失礼するわ。」

レイ「お嬢様、どうかなさいましたか？」

レミ「咲夜の様子を見にね。調子はどうかしら?」

咲「良好です。明日には復帰できます。」

レミ「それは許さないわ。明後日まで休みなさい。」

咲「わ、わかりました。」

レイ「特別休暇だと思えばいいんですよ。ゆっくり休んでください。」

レミ「そういうことよ。・・あら、霊夢も来てたのね。」

霊「遅いわよ。」

レミ「ちようどよかったわ。後でいいかしら?」

霊「いいけど、宴会に間に合うようにしなさいよ。」

レミ「勿論よ。」

「レイ、貴方も宴会についてきなさい。」

レイ「はい!喜んで!」

レミ「勿論、咲夜は置いていくわ。」

霊「ちよつと寂しいわね。」

咲「仕方ないわよ。」

レイ「あの…お嬢様、咲夜さんも連れて行ってあげてもいいですか?僕が肩を貸すので。」

レミ「あらまあ、咲夜は問題ないかしら?」

咲「レイならそう言うんじゃないかと思ってました。同行してもよろしいでしょうか?」

レミ「質問に答えてないけど…、貴方がいいなら構わないわ。」

レイ「ありがとうございます!」

霊「・・いいパートナーができたじゃないの。」

咲「ちよつ、何よその言い方!」

赤面した。

レイ「アハハツ、何か照れるなあ。」

レミ「そろそろいいかしら?」

霊「わかったわ。」

レミ「もうすぐ夜よ。」
靈「(あつ、わかった。)」
レイ「ん？何ですか？」
レミ「力試しよ、フッフ。」
レイ「力試し…？」
レミ「貴方も見ていきなさい。」

波乱の予感…！

•••

ここは人里。宴会は始まろうとしていた。

村人A「なんとか間に合ったなあ。」

村人B「はあ・疲れて歩けん。」

村人C「酒や具材は女将さんたちが運んでくれるそうだが、人が足らんらしいな。」

T「俺が行く。まだ動けるからな。」

村人A「嘘だろT！」

村人B「まじかT、まじで行けるの？」

T「問題ないよ。」

今回も例外なく異変に関係ない人物も来ている。

ミ「もうすぐできますよ。」

ル「グツグツなのだ。」

リ「野菜多いな…。」

チ「美味しそく。」

大「チルノちゃん、懲りないなあ。」

萃「悟天が居ないね。」

勇「まだみたいだな。ていうか萃香、お前傷だらけだな、ははは。」
萃「そういう勇儀こそ。肋をおさえてどうしたのさ。」
勇「うっせえ。」

文「まあまあ喧嘩なさらずに。」

萃「あ、天狗、今日も悟天と酒比べするから付き合えよ。」

文「急急急！」

権「大変ですね。」

文「お助けください！」

権「できません。」

文「しよぼん。」

ミ「できました！」

いくつかある鍋の蓋を一気に開けた。

「いただきまーす!!」

その瞬間、1人の金髪少女が物凄い勢いで食べ始めた!

早「魔理沙さん! どうしちゃったんですか!?!」

魔「やへふいひひまつへるらろ(やけ食いに決まってるだろ)！」

妹「イライラしてんな。これもセルのせいだな。」

ア「今晚は私が正気だから倒れてもなんとかするわ。」

妖「太っちゃいますよ。」

早「太りますね。」

魔「あほへむっほろす(あとでぶっ殺す)。」

早「なんて言ってるかわからないですよ。」

早苗は困った。

ア「妖夢さん、隣にいる天使の輪が付いてる男の人は誰？」

妖「ゴクア、というらしいです。」

ゴ「らしいとはなんだ！」

妖「今日会ったばかりでしょう。」

妹「見かけない顔だな。」

ア「悪そうな顔。」

ゴ「言いたい放題しやがって。」

早「ボージャックに似てますね。私はあまり」

ゴ「その名を出すな！」

早「ハアツ☆」

妹「妖夢、訳を説明してくれるか？」

妖「わかりました。」

くく

ゴ「・・・此処は…。」

幽々子「此処は白玉楼。死者が来る場所よ、基本は。」

ゴ「俺は死んだのか？」

幽「そうよ。」

ゴ「ボージャック様は無事か!？」

幽「いいえ、倒されました。」

ゴ「く、くそつ。」

「俺もボージャック様の所へ行かせてくれ！」

幽「地獄だけど、いいかしら？」

ゴ「構わん！」

幽「堅い忠誠心だこと。でもね、その男は部下のことなど何とも思っていないわよ。」

ゴ「! ど、どうでもいい！」

幽「それどころか、部下を地獄へ落とせば貴方は助かる、と言えば部下を地獄へ落とせと即答したわ。」

ゴ「嘘だ。」

幽「ほんとよ。」

ゴ「くっ!うう…。」

幽「そこで一つ、提案があるわ。」
くく

妖「ということで、幽々子様の提案により同居ということになったんです。」

妹「へえ。ゴクアは強いのか？」

妖「力は強いですよ。だけど剣術はまだまだですね。」

ゴ「こんなガキに負けるとはな。」

妖「なっ！ガキとはなんですかガキとは！」

自身の身体を見て言った。

妹「そりやへ剣術を扱う程度有能力があるからだろ。」

妖「そうなんですけどね。」

「・・・咲夜は？」

早「まだ来て」

妖「まだみたいです。」

早「ハアツ☆」

ア「ちよつと魔理沙、今の話聞いてた？」

魔「ふるへえ！ははひはへんは！（うるせえ！話かけんな！）」

ア「ダメだこりや。」

さ「悟天さんも霊夢さんも居ないのに来てよかつたのかしら…。」

こ「お兄ちゃんならいいって言うよ、お姉ちゃん。」

さ「そうだといいいんだけれど。」

空「さとり様ー、鶏肉美味しいですよー！」

さ「・・・え？」

燐「暖まりますね。」

さ「こたつで丸くなってる！鍋は？」

こ「お兄ちゃんまだ？」

さ「(自由すぎるわ…)」

みんな心から楽しんでるようだ。

魔法少女「じゃ、邪魔するっすよ。」

文「あやや？これまた見かけない顔ですねぇ。」

ボージャックとの鬪いの時、気を失ってただけで隣に居たのだが
…。

魔法少女「文さん！」

文「なんで私の名前を？」

「服装も何処と無く魔理沙さんっぽいですし。」

魔法少女「その、魔理沙・…さんは何処に居るっすか？」

文「それならあっちの席に」

勇「おい天狗逃げるなよ。まだ飲めるだろ？悟天が来るまで付き合えよ、な？」

文「あーう。」

魔法少女は魔理沙たちがいる席へ歩いた。

妹「お、また見かけない顔の奴が来たな。」

魔法少女「妹紅さん！」

妹「え？私お前と会ったことあるか？」

ア「貴方は！」

魔法少女「また会いましたね、先生。」

「それに妖夢さんに早苗おばさんも！」

妖「貴方はあの時助けてくれた…！」

早「おばさん!？」

魔法少女「あっ…。。。」

バクバク食べてる金髪少女を見て表情が変わった。

「それどころか、泣きそうになっている。」

魔「ゴクツ、ん？なんだお前？」

魔法少女「う・う・う・う・う・う。」

「ママー……!!!」

泣いて抱きついてきた！

魔「え？は？」

・・・

紅魔館前の空中に霊夢とレミリアが見合っていた。

霊「もう真っ暗、宴会はたぶん始まつてるわね。」

レミ「それじゃあ、早く始めましょうか。」

ヴンツ!!

霊「やっぱりね。はっ!!」

ヴンツ!!

レイ「!!?」

戦闘が、始まった！

レミ「はっ！」

ガシツ!!

霊「スピードは速くていいわね。でもパワーがまだまだだよ。」

拳を掴まれた！すぐに振り払い、

レミ「やっぱり霊夢相手にこれじゃ駄目ね。レイ！」

地上で咲夜に肩を貸していたレイに近寄ってきた。

レイ「まさか、またガブつとする訳じゃ…。」

レミ「正解♡」

カプツ

レイ「ですよね〜。」

また腕から血を吸った。

そして、

カツ!!

霊「えっ!?!」

咲「お嬢様、その姿は…!」

レミ「ふっふっふ、お待たせ♡」

その容姿はまさしく、ヴァンパイアそのものだ!

レイ「お嬢様の勝ちですね。」

咲「すごい!お嬢様がこんなに強くなっていたなんて…!」

霊「どういうこと?」

レミ「昨日は夕方だったけど、今は完全な夜よ。」

「霊夢、貴方の血はどんな味?」

ビュンツ!!

霊「!」

ドゴツ!!

霊「ぐあっ!」

目にも留まらぬ速さで腹部に一撃をまともにくらった!

レミ「まだよ!」

ビュンツ!!ドツゴオンツ!!

吹っ飛んだ霊夢に追い打ちをかけるように、自身のスピードで追いつき下へ叩き落とした！

レミ；紅符「スカーレットマイスタ」

レミ「さようなら♡」

ドドドドドツ!!

殆ど命中し、煙が舞った。

レイ「す、凄い！セル達と戦った時とは比べ物にならないですよ…！」

咲「霊夢は、負けるの？」

複雑な気持ちになった。

しかし！

グンツ!!バチツ!バチツ!

霊「いい攻撃よ。トドメ以外はね。」

レミ「な、何ですってっ！」

霊夢は更に変身した！

レイ「た…大して効いてない☒」

咲「いえ、効いてるわ。霊夢が傷を負うなんて見たことないから。」

所々擦り傷ができている。

レイ「見たことないって…霊夢さんってどれだけ強いんですか☒」

咲「あ、一度あったわ、あはは。」

このように咲夜はちよつと抜けてるところがあつたりする。

レイ「えっ？いつですか？」

咲「第2次月面戦争の時ね。私は全く歯が立たなかつたわ。」
レイ「そ、そんな事があつたんですか…。」

霊「レミリア、後で弾幕の本当の使い方教えてあげる。」

「かかって来なさい。」

レミ「弾幕に頼らなくてもー」

「力で霊夢を倒すわ!!」

ビュンツ!!

ドゴオンツ!!

お互いの腕がぶつかり合つた!

レミ「やるじゃない。」

霊「そうね。」

レミ「はっ!」

爪を入れようとしたが、

霊「そこよ!」

ゲシツ!!

レミ「うがっ!!」

避けられ腹に蹴りを入れられた!

霊「あと防御力もまだまだだね。」

レミ「がはっ、くっ、まだよ!」

シユウウ・・

レイ「お嬢様が元に戻ってしまっただけ……！」

咲「やっぱり霊夢は強かった……。」

レミ「こうなったら。」

レイの方を見た。

レイ「ま、まさかまた……。」

レミ「嘘よ、ふふふ。」

からかった。

レイ「一瞬焦ったじゃないですか……。」

ス……

霊「気は済んだかしら？」

レミ「ええ。」

天「あれ？何してたの？」

フランとの修行を終えた悟天が館から出てきた。

レミ「手合わせよ。霊夢はやっぱり強いわ。」

「遅くなったわね。ちょうど孫悟天も戻ってきたところだし、宴会へ行きましょうか。」

レイ「やった！僕もう腹ペコです！」

レミ「フランはどうしたの？」

天「シャワー浴びるって言ってたよ。」

レミ「それなら後から来るわね。」

「霊夢、瞬間移動をお願いできるかしら？」

霊「はいはい。みんな手を繋いで。」

ヒュンツ!!

•••

ヒュンツ!!

天「みんなやってるね。」

レミ「お腹が空いたわ。」

霊「今日も飲むわよ!」

天「テンション高いなあ。お腹空いたんだね。」

霊「当たり前じゃない。」

に「あ、やつほー。」

天「にとりだ、今来たの?」

に「そうそう、いろいろ発表内容をまとめてたからね。」

天「研究熱心だなあ。」

に「あ、君がレイ君だね?」

レイ「はい!あなたは?」

に「私は河城にとり、河童さ。」

「君のことはいろいろデータにとってから知ってるよ。」

レイ「データ…?そんなもの、いつ?」

に「勿論スパイカメラだよ。」

普通に言うことではない。

レイ「ええ…スパイカメラって…。」

に「気にしない気にしない。プライベートまでは撮ってないから
さ。」

レイ「ならいいですけど…。」

会場へ入ると、何やら盛り上がっている。

みんなの目線の先には、大食いの金髪少女がいた。

レイ「あれ?何であの子がここに…?」

咲「無事だったのね。」

霊「魔理沙、じゃないわね。」

に「あつ、やっと会えた！」

魔法少女「ん？ひほいはんひやはいつふか（にとりさんじゃないっすか）。」

に「君に会いたかったよ！」

魔法少女の隣に魔理沙がいる。見た目は瓜二つだ。

レイ「ほんとにソックリですね…姉妹じゃないんですか？」

再び食べ始めたので魔法少女は聞いてないが、魔理沙は答えた。

魔「よくわかんないけど、こいつが私のことをママとか言っ泣いて抱きついてきたぜ。」

レイ「ママ☒謎が深まるばかりですね…。」

霊「…。」

天「魔理沙って結婚してたのか！」

魔「ま、まだ結婚してないのぜ！」

咲「結婚、かあ。」

魔「こいつが食べ終わるまで待つしかないのぜ。」

その席には2人しか居なかった。他はドン引きして離れたらしい。見渡すとなんと、妖夢の隣に天使の輪が付いたゴクアが居るではないか！

レイ「ゴクア☒何でお前がここにいるんだ！」

ゴ「き、貴様は！」

レイ「ここにいる目的は何だ！」

ゴ「…このガキの付き添いだ。」

レイ「…え？」

妖「またガキって言いましてね？細切れにしますよ？」

ゴ「やれるものならやってみろ。」

妖「何をお！」

おや？仲よさそうだぞ？

レイ「どういうことだ？まるで訳がわからない…。」

妖「実はですねー」

少女説明中。

レイ「なるほど、そういう事だったんですね。」

妖「幽々子様が何を考えてるかわかりません。」

レイ「僕もわかりません。でもきつと、幽々子さんなりの考えがあるんですよ。」

幽「聞こえてるわよ。2人とも後でお仕置きね。」

妖「地獄耳！」

レイ「えっ、僕もですか☒」

幽「序でよ序で。」

ゴ「ざまあねえな。」

レイ「ひええ…。」

妹「よお。」

霊「何よ。」

妹「女たらしによくもやってくれたな。」

霊「女たらし？」

妹「ご、悟天だ。」

霊「あんたには関係ないわ。」

天「ちよ、喧嘩しないでよ。」

妹「私は許さないからな。」

「女たらし、一緒に飲もうぜ。」

天「うん、後でね。あの子に聞くことがあるから。」
妹「ちえ。」

魔法少女「ゴクツ、ゴクツ、かあ！ひとまず食べるのはこのくらいにするっす。」

魔「あ、終わったぜ。」

咲「今朝の話の続き、教えてもらいましょうか。」

魔法少女「あ、そうっすね。」

少し酔いが回ってるが大丈夫だろうか。

魔法少女「まず自己紹介からっすね。」

「私の名前は、霧雨魔理亜っす！」

霊「苗字一緒なのね。」

レイ「下の名前も似てますね。」

魔「そうだぜ、パクリだぜ！」

違うそうじゃない。

天「女の子なのになんで苗字は魔理沙と同じなんだ？」

霊「幻想郷では、男の子は父の、女の子は母の苗字を受け継ぐのよ。

不思議じゃないわ。」

天「そうなんだ。」

亜「そして、私はどうやら未来から来たみたいっす。」

に「なんだって！」

レミ「それは嘘じゃないかしら？」

亜「え？」

レイ「僕もその話を信じるのはちよつと難しいですね…。」

レミ「私はね、能力で未来を見ることができてるの。そこで、私が見たものを当ててもらおうわ。」

亜「細かいことはわかんないっすよ。」

レミ「問題ないわ。」

「この先、ここに居るメンバーが全滅することがあるかしら？」

咲「(あの時に見たビジョンね。)」

亜「・・・全滅します。」

一同「!!」

レミ「それはいつかしら?」

亜「9年後つす。」

レミ「この際だから言うわ。その全滅は、来年よ。」

ええ!!

レイ「ら、来年だなんて唐突すぎますよ!!?」

亜「来年!んなアホな!」

レミ「よつて、貴方は黒よ。」

に「ちよつと待つて。」

レミ「何かしら。」

に「今この子の髪の毛から遺伝子を読み取ったんだけど、

「魔理沙と一致した。親子で間違いない。」

一同「ええええ!」

というか鑑定早すぎだ。

ゴ「さつきから状況がわからないのだが…。」

妖「黙って。」

亜「さつすがにとりさんつす!」

霊「まさかそんなことが。」

早「隠し子ですね。うちの子はそんなんじゃないと思ってたのに…。」

魔「さあなあええええ?」

早「全て嘘です!」

レイ「でもどうやって過去に来たんでしようか…?」

亜「それがわかんないんすよ。私は殺される筈だった、そこまでは覚えてるっす。」

魔「殺される?」

亜「そのことは詳しく話せないです。聞かれてるかもしれないですから。」

霊「(聞かれてるかも、しれない?)」

レミ「ここへ来た理由も能力かしらね。」

に「能力鑑定?腕がなるね!」

レミ「頼んでないのだけど…。」

妖「他にも信じれる理由があります。危険だった仲間たちを的確に助けてくれた、というところですよ。」

「実際、幽々子様を助けてくださりました。」

ア「そういえば私も。」

レイ「確かに、セルと戦った後に咲夜さんを助けてくれました。」
咲「ええ。」

亜「そりや勿論、最悪の結末を迎えることを知ってたからっすよ。」

早「それじゃあなんでレミリアさんの予知と一致しないんでしょう?」

に「おそらく魔理亜ちゃんが来たことで未来が変わったんだと思うよ。」

レミ「それなら納得ね。」

霊「(私や悟天の前に現れなかった理由は、助けなくても結果は同じだったからということね。)」

レイ「魔理亜さんの言う事が本当なのはわかりましたけど、これからどうするんですか?」

亜「そうっすね、戻り方もわかんないすから暫くはこっちでお世話になるっすね。よろしくっす!」

かくして、新たに霧雨魔理亜が仲間となったのだ。

霊「にしてもあんた、その気はサイヤ人よね?母親が魔理沙なら父親は誰なのよ。」

早「あっ!それめっちゃくちゃ気になります!」

亜「それは言えないっすよ。これからのお楽しみっす！」

魔「まさか、にいちちゃんと、じゃないよな？」

レイ「もしかすると悟天さんかもしれませぬね。」

魔「そ、そんな訳ないぜ！」

霊「あら可愛い。」

魔「うるさいうるさい！」

顔が真っ赤だ。

に「忘れるところだった。悟天君の能力がわかったよ。」

天「発表ってそれか。」

に「それは」

亜「へ従来の力の常識を変える程度の能力。っすね！」

に「いいところ取りされたあ…。」

亜「私は未来から来たことを証明するためっすよ。ハハハ。」

妹「疑ってることがバレたか？」

に「ま、そういうこと。悟天君、何か心当たりない？」

天「心当たりかあ、うーん、」

「あつ、昔ベジータさんが超サイヤ人のバーゲンセールだなんて言ってるのをトランクス君が聞いたって言ってたなあ。」

に「バーゲンセール？」

天「超サイヤ人が増えすぎたって意味らしいよ。俺やトランクス君は小さい頃から成れたけどお父さんやベジータさんやお兄ちゃんは苦労したらしい。」

に「それだよそれ！」

魔「霊夢、それなら、」

霊「理解できるわね、文たちがすぐ超化できたのも。悟天が来てからだから。」

に「あ、それなんだけど、」

霊「何よ。」

に「名前を考え直したんだ。霊夢さんが次の段階に入ったし。」

魔「おお！どんな名前だ？」

に「ふっふっふ、幻想郷の超サイヤ人、名付けてー」

「超サイヤ人G（幻想郷）さ!!」

魔「かっけえ！」

咲「前よりはマシね。」

妹「・・・（カッコいい）。」

霊「じゃあ私は・・・」

に「超サイヤ人G2だね。」

霊「そういうことにしてあげるわ。」

レミ「私は？」

に「勿論考えてますとも。超サイヤ人GV（ヴァンパイア）だよ。」

レミ「ふん、まあまあね。」

顔を見たらわかるが、とても気に入っている。

レイ「悟天さんの能力があれば、未来を変えるのもそう難しくはなさそうですね。」

咲「そうでありたいわ。みんな居なくなるなんて嫌なもの。」

天「ああ、全滅なんてさせない。絶対俺がなんとかしてみせるよ。」

拳を強く握った。

天「あれ？その能力だと頑張るのって俺だけじゃなくない？」

霊「細かいことはいいのよ。もしあんたが死んでみんな弱くなったらどうするのよ。」

天「そっかあ。」

魔人ブウと闘ったあの時、悟空が気づかないほど超サイヤ人3の消耗が早かった理由は、もしかしたら悟天が死んでいたからかもしれない。

霊「難しい話は終わりよ。飲むわよ！」
天「よし！」
レイ「食うぞ食うぞく！」
咲「介護、お願いね。」
レイ「あ、すっかり忘れてました！」
ゴ「やつと食えるのか。」
妖「黙って。」
大「チルノちゃん起きて、再開したから。」
チ「うくん。」
ル「美味しいのだ！」
リ「あ、これ返すよ。」
ゴ「俺の剣！貴様らが持っていたのか！」
ミ「皆さんたと食べてくださいね。」
亜「ママ、はいこれ椎茸（しいたけ）。」
魔「お！わかってるじゃねえか！」
妹「おい一緒に飲むぞ女たらし。」
霊「は？邪魔よ。」
天「まあまあ、3人一緒に飲めばいいじゃん。」
早「妹紅さん、一緒に飲みませ」
ア「早苗、飲みませよ？」
早「あっはい。」
に「たまには沢山食べようかな。」
萃「おーい悟天。」
勇「今回も飲み比べするぞ。」
霊「ちよつと、今私と飲んでんだけど！」
萃「霊夢も参加しろよ。」
勇「私らに負けるのが怖いのか？」
霊「上等じゃないの！」
妹「だったら私だって！」
天「潰れない程度にね。」
椀「文さんが倒れてるう！」

さ「こいしが居ないわ。」

空「鶏肉おいしい！」

燐「むにやむにや。」

咲「レイ。」

レイ「どうしました？咲夜さん。」

咲「もう敬語じゃなくていいし呼び捨てでいいわよ。それと、」

「その、ありがとう…。」

レイ「そんな、先輩である咲夜さん呼び捨てなんてできませんよ
！」

「それに、僕は当たり前前の事をしただけですし…。」

咲「ふふ、レイらしい答えが返ってきて安心したわ。」

「これからもよろしく頼むわね。」

レイ「はい！こちらこそ！」

こうして、大盛り上がりの宴会は幕を閉じたのであった。

・・・

亜「あー、楽しかったあ。．．そういえば、心の底から楽しいと思えたのはいつ以来だったかなあ。」

「あ、そうだ。明日にでも本当は今どうなってるか、伝えよつと。」

「誰がいいかなあ。やっぱり、あの3人には直接言う方がいいっすよね。」

この内容は、また別の機会で記すでしょう。

次の話へ続く。

第28話 「本当の第4章」

これは、霧雨魔理亜が魂魄妖夢、アリス・マーガトロイド、レイ・ブラッドに語った、魔理亜が来なかった本当の第4章である。

幻想天霊伝説 第28話

亜「あつ、ちよつといいつすか？」

妖「？何ですか？」

スチャツ

刀を鞘に納めた。

ゴ「昨日の大食い女か。」

亜「そんな目で見られてたんすか!？」

当たり前だろ。

亜「稽古中で悪いんですけど、ちよつとお話があるんすよ。」

妖「お話？なんで昨日しなかったんですか？」

亜「暗い話つすから。それに妖夢さんだけに聞いてほしいつす。」

妖「・・・上がって。ゴクアはそのまま稽古を続けて。」

ゴ「まったく。」

白玉楼の和室へ入った。

妖「その暗い話ってなんですか？」

亜「私が助けに来なかった、本当の歴史つす。」

妖「・・・、いいですよ。続けてください。」

くく

妖「たあつ！」

妖；人鬼「未来永劫斬」

ザッザッザッザッザクツ!!

妖「!!」

「そうか！頭の核が弱点だったんですか！頭に何かあるとは思ってましたがそれだったとは。」

「じゃあもう一体も核を斬ってしまえば」

セルJ r. 1；「かめはめ波」

セルJ r. 1「ギイ！」

妖「うがつ！」

ドゴオ!!

妖「未熟、ですね。油断を…。」

セルJ r. 1「ギツギツギ！」

ギユンツ!!

セルJ r. 1「ギイ？」

幽「ぐう！やっぱり効かない。」

妖「幽々子様の能力でもダメなの!?!」

セルJ r. 1「ギツギツギ」

妖「幽々子様ー!!」

グシャツ!!

妖「あ…あ…。」

私が来なかった時代では、幽々子さんは完全に殺されて消えるつす。

妖「ウアアアアアツ!!」

その光景を見ていた人はいないっすからどんな惨劇だったか詳細には誰も知らないっす。

ただ、後から駆けつけた人の話だと、身体の数カ所と核を斬られたセルJ r. の遺体の近くには、原形がわからないほど粉微塵にされた何かがあつたらしいっす。

そして、切腹した妖夢さんの遺体も…。

ゴクア、さん？の魂は普通に地獄へ落ちたつす。

というわけで白玉楼は潰れたつす…。

くく

亜「咄嗟に助けたんすけどまさか文々。新聞の写真だけで見た妖夢さんとは思わなかったつす。」

「そのおかげで私がいつの時代にいるかわかったつすし、もう2人を助けるために迅速に行動できたつす。妖夢さんには感謝を…。」

喋っているせいで気づかなかったが、妖夢は土下座している。

亜「ありや？どうしたんすか？」

妖「ありがとうございます!!」

亜「…。」

妖「貴方が居なければゴクアや幽々子様が救われることはありませんでした。感謝を…！」

亜「いやいや、顔を上げてくださいつす。悪い歴史を良くしただけつすから。」

妖「この恩は一生忘れません。」

流石は侍。自分ではなく他者が救われたことを感謝している。

亜「それじゃまだやることあるんでこの辺で失礼するつす。」

妖「はい、困ったことがあればいつでも言ってください。必ず助けます。」

魔理亜は箒に乗って飛んでいった。

•
•
•

次に向かったのは、アリス邸だ。

亜「先生ー、居るっすかー?」

ア「アラアラ、魔理沙そっくりのキレイい女の子が入ってきたわア
!」

亜「げっ!」

ダメモードだ。

亜「ちよつと話したいことがあるんすよ。これ飲んでほしいっす。」

ア「媚薬プレイ? マニアック♡」

亜「キモいっす。」

強引に飲ませた。

ヴンツ!!

気が溢れたのは一瞬だった。かなりコントロールできるようになってる。

ア「あら、魔理亜ちゃんじゃない。どうしたのかしら。」

亜「戻った。ちよつとお話があるんすよ。」

ア「どんな話かしら?」

テーブルの椅子に腰かけた。

亜「私との関係や、私が来ない本当の歴史っす。」

ア「興味深いわね。そう言えばなんで私のことを先生って呼ぶの
?」

亜「そりゃこつちの時代では大変お世話になったからっすよ!」
「いろんな魔法を教えてくれたっすから。」

ア「へえ。魔理沙は教えてくれなかったのかしら？」

亜「ママはあまり教えてくれなかったつす。ていうか魔法自体あまり知らないって言ってたつす。」

ア「魔理沙…。」

パチュリーの本を何本も盗んで借りているのに何故なのか…。

ア「話は戻るけれど、あの時私を助けてくれていなかったらどうなっていたかしら？」

亜「先生は右腕を失くすつす。それがこの後影響してくるつす。」

ア「そう、だったのね。」

アリスは今在る自分の健康な右腕を見つめた。

ア「この後って？」

亜「それは言えないつす。聞かれるつすから。」

ア「聞かれる？」

亜「その時が来たら全部話すつす。今はあまり訊かないでほしいつす。すんません。」

真剣な表情だ。

ア「あ、いいのよ。」

亜「先生、これあげるつす。」

呪文を唱えると、テーブルの上に小さい魔方陣が現れ、そこからマカロンが飛び出した！

亜「先生の好物つす。」

ア「まあ！わかってるじゃない！」

嬉しそうです。

亜「一緒に食べるっす!」

ア「ありがとね。お茶を淹れてくるわ。」

それから時間が経った。

亜「それじゃあまだ行くところあるんで私はこれで失礼するっす。」

ア「ご馳走さま。またいらっしやい。」

亜「勿論っす!」

再び箒に乗り、次の場所へ向かった。

・・・

フ「勝った!」

レミ「ぐぬぬ。」

何やらテレビ画面で格闘ゲームをしている。しかも3D格闘ゲームだ。

2人に紅茶を頼まれたレイが部屋に入ってきた。

レイ「失礼します。紅茶をお持ちしました。」

レミ「ありがと。そこに置いて。」

フ「お姉様、お姉様使うのやめたら?」

レミ「いいえ、孫悟天だけには負けるわけにはいかないわ。」

ゲームキャラの話だ。

レイ「何のゲームをなさっているんですか?」

フ「NITORIファイターズっていうゲームよ。河童が作ったん

だって。」

「操作するキャラクターは、幻想郷のみんなになってるの！」

レイ「それは面白そうですね！ちよつと見せてもらってもよろしいですか？」

フ「いいよ、はい。」

キャラクター欄を見ると、霊夢や魔理沙などサイヤパワーを宿した者は全員おり、加えて幻想郷の実力者として有名な妖怪や神、勿論悟天もいた。

そして、レイも載っているではないか！

レイ「僕もいるじゃないですか！何か嬉しいな。」

レミ「でも、5分経つと強制敗北になるわよ。」

フ「スピード勝負よね。」

レイ「本人と一緒にリスク高いんですね…。」

レミ「ふふふ。」

フ「レイ、私と戦おうよ。」

レイ「わかりました！手加減はしませんよ！」

やり方を一通り教えてもらい、フランは悟天を選び、レイは自分を選んだ。

レイ「自分を1番知ってるのは自分だから、多分上手く動かせるはず！」

レミ「気をつけなさい。フランが使う孫悟天はかなり強いわよ。」

レイ「が、頑張ります！」

フ「コテンパンにしちゃうもんね！」

レミ「レイ、プリンをちようだいな。」

レイ「え、今ですか？」

レミ「そうよ。貴方なら今すぐ出せるでしょう？」

レイ「はい、ただ今！」

ボウツ！

頭の中でプリンを描き、実体化させた！

レミ「流石ね。」

フ「お姉様ずるい！私にも出してよー！」

レイ「承知しました！」

ボウツ！

フ「わーい！」

レミ「フランが食べてる間に操作でも覚えなさい。」

レイ「助かります。」

一通りやり方を覚えた。スパーク○グメテ○にそっくりだから早くできたのだ。

フ「よーし、行くよー！」

いきなり超サイヤ人2の悟天を選択した。こらあ！少しは手加減しろお！

レイ「僕的能力って超サイヤ人も真似できたっけ。」

どうやら選べるようである。テスト操作の時、A連打したせいでスキップしたようである。

段階としては、通常、超サイヤ人G依存、超サイヤ人GV依存が表示された。

レイ「とりあえず超サイヤ人Gになってみよう。」

さあ、始まるドンぞ！

フ「絶対勝つもんね。」
レイ「負けませんよ！」

・・・。
結果。

フ「えー！なんで!？」

フランがボロ負けしているのだった！

レイ「いやー、やっぱりゲームは楽しいですね！」

フ「絶対河童から先に貰ってたでしょ！」

レイ「そんな事しないですよ！」

レミ「それにしても上手だわ。」

「今度は私よ。」

レイ「よし、手加減はしませんよ！」

フ「お姉様じゃ無理よ。」

レミ「ふっふっふ、レイに勝てる秘策はあるわよ。」

「霊夢を使うから。」

レイ「なるほど…では、キャラの強さが全てじゃない事を理解して
いただきましょう！」

レミ「そう思うかしら？」

バトルが始まった途端、レミリアが使ったのは夢想天生だった！

レミ「これを上手く使って5分逃げ切れれば勝ちよ！」

フ「ずるっ！」

レイ「ええ…。」

がしかし…。
・・・。

レミ「なんでなのよー！」

レイ「あはは！ゲームはキャラの強さだけじゃ勝てないですよ。」
フ「だははは！」

レミ「なんで夢想天生が解けるタイミングがわかるのよお！」

レイ「1度見て発動時間さえ分かれば簡単ですよ。」

フ「レイってゲームの天才だね！」

レイ「ありがとうございます！いやあ、照れるなあ。」

レミ「ぐぬぬぬ。」

コンコン

美「失礼します、レイはいる？」

レイ「はい、どうかされましたか？」

美「お客さんだよ。2人きりで話したいんだってさ。」

レイ「わかりました。すぐ行きます！」

美鈴に客室へ行くよう指示され移動すると、

亜「こんちやっす、レイおじさん。」

レイ「こんにちは、魔理亜さん。何かあったんですか？」

亜「はいっす、宴会じゃ話せなかつたことを伝えに来たっす。」

レイ「…重大な話みたいですね。聞かせてください。」

亜「察しが良くて助かるっす。」

「今から話すのは、私が助けに来ない本来の歴史っす。」

くく

レイ「ふう…終わった…。」

ピリッ

レミ「咲夜！起きなさい！咲夜！」

レイ「咲夜さん！しっかりしてください！」

レミ「生きなさい！生きるのよ！」

咲「」

レイ「……。」

レミ「レイ!なんとかしなさい!」

レイ「…なんとかするにも、もう咲夜さんは…。」

レミ「……、咲夜ア!」

レイ「……。」

パチュリーさんは短時間で霧を作ったことで動けなくなっていました。
す。

残念ですけど、咲夜さんは助からなかったです。

その後、レミリアさんは咲夜さんを死なせてしまったショックで自分自身を棺に封印して地に埋めたです。

そして紅魔館の当主は必然的にフランねえちゃんになったです。

他のメンバーは何とか立ち直ったんですけど、レイおじさんだけは私が知ってる限りでは立ち直れていなかったです。いつも「僕のせいで」と言ってたのは今でも忘れられないです。
くく

亜「だから私は咲夜さんに会ったことはないです。」

レイ「そうだったんですか…本来の歴史ではそんな事に…。」

亜「正直レイおじさんは病んでたです。なのに私が紅魔館へ遊びに行ったらよく相手をしてくれたです。」

「恩返しのためにも助けることができ何よりですよ。」

レイ「いやいや。僕の方こそ、何とお礼を言えればいいやら。」

亜「へへっ。」

「あ、レイおじさん、プリンくれないですか?」

レイ「いいですよ。」

ボウツ!

亜「これっすよこれ!」

早速食べ始めた。

レイ「プリンが好きなんですか？」

亜「そうっす！レイおじさんが頭で描いたプリンが一番好きっす！」

「フランねえちゃんと一緒によく食べたものっすよ。」

言葉とは裏腹に、涙が溢れている。

レイ「ど、どうして泣くんですか？不味かったですか？」

亜「いや、美味しいっすよ。それに久しぶりに食べたんす。」

「嬉しい筈なのに、涙が、止まらな…。」

涙は止まらない。

レイ「泣いていいんですよ。涙は流す為にあるんです。」

亜「ぐすっ…、おじさーん!!」

抱きついてきた。レイからすれば年はあまり変わらないので複雑になるが、魔理亜にとっては違うのだろう。

亜「うわーん!!」

レイ「…プリンもつと食べます？元気出ますよ。」

亜「うぐっ…うん、食べるっす…！」

それから暫くして、魔理亜は帰った。今は魔理沙と同居しているらしい。

レイはレミリアの部屋へ戻った。

コンコン

レイ「ただ今戻りました。」

フ「あ、レイ！遅かったわね。」

レイ「すみません、ちよつと長話になってしまいました…。」

見るとフランは一人でゲームをしていたようだ。レミリアは口を開けて止まっている。

レイ「お、お嬢様、どうかなされましたか？」

フ「お姉様は私にゲームで負けすぎておかしくなったのよ。」

「それよりレイ、今度こそ負けられないからね。私が使うお兄様のセカンドストライクで絶対倒すわ！」

レイ「いいのかなあ…まあ、大丈夫か！」

紅魔館はいたって平和であった。

・・・

ここは永遠亭。

鈴「お師匠様、前私に使った薬って結局どんな薬なんですか？」

永「一時的にサイヤパワーを宿す薬よ。」

「本当は一時的にしたくなかったのだけれど。」

鈴「いや、私しか被害を受けてませんか…。」

永「本人が疲れると薬の効果は切れるみたいね。」

鈴「聞いてませんし。」

輝夜「永琳、その薬貸して。」

この人物は永遠亭に住む少女、蓬萊山輝夜だ。

永「姫、いったい何に使うのですか？」

輝「勿論、あいつを殺すためよ。この前は歯が立たなかったから。」

サイヤパワー無しでは妹紅には勝てない。

永「輝夜がやる気になるなんて！」

「いいですよ。」

輝「やった。」

どうなったのだろうか。

・・・

??「四季様ー。」

映姫「・・・何か用？小町。」

この赤髪の少女は小野塚小町。死神である。

四季様と呼ばれるこの少女は四季映姫・ヤマザナドゥ。あの閻魔だ。

小町「わかってますよね。修行、しなくちゃですよ。」

「下界がこれだと。」

映「閻魔が修行しなくてはならないとは、哀しいものですね。」

小「そんなこと言われても…。下界の生き物が閻魔を超えたんですから仕方ないですよ。」

映「そうね。」

「厳正なる裁きのためにも、やるしかない…！」

・・・

？「ドクター、セルが寝返りましたが如何なさいましようか。」

ド「放っておけ。これも計算のうちだ。」

？「底しれませんねエ。」

ド「以前にも言ったが、次はお前には大いに働いてもらうぞ。」

? 「お任せあれ。」

ド 「期待しているぞ。」

「オンリョウキよ。」

・・・

早 「お使い行ってきましたね。」

神 「ああ、頼んだぞ。」

諏 「早く帰ってきてね。」

もうすぐ夕暮れだ。

そんな時間だが、守矢神社の階段を登ってくる音が聞こえる。

神 「? 誰だい?」

T 「あ、こんにちは。八坂様ですよね?」

神 「ああ、そうだが。」

T 「貴方にお尋ねしたいことがあります。」

神 「・・・なんだ?」

諏 「(なんだろう、この人間は普通じゃない。何かがおかしい。)」

T 「そんな警戒しないでくださいよ。知りたいことがあるだけです。」

神 「つべこべ言わないで早く言え。」

T 「扱い雑いなあ。それじゃあ質問します。」

「真の神を、ご存知ですか?」

第4章? 冬の大侵略?

〈完〉

第5章? 真の神?

第29話 「夏祭り! はしやぐなはしやぐな」

くあらすじく

2体のセルやボージャック一味(1人不在)の襲撃を乗り越えた幻想少女達と孫悟天。

にとりの努力や魔理亜の証言により次々と謎が解明される中、ドクターは一向に動きを見せないまま7ヶ月が経過した。

しかし、レミリアが見た運命が真実であれば「全滅」はこの一年以内に起きる。半年は超えてしまったが大丈夫なのだろうか。

そんなことはさておき、夏祭りが始まるぞ!

幻想天霊伝説 第29話

「博麗神社」

天「うくん。」

霊「どうしたのよ、浮かない顔して。」

朝ごはんを食べながら呟いた。

天「チルノたち5人がさ、かなり上達したしもう俺が教えられることもなくなったから卒業ってことにしようかなって思ってるんだけど。」

霊「あら、いいじゃないの。」

天「なんか変なんだよ。2週間くらい前からルーミアとみすちーとリグルからサイヤパワーを感じなくなってるんだよね。」

「チルノは変わってないけど。」

霊「体内から消えたのかしら。」

天「それなら弱くなると思うんだ。だけど、それどころかサイヤパワーがあつた頃より強くなってるんだよ。」

霊「何それ、そんなわけないわ。」

天「俺だつてわかんないよ。」

霊「またにとりに訊いてみたら？些細なことでもにとりならわかっ
ちやうんじやない？」

天「そうだね。5人の最後の修行が終わったら訊きに行くよ。」

霊「夕方までには必ず帰って来なさいよ。」

天「なんで？」

霊「今日は夏祭りなの。」

天「ああ、だから浴衣を用意してたんだね。」

霊「ち、違うわ。その、見回りよ見回り！」

浴衣だと動きにくいのだが。

天「ふくん。」

霊「なによその顔。」

天「霊夢も祭りとか好きなんだなくって。」

霊「だーかーら、見回りって言ってるでしょ！」

天「それじゃ行ってくる。」

霊「あつ、こら待ちなさい！」

神社を出るとチルノと大妖精が待っていた。

チ「兄貴！今日も行こうよ。」

天「うん、ちようどいいね。」

霊「もういいわ、行つてきなさい。」

大「なんか、お兄様と霊夢さんが前より仲良くなってる気がしま
す。」

霊「なっ！そんなわけ」

天「そうなんだよね。喧嘩してから仲良くなったんだよ。」

霊「何言ってるのよ！」

慌てている。

チ「どういうこと?」

天「よし、行こうか。」

大「はい!」

バシユツ

霊「・・・まったく:。」

・・・

〔守矢神社〕

早「くーっ!いい朝ですね!」

諏「今日も暑いね。あんなに太陽が照ってるし。」

神「ああ。」

早「・・・神奈子様。」

神「どうした早苗。」

早「神奈子様、あの宴会の次の日あたりから様子が変です。」

「何かあったんですか?」

神「なに、大したことじゃない。」

諏「もしかしてあの人間みたいな何かのこと?」

神「まあそうだ。」

諏「〈真の神〉とか言ってたね。」

早「?真の神ってなんですk」

神「ああ。もしそれが本当だとすると、私たちは何なのだろうと

思ってたな。あれからずっと頭から離れないんだ。」

早「ハアツ☆」

諏「あんまり考えても仕方ないんじゃない?」

「私たちは私たちでしょ?」

神「それもそうだな。」

早「(え?もしかして私たちは神様なんかじゃないってこと?)(」

神「そういえば早苗。」

早「なんですか?」

神「お前、サイヤパワーが薄れてきてないか?」

早「そうですか？」

神「ああ。あの異質なパワーをこの頃感じなくなってきた。」

早「そ、そんなー！ずっと修行してきたのにく。」

諏「早苗…。」

泣きそうになっている。

神「なのにお前の実力はサイヤパワーが薄れるほど上がっている。」

「これがどういふことかわかるか？」

早「ま、まさか！」

神「私たちと一つになった時もサイヤパワーが薄れた。」

「つまりそういうことだ。」

早「!! そうだとしたら大発見じゃないですか！」

神「そうだ。河童の所へ行くといい、喜ぶぞ。」

早「はい！」

何かがわかりそうな予感！

...

〔紅魔館〕

昼下がり。

フ「あゝ、暑いわ。」

とても少女とは思えないような声を出した。

レイ「とんでもない暑さですね：アイスでも出しましょうか？」

フ「やったあ！いつものプリンアイスお願いねー。」

あいにくプリンアイスは先にお姉様が食べた。

レイ「すみません妹様、プリンアイスは先程お嬢様が…。」
フ「…いいわ、ならば戦争よ。」

ゴゴゴ

レイ「あつ…これ死んだな。」

フランは部屋を後にした。

美「レイ、交代だよ。」

残念なことに、今日のレイは暑い午後の担当だ。

レイ「わかりました。美鈴さんお疲れ様です。」

門に着いた時、館内から爆音が聞こえたが問題ないだろう。

・・・

〔湖付近〕

この日も無事、修行を終えた。そして、

天「みんなお疲れ！今日はちよつと発表があるよ。」

チ「え！なにに!?!」

天「チルノとフランちゃんとこいしちゃん以外は今日で卒業だよ。
今までよく頑張ったね。」

リ「そ、卒業？」

ミ「卒業かあ。」

ル「終わったのかー？」

チ「ええ！あたいは？」

大「どうしてですか？」

天「4人とも十分強くなつたし、俺からはもう教えられることがな

いからね。」

「チルノはまだできそうだからだね。」

チ「最強だからね！」

天「自分からサイヤパワーが消えてるのは知ってるかな？」

チ「ほんとだ！大ちゃんからサイヤパワーが消えてる！」

大「大ちゃんは元々ない。」

大「チルノちゃん…。」

リ「確かにこの頃は感じないな。」

ル「気づかなかったのだ。」

ミ「消えてきたと思った時は焦ったけど、いいことなの？」

天「うん。よくわかんないけどサイヤパワーがあつた時より強くなってるよ。」

リ「確かにルーミアは前より牙が鋭くなったな。」

ミ「そういうリグルは前より夜での視力が上がったね。」

ル「みすちーはお店での動きが早くなったのだ。」

大「お兄様、私は…。」

天「サイヤパワーは妖精には扱えないんじゃないかな。」

「チルノだけは特別でさ。大ちゃんも強くなったよ。」

大「よかったあ。」

天「だからさ、俺から勲章を授けたいと思うんだ。」

悟天がポケットから取り出したのは、「天」の文字が入った星型のバッジだ。

事前にとりに頼んでおいたのだ。

天「えーつと…。」

大「む、胸に付けてほしいです！」

ル「じゃあ私もそうするのだ。」

天「うん、わかった。」

「大ちゃん、君はサイヤパワーがないのによく付いてきたね。」

「卒業おめでとう！」

パチッ

大「あ、ありがとうございます！」

大妖精の顔は真っ赤だ。その理由を悟天は察していたが、平常心を装った。

天「次はルーミアだね。」

ル「はいなのだ。」

天「君は俺が主食を制限したのによく耐えたね。」

「それでいて修行にはしっかり来ていたから尚更よかったよ。」

ル「卒業したら沢山食べてもいいのだ？」

天「なるべく控えてほしいな…。」

「卒業おめでとう！」

パチッ

ル「ありがとうなのだ！」

天「次はみすちー。」

ミ「はい！」

天「君は自分の店を経営しながら、それでも修行にはなんとか行こうとしてたね。しかもかめはめ波を最初に習得したのは驚いたよ。」

「卒業おめでとう！」

パチッ

ミ「兄さんありがとうございます！」

天「最後はリグルだね。」

リ「はい！」

天「君のキックには俺も驚いたよ。修行でさらに磨いたリグルのキックは俺もお手本にしないとあつて思ったよ。」

「卒業おめでとう！」

パチッ

リ「やった！ありがとう！」

こうして、5人は解散した。

大「また5人とお兄様とで集まれたらいいなあ。」

チ「できるんじゃないの？」

大「なんだかね、嫌な予感がするの。」

チ「？」

天「こいしちゃん、そろそろ離れてくれないかな？」

こ「ええ、気持ちいいのにく。」

先程のやり取りの間、こいしは能力で身を隠し悟天の背中に抱きついていたので。

こ「私まで卒業させられたら泣いちゃうところだったよ。」

天「こいしちゃんはまだまだ強くなれるからね。」

こ「わーい！」

天「チルノやフランちゃんと仲良くしてほしいなあ。」

こ「ええ。」

天「チームワークは大事だからね。いいね？」

こ「・・・はくい。」

・・・

〔博麗神社〕

夕暮れになり、人里で夏祭りが始まった。人妖問わずはしゃいでいる。

博麗神社では、

天「霊夢ー、まだ？」

霊「急かさないでよバカ。」

支度をしていた。

霊「できたわ。」

天「ふう、やっど、か…。」

花柄の紅い浴衣姿の霊夢を見て、思わず絶句した。

霊「何よ、じーつと見て。こっちまで恥ずかしくなるじゃない。」

天「綺麗だなあつて思つてね。」

霊「な、何言つてんのよバカ！」

照れんなつて。

霊「い、行くわよ！」

天「うん。」

一応この2人は警備という名目で祭りに参加する。

悟天はいつもの服装だからまだいいが、霊夢は遊びに行く気満々である。

・・・

「人里」

ミ「いらつしやいませ〜。」

村人A「女将さん、焼酎の水割りくれい！」

ミ「まいどあり〜。」

団子屋「お団子いかがですか〜？」

村人B「3本頼んます！」

団子屋「かしこまり〜。」

チ「うわあ、できたての焼きそばって美味しいねえ…。」

大「溶けてるよチルノちゃん！」

ミ「串焼き美味しいのだ。」

リ「スーパールボールすくいやろつと。」

チ「なにそれ？」

大「去年もあつたよチルノちゃん…。」

「ていうか復活早い！」

さ「私が来て大丈夫かしら…。」

空「大丈夫ですよさとり様。」

燐「そうですね、楽しんじゃいましょう！」

さ「そ、そうね。」

空「わあ、何あれ〜？」

さ「ちよ、勝手に離れたら」

燐「わーい、猫じゃらしだー！」

さ「不安じゃないわ。」

神「いいか、私たちが守矢神社の神であることはバレてはならないぞ。」

諏「ガッテンだよ。」

普通の人間に化けている。

早「私は見回りしますね。」

神「何言ってるんだ早苗。お前も祭りを楽しむんだ。」

早「霊夢さんは見回りしてるらしいですから私もしな」

諏「御託はいいからさあ行くよ。」

早「ハアツ☆」

幽「祭りに参加するなんて久しぶりね。」

妖「そうですね。何度も言いますが、バレたら駄目ですよ。」

「幽々子様がいるなんて知ったら人里は大騒ぎですから。」

幽「大丈夫よ。」

妖「心配です…。ゴクアに留守番させて大丈夫なんですか？」

幽「心配ご無用よ。もうあの子は悪いことはしないだろうし、万が
一のため幽霊に見張りを任せたから。」

妖「幽々子様にしては準備がいいですね。」

幽「妖夢く、お置きしようかしら？」

妖「す、すみません！」

鈴「あ、妖夢！」

妖「鈴仙！」

当小説では触れてこなかったが、立場が同じであることもありこの
2人は友人関係にある。

鈴「来てたんだね！半分お仕事っぽいけど。」

幽々子を見て言った。

幽「あら、私は1人で平気よ。2人で回りなさいな。」

妖「え？いいんですか？」

幽「こんな時くらいいいわよ。行ってらっしゃい。」

妖「ありがとうございます！」

鈴「私からもありがとうございます！」

妖「鈴仙、お仕事は？」

鈴「お師匠様から休暇をいただいたの。今日くらい遊んできなさ
いってさ。」

妖「よかったね。それじゃあ行こうか。」

魔「霊夢が見当たらないのぜ。」

亜「ママ！綿飴買ってほしいっす！」

魔「魔理亜！人前でその呼び方はやめてほしいのぜ！」

亜「なんで？」

魔「ご、誤解されるだろ。まだ私は19歳なのぜ。」

亜「でも本当に私のママっすよ。」

魔「そうじゃなくて！」

女A「ええ、あんなに若いのにあんな大きな子供いるの？」

女B「信じらんない。」

ザワザワ

亜「あの人たち何言ってるんすか？」

魔「言わんこっちゃないのぜ！」

「み、みんなー、私はそういうヤバいやつじゃないのぜー！」

霊「さ、見回り始めるわよ！」

天「早速右手にりんご飴持つてるけど…。しかも俺のお金。」

霊「栄養補給よ。終わるまでですから当然よね。」

天「わかった。」

・・・

それから特に異常もなく、20時を過ぎた。

レミ「レイ、あのプリンメーカーってやつ絶対に取りなさいよ！」

フ「もしダメなら壊そうかな。」

レイ「が、頑張ります！」

射的である。姉妹喧嘩の末、家でいつでも作れる装置を手に入れることを条件にし和解したのだ。

要するにレイはとばっちりだ。

パンツ！

射的屋「おっしーな。」

レイ「くそっ！もう一回！」

咲「……。」

レイの背後では、グングニルとレーヴァテインが用意されている。外すわけにはいかない。

射的屋「あと一発ですぞ！」

レイ「た、頼む！当たってくれ〜！」

パンツ！・・ボトツ

レミ「やったわ！」

フ「わあい！」

何やら違和感があるが、見事に倒れた！

射的屋「やるじゃねえかい。ほれ、景品ですぞ！」

レイ「あれ？外れた気がしたけど……まあいいか！」

咲「くすっ」

レイ「……もしかして咲夜さんが？」

咲「見えなかったのね。」

レイ「射的に夢中で気づかなかったです。助かりました……。」

実はというと、レイは能力を使っていないと普通の人間なので止まった時の世界は見えないのだ。

今は、だが。

フ「ん？2人とも何か言った？」

レイ「いえ、何でもありません！」

咲「さっ妹様、次はヨーヨーすくいでも行きましょう。」

フ「変なの〜。」

レミ「どうしたの？2人ともそんなに汗かいて。」

レイ「た、多分厚着で来てしまったからだと思います！」
咲「いや、今日は暑いですから。」

いや〜っておい。

レミ「ふふ、まるで夫婦ね。」

レイ「そ、そうですか？」

咲「そ、そんなわけ…。」

レミ「そんな仲良し夫婦には後でお仕置きよ。」

咲「な、何のことでしょうか？」

レミ「他所で能力を使うのは禁止のはずよ。」

レイ「ゲツ、バレてる…。」

咲「な、何なりと。」

チャンチャン。

諏「お好み焼き美味しいね！」

神「おいおい食べすぎだぞ。少しは控えたらどうだ。」

早「そう言う神奈子様は既に3つ食べてるじゃないですか。」

神「お前もフランクフルト2本食べてるじゃないか。その前はいち

ご飴2つ食べてるしな。」

早「まあいいじゃないですか。」

ニコニコしている。

神「あんまり食べると太るぞ。」

早「ふ、ふと…。」

女性は大変ですね。

•••••

21時過ぎ。

「人里中心」

司会者「さあ始まりました！幻想郷大食い選手権決勝戦!!」

「東、ゆゆさん！」

人間に化けた時の名前だ。

妖「頑張ってくださいーい！」

幽「任せなさいな。」

司「西、孫悟天さん！」

霊「ぜえつたいに勝ちなさいよ！賞品は私のものよ！」

天「さつき幽々子さんに負けたじゃん。」

霊「悟天のものは私のものよ。」

天「あ、うん。」

チ「兄貴つてあんなに大食いだったんだ。」

ミ「兄さん、いつも私の屋台の時我慢してくれてたんだ…。」

司「それではー」

「始め!!」

•••

妹「へへ、今年も賑やかだな。」

妹紅は、町外れの小さな崖から人里を眺めていた。

妹「あの女たらし、今年も楽しそうにやってんな。それなら私は参加しなくても十分だ。」

独り言を呟いていると、何かを見つけた。

妹「ん？大食い選手権の方へ歩いてるあのロボットみたいなの、なんだ？にとりが作ったものか？」

それは尻尾が生えた、全身ピカピカの人型ロボット。
にとりが用意したとすれば演出が足りない、妹紅はそう感じた。

妹「おい、これは誰かに言った方が…」
ザザツ！

背後から草が揺れる音が聞こえた！

妹「誰だ！」
ビツ！！

・・・

慧「今年も大賑わいだな。妹紅も来れば良かったのに。」

慧音はひとり、人里を歩いていた。祭りを楽しむ生徒を見ることが
楽しいらしい。

慧「？なんだ、あれ。」

何かがこちらに歩いてくる。尻尾が生えた全身ピカピカの人型ロ
ボットだ。

慧「ちよつと、君はいつたい」

立ち止まりもせず歩き続けた。

慧「おい、人の話を…。」

まったく御構い無しだ。

そのまま人里の中心まで歩いていった。

慧「…なんだったんだ？」

・
・
・

亜「焼きそば美味しいっすね！」

魔「な！ここの焼きそばは毎年美味しいのぜ！」

魔理沙と魔理亜は大食い選手権を見ていなかった。

魔理亜は参加したかったそうだが、魔理沙が付き合えと言って連れて行っただけ参加できなかった。

魔「ん？なんだぜあれ。」

亜「なんほほほっふは？（何のことっすか？）」

魔理亜は焼きそばに夢中で見てない。

魔理沙が見たものは、全身ピカピカの人型ロボットだ。こちらへ近づいてくる。

魔「こっちに歩いてくるのぜ。」

「私は視力悪いからな…。何かわかんないのぜ。」

と、次の瞬間！スピードを上げ急接近してきた！

魔「わっ！なんだ!？」

亜「ママ！伏せるっす！」

亜；「マスターキャノン」

亜「ほおあちやあつ！」
？「グオツ！」

そのロボットは跡形もなく消えた。

魔「助かったぜ魔理亜！」

亜「お安い御用っす！」

「それと思いい出したっす。こいつらが来るのは今日ってこと。」

魔「え！じゃあ他にもいるのか？」

亜「そういうことっす。急ぐっすよ！」

魔「腕がなるぜ！」

・・・

その魔の手は、紅魔御一行にも迫っていた。

咲「お嬢様、大食い選手権を見ていかなくてよろしいのですか？」

レミ「いいわよ。結果は知っているもの。」

レイ「誰が勝つかわかるんですか？」

レミ「能力で見たの。」

レイ「なるほど。勝ったのは誰なんですか？」

レミ「ふふ、それはね」

ビツ!!

レミ「いつ!!」

咲夜「！」

突如飛んできたビームがレミリアの目に当たった！

レイ「お嬢様!!」

フ「な、なに!?!」

振り返ると、レイが知っている人物がいた。

レイ「メタルクウラ…!?？」

どこに潜んでいたのか、もう3体のメタルクウラが飛び出し襲いかかってきた！

咲「レイ！構えなさい！」

レイ「はい！」

フ「きゅっ！」

ドカーンッ!!

咲「はあっ！」

咲；「マジックスターソード」

ザクッ!!

レイ「くたばれ！」

ボウッ!!

レイ；「爆力魔閃」

ドカーンッ!!

レミ「よくも、私の顔に傷をつけたわねえ！」

レミ；「ヴァンパイアクロウ」

ザクザクザクッ!!

フラン、レイは完全に消しとばし、咲夜は確実にチップを切り裂き、レミリアは運でチップを破壊した。

咲「妹様、大丈夫ですか？」

フ「へーきへーき。」

レイ「お嬢様、顔の怪我は…」

レミ「あー、ムカつく！」

顔を攻撃されたことがよほど気に入らなかつたらしい。

レイ「しかし、こんな急に襲ってくるとは…」

フ「せっかくのお祭りなのに。」

咲「レイ、さっきあれの名前を言ったわね。何か知らないかしら？」

レイ「ヤツはビツクゲテスターという機械惑星が生んだ、量産型アンドロイドです。」

「悟天さんやセル達と同じ世界の住人でもありません。」

咲「なるほど。じゃあまた、魔理亜ちゃんが言ってた科学者の刺客の可能性が高いわね。」

レイ「今回の敵は一筋縄ではいきそうにありませんね…」

レミ「レイ！あの抹茶かき氷買いなさい！」

聞けよ。

レイ「は、はい！ただ今！」

フ「お姉様ってば子どもなんだから。」

レミ「お黙り。」

フ「それにしてもあっけなかったわあ。」

咲「そう、ですね。」

御一行は家路に着いた。

•••

天「う、うぐ…。」

幽「げっぷ。」

司「おーつと！両者手が止まったーっ！」

天「(大食い対決でここまで追い詰められたのは、初めてだっ)」

幽「楽しいわ。霊夢で楽しみは終わりと思ったけれど、こんなにす

ごい人が居たなんて…！」

「(私と互角なんて…、楽しすぎるわ！)」

2人とも一言も喋らない。

霊「ちよつと！なに手を止めてんのよ！」

天「むぐつ」

妖「ラストスパートですよ！」

幽「うゝんゝん！」

司「残り1分です！」

大「2人とも苦しそう…。」

チ「兄貴が負けるわけないよ！」

リ「ある意味あんちゃんを追いつめられてるの初めて見た。」

ミ「頑張って！」

ル「勝つのだー。」

大「復活してる。」

ル「消化できたのだ。」

実はルーミアも大食い選手権に出場していた。

1回戦で霊夢と対決し、敗北したのだ。

ミ「ん？」

チ「どうしたの？」

ミ「今遠くで音がしたような。」

一瞬だった。

ゴトツ!!

屋根の瓦を蹴る音が聞こえ、見上げると6体のメタルクウラが襲いかかってきた！

村人達「なんだあれは！」

天「!!」
幽「!!」

悟天と幽々子は満腹なので瞬時に動けない。

大「皆さん！逃げてください！」

チ「行くよみんな！」

ル&リ&ミ「うん!!」

予想だにしなかった奇襲。

悟天が腹パンパンの状態で、この窮地を脱出できるのだろうか？

第30話へ、続く!!

第30話 「謎の新惑星」

くあらすじく

季節は夏、闘いは一度忘れ、それぞれの思うように過ごしていた。そしてこの時期と言えば夏祭り！人妖問わず楽しんでいた。

しかし、悪いことというのは唐突に起こるもの。

21時を過ぎた頃だろう。人里の各地であるメタルクウラが複数現れたのだ。

彼らの目的とは、いったい何なのだろうか？

幻想天霊伝説 第30話

「人里中心」

ル「やー！」

ルーミアは1体のメタルクウラの頭部に暗闇を投げ、目をくらました！

リ「止まれ！」

ゲシツ！！

ミ「こつち来んな！」

ドゴツ！！

チ「やーっ！」

ガシツ！！

リグルはキックで、ミスティアはパンチでそれぞれ1体のメタルクウラの足止めした！

チルノは1体のメタルクウラと取っ組み合っている。

チ「ににに！」

大「あっ！」

リ「まずい！」

応戦しきれなかった2体のメタルクウラがチルノ達を横切り、霊夢、妖夢にそれぞれ襲いかかった！

妖「！」

霊「かかつてきなさいよ。」

妖夢はしつかり構え、霊夢は余裕を見せつけた。

ヒュンツ!!

霊「え!？」

妖「・・・。」

消えた。一瞬で、だ。

気がつくのと、2体はそれぞれの背後にいた！

シャルルツ!!

霊「うぐっ！わぶっ」

霊夢は油断してしまい、尻尾で首を巻きつかれ、先端は口の中に入られた！これでは完全に呼吸ができない！

しかし妖夢は、

ザツ!!ボンツ!!

背後をつかれようが何も問題はなかった。それだけでなく、一太刀でチップを斬ったのだ。そして、爆発した。

天「霊夢！」

霊「がぶっ！」

口に入っている尻尾の先端に噛みつき、手で尻尾を掴み、

ヴンツ!!バチツ!バチツ!

メ「グアツ!」

気を一気に解放した!

尻尾は千切れ、体の至る所が損傷した。

霊「ぺっ。」

早;奇跡「神の風」

早「あと1人誰か忘れちゃいませんかってんですよ!」
ドオオオツ!!

嵐でメタルクウラの身体をだいたいバラバラにし、その残骸を空中にまとめた!

霊;霊気「博麗かめはめ波」

霊「波あつ!」

まとまった場所を一気に消しとばした!

霊「いいタイミングよ早苗。」

早「遅くなっちゃいました!」

霊「敵は瞬間移動を使えるみたいよ。気をつけなさい。」

早「はい!」

ミ「おらっ!」

ドゴツ!

リ「そらっ!」

ゲシツ!

ル「意外と勝てそうなのだ!」

弟子達は優勢であった。

チ「トドメだあ！」

チ；雪符「真・ダイアモンドブリザード」
ヒュオオオツ!!

メタルクウラは氷漬けにされた！

チ「やったー！」

リ「そんじや私も！」

リ；蠢符「真・ナイトバグトルネード」

リ「いっけえ！」

メ「グアツ！」

地表に倒れ伏した。

リ「どんなもんだ！」

この調子でいける、筈だったが、

ル「くっ！さつきより堅い気がするのだ。」

ミ「ほんとだ。さつきより、手応えが！」

バシツ!!

ルーミアとミスティアが同時に尻尾で払われた！反撃するのかと
2人は思ったが、2体のメタルクウラは悟天に襲いかかった！

ル「しまったのだ！」

ミ「やばい！」

天「くっ、この状態でも負けないぞ！」

霊「私たちもいるんだけど。」

早「あと1人誰か忘れちゃ」

妖「この程度の敵など朝飯前です。」
早「ハアツ☆」

しかし、舞台裏からもう3体のメタルクウラが飛び出してきた！機械の身体なので気を探れなかったのだ。

悟天だけでなく、幽々子にも指を突き立てている。

妖「幽々子様！」

妖夢が悟天の守りから外れた。

早「わわわ！」

妖「えいっ！」

ザツ!!ボンツ!!

霊「んんっ！」

ボツ!ボツ!ドンツ!!

妖夢は1体を倒し、霊夢が気弾を2発発射し2体の動きを止めたが、

メ×2 ; 「デスビーム」

ビツ!!

既にもう2体が攻撃を開始していた!

早「悟天さん！」

霊「悟天！」

天「ふんっ！」

ジュツ!!

霊「！」

早「あれは！」

正面から来たデスビームは自分で止め、背後からの攻撃は受ける気でいた。が、背でこいしがそれを止めていた！

天「こいしちゃん！」

こ「お兄ちゃんを傷つけるなんて私が許さない！」

こ；「嫌われ者のフィロソフィ」

こ「死ね！」

ドガツ!!

能力を解除して現れたため、その場の誰もが驚いた。
メタルクウラはあっさり木っ端微塵になった。

魔；恋符「マスタースパーク」

魔「マスタースパーク!!」

ドオオオツ!!

さらに、隙をつき駆けつけた魔理沙が1体を消し炭にした！

霊「魔理沙！」

魔「遅くなったぜ！」

巫「すごいことになってるっすね〜。」

ザツ!!ボンツ!!

妖「お喋りは後ですよ！」

ル「今度こそ！」

ミ「おう！」

ル；「真・インサニティムーン」

ミ；「真・煌めく冥闇の歌姫」

ル&ミ「それええっ!!」

メ「グオオオツ！」

合体真スペルだ！跡形もなく壊した！
メタルクウラは、ここでやつと全部倒した…？

チ「やったあ！」

大「勝ったあ！」

天「ふう、どうなるかと思ったよ。」

「みんな、ありがとう！」

チ「あたいたら最強ね！」

ル「修行の成果なのだ！」

魔「にいちやんの弟子達すごいのぜ！」

少し経つと、セルの瞬間移動でにとりがやってきた。

に「収まったみたいだね。」

天「あつ、にとりだ。」

セ「大変だったらしいな。」

天「変なのに襲撃されてね。」

セ「私の元へも来たぞ。」

霊「じゃああなたは完全に裏切り者扱いってわけ？」

セ「そうだろうな。」

に「壊さないでって言ったのになあ。」

セ「仕方あるまい。」

に「というわけで、状況を確認しに来たのもそうだけど残骸でもないかなあつてね。」

チ「じゃああれは？」

氷漬けにしたメタルクウラを指差した。

に「あつ！いいのあるじゃん！」

「これもらうね。いいよよね？」

天「別にいいけど。」

に「ありがとう！じゃあね！行くよセル。」
セ「ふん。」

ヒュンツ!!

霊「ほんとにそれだけなのね。」

天「にとりらしいや。」

・・・

妹「弱かったけど、何だったんだ？」

妹紅は難なく倒していた。

襲撃されたのは妹紅だけではない。各地でそれは起きていた。

文「まさか事務所且つ私単体を狙ってくるとは…。」

「こんなことになるなら仕事サボってお祭りに参加すればよかったですぬ。」

永「このガラクタ、他の兎を無視して私だけを狙うなんて。」

「身の程知らずにも程があるわ。」

ア「びっくりしたわ。薬が効いてる時間帯でよかった。」

勇「ちよろいな。」

萃「だね。」

勇「さて、続き（飲み比べ）するか！」

萃「おー！」

こうして、メタルクウラたちの襲撃を鎮圧し、残り時間は少ししかなかったが祭りを再開した。大食い選手権は、延期となった。

各地で襲撃があったようだが、それほど大ごとでもないようだ。

・・・

「博麗神社」

その騒動から、3日が過ぎた。

この3日間、主に霊夢がメタルクウラの発生源を調べていた。その努力は無駄になってしまったが…。

霊「今日こそは見つけるわよ。」

天「もうそのことはいんじやない？」

霊「いいわけないでしょ。また来たら今度の狙いは私たちじゃないかもしれないのよ。」

天「それはそうだけど…。」

セ「お話の途中で悪いが邪魔するぞ。」

霊「ちよつと、勝手に入らないでよ。」

セ「足は掃除してある。気にするな。」

霊「そうじゃなくて。」

天「どうしたの？」

セ「にとりが来いと言っている。」

霊「・・・。」

天「何かわかったんだね。」

セ「そういうことだ。急ぎだ。早くしろ。」

霊「あなたの瞬間移動なんていらないわ。行くわよ悟天。」

天「あ、うん。」

・・・

「にとりの研究所」

研究所に着くと、魔理沙、咲夜、レミリア、アリス、妖夢、妹紅、文、さきn魔理亜、レイが待っていた。

早「ナレーター酷くないですか!？」

咲「何を言ってるのかしら？」

妖「咲夜には一生わかりませんよ。」

咲「あらあら、ここを墓場を選んだのね。」

レイ「まあまあ、2人とも……」

咲&妖「レイ（貴方）には関係ないわ（ありません）。」

レイ「はい……」

早「あ、レイ君久しぶり！」

レイ「早苗さん、お久しぶりです！」

今まで会話シーンがなかっただけで、レイはこの場のメンバーとなら全員と接点がある。

ア「魔理亜ちゃん、元気？」

亜「元気元気つす先生！」

魔「今回は最初から大丈夫みたいだな。」

ア「最初に来たもの。」

文「いや〜楽しいですね〜。」

妹「何がだよ。」

文「理由は何であれ、こうしてまたみんな集まれたんですから。」

妹「ジジイみたいなこと言うんだな。」

文「千年は生きてますから（ドヤア）。」

ウゼエ。

に「もう進めていい？軽く緊急事態なんだけど。」

レミ「進めてちょうだい。」

に「レミリアさんはことの重要性を理解しているみたいだね。」

「メタルクウラの発生源がわかったよ。」

霊「え！」

咲「わかったんですね。」

亜「……。」

文「すぐに新聞に書きませんと！」

いやまだ言っていないから。

に「いつも星を見てる魔理沙さんなら、もしかしたら知ってるかもしれないね。」

魔「ぜ？」

に「1ヶ月前にね、太陽系の惑星が1つ増えたの。外部から入ったものなんだけど、この星と火星の間の軸にすっぽり入ったの。」

レイ「その星が発生源ってことですか？」

に「おそらく！いつもカメラ回してるわけじゃないし、ましてや宇宙なんて監視してないから夜のうちにこの星に入ったんじゃないかな。」

「霊夢さんが見つけれないわけだよ。」

魔「間違いないぜ。冥王星だって太陽系に完全に適応できなかったのにすっぽり入るなんておかしいのぜ。」

に「というわけで、この星を調査しなくちゃいけないんだけど…。」

レミ「リスクがあるわね。」

霊「なら私と悟天が行くわ。」

セ「！」

妹「！」

文「！」

亜「…。」

天「2人だけ!?!」

霊「そうよ。異論はあるかしら。」

レイ「いくらお二人が強くて、流星に危険すぎます！」

霊「あの雑魚が沢山いるだけでしょ。悟天も動けるし問題ないわ。」

レイ「敵の本拠地なんですから、メタルクウラがいるだけとは限りません。」

「もしかしたらもつと強い敵がいるかもしれないし…。」

魔「そうだぜ！私のマスパなんてへじやない奴もいたのぜ！」

霊「それはあんたの攻撃だからでしょ。」

魔「なんだとお!」

天「2人とも落ち着いて、仲間同志で揉めてる場合じゃないよ。」

咲「力ならレイに行かせるといいわ。」

レイ「任せてください!言い出しっぺでもありませんしね。」

霊「それは駄目よ。」

咲「何故かしら?」

霊「リスクが高いからよ。」

レイ「そんなあ、いっぱいお賽銭入れるんで連れてつてくださいよ
〜」

霊「え?え?ほんと?」

天「ちよろいなあ。」

霊「うっさい。」

「ま、まあ、そんなに行きたいなら、連れて行ってあげてもいいわよ?」

咲「・・・(啞然)。」

レイ「ありがとうございます!」

亜「!」

霊「セルは残ってちようだい。にとりの護衛よ。」

セ「最初からそのつもりだ。」

霊「魔理亜も残って。あんたの情報は重要よ。」

亜「はいっす。」

霊「他はそうね・・・」

「強い奴だけついてきなさい。」

強烈な言葉であった。残りのメンバーの誰もが凍りついた。

魔理沙は違った。

魔「じゃあ!」

ヴンツ!!

魔「強いことを証明してやるぜ!!」

魔理沙は、霊夢の顔面目掛けてパンチしたが、

ドゴオツ!!

魔「がはっ!!」

ス・・

躲され腹に重い一撃をくらった。

霊「今のおんたじゃ、尚更無理よ。」

魔「うっ、ち、ちきしよお…。」

巫「ママ!」

ア「何をするのよ!」

霊「にとり、ここに呼んだってことはその惑星へ行く方法はあるんでしょ?」

に「あるよ。」

霊「3人分準備お願い。行くわよ悟天、レイ君。」

に「了解。」

天「う、うん。」

レイ「魔理沙さん…」

にとりが準備したのは、あの謎の円盤を元に作ったブレスレットだ。

出来たばかりの代物であり、往復転送するのがやっと。場所も限られている。

3人はブレスレットを左腕につけた。

咲「レイ!」

レイ「何ですか?咲夜さん。」

咲「これを…。」

レイに手渡したのは、咲夜が特に大事にしている3本のナイフのうち

ちの1本であった。

咲「護身用。もしものために。」

レイ「これは咲夜さんの…ありがとうございます。」

ギョッ

咲夜はナイフを渡すと同時に、レイの手を握った。

咲「必ず戻ってきなさい。」

レイ「はい！パパッと終わらせて、すぐに帰ってきますよ！」

咲「…ふふ。」

どこか安心した表情だ。

天「それじゃあ、行ってくる。」

妹「気をつけろよ女たらし。」

天「うん。」

妹「ツツコメよバカ！」

天「え？」

霊「…。」

早「霊夢さん、どうかご無事で…。
ビリリッ!!

転送された。

セ「修行の成果を試せなかったな。」

早「…。」

咲「ごめんなさい、アリス。」

ア「咲夜は悪くないわ。」

修行の成果とは？

に「さて、こうなることは予想通りとして、みんなには見せたいものがあるんだ。」

亜「！」

魔「なんなのぜ？」

に「うくん、農園ってところかな？」

妹「まさか、順調って言ってたあれか？」

に「それぞれ！」

・・・

「惑星??？」

無事に着いた。

見たところ、白い岩しかない惑星らしい惑星だ。

レイ「うわー、殺風景なところですね。」

天「空気はあるみたいだね。」

霊「なに惚けてんのよ。さっさとあのでく人形探すわよ。」

天「あ、うん。」

レイ「ドンと敵の城みたいなのがあるといいんですけどねえ。」

天「見当たらないね。」

霊「レイ君、聞き忘れてたけど、あのでく人形は何なの？」

レイ「悟天さん達の世界に存在した、ビッグゲテスターという機械惑星から生まれた量産アンドロイドです。」

霊「なるほどね。なんでこのバカがそれを知らないのかは置いといて、量産型なら幻想郷で闘わなくてよかったのは間違いないわね。」

天「お父さんから聞いたことないけどなあ。」

レイ「恐らく、悟天さんとメタルクウラの住む世界が少し違うからでしょうね。」

「並行世界とかいうやつです。」

天「お兄ちゃんならわかる話だね。」

レイ「お兄さんは確か学者でしたっけ。」

天「そうそう。自分の研究スペースまであるぐらい立派な学者だよ。」

「言わなくてもレイくんは知ってると思うけどね。」

レイ「勿論です。とても強く、優しい方である事も知っていますよ。」

霊「優しい方、ね。」

天「霊夢もだね。」

レイ「そ、そうですね。」

霊「何言ってるのよバカなの？」

天「魔理沙たちには危ない目にあって欲しくなかったんでしょ？」

「レイくんは騙せても俺は騙せないね。」

霊「は、はあ!?!」

照れた。

レイ「僕はてつきり、ただ怖い人かと思ってました。」

「優しいんですね。」

霊「2人ともバツカじゃないの!?!」

「まったくもう!」

天「ははは。」

レイ「あははは!」

霊「あーっ、レイ君まで!」

「!!」

突然、霊夢はレイに殴り掛かった!

レイ「うわっ!何するんですか!」

ドゴオツ!!

霊夢の拳は、レイの顔の横を通り抜け、背後まで迫っていたメタル

クウラに直撃！吹っ飛ばした！

レイ「い、いつの間に!?」

天「！ それだけじゃないみたいだね。」

メタルクウラが吹っ飛ばされた先の岩場、そこには無数のメタルクウラが立っていた。

レイ「戦うしかなさそうですね…」

霊「探す手間が省けたわ。」

天「よし、行くか！」

「だあああつ!!」

ヴンツ!!

霊「はあああつ!!」

ヴンツ!!

レイ「はあつ!!」

ボウツ!!

悟天は超サイヤ人、霊夢は超サイヤ人G、レイは能力で超サイヤ人G2 霊夢と同じ戦闘力になった！

ここで補足だが、レイの能力は、肉眼で見たものの中で一番戦闘力の高いものに強制的に合わせられる。

天「超サイヤ人で充分だね。」

霊「当たり前でしょ。」

レイ「パパッとやっつけちゃいましょう！」

闘いが、始まった！

第31話へ、続く!!

第31話 「SOS!もうダメだ!」

くあらすじく

夏祭りの最中に起きたメタルクウラの奇襲攻撃。それを難なく乗り越えた孫悟天と幻想少女達。

何の手がかりもなく3日が過ぎた頃、太陽系に1つ謎の惑星が紛れ込んでいたことが発覚したことを、にとりから伝えられた。

それだけでなく、その星にメタルクウラの発生源があることも確実となった。

にとりは悟天、霊夢、魔理沙、咲夜、レミリア、アリス、妖夢、妹紅、文、早苗、魔理亜、レイをセルの協力の下招集し、調査の計画を立てようとした。

だが、霊夢は悟天とレイだけで充分だと言い放ち、力で反対した魔理沙をそれを超える力で押し切り、惑星へ出発してしまった。

3人が出発したあと、にとりは見せたいものがあると、残りのメンバーを地下へ案内した。

その見せたいものとは何なのか？

異星での戦闘も始まったが、問題ないだろうか？

幻想天霊伝説 第31話

「にとりの研究所」

ア「魔理沙、大丈夫？」

魔「この程度、なんでもないぜ。」

妹「地下にこんな場所があつたなんてな。」

に「地下じゃないと危険だからね。」

セ「私というものがありながらそれを言うか。」

に「万が一だよ。どうやら向こうの科学者は私を狙ってるみたいだし。」

妖「なんでわかるんですか？」

に「みんなメタルクウラは1体ずつだったよね？」

妖「私のところは複数でした。」

亜「1体つす。」

文「1体です。」

早「1体でした。」

に「私のところには3体来たんだよね。」

文「ふふふ！」

セ「しかも計画的にだ。私があと一歩遅ければ、にとりは帰らぬ者となるどころだったぞ。」

に「ほんとに助かったよ。ありがとうね！」

セ「ふん。」

妹「今デレたか？キモいな。」

セ「貴様は孫悟天の前ではいつもデレデレだろう。」

妹「はあ!?デレてねえし！」

亜「なんでこんなにわかりやすいんすかねえ。」

に「本題に入るよ。」

「この木が、〈限界突破の木〉だよ。」

目の前には、蒼く光り輝く大木があった。

魔「限界突破の、木？」

に「そ！個人の潜在能力を引き出す実がなる木だよ。」

早「でも、こんなのどうやって作ったんですか？」

に「果実って本来、種を残すために実を作るでしょ？」

「なのに余計に果肉ができる。防御の範囲を超えてね。」

「そして果肉には種子以上に栄養がある。そこに注目したんだよ。」

文「なるほど、つまりどういうことですか？」

ドテツ

に「つまり、だよ。果肉は他の生物に力を与えるためにあるってことになるんだよ。」

「そこで果肉を科学の力でもっと強くしようって思って、」

「適度な酸味や組み合わせがいい栄養素、体積を見つけて、室温調整を徹底的にしたら、ようやくできたってわけだよ。」

咲「この実を摂取すれば、更なる力を手に入れることができるとい

うことね。」

に「そそ！殆ど果物じゃなくなってるから脆い部分もあつてき、上手くいっただのはたったの10個。」

「大事に使ってね。」

魔「私はドーピングみたいなのはしないぜ。」

早「私もです。努力してこそ本当の力なんです。」

セ「相変わらず馬鹿だな、霧雨魔理沙は。」

早「ハアツ☆」

セ「博麗霊夢は、本当にお前たちが邪魔だから置いて行つたと思うか？」

魔「お前に何がわかるんだ！霊夢はいつもそうだぜ。ちよつと強い相手が現れたらすぐ除け者にしやがって。」

セ「それは貴様が優勢の時か？」

魔「・・・いや。でも、きっと私なんか邪魔だと思って」

「まだわからんか!!」

魔「!!」

セ「博麗霊夢は口では雑魚が沢山いるだけと言つたが、密かに危険性を察知している。孫悟天と一緒にでもだ。」

「答えは単純だ。お前たちを守りきる余裕がない、そういうことだ。」

魔「・・・なんだよ。私たちは守られる側かよ・・・。」

セ「何か違うか？」

魔「・・・。」

早「・・・じゃあ、レイ君はなんですか？」

咲「敵の情報を持つてるからよ。」

セ「ほう、十六夜咲夜はわかつていたらしいな。」

咲「霊夢は不器用ですから。」

セ「まさか、霧雨魔理亜はさておき、わかつていたのは十六夜咲夜だけではあるまいな？」

レミ「ま、霊夢らしいやり方よね。」

に「私は何となくわかつてたよ。霊夢さんのことだからね。」

文「まさかまさか、霊夢さんはお優しい方ですから。」

ア&妖&妹&早「……。」
セ「まったく…。いいか、今お前たちに必要なのは力だ。プライドではない。」

一瞬静寂が訪れたが、その時は来た。

ジリリリッ!!

一同「!!」

警報音だ。

・・・

「惑星???」

天「どうなってるんだ!？」

霊「さつきより戦闘力が上がってるじゃないの!」
ゲシッ!!

レイ「明らかに僕の知っているメタルクウラとは違う…!」

セルの予想通り、3人は優勢ではなかった。レイが知っているメタルクウラとは、戦闘力が全く違う。

ピリッ

レイ「まずいな…時間切れか。」

1度目の能力の時間切れだ。

天「なかなか見つからないね、発生源。」

霊「うじゃうじゃして見えないわね。」

天「レイくん、まだいけるね?」

レイ「勿論です。」

天「そうこなくちやね！」

「だあああつ!!」

ヴンツ!!バチツ!バチツ!

霊「第2ラウンド始めるわよ!」

ヴンツ!!バチツ!バチツ!

レイ「よし!!?」

ポウツ!!

それぞれ超サイヤ人2、超サイヤ人G2へ変身し、もう一度能力を
発動した!

霊「嫌な予感がするわ…。一応押しておこうかしら。」

・・・

「にとりの研究所」

に「霊夢さんからの緊急信号だ!」

魔「そんなわけないのぜ!」

に「ブレスレットの情報だと、悟天君も霊夢さんも本気で闘って
る。」

妖「・・・まさか!」

妹「何かわかったのか?」

妖「夏祭りで闘ったあの日、最初に斬った時と後で斬った時の手応
えが違った。」

「あの機械は、どんどん強くなるのかもしれない!」

ア「!」

妹「だとしたらやべえじゃんか!」

咲「・・・レイ!」

に「ゆっくりする時間はなくなったね。」

「さ、助けに行きたいなら早くこの実を食べて!」
レミ「じゃあ私が先にいただくわ。」

シヤクツ・・・ズキズキツ!!
レミ「はうっ！」

全身の激痛のあまり、レミリアは倒れた。

咲「お嬢様！」

に「言い忘れたけど副作用がある時はあるよ。」

妹「ええ…。」

咲「そんなこと気にしてられません！」

ア「ちよつと！」

シヤクツ

咲「・・・痛くならない・・・の…？」

黙り込んだ。

早「さ、咲夜さん！」

に「・・・。」

次の瞬間！

「うわああっ!!」

ヴンツ!!バチツ!!バチツ!!

なんと！咲夜は超サイヤ人G2に変身したのだ！

亜「成功つすね。ヒヤツとしたつすよ。」

に「どうやら人間は相性バツチりみたいだね。」

ア「私は元人間だから問題ないわね。」

シヤクツ・・・ズキズキツ!!

ア「あはん♡」

激痛と共に薬の効果が消された。

に「魔女だからだね。」

妖「ひっ……でも、ここで退いては武士の名折れです。いただきま
す！」

シヤクツ

妖「……はあああつ!!」

ヴンツ!!バチツ!バチツ!

一瞬反応がなかったが、成功だ。

妹「そんじや私も。」

シヤクツ・ズキツ!!

妹「いつ!!」

妹紅も倒れた。

に「蓬莱人だからだね。」

文「いつきまーす!」

シヤクツ・ズキツ!!

文「知って、ました…。」

早「食べます!」

魔「おい早苗!」

早「いいんですか?このままだと3人は、帰ってこないかもしれな
いんですよ!」

魔「……。」

早「魔理沙さん!」

魔「……ちっ、後で奢ってもらおうのぜ!」

シヤクシヤクツ

魔&早「はあああつ!!」

ヴンツ!!バチツ!バチツ!

早「信じてましたよ、魔理沙さん…！」
魔「へっ、これであの貧乏巫女を驚かせてやるぜ！」

これで、魔理沙、咲夜、妖夢、早苗が超サイヤ人G2に成れた！

魔「にとり、転送頼むぜ！」

に「ガッテンだよ！」

亜「わあ…。」

果たして魔理亜にはどう映ったのだろうか。

咲「アリス、貴女との修行の成果、試してきます。」

ア「おゝん♡あん♡」

咲「聞いてないか。」

・・・

「惑星??？」

天；「セカンドストライク」

天「どりやつ！波あつ！」

ドカーンッ!!

天「はあ・・・はあ・・・。」

霊「・・・なかなか、見つからない、わね。」

手応えのある敵との長期戦により、悟天と霊夢は体力的に追い詰められていた。既に、100体近くのメタルクウラを撃破している。

レイは、能力を発動している間疲れない。疲労を描かないからだ。

レイ「ここは一旦退いた方がいいかもしれません。」

霊「そんなこと絶対しないわ。」

レイ「このまま戦い続けると全滅してしまいます！」

霊「私たちよ？全滅なんて有り得ないわ。」

レイ「現に少しずつ押されてきています。悔しいですが、今は逃げるべきです。」

霊「魔理沙に合わせる顔がないわ。」

レイ「死んでしまつたら魔理沙さんとも二度と会えないかも知れない！それでも意地を張るつもりですか！」

霊「調子に乗るのもいい加減にしなさい！あんたに何がわかるの！」

初めてレイを怒鳴りつけた。

レイ「そんな事知るもんか！死んだら全て終わりなんですよ!!？」

天「落ち着いて！撤退しないならしないで何か考えないと。」

3人は空中の高い場所で闘っていた。どうしたことか、メタルクウラは少しずつしか襲つてこない。

レイ「数体ごとにしか攻撃してこないのには、何か理由があるんでしょうか？」

天「・・わからない。ある程度疲弊した俺たちを一気に攻撃すればいいのになんでだ？」

「霊夢はどう思う？」

霊「ふん。」

天「あ、拗ねちゃった。」

レイ「…ここで機嫌直してくれたら毎日お賽銭入れに行くのになあ。」

霊「・・・。」

一瞬反応したが、これはダメそうだ。

天「じゃあ一か八か、星に向かって合体かめはめ波だ。」

レイ「わかりました。やってみましょう。」

霊「しようがないわね、乗ってあげる。」

天「よし！行くぞ！」

天；「超かめはめ波」

霊；霊気「超博麗かめはめ波」

レイ；「超かめはめ波」

天「かー…」

霊「めー…」

レイ「はー…」

天「めー…」

バチツ！バチツ！

「波ー…っ！！」

ドオオオツ！！

空から放たれた3本のかめはめ波は一つに重なり、地表にいたメタルクウラごと吹き飛ばした！

バチツ！バチツ！

霊「流石の威力ね。」

天「（おかしい。かめはめ波を溜めておびき寄せるつもりでもあったのに、1体も来なかった。）」

合体かめはめ波によりヒビが入った地盤から、青い光が漏れた。

レイ「何だこれは!?!」

天「この星の光じゃないね。機械だと思う。」

霊「1回だけ攻撃を防ぐバリアを張ってたみたいね。無傷なわけがないもの。」

そう、無傷なのだ。あれほどの攻撃を受けたにもかかわらず。しかし、この機械の本領発揮はここからであった。

ピカツ!!

天「! なんだ!？」

レイ「うおっ!」

霊「くっ・・あっ!」

下にいるメタルクウラが、変わっていく!

レイ「どういうことだ!?!?メタルクウラは変身しないはずだぞ!」

霊「大きくなってく…!」

天「あの形は!」

悟天が以前闘った、最終形態に変形した!

レイ「非常にまずい状況ですよ…!」

天「気がないからよくわからないけど、たぶんすぐくまずい…!」

霊「! 来るわよ!」

! あんなに大人しかかったメタルクウラ達が、一斉に襲い掛かってきた

天「おりゃっ!はっ!」

ドゴツ!!

天「ごはっ!」

霊「悟天!」

バシツ!!

霊「痛っ!」

レイ「霊夢さん!くそっ!」

ドオツ!!

レイは近づいてきたメタルクウラを、気合砲で吹っ飛ばした。

レイ「2人とも、大丈夫ですか☒」

天「はあ．．．はあ．．．なんとかね。」

霊「はあ．．．はあ．．．」。

レイ「正面から向かってても、とても敵いそうにない．．．どうすれば．．．」

こちらのことは気にも留めず、メタルクウラたちは遠くからこちらへ向かって来る。

悟天と霊夢は、もう勝てないことなどとうにわかっていた。一対一なら充分勝てる相手だが、相手は1体どころか何体いるかわからない。それだけでなく、前述したが体力もない。

しかし霊夢は逃げない。理由はあるが話さない。万事休すとはこのことである。

ヒュンツ!!

霊「あ！」

天「しまった！」

レイ「!!」

ドゴオツ!!ドーンツ!!

3体のメタルクウラが瞬間移動で背後に回り、3人を叩き落とした！それだけではない。

メ×10；「スーパーノヴァ」

見上げると、10体のメタルクウラが攻撃の準備をしていた。これが数の力である。

レイ「あんなの食らったらひとたまりもないですよ！」

霊；夢境「二重大結界」

霊「咲夜からあんたも結界を張れるって聞いたわ。あんたも張りな

さい！」

レイ「わかりました！」

レイ；「爆魔障壁」

天「助かるよ2人とも。」

ドオオオツ!!

飛んできた10発のスーパーノヴァを受け止めた！

霊「ぐっ！うつ！」

レイ「ぐっぐぐぐ…!!？」

ピリッ

レイ「くそ！時間切れか！」

霊「そんな、こんな時に！」

最悪のタイミングで時間切れだ…。

爆魔障壁は消えてしまった。

ビキビキツ!!

霊「づっ…もう、ダメ…！」

天「危ない!!」

バリンツ!!

レイ「しまっ…！」

結界が破れる寸前、悟天が2人を無理やり伏せさせ、両腕を広げ
庇った！

天「うわあああつ!!」

霊「悟てーん!!」

レイ「ご、悟天さん!!」

ス・

悟天が、倒されてしまった！

霊「ちよつと、しっかりしなさいよ！」

悟天は動かない。

どうしたことか、無数のメタルクウラは黙って見ている。

レイ「早く悟天さんを安全な場所に連れて行かないと！」

霊「・・・無理よ。」

レイ「僕が奴らの足止めをします。その隙に悟天さんを！」

霊「後ろを見てみなさい。」

囲まれている。

霊「それだけじゃないわ。悟天のブレスレットは壊れたし、それに
…」

ス…

霊夢も超サイヤ人G2が解けてしまった…。

レイ「…絶体絶命という事ですか。」

霊「・・・レイ、あんたも殴って止めるべきだったわ。」

いつの間にか呼び捨てだ。

霊夢は、悔しそうでもあり、絶望しているようでもある表情を浮か
べ膝をついた。

レイ「ここで諦めるなんて、らしくないですよ！何とか方法を考え
ましょう！」

メタルクウラは笑っている。

霊「そうね。それなら私のブレスレットを悟天に渡して、あんたも逃げる。これなら完璧ね。」

レイ「…少し違いますね。悟天さんと帰るのは貴女です。」

霊「あんたまさか!」

レイ「そんな顔しないでくださいよ。死ぬと決まった訳じゃないんですよ?」

霊「ダメ!咲夜が悲しむわよ!」

レイ「霊夢さんを置いていったら、それこそ咲夜さんに怒られちゃいますよ。」

霊「……。」

言い返せなかった。

レイ「僕のブレスレットです。さあ、これで早く!」

霊「……、あつ!」

ブレスレットを差し伸べたレイの背後に、メタルクウラが迫ってきていた!

レイ「いいから受け取ってください!」

その時だった!

魔;恋符「マスタースパーク」

「マスタースパーク!!」

レイ「この技は…!」

レイに迫っていたメタルクウラたちは消された!霊夢の後方で囲んでいたメタルクウラも気がつくといない。

魔「なんてザマだ霊夢！お前を殺すのは私だけだって約束したじゃないか！」

咲「間に合って良かった。と言っても、魔理沙が少し見物しようとか言ったから余裕はあったけれど。」

魔「それは言っちゃダメなのぜ！」

妖「悟天さん……。敵はかなり強力なようですね。」

早「霊夢さん、もう大丈夫ですよ。」

霊「・・・あんた達！」

膝をつく霊夢の前に、強くなった親友達が背を向けて立った。

咲「レイ、無事でよかった。本当に……！」

レイ「いやあ、すみません。もう少しであの世行きになるところでした。」

咲「お説教は後でするわ。レイ、まだ闘えるかしら？」

レイ「はい！まだまだいけます！」

咲「よろしい。」

魔「4人だとちよびつとだけ不安だったのぜ。」

妖「相手がこの数なので助かります。」

早「これで私たち負けな」

レイ「これなら楽勝ですね！」

早「ハアツ☆」

霊「情けないけど、私はもう動けないわ。瞬間移動を使う体力もないの。」

咲「手を貸して。」

ギユウンツ

咲夜の手を取ると、少しだけ気が流れてきた。

咲「これで悟天さんも一緒に瞬間移動できるわ。」

「あとは敵の弱点とか教えてくれると嬉しいんだけど。」

霊「地下よ。光ってる所。半径200m全部よ。」

咲「助かったわ。」

「さあ、早く行きなさい。ここは私たちが何とかするから。」

霊「・・・ありがとう。」

ヒュンツ!!

魔「みんな早く変身するのぜ。」

咲「言われなくても。」

妖「全て斬ります!」

早「行きますよ!」

レイ「たつぷりと仕返ししてやる!」

咲&妖&早「はあああつ!!」

レイ「はあつ!!!」

ヴンツ!!バチツ!バチツ!

ボウツ!!

強くなつて帰ってきた魔理沙、咲夜、妖夢、早苗。

果たして、悟天と霊夢を破ったメタルクウラ軍団を倒すことができるのだろうか?

第32話へ、続く!!

第32話 「幻想少女VSメタルクウラ軍団」

くあらすじく

突如太陽系に紛れ込んだ惑星は、メタルクウラの発生源であることがにとりのおかげでわかった。

魔理沙をおさえて、悟天、霊夢、レイの3人で惑星へ出発して暫くすると、メタルクウラたちが襲い掛かってきた。

序盤は問題なかったものの、戦闘力が上がっていくメタルクウラを前に3人は押されていった。

悟天の提案で、合体かめはめ波を惑星へぶつけたところ、青い光が漏れた。これがメタルクウラを作っていることがわかったのだが、同時にメタルクウラは悟天が以前闘った最終形態になってしまった！

圧倒的数と力により、悟天は倒れ、霊夢は変身が解け、事実上敗北してしまった。

そんな絶体絶命のピンチに、にとりが開発したへ限界突破の木の実を食べ大幅に強くなった魔理沙、咲夜、妖夢、早苗が駆けつけてくれた！

咲夜に気を分けてもらい、悟天と霊夢は脱出も成功。

果たして、4人は悟天、霊夢、レイを破ったメタルクウラ軍団に勝てるのだろうか？

幻想天霊伝説 第32話

「惑星???」

魔 「よし！咲夜、妖夢、早苗はガラクタの相手を頼むぜ！」

早 「ハイッ！」

妖 「なんで命令口調なんですか。」

咲 「じゃあ半死体がリーダーをやるのかしら？」

妖 「次半死体って言ったら斬りますよ。」

早 「こんな時くらい頼みますよ2人とも！」

魔 「レイは疲れてるだろうし私の護衛を頼むぜ！」

魔理沙は、レイが疲れないことを知らないだろうから仕方ない。

レイ「僕は大丈夫ですけど、わかりました！」

魔理沙は高く飛び、八卦炉を下に向け気を溜め始めた。一方。

咲「アリスに教えてくださったこの技、今ここで！」

くく

ア「いい？咲夜のナイフは真っ直ぐすぎるの。」

咲「と言いますと？」

ア「霊夢や悟天さんみたいに、避けられたり弾かれたりしても不思議じゃないってこと。」

「気がこもっていても同じよ。」

咲「でも、どうすれば…。」

ア「だから、私が簡易魔法を教えてあげる。」

咲「私、魔法は使えないんですけど。」

ア「だから簡易魔法なの。ナイフを宙に浮かせている時点で素質はあるわよ。」

咲「わかりました、やってみます。」
くく

2本のナイフを手から離し、宙に浮かせ自在に操った。それだけでなく、くるくる回転し、

咲「はっ！」

ギョーンツ!!

メタルクウラ軍団へ突撃した！

メ「ナツ！」

スパッスパッスパッスパツ！・・・ボンツ！！

！
確実にチップを斬り、あつという間に4体のメタルクウラを倒した

咲「へ立体浮遊術、成功ね・・・ん？」

咲；幻世「ザ・ワールド」

チチチチ：

背後に迫っていた2体のそれを察知し、時を止めた。

咲「遅いわ。」

それぞれに一振りし、距離を置き、

咲「解除。」

スパッスパツ！・・・ボンツ！！

難なく倒した。

ダツ！！
妖「悟天さんと霊夢さんを倒した実力、試させてもらいます。」

メタルクウラの大群へ駆け出した！

妖「はっ！」

ザツ！！ザツ！！ザツ！！ザツ！！ザツ！！ザツ！！

妖「？」

ボンツ！！

機械類に勘の鋭い妖夢は、一太刀ずつでも確実にチップを斬り裂いている。

妖「斬った音がおかしい。それに、2人を倒したにしては手応えが…。」

「数だけですネ。」

早「え？どういうことですか？」

妖「今の私たちなら、怖れることは数だけです。」

「1体なら悟天さんや霊夢さんみたいに強くはありません！」

早「！ それなら修行の成果をここで試せそうですね！」

スパッスパッ・ボンッ!!

咲「油断だけは許しませんよ。」

くく

セ「東風谷早苗に教える技はそうだな、トランクスは技ならどうだ？」

早「トランクス??」

セ「下着じゃない、人物だ。貴様は何処と無くやつに似ている。」

「新しい世界に踏み込み、活躍する姿がな。」

「もつとも、トランクスはもつと過酷な人生だったが。」

早「わかりました！お願いします！」

くく

早「よおし、いきますー！」

早；「バーニングアタック」

両腕をバタバタ動かし、最後に構え、

早「バーニングアタックツ！」
ドオツ!!

エネルギー弾を放った!

メ「グオツ！」

ドカーンツ!!

1体倒した!

早「やりました！」

・・・

「にとりの研究所」
ヒュンツ!!

霊「はあ・・・はあ・・・。」

セ「やはりやられていたか。」

に「霊夢さん!ひどい傷だ...。」

霊「神社に、戻ら、ないと。」

セ「そんな傷だらけの状態で戻れるのか?」

霊「うっさい。」

身体を重そうにしながら歩いていった。

に「道わかるのかなあ。」

「ま、いつか。部下の河童に任せよう。」

ア「あん♡あん♡あ...」

ヴンツ!!バチツ!バチツ!

セ「漸くか。」

ア「すごい!力が漲るわ!」

に「時間差だね。」

妹「・・・あれ？痛くなくなった？」

ヴンツ!!バチツ!バチツ!

妹「おおおっ!」

セ「あとは妖怪2人か。」

に「それぐらいなら待とつか。向こうは調子いいみたいだし。」

「それまで悟天君の治療をお願いしていいかな?」

ア「構いません。」

妹「しょうがない女たらしだな。」

ア「顔赤いわよ。」

妹「まさかお前に言われるとは・・・。」

ア「は?」

・・・

「惑星???」

魔理沙はまだ溜めている。

レイ「凄いエネルギーだ・・・!メタルクウラをまとめて消し飛ばすつもりなのか・・・?」

魔「さつき霊夢が言ってた弱点を盗み聞きしたぜ。」

「この地中ほぼ全部ってな!」

聞けてるのやら聞けてないのやら。

レイ「:メタルクウラどころか、星ごと吹き飛ばすつもりみたいですね。」

魔「勿論、そのつもりだぜ。」

咲「そちらに行きました!」

メタルクウラ2体が襲い掛かってきた!

レイ「任せてください！」

レイ；「ダブルサンデー」

レイ「くらえ!!？」

ドカーンッ!!

迫り来るメタルクウラを撃ち落とす!

不思議なことに、レイは悟天や霊夢と闘った時よりパワーアップしている。

レイ「何だかよくわからないけど、すこぶる調子がいいぞ！」
スパッスパッ!・・ボンッ!!

レイの真後ろでメタルクウラ2体が斬られた。

咲「余所見してはいけません。」

レイ「あはは…:すいません。」

魔「できたぜ!」

魔；魔砲「ファイナルマスタースパーク」

魔「ファイナルマスター…」

「スパークッ!!」

ドオオオオッ!!

レイ「うおおっ!!？」

あまりにも強い光を前に、そこに居た誰もが目を開けられなかった!

光が消えると、惑星の地表には見るからにデカイ機械らしきものがあつた。

早「掛け声とかしてくださいよー!」

魔「したぜ? マスタースパークつて。」

妖「間一髪でしたね。」

「どうやら3人は避けたようだ。」

咲「それにしても、この大きな機械はいったい…。」

レイ「前に話したビッグゲテスターと似てますね。」

グググ

その機械はうねうねと動いている。そして一気に変形し、高さ15mの巨人の姿となった！

魔「デ、デカいのぜ！」

妖「こ、これは！」

早「勝てるかどうかふあ」

レイ「かなり手強そうですね…！」

早「ハアツ☆」

??? 「よく聞け。」

機械巨人が喋った。

ド「私はこの作品を作った科学者だ。今までお前たちに刺客を送り込んだのもこの私だ。」

魔「お前か！魔理亜の世界をめちゃくちゃにしたのは！」

ド「何を言っている？」

妖「未来の話ですからわかりませんって。」

ド「早速だが、私の改造作品であるこのファイナルクウラを、倒してみせる!!」

その瞬間、ファイナルクウラの口からまたしても大量のメタルクウラが放出された！

レイ「…ここからが本番みたいですね。」

妖「好き放題言ってますね。」

咲「あれだけならいいのだけど、デカブツもいるわ。」

早「ど、どうすれば…。」

魔「取り敢えず私とレイはデカいのを相手するぜ。うじやうじやる方を他に頼むぜ。」

レイ「よし、やるぞ！」

神「(早苗、聞こえるか?)」

早「え？」

妖「どうしましたか？」

早「あ、いえ。」

神「(今お前の脳内に話しかけている。ボージャックと闘った時と同じように、私たちの力も使え。)」

早「(急にどうしたんですか?)」

神「(今のお前が私たちの力を取り入れれば、凄いことになるぞ!)」

早「(凄いこと?)」

諏「(それはやってからののお楽しみだけどね。)」

早「(わかりました、やってみます!)」

神「(それじゃあー)」

神&諏「(受け取れ!)」

神奈子と諏訪子は神社から、己を光に変え力を送った。その力は黄金の光となって星を離れ、早苗がいる惑星へ飛んでいった。

早「皆さん、あのロボット達は私に任せてください! 神奈子様と諏訪子様の方が届けばあんなの敵では」
ポオオツ!! ドカーンツ!!

魔理沙達の後方から、グングニル、火炎弾、大きな光弾、エネルギー弾がメタルクウラの大群へ飛んでいった!

早「ハアツ☆」

ジリジリッ!!

レミ「待たせたわね。」

レイ「お嬢様!!?」

さらにパワーアップした超サイヤ人GVだ!

バチッ!バチッ!

ア「間に合ったわ。」

咲「アリスさん!」

バチッ!バチッ!

文「皆さん大丈夫ですか?」

早「文さん!」

バチッ!バチッ!

妹「獲物はまだまだ残ってるみたいだな。」

魔「妹紅!」

アリス、文、妹紅は超サイヤ人G2へ進化していた!

レミ「話は聞いてたわ。レイ、しくじるんじゃないわよ。」

レイ「はい!」

魔「もう一回言うのぜ。私とレイと」

早「私も大きい方と闘います!」

魔「なんか秘策があるんだな。わかったのぜ。」

「他はメタルクウラを頼むぜ!」

咲&レミ&ア&妖&妹&文「おう(はい)!!」
バシユッ!!

6人はメタルクウラの大群へ突撃した!

ア「行くわよ！」

くく

セ「貴様は人形を操ることができるのだったな。」

ア「そうよ。」

セ「その人形それぞれ別行動はできるのか？」

ア「できるけど、それは体力を使うわ。」

セ「別行動をしなければいいのだな。」

「ならばベジータの技はどうだろう？」

ア「ベジータ？」

セ「気の扱いに長けた人物だ。これで決まりだ。」

ア「なに勝手に決めてんのよ。」

くく

ア；「クワトロビッグバンアタック」

ア「はあっ！」

人形3体と連携し、一気に4発のビッグバンアタックを放った！

メ「ナニッ！」

ドツカーンッ!!

5体のメタルクウラを消し飛ばした。

ア「こんなものね。」

妹「よっしやんぜ！」

くく

セ「まさか貴様も私に教えを乞うとはな。」

妹「さつさと教えろ。」

セ「それほど孫悟天が欲しいらしいな。」

妹「お、お前には関係ねえ！」

セ「それはさておき、貴様にはバーダックの技がいいだろう。」

妹「そいつはどんな技を使うんだ？」

セ「燃えたぎる闘志を力に変えて戦った人物だ。」

「まさに今の貴様に丁度いい。」

妹「わかった。」

くく

妹；「ライオットジャベリン」

妹「くたばれ！」

ポツ!!

メ「!!」

メタルクウラの頭を消し飛ばした！

妹「にとりから弱点は基本頭って聞いたからな。」

「あの女たらしめ、へへっ。」

悟天達の戦闘を観察したため見つけることができたらしい。

レミ「今の私からすれば、小粒ばかりね。」

レミ；神槍「スピア・ザ・グングニル」

レミ「ほら、かかってきなさい。」

神槍を右手に握りしめ、挑発した。

メ「オオツ！」

レミ「ふん。」

ザグッ！ザグッ！ザグッ！ザグッ！・・・ボンッ！！

複数のメタルクウラを相手にしたが、難なく倒した！

レミ「もつとかかかってきてもいいわよ。」

チップを破壊できていないのだから本当に惜しい。

文「取り敢えずもう一発いきます！」

くく

セ「貴様は本当にスピードだけは長けている。」

文「スピードだけとはなんですかだけとは！」

セ「褒めたつもりだったのだがな。」

文「それで、何を教えるんですか？」

セ「そんな貴様にはピッコロの技がいいだろう。」

文「ぴ、ぴっころ？」

セ「やつはスピードが自慢だった。フリーザと闘った時も、パワーで勝てないとわかった時スピードに頼った程だからな。」

文「よくわかんないですけどやってみます。」

くく

文；「激烈光弾」

文「それっ！！」

ポオッ！！

メ「グオッ！」

ドカーンッ！！

文「弾幕より楽ですね。なのにこのパワー、セルさんの修行は効

果ありのようです！」

一方、魔理沙達は。

早「レイ君、見ててください。私があの大きいロボットを殲め」

レイ「いくぞ！ファイナルだか何だか知らないが倒してやる！」

早「ハアツ☆」

その時だった。何処から来たのか黄金の光が早苗に直撃したのだ
！

早「ツ!!」

ビュオオオオツ!!

魔「なんだ!?!うわっ!」

レイ「うおっ!」

光が収まると同時に、早苗から放たれた突風に吹き飛ばされた!

早「・・・。」

早苗から、何かが消えた。

魔「早苗、お前…。」

レイ「ぎ、早苗さん…!」

早「ほうけてないで行きますよ。」

バシユツ!!

ファイナルクウラへ向かって飛んでいった。

フ「グオオツ!」

早「はっ!」

ドツゴオオンツ!!

ファイナルクウラの人より何倍も大きな拳と、早苗の小さな拳が勢いよくぶつかった!

フ「グオツ!」

早「・・・。」

しかもファイナルクウラが押し負けたのだ!

魔「早苗、どうしたんだ…。」

レイ「さっきの光と何か関係が…?」

早「レイ君、早く攻撃を。」

レイ「は、はい!」

無視し返された。

レイ;「バーニングアタック」

魔;星符「真・ドラゴンメテオ」

レイ「はあっ!!?」

魔「ドラゴンメテオツ!」

ドオツ!!ドオオオツ!!

フ「グアツ!」

後ろへ大きく転倒した。だが、ファイナルクウラの全身と比べると大して破損はしていない。

魔「あれでも壊れないのぜ!」

レイ「なんて硬さだ!」

ア;闇符「真・霧の倫敦人形」

ドドドドツ!!

ア「多い方は私が相手をするわ！他は大きい方をお願い！」
妹「でもお前！」

文「わかりました。死んじやダメですよ！」

レミ「ふん。」

咲「いえ、私も闘います。」

妖「デカイ相手は不利ですし。」

ア「・・・ならお願い。」

咲夜、アリス、妖夢は引き続きメタルクウラ軍団の相手をする事になった。

レミ「レイ、何か策はないの？」

レイ「一点に集中して攻撃し続けるのはどうでしょうか。」

文「どこがいいでしょうか？」

妹「そりゃ勿論頭だ。こいつらがそうならあれもそうだろう。」

しかし、人間でいう心臓の位置が赤く光っている。

レイ「あの赤く光っている所を攻撃してみましよう。もしかしたら弱点かもしれません。」

魔「決まりだぜ！」

決めたのはいいが、ファイナルクウラは攻撃態勢をとっていた。

フ；「ウルトラノヴァ」

フ「グオオツ!!」

レミ「避ける方がいいわ。」

文「急ぎませんと！」

みんな（早苗は動ぜず）が避けようとしたその時！

亜；「ドラゴンブラスター」

斜め上から何かが飛んでき、それだけでなく、

レイ；「ファイナルフラッシュ」

レイ「だぁーっ!!?!!?」

レイの加勢もあり、ファイナルクウラの攻撃はそれ、宇宙の彼方へ飛んでいった。

魔「魔理亜!」

亜「来ちゃったつす!」

バチツ!バチツ!

なんと、魔理亜は超サイヤ人2だ!

レミ「レイ、なんで言うこと聞かなかったの?」

レイ「申し訳ありません。もしお嬢様に何あったらと思うと、つい…」

亜「ママは下がった方がいいつす。」

魔「なんでなのぜ?」

亜「その八卦炉はもう動かないつす。」

見てみると本当に壊れている。

魔「なんで知ってるのぜ?」

亜「未来からのお告げつす! (ドヤア)」

魔「そ、そうか…。つて早苗はどこだ?」

いつの間にか早苗は一人、ファイナルクウラへ向かっていた!

早；秘法「真・九字刺し」
フ「グアツ！」

体長60m近くある巨体を、目にも留まらぬ速さで縛った！
それでは終わらず、

早；「乾神招来 嵐」

早「そこです！」

いつもと違う低い声で叫び、右手から竜巻を放った！従来よりもパワーアップしている。

その神風は、心臓部をそのまま抜き取り貫いた。それは、早苗の意思に従い天高く飛び上がり、その場で止めた。

早「皆さん、今です！あれを狙ってください！」

レミ；「スカーレットアタック」

妹；「リベリオントリガー」

文；「爆力魔波」

レイ；「アトミックブラスト」

4人「はあああつ!!」

ドオオオツ!!

赤く光る心臓部へ見事命中した！

それとともに、早苗が作った竜巻も消えた。

妹「やったぜ！」

文「やりましたね！」

早「・・・。」

レイ「咲夜さん達は？」

亜「おじさんの言う通りっす！まだ休んじやダメっすよ！」

攻撃に参加してないと思ったら、魔理亜はメタルクウラ軍団の相手をしている3人を手伝っていた。

文「急ぎましょう！」

魔「取っ組み合いくらいできるぜ！」

しかし、加勢しようとした瞬間メタルクウラ軍団は急に退却を開始した。

ア「なに!？」

咲「え？」

妖「よくわかりませんが、助かりました。・・・。」

妖夢の刀剣は、所々にヒビが入っていた。

レイ「どういうことだ…?」

ド「見事だ。」

ドクターの声が聞こえる。その声はこの星全域に響いている。

ド「よくぞ乗り越えた。やはり、お前たちでなければ私の研究は完成しないな。」

魔「何処にいるんだ！姿を見せろ！」

ド「近いうちに会える。」

ア「勿体ぶるわね。」

ド「霧雨魔理沙なら知っているだろう、私にとっておきを。」

魔「あいつのことか。」

ド「それを考えたら、どうだ？今のままで勝てるか？」

魔「・・・。」

ド「という訳だ。」

「お前たちに、6日間の猶予を与える。その間、私は最後の仕上げをす

るからな。」

妖「仕上げ？」

文「これは一大スクープですね！」

妹「6日も要らねえ。」

ド「それでは、また会おう。」

聞こえなくなった。

早「やはり、そうでしたか。」

レイ「何か知っているんですか？」

早「仕留め損ないました。あの機械はまだ死んでません。」

レイ「ということは、そいつが6日後にやってくるよ？」

早「あのドクターがどうしてくるかはわかりません。」

妹「出来ることなら、こここの星で今度こそ燃やさねえとな。」

「じゃないと幻想郷の被害はでかくなる。」

ア「6日もくれるなんて、ナメてるのかしら。」

妖「取り敢えず戻りましょう。作戦会議はその後です。」

魔「……。」

咲「魔理沙？」

魔「みんな、次の鬨いは、今までで一番気を入れて欲しいのぜ。」

文「魔理沙さんがそこまで言うなんて珍しいですね。」

レミ「……。」

レイ「まあ、6日も鍛えればきつと大丈夫ですよ。ね？」

早「それフラグってやつですよー！」

神々しい雰囲気がしなくなったと思えば、早苗はいつも通りに戻っていた。

レイ「そういえば早苗さん、さっきの光は何だったんですか？」

早「あの光は神奈子様と諏訪子様の……？ 何でしょう？」

レイ「神様パワーみたいな感じですかね？」

早「そんなところでしようか。」

魔「取り敢えず戻ろうぜ。にいちやんや霊夢も心配だし。」

妖「そうですね。」

妹「早く戻ろう！」

ア「悟天さんと聞いて張り切ってるわね。」

妹「うるせえ！」

文「これはまた記事にする必要がありそうですね。」

妹「焼いて食うぞ。」

文「避難だあつ！」

咲「レイ、貴方は帰ってからお説教です。」

レイ「お、お手柔らかにお願いします…。」

レミ「私も参加しようかしら。」

咲「お言葉ですがお嬢様、こればかりは私一人でしなくてはいけないので、どうかお譲りください。」

レミ「あらあら、仲のいいこと。」

雑談の後、ブレスレットでにとりの研究所へ戻った。

・・・

「にとりの研究所」

魔「にとり、戻ったのぜ！」

に「あ、みんなお帰り。」

咲「あの果実には驚きました。」

に「でしよ。」

妹「今ならお前なんか今すぐにも燃やせるな。」

セ「努力ではない力で威張るのか。何とも哀れだな。」

妹「なんだとお！」

魔「あれ？魔理亜は何処なのぜ？」

セルの後方には、霊夢がいた。

魔「・・・霊夢。」

霊「・・・。」

魔「その、怪我は大丈夫なのか？」

霊「仙豆食べたから。」

魔「そうか。にいちちゃんは？」

霊「・・・。」

悟天は、所々包帯を巻きベッドで横になっていた。

魔「な、なんで仙豆あげないんだ！」

に「それは私がストップかけたんだよね。」

魔「なんでお前が。」

に「ちよつとアクシデントが起きてさ。」

「覚醒の実が、誰かに奪われたんだよね。」

魔「なんだって！」

妹「マジかよ！おいセル、どういうことだ？」

セ「こればかりは私にもわからん。気がつくともなくなっていた。」

「残り2つの内1つがな。」

妖「敵に盗られた可能性が高いですね。」

レイ「敵の手に渡ったとなると、かなりマズイんじゃないですか？」

早「そんなあ！今すぐ取り返しに行きま」

文「あと1つはどうなつたんですか？」

早「ハアツ☆」

に「霊夢さんにあげたよ。」

ア「じゃあ悟天さんにあげさせなかったのって。」

に「そう。聞いてたけど6日しか猶予をくれないらしいよね？その

期間で悟天君を完治させることはできないの。」

「そして仙豆も8つしかないって霊夢さんが言ってたから、レイ君を

除いて惑星に向かった8人でちよつどなんだよね。」

咲「霊夢の分が足りないわ。」

霊「それはいいの。私の責任だから。」

文「でも霊夢さん、もし力がなくなったら」

霊「私もあの果実を食べたのよ。簡単には負けないわ。」

魔「あの実を食べたんならまだ安心だぜ。」

レミ「・・・。」

セ「（敵が来たならわかる。なのに私ですら気づかなかった。）」

「（奴しか考えられないな。しかし、今は言わない方がいい。）」

に「そういう訳だからさ、各々味のある6日間を過ごしてね。」

魔「わかったのぜ！」

咲「承知しました。」

レミ「そうね。」

ア「勿論よ。」

妖「わかりました。」

妹「おうよ。」

早「わか」

文「わかりました〜。」

早「ハアツ☆」

レイ「承知しました！」

ベッドで寝ている悟天と見守る霊夢を残し、帰っていった。

その帰り道、咲夜とレイが2人きりになった時だった。

バチンツ!!

レイ「いてっ！」

突然ビンタされた！

咲「なんであんな危険なことをしたの？」

レイ「すみません：気づいたら体が動いてたんです。」

咲「情報通とは言え、悟天さんと霊夢に着いていくこと自体反対だったのよ！」

レイ「い、以後気をつけます…」

咲「全く…、貴方が居なくなったら悲しむ人がいることを忘れないことね。」

レイ「は、はい！」

•••

オ「ドクターはお優しいですねエ。」

ド「何がだ？」

オ「人生最期の時間を6日もお与えになるなんて。」

ド「戯れ、だ。」

「アレももうすぐ完成する頃だ。序でにプレゼントも作るとしようか。」

「オンリョウキよ、次は殺して構わないぞ。」

オ「腕がなりますねエ！」

第33話へ、続く…。

第33話 「最期の6日間」

くあらすじく

力の膨張を続けるメタルクウラ軍団を前に敗れた悟天、霊夢、レイ。そこへ、覚醒の実でパワーアップした魔理沙、咲夜、妖夢、早苗が駆けつけた。

悟天と霊夢を逃がし、メタルクウラ軍団との闘いの最中、例のドクターが自身の作品「ファイナルクウラ」を起動させ、さらにメタルクウラを放出した。

魔理沙やレイの攻撃も大して効かないファイナルクウラ。だが、神奈子と諏訪子の光を完全制御した早苗は、それを圧倒したのだった！レミリア、アリス、妹紅、文、魔理亜も参戦し、ファイナルクウラとメタルクウラ軍団をなんとか退けることに成功した幻想少女達。そんな彼女らに、ドクターは6日間の猶予を与えろと言いつつ放った。

ドクターには、どんな意図があるのだろうか。

幻想天霊伝説 第33話

―1日目―

「にとりの研究所」

セ「朝早くから熱心だな。」

に「まあね。」

セ「それは魂魄妖夢の刀剣か。」

に「そ。硬度を上げてくれて頼まれてさ。」

セ「鍛冶屋に頼めばいいものを。」

コンコン

に「誰？」

霊「私よ。」

に「開いてるよ。」

ガチャツ

霊「悟天はどこかしら？」

に「永遠亭だけど？」

霊「なっ！なんで言ってくれなかったのよ！」

に「来るかなあと思つてき。」

霊「つ、とんだ無駄足だったわ。」

バシユツ!!

セ「まさかお前が試すとはな。」

に「セルのがうつつたせいだね。」

セ「ふん。」

魔「よおにとり!ドア開いてたから入ったぜ!」

に「あ、おはよう。修行しに来たんだよね?」

魔「勿論だぜ!あのドクターをギャフンと言わせてやるぜ!」

に「シミュレーターはもう動くようにしてあるよ。」

魔「ありがとうなのぜ!」

に「・・月の人たちが来るのは明日かなあ。」

刀剣を見ながら言った。

・
・
・

「守矢神社」

早「神奈子様、諏訪子様、起きてください。」

神「うくん。」

諏「もう少し寝かせてよ。」

早「もう9時ですよ!」

神「あの変身は私たちにも負担が掛かるんだぞ。」

諏「そうそう。昨日は特に疲れたよ。」

早「ですけど…。」

神「ただ、早苗が遂にあの境地に達したわけだ。」

早「え?」

諏「早苗はたぶん幻想郷で一番強いよ。博麗の巫女は今どれくらいかわかんないけど。」

早「私が、霊夢さんを…!」

諏「たぶんだけどね。」

早「……。」

「やったー！！」

妖怪の山からとんでもなく大きな声が響き渡った。

・・・

「永遠亭」

霊「悟天！」

永「あら、霊夢じゃない。来るとは思ってたけど。」

悟天は身体の所々に包帯を巻いて、横になっている。目は覚まさない。
い。

霊「1回でも起きた？」

永「いいえ。」

霊「治るの？」

永「治るわ、1ヶ月もすればね。」

霊「やっぱり…。」

悟天の手を握り、話しかける。

霊「ほんとにごめんね。私が、焦ったせいで。」

永「……。」

霊「ゆつくりしていつてね。今度は私、いや、悟天以外のみんな
必ず勝つから。」

「それに、あんたには、言わなきゃいけないことがあるから。」

・・・

12日目

「にとりの研究所」

に「あ、ほんとに研究所の中にホールが出てきた。」

ホールとは、ワープするための入り口のようなものだ。

向こうに何があるかは見えず、代わりに異次元空間のような模様が
見える。

依「お久しぶりです、にとり様。」

に「こちらこそ、わざわざありがとうございます。」

にとりがらしくない敬語を使っている。

依「手早く済ませましょう、殺気を感じますから。」

に「セル。」

セ「・・・。」

に「依姫様が迷惑してるでしょ。」

依「そんなに畏まらなくても。」

に「いやいや、大事な取引ですから。」

依「本題に入ります。私たちが用意する品はこれでよろしいですね
？」

依姫の部下がケースを持ってき蓋を開けると、何やらキラキラした
鉱物のようなものが詰め込まれているのがわかった。

に「間違いありません。えっと、こちらからは…」

にとりが出したものは、いつも悟天たちの戦鬪を撮影するために
使っている無人カメラだ。

依「確認しました。しかし、何故私たちの星のムーンクリスタルな
ど交換条件にしたのですか？」

に「ちよつと頼まれてまして。新しく刀剣を作るんです。」
依「この鉱石で剣を作っても、重いと思いますが…。」
に「そこは私なんとかしますよ。」
依「貴方らしいですね。」

「では、私たちはこの辺で失礼します。」

依姫とその部下たちは、ホールの中へ消えていった。

に「へえ、これがムーンクリスタルかあ。」

セ「ああは言っていたが、高価なものなのだろう？」

に「そうそう。これを使って新しい白楼剣と楼観剣を作るんだよ。」

セ「私は引き続き見張りをしましょう。」

に「ありがとうね。」

セ「ふん。」

・・・

「文々。新聞本社」

文「あやや、霊夢さんがここに来るなんて珍しいですね。」

霊「あんたに頼みがあったの。いいかしら？」

文「おかずになれとかは無理ですけど。」

霊「ほんとにそうするわよ。」

文「冗談ですって！」

霊「この手紙を送ってほしいの、今日中に。」

文「お安い御用です！」

バシユツ!!

すぐ出掛けた。

霊「さて、悟天の看病でもしようかしら。」

.....

―3日目―

「バトルシミュレーター」

妹「おらあつー!」

ドゴオツ!!

霊「!!」

バタツ

妹「ふん。」

ス・・

バトルシミュレーターの仮想世界の霊夢を倒した!

に「おつかれー!今出すね。」

「にとりの研究所」

に「妹紅もすつごく強くなったんじゃない?」

妹「まあな。あの実を食う前の霊夢なんてもう敵じゃねえな。」

「今の霊夢とも闘いところだが、データがないんだっけ?」

に「霊夢さんは実を食べてからまだ1回も闘ってないからね。」

妹「なら仕方ないんだけどな。」

「それに、そんなことはしてられないしな。」

に「? 他にも理由があるの?」

妹「ああ：嫌な予感がするんだ。みんなこんなに強くなったのに、な。」

に「その予感、外れるといいね。」

妹「そうだな。」

.....

―4日目―

「博麗神社」

霊 「みんな来てくれてありがと。手紙は届いたみたいね。」

魔 「お安い御用だぜ！」

咲 「霊夢が私たちを呼ぶということは、重要な話なのでしょう？」

霊 「そうよ。」

妖 「私とこのヤクザと一緒にした訳は理解できませんけど。」

咲 「あらあら、半死体のくせによく喋るわね。」

早 「ちよ、やめてくださいよ！」

霊 「今はやめてほしいの。いい？」

咲 「わかったわ。」

妖 「わかりました…。」

霊 「本題に入るわよ。」

「2日後の突入のことなんだけど、咲夜、妖夢、あんたらは残ってもらわよ。」

妖 「ど、どうしてですか!？」

咲 「貴方のせいでしょう？」

妖 「うっ。」

霊 「その通りよ。白楼剣と楼観剣がまだできてないんでしょ？」

妖 「にとりさんから連絡はまだありません。」

魔 「それは私のせいでもあるぜ。私もとりに八卦炉の修理を頼んでるからな。」

霊 「そういうことよ。咲夜は序だよ。」

妖 「何故ですか？」

霊 「あんたらは何だかんだ言って息ぴったりだからよ。」

咲&妖 「…。」

霊 「そこで、よ。2人には私と魔理沙でできなかつたアレを覚えてもらわよ。」

魔 「アレって、まさかアレか？」

妖 「嫌な予感がします。」

霊 「師匠から教わった、フュージョンよ。」

咲 「ネーミングからして…。」

妖「合体ですか？」

魔「融合だぜ！」

咲「不安しかないわ。」

妖「どうやって融合するんですか？」

霊「それはね…」

フュージョンのやり方を教えた。

咲「無謀ね。霊夢や魔理沙でできないのに…。」

妖「あなただから無理なんですよ。」

咲「剣ができる前に腕を切り落とそうかしら？」

妖「素手の相手にナイフを使いますか。卑怯者ですね。」

霊「あんたら2人とも悟天相手に武器使ったでしょ。」

咲&妖「あつ。」

早「ぷぷぷ。」

魔「そんなに気が合うのに、なんで仲悪いのぜ？」

咲&妖「…。」

霊「おさらいするわよ。6日目に出発するのは、」

「私、魔理沙、レミリア、アリス、妹紅、文、早苗、レイよ。」

魔「魔理亜はどうするのぜ？」

霊「行方不明だからカウントしないわ。現れたら行かせればいいし。」

魔「わかったのぜ。」

早「それでは、ドクターとかを倒して帰ってきたら何をするのかここで宣言しちやいましょう！」

霊「何よ急に。」

魔「やるのぜ！」

霊「ちよつと魔理沙！」

文「あやや、面白そうですね。」

縁側の方から急に現れた。

霊「いつからいたのよ。」

文「最初からですね。私だけじゃないですよ。」

霊「は？」

ア「作戦会議ですつて？水くさいじゃない。なんで呼ばないのかしら？」

レミ「咲夜が博麗神社に行くのはわかってたわ。」

妹「そういうわけだ。面白そうだし参加するぞ。」

咲「お嬢様、レイは居ないのですか？」

レミ「置いてきたわ。こういうのつて、男は呼ばない方がいいのでしよう？」

咲「まあ、そうですね。」

早「それじゃあ言い出しっぺの私から」

魔「私は、いい男でも見つけてやるのぜ！」

早「ハアツ☆」

霊「流石乙女ね。」

魔「うるさい！」

魔理沙は赤面した。

ア「私は幻想郷が平和ならそれでいいわ。」

「妹紅もそうでしょう？」

妹「え？…実は…」

文「あやや？顔が赤いですよ。」

妹「焦がすぞ。」

文「あーう。」

妹「私は、そ、その、あの女たらしと、付き合う!!」

一同「!!」

文「こ、これは記事にしませんと！」

ボツ!!

文「あちやちやちやつ！」

妹紅は文に火を放った。

妹「そういうわけだ。霊夢、覚悟しやがれ。」

霊「何言ってるのよ。私が悟天に気があるわけないじゃない。」

妹「そうか。毎日介護お疲れ様だな。」

霊「な、なんで知ってるのよ!」

妹「聞いたからな。」

霊「誰からよ?」

文「(ニヤニヤ)」

早「次は私です! 私は」

レミ「私はスカーレット家の領地を増やすことね。」

早「ハアツ☆」

霊「あんたも何言ってるのよ。」

レミ「此方だって主人である私を含めて、3人も協力するのよ。」

「それなりの対価は支払われて当然よね?」

霊「・・・考えとくわ。」

早「そろそろいいですか?」

霊「いいわよ。」

早「私ですわね、またこうしてみんなで集まることです!」

「一人も欠けずに、です…!」

魔「早苗はやっぱり可愛いやつだな!」

ギユツ!

早「ぐ!ぐるじいですつ!」

魔理沙は早苗にヘッドロックした。

妖「確かにそうですね。」

妹「? 他にあったのか?」

妖「(剣術を極める)が最初に出てきましたが、皆さんの宣言を聞いていたらどうでもよくなってしまうですね。」

妹「どうしようもないくらいのお人好しの集まりだからな。」

霊「次は咲夜よ。」

咲「私は別に…。」

レミ「言いなさい。命令よ。」

咲「承知しました。」

「お嬢様以外に、命をかけてでも愛する者を、見つけることです。」

一同「おお！」

咲「勿論紅魔館のみんなを愛してますけど、こう、なんて言えбайいのでしょうか…。」

魔「わかるぜ、恋したいんだろ？」

咲「こ、恋？」

魔「そうだぜ！恋はするべきだぜ！」

咲「うう…。」

咲夜は赤面した。

文「私は特にはないですね。」

霊「駄目よ。」

文「は、はい。」

「今まで通り、博麗の巫女を見守り続けることですね。」

妹「ババアだな。」

ア「B B Aね。」

文「あーう。」

霊「今日はこれでお開きよ。」

魔「待つのぜ！霊夢はまだ言っていないのぜ！」

咲「それこそ駄目よ。」

早「さては恥ずかしいんですね？」

霊「早苗、後で奢りなさいよ。」

早「なんですかー！」

霊「そうね、私は、」

「今度こそ、誰かと一緒にいることかしらね。」

魔&文「……。」

こうして、作戦会議は終了した。

.....

―5日目―

〔紅魔館〕

その晩、紅魔館では豪勢なディナータイムが始まろうとしていた。たくさんの西洋料理が、長いテーブルを埋め尽くしている。

レミ「レイ、準備は終わったかしら？」

レイ「はい、バツチリです！」

美「わ、私も食べていいんですね!？」

レミ「今日は特別よ。前祝いってところかしら。」

美「やったー！」

小「すごく豪華なディナーですね、パチュリー様！」

パ「そうね。」

小「あれ？嬉しくないんですか？」

パ「なんでもないわ。」

レイ「さあ、パーっとやりましょうよ！パーっと！」

フ「いただきまーす！」

フランは行儀悪く料理にがつついた。

美「あ！ずるいですよ！」

美鈴も行儀悪い。

レイ「ははっ、そんなに急がなくても料理は逃げませんよ。」

美「だってこんな豪華なディナーは初めてですよ！今にも逃げてし

まいそうです…!」

レイ「確かに言われてみればそんな気も…」

レミ「ほら、男ならもつと食べなさい。口に合わないなんて許さな
いわよ。」

レイ「ではお言葉に甘えて!いただきます!」

レミ「ふふふ。」

レミリアはワインを片手に歩き回っている。あまり料理を口にし
ていないようだが。

咲「あら、美鈴よりマナーがなってるわね。今更だけど。」

レイ「そ、そうですか?えへへ。」

フ「あつ!あつちにチーズケーキがある!」

美「なぬっ!妹様、デザートは早いですよ!」

フ「先に食べちゃおつと。」

美「いけません!」

レイ「あ、僕も食べたいです!」

美「…じゃあ私も」

咲「食べかけで別の席へ行くなんて、紅魔館の住人として再教育が
必要かしら?」

美「ひい!」

美鈴の喉元にナイフを突きつけた。

美「レイはいいとして妹様は食べかけですよ!」

咲「妹様はいいの。わかるでしょう?」

美「しよぼん。」

パ「レミィ。」

レミ「何かしら?」

パ「こんなに料理を出させるなんて、前祝いにしては多すぎるわ。」

レミ「ただの好奇心よ。」

パ「明日か明後日、よくないことが起きるわね？」

レミ「・・・考えすぎよ。」

パ「嘘よ。だってレミイ、喋ってない時の顔が寂しそうなもの。」

レミ「・・・。」

パ「わかつてはいたけども。」

レミ「・・・食べましょう。」

パ「・・・。」

レミ「あーっ！」

フランがデザートのも、あるものを平らげた。何かはお察しだ。

フ「こういうのは早い者勝ちよ、お姉様。」

勝ち誇った表情を浮かべている。

レミ「もう許さないわ。」

レイ「お、お嬢様、おお落ち着いてください...」

レミ「止めないで。プリンは永遠に私のものよ！」

ドオオオツ!!

レミ&フ「!!」

パ「せっかくの料理が台無しよ。大人しくして。」

魔法で球体に変化させた水流を、2人に放った。

レミ「こんなもの、吹き飛ばせば終わりよ。」

パ「そうしたら水浸しになるわ、料理が。」

レミ「ぐぬぬ...」

フ「ちっ！」

レイ「流石パチュリー様、明敏だなあ。」

小「お前がパチュリー様を褒めてんじやねえ！」

うるさいし訳がわからない。

レイ「何かすみません…」

パ「さ、気をとりなおして食べるわよ。」

一同「はい！」

この後、パチュリーは盛大に腹を壊した。

・・・

―6日目―

〔博麗神社〕

7時頃、メンバーは集まった。

霊「みんなよく起きたわね。」

魔「眠いのぜ…。」

ア「準備万端よ。」

妹「…ああ。」

文「この時間に起きるなんて日常茶飯事ですからね。」

早「大丈夫です！」

レミ「ほら、しっかりしなさい。」

レイ「こんな朝早くから何をするんですか？」

レミ「咲夜は本当に黙ってくれていたのね。」

「今日は、このメンバーであの惑星へ出発するのよ。」

レイ「今からですか☒」

レミ「そうよ。7日経ってしまうと相手は何をするかわからないから、先手を打つのよ。」

レイ「なるほど！そういう事ですか！」

霊「ブレスレットも持つてみたいね。」

「あんた達に配るものがあるわよ。」

袋から例のアイテムを取り出した。

レミ「私はお豆好きじゃないのだけれど。」

レイ「これは…仙豆ですか。」

霊「そうよ。体力がなくなったり、大怪我した時に食べてちょうだい。」

「妖夢が来てないからその分は私が貰うわ。」

結局霊夢も仙豆を持つことになった。

魔「使い方はよくわかってるのぜ。」

霊「ただし、能力の方は回復しないわ。レイ、覚えておきなさい。」

レイ「わかりました。」

霊「あと、その、前は、ごめん。」

レイ「いえ、こちらこそすみませんでした…。」

ア「すつきりしたところだし、行きましようか。」

霊「そうね。」

???「待ってー!!」

魔「? お前は。」

チ「あたいも行くっ！兄貴の仇を討つんだ！」

文「流石に難しいのでは？」

魔「同感だぜ。」

霊「別にいいわよ、ブレスレットもあるみたいだし。」

レミ「本気？」

霊「妖精なら無理して守らなくても死なないわよ。」

レミ「そういうことね。」

チ「あたい、頑張るから！」

霊「ふん。」

「みんな、行くわよー！」

一同「おう！」

ブレスレットのスイッチを押し、転送された。

・・・

「惑星??？」

霊「着いたわね。・・あれ？」

仲間が見当たらない。

気を探ってみたところ、散らばっているようだ。

ド「ようこそ。」

その声は星中に響き渡った。

ド「来ることはわかっていた。持て成すのが科学者であろう？」
「故に、5日間で作品を用意した。存分に堪能するがいい。」

声は止んだ。

ゴオオツ!!

霊「早速ね。・・え？」

惑星の地中から飛び出した、ドクターの作品を見て絶句した。

・・・

魔「みんな、どこ行ったんだ？」

「それに作品って」

???; 恋符「マスタースパーク」

ドオオツ!!

魔「うわっ！」

間「髪で躲した。」

魔「お、お前は…！」

•
•
•

早「そんな、どうやって…。」

•
•
•

ア「…悪趣味ね。」

文「あややや、これはなんとも…。」

現れたそれに言った。

•
•
•

妹「あのドクター、絶対変態だな。」

チ「変態ってなに？」

妹「こんなのを作るやつのことだ。」

•
•
•

レミ「ちっ！」

•
•
•

レイ「お、お嬢様☒」

そう、霊夢、魔理沙、レミリア、アリス、妹紅、文、早苗、レイと
姿そっくりの人造人間が現れたのだ！

それぞれ、本人の前に立ちほだかったが、レミリアの相手はレイ、レ
イの相手はレミリアだ。

チルノの人造人間はないようだ。

ド「さあ、楽しませてくれ。霊夢キラーたちよ！」

第34話へ、続く!!

第34話 「VS自分」

くあらすじく

ドクターから6日間の猶予を与えられ、それぞれの日々を過ごし、遂にその時が来た。

最初に向かったメンバーは、霊夢、魔理沙、チルノ、レミリア、アリス、妹紅、文、早苗、レイだ。

皆ブレスレットで転送されたのだが、何故かメンバーは散らばってしまった。

仕組んでいたかのように、転送された場所からドクターの作品が現れた。なんとそれは、霊夢達にそっくりな人造人間ではないか！

勝てるか霊夢達!?

幻想天霊伝説 第34話

「惑星?? 霊夢転送地」

霊「何よあんた。」

霊夢キラー「・・・。」

霊キ；霊気「博麗かめはめ波」

霊「なっ、いきなり!」

ドンツ!!

霊「っ!はあああっ!!」

ヴンツ!!バチツ!バチツ!

突然放たれたかめはめ波を躲し、超サイヤ人G2に変身した!

霊「いいわ、あんたで試すわ。今の私の力を。」

・・・

「にとりの研究所」

に「あれ?どうなってるの?」

セ「どうした。」

に「ブレスレットにはみんな同じ場所に転送されるようにプログラミングしたはずなのに、みんな散らばってる。」

セ「ほぼ間違いないく、ドクターの仕業だろう。」

に「なんで？」

セ「惑星に入る直前、周波数をいじったのだろう。ホームでもあるからな。」

に「なんで、こっちの動きがバレたのかな？」

セ「何者かが聞いていた可能性がある。そういう意味でも、博麗霊夢は総戦力を惑星へ連れて行かなかったのだろうな。」

に「流星は霊夢さんだ。」

「あ、カメラも転送しよつと。」

スパイカメラを15台転送した。

・・・

「惑星??? 魔理沙転送地」

魔「私の偽物か。上等だぜ！」

ヴンツ!!バチツ!!バチツ!!

魔「ふんっ！」

魔理沙キラー「フンツ！」

魔；恋符「マスタースパーク」

魔キ；恋符「マスタースパーク」

魔「マスタースパークっ！」

魔キ「マスタースパーク。」

ドオオオツ!!ゴオツ!!

両者のマスタースパークは激しくぶつかり合った!

魔「ちっ!やるな!」

魔キ「グツ!」

魔「それなら！」

打ち合いを放棄し、気弾幕（気を込めた弾幕）を放とうとすると、

魔；魔符「真・スターダストレヴアリエ」

魔キ；魔符「真・スターダストレヴアリエ」

魔「なにつっ！」

なんと、同じタイミングで打ち合いを放棄し、同じ気弾幕を放ったのだ！

ドドドドツ!!

魔「うわっ！」

魔キ「ウワツ！」

いくつかの気弾幕がお互いに命中した。

魔「どうすれば…。あんまり、仙豆は使いたくないのぜ。」

魔キ「・・・。」

・・・

「惑星???」 早苗転送地」

早「はあああつっ！」

ヴンツ!!バチツ!!バチツ!!

早苗キラー「ハッ！」

早「はっ！」

ドゴツ!!・・・ゴオオツ!!

早「うわあつっ！」

両者の拳がぶつかったが、早苗キラーの圧倒的なパワーに押し負け

てしまった！

早「いったあい…。これならどうですか！」

早；「バスターキャノン」

早キ；「バスターキャノン」

早「えっ！同じ技ですか!？」

ドオツ!!ゴオツ!!

一瞬、互角に見えたのだが、

バチンツ!!ドカーンツ!!

早「きやあつ！」

早苗の攻撃は掻き消され、そのまま早苗に直撃した！

早キ「ソノテイドデスカ。」

早「なんで、こんなに力の差が…。」

ド「答えてほしいか？」

早「ど、どこから言ってるんですか！」

ド「それはな、この人造人間達はお前たちが今までで一番パワーが強い状態で作られているからだ。」

早「ハアツ☆」

ド「どうやらこの前の力は出せんようだな。」

「ん」で散れ。」

早「(神奈子様と諏訪子様と連絡さえ取れたら、なんとかなるのに…)」

...

「惑星???」 アリス&文転送地」

ア「変な気分ね。まるで鏡を見ながら闘っているみたい。」

文「言ってる場合じゃないですよー！」

アリスキラー；「ギャリック砲」

文キラー；「魔光砲」

ヴォッツ!!ボオッツ!!

ア「くっ！」

文「うわつと！」

ヴンツ!!バチツ!バチツ!

避けたと同時に変身した。

文「それっ！」

文キ「アヤヤヤ。」

文「! そんなっ！」

文の高速突撃が、躲かれてしまった!

文キ「エイツ！」

ドゴツ!!

文「いだっ！」

キーンツ!!

カウンターを食らった文が飛ばされた。

文キ「アヤヤヤ！」

バシユツ!!

殴り飛ばした文を文キラーが物凄いスピードで追いかける!

ア「文さん！」

アキ「ドコヲミテイルノ？」

アキ；蒼符「真・博愛の仏蘭西人形」

ア「そつちがその気なら！」
ア；紅符「真・紅毛の和蘭人形」

アリスキラーは6体の人形を呼び出したが、アリスは7体の人形を呼び出した。

ア「私相手に先手打ちとはナメられたものね！」

アキ「ソレガドウシタノカシラ？」

アキ；蒼符「真・博愛の仏蘭西人形」

なんとさらに6体の人形を呼び出した！

ア「そんな！逃げる時にしかない連続弾幕をこんなところで！」
ドドドドツ！！

数で押し負けダメージを受けた。

・・・

「惑星??? 妹紅&チルノ転送地」

妹「よっしや行くか！」

ヴンツ！！バチツ！バチツ！

チ「おお！カッコいい！」

妹紅キラー「シネ。」

妹キ；「フェニックスダイナマイト」

ボウツ！！

妹「なにつ！」

チ「あの技って！」

妹「チルノ！これを持って私から離れろ！」

チ「う、うん！」

チルノは仙豆を受け取った。

妹「わかってるぞ。その技は、強い衝撃を与えれば爆発する！」

妹キ「ウオオオッ！」

妹「そこだっ！」

ゲシツ!!ドカーンツ!!

獄炎を纏い突撃してきた妹紅キラーに、ローキックをかまし爆発させた!

妹紅キラーは粉々に砕け散り、妹紅は上半身を残し他は消し飛んだ。

妹「へへ、やったぞ…。」

チ「姉貴!大丈夫？」

妹「なになに、すぐ、再生させるさ。」

妹紅キラーは呆気なく死んだ。そう思われていたが…

チ「あつ、あれ!」

妹「な、まさか…!」

爆発した時の煙の中から、妹紅キラーが歩いてきたではないか!

妹「不老不死か?じゃあ他のやつもそれぞれの能力を持っていることになる…!」

「チルノ!仙豆持って逃げろ!」

チ「で、でも。」

妹キ「モエロ。」

妹「早く行けっ!」

チ「ひっ!」

チルノはすぐに離れた。

妹「へっ、上半身だけだからって闘えないと思ったか？偽物のくせにそんなことも」

ドゴツ!!

妹「いつて！人の話は最後まで聞け！」

妹紅と妹紅キラーの本格的な戦闘が始まった。上半身だけでも舞空術で浮かして闘っている。

が、脚が無い妹紅が不利であることは誰でもわかることであった。

チ「ど、どうしよう…。」

・・・

「惑星??? レミリア転送地」

レミ「レイの偽物を出したところで、私に勝てると思っているのかしら、あの科学者。」

レイキラー「オジョウサマ、オシニクダサイ。」

レイキ；「魔貫光殺砲」

レミ「ふん。」

ヴンツ!!ジリジリツ!!

ヒュンツ!!

超サイヤ人GVに変身し、物凄いスピードで回避し、鋭利な爪をレイキラーの首に突きつけた！

レミ「こんなものね。・・・？」

ふと下へ目をやると、気を込めたレイキラーの左手がこちらに向いていた。

レミ「なるほど、なんとなくわかるのね。」
バツ!!

両者は距離をとった。

しかし、レイキラーは動きを止めない。

レイキ「ビッグ・バン・アタック」

レミ「そちらがその気なら!」

レミ「スカーレットアタック」

レイキ「ビッグ・バン・アタックッ!」

レミ「スカーレットアタックッ!」

ドオツ!!ゴオツ!!

レイキ「グッ!」

レミ「くっ!互角ね…!」

•••

「惑星??? レイ転送地」

レミリアキラー「ッ!!」

レイ「うわっ!」

何も言わずに襲いかかってきた!最初から高い戦闘力で掛かってくる。

レイ「お前、お嬢様じゃないな!」

レミキ「フフ、ソレガドウカシタカシラ?」

爪を突き立てる!

レイ「じゃあ倒すまでだ!」

ボウツ!!

レイ；「残像拳」

レミキ「!!」

能力を発動し、持ち前の技で躲した。

しかし妙だ。レミリアの能力があれば残像拳など意味がなくなるはずだ。

レイ「どうやら本物と全て同じという訳ではなさそうだな。」

ボツ!!

レミキ「フフ。」

レイは気功波で攻撃した。某漫画を熟読したレイの気功波、初めて闘うなら避けることは不可能である筈のレイの気功波が、わかっていたかのように躲されてしまったのだ!

レイ「なにっ☒」

レミキ「コンドハコツチノバンヨ。」

レミキ；紅符「真・スカーレットシユート」

ドオツ!!

至近距離だ!

レイ「ツ!!」

レイ；「爆魔障壁」

瞬時に防御した。が!

ガシツ!!

レイ「うぐ…!」

レミ「アナタノヤルコトナンテ、テニトルヨウニワカルワ。」

解いた瞬間を狙われ首を掴まれてしまった！

ド「よくやったぞ、レミアアキラよ。」

どうなっているのかわからないが、声が星から聞こえる。

レイ「卑怯だぞ…自分で戦え…！」

ド「そうだな。そのうち、な。」

「さあレミアアキラ、レイ・ブラッドを殺せ！」

レイ絶体絶命のピンチ！

・・・

「惑星??? 霊夢転送地」

霊キ「ナゼ…コレホドノサガ…」

霊「…あんたが弱いだけよ。」

霊夢は圧倒していた。

ド「ほう、博麗霊夢、この6日間で何かしらの方法で力をつけたな？」

霊「そんなことより、あんたどこにいるのよ。さつさとあんたを倒して帰りたいんだけど。」

ド「そう慌てるな。そんなにあの男が気に入ったか？」

霊「あの男？」

ド「あいつだ。…オンリヨウキよ、作品を見せてくれ。」

「そ、そうだ、孫悟天だ。」

霊「…！」

ド「おやおや？焦りの表情が伺えるが、どうかしたのかね？」

霊「何もないわ。」

ド「まさか、孫悟天を忘れていたわけではないな？」

霊「そんなわけないじゃない！」

ド「そう邪険にするな。私も一瞬忘れてしまって驚いている。」

霊「（私が悟天を忘れる？そんなわけないじゃない！どうなってるのよ……!）」

ド「というわけで、貴様には私の作品をもう一体プレゼントだ！」
ドカーンッ!!

地面から何かが現れた。

霊「…、卑怯者。」

ド「霊夢キラーよ、一度私の元へ戻れ。改良してやる。」

「その間は頼むぞ、悟天キラーよ。」

悟天キラー「ワカッタヨ。」

霊「ふん、かかって来なさいよ！」

・・・

「惑星??? 魔理沙転送地」

魔「あいつは私の真似をしてきやがる。」

「じゃあ、私がいつもならないことをすれば、或いは…。」

「一か八かだぜ…。」

魔；光符「真・アースライトレイ」

ドオツ!!ドオツ!!

魔キ；光符「真・アースライトレイ」

ドオツ!!ドオツ!!

魔「やっぱり真似するか。おっとー！」
ビツ!!

真・アースライトレイ、それは複数の気弾幕を払うように2回繰り返し

出し更に相手の背後からも光線を放ち攻撃する技だ。

魔「危ねえ！忘れてたぜ。向こうも避けるのに必死だろうし、こいつもくれてやるぜ！」

魔；恋符「真・ノンディレクショナルレーザー」

魔キ；恋符「真・ノンディレクショナルレーザー」

ビビッ!!ビビッ!!

ドカーンツ!!

魔「ぐっ！」

魔理沙はあえてガードした。

しかし、これは狙い通りであった！

魔「今だぜ!!」

魔；「サングレイザー」

魔「うおおお!!」

魔キ「ナニ!!」

ズガガガドカーンツ!!

レーザーを避け隙を作ってしまった魔理沙キラーへ突撃し、一気に決着をつけた！

魔「や、やったぜ。私はケチだからな。避けると思ったぜ。」

ス・・

魔「ふあく、早起きしたし、かなりエネルギー使ったし、もうクタクタだぜ…。」

「でも仙豆を食うわけにもいかないし、ちよつと寝るか。」

惑星の岩陰に隠れ、周りに魔法陣のトラップを仕掛けて横になった。

魔「これで誰かが近づけば、すぐ起きれるぜ。」
「ふあく、おやすみだぜ…。」

勝ったからって寝るなよ。

・・・

「惑星??? 早苗転送地」

早「うわっ！」

ドーンツ!!

早苗キラーに吹っ飛ばされ、岩山に激突した。

早キ「モウコロシテイイワヨネ？」

早「はは、みんなで集まるって言い出した私が、一番最初にやられるなんて…。」

早キ「フツフツフ。」

右手に風を纏い、早苗に向けて振り上げた。

早「・・・でも、やっぱり、嫌だ。」

早キ「？ フン。」

ドゴツ!!

早苗キラーは拳を振り下ろした！しかし、その拳は、早苗の右手で受け止められてしまった！

早キ「ソンナ！」

早「生きて、みんなで集まるって…。」

「誓ったんです！」

カツ!!ビュオオオオツ!!

早キ「グアツ！」

瞬き、突風を起こし、早苗キラーを吹き飛ばした！

神「早苗、随分探したぞ！」

諏「やつと見つけた。ほら、今から私たちが乗り移るから、つてあれ？」

早「神奈子様、諏訪子様、いらしてたんですね。」

神「お前、その姿は…！」

早「お2人のお力は、消えてなかったんです。私が上手く扱えていなかっただけでした。」

諏「ふふ、流石私のしそ…、自慢の巫女だよ。」

早「ありがとうございます。ここは危険ですので、お2人は逃げてください。」

神「一人でいけるか？」

早「はい、もう大丈夫です。」

神「・・成長したな。」

光のような姿をした神奈子と諏訪子は、幻想郷へ向けて飛んで行った。

早キ「ナニヨ、ソレ！」

早「ただの現人神です。」

早キ「ハツ！」

早「！」

バシツ!!ガツンツ!!

バキツ!ゴリツ!グリツ!!ドゴツ!

腕を払い即座にアツパーをかました!

それでも余韻に浸ることなくラツシュした。

ドゴオツ!!

早;「神縛り」

ググツ!!

早キ「ウウツ!」

諏訪子が使うリングを操り、早苗キラを縛った!

早「とどめです!」

早;「ゴツドバスター」

低い声で言い、目を閉じて、自分の目の前に気を集中させた。

早キ「マケマセン!」

早キ;「フィニッシュバスター」

早「はっ!!」

早キ「ハアツ!!」

ドオツ!!ドオツ!!

バチンツ!!

早「!」

ドカーンツ!!

決着がついた。

・・・

「にとりの研究所」

に「すごいよ早苗!」

セ「これが、ボージャックを倒した時の東風谷早苗の姿か。」

に「いいや、あの時よりももっと強くなってる!」

セ「なんだと?」

に「覚醒の実のおかげでもあるけど、すっごく強くなってるよ。」
「これで、早苗から依頼されてたサイヤパワーの謎が解明されたよ。」
セ「ほう。」

に「サイヤパワーは強くなるための手段だったんだよ。宿すこと自体は進化じゃなかったんだ。」

「サイヤパワーを宿し、それを完全に取り込み自分のものにする。それができて初めて真の力を手に入れることができるんだよ。」

「あの人の弟子達もそういうことだけど、早苗は何か違うんだよ。」

セ「あの人は誰だ？」

に「え？ほら・・・あのんだよ。えっと・・・」

セ「・・・悪い、孫悟天のことだな？」

に「そうそう悟天君！なんで出てこなかったんだらう？」

セ「（何かがおかしい。にとりはともかく私まで忘れるとは・・・）」

に「戻すけど、早苗みたいな桁外れのパワーアップはなんて名前にしようかなあ。」

セ「また名前をつけるのか。」

に「当然だよ！いい名前思いついたらつけよっと。」

・・・

「惑星??? 文&アリス転送地」

ドゴオツ!!キーンツ!!

文「うぐっ！」

文キラーは、1人で鳥籠をするかのように文を飛ばしながら攻撃し、追い詰めていた。

文「(やばっ、意識が・・・)」

「(でも、悪い癖が出ましたね!)」

文；「太陽拳」

文「太陽拳!!」

ピカアツ!!

文キ「ナニツ!」

攻撃しか考えてなかった文キラーの目を眩ませ、その隙で岩陰に隠れた。

文「はあ・・・はあ・・・(セルさんにこの技を教えてもらってよかったですね...)」

文キ「ドコヘイツタンデスカ? アタノマケハキマツタンデスヨ。」

文「(もう少し、こっちに)」

超サイヤ人G2をギリギリ維持したまま、物音を立てず、気づかないように身を潜めた。

文キ「コノヘンデシヨウカネ。」

急に近づいてきた!

文「(今です!)」

バババツ!!

文キ「!!」

岩陰を壊しながら、文キラーへ向かって気弾を連射した。
文キラーは思わず避けた。

文キ「アツ! シマツタ!」

文; 「魔空包囲弾」

ブーーン

文「そういうことです。」

文「はあっ!!」

バツ!!

ドカーンッ!!

文キラーは敗れ、地に落ちた。

文「私の勝ち、ですね。」

「アリスさんは大丈夫でしょうか？」

一方アリスは、

ア「はあ・・・はあ・・・。なんで、ダメージを与える攻撃をあまりしてこないのかしら・・・？」

アキ「・・・。」

泥沼化していた。

ア「答えなさい。もう私だけであなたに勝とうとは思わないわ。」

アキ「ワタシニハ、カクゴガアル。」

ア「覚悟?。」

アキ「ジブンヲギセイニシテデモ、オマエヲコロストイウカクゴヨ。」

ア「何を言ってるのかしら。この状況だとお互い決定打はないわ。それとも、元気な仲間でも呼ぶのかしら？」

アキ「コウスルダケダ。」

アキ；「ファイナルエクスプロージョン」

バチッ!バチッ!

ア「何ですって!。」

アキ「ナントシテデモ、オマエヲコロス。」

ア「逃げなくちゃ!。」

バシユッ!

アキ「ハアアアアッ!!」

カアッ!!

ゴオオオオオツ!!

ア「駄目っ!逃げ切れない!」

「(私の体力を削った理由は、これだったのね。)」

疲弊していたアリスは、スピードを出せなかった。

文「アリスさん!掴まってください!」

ア「文さん!」

文に掴まったが、文も多大なダメージのため最高速度は出せない。

文「仕方ないですね。」

カリカリ、ゴクツ

文「全速力です!!」

キーンツ!!

自分の仙豆を食べ、最高速度で飛んだ!

逃げ切れるか!?

・・・

「惑星??? 妹紅&チルノ転送地」

チ「・・・」

チルノは離れなかった。逃げろと指示されたが、どうしてもできな
かった。

グリツ!!

妹「がはっ!」

妹紅は劣勢だ。

チ「姉貴を…」

「いじめるなーっ!!」

チ；「アイスキック」

脚に氷を纏い、妹紅キラーへ飛んで行った。

妹キ「フン。」

ガリツ!!

チ「うわあっ!」

妹紅キラーの右腕に吹っ飛ばされ、凍らせていたチルノの脚が薄氷のように砕けた。

妹キ「コ、コレハ。」

妹紅キラーの右腕が凍った!腕に火を通さなかったのだ。

妹「ふんっ!おらっ!」

バリツ!!

妹キ「グアッ!」

妹紅は、左腕で相手の右腕を脇に挟み、右肘で殴り飛ばし、凍った右腕を砕いた!

妹「おい、脚大丈夫か?」

チ「へへ、すぐ元通りになるから大丈夫!」

妹「さて、再生する前に攻撃しないと…、?」

妹キ「オノレ…!」

なんと!妹紅キラーの腕が再生しないではないか!

妹「そうか！フェニックスダイナマイトの後再生したと思っていた
あれは、粉々のままだったんだ！」

「その後出てきたこいつは、再生したと見せかけるために出したもう
一体の人造人間だったんだ！」

チ「おお！すごい！」

妹「それなら簡単だ。」

妹；「フェニックスダイナマイト」

ボウツ！！

妹「うおおおお！！」

妹キ「クツ！」

妹紅キラーは避けた。下半身のない妹紅は上手く駆け出せないた
め、捕まえられないのだ。

チ「脚がなくなつて！」

チ；「ビクトリーキャノン」

チ「おりゃあ！」

ビイツ！！

妹キ「！」

うつ伏せで放った。

偶然、ビクトリーキャノンは砕けた右腕の断面に直撃し、妹紅キ
ラーは怯んだ！

妹「チャンスだ！」

ギユツ！！

妹キ「シマッタ！」

ドカーンツ！！

妹紅と妹紅キラーは大破した。

そして、煙の中から完全に再生した妹紅が現れた。
チルノの脚も治った。

チ「姉貴!」

妹「やっぱり足があるっていいな。体力は削ったけど。」

チ「勝ったね!」

妹「ああ、お前のおかげでな。」

チ「え?あたい?」

妹「そうだ。チルノがいなけりや、あいつが再生できない身体って気づけなかった。」

「最悪、あのままやられてたかもな。私もまだまだってことだ。ははっ。」

チ「ありがとう!でも姉貴は強いよ!」

妹「はいはい。それじゃ、他のやつ助けに行こうか。」

チ「うん!」

•••

「惑星??? レミリア転送地」

レミ;紅符「スカーレットマイスタ」

ドドドドツ

レイキ「クツ」

レミリアは先程から、体力を使わない普通の弾幕で対処していた。

レミ「(できれば誰かに相手してほしいのだけど...)」

「(私がやるしかないのかしら?)」

レミリアは迷っていた。偽物とはいえ部下を攻撃などできなかったのだ。

・・・

「惑星??? レイ転送地」

レミキ「……。」

レイ「ぐ……くそっ……」

ド「ん?どうした、早急にとどめを刺せ。」

レミリアキラーは、レイの首を掴んだまま止まっている。

レミキ「デキ、ナイ。」

ド「なに?」

レミキ「デキ、ない。レイハ、コロせない……!」

パツ

首を掴む手を離れた……!

レイ「ど、どうなってるんだ……?」

ド「おお……、おお!」

「素晴らしい!!成功だ!!」

レイ「成功だと?」

ド「生きて私の元へ来れたら答えよう。」

「レミリアキラーよ、作戦変更だ。レミリアを殺せ!」

レミキ「了カイ。」

バシユツ!!

レイ「ま、待て!!?」

バシユツ!!

すぐ追いかけてしようとしたが、

レミキ；紅符「真・スカーレットマイスタ」

複数の気弾幕が飛んできた！

レイ「ぐっ!!?」

ダメージはそこそこだが、気がつくのとレミリアアキラは遙か遠くへ行ってしまった。足止めされた時間は一瞬だったのだが…。

レイ「くそ…なんてスピードだ…!」

全速力で追いかけた。

•
•
•

「??」

霊夢達がそれぞれの人造人間と闘い始めた頃、

天「…あれ？俺は…霊夢とレイくんを庇って…」

「それから…どうなったんだ？」

悟天は、白い霧の中に一人佇んでいた。

天「ん？崖？」

足場は全くと言っていいほど見えないが、一步前に進むと落ちると言うことはわかった。

天「！ 誰だ!？」

何か、とてつもなく大きなものが近づいてくる…!

第35話へ続く…。

第35話 「幻想の魔神」

くあらすじく

惑星に着いたのはいいが、バラバラに転送されてしまった霊夢達。そこで待ち構えていたのは霊夢達にそっくりな人造人間であった。魔理沙、早苗、文は見事一人で打ち勝ち、妹紅はチルノのおかげで勝利した。

霊夢、レミリア、レイは今なお闘い続けている。

だが、大変なことにアリスキラは、かつてベジータが魔人ブウを倒すために使った切り札「ファイナルエクスペーション」を繰り出したのだ！

アリスと文は逃げ切れるか!?

悟天はいつたい、どうなってしまうのか!?

幻想天霊伝説 第35話

???

その巨人は大きかった。50mはあるだろう。

天「お前は…。」

??? 「安心したまえ、敵意などない。」

天「なんで俺をこんな所へ連れて来たんだ!?!」

??? 「おっと、君の方は敵意丸出しではないか。なになに、其方（そなた）を助けに来たのだぞ。」

天「助けに?」

??? 「そうだ。其方は今、倒れている。これは事実だ。」

「それも重傷だ。神経の幾らかを焼かれ、食事もままならない。故に仙豆も口にできない。」

天「そんなに酷かったんだ…。」

??? 「そんな其方の身体を治してやる。ただではないがな。」

天「治せるの?」

??? 「簡単だぞ。」

天「いや待って、俺が霊夢達の敵になったりはしないの?」

??? 「そういうものではない。だが、もたもたしていると、誰かが死ぬかもしれないぞ。」

天「…!」

??? 「さあ、どうする?」

天「…。」

「わかった。俺を治してくれ。」

??? 「クク、承知したぞ。」

次の瞬間、霧が晴れるとともに眩い光で視界がなくなった!

気がつくと、永遠亭のベッドに横たわっていた。

天「ん・・・、身体が、動くぞ。」

「すんなりと起き上がった。」

天「誰もいないな。永琳さんにお礼したいけど急いでるからなあ。」

永「! あなた誰!」

天「え?急に怒鳴ってどうしたんだよ。」

永「黙りなさい!どうやってここに入ったかわからないけど、覚悟なさい!」

天「待って待って!悟天だ!俺は孫悟天だよ!」

永「・・・あ、ああ、悟天さんね。ごめんなさい…。」

天「いや…。」

永「(悟天さんがわからなかった?まだそんな歳じゃないわ。)(まさか・・・、いや、でも)」

「悟天さん、髪の毛を一本くれないかしら?」

天「え?いいけど。」

永「ありがとう。」

髪の毛を一本抜き、永琳に渡した。

天「俺急いでるから、ありがと！」

永「身体は大丈夫なの？」

天「元気元気！それじゃあね！」

バシユツ！！

にとりの研究所へ向けて飛んだ。

永「あの文献が本当なら、これだけでもあれば忘れることはないはず。」

「幻想の魔神ね。本当にいるのかしら…。」

・・・

〔紅魔館〕

フ「もうすぐお昼ね。」

小「お嬢様、大丈夫でしょうか…。」

フ「レイの心配もしなさいよ。」

小「そ、そうですね。」

パ「…。」

おそらく、ことの重大性を認識していたのは、紅魔館ではパチユリーだけであろう。

察知できた理由は、出発する前のレミリアの言葉である。

くく

レミ「よく起きたわね、パチエ。」

パ「眠れなかったの。」

レミ「そう。何故かしら？」

パ「・・・お願いがあるんだけど。」

レミ「何かしら?」

パ「この闘いに参加しないでほしいの。レミイ、お願い。」

レミ「それは駄目よ。」

パ「なんで?」

レミ「もしここで闘わなかったとしても、いずれ闘うことになるわ。あの科学者と。」

「それなら、霊夢達がいる方が勝利する確率が高い。それなら今闘うわ。」

パ「私はただ死んで欲しくないだけよ。」

レミ「運命は見えているの。ここでパチエが行かせてくれることも。」

パ「・・・。」

レミ「だからふたつだけ言葉を残すわ。」

「もし私が生きて帰らなかつたら、次の紅魔館当主はフランよ。」

パ「やっぱり、連れて行かない理由はそれだったのね。」

レミ「そしてもう一つ、」

「ありがとう。そうみんなに伝えておいてちょうだい。」

くく

咲「パチュリー様、顔色が悪いように見えますが、お体の具合はよろしいでしょうか?」

パ「大丈夫よ。ちよつと、考え事してただけ。」

ピピピ

咲「半死体の刀剣が完成したようです。私も行きます。」

フ「そっか。ダメダメお姉様のサポートお願いね!」

咲「お嬢様は立派なお嬢様ですよ。」

笑顔でそう言った。

パ「行かないで、と言っても行くのよね?」

咲「はい、お嬢様が待ってますから。」
パ「必ず帰って来なさい。」
咲「勿論です。それでは。」

咲夜は笑顔で紅魔館を後にし、研究所を目指した。

パ「・・・はあ。」

・・・

「白玉楼」

ピピピ

妖「できたようですね。」

妖夢のブレスレットに通信が入った。

幽「行くのね。」

妖「はい、刀剣は完成したようです。私も行きます。」

「あのヤクザメイドも待ってるでしょうし。」

ゴ「幽々子は任せろ。俺がなんとしてでも守ってやる。」

妖「ゴクア、呼び捨てを直さないと斬りますよ。」

幽「喧嘩しないの。」

妖「それでは、行って参ります。」

幽「行ってらっしゃい！」

白玉楼を後にし、飛び立った。

幽「・・・。」

ゴ「どうした？」

幽々子は哀しそうな表情を浮かべている。

幽「なんだか、帰ってこない気がするの。」

ゴ「奴は一人ではない。心配などいらんだろう。」

勿論、根拠はない。

幽「ありがとう。ナデナデしてあげるわ。」

ゴ「いらん！」

・・・

「にとりの研究所」

セ「来たか。」

咲「お邪魔させてもらうわ。」

に「やっと完成したよ。眠い…。」

セ「休憩しろ。働きすぎだ。」

に「そういう訳にもいかないよ。みんな頑張ってるんだし。」

セ「全くお前という奴は。」

妖「お待たせしました。」

に「おっ、いいタイミング！」

「はい、これ。」

改良された白楼剣、楼観剣を受け取った。

妖「これは…！」

鞘から抜くと、刀剣は光り輝いた。そして実感した。簡単には折れ

ないということ。

妖「ありがとうございます。行って参ります。」

咲「あら無視かしら？気分悪いわね。」

妖「待つてくださりご苦労。行きますよ。」

咲「星に着いたら始末しようかしら？」

セ「やめんか2人とも。」

に「それじゃあ頑張つてね。私は少し寝るよ。」

咲「ごゆつくりどうぞ。」

セ「頼んだぞ。」

妖「勿論です。」

咲「必ず戻ります。」

2人はブレスレットのスイッチを押し、ドクターがいる惑星へと向かった。

・・・

「惑星??? アリス&文付近」

ア「逃げ切れそう!？」

文「任せてください!逃げ切ります!」

爆風から一目散に逃げていた。

ア「! 何か来るわ!」

アリスは爆風以外にも何か近づいていることを察知した。それは、倒し損ねてしまった文キラーである。

文「やり損ねましたか…！」

文キ；「魔貫光殺砲」

ズオビツ!!

文「うわつと！」

なんとか避けた。

ア「あれの相手は私がするわ！逃げることに集中して！」

文「わかりました！」

ア；「連続エネルギー弾×5」

アリスと上海人形その他の4体で連続エネルギー弾を放った。

文キ「クツ！」

ヒュンツ！ヒュンツ！

暫く放ち続けているのだが、なかなか命中しない。

ア「しづといわね…！」

「？ あれは…。」

前を見て、何かに気づいたようだ。

・・・

「惑星??? 霊夢転送地」

天キ「チャントタタカツテヨ。」

霊「うるさいわね！」

悟天キラーに若干押されている。悟天と瓜二つの敵に対して、本気で攻撃することができないからだ。やりづらさは他にもある。

霊；霊気「博麗かめはめ波」

霊「かーめー、はーめー…！」

天キ「エイツ！」

霊「ぐっ！」

このように、手を読まれてしまうのだ。

霊「私の動きはわかるみたいね。悟天の感覚があるのは本当だわ。」

「(わかってくれてるのは、ちよつと嬉しいかも…。)」

ド「お待たせしたな。」

改良された霊夢キラーが姿を現した。

霊「早いわね。」

ド「データを読み込ませただけだからな。」

霊「そんなので改良できるのね。」

ド「さあ、博麗霊夢を倒せ！」

霊キ「ウン。」

天キ「ワカツタ。」

霊「かかって来なさい！」

•••

「惑星??? 妹紅&チルノ地点」

暫く歩くと、殺風景な大地とは裏腹に大きな建物がいくつもある場

所に着いた。

チ「何これ？」

妹「急に機械っぽくなったな。」

チ「建物？」

妹「いや、建物よりはそうだな、大砲に見えるな。」

ヴィイン

妹「なんだ？」

チ「スイッチが入ったのかな？」

妹「ああ、全部に入ったみたいだな。」

チ「でも何のスイッチだろ？」

妹「よくはないことだろうな。気をつける。」

チ「うん！」

・・・

「惑星??? レミリア転送地」

レミ「・・・遠くで大きな爆発があったみたいね。」

レイキ；「連続エネルギー弾」

ボボボボツ!!

レミ「しっこい！」

超スピードで全て躲した。

レミ「！ 何か来る！」

レミキ；神槍「スピア・ザ・グングニル」

神槍が先に飛んできた！

レミ「っ！」

ボフツ！

片手で防いだ。

レミ「気が込められていないグングニルなんて大したことはないわ。」

「でも、これは厄介ね。」

レミアの前に立ちほだかったのは、自分と部下の分身のような敵であった。

レミ「レイも向かって来てるわね。それなら…！」
バシユツ！！

ある場所へ向けて全速力で飛んだ！

レミキ「!!」

レイキ「マテ！」

2体の人造人間は、レミアを追いかけた。

・・・

一方、レイは。

レイ「早くしなければお嬢様が危ない！」

ふと気がつくど、見えはしないがレミアがどんどん離れていくで

はないか。

レイ「お嬢様が急に動き始めた…偽物が追いついたか！」

レミリアに追いつこうとすればするほど、とてつもない何かがかつてくる。

レイ「何か強い衝撃を感じる…お嬢様より先からだ…！」

それは爆風のような何か。

ふと、元いた世界で愛読していた漫画のワンシーンが頭をよぎった。初めて誰かのために命を使い果たした、彼の姿だ！

レイ「…ベジータ!?!?」

その予想が正しければ、レミリアはそれへ突っ込もうとしている。今わかったが、レミリアの先からアリスと文の気も感じる。

レイ「お嬢様は偽物を道連れにする気だ!!?」

急いだ。とにかく急いだ…!

•••

「惑星??? 魔理沙転送地」

ドカーンッ!!

魔「ふあっ!?!」

爆音で魔理沙は飛び起きた。

魔「誰だ！」

仕掛けたトラップに何者かが引っ掛かったようだ。

早「ゲホっ、私ですよ。」

魔「早苗かよ！驚かさないでほしいぜ。」

「(でも、強めのトラップにしたはずだぜ。それくらいのダメージで済むなんて、早苗のやつ、何があつたんだ?)」

早「それより心配したんですよ！魔理沙さんが倒れてたんですから。」

魔「すまねえ、ちよつと眠ってたぜ。」

早「こんな所ですか!？」

魔「変か？」

早「いえ…。」

「とにかく、誰かと合流しましょう。一人だといつやられてもおかしくありません。」

魔「それもそうだな。霊夢とかと合流したいところなんだが…。」

早「少なくともすぐに行ける距離ではありませんね。どこにいるのか見当もつきません。」

魔「仕方ないな。近くのやつと合流するのぜ。」

早「わかりました！」

...

「惑星??? レミリア付近」

レミ「！ 見えた！」

まだ遠いがアリスと文を見つけた。ここで止まった。

レミ「あつちも何かと闘ってるみたいね。」

「ここから、全てが賭けになるわ。」

レミ；神槍「真・スピア・ザ・グングニル」×2

レミ「飛んでいきなさい！」

ビリッ！ブンッ！！

意図はわからないが、投げたグングニルに静電気を流し込んだ。

レイの元へ飛んでいく。

レミキ「ガッ！」

レイキ「グッ！」

途中でレミリアキラーとレイキラーをかすった！

静電気のせいで一瞬痺れた。しかし、これは狙い通りのようだ。

レミ「行くわよレイ！」

もう一本のグングニルを持ち、飛んで行った！

•
•
•

ブンッ！！

レイ「うわっ！」

前方から、レミリアのグングニルが飛んできた！
が、速いがレイの手元に飛んでくる。

レイ「お嬢様の槍が何で僕のところか？」

間一髪でキャッチした。

同時にレミリアが此方へ飛んでくる！それと、気がないせいでわかりにくいのが、レミリアキラーと何かの動きが一時的に鈍くなっている。

レイ「そうか！これであの偽物を！」

レイも2体へ飛んで行った。

そして…！

レミ「はあっ!!」

レイ「くらえーっ!!?」

ザクツ!!・ドカーンツ!!

それぞれの偽物を突き抜けた！

レイ「手応えありだ！」

もう1体は自分の偽物だったということに、この時気づいた。

レイ「僕の偽物もいたのか…後味悪いなあ。」

ピリッ

レミ「そんな！」

レイ「しまった！」

ピューッ！

このタイミングで能力が切れてしまった…！
飛んでいた勢いのままぶっ飛んでいく。

レイ「まさかこんな時に時間切れだなんて！」

グングニルも手から離れてしまった。が、

ガシッ!

ア「私たちがいてよかったわね。」

レイ「助かりました…」

全速力で飛ぶ文に掴まっているアリスがレイをキャッチした。
それだけでなく、

文キ「!!」

グサツ!!

手放したグングニルが文キラーに命中し、文キラー諸共爆風に巻き込まれ大破した!

ア「結果オーライね。」

レイ「これで全て倒せたんでしょうか?」

ア「近くには居ないわね。」

文「重いですけど…。」

レイ「もう少し頑張ってください!」

まだ爆風から逃げている途中である。

レミ「速く!」

文「はあああっ!」

数分後、4人はなんとか逃げ切り惑星の地表に降りた。

レミ「よく私の意図がわかったわね。」

レイ「これ位できなければお嬢様の部下は務まりませんから。」

ス・

ア「レエイくん♡」

レイ「な、何でしょうか！」

アリスの超サイヤ人G2が解けた！

文「あ、頑張ってくださいね。」

レイ「お嬢様！助けてください！」

レミ「私もあれには触りたくないわ。」

ア「ネエネエ、さつきみたいに抱きついてエ♡」

レイ「しません！ここは敵陣なんですよ！」

文「レイさんには咲夜さんがいますもんね。」

レイ「文さんも冷やかしてないで助けてくださいよ！」

文「私もいささか気が引けてますね。」

「あ、アリスさんのポケットに入ってる仙豆を食べさせたら元に戻りますよ。」

しかしアリスはガニ股で性犯罪者の構えを取っている。

レイ「あれでどうやって食べさせるんですか！」

レミ「無理やり口に放り込むしかないわね。通常なのだから不可能ではないわ。」

文「私はさつき仙豆を使ったので持つてませんし、頑張ってくださいね。(ニヤニヤ)。」

レイ「やるしかないかあ…」

仙豆は敵地において重要だ。無駄遣いはできない。

・・・

「幻想郷」

天「どうなってるんだ？みんな、俺が名前を言うまで忘れてるみたいだったなあ。」

「もしかして、あいつが言ってた副作用なのか？」

永遠亭を出た後もいろんな人物に声をかけてみたのだが、やはり初対面かのような反応をされてしまう。

天「これだとたぶん、にとりの所に行ったらセルと闘うことになっちゃうなあ。」

「早くあの星に行かなくちゃいけないのに…。」

こ「あ！お兄ちゃんやつと見つけた！」

天「こいしちゃん？」

途方にくれていた悟天の元へ、愛弟子が現れた。

天「俺がわかるの？」

こ「？ 何言ってるの？」

天「いや、わかるならいいんだけど。」

こ「変なの。でも可愛い♡」

天「そ、そうかな…。」

こ「そうだ、そんな可愛いお兄ちゃんにお届け物があるよ。これ！」

修理された転送ブレスレットを渡された。

天「こ、これって。」

こ「河童の人が寝ちやったから届けに来たの。」

天「ありがとう！助かるよ！」

こ「じゃあ、お礼にチューして。」

天「え？」

会った時から予感していた悪い想像は的中してしまった。

天「待って、今はそれどころじゃないんだよ。」

「霊夢が、みんなが心配なんだよ。」

こ「また霊夢なの？」

天「うっ。」

こいしは怖い顔になった。

天「行かなくちや。」

こ「チューしてくれないなら、ここで叫ぶよ?」

天「えっ!それは困るなあ。」

こ「さーん、にー、いーち。」

天「わかった!この闘いが終わったら必ずするよ!」

こ「ほんとに?」

天「ほんとほんと!約束するから。」

こ「・・・わかった。お兄ちゃんを信じる。」

天「助かるよ。」

悟天は急いで転送を開始し、惑星へワープした。

こ「お兄ちゃん…。」

「ん?人里がうるさい。なにかあったのかな?」

・・・

「惑星??? 咲夜&妖夢転送地」

咲「着いたわね。」

妖「この場所、見覚えがあります。あのガラクタを相手にした時と同じ場所です。」

ド「よく覚えていたな、魂魄妖夢。」

妖「！ あなたは！」

ド「その通り。こんな何も無い星にわざわざ来てくれて、感謝するぞ。ククク。」

咲「御託はいいわ。早く姿を現しなさい。」

ド「そう慌てるな。お前たちにもプレゼントを用意したんだが、入れ違いになってしまったな。」

咲「入れ違い？」

ド「お前たちのコピーのような私の作品だ。正直、お前たちはここへ来ないとばかり思っていたからな。」

妖「コピーとは、まさか！」

ド「お前たちと実力も同じだ。しかし、入れ違いになってしまったのは仕方がないな。」

「そうそう、覚醒の実の力を持った人造人間が2人もやってきて、幻想郷は太刀打ちできるのかね？」

咲「しまった!!」

妖「落ち着いて！ここで戻れば、数日はこの星へ行けなくなってしまうます！」

咲「でも…！」

ド「そんなお前たちにはお詫びをくれてやる。」

ドカーンッ！

咲「こいつらは…！」

妖「小賢しいですね。」

以前取り逃がしたメタルクウラ達だ！

ド「ここで逃げても構わんが、このメタルクウラ達が散らばれば、この星にいる仲間はどうなるかな？」

妖「やるしかないようですね。」

咲「幻想郷は、きつと大丈夫。きつと…。」

妖「はあああつ!!」

咲「んんっ!!」

ヴンツ!!バチツ!!バチツ!

妖「行きますよ!」

咲「私に命令しないで!」

•••

「惑星??? 霊夢転送地」

ド「やるではないか博麗霊夢!」

霊「はあ…。」

悟天キラーとパワーアップした霊夢キラーを相手に互角だった。

霊「こんなガラクタじゃ私を倒すことはできないわ。退くことを提案するわ。」

ド「ほう、それはどういうことかな?」

霊「私にはまだ余裕があるの。」

霊夢は交渉を行った。闘い慣れしてるだけある。

ド「と、言うと?」

霊「私には仙豆もあるのよ。」

?「それってもしかしてこれのことですか?」

霊「! 誰!」

突如、悟天キラーと霊夢キラーの前にオンリョウキが現れた。その手には、霊夢の仙豆があるではないか!

霊「そんな！」

オ「こんなアイテムはこうデス。」
メキッ

仙豆を握り潰してしまった。

霊「っ！」

オ「これで余裕はなくなりましたねエ。さア、どうしますウ？」
ヒュンツ!!ドゴツ!!

霊キ「ガハッ！」

瞬間移動して霊夢キラーの背後に廻り蹴飛ばした！
続いて右の拳に気を溜めたが、

オ「そオれ！」

ドゴツ!!

霊「うっ！」

殴り飛ばされた。

オ「なるホドなるホド、闘う相手はちやアんと選ぶみたいですねエ。
感心感心。」

霊「ふぎけるのも、いい加減にしなさい…！」

オ「グヒャヒャー！いい顔してますよオ！」

霊夢は無無を問わず攻撃を仕掛けたが、

ピリリリッ!!

霊「なんですって…！」

当たった筈だった。しかし、オンリヨウキは身体を分解させ、姿を消してしまったのだ！

まるでジャネンバのような戦術だ。

霊「ど、どこよ…！」

ピリリリッ!!

シュルルッ!!

霊「な！ううっ！」

突如背後に現れ、尻尾で首を巻きつかれ宙吊りにされた…！

オ「ここデスが？」

霊「あ…が…。」

オ「アナタに生きていられると面倒だとドクターは仰いました。」
「なのでエ、ここで仕留めまアす。」

オ；「ドレインテール」

巻きついた尻尾から、霊夢の気を吸い取り始めた。

霊「あ…あ…。」

ス…

オ「勝負アリですねエ。グヒヤヒヤヒヤッ！」

超サイヤ人G2が解けた…。

オンリヨウキは尻尾を離れたが、霊夢は立てず横たわった。

オ「さアお2人さん、あとは、任せましたよオ。」

「グヒヤヒヤヒヤッ！」

先程と同じように消えた。

天キ「ククク。」
霊キ「フフフ。」
霊「・・・。」

・・・

「惑星??? 悟天転送地」

天「へえ、驚いたなあ。こんな街があったのか。」

悟天が転送された場所は、街のような場所の中だった。人の気配は全くしないが。

ヴィイン

天「？」

建物から音がした次の瞬間！

ドオンツ!!

天「なんだ!？」

砲弾が発射された！続いて、

ドオンツ!!ドオンツ!!

周りの建物からも発射された。いや、これは建物ではなく兵器だ。

天「い、いきなりか…！砲台の先にあるのは…、月？」

悟天が見たものは明らかに月だ。幻想郷に向けてはいない。

天「ん！霊夢はあっちだ！気が小さくなってる。」
「間に合ってくれ！」
バシユツ!!

兵器を潜り抜け、飛んで行った。

惑星が動き出したが、何が目的なのか？

霊夢の運命は？

悟天は間に合うか？

他のメンバーは大丈夫なのか？

幻想郷はどうなるのか？

第36話へ、続く!!

第36話 「声にならぬ咆哮」

くあらすじく

重症を負い倒れていた悟天の意識に、幻想の魔神が入り込み提案をしてきた。それはなんと、全身まるごと治療するというものであった。ただではないという条件も飲み、復活した。

しかし、その代償は奇妙なものであった。幻想郷の住民が、悟天に会うまで悟天の存在を忘れるというものだったのだ。

迂闊にとりの研究所にも行けない中、たった一人、悟天を認知できる者が現れた。愛弟子のこいしである。

どうやら研究所から転送ブレスレットを持ち出したらしく、ある条件の下で悟天に手渡した。

早速惑星に着いたのはいいものの、霊夢は既に虫の息であった。間に合うか悟天!?

そして、起動した惑星の砲台は何を意味するのか？

幻想天霊伝説 第36話

「惑星??? 悟天転送地付近」

天「くそっ! 砲台が邪魔で真っ直ぐ進めない…!」
「でも上から行けば狙われるかもしれないし…。」

そこら中にある砲台が一斉発射している。

上と下、どちらを飛んでも速く進めないのだ。

天「(温存してる暇はない!) はあっ!!」
ヴンツ!!

超サイヤ人に変身し、意識を集中させた。

天「(やっぱり、前よりパワーアップしてるな。父さんやベジータさんが言ってたことは本当だったのか。)」

死の淵まで追い詰められ、復活することでパワーアップするという話を思い出した。

天「(抜けた!) はあああつ!!」

ヴンツ!!バチツ!!バチツ!!

「間に合ってくれええつ!」

キーンツ!!

超サイヤ人2に変身し、全速力で飛んだ。

チ「ん?あれ兄貴じゃない?」

妹「本当だ!建物が砲台になったかと思えば女たらしまで…!」

チ「追いかけよう!」

妹「おう!」

バシユツ!!

チ「ああ、待ってよ姉貴ー!」

勿論チルノでは悟天にも妹紅にも追いつけない。

このまま合流できればいいのだが…。

•
•
•

「レミ&レイ&アリ&文合流地点」

一方、レイはなんとかアリスのポケットから仙豆を取り出し、食べさせることができたのであった。

レイ「この星に来て1番の強敵だったかもしれない…」

ア「ごめんなさいね…。」

絶望した表情で謝罪された。

レイ「いいんですよ、困った時はお互い様です。」

文「これはスクープですね（ドヤア）。」

レイ「記事にしようとしなくてください！」

文「では咲夜さんだけに報告というのは如何でしょうか？」

レイ「恐ろしい事になるからやめましょう！」

レミ「貴方達はこんな状況でも楽しそうね。」

レイ「僕は楽しんでませんよ☒」

文「私は楽しんでますよ。」

ケラケラ笑っている。

レイ「まったく：遊んでないで先に進みましょうよ。」

文「それもそうですね。それじゃあ誰かと合流しましょう！」

ア「っ、あつちから魔理沙の気を感じるわ。」

レミ「ほんとね。一番近いわ。」

レイ「じゃあ、そこへ向かいましょう！」

みんな、早苗も一緒だということには気づいている。

文「今さら早苗さんに触れられないですね。まあ、いいでしょう。」

一行はのんびりと魔理沙の元へ向かった。

・・・

「咲夜&妖夢転送地」

メタルクウラ達は地表を歩き、迫ってくる。

咲「はっ！」

「2本のナイフが立体浮遊術で宙を舞った。

妖「それはまだいりません。」

咲「余計なお世話よ。」

妖「私だって、ただ刀剣の完成を待っていたわけではありませんから。」

楼観剣を抜き、構えた。

妖「後ろにいた方がいいですよ。」

咲「あらそう。」

悪態をつくが後ろに廻った。

妖「この技は、今しか効果がありません。」

「そのまま、歩いてくださいね。」

どんどん近づいてくる敵を前にしても、微動だにしない。

・・やがて、その時が来た……!

妖夢は気を一気に上昇させ、

妖；輝剣「水平閃」

妖「水平閃っ!!」

ピッ!!

咲「うっ！」

剣を振った一瞬、あまりにももの眩しさにその場にいた誰もが視界を

奪われた。

背後にいた咲夜が見たものは、大群のメタルクウラの脚と腹が泣き別れになった光景だった。

メタルクウラ達はバタリと倒れ、動かなくなった。

咲「なんて威力なの…！」

妖「ぼやっとしてないで早くチップを斬ってください！」

咲「あなたこそ何してるのよ。」

妖「気を使いきました。ろくに動けません。」

妖夢の超サイヤ人G2は解けていた。メタルクウラの再生は始まっている。

咲「…仕方ないわね。」

「はっ！」
ギョんツ!!

両手にナイフを握り、更に2本のナイフを立体浮遊術で攻撃しにかかった。

スパッスパッスパッスパッ!…ボンツ!!

ザツザツザツザツ!…ボンツ!!

次々と銀髪のメイドに仕留められていく。

一方で銀髪の武士は息絶え絶えだ。

妖「はあ…はあ…、体力が、回復、しない…。」

咲「…。」

咲夜は妖夢に仙豆を投げた。

咲「私の分だけど食べなさい。1人だと数が多いから。」

妖「・・・かたじけないです。」

カリカリ、ゴクツ

ヴンツ!!バチツ!バチツ!

妖「行きます!!」

2人で再生途中の敵にトドメを刺していった。
しかし、幾らかは間に合わなかった。

咲「残りはせいぜい20体ほど、と言ったところかしら。」
妖「問題ない!」

少しも怯む様子はない。

メ×5；「連続フィンガーブリッジ」

ババババツ!!

無数の小さなエネルギー弾が2人を襲う!

咲「ふん。」

妖「その程度!」

咲夜は能力で完全回避した。

対する妖夢は真っ直ぐ突っ込んだ。

妖「はあああつ!」

キキキキツ!!

もちろんただで突っ込んだ訳ではない。

迫り来る光の礫を双刃で弾き飛ばしていたのだ!

妖「終わりです!」

ザザッ!!ザザッ!!ザッ!!

咲「解除っ!」

ボンッ!!

妖夢が一瞬で5体を斬り捨てた反面、咲夜は能力で一瞬のうちにチップを斬った。

一太刀の無駄もなく大量の敵を斬り裂くその姿は正しく、銀の超戦士であった。

咲「残りは10体ほどね。」

妖「さっさと終わらせましょう。」

雑兵を終わらせようとしたその時!

オ「お待ちくださいアい!」

オ;「超魔口砲」

ボオッ!!

2人の足元に強力なエネルギー波が飛んできた!

妖「誰だ!」

咲「・・・そこね!」

ヒュンッ!!キンッ!!

気を感じる場所にナイフを投げたが、弾かれてしまった。

オ「マアマアまずは落ち着いてくださいよオ。」

妖「新手...!」

オ「なアに言ってるんデスか?13号の時には既にいましたよ?」

咲「魔理沙が言ってた不気味なやつね。」

オ「流石完璧で瀟洒なメイド咲夜さん、デスね。お友達のお話は

しつかり覚えてる、グヒャツ」

「それはいいとして、大事なお知らせがあるんデスよオ。」

妖「何よ。」

咲夜は嫌な予感がした。

オ「アナタ方の大事なお友達、霊夢ちゃんは間もなく死にまアす☆」

2人「!!」

オ「わたくしがア、極限まで追い詰めてきたからデスス！グヒャー
ヒャヒャヒャ！」

静かに激怒した咲夜は、1秒足らずでオンリヨウキの首筋に迫り、
かつ斬ろうとしたが、

ピリリリツ!!

咲「!？」

寸前で躲された!

後ろに現れることを察しナイフを投げたが、片手間で跳ね返され、

ゲシツ!!

咲「がっ!!」

避けた隙を突かれさらに背後から蹴られた。

妖「はあっ！」

サツ！サツ！サツ！サツ！

妖夢もなかなかの読みで刀剣を振るうが、当たらない。

オ「それ。」

妖「しまっ！」

ドゴオツ!!

妖「ぐはっ!!」

！
足元を払われ体勢を崩した直後、桁違いの力で頭を踏みつけられた

オ「霊夢で敵わなかったんデスよ？アナタ方で勝てるわけがないでしょうよオ。」

咲「くっ」

妖「（考えろ、考えるんだ。こいつを倒す方法を。）」

・・・

「霊夢地点」

霊「（私、死ぬのかな。こんな奴らに殺られて。）」

意識だけを残された霊夢に、悟天キラーと霊夢キラーが迫り来る。

霊「（ただいまって、言いたかったな…。いつもと変わらない生活に、戻りたいな。）」

「（・・・！この気は…。）」

物凄いスピードで何者かが此方へ迫って来る。

霊「（嘘！ どうして悟天が！）」

絶望の闇へ堕ちていった霊夢に、希望の光が差し込んだ。
こんな所では、死ねない!!

ヴンツ!!バチツ!バチツ!

天キ&霊キ「!」

霊「ー!」

! 声にならない叫びを上げ、悟天キラーと霊夢キラーに立ち向かった

・・・

「魔&早合流地点付近」

魔「おっ、誰か歩いてくるぜ。」

早「おーい!」

暫く歩いていると、4人の人影が見えてきた。

ア「魔理沙ー!」

文「魔理沙さんじゃないですか。」

魔「みんな無事だったんだな。よかったぜ!」

レミ「なかなか危ない所だったわ。」

レイ「まさか自分達の偽物が襲ってくるなんて思いませんでしたよ。」

早「ハアツ☆」

ノルマ達成。

魔「やっぱりそっちも自分と瓜二つの敵が出てきたのか。」

ア「そのせいでもう仙豆を使う羽目になったわ。」

早「私はまだありますよ!」

レイ「慎重に行かなければなりませんね。」
早「そ、そうですね…！」

唐突に反応があつたので少し戸惑った。

ド「見事だ。」

一同「！」

ドクターの声が響いた。

ド「よくぞ自分の分身に打ち勝った。感激だ。」

レミ「いい加減姿を見せなさい！」

ド「いいだろう。」

レミ「え？」

あつさりと承諾した。

レイ「随分と余裕だな…！」

ア「やつと観念したのかしら？」

ド「ちようどお前たちがいる場所は、私の研究所の入り口になつて
いる。」

ヴィイン

音と共に地表が扉のように開き、地下への入口が現れた。

ド「さあ、入りましたまえ。」

文「嫌な予感がしますね。」

魔「でも、行くしかないのぜ。」

「それにいざとなればレイがいるから安心なのぜ！」

レイ「…プレッシャーが凄いッ!!」

かくして、魔理沙・レミリア・アリス・文・早苗・レイは地下へ突入することで、ドクターへ近づくこととなった。

果たして、悟天は間に合うのか？

再び立ち上がることができたが、霊夢は勝てるのか？

咲夜と妖夢の運命は？

魔理沙たちを待ち受けるものは何なのか？

第37話へ、続く!!

第37話「あいつの代わりに」

くあらすじく

幻想少女達が新惑星で激戦を繰り広げる中、星のもう半面では、月の都と新惑星との戦争が勃発していた。

魔理沙・レミアア・アリス・文・早苗・レイは合流し、ドクターの招待の元地下へ突入した。

しかし、霊夢は瀕死状態、悟天は未だ霊夢の場所には着かず、咲夜と妖夢は霊夢を倒した敵を前に大ピンチ、と言った状況だ。

その頃、幻想郷では何が起きていたのか？

幻想天霊伝説 第37話

〔白玉楼〕

幽「はあ、妖夢が心配だわ。」

ゴ「17回目だぞ。」

幽々子は妖夢が心配で仕方がない。

ゴ「まだ1時間も経っていない。心配性にも程があるな。」

幽「だって、今回はものすごく嫌な予感がするんだもん。」

ゴ「なんだその喋り方は。」

ゴクアはすっかり、心を許していた。

ゴ「？ 何かが飛んでくるな。」

幽「誰かしら？」

ゴクアと幽々子は、何かの接近に素早く察知した。ゴクアは元から索敵能力が高い。

ゴ「見てくる。」

幽「幽霊だったらお通ししてね。」

幽々子は居間に残り、テレビを見ていた。今はにとりが、スパイカメラの映像を流しっぱなしにしている。

編集はされておらず、時折カメラが切り替わったりする。特に実況もされていないので、そういう意味では真のニュースだ。

幽「おや、霊夢たちが自分の偽物と闘ってるわね。」

「あっ！妖夢が映った！…あれ？妖夢の相手は妖夢の偽物じゃないのね。つてまさか！」

その頃ゴクアは、門でそれを待ち構えていた。

ゴ「あの服装は魂魄か？忘れ物でもしたのか？」

階段に足をつけずに上がってくるその人影は、正しく妖夢だが、突然速度を上げ、一直線に飛んできた！

ゴ「なにっ！」

紙一重で相手の一太刀を躲した。

ゴ「くっ！」

ゲシツ!!

一瞬の隙を逃さず、蹴りを入れた。

ゴ「貴様は、魂魄ではないな！」

ゴクアの言う通り、現れたのは妖夢ではなく妖夢キラーであった。

妖キ「ヨクワカリマシタネ。」

ゴ「蹴った時の感触が違ったからな。」
「丁度いい機会だ。思う存分力を出して、お前を倒す！」
ゴオオツ!!

フルパワーゴクアへ変身した!

ゴ「来い!!」

妖キ;断命剣「冥想斬」

空中にいた妖夢キラーは、大きく振りかぶり、ゴクアへ襲いかかった。

剣を構えたゴクアは、剣を交えるのかと思われたが、

ドゴンツ!!

妖キ「ナニツ!!」

妖夢キラーの一撃は、敵ではなく地盤に決まった。これを決まったとは言わないが。

ゴ「おおっ!!」

ひらりと身を躲したゴクアは、両手に握りしめた剣を力一杯振り下ろした!

ガキンツ!!

ゴ「くっ!!」

冥想斬を外したがすぐに体勢を立て直し、ゴクアの一太刀をコピーの楼観剣で受け止めた。

ゴ「(パワーはこいつの方が上か!)」

刀剣で防がれようが、力任せに叩き斬るつもりでいた。しかし、戦闘力は相手の方が上であったということが誤算だった。

妖キ「ソノテイドデスカ。」

ゴ「ぐううっ！」

全力のゴクアに対し、妖夢キラーは全力ではない。

妖キ「ハッ！」

ドオツ!!

ゴ「ぐあっ！」

コピー楼観剣から衝撃波を放ち、ゴクアを吹っ飛ばした！その攻撃により、剣を手から離してしまった。

妖キ「オワリデス！」

妖キ；人鬼「未来永劫斬」

頭から地面に落ちていくゴクアを確認し、タイミングを見計らって駆け出した。

ゴクアは、これを見通していた！

ゴ「やはりな！」

ゴ；「ギヤラクティックバスター」

ゴ「ギヤラクティックバスター！」

ドオオツ!!

妖キ「ナニッ！」

ドカーンッ!!

隙だらけになっていた妖夢キラーに、渾身のギヤラクティックバス

ターが直撃した！

ゴ「どうやら魂魄の分身のようだな。」

「これまでの稽古を見て、貴様は攻撃に集中した時のみ隙を見せることがわかった。」

カウンターを仕掛けた、ということだ。

妖キ「ヨクモヤツテクレマシタネ。」

ゴ「まだ動けるのか。」

見た目はボロボロだが、まだまだ闘える状態のようだ。
どうするゴクア。

ゴ「(幽々子だけには手を出させん……！)」
妖キ「？ …。」

妖夢キラーは右耳に手を当て、何かを聞き取っていた。

バシユツ

聞き終わると、ゴクアに背を向け下界へ飛んで行った。

ゴ「なんだ？」

死を覚悟していたが、敵の方からいなくなったので安堵し、変身を解いた。

ゴ「……。」

くく

妖「はっ！」

ゴ「ふん！」

ゴンツッ！

これは、木刀で稽古していた時のこと。

ゴ「おらっ！」

妖「…。」

一太刀加えようとした妖夢の剣を、払って弾こうとした。

ゴ「なにつ！」

ゴツゴツゴツ！

ゴ「ぐあっ！」

しかし妖夢は、ゴクアの払いの力を受け流し、即座に三連撃を与えた。

妖「一撃に力を入れすぎです。実戦では、さっきのように受け流されたら終わりですよ。」

ゴ「これが俺のやり方だ。」

妖「幾ら力に自信があつたとしても、受け止めるのではなく受け流すことも考えるべきです。」

ゴ「何を偉そうに。貴様も攻撃の際に隙を見せるではないか。」

妖「余計なお世話です。」

くく

ゴ「まさか、貴様に助けられるとはな。」

幽「ゴクアちゃん、大丈夫ー？」

ゴ「その呼び方をやめろ。」

幽「今来たのって、妖夢の偽物でしょ？」

ゴ「見てたのか。」

幽「いえ、テレビを覗てわかったの。」

ゴ「テレビだと？」

幽「霊夢の友達が作ったスパイカメラが撮った映像よ。」

「みんな自分の偽物と闘ってたんだけど、妖夢と紅魔のメイドだけ違ったの。だからもしかしてって思ってた。」

ゴ「敵は相当できるらしいな。」

幽「それはいいとして、ありがとうねゴクアちゃん！」

ゴ「だからやめろ！」

ゴクアは見事、自分よりも格上の存在を倒すことができた。
さて、妖夢キラーは何処へ向かったのだろうか？

・・・

〔紅魔館〕

美「っ！ 何か来る！」

何かがこちらへ飛んでくる。肉眼で見える距離だ。

美「あれ？ 咲夜さん？」

惑星へ向かったはずの咲夜の影が見える。

何故戻ってきたのかを考えていると、突然ナイフが飛んできた！

美「うわっ！」

ドゴツ！ドゴツ！ドゴツ！

紙一重で避けた。いつもナイフを投げられていた経験が、功を奏したのだ。

美「投げたの本当にナイフですか!?地面の形が変わってますけど！」

美；「太陽拳」

カツ!

咲夜キラー「！」

咲夜キラーの目が眩んだ。

美「早くパチュリー様に伝えないと！」

一目散に駆け館内に入ると、既にパチュリーは詠唱していた。

小「相手は何者ですか？」

美「咲夜さんの偽物です!かなりの実力を持っています!」
妖精メイド「そんなあ!お嬢様も咲夜さんもいないのに!」

フ「レイがないことが一番の問題よ。」

屋敷の奥から、フランが歩いてきた。

小「妹様？」

フ「私が行くわ。みんなは地下に避難して。」

美「し、しかし…。」

パ「わかったわ。行つてきなさい。」

美「パチュリー様!」

フ「ありがとう。あれちようだい。」

パチュリーはフランに、手のひらサイズの血の色の球を渡した。

パ「死ぬことは許さないわよ。」
フ「わかってるわよ。」

小さな少女は扉を開け、戦いに行った。

小「妹様一人で大丈夫でしょうか？」

パ「問題ないわ。いざとなれば、私が命を懸けてでも守るから。」

小「それなら私もおとします！」

パ「・・・。」

「大きくなったわね、フラン。」

外に出ると、空は紅い霧に覆われており、日光を遮断していた。

咲キ「イモウトサマ、アヤメテサシアゲマス。」

忠誠心など微塵も感じない。明らかに偽物である。

フ「咲夜の偽物って聞いたからどんなのかなあって思ったけど、全然似てないわね。」

先程の球を、林檎を食べるかのようによく一口かじった。

ガリッ

フ「!!」

ヴンッ!!

食べ残しは手に溶け、超サイヤ人Gに変身した!

この球は、レミリアが超サイヤ人Gに進化するために作った、あの血塊を凝縮させたものだったのだ。

フ「掛かってきなさい！」
咲キ「！」

お言葉に甘えてと言わんばかりに、襲いかかってきた。

フ；禁忌「クランベリートラップ」

身の回りに、複数の大きなエネルギー弾を仕掛けた。わざと間隔を空けている。

咲キ「ハッ！」

ドツ！ドツ！ドツ！

跳び上がってナイフを投げ、トラップを破壊した。

フ「やっぱりね！きゅっ！」

ドカーンッ！

敵を捉え、〈破壊〉の能力を使った。

しかし、敵は破損しなかった。

フ「バラバラにするつもりだったのに、服が傷むだけなのね。」

「(この咲夜は能力を使えないみたいね。使えたなら、とつくにやられてるもの。)」

咲キ「クシザシニナリナサイ。」

咲キ；メイド秘技「真・殺人ドール」

無数の気弾幕が襲いかかる！

フ「っ！」

懸命に避けるが、

ザクツ!

フ「痛っ!」

左肩に刺さってしまった。

だが、動きが鈍くなったフランに、両手にナイフを持って容赦なく襲いかかる。

咲キ「コンドハチヨクセツキリサキマス。」

フ「そこ!」

フ;「ビクトリーキャノン」

ビイツ!!ドカーンツ!!

至近距離まで迫った所で、師から伝授した技を使った!

フ「きやつ」

反動で後方へ吹き飛んだ。

フ「こ、これで少しは…。」

そう、少しはダメージを与えたのである。

咲キ「ゴカクゴゴ。」

フ「……。」

その時、咲夜キラーは右耳に手を当てた。何かを聞いている様子だ。

咲キ「……。」

バシユツ

聞き終わったかと思うと、フランを無視して何処かへ飛んで行った。

フ「助かった、の？」

ス・・・

美「妹様！」

超サイヤ人Gが解け、倒れたフランに駆け寄った。

フ「ゲホッ！」

美「しっかり！」

フ「お姉様も、こんなに苦しい思いをしたのね。」

超サイヤ人Gは、楽ではなかったことを思い知らされた。

パ「大丈夫？立てるかしら？」

フ「ちよつと無理っぽい。」

パ「わかったわ。美鈴、館内へ運んであげて。」

美「はい！」

小さな女戦士は、家族を守ることができたのであった。

・・・

「にとりの研究所」

セ「ぐっすり寝ているな。」

咲夜と妖夢を送り出して数分、にとりを見守っていた。

セ「む、これは。」

数面のモニターによるスパイカメラの映像を観た。そこには、霊夢達がそれぞれ自分の分身のような敵と闘っている光景が映し出されていた。

セ「なるほどな。ドクターがしかねない手だ。」

同時に、幻想郷を映し出した映像も観ていると、人里が動乱しているのではないか。

セ「ちつ、十六夜咲夜と魂魄妖夢を送り出したタイミングで何かを送ってきたな。」

「にとりが心配だが、行くしかあるまい。」

いざとなれば瞬間移動もある。無事でいてくれ。

セルは、人里へ向け飛んで行った。

・・・

「人里」

セ「！ これは…！」

上空から確認すると、何かが暴れていることがわかった。

そして、ルーミア・リグル・ミステイアがそれと闘っているということも。

セ「まさかあれは、メタルクウラ？何故奴が。」
「侵入したのなら、観測機に反応がある筈だが。」

加勢するため、降りていった。

リ「まだ鬩えるか？2人とも。」

ル「何とか…。」

ミ「くそっ！なんて強いんだ！」

リ「前はこんなに強くなかったのにな。」

一体のメタルクウラに圧倒されていた。

セ「おい、お前たち。これはどういうことだ？」

リ「！ セルさん！」

ル「森から突然現れたのだ。」

セ「住民は避難したか？」

ミ「慧音先生とセルJr. が誘導してくれたよ。死者は出てない筈。」

セ「そうか、よくやった。」

「後は私に任せろ。お前たちも避難誘導を手伝え。」

リ「ありがとう！」

ル「助かるのだ。」

ミ「頼みます。」

3人は、その場を離れた。大妖精は、既に避難しているらしい。

セ「さて、今度は私が相手だ。」

メ「…。」

セ「(夏祭りの時より、数段パワーアップしているようだ。)」

「(この頭の形を見るに、孫悟天と博麗霊夢、レイ・ブラッドを倒した個体と同じものだ。油断はできん。)」

ヴンツ!!バチツ!バチツ!

気を高めた!

セ「行くぞっ!」

果たして、一体とはいえ最大パワーのメタルクウラに、セルは打ち勝つことができるのだろうか?

第38話へ、続く!!

第38話 「忘れた頃に」

くあらすじく

霊夢たちが謎の新惑星で激闘を繰り広げていた時、幻想郷も平和ではなかった。

入れ違いになった妖夢キラーと咲夜キラーはそれぞれ、白玉楼と紅魔館を攻撃していたのだ。

人里も例外ではなく、かつて霊夢たちを襲撃したメタルクウラの生き残りが暴れていた。劣勢の中交戦していた悟天の弟子たちだったが、そこへセルが駆けつけた。

妖夢キラーと咲夜キラーは、あと一歩の所で何者かの通信を受信しその場を離れた。

最大パワーのメタルクウラに、セルは打ち勝つことができるのだろうか？

妖夢キラーと咲夜キラーは何処へ向かったのか？

幻想天霊伝説 第38話

「人里」

セ「どりやあつ！」

メ「ツ！」

ドゴツ!!

両者は激しくぶつかった！その衝撃で、数々の人里の家屋にヒビが入った。

ゴツ！ガツ！ドツ！グリツ！

セ「はっ！」

ドツゴオオンツ!!

メ「グアツ！」

強烈な一撃を与えた。が、大してダメージにはなっていないようだ。

セ「自己修復プログラムか。やはりチップの破壊が一番の近道のようにだな。」

セ；「三連デスビーム」

セ「どらっ！」

ビッ！ビッ！ビッ！

瞬時に三本のデスビームを放ったが、

メ「ッ！」

ヒュンツ！！

セ「なにっ！」

瞬間移動で躲され背後に回られた！

セ「ちっ！」

ヒュンツ！！

負けじと瞬間移動し敵の背後へ回ったが、

ヒュンツ！！

さらに敵も同じ手を使った。

これを繰り返すこと十数回。

セ「どりやっ！」

ゲシツ！！

タイミングを少しずらし、ハイキックした。

セ；「デススライサー」

セ「そこだ！」

ギャンツ!!スパツ!!

メタルクウラの首を切り飛ばした!

セ「はっ！」

ボツ!!ドカーンツ!!

すかさず残った胴体をエネルギー弾で破壊した。

再生を始める首へ近づき、それを片手にとり、

セ「消えておけ。」

ポオツ!!

持った手からエネルギー波を放ち、完膚なきまでに消しとばした。

セ「ひとまず人里はこれでいい。．．？」

紅魔館の方から気配を察知した。

おそらくドクターが送り込んだ新手だな。紅魔館から離れたが、何

処へ向かっている?別の知らない気も同じ方に向けて動いている。

この方角は、まさか!

セ「ちっ！」

ヒュンツ!!

瞬間移動を使った。

•••

「にとりの研究所」

に「zzzz…」

にとりはまだ寝ていた。間に合ったようだ。

セ「地下に隠すか。」

にとりを抱え、〈限界突破の木〉がある地下へ向かい、にとりをそこに寝かせた。

セ「お前は、お前だけは私が必ず守る。」

地下への扉を閉め、研究所から飛び立った。
その時、バトルシミュレーターの扉が開いた。

•••

「研究所上空」

それから間もなく、2つの方向からそれがやってきた。

セ「十六夜咲夜と魂魄妖夢の複製か。」

「一応問う。お前たちの目的は何だ？」

咲キ「カワシロニトリノ…」

妖キ「マツサツ。」

セ「やはりな。」

「調子に乗るなよ！中身のないガラクタがつ!!」

ヴンツ!!バチツ!バチツ!

セルは悟った。最初から全力で闘わなければ勝てないということ。そして、自分が負けてしまうかもしれないということ。

咲キ「マズハオマエカラ…」

妖キ「マツサツ。」

バシユツ!!

左右から襲いかかる!

セ;「フルパワーデスビーム」

セ「はっ!」

ビツ!!

両の人差し指から繰り出したが、寸前で躲された。

セ「何処へ行った?・・・上か!」

見上げると、咲夜キラが構えていた。が、それは囷だった。

妖キ「ハツ!」

セ「なに!」

ザツ!!

セ「ぎいっ!」

妖夢キラは、セルの下から急上昇してきた。直前で気づいたが、右腕を斬られてしまった!

セ「おのれ!」

ボツ!ボツ!ボツ!

左手から気弾を放つが、妖夢キラーを捕えられない。

ギョーンツ!!

セ「今度はナイフか。」

2本の回転するナイフがセルを襲う。

セ「どりやつ!」

カンツ!

セ;「魔貫光殺砲」

ズオビツ!!

1本はキツクで弾き、もう1本は技でナイフを折った。

セ「はあ…、はあ…。」

咲キ「……。」

妖キ「……。」

セ「(先程のナイフ、中々の威力だった。戦闘力は互角かそれ以上と
いうことか。)」

「(今の幻想郷の戦力なら敵とも渡り合えると思ったのだが、ドクター
がこれほど用意していたとはな。私の計算が甘かった。)」

虚しくなった。自分は幻想郷では圧倒的に強い存在であり、今は守
る存在であることを自負していたのだが、にとりを守れないとわかっ
てしまったからだ。

セ「お前たちの勝ちだ、降参する。」

妖キ「デハ、カクゴ。」

セ「だが、タダでは死なん。」

セ;「フェニックスダイナマイト」

ボウツ!!

セ「これが私の能力、〈誰の技でも習得する程度の能力〉だ。」

妹紅の技を使うことにした。

セ「私が使えば核は吹き飛ぶだろう。しかし、にとりを守るためなら惜しくはない。」

「さあ、勇気のある者だけかかってこい！」

最後に一目にとりを拝みたかったが、叶いそうもない。
セルは覚悟した。

セ「っ！誰だ！」

しかし、まさかの助っ人が現れた！

? ; 「トラップシューター」

ボボボボツ!!

妖キ「グッ！」

咲キ「ナニツ！」

いくつか被弾した。

セルは身体の火を消した。

亜「セルさん、私も一緒に闘うっす。」

なんと、今まで行方不明だった霧雨魔理亜ではないか！

セ「霧雨魔理亜、今までどこに…。」

亜「バトルシミュレーターで修行しながら身を隠してたっす。勿論にとりさんに協力してもらってたっす。」

「でも私は決めたっす。にとりさんを守るって…!」

セ「何を考えているかは知らんが、背中には任せたぞ。」

亜「承知っす! 私は咲夜さんの偽物を相手するっす!」

セ「なら一つ助言する。その十六夜咲夜は時を止める能力を持っていないぞ。」

亜「それは有難いつす。」

咲キ「ヒトリフエタトコロデ、」

妖キ「オナジデス。」

セ「ふん!」

ズツ

斬られた右腕を再生させた。

セ「はあっ!」

ヴンツ!!バチツ!!バチツ!

亜「おおっ!!」

ヴンツ!!バチツ!!バチツ!

セルはフルパワーを出し、魔理亜は超サイヤ人2に変身した!

亜「先生、すいません…。」

セ「?」

妖キ;断迷剣「迷津慈航斬」

刀剣を一瞬伸ばし振り下ろした!

セ「ナメるな!」

セ;「セルブレード」

ギンツ!!

気を込めた両腕で斬撃を食い止めた!

妖キ「ナゼ、ワタシノヒトタチガウデナンカデ。」
セ「クウラの部下の技だ。そいつは片手だったがな。」
妖キ「チツ！」

妖夢キラーの刀剣が縮んだ。

妖キ「ハッ！」
セ「ずあっ！」
カンツ！カンツ！カンツ！

刃物と化したセルの両腕と、妖夢キラーの双剣が何度も交えた。

妖キ「クツ！」
カンツ！！
セ「ぬうっ！」
セルが弾かれた！

妖キ「ソコデス！」
妖キ；剣伎「桜花閃々」

高速移動でセルに斬りかかった！

セ「っ！」
妖キ「ッ！」
ゲシツ！！
妖キ「ガッ！」
ザザザツ！！
セ「ぐっ！」

寸前で躲し、妖夢キラーの背後から蹴つ飛ばしたが、セルもダメージを受けた。

斬り抜けた後に時間差でダメージを与える。それが剣伎「桜花閃々」である。

セ「一対一なら負けんぞ！」

セ；「連続エネルギー弾」

セ「そらそらそらそらっ！」

ボボボボッ!!

妖キ「ッ！」

キンッ！キンッ！

妖夢キラーは振り返り、上へ飛んで避けながらエネルギー弾を弾いた。

その隙に、

セ；「太陽系破壊かめはめ波」

ゴゴゴゴゴゴ・・・

セ「かー、めー、はー、めー…」

妖キ「フン」

セルから目を離さなかった。しかし！

ヒュンッ!!

妖キ「ナッ!!」

「波ああああつ!!」

ズアッ!!

瞬間移動で目の前に来るとは予想外だった。

上に向けて放ったかめはめ波は、妖夢キラーを消滅し宇宙の彼方へ飛んでいった。

セ「技量の差、だ。私に技量で勝る者は居ないと思うがな。」

一方。

咲キ；傷符「インスクライブレッドソウル」

咲キ「ハッ！」

瞳を紅く染め襲いかかった。

亜「当たらなければ問題ないっす！」

亜；「マスターストーム」

ブオオオツ!!

咲キ「グッ！」

八卦炉を手に全力で腕を振るい、風圧を発生させた！

咲夜キラーは耐えられず、体勢を崩した。

亜「今回ばかりは本気で行くっすよ！」

亜；「マスターキャノン」

亜「やあっ！」

ゴオツ!!

咲キ「アガッ！」

腹に命中し、マスターキャノンごと付近の山にぶつけられた！

亜「まだっす！」

バシユツ!!

咲夜キラーへ迫った。すると、

咲キ；奇術「真・幻惑ミスディレクション」
ドドドドツ！

ナイフ型の弾幕を飛ばしてきた。

亜「それも予測済みっす！」

亜；魔符「真・スターダストレヴアリエ」
ドドドドツ！

殆どが相打ちに終わった。

咲夜キラーの元へたどり着き、胸ぐらを掴んだ。右の拳に気を込め、

亜「これで終わりっす。」

咲キ「……。」

トドメを刺そうとした。だが！

咲キ；「スカーレット・アタック」

左の掌を魔理亜に向け、

ドオツ！！

不意打ちした。

亜「言った筈っす。これで終わりっす。」

咲キ「！！」

ボロボロになりながらも、左手はしっかり胸ぐらを掴んでおり、右

手には気が込められたままであった！

亜；「ギガンティックスパーク」

亜「やっ！」

ゴオオオオツ！！

咲夜キラーは、山と共に跡形もなく消滅した。

亜「この力はパパ譲りつす。人形にどうにかできるものじゃないっすよ。」

魔理亜は完勝した。

セ「終わったか？」

亜「終わらせたっす。」

セ「私はにとりの所へ行く。」

亜「私も行くっす！」

セ「そうか。・霧雨魔理亜。」

亜「なんすか？」

セ「感謝する。」

亜「へッへッへ。」

劣勢からの大逆転を果たした2人は、研究所へ帰っていった。

.....

「惑星??? 霊夢転送地付近」

天「霊夢ー！」

漸く、霊夢の気が残る場所に到着した。超サイヤ人2は解けていない。

しかし、彼女の姿が見当たらない。辺りを見渡すと、大きな湖のような場所に霊夢と思しき影が見えた。

天「霊夢ー、無事だったんだね！」

顔がよく見える程近くまで行くと、それが霊夢ではないことがわかった。所々肌がめくれているが、そこは赤色ではなく灰色だったからだ。

同時に湖から何者かが現れた。

天「！俺？」

ド「その通りだ。」

天「お前は誰だ！」

ド「お前と話すのは初めてだったな。」

「私はDr. ギーク。お前を転送した円盤やメタルクウラを作った者だ。」

天「お前だったのか。どこにいる！」

ギ「その2体を倒したら教えてやろう。」

天「こいつらは…。」

ギ「お前たちのデータを基に作った人造人間だ。悟天キラーと霊夢キラーと名付けてある。」

天「こいつが偽物なら、霊夢h」

ギ「沈めた。」

悟天は絶句した。

ギ「私の作品によって博麗霊夢はこの湖に沈んだ。」

天「…。」

ギ「さあ、この2体の人造人間と闘え。仇は取りたいだろうか？」

天「霊夢…。」

目の前が真っ暗になり、下を向いた。

ギ「お前たち、もう殺しにかかっていいぞ。」

霊キ「リヨウカイ。」

天キ「マカセテ。」

天「霊夢…。」

ギ「？」

空気が揺らぎ始めた。湖の水面が徐々に強く揺れていく。

ギ「お前、まさか…。」

下を向いたまま、髪がどんどん伸びていく。

天キ「サセナイ！」

ギ「待て！近づくな！」

天キ「エ？」

天「ウウウウ…。」

「霊夢ウウウツ!!」

ヴンツ!!バチバチバチツ!!

天キ「ウワア！」

キーン…ドゴツ!

悟天から放たれた爆風で、悟天キラーは吹き飛ばされ岩盤に叩きつけられた。

霊キ「ナニヨコレ！」

髪は腰まで伸びきり、眉毛が消え、戦闘力が格段に向上した!

ギ「データと見比べるとどこか違うが、こいつはもしや…。」
「ウガアアアツ!!」

白目を剥いたまま、再び雄叫びを上げた。
悟天はどうなってしまったのか!?

第39話へ、続く!!

第39話 「お前が大事だから」

くあらすじく

メタルクウラを討ち、咲夜キラ、妖夢キラと相手をし、窮地に追い詰められるセル。そこへ、ずつと隠れていた魔理亜が助けに来てくれた。そのおかげで何とか撃破した。

一方悟天は、霊夢が元いた場所に到着した。しかし間に合わなかった。オンリヨウキに力を奪われた霊夢は、悟天キラと霊夢キラに敗れ湖に沈められていたのだ。

その時、激怒した悟天は更なる変身を遂げた！

どうなってしまうのか!?

幻想天霊伝説 第39話

〔湖〕

天「ガアアアッ！」

霊キ「フン！」

霊キ；霊気「博麗かめはめ波」

「カーメー、ハーメー…」

霊夢キラは至近距離で攻撃を当てようとしたが、

天；「超爆発波」

「ガアアアッ!!」

霊キ「ナッ！」

ゴオオッ!!

怒り狂った悟天は突然、超爆発波を放ち霊夢キラをあつという間に消しとばしてしまった！

ギ「これは、想像以上だ。素晴らしい。」

「私が欲しいデータは取れた。此方はもういいだろう。」

Dr. ギークは通信を切った。

狂える戦士の次なる目標は、悟天キラーだ。

天「ッ！」

バシユツ!!

天キ「クソツ！」

ドゴツ!!

...

「惑星ギーク 地下施設」

魔「お腹いっぱいなのぜえ。」

レイ「魔理沙さん食べ過ぎですよ…。」

地下に誘導された魔理沙・レミア・アリス・文・早苗・レイは、沢山の食べ物にありついていていた。

地下に案内されていた一行が最初に入った部屋は、大量の料理が用意されていたのだったからだ。

あれほど警戒していただけに、拍子抜けである。

早「美味しかったですね。」

ア「毒とか入ってないかしら。」

レミ「それは大丈夫よ。毒があれば私ならわかるから。」

レイ「向こうの意図が全く読めませんね。」

文「食料を提供してくださったのは有難いですけどね。」

早「もしかして、私たちと仲良くしたいのでは」

ギ「夕食は満足していただけたかな？」

早「ハアツ☆」

早苗の発言を遮り、声が響いた。

魔「お前、何のつもりだぜ！」

ギ「申し遅れた。私の名はD r. ギーク。天才科学者だ。此度は惑星ギークへようこそ。」

魔「人の話を聞けってんだ。」

早「ええ…。」

早苗は困った。

レイ「聞く耳持たずってやつですかね。」

早「私に対してはみんなそうじゃ」

ア「自分で天才って…。」

ギ「事実だ。もつと褒めろ。」

早「ハアツ☆」

文「これはとんだ天狗野郎ですね。」

レイ「…文さんも天狗ですよ。」

文「あーう。」

レミ「もう言ってくれないかしら。」

ギ「そうだったな。私がお前たちに食事を提供したのは他でもない。万全の状態で闘ってほしいからだ。」

魔「随分と余裕なところが腹立つのぜ。」

早「そんなこと言ったら後悔しますよ。」

早苗にはその根拠がある。

レイ「よほどの自信があるようだな。」

ギ「まあ聞け。オンリヨウキを除けば、お前たちに闘ってもらおう私の作品はあと2つだ。」

ア「オンリヨウキ？」

魔「たぶんあの憎たらしい青い奴だぜ。」

ギ「話は長くしたくない。さあ、そこにある扉を開け進みたまえ。」

声は聞こえなくなった。

レミ「ちっ、あと数時間あれば、レイの能力は回復したのに。」

レイ「あと2回：慎重に使わなければいけませんね。」

文「あと2作品って言ってたので1回ずつで終いですね。」

レイ「それぞれ一回で敵を倒せばいいのですが…。」

魔「不安を口にしたらダメだぜ。」

魔理沙はレイの肩をポンと叩き、ニツと笑った。

レイ「そうですね！全力を尽くします！」

レミ「(大丈夫。未来を見なくてもきつと。)」

一行は扉を開けて進んだ。

・・・

「にとりの研究所」

に「ふあゝ。」

セ「起きたか。」

に「あ、セル。」

亜「にとりさん、おはようございますっす。」

に「魔理亜ちゃんも。ここにいてるってことは、闘う時が来たんだね。」

亜「そうっす！もう終わったっすけど。」

に「えっ！そうなの？」

セ「霧雨魔理亜に助けられた。」

に「だから傷だらけなんだね。」

「あゝ、寝てないで撮影すればよかった。」

セ「またそれか。」

亜「にとりさんらしいっすね。」

に「それよりも2人とも、ありがとう。」

亜「にとりさんが生きてるだけで十分っすよ。」

セ「感謝するがいい。」

魔理亜もセルも満足気だ。

に「魔理沙たちは地下に行つたみたい。他のみんなも纏まつてきたね。」

セ「それは良かったな。」

に「！ 大変だ！ 霊夢さんをつけていたカメラが破壊されてる！」

セ「なに？」

に「これじゃデータはおろか生存すら確認できない。」

亜「・・・。」

に「これは、悟天君？ 髪が物凄く長くなつてて、狂つてるみたいだけど。」

セ「そいつはまさか、超サイヤ人3！」

に「知ってるの？」

セ「少し形が違う気がするが、おそらくそうだろう。」

に「纏まつてきたのに、ややこしくなってきた…。」

亜「にとりさん、私はまたバトルシミュレーターに籠るっす。」

に「わかつたよ。」

セ「私も暫く休憩するぞ。流石に今回は応えた。」

に「お疲れ様。」

セルは椅子に凭（もた）れた。

に「霊夢さん、無事でいて…。」

…

〔湖〕

妹「やっと追いついた。…あれは…。」

妹紅はやっと湖に到着した。しかしそこにいたのは、自分が追いかけていた悟天ではなかった。

妹「あのロン毛が、あいつか？もう1人もあいつに見えるけど。」

髪の毛の長くない方は長い方に一方的にやられていた。

妹「！ こっちに飛んでくる！」

ドガッ!!

悟天キラーが此方へ殴り飛ばされ、地面に激突した。

妹紅は、それは悟天ではないとわかった。千切れた腕の断面が生き物ではなかったからだ。

妹「こっちが偽物か!？」

天「ウガアアアッ！」

妹「うわっ！」

咄嗟に距離を取った。

ドゴドゴドゴドゴッ!!

妹「ぐっ！」

悟天は倒れている悟天キラーにラッシュしていった。妹紅が見ても何回殴ったかわからないくらいスピードだった。その衝撃波は距離を取った妹紅にまで届いた。

妹「粉々になった……。本当に、あの女たらしなのか？」

天「ガアアアッ！」

悟天の胸が光った。これは、自爆する時の光だ！

妹「やめろ!!」

ヴンツ!!バチツ!バチツ!バシユツ!!

恐れず悟天に近づき、必死に呼びかけた。

妹「お前がそれを使ったら死んじまう!それだけじゃない。この星も無事かわからない。」

天「ガアアアッ！」

妹「この星まで吹き飛んだら、みんな死んじまう!目を覚ましてくれ！」

しがみついて呼びかけても、反応はない。

天「ウガアアアッ！」

妹「悟天!!」

天「ガアアアッ！」

バチンツ!!

天「アアッ」

狂戦士に、想いを込めたビンタをした。

妹「馬鹿野郎。お前を失ったら悲しむ奴がいるってことが、なんでわからないんだ！」

妹紅は泣いていた。誰かの為に泣いたことなどいつ以来だろう。いや、あつただろうか。

天「ア・・・」

スウ・・・

その想いに応えるかのように、悟天の髪は短くなり、眉毛も戻り、目も戻った。

天「俺は・・・」

妹「・・・」

ス・・・

妹紅も変身を解いた。

天「妹紅か、元に戻してくれてありがとう。」

妹「全く、世話の焼ける奴だな。」

泣きながら笑顔を作った。

天「なんで泣いてるの？」

妹「う、うるさい！」

「それより、何があつたんだ？」

天「・・・霊夢が、死んだ。」

妹「なんだって・・・！」

少しの間、沈黙が続いた。

それを破ったのは、

チ「おくい、姉貴〜。」

妹「チルノ、追いついたか。」

チルノだった。

チ「あ、兄貴もいる!どうしたの?」

天「霊夢がやられちゃってね。」

チ「そんな…。」

天「俺は見えてないんだけど、あのドクターが言っててね。湖に沈めたって。」

チ「あたい、探してくる!」

バシユツ

天「…。」

悟天はわかっていた。霊夢はもういないということ。

妹「…!」

ギユツ

天「!？」

妹紅は悟天の背後から抱きついた。

妹「私が、側にいるから…。」

「お前だけは、死なせない。」

天「妹紅…。」

チルノが戻って来た。

チ「やっぱり、居なかった。」

天「そうか…。ありがとう。」

チ「うん。」

「？ 姉貴、何してるの？」

妹「！ いや！ 何でもない！」

顔を真っ赤にし、慌てて腕を離した。

チ「顔赤いよ？ でも、それもそうだよ。霊夢が死んじゃったんだから悲しいよね。」

妹「そ、そういうことだぞ。」

チルノは純真無垢だ。

天「先を急ごう。」

妹「ああ。」

チ「うん！」

3人は歩いて行った。

・・・

「地下施設第2ホール」

扉を開けると、5mの細い道があり、その先に大きなホールが広がっていた。

早「大っきい場所ですね。」

レミ「闘いやすいところね。」

魔「万全の状態で闘ってほしいってのは本当みたいだぜ。そこもまた腹立つのぜ。」

レイ「ぎゃふんと言わせてやりましょう。」

文「・・・あ、何ですかあれ。」

ア「大きい何か、降ってくるわ！」

ドオオンツ!!

天井から全長10mの何かが降ってきた。100m程距離を置いていたが、ここまで衝撃波が伝わった。

それは、一言で表すなら「塊」であった。イノシシのような凶体、4本の脚、鬼のような人寄りの顔、そして体中から無造作に生えている顔や腕や脚、それらが1つで1体の生物なのだ。

無造作に生えているそれは、かつて悟空達が倒してきた敵戦士である。まさしく、絵に描いたような化け物だ。

レミ「何よあれ…。」

レイ「まさに化け物って感じですね。」

その時！

パカッ

レイ「！」

魔「あっ！」

突然レイが立っていた床が開き、真つ逆さまに落ちていった！

レイ「しまったーっ!!」

レミ「レイっ！」

レイを掴もうとしたが、開いた床が閉じた。

ア「こんな原始的な罠があったなんて。」

文「だから能力を使つてないレイさんを狙ったんですね。」

早「！ こつちに來ます！」

巨大な怪物が此方へ走つてきた！

魔「行くぜ！」

魔&ア&文「はああっ！！」

ヴンツ！！バチツ！バチツ！

レミ「はああっ！！」

ヴンツ！！ジリジリツ！！

早「行きますっ！！」

カツ！！ビュオオオツ！！

戦いの火蓋が、切つて落とされた！

ギ「あれは元々、合成生物を作ろうとして調和できなかつた試作品だ。だが失敗後、ある指示だけを仕込みことうして兵器にできた。」
「名は、オオコロウリ。」

第40話へ、続く！

第40話 「唐突に」

くあらすじく

怒りで我を忘れた悟天は、悟天キラー・霊夢キラーをあつという間に倒してしまった。

そこへ、悟天を追いかけていた妹紅が到着した。無意識に自爆しようとしていた彼に対し、彼女が必死に呼びかけても馬耳東風であった。

それでも止めたかった妹紅は、涙ながらに平手打ちした。その甲斐があつて、悟天は正気を取り戻すことができた。

チルノとも合流し、3人は次の戦場へ向かった。

一方、魔理沙たち6人は、十分な食事をDr. ギークからご馳走になつていた。それも良質な食物であつたのだから尚更だ。

食事を終えた6人にギークが呼びかけ、次の部屋に案内した。そこは大きなホールとなつており、いかにも戦闘実験というに相応しい部屋であつた。

そんな折、突如天井から謎の生物が落下した。それは、様々な生物が無造作に混ぜられた怪物であつた。名は、オオコロウリ。

怪物の登場と同時に、レイ・ブラッドは落とし穴にはまつてしまつた。

どうなる魔理沙たち！

幻想天霊伝説 第40話

「地下施設第2ホール」

レイ「くそ！油断した！」

レイは真つ逆さまに落ちていた。幸い穴は深く、まだ地面と激突はしない。

レイ「残り2回だが使うしかない！」

ボウツ!!

能力を発動し、戦闘力はレミアアの最大戦闘力まで上昇した！
これで飛べるようになったので、ホールまで急上昇した。

レイ「早く戻らなければ…！」

ギ「少し待ってもらおうか。」

穴の中だがギークの声が聞こえる。

レイ「何だ！」

ギ「これは実験だ。主に私の作品のな。」

「お前がすぐに戻り、私の作品があっけなく倒されてしまうとデータ
が取れない。暫くその穴の中で大人しくしてもらおう。」

レイ「そんな話、聞く訳が無いだろう！」

ギークの要求を断り、蓋まで飛んだ。

飛んだ勢いで破ろうとしたが、

ゴンツ！

レイ「うぐっ！」

ビクともしなかった！

レイ「そう簡単には破れないか…！」

ギ「当たり前だ。オンリョウキですら本気を出さなければ破れない
穴だ。」

レイ「つまり何をしても無駄ということか。」

ギ「そういうことだ。」

「…いや、それはお前次第だな。確かに待てとは言ったが、ただ待つ
ているだけでは取り返しをつかないことになる。」

レイ「どういうことだ。」

ギ「オオコロウリは残念な作品でな。フリーザなども混ぜたが、知能は悲しいほど低かった。所詮は四足歩行の劣等種。」

「だが私は、2ヶ月前にある指示だけを仕込むことに成功した。今回はその本番ということになる。」

レイ「ある指示？」

ギ「この中の誰かを集中して殺しにかかるように、という指示だ。その誰かまでは教えられない。」

レイ「何だと！今すぐやめさせろ！」

ギ「実験結果が出れば、そこから出してやる。ではな。」

通信が切れた。

レイ「くそ…。お嬢様、皆さん、どうかご無事で…！」

ゴツ!!ゴツ!!

いち早く知らせるため、何度も蓋を攻撃した。

一方。

魔「危なかったぜ！」

文「いきなり突撃して来るとはやる気満々ですね。」

早「アリスさんは？」

ア「ここよー！」

オオコロウリの突撃を躲し、アリスは扉からホールまでの細い道に投げ込んでいた。それ以外は上を飛んだ。

レミ「あの化け物、マヌケね。まだアリスを捕らえようとしてるわ。」

オオコロウリは大きすぎる故に、逃げ込んだアリスに牙が届かなかった。

魔「ていうか早苗、なんだその姿は!？」

早「説明は後です。」

ア「今のうちに攻撃して！」

魔「わかったぜ！」

魔；魔空「真・アステロイドベルト」

文；塞符「山神渡御」

レミ；「デモンズディナーフオーク」

ドドドドツ!!

3人同時に攻撃を行った。

ドカーンッ!

レミ「? 当たった。」

文「簡単に当たりましたね。」

魔「え? 狙ってなかったのか?」

レミ「避けられるつもりでやったのよ。魔理沙、まさか本気で…。」

文「魔理沙さんったら素直ですね。」

魔「う、うるさい！」

レミリアと文は、避けられた後に強い一撃を当てるつもりだった。

文「こっちに気づきましたよ。」

オコ「グオオオッ！」

バツ!!

羽を飛ばたかせ、4人へ飛び上がった、いや、跳び上がった。しかし、簡単に躲された。

レミ「遅いわね。」

文「あれ？羽を動かしてるのに落ちていきますよ。」

オオコロウリは、遅くないスピードで落ちていった。

早「おそらく、身体が重すぎるせいでしょう。」

魔「頭悪いのか？」

レミ「でしょうね。でも、気を探すことはできるみたいね。」

文「それなら皆さん散らかりましょう！」

広いホールの中を、高度も分けて散らばった。

魔「それじゃあ頼んだぜ！」

レミ「では私から、はああっ！」

ジリジリツ!!

オ「グルルツ！」

気を解放したレミアアへ向かって駆け出した。

早「させません！」

早；「ゴッドブレイカー」

ポオツ!!

オ「グオツ！」

オオコロウリの身体に穴が空いた！

早「今です！」

魔；恋心「ダブルスパーク」

魔「ダブルスパークっ！」

ドオオオツ!!

オ「グガアアツ！」

オオコロウリは倒された。

魔「やったぜ！」

ア「やったわね。」

隠れていたアリスもホッと一息をついた。
しかし。

レミ「？ 何あれ。」

文「床に付着した化け物の体液が、集まっている？」

見入っている内に体液は細胞分裂を繰り返し、1分程度で元に戻ってしまった！

オ「グオオツ!!」

早「厄介ですね。空中で完全に消さなければならぬということですか。」

レミ「相手はあまり強くないわ。ゆっくりと確実に倒す方法を見つけましょう。」

魔「ちっ！しづといやつだぜ。」

ア「(いえ、戦闘力が上がったわ。あの再生を繰り返されたらいずれ負けてしまう。)」

「(あの技を使うしかないわね。)」

詠唱を唱え、右手に光を集めた。

くく

私の名前はアリス・マーガトロイド。魔女よ。

私は、究極魔法の研究をしていた。立て続けに起こる異変に、霊夢だけで対応しきれぬかしら。そう思って立ち上がったの。

そのためには力が必要だった。生物や機械、さらには霊体すら関係なく確実に消し去る絶対的な力。

これは魔導書で見つけたんだけど、習得するためにはあまりにも大きい副作用を伴うものだった。知人と会うと、当人にとって一番なりたくない姿になる、というものよ。

だから私は誰にも何も告げず、この魔法を完成させた。独りぼっちでも構わない。これを使う時が来てしまったら、私はどうなっても甘んじて受け入れる。その筈だった。

そして、遂に完成したわ。

それから誰とも会わずに数日経ったある日、誰も居ないことを確認して家を出た。でも次の瞬間、私は空中に居て、目の前には箒に乗った魔理沙が居た。

魔理沙と激突して一緒に落ちていったんだけど、お互い怪我はあまりしなかった。だけど私はそこで意識を失ったの。

後から魔理沙が言ってたけど、そこから私はとんでもない変態になつたそうよ。

いろんなことがあったけど、幸運にも意識はこの通り戻って、みんなと一緒に闘うことができています。

この力は、幻想郷のみんな、そして愛弟子の魔理沙のために使う。言い忘れたわね。この技の名は、究極魔法「スターダストブレイカー」。

くく

レミ「しつこいわね！」

レミ；冥符「真・紅色の冥界」

ドドドドッ!!

オ「グウ…、グオオツ！」

レミ「こつちへ来たわ。今よ！」

早；「バーニングストーム」

早「そこです！」

ドオツ!!

ダメージを与えたが、

オ「グルル…」

文「さつきより強くなってませんか？」

魔「まるでサイヤ人なのぜ。」

オ「ッ!!」

オ；「拡散エネルギー波」

ドツ!!

突然、身体のあるところからエネルギー波を放出した！

レミ「なっ！」

魔「しまった！」

文「うわつと！・・・うわつ！」

早「っ！」

ドカーンツ!!

シユウウ・・・

4人ともオオコロウリとの闘いに慣れてしまったせいで、至近距離で闘っていた。

それが災いし、魔理沙は避けられずダメージを受け、レミアはシヨックで変身が解けるとともに気絶し、文は2度しか回避出来ずに大ダメージを受けた。早苗は、当たりはしたが殆どダメージを受けなかった。

早「皆さん！」

オ「グルル」

大口を開け気絶したレミアを喰おうとした。

早「こつちです！貴方の相手は私です！」

ビュオオオツ！！

オ「ツ！グオオオツ！」

バシユツ！！バツ！！

レミリアを無視し、後方へ飛ぶ早苗を追いかけた。

早「アリスさん、今が好機です！」

ア「わかったわ。ありがとう。」

早苗は、アリスが攻撃の準備をしていたということを知っていた。

早「遅い！私はここです！」

オ「グオオオツ！」

ア「・・・できた！」

ア；究極魔法「スターダストブレイカー」

右手の光は、7色に輝いた！

ア「あの化け物は強い気に反応してる。早苗の凄まじい気に誘われてる今なら、私が気を解放しても気づかれない。」
ヴンツ！！バチツ！バチツ！

超サイヤ人G2に再度変身し、細い道からゆっくりと出た。

ア「これで、終わり！」

もう一度右手を見てから前を向いた。

ア「え」

ガッツ!!

早「アリスさん!!」

魔「？」

文「！」

アリスは、オオコロウリに右腕以外を一瞬にして喰われた。

なんと、早苗を追いかけていたオオコロウリが急に方向転換し、今までにないスピードで咆哮もなしにアリスへ喰らい付いたのだ!

早苗は喰われる前に叫んだのだが、声が届いたのは喰われた後だった。

オ「ガウ」

ガチツ、グチツ

さも美味しそうに噛んでいる。

魔「お前ええええっ!!」

魔；彗星「真・ブレイジングスター」

魔理沙は一瞬、何が起きたかわからなかった。状況を把握できた途端箒に乗り、突撃した!

早「待つてください!そのままでは」

魔「うるせええええっ!!」

食事中的オオコロウリは見向きもしない。

レイ；「ビッグ・バン・アタック」

レイ「これならどうだーッ!!」

ドオツ!!バキツ!!

様々な攻撃を使い続け、漸く蓋を破ることができた。

レイ「…!?？」

出てみると、最初に見た化け物が目の前で伏せをしている。

魔「どけええええっ!!」

レイ「うわっ！」

レイをも巻き込む勢いで突撃したが、

バシツ!!

魔「がはっ！」

異形の尻尾で払われた。

早「レイ君、話は後です。攻撃してください！」

レイ「は、はい！」

レイ；「魔閃光」

レイ「くらえ！」

ズオツ!!ドカーンツ!!

オ「グオオツ！」

自動的に早苗と同等まで戦闘力を上げたレイの攻撃は、よく効き軽く吹っ飛んだ。

レイ「よし！」

ふと目を右に向けると、手のひらが光っている右腕が落ちていた。

早「その腕を魔理沙さんに渡してください！」
レイ「わかりました！」

倒れている魔理沙に駆け寄った。

レイ「魔理沙さん、大丈夫ですか？」

魔「大丈夫じゃなくても、あいつは私が倒す！」
バシュツ!!

険しい表情だった。光る腕を持ち、オオコロウリへ飛んでいった。

魔「うおおおつ!!」

オ「グオオオツ!!」

一直線にオオコロウリの口内へ入っていった。

レイ「ま、魔理沙さんっ!!?」

文「そんな！」

早「・・・。」

カツ!!

オ「グアアアツ!!」

オオコロウリの身体が光り始めたかと思うと、全身からさらに強い光が漏れた。

そして、光と共に跡形もなく消え去った!

レイ「やった!!?」

この光景を見て気づいた。この技は、ジャネンバを一撃で葬ったあの技と同じである。

オオコロウリが消え去った場所から俯（うつむ）いた魔理沙が現れ

た。

ヒユウウ・・・

ス・・・

早「魔理沙さん。」

文「魔理沙さん…。」

変身を解き、魔理沙へ近寄った。

魔「・・・。」

レイ「…どうしたんですか？」

今まで穴に居たレイはイマイチ状況をのみ込めない。

文「レイさん、その、周りを見渡せばわかるかと…。」

レイ「え…？」

見渡すと、早苗の他には倒れているレミリアだけを確認できた。

レイ「お…お嬢様っ!!」

気を失っているレミリアへ駆け寄った。

早「大丈夫です。死んではいません。」

レイ「僕が不甲斐ないばかりに…」

魔「よかったじゃねえか。」

文「魔理沙さん。」

魔「大事な奴が生きてて、よかったじゃねえか!」

腕を握りしめ、泣きながら怒鳴った。

レイは、レミリアの腕は無事であることを確認した。

レイ「…その腕はアリスさんの…？」
早「…はい。アリスさんのおかげで勝てました。」
魔「う…うぐ…。」

本作ではあまり触れていないが、魔理沙とアリスは切っても切れない縁があった。

そんな仲間を突如として失ったのだ。

ギ「実験成功だ。」

魔「！ お前え！」

ギークは満足げにそう言った。

文「許せません…！」

レイ「何の為にこんな事をするんだ！」

ギ「全ては実験のためだ。レイ・ブラッド、ここで答え合わせだ。あの指示とは何か？もうわかったな？」

レイ「…アリスさんを殺すことか。」

ギ「名答。あんな厄介な技を最高傑作に使われては困るからな。」

早「最高傑作？」

ギ「ここまで来たお前たちには、その最高傑作と闘ってもらおう。」

「勿論、私とも対面できるというわけだ。」

魔「お前は絶対殺すからな！」

レイ「その最高傑作もろとも叩き潰してやる！」

文「アリスさんとは共に爆風から逃げた仲です。仇は討ちます！」

早「貴方の野望もここまでで」

レミ「たっぷり仕返ししてあげるわ。」

早「ハアツ☆」

いつのまにかレミリアが目を覚ましていた。

レイ「さあ、行きましょう！」
一同「おう！（はい！）」

ギークが出した地下への階段を、5人は駆け下りた。

第41話へ続く…。

第41話 「フュージョン！ 白銀の剣士 桜薇」

くあらすじく

レイが落とし穴に落とされ残された5人は、ギーク曰く失敗作のオオコロウリに対し優勢であった。

しかしオオコロウリは、倒しても倒しても蘇り、その度に力を増す厄介な体質だった。

そこで、身を潜めていたアリスは究極魔法を使うことを決意する。彼女が大変態になったきっかけである。

早苗が隙を作り究極魔法を繰り出そうとした矢先、突然標的をアリスに切り替えたオオコロウリは、アリスを、右腕を残し一呑みしてしまった！

このタイミングでレイは穴から脱出し、オオコロウリに強撃したことで、魔理沙に、力が込められた右腕を手にする時間を与えた。

右腕を持った魔理沙はオオコロウリの体内に入り、見事消し去ることができた。

アリスを失った5人は、ギークに言われるがままさらに奥へ進んだ。

魔理沙たちが激闘を繰り広げていたその頃、咲夜と妖夢は？

幻想天霊伝説 第41話

「咲夜&妖夢転送地」

依然として、妖夢はオンリョウキに頭を踏まれ、咲夜はその状況下で攻撃出来ず睨みつけているだけであった。

オ「どうしますかア？ドクターの奴隷になってくださるなら、命は保障しますよオ。」

咲「くだらない。私の主人はお嬢様ただ一人です。」

妖「それは私も同じです。私には幽々子様がいる！」

オ「そういうでしょうねエ。他の世界のアナタ達もそうでしたか

ら。」

咲「他の世界？」

オ「アナタにはわからない話ですよオ。グヒヤヒヤヒヤッ！」

その時、妖夢が押さえつけられていた地面が崩れ落ちた！

オ「オヤ？」

咲「！」

妖夢は崩れる地面と一緒に落ちた。

そして、別の地面から半霊と共に現れた。

オ「なるほどそう来ましたかア。」

妖「貴方が喋ってくれたおかげで、半霊でも間に合いました。」

咲「やるじゃないの。」

妖「当然です。」

オ「それでエ、どうしますウ？わたくしに加えメタルクウラも10体いますが。」

咲「勿論、纏めて相手を致します。」

妖「私に斬れぬものなどあんまりないですから、貴方だって斬れま
す。」

オ「グヒヤッ、それじゃあ頑張ってくださいアい！」
バシユッ!!

10体のメタルクウラたちが一斉にかかってきた。

オ「(モシ、10体を一気に斬り伏せればその隙にわたくしが殺す。
回避すれば片方を殺す。メタルクウラに勝てなければそれ以前の問
題。勝負アリですねエ。)」

実はしっかり考えていた。

妖「っ、どうすれば。」

咲「・・・これしかないわね。」

「私に従って！」

妖「・・・わかった。」

次の瞬間、2人を囲んで団子になったメタルクウラたちが止まった！

オ「ホウ、自力で止めて盾にする作戦デスカ。なるほど、それなら直接身体を裂かれることはありませんねエ。」

「デスが、いつまで持ちますか？」

ニヤニヤしながら眺めていた。

・・・

「妖怪の山麓」

椛「もうすぐで見張り交代の時間です。早く戻って文さんの状況を確認しませんと・・・！」

今は幻想郷中で、彼女らの戦闘がにとりによってオンエアされている。麓の上空を何かが飛んで通り過ぎた。

椛「飛妖隊の皆さん、今日も訓練してるんですね。でも、サイヤパワーがなければ意味ないですよ・・・。」

飛妖隊とは、烏天狗やその他空を飛べる妖怪たちの言わば軍隊であ

る。正式名称は飛行妖怪戦闘部隊。
意味がないというのは自分も同じなので、半ば自虐である。

・・・

〔地底〕

地底には、人間や妖怪が人里から避難してきていた。

リ「チルノ、大丈夫かな。」

ル「大丈夫じゃないのかー?」

ミ「兄さん、どこにいるんだろう。」

リ「兄さんって誰だ?」

ミ「何言ってるの? 兄さんは…兄さんだよ。」

ル「美味しいのかー?」

この3妖も思い出せないでいた。

こ「お兄ちゃんはお兄ちゃんだよ。悟天お兄ちゃん。」

ミ「それぞれ!」

ル「にいちちゃんのことだったのかー。」

リ「なんで忘れてたんだろ?」

こ「みんな変だね。誰も覚えてないんだから。」

やはりこいしだけは覚えている。

妖怪b「おい、これ見ろよ。守矢の早苗さんがめちやくちや強いぞ

!」

人b「ほんとだ! 巫女っていうか神様みたい!」

人c「頑張れー! 早苗さーん!」

この時はまだ、オオコロウリとの戦闘は映し出されていない。

こ「私はお兄ちゃんさえ死んでなければいいんだけどなあ。」

・・・

「咲夜&妖夢転送地」

オ「・・・可笑しいですねエ。」

オンリヨウキは異変に気づいた。

オ「！ シャアツ！」

ザツ!!

何もないところから剣を作り出し、群がっている10体のメタルク
ウラを一太刀で斬り飛ばした。

そこに咲夜と妖夢の姿はなかった！

オ「やってくれましたねエ・・・。」

2人がいるはずの場所には、穴が開いていた。その穴はただ開いて
いるのではなく、何処かへ繋がっている。

オ「キエエエツ！」

バシユツ!!

穴へ入り、空洞を飛んで行った。

・・・

咲「撒けたわね。」

妖「どうして気づかなかったのですか？」

咲「それはあいつの戦闘力のおかげよ。」

「私が時を止めて止まったのはメタルクウラだけ。それに気づけず、私たちがメタルクウラと取っ組み合っているように見えた。」

「あとは気を消して穴を通るだけ。」

変身も解いている。

妖「やるじゃないですか。」

咲「穴を掘ったのはあんたの半霊よ。」

妖「・・・らしくないじゃないですか。」

照れた。

妖「とは言え、このままでは勝てません。穴から離れたので時間はありますが。」

咲「・・・あれを試すしかないわ。」

妖「あれ？」

咲「霊夢が教えてくれた、フュージョンよ。」

霊夢は第33話で2人に教えていた。

妖「あれをやるんですか？」

咲「私の能力が効かない以上、これしかないわ。」

妖「すっごく恥ずかしいんですけど。」

咲「それも言ってられないわ。」

遠くから2人が出てきた穴を見ると、

ドカーンッ!!

オ「ドコダアアアッ！」

穴を破壊し、オンリヨウキが出てきた。

咲&妖「・・・。」

オ「ナメヤガツテエエエツ！」

じつと息を殺していると、再生したメタルクウラ達がオンリヨウキの元へやってきた。

オ；「フルパワーエネルギー波」

オ「ジャマアアアッ！」

ズオツ!!・・・ゴオオオ：

咲&妖「!!」

たった1発でメタルクウラ達を消しただけでなく、ここからは遥か遠い1つの星が一瞬で破壊された！

咲「早くフュージョンするわよ！」

妖「くっ、わかりました！」

2人は距離を取った。

そして、

咲&妖「フュー、ジョン！」

妖「はっ!!」

咲「！」

チチチチ：

フュージョン成功、かと思われたが指が重なる直前、失敗を察知した咲夜は時を止めた。

咲「早く直さなければ。」

オ「！ 見つけましたよオ。」

咲夜は視線を感じ取った。

咲「よし、これで…！」

オ「キエエツ！！」

妖夢の体型を直し、自分も同じ体型になり、

咲「解除！」

ピコンツ、ヴウウウン

2人は光に包まれた！

オ「あれはまさか…。ア、ア、ア、ツ！」

オンリヨウキは迷わず光に突っ込んだが、

ドゴツ！！

オ「グアアツ！」

簡単に弾かれた！

光が放たれた場所には、メタモル星人の民族衣装を身につけ、腰に2本の剣を刺し、勇ましく立っている銀色の髪をした女戦士がいた。

オ「まさか、その姿は…！」

?? 「・・・私は、お前を斬るために生まれた、」
「幻想郷の剣（つるぎ）です！」
ヴンツ!!

その名は、桜薇（おうび）…！

第42話へ、続く!!

第42話「悪を斬り裂け！スターダストスラッシュャー！」

くあらずじく

一時は劣勢に追い込まれていた咲夜と妖夢。しかし咲夜の奇策により、窮地を脱出することに成功した。

怒ったオンリョウキが血眼になって見失った2人を探す中、2人はフュージョンすることを決意する。

フュージョンしようとしたその時、失敗を悟った咲夜は時を止め、妖夢の身体の高を修正した。そして、フュージョンは見事に成功した！

咲夜と妖夢が融合して生まれた桜薇は、オンリョウキを倒すことができるだろうか？

幻想天霊伝説 第42話

「咲夜&妖夢転送地」

オ「なるほど、テツキリお2人は水と油の関係だと思っていました
が、息は合うようですねエ。」

桜薇「・・・。」

オ「ですが…。」

ピリリリッ!!

桜薇「・・・。」

オンリョウキが消えた。

ピリリリッ!!

オ「シャアッ！」

ジャンネンバの空間移動で瞬時に背後をとり、剣を振った！

オ「・・・ナニッ！」

しかし、桜薇は斬られていなかっただけでなく、振り向いてもいなかった。ただ、2本の剣のうち1本を抜き、それを持った右手を上げていただけであった。

オ「ア、アレ...?」

ポトツ、ポトツ

気がついた時は、剣を持っていた自身の腕が地面に落ち、同時に視界が奪われた。

実は、頭部が目を境にして横に綺麗に斬られ、その上半分が落ちたのであった！

桜薇「それで不意打ちのつもりですか？」

オ「...」

桜薇「反応はないでしょうけどね。」

「拍子抜けですが、みんなとの合流を急ぐとしましょうか。」

剣を収め、その場を去ろうとしたが、

桜薇「・・・気が消えていない。」

振り向き頭と腕がない身体を睨んだ。まだ生きているのだ。

オ「流石に気づかれますか。」

そう言うと、落ちた頭部を左手で持ち上げ元の場所に戻した。驚いたことに、たったそれだけで元に戻ったではないか！

桜薇「普通の生き物ではありませんね。」

オ「勿論でエす。わたくしはドクターの最高傑作ですから。」

さらに右腕も同様に元通りになった。

オ「これは思ったよりも厄介ですねエ。このままではちよつとオ
…。」

桜薇「今度は必ず殺して差し上げます。」

オ「…では、アナタ方に敬意を持って闘いましょうか。」

「ヒャーッーッー！」

ゴキゴキゴキツ!!

桜薇「…。」

オンリヨウキは変化を始めた。

肩、膝、背中からトゲが生え、額から角が生え、尻尾は硬質化し骨つ
ぽくなり、左腕も硬質化し鎌になった！

「グヒャーッーッー！」

オンリヨウキはパワーアップし、超オンリヨウキへと変身した！

桜薇「でしたら…。」

ヴンツ!!バチツ!バチツ!

桜薇「こちらも本気で闘いましょう。」

超サイヤ人G2へ変身し、2本の剣を鞘から抜いた！

勝つのはどっちだ？

•
•
•

「湖から離れた平地」

天「みんな、どこに行っただろう。」

チ「どこにもいないね。」

妹「……。」

妹紅に落ち着きはなかった。霊夢が居なくなった今、悟天への思いが爆発してしまいそうなのだ。

無論、そんな抜け駆けのようなことはしたくない彼女である。

天「妹紅、どうしたの？」

妹「いや、何でもない。ちよつと熱いだけだ。」

チ「全然暑くないよ？姉貴大丈夫？」

妹「ああ、大丈夫だ。」

天「！ なんだ!?この物凄い気は…！」

妹「！ でも、ここからはだいぶ遠いな。」

チ「こ、怖くなんかないぞ！」

桜薔とオンリヨウキの気を察知した。

天「妹紅、なんで俺にしがみついてるの？」

妹「え？…うわあ！」

気がつかないうちに悟天に抱きついていた。

天「すごく熱かったけど、ほんとに大丈夫？」

妹「ももも問題ない！て言うか、女たらしこそなんでちよつと嬉しそうなんだよ！」

天「いや、びっくりしただけだよ。」

悟天は、妹紅が自分をどう思っているかを察していた。

チ「姉貴つてもしかして、兄貴のことがす」
妹「それ以上は言うなあ!!」
ジユウウツ!

即座にチルノの口を塞いだ。

チ「あねひっ! ほけひやう! ひえひやう! (姉貴っ! 溶けちやう! 消えちやう!)」

天「妹紅落ち着いて!」

ギ「お熱いところ失礼する。」

ギークの声が響いた。

天「お前はギーク!」

ギ「ほう。私の記憶が残っていたか。」

チ「だれ?」

天「今まで俺達に敵を送ってきた黒幕だよ。」

「そして、霊夢を殺した...!」

チ「そんな!」

妹「...」。

妹紅は複雑だった。

ギ「ここまでよく頑張ってくれた。次が最後だ。」

「ちようどお前たちがいるそこは、一気に第1ホールへ行ける特別出入口だ。」

天「第1ホール?」

ギ「そこには霧雨魔理沙たちも来ている。来ないという選択はしないな?」

チ「魔理沙も!?!」

天「・・・行こう。」

妹「ああ。」

チ「うん！」

ギ「決まりだな。」

ヴィイイイン

地面が開き、大きな穴が現れた。

魔理沙一行の時とは違い、道ではなく、作られた穴だった。

天「ゆつくり降りるよ。」

妹「チルノ、しっかり掴まってるよ。」

チ「うん！」

3人はゆつくりと降りていった。

・・・

「咲夜&妖夢転送地」

オ「グヒヤヒヤヒヤッ！」

桜薇「！」

右手で剣を持って襲いかかってきた！

ザキッ!!

桜薇「・・・。」

オンリョウキの一太刀を2本の剣で受け止めた。

互いの剣が離れたかと思うと、

キキキキツ!!

幾度となく互いの剣と鎌がぶつかった!

桜薇「それなら!」

桜薇; 傷符「インスクライブレットソウル」
キキキキツ!!

オンリヨウキは負けじと斬撃についていくが、

ピリリリツ!!

途中でやめた。

桜薇「くどいです。」

桜薇はピタリと止まった。

そして、

ピリリリツ!!

オ「グヒャーッ!」

趣向を変え、桜薇の左後ろに現れた!

桜薇「!」

サツ!

オ「!?!」

桜薇に反撃の余地はなかった。しかし、オンリヨウキが剣を振った
そこに彼女はいなかった。

桜薇「ここです！」

桜薇；「待宵反射衛星斬」

桜薇「待宵反射、衛星斬っ!!」

ザツ！ザツ！ザツ！ザツ！ザツ！

オ「グヒャアアツ！」

桜薇はいつの間にかオンリヨウキの背後を取り、滅多斬りにした！

桜薇「はっ！」

ザクツ!!

オンリヨウキを斬り飛ばしたが、まだ終わらない。

桜薇；幻葬「夜霧の幻影殺人鬼」

オ「！」

桜薇「遊んでいる暇はありません。」

桜薇の周りに大きなナイフが4本現れ、オンリヨウキへ向かって飛んでいった！

オ「ッ！グヒャア！」

ガキツ！ガキツ！ガキツ！ガキツ！

何とか剣と鎌で弾いた。

桜薇「やるじゃないですか。」

オ「グギギツ！グヒャアアツ！」

桜薇「？」

オンリヨウキの気が高まる…！

オ；「地獄羅刹砲」

オ「シネエエエツ!!」

ズオオオオツ!!

全身全霊をかけて、気を解放した!

これまでは言語ではなかったが、今ははっきりと死ねと叫んだ。

桜薇「無駄ですが、最期くらいは敬意を表するしましょう。」

桜薇；時空剣「スターダストスラツシャー」

桜薇「・・・!」

地獄羅刹砲が自分に当たる寸前まで待ち、

桜薇「はあっ!!!」

ピツ!!

オ「ツ!」

「剣を下から振り上げた!

時が一瞬止まったかと思うと、地獄羅刹砲は両断され、オンリヨウキをも両断した!

オ「グ、グ、グヒャアア!!」

桜薇「・・・。」

再生する筈のオンリヨウキの身体は再生されず、眩く光り、消滅を始めた。

オ「アアア…」

そして、跡形もなく消えた。

桜薇「これが、フュージョンの力のようですね。」

「霊夢の仇を打った。」

桜薇「どうやら、お互いの能力も自由に使えるようです。」

そう、オンリヨウキの不意を突いた場面は、全て時を止めていたのだ。

桜薇「まだとけませんね。みんなを探しませんと。」

白銀の剣士はその場を後にし、愛する仲間を探し始めた。

・・・

「地下施設第1ホール」

魔理沙一行は、第1ホールに着いていた。

そこは第2ホールよりも広いが暗く、ホールの中心には一際目立つ円柱のガラスケースがあった。

魔「あれはなんだ？」

文「もしかすると、あれが最高傑作というものかもしれませんね。」

レミ「レイ、ちよつといいかしら？」

レイ「何でしょうか？お嬢様。」

カプツ

レイ「いたっ！」

血を吸われた。

レミ「ご馳走様♡」

レイ「嘯むなら先に言ってくださいよ…」

早「あつ、あそこから誰かが降りてきますよ。」

天井の大きな筒から誰かがゆっくり降りてきた。

一行は一瞬構えたが、その人物がわかるとすぐに肩の力を抜いた。

魔「にいちちゃん！」

天「魔理沙じゃないか。」

文「妹紅さんも一緒だったんですね。」

妹「ああ。」

チ「紅魔のおっさんもいる！」

レイ「おっさんじゃない！」

レイは若い。チルノの偏見だ。

早「悟天さん、霊夢さんを知りませんか？」

天「……。」

俯（うつむ）いた。

妹「死んだらしい。」

文「！ 霊夢さんまで…！」

レイ「まさかそんな…」

文は膝をついた。

魔「うわああああつ!!」

魔理沙は咆哮した。

早「魔理沙さん、落ち着いてください！」
魔「うう、霊夢まで…。ちくしょう…！」

魔理沙は泣き崩れた。

天「霊夢までって、じゃあ、そっちも誰かやられたの？」
魔「…。」

黙ったまま、持っていた腕を見せた。

天「この気は、アリスか…。」

妹「あの変態が…。」

文「すみません、油断した隙に。」

レミ「私のせいでもあるわ。あの時倒れていなければこうはならなかったわ。」

レイ「何もできませんでした。あんな罠に嵌ってしまったばかりに…！」

重苦しい空気の中、

ギ「ようこそ！私の根城へ！」

ホール中心のガラスケースの方から主犯の声が響いた。

魔「そこかあ!!」

魔；恋符「マスタースパーク」

魔「マスタースパークっ！」

ドオオオツ!!

ギーク目掛けて放たれた。が！

バチイツ!!

天「!」

魔「なっ!」

見えないバリアで塞がれた。

ギ「闘うのはまだだ。お前たち、もう少し此方へ近づきたまえ。」

早「どうしましょうか?」

天「・・・行こう。」

一同は警戒しながら歩き、ギークの目の前と言えるほど近づいた。ギークの次に目に入ったのは、ガラスケースの中にいる人間だった。

妹「これは?」

文「!! この子は!」

レイ「文さんの知り合いですか☒」

文「数年前から行方不明になっていた女の子です!」

レイ「ギーク!お前の作業か!」

ギ「その通り。実行犯はオンリョウキだがな。」

早「なんてことを...!」

レミ「目的がわからないわ。どうして人里の子供を拐う必要があるのかしら。」

ギ「・・・ここで説明してやろう。」

「私の全てもな。」

第43話へ、続く!

第43話「Dr. ギーク」

幻想天霊伝説 第43話

改めて自己紹介をしよう。私の名はDr. ギーク。この世界とは違う世界の人間だ。

勿論、幻想郷のような裏の世界ではない。人間が生物の頂点に立ち、妖怪などというものは迷信とすることが当たり前の中だった。

この時から私は科学者だ。幸い経済的に余裕があり、毎日研究に明け暮れていた。

そんな中、あることに気づいた。今まで存在が否定されていた、世界中の昔話に登場する怪物、幽霊、神々は実在しており、それを立証するのは案外簡単なのではないかと。

そこから時間はさほど経過しなかった。高い金を払って古い文献を購入し、過去の科学者の論文も用意し、実験器具を揃え、学会に報告しに行ったのだ。

発表は大成功だった。その場で見せた実験も成功し、最初から最後まで何も見ず詰まることもなく演説することもできた。

どんな質問であろうが答えられる自信すらあったのだが、質疑応答になっても手を挙げる者はいなかった。完璧だったからだ。

これで私は、世界を変える科学者に成れたと確信した。しかし、学会の連中は何の根拠もなしに、私の発表は出鱈目（でたらめ）であるとマスメディアに伝えた。

マスメディアは私の意見など耳に入れなかった。御用学者とマスメディアは繋がっていると知ってはいたが、ここまでとは予想外だ。やがて私の研究所は、あらゆる人間によって潰された。自宅に張り紙を貼る一般市民、メディア、販売店の店員といった第三者、学会の碌（ろく）でなし、果てには親にまで攻撃の対象とされた。

タワーマンシヨンの屋上で途方に暮れていると、何かを感じ取っ

た。柵から下を見下ろすと、黒い何かが浮遊していた。それが異界への入口だと直感で認識した私は、何の躊躇もなくそれに向かって飛び込んだ！

気がつくくと、何処だか見当の付かない森に居た。周りの植物を観察してみたところ、絶滅したものでまで自生していることがわかり、先程まで滞在していた世界とは異なっていると理解した。

森を調べながら歩いてみると、一人の少女に遭遇した。何故かはわからなかったが、満面の笑みを浮かべていた。

一番の衝撃は、私を知っていたということだ。私の名前を呼ぶなり、ついてこいと私の手を引いた。

連れてこられた場所は、神社だった。到着すると巫女が現れ、事情を説明された。

異界への入口を開いたのは「その幻想郷」の八雲紫であること。この世界は私がいた世界とは別物であること。この世界の住人の殆どは私を知っているということ。彼らに歓迎されているということだ。

歓迎されている訳は、世界中で迷信とされてきたことを、人生をかけて解明しようとした私に感謝しているからだそうだ。その迷信とされてきたものこそが彼らなのだからな。

その巫女は、その神社に住むことを承諾してくれた。言い忘れていたな。その世界の名はここと同様に幻想郷。神社の名前は字が異なり白零神社。巫女の名は、白零 霊希（はくれい れいき）。

その晩は盛大な歓迎会を開いてくれた。それからの生活は、元いた世界で精神的に孤独であった私には信じられないものだった。皆が私を尊敬してくれる。気遣ってくれる。認めてくれる。笑顔を向けてくれる。

私は初めて、人間は、いや、妖怪などを含め知的生物は美しいと理解した。

それから一年が過ぎ、ある異変が勃発した。霊希は私に、絶対に神社から出るなど言われたが、ここで何もできなければ、私の存在意義がなくなる。そして、ここで施し返さなければならぬと、自室に籠り、あるものを作り始めた。

それは、生物強化栄養剤だ。生物の改造は禁じられていたから、摂取した者へ一時的に力を与える代物だ。

無論、毒味は私で行った。結果、実験は成功したため、一時的に運動能力が上がった私は全速力で霊希たちの元へ走った。

着いてみると、危機的状况に陥っていた。だが、強化栄養剤を摂取した霊希たちは、先程までの苦戦が嘘かのように完勝した。

私は恩を返せた。それで十分だったが、霊希たちは私に駆け寄り大声でありがとうと言った。

そうか。これが仲間なのか。仲間とは素晴らしいと思った。

それからの十数年、仲間と共に異変を解決しながら満たされた毎日を過ごした。

早「すごく良い人じゃないですか！」

妹「嘘かもしれないぞ。」

魔「そうだけ。本当にそうなら霊夢やアリスを殺したりしないぜ！」

レイ「何か奴の心を悪に染める出来事があったのかも知れません。」
レミ「・・・そのようね。」

能力で過去を見た。

天「いったい何が…。」

ギ「休憩はこのくらいでいいだろう。」

「それ」は人里に突然現れた。

「それ」は姿を現すなり、「6日後にこの世界を滅ぼす」とだけ言い放ち、姿を消した。

幸い、その場には霊希が居たため、事の重大さはすぐに幻想郷中に知らされることとなった。

この時はよく理解出来なかったが、霊希に今までにない真剣な眼差しで「幻想郷が、滅ぶかもしれない」と言われ、身の危険を察知した。それから6日間、霊希は修行をさらに厳しくし、力をつけていった。私は幻想郷、冥界、月を周り協力を仰いだ。皆、快く了承いただいたおかげで、総力に不足はなかった。

決戦の場所は月と決定した。仲間は月で待ち構え、霊希は幻想郷で待ち構えた。

運命の日、姿を現した「それ」に霊希が月へ来るよう交渉した。月で一斉攻撃をする計画だったが、交渉失敗の確率は非常に高いため、失敗した場合は八雲紫のスキマで全員幻想郷へ戻る作戦も考えていた。

どちらにせよ、戦闘を開始する寸前で生物強化栄養剤を服用するという作戦に変わりはなかった。今度の薬は、私が改造を重ねた代物で、しかも戦闘員全員に配れるよう量産した。効果は、元の戦闘力の100倍程だ。

月で八雲紫はスキマを作る用意をしていたが、なんと交渉は成功した。闘えない私は幻想郷でその現場を見ていたのだが、「それ」は少しも不快な表情を浮かべなかった。

霊希は「それ」を連れてスキマに入った。私は祈ることしかできなかった。

1時間程経過した頃だった。あまりに帰還が遅れていると思い、八雲紫が予(あらかじ)め開けておいたスキマを通り、月の戦場へ向かった。

・・啞然とした。あれほど活発であった妖怪、月人、人間たちが無造作に倒れていたのだ。そしてどれも、私の声に応えなかった。

栄養剤を摂取し、応援を求めるため全速力で月の都へ走ったが、そこにかつての都はなかった。あるのは廃墟だけであった。

生存者の探索を続け、漸く一人を見つけた。傷だらけで虫の息になつた霊希だつた。

命の安全を確かめたが、間もなく死ぬと返された。そうか、悲しいとは、このことだったのか。私は霊希の手を強く握り、諦めるな！まだ終わってない！私がいる！と声を張り上げた。

通常通りであれば、うるさいともつと大きな声で言い返されるのだが、小さな声でありがとう、とだけ言われた。

・・そして、霊希は私の腕の中で、息絶えた。最愛の妻を、亡くした。・・ズズツ、すまない。

霊希を抱え、スキマを通つた。せめて墓くらいは神社で作ろうと思つた。

戻つてみたが、美しかった幻想郷はなかった。どうやら私と入れ違ひだつたらしい。無論、神社も破壊されていた。

神社についてはあまり悲しいと思わなかつた。霊希を失つたことに比べればな。

墓を作り、研究所に籠もつた。神社の地下に作つていたため、襲撃は受けなかつたらしい。

そして決心した。私が「それ」を倒すと。

始めに「それ」は何なのかを考え直した。間違いなく、この世界の生物ではない。

「それ」を倒すためには、小細工では駄目だ。完全なる生物が必要である。

であれば、この世界に居ては作れない。故に、時空を越える装置が必要となつた。

そうと決まれば、数年前に作った不老薬を使わなければならない。霊希と共に生き、死ぬつもりだつたから飲まないでいたのだが、摂取した。

20年程掛かったが、装置は完成。しかしすぐには使わなかった。それ以外の準備が整っていないからだ。

最初に、移動する上で拠点が必要だった。もし別世界に辿り着いても、襲撃に遭って死んでは意味がない。

そこで太陽系のある惑星に目をつけた。この世界には存在しないそれに研究所ごと移った。

惑星の軌道を操るためさらに10年程掛かった後、遂に時空を越えた。

それからは長い旅だった。幻想郷などいくつ見たかわからない。幻想郷だけではない。孫悟天、お前のようなサイヤ人が存在する世界も複数周った。

そこで出会った科学者たちの作品は本当に参考になった。人造人間技術、マシンミュータント、「不世出の天才」による洗脳技術、怨念増幅装置、どれも私の研究には欠かせなかった。

複数の失敗作が続く中、傑作が完成した。オンリョウキだ。ある幻想郷の鬼を洗脳技術で操り完成させたものだ。

後でわかったことだが、地獄で生まれたジャンバとよく似ていた。それなら空間移動もできるだろうと、オンリョウキに教え込んだ。その頃には既に、洗脳など必要なくなったから装置を外した。

同時に、孫悟空とベジータのフュージョンによるあの技を知った。だからこそ、アリスは最初に始末した。

オンリョウキが完成してからは、殆ど見るだけだった複数の幻想郷を実験場にした。だが、オンリョウキは強すぎた。ろくにデータが取れないまま多数の幻想郷が減んだ。サイヤ人が紛れ込んだ幻想郷もあったが、オンリョウキの敵ではなかった。

これでは駄目だ。そこで簡単なセルを造った。戦況は程よく不利になり、成功した。

与えた指示は「皆殺しにしてこい」だけだったが、ボロボロになりながら何度も任務を遂行して帰ってきた。

もうご存知だと思うが、最後に辿り着いた幻想郷がここだ。

孫悟天にはもう話したが、孫悟天や他の刺客を円盤で転送させたの

は私だ。全ては実験のためだ。

しかし、しつかり造ったセルまで破れた。「それ」を倒すための生物は、ここでしか造れないと確信した。

天「・・・。」

妹「チルノ起きろ。終わったぞ。」

チ「ふあ?」

レミ「誰かのために尽くした男は、そのために他の誰かを地獄へ落とす悪魔になった。笑えないわね。」

レイ「お前のいた幻想郷の人達が、本当にこんな事を望んでいたと思うのか?」

ギ「：勿論だ。あの時間を、霊希との生活を取り戻すためなら、何人だって殺せる。」

早「そんなのダメです!」

魔「無駄だぜ。こいつは自分が同じ目にあわないと分からないクソ野郎だぜ。」

レイ「：そのようですね。過去がどうであれ、こんな事は許されない!」

レミ「(何かしら。何かが引つかかるわ)」

天「満場一致みたいだね。ギーク、お前は俺たちが倒す!」

ギ「よくぞ言ってくれた。では、始まるとしよう。」

スイッチを押した。

すると、少女が入っているガラスケースが光り始めた。

ギ「最終検査だ。お前たちを皆殺しにできれば実験は成功。そしてこの少女は、人間も妖怪も神をも超える!」

「出でよ!ユニバースキング!!」

カッ!!

ガラスケースを、割らずに消し飛ばして現れた。少女の面影は全くなかった。全身が機械かのような黒のメタリックボディ、230cmを超える高身長、2本の角、白く光る目。人造人間でもなければロボットでもなかった。

早「私が闘いま」

レイ「僕が行きます！」

早「ハアツ☆」

天「2人とも待ってくれ！」

変身しようとする2人を止めた。

早「私は変身する流れじゃなかったんですけど…。」

レイ「何故止めるんです！」

天「たぶんギークは何か企んでる。ここでレイくんが闘うのは危ないよ。」

レイ「しかし…。」

天「早苗もね。今の一瞬でも物凄い気だつてわかったよ。」

早「そ、それほどでもありませんよ。」

魔「そうだけ。みんなで闘うんだぜ！」

文「霊夢さんの仇を討ちましょう！」

妹「ああ。ここで終わらせるぞ。」

チ「おー！」

天「いや、そうじゃなくて。」

レミ「貴方一人で、ということね。」

天「そういうこと。」

レイ「何か策があるんですか？」

天「うん。」

ギ「孫悟天一人か。実験は段階ごとにするのが重要だからいいだろう。」

文「ここまで実験実験言われると執念深さを感じますね。」

天「行くぞ！ギーク！」

ヴンツ!!バチツ!バチツ!

超サイヤ人2に変身した。

早「悟天さん!その姿では勝てません！」

天「・・・。」

早「ハアツ☆」

変身は終わり、気は落ち着いていた。しかし、音もなくスーツと髪が伸びていくではないか!

レイ「あ、あれは！」

天「・・・!!」

ゴゴゴゴ

「があああつ!!」

ヴンツ!!バチバチバチツ!!

一気に気を解放し、悟空でも到達するまで苦戦した(超サイヤ人3)に変身した!

魔「うわっ!なんだ!?!この凄い気は！」

チ「やっぱり兄貴はすごい！」

ギ「馬鹿な!こんな短時間で超サイヤ人3に成れる訳がない！」

天「霊夢のおかげだよ。霊夢が俺をここまで怒らせたんだ！」

「(ほぼ死んだ状態で幻想の魔神に助けられた影響もあるかもしれないけど)」

ギ「ま、まあいい。最高傑作ユニバースキングと孫悟天、どちらが強いかはつきりしようじゃないか！」

天「レイくんはやっぱり知ってるんだね。」

レイ「はい…そしてその強さも。」

天「みんな、俺に任せてくれるよね？」

魔「わかったぜ。」

チ「うん！」

レミ「いいわ。」

レイ「はい！」

妹「ああ。」

文「はい。」

早「ハイッ！」

ユニバースキングと睨み合った。

天「霊夢、俺は君の分まで、闘うよ…！」

パアっ！と瞳から滴が飛び散った。

第44話へ、続く!!

第44話 「悲しき超サイヤ人3」

幻想天霊伝説 第44話

「地底の避難所」

男 a 「すげえぞ！悟天さんがロン毛になった！」

男の子 a 「かつけえ！」

女 a 「そう？まるでヤクザじゃないの。」

女性には不評のようだ。

ミ 「兄さん、いつの間にこんな力を付けてたんだろう。」

リ 「流石あんちゃんだね。」

セル Jr. 「ヒナンカンリョウシタゾ。」

ル 「わかったのだ。」

リ 「あれ？喋れたっけ？」

ミ 「慧音先生が教えてたでしょ。」

リ 「そっか。」

こ 「お兄ちゃん、カツコいいよお兄ちゃん！」

ル 「こいしは相変わらずなのだ。」

さ 「こいし！どこに行ってたの！」

避難所にさとりが現れた。

こ 「え？ずっとここに居ただけど？」

さ 「そ、そうなの？」

嘘である。しかしさとりはこいしを認知できないので、疑っても仕方がない。

さ「もう、心配したんだから。」
こ「ごめんなさーい。」

妖怪たちは若干緊張感が足りないようだ。

・・・

「地下施設第1ホール」

両者はゆっくりと飛び上がった。

少し睨み合ったかと思うと、

天「!!」

ドゴツ!!

目にも留まらぬ速さでユニバースキングの頬を殴った!

天「?」

ユ「:」

ユニバースキングの手が悟天を捕まえようとしたが、

パシッ!

天「はっ!」

ドゴツ!!

払って後頭部に重い一撃を与えた!

天「だだだだっ!!」

ドゴツ!バシッ!ゴリッ!ゴキッ!

背後を取った悟天はラツシュし、

天「だあつ！」

ドゴンツ!!

最後の一撃で地面に叩き落とした。が、地面に激突する寸前で止まった。

天「まだだ！」

天；「ビクトリースマツシユ」

キーンツ!!

幼少期に参加した天下一武道会で、トランクスを相手に使った技である。

ユニバースキングの動きを見ながら一気に急降下した！

ユ「…」

天「…、！」

サツ!!

悟天の動きを見切ったユニバースキングは、見事に身を躲した。勿論、悟天にとっては計算通りだった！

ボツ!!

ユ「！」

天「だあつ!!」

ドツゴオオンツ!!

ユ「…」

天「…！ はっ!!」

ズオツ!!・・・ドカーンツ!!

急降下の勢いを、左手から気弾を発射することで消し、右手で腹に一撃をかまし、右手に込めたエネルギー波で吹っ飛ばした！

ユニバースキングは第1ホールの壁に叩きつけられた。

天「はあ…、はあ…。」

ユ「…」

天「(おかしい。最初の一撃はまるで手応えがなかった。まるで気が無いみたいに。)」

「(なのに、効いていないように見える。何なんだこいつは。)」

ユニバースキングには秘密がありそうだ。

・・・

魔「にいちやんすごいぜ！あんな化け物をボコボコにしてる！」

早「これなら問題ありませ」

妹「何か変だ。」

早「ハアツ☆」

レミ「・・・レイはどう思うかしら？」

レイ「妹紅さんと同じ意見です。上手く行き過ぎてるような…」

レミ「よくわかったわね。」

文「なんか軽すぎる気がするんですよ。」

魔「軽すぎるって、どういうことだよ。」

妹「あれほどのオーラを放ってるのに、肝心なものがないように見える。」

レイ「肝心なもの？」

レミ「気、よ。」

ギ「その通り。良い推理だ。」

得意げに笑った。

ギ「答えを聞けば、ピンと来るのではないか？レイ・ブラッド。」

レイ「まさかワザと攻撃を…☒」

ギ「そうだ。これが私の衝撃変換プログラムだ。」

「だから倒したければ、打撃を与えないようにするしかない。」

「とは言え、戦闘においては取らざるを得ない手段であるがな。」

早「どういふことか教えてくださーい！」

レイ「恐らく敵は、受けたダメージを自分の気出来るんです！」

魔「ええー！」

文「えええー！」

レミ「わかってなかったの？」

文「いや、そこまでは…。」

ギ「見込み通りだ。此方に来い、レイ・ブラッド。」

レイ「また罠があるんじゃないだろうな。」

ギ「まさか。少し話をしたくてな。」

ギークは一行の背後に向かって歩き出した。

魔「待て！」

八卦炉を構えた瞬間！

ビリリッ!!

魔「うっ！」

妹「！ これは！」

チ「ビリビリするー！」

ギークとレイ以外のメンバーの脚が電流で出来たネットに縛られた。

ギ「抵抗はしない方がいい。脚が千切れてしまうからな。」
妹「だったら私には関係ないな！」

ギ「心配することはない。本当に話をするだけだ。」

レイ「…どうやら嘘は言っていないみたいですよ。」

妹「…そうかよ。」

正直なところ、もし何かあってもレイなら大丈夫だろうと一行は考えていた。

ギークの隣に立つと、床がリフトのように下がっていった。

レミ「……。」

・・・

ギークに連れられ着いた場所には、椅子が2脚とモニターがあった。

ギ「先程は話と言ったが、少し違う。提案だ。」

レイ「提案だと？」

ギ「そうだ。君の能力は大変素晴らしい。」

急に二人称が「君」になっている。

ギ「そこでだ。私と共に進む気はないか？」

「私の科学力と君の能力を持ってすれば、必ず奴を倒せる。」

雰囲気が一気に変わった。奴とは無論、ギークのいた幻想郷を滅ぼした謎の存在のことである。

レイ「お前はアリスさんを殺した事に何も思わないのか？」
ギ「何も思わないどころか、安心した。一番の脅威が去ったのだからな。」

特に究極魔法「スターダストブレイカー」のことである。

レイ「そうか…ならば話は終わりだ。」

「ここでお前を殺す!!」

ギ「待ちたまえ。あれをみてみる。」

気味が悪いほど落ち着いている。

ギークはモニターを指差した。そこには悟天とユニバースキングが映っている。

レイ「あれが何だつて言うんだ。」

ギ「よく観るがいい。」

先程までは圧倒的だった少しずつ悟天が押されている。

レイ「ご、悟天さん!」

ギ「超サイヤ人3の特徴くらいは当然知っている。」

「生身とは不便なものだな。」

レイ「このままだとマズい!」

超サイヤ人3はその強大な力故に、消耗が激しい。

ギ「加速するユニバースキングと減速する孫悟天。最初から勝負は決まっていたのだ。それにしても早い減速だったな。初めてだったから仕方ないがな。」

「いいのかレイ・ブラッド。勝ち目のない闘いを挑むより、私と共に進

む方が合理的だと思うが。」

少しだけ考えた。

レイ「確かに勝てる望みは薄い。だが、だからと言ってお前を許す事はできない！」

ギ「・・・そうか。君とはいいコンビになれると思ったのだがな。」

その時。

ゴオオ・・・

レイ「うわっ！」

部屋が鈍い音と共に揺れた。

モニターを観てみると、ユニバースキングが第1ホールの天井に叩きつけられていた。

・・・

天「はあああっ！」

バチバチバチツ!!

ユ「:」

先程、ユニバースキングを蹴り上げ天井にめり込ませた悟天は、気を高めていた。

対するユニバースキングはと言うと、襲ってこない悟天をじつと見ている。

天；「超ビクトリーキャノン」

天「だああっ!!」

ビィィイツ!!

ユ「…!!」

全身から放った!

ユニバースキングは避けることなく、受け止めた。が、

ユ「…!!」

メキツ!!バキバキバキツ!!

あまりにもものエネルギーに耐えきれず、天井を突き破り押し上げられた!

そこから止められることなく、地下施設を破壊し、惑星ギークの地上まで押し上げられた。

地上から100m離れたところで、

ユ「!」

バチィイツ!!

ビクトリーキャノンを弾いた。

この時、誰にも聞こえなかったが、ユニバースキングの体内でガチャっという音が響いていた。

天「っ!」

バシユツ!!

自分で開けた穴を通って、地上に出た。

•
•
•

魔「押された時はドキツとしたけど、これなら勝てそうだな。」

チ「やっぱり兄貴は無敵だー!」

妹「・・・今の攻撃、効いてればいいんだけどな。」

レミ「レイの帰りが遅いわね。」

文「心配しすぎですって。」

レミ「話が長い気がするわ。」

魔「何だ何だ？部下が心配か？」

レミ「私たちのこの状況もまずいと思うのだけれど。」

電気のネットは未だ健在であったが、

チ「あつ、消えた。」

文「悟天さんを追いかけましょう!」

バシユツ!!

突然消えたため、他のメンバーも悟天が開けた穴を通って地上へ向かった。

・・・

天「はあ・・・はあ・・・。」

ユ「...」

ギ「息が上がっているな、孫悟天。」

レイが隣に居るが、構わず声をかけた。ギークとレイはまだ個室に居る。

天「まだ、まだ、これからだ。」

ギ「そうとも。ユニバースキングはこれからのだからな。」

天「なん、だって…!」

レイ「悟天さん気をつけて!」

すると、ユニバースキングはゆっくりと顔を上げた。

ギ「さあユニバースキング、思い出せ。お前が寺子屋に通っていた時のことを。」

ユ「…」

ギ「可哀想に。周りより勉強ができただけで仲間外れにされ、いつも独りだった。」

「教師に相談しても、具体的には何もしてくれなかった。最も信頼していた両親でさえ、手を差し伸べず負けるなど一喝。」

ユ「…ウ、ウ」

ギ「だが、そんな悲しみはもう要らない。お前には、その憎い相手に復讐する力が眠っている。」

ユ「…ウウ…!」

ゴロゴロ

レイ「あ、あれは…!」

雷の音が響いた。レイはこの光景を知っている。

ギークは止めずに語りかけ続ける。

ギ「そうだ。彼らへの憎しみを全て解放して。今日の前にいる男も彼らと変わらない。そいつを憎め…!」

ユ「…!!」

レイ「超サイヤ人…☒」

ユ「…!!!」

ヴンツ!!

天「なにつ!!」

ユニバースキングの気が大幅に上がり、身体に碧のラインが入った！

ギ「素晴らしい！〈サイヤ人の成長プログラム〉は大成功だ！」

レイ「どういう事だ！」

ギ「ご覧の通り、ユニバースキングにはサイヤ人の底知れない成長のプロセスが組み込まれている。」

「とは言え、施したプログラムの中で最後に組み込んだプログラムだ。その理由は勿論、サイヤパワーの併用に確信を持てたのがこの幻想郷に来てからだだったから。そう、孫悟天のおかげだ。感謝しかあるまい！」

天「そ、そんな…！」

レイ「お前…自分がどんな恐ろしいモノを造ったのかわかっているのか！」

ギ「それほど恐ろしいものでも造らんと、奴には勝てない。」

歓喜に溢れた表情が一変、憎しみに満ちた表情になった。

ギ「これを造るために、いったい何百年かかったことか…。お前たちにはわかる筈もない。」

「だが遂に、遂に完成したのだ！まだ実験中だがここまで来ただけでも十分にな！」

静かになつたり大声を上げたりと感情の起伏が激しい。

レイ「奴を止めなければ！」

ギ「もうやっていいぞ、ユニバースキング。」

ユ「ウン」

ヒュンツ！！

天「なっ！」

ドゴンツ！！

天「がっ！」

超スピードで背後から攻撃したのだが、悟天には見えなかった。

天「くっ！」

体勢を立て直し、前を向いたが、

天「え」

ユ；「連続エネルギー弾」

ズドドドツ!!

天「うわあっ!!」

ドゴオツ!!

既にエネルギー弾は目の前まで来ていた。

一つも避けられなかった悟天は、エネルギー弾と共に岩場へ叩きつけられた。

レイ「ご、悟天さん!!」

岩場の煙が晴れるとそこには、

天「あ…が…。」

超サイヤ人3がとけ、ぐったりと倒れた悟天が居た。

ギ「勝負ありだ。」

レイ「悟天さん逃げて!!」

すると、悟天が開けた穴から他のメンバーが現れた。

メンバーから見て前方20 m先にユニバースキングがおり、さらに

斜め左に20m離れた所に悟天が居た。

魔「な、何だ、あれ…。」

早「まさか、これがさっきのやつなんですか!?!」

チ「こ、怖くなんかないぞ!」

妹「!、女たらし!」

レミ「…認めない。」

「こんな運命は、認めない!!」

ヴンツ!!ジリジリツ!!バシユツ!!

超サイヤ人GVに変身し、ユニバースキングに飛びかかった。

レイ「お嬢様!」

レミ;「アーマンロードアロー」

キーンツ!!

全身にエネルギーを込め、突進した。

ユ「…、ハツ!」

ヴンツ!!

レミ「あがつ!!」

魔「うっ!」

早「なんてすごい気なんですか!」

チ「うわー!」

妹「チルノ!」

文「レミリアさんが危ない!」

ユニバースキングが気を解放しただけで、レミリアは簡単に吹っ飛ばされた!

吹っ飛ばされたレミリアを、文が素早くキャッチした。それも凄い衝撃だった。

文「痛っ！」

ギ「わかってはいた。」

レイ「何がだ！」

ギ「数少ないサイヤパワーを宿した戦士の中でも上位にいるレミリア・スカーレットでもこうなるという結果を、だ。」

「気を解放しただけでこうなるのなら、君か東風谷早苗以外は期待できないな。私がしようとしていることは、わかるな？」

レイ「ぐ…！お嬢様今行きます！」

ギ「待て。必ずここから出してやるからもう少しな。」

「現在進行形で君を実験しているところだからな。」

レイ「実験だと？」

ギ「被験体に話すことはできない。ユニバースキングよ、気を鎮めていいぞ。」

ユ「ウン」

ス…

身体の碧い光が消えた。

妹「悟天!!」

チ「あっ！待ってよー！」

安全に駆け寄れると思えると、いつもの呼び方ではなくなった。

妹「しっかりしろ！」

天「はは、流石にまいったよ。」

妹「心配かけさせやがって…。うう…。」

天「別に泣かなくてもいいじゃないか。」

「まだ、死ねないからね。」

チ「流石兄貴だね！」

文「レミリアさん！大丈夫ですか!?!」

レミリアは目を開けているが、動かない。

ギ「主人が心配か？」

レイ「当たり前だ……！」

ギ「では、行くといい。」

ヴィイン

モニターの横の壁が開き、上り階段が現れた。やけに素直である。

ギ「この間に部屋は移動させていてな。上がればすぐに会えるぞ。」

レイ「お嬢様!!」

急いで上がった。

ギ「……。」

ギークも黙って階段を上がった。

駆け上がると、目の前に魔理沙達が居た。

魔「レイ！無事だったんだな！」

早「心配したんですからn」

レイ「はい：それよりお嬢様が！」

早「ハアツ☆」

文「大丈夫です。死んではいません。」

レミリアを文から抱きとった。どうやら首の骨が折れている。

レイ「お嬢様、仙豆です。食べてください！」

ゴクッ

仙豆を食べさせた。

レミ「た、助かったわ。」

レイ「間に合ってよかったです…。」

レミ「ありがと。…あの化け物、こっちに見向きもしなかったわ。」

悔しそうだ。

魔「無事でよかったぜ。でもまさか気だけで首が折れるなんてな…。」

レミ「？ 違うわよ。よくわからなかったけれど、硬い何かに当たってから意識がなくなったわ。」

早「え？ じゃあ…。」

みんなの視線が文に集まった。

レイ「文さん…。」

文「そそそそのようなことがあろう筈が御座いません。」

呂律が回っていない。

文「て、て言うか！ 今は敵に集中しませんと！」

魔「露骨に逸らしてきたぜ。」

早「レイ君、こうなったら私と闘いましょう！」

レイ「わかりました！」

ユ「…アナタモテキ？」

ギ「そうだ。だがまだ本気で闘う必要はない。そのまま闘え。」

ユ「ワカツタ。」

？「2人ともじっとしてて。」

早苗とレイが構えた時、どこからか声が聞こえた。

早「え？」

レイ「今の声は？」

魔「(この声は！)」

ユ「！」

バシユツ!!

レイが迷っていると、ユニバースキングが此方へ飛んできた！
しかし！

早「消えた！」

文「！」

ギ「なっ！」

魔「やっぱりな。」

天「あれは…。」

妹「今更来やがったか。」

レイ「…☒」

飛んできた筈のユニバースキングが忽然と姿を消した！
そしてその人物が姿を現した。

紫「いっちょ上がりね。」

魔「紫！」

早「紫さん！」

レミ「ちっ、出た。」

レイ「す、凄い…！」

ギ「な、何をした！」

紫「簡単よ。貴方の僕（しもべ）が向かってきた先にスキマを開け
ただけ。」

ギ「く、くそおおお!!」

叫び声が響き渡った。

魔「よおし、お前は私がトドメを刺すぜ！」

早「いいえ私が」

レイ「僕にやらせてください。」

早「ハアツ☆」

魔「おつ、やけに乗り気だな。だけどこいつは霊夢とアリスの仇だ。譲れないぜ。」

レイ「ギークの居た世界の話を聞いた時、もっと早く出会っていたらと思ってしまうんです。」

「だから自分の手で答えを出さないと後悔してしまいそうで……。」

魔「……でも……！」

レミ「あいつと早く出会っていたら、か。」

ギ「熱くなっているところ申し訳ないが、まだ終わったわけではない。」

急に冷静である。

文「あやや、まだ何かあるんですかね。」

妹「っ！」

天「んぐっ」

妹紅は悟天の顔を身体に抱き寄せ、ギークを睨みつけた。

チ「もうお前なんか怖くないもんね！」

早「根拠のない強がりを」

紫「貴方にはもう何も残っていない筈よ。」

早「ハアツ☆」

ギ「確かにユニバースキングが事実上敗れてしまったのはショックだった。」

「しかし、私は一流の科学者だ。どんなアクシデントにも対応できる

力がある。」

天「(ま、まさか。)」

魔人ブウが、精神と時の部屋に穴を開けたことを思い出した。

魔「もしかして、あいつ(オンリヨウキ)を呼ぶ気か?」

ギ「その必要はない。」

紫「わからないわね。ハツタリかしら?」

ギ「完成したらすぐに使う、そんなものは三流の科学者だ。」

「一流なら消えてしまった時のためにやっておくことがある。バックアップだ。」

レイ「何?!?」

レミ「:~!」

レミリアは能力でこの先が見えていた。

ギ「こういうことだ。」

ドカーンッ!!

魔理沙達の前方10m先の地面が爆発した。そこから現れたのは、

紫「う、うそ…!」

妹「こんなのありか!」

天「ユ、ユニバース、キング…!」

もう一体のユニバースキングだった!!

ギ「安心したまえ。これ以外にはもういない。素材が足りなかったからな。」

早「こんなことって…。」

一同は驚愕した。

レイ「紫さん！さっきのはできないんですか！」

紫「また上手いことスキマに入ってくれたらいいんだけど…。」

ギ「ユニバースキング、まず奴（紫）から殺せ。」

紫「え！怖いー！」

スキマに入って逃げ出した。

レイ「ちよっ、さっきとキャラ違うじゃないですか！」

紫「だってさっきは勝ったと思ったんだもん！」

スキマから声だけ出している。

魔「サイヤパワーがない紫が怖がるのも無理ないけど…。」

早「（やつぱり、闘うしか…！）」

文「勝ったなどと、その気になっていた紫さんの姿はお笑いでしたね。」

レイ「そんな親父クサイセリフ言ってる場合ですか！」
文「あーう。」

この期に及んで文はふぎけている。

ギ「では、実験の続きと行こう。」

魔「ギーク、お前のトドメはお預けにしといてやるぜ。」

「私には、とっておきがあるんだからな！」

ギ「ほう。」

ユニバースキングのとてつもないパワーアップにより、敗れてしまった悟天。

紫の活躍によりユニバースキングは事実上倒せたが、幻想戦士達は

もう一体のユニバースキングとどう闘うのか？

第45話へ、続く!!

第45話 「大胆不敵な信仰集め」

幻想天霊伝説 第45話

「惑星ギーク」

天「妹紅、仙豆持ってる？」

妹「持ってるけど、駄目だ。」

天「なんで？」

チ「兄貴も一緒に闘えば勝てるよ！」

妹「ああ、仙豆をやれば一緒に闘うことができる。」

「でも闘えば、今度は無事じゃないかもしれない。そんなの、私は嫌だ。」

天「俺も闘わなきゃ」

妹「幻想郷をナメんな！」

天「！」

妹「いつまでも私たちは守られる側じゃねえ！」

「幻想郷はお前のおかげで強くなった。ギークの世界みたいにはきつとまらない。だから、見守ってくれよ。」

天「……。」

言い返せなかった。

チ「もし負けそうでも、あたがいるから大丈夫だよ！」

妹「ああ、頼りにしてるぞ。」

・・・

レミ「魔理沙、とっておきって何かしら？」

魔「あいつは殴ったら強くなるんだろ？それなら、私の新技で消し飛ばしてやるぜ！」

早「新技ですか？」

魔「そのためには時間がかかっちゃうから、時間稼ぎを頼むぜ。」
文「わかりました。」

魔理沙は一行とユニバースキングから距離を取るため崖の上まで移動し、八卦炉を上へ向けた。

魔「銀河の光よ、ここに集え！」

すると、少しずつ星々の光が八卦炉に集まってきた。

魔「見てろよギーク。この光が私の限界まで溜まった時が、お前たちの最期だぜ！」

ギ「・・・。」

レイ「(妙だ…ギークが冷静すぎる。)」

ギ「まずはそいつらから殺れ。」

ユ「…。」

早苗たちがいる方へ走ってきた。人間のランニングくらいのスピードである。

文「遅っ！」

レミ「殴りたいわね。」

レイ「お気持ちは分かりますが我慢です。」

早「とにかく避けましょう！」

4人は素早く距離を取った。

ギ「今はそれでいい。」

文「魔理沙さんの新技とやらが完成するまで時間稼ぎつてところですね。」

早「(でももし、魔理沙さんの新技が通用しなかったら…。そうだ！)」

「にとりさん、聞こえますか？」

近くを飛んでいるスパイカメラに近づき話しかけた。すると、ブレスレットから声が聞こえた。

に「どうしたの？」

早「このカメラって、幻想郷の皆さんにも観てもらえるようになってるんですよ？」

に「うん。」

早「ありがとうございます！」

早苗はカメラから程よく離れて、

早「皆さん！聞いてください！」

元気よく話し始めた。

早「観ての通り、私たちはとんでもない敵と闘っています。悟天さんですら負けてしまった今、勝てるかどうかわかりません。」

「ですから皆さん、私に力を貸してはくありませんか!？」

文「信仰集めの演説が役に立っていますね。」

レイ「流石の一言に尽きますね。」

早「異星にいる私たちにどうやって力を貸せばいいか。それは…」「今回だけでも構いません。皆さんの信仰を私に向けてくださいませんか?」

魔「はっ?それってまさか…。」

文「……!」

レイ「何と大規模な信仰集め…。」

早「信仰の向け方は、神奈子様と諏訪子様が教えてくださります。」
「皆さん、どうかお願いします…！」

深々と頭を下げた。

文「それって1度じゃなくなるのでは？」

レミ「言ってはダメよ。こうするしかないのだから。」

レイ「こうして宗教は広まっていくんですね。」

・・・

〔地底の避難所〕

男 a 「おい！早苗さんが信仰を向けてくれて言ってるぞ！」

女 a 「どうやればいいの？」

男 a 「さ、さあ？」

神「それは私たちが説明する。」

避難所に神奈子と諏訪子が現れた。

男の子 a 「守矢神社の神様だ！」

男 b 「お前詳しいな。」

神「何も難しいことではない。自分たちも戦うという意志を持ち、
早苗の勝利を信じるだけでいいんだ。」

女 b 「そんなことで協力できるの？」

諏「うん！その心さえあれば誰だってできるよ！」

男の子 a 「やってみる！」

目を瞑り手を合わせ「早苗様！」と祈ると、

ペアツ！

人々「!!」

その子は黄金の光となり、壁をすり抜け飛んで行った！

男c「なんだあ今のは！」

神「あの惑星へ向かったんだ。みんなも続いて欲しい。」

子供たち「早苗様ー！」

ペアツ！

男「俺も！」

女a「私も！」

ペアツ！

避難所に居る人間は、次々と黄金の光となり飛んでいった。

ル「私たちはどうするのだ？」

ミ「やるしかないよ。」

リ「あんちゃんを助けるためにもやろう！」

ル「わかったのだ。」

ペアツ！

妖怪たちも従った。

神「ここはもういいだろう。まだ教えてない場所に行くぞ。」

諏「わかった！」

神奈子と諏訪子は移動した。

さ「こいしは行かないの？」

こ「私はお兄ちゃんにならそうしたいけど、なんか胡散臭いだも

ん。」

勇「同感だな。非常事態に乗じて信仰集めつて魂胆だろう。私も遠慮する。」

さ「そんなこと言つてられない気がするけれど…。」

燐「さとり様は行かないんですか？」

さ「貴女たちが心配だもの。」

空「じゃあ私も残るー！」

従わない者もいるようだ。

・・・

「惑星ギーク」

文「！ レイさん、ユニバースキングがそっちに行きましたよ！」

レイ「え？」

レイに向かって走ってきた。一番追いつける相手だからだ。

レイ「殴れないのをいい事に好き放題だな！」

ギ「・・・。」

レイはそのまま走って逃げた。

ギ「(このまま動き回って、八雲紫にまたやられては台無しだ。少しズルいが仕方あるまい。)」
コリッ

ギークは錠剤をかじった。

レミ「今食べたのって、まさか……！」
ギ「！」

ダツ!!

人間離れたスピードでレイに迫った!

レイ「なっ☒」

ドゴツ!

レイ「うぐっ！」

突然の攻撃を避けられず、腹に重い一撃を喰らった。
続いて、

ドゴツ!

ユ「……」

ユニバースキングにも一撃を与えた。

レミ「さっきのはやはり、生物強化栄養剤……！」

ギ「これで十分動ける筈だ。さあ、始めろ。」

バシユツ!!

普通の戦士並のスピードで再びレイに襲いかかり、痛みで腹を抱えたレイを問答無用で首を絞め持ち上げた!

レイ「う……がっ……！」

レミ「レイ！」

文「レイさん！」

万事休すかと思われた。しかし、

ザッ!!ゲシッ!!

レイを掴んでいたユニバースキングの腕は突如斬られ、胴体は何者かに蹴り飛ばされた!

魔「あ、あれは…!」

レミ「咲夜、ではないわね。」

早「すごい気です!」

桜薇「レイ、大丈夫ですか?」

レイ「あ、あなたは…?」

桜薇「半分が咲夜でもう半分が妖夢です。フュージョンが成功しました。」

レイ「2人がフュージョンを…!これなら勝てますよ!」

桜薇「はい、負けるつもりはありません。」

ヴンッ!!バチッ!バチッ!

気を高めた。

桜薇「あと、あまり此方を見ないでください…。」

レイ「あつ…す、すみません!」

女同士のフュージョンだが、服装は男同士のフュージョンと変わっていない。

ユ「…!」

ボウッ!!

先程の攻撃で、気が上がってしまった…!しかも、

ボッ

咲「えっ。」

妖「そんなっ。」

フュージョンがとけてしまった！

ユ「！」

ドガツ!!

咲「がっ！」

妖「うぐっ！」

レイ「咲夜さん！妖夢さん！」

ユ「：ンツ」

片手で咲夜と妖夢を殴り飛ばした。

それだけでなく、瞬時に斬られた片腕が再生したではないか！

レイ「こいつ：再生できるのか☒」

ギ「：、効果は出ているようだな。」

ユニバースキングがレイを両手で捕まえようとした。

カツ!!ビュオオオツ!!

ガシツ!!

しかしその両の手のひらを変身した早苗が掴んだ！

早「レイ君！今のうちに能力を！」

レイ「は、はい！」

ボウツ!!

最後の一回だ！

早「はっ！」

ドゴツ!!

ユニバースキングの腹を蹴り、飛び上がった。

レイ；「ファイナルシャインアタック」

レイ「出し惜しみは無しだ!!」

ギユオツ!!

ユ「!!」

ユニバースキングを飲み込み、魔理沙が立っている崖がある岩場に叩きつけた!

魔「おつとと!」

文「! 触れなければ効果有りなんですわ!それなら…」

ヴンツ!!バチツ!バチツ!

文；「激烈光弾」

文「はあっ!」

ポオツ!!

レミ「レイ、でかしたわ!」

ヴンツ!!ジリジリツ!!

レミ；紅符「真・スカーレットシユート」

ドオツ!!ドカーンツ!!

3人の攻撃は見事命中し、魔理沙が立っている崖は崩れた。

勿論、誰もユニバースキングの体内でガチャっという音が響いていたことには気づかなかった。

魔「お、お前ら!わざわざこっちを狙わなくなっただっていいだろ!」

レイ「わ、わざとじゃないですよ!」

文「ノリですよ魔理沙さん!」

レミ「あれの気は上がってないわね。咲夜のせいで気が上がった以

上はこうするしかないわね。」

咲「申し訳ありません…。」

ギ「…オンリヨウキはどうした?」

咲「倒しました。」

妖「主に私のおかげです。」

咲「殺すわよ?」

妖「望むところです。」

レイ「まあまあ、2人のおかげという事で…」

咲&妖「ふん。」

ギ「そうか…、オンリヨウキは敗れたか。長い付き合いだったのだから…。」

気を落とし俯(うつむ)いた。

レミ「急に落ち込んだわね。」

レイ「仲良しだったんですかね。」

早「…!溜まってきました!」

一同が見上げると、大きな黄金の光が浮いていた。

早「うわつと!ここまで大きくなったら私がこの光をコントロールしないといけないみたいですね。」

「幻想郷の皆さん!もつと信仰をくださいーい!」

カメラに向かって呼びかけた。

早「私はろくに動けないので、ここの皆さんももう少しだけ時間稼ぎをお願いします!」

魔「私からも頼むぜ!早苗よりは時間かからないからな!」

レミ「レイがいるから大丈夫よ。」

文「レイさんがいらつしやるので問題ありません!」

妹「まあ、あいつがいるから大丈夫だろ。」
レイ「…半端ないプレッシャーを感じる!!」

能力を発動したレイを含めた、いわゆる砲撃戦が始まった。

•
•
•

「文々。新聞本部」

天狗 a 「文さん、大丈夫かな…。」

天狗 b 「文さんなら大丈夫でしょ。」

天狗 c 「守矢の巫女が信仰をくれって言ってたけどどうする?」

天狗 a 「あ、噂をすれば。」

神 「妖怪の山の妖怪は殆どここにいるようだな。」

諏 「それじゃあ説明するね。」

信仰の向け方を教えた。

神 「次に行くぞ。」

諏 「うん!」

2人は移動した。

天狗 b 「1度じゃないね。」

天狗 a 「あんなので騙される訳ないのに。」

権 「文さん、どうかご無事で。」

信仰は集まらなかった。

•••

神「これで全部だな。」

諏「疲れたね。」

幻想郷中を回り終えた。

諏「それにしても、早苗も大胆なことするよね。」

神「流石は私たちの早苗だな。これでこの闘いが終われば幻想郷は事実上私たちのものになる。」

諏「河童には感謝しないとね。」

神「よし、私たちも行くぞ。」

ペアツ!

•••

「惑星ギーク」

文；風符「真・天狗道の開風」

ビュオツ!!

レミ；運命「真・ミゼラブルフエイト」

ビツ!!ビツ!!ビツ!!

咲；奇術「真・エターナルミーク」

ドドドドツ!!

妖；「フルパワーエネルギー波」

ズオツ!!

レイ；「ビッグ・バン・アタック」

レイ「ビッグ・バン・アタック!」

ズアオツ!!

妹「チルノ、女たらしを押しさえておけ。私もやる。」

妹；不死「真・徐福時空」

妹「徐福時空！」

ポオツ!!

ドカーンツ!!

6人の渾身の一撃は全て当たった。ユニバースキングの周りは黒煙に包まれた。

妹「あつ！女たらし！」

チ「じつとしてよ兄貴い…。」

天「俺だって、もう、動けるぞ…！」

妹「ダメだ！」

ムギユツ

天「むぐつ」

再び抱き締めた。勿論、普通の人間だと死んでしまう程の力でだ。

妹「抵抗したら窒息させるからな。」

大人しくなった。

文「手応えありですね。」

レミ「その場から動かないのは妙だけど、気が上がる様子もないわね。」

レイ「深傷を負わせた…って感じならいいのですが。」

咲「何よ今の。」

妖「斬りたくてもみんなが砲撃したら近寄れないじゃないですか。」

咲「そこじゃないわ。ただの気砲じゃないのって話よ。」

妖「私は斬ることが専門ですから、そういうのは得意じゃありません。」

咲「使えないわね。だから半死体なんじゃないかしら。」
妖「もう一度言ったらあれより先に斬りますよ。」

文「ふふふ！この状況で喧嘩ですか!？」

レイ「さつき喧嘩したばかりなのに…」

シユウウ…

レミ「レイ、血がきれたわ。」

レイ「…やっぱりあれですよね。」

カプツ

レミ「正解♡」

血を吸われた。

レイ「や、やっぱり…痛い。」

ヴンツ!!ジリジリツ!!

レミ「あれが動かないうちは撃ち続けるわよ。」

レイ「はい!」

早「…おかしい。これで全員じゃない筈なのに…!」

光が十分集まっていないようだ。

文「煙が邪魔ですね。それっ。」

風を起こし、黒煙を払った。

妖「! あれは!」

動かないユニバースキングの側にギークが居た。ユニバースキングに触れ、様子を見ている。

咲「何をするかわかりません。お嬢様、近づきましょう。」
レミ「ええ。」

レイ「まだ何か策があるんでしょうか。」

レミ「かもしれないわね。とにかく行くわよ。」

バシユツ

咲夜、レミリア、レイ、妖夢、文はユニバースキングに近づいた。

妖「今度は何を企んでいるんですか？」

ギ「私のユニバースキングはやはり素晴らしいな。」

妖「き、聞いてない…。」

傷をさすっていた。

レイ「いい加減諦めたらどうだ。」

ギ「まさか、私の星がこれほど削れてしまう攻撃を受けてもこの程度の傷で済むとは。」

気がつくど、ユニバースキングが立っている場所が大きく凹んでいた。

ギ「これもへエネルギー順応プログラムがしつかり行き届いている証拠だ。」

文「どういうことですか！」

ギ「文字通り、エネルギー弾やエネルギー波に順応するために施したプログラムだ。現在のところ、お前たちの攻撃は簡単に弾けるようになったようだ。」

咲「何ですって!」

ギ「レイ・ブラッドの最初の攻撃は効いていたな。しかしその後は身体が勝手に弾き、さらに慣れ始めてくると手で弾いていた。」

「お前たちは煙で見えなかったかもしれないがな。」

レイ「そ、そんな事が…!」

ギ「そして今、ユニバースキングは完成する。かつてD r. ウィ

ローが計画していた、孫悟空の肉体を乗っ取るために開発された技術。それを完成させたへ肉体一体化プログラムをもち、完全なるユニバースキングを…」

「見せてやるー！」

ギークはユニバースキングの背に手を当てた。

ジジジツ・グオオツ!!

咲「な、なんて気の強さ…！」

ユニバースキングの背から気が放たれたかと思うと、

ギヤウツ!!

ギークが一瞬にして消えた…！

文「あやや？消えてしまいましたね。」

レミ「レイ、何が起きたの？」

レイ「恐らく奴は同化したのです。ユニバースキングと…！」

ギ「その通りだ、レイ・ブラッド。」

ユニバースキングがギークの声で喋った。

ギ「素晴らしい。これが私の最高傑作であり、私の身体ということか。」

妖「そ、そんな…！」

ギ「私のもものになった以上、全てのプログラムを自分で操作できるのだ。例えば…」

ギークは、自分が元いた幻想郷及び最愛の妻を奪った憎い相手への恨みをこみ上げた。

ギ「うおおおおっ!!」

ヴンツ!!

ギ「こんなことだってできるのだ!」

超サイヤ人と同じパワーアップを成し遂げた!

レミ「な、なんてこと…。」

文「か、勝てるんですか?」

レイ「かなり厳しそうですね。…」

ギ「厳しいだろうな、なあレイ・ブラッド。」

レイ「だからと言って諦める訳にはいかない!」

ピリッ

一同「!!」

3回目のレイの能力が切れてしまった!

レイ「しまった…こんな時に!」

ギ「私は頭の中で測っていたから知っていたのだ。」

咲「フュージョンするわよ!」

妖「はい!」

レイ「ムリです!そんなにすぐ合体はできません…。」

咲「そうなの?」

レイ「さっきの合体と攻撃でエネルギーを使いすぎたんです。合体するにはしばらく休まないと…。」

咲「そんな…。」

妖「だったらこのまま斬るだけです!はああっ!」

ヴンツ!!…ス…

妖夢は超サイヤ人G2に変身しようとしたが、一瞬だけ変身しとけてしまった。

レイ「…どうやら絶望的な状況みたいですね。」

文「あややや…。」

魔「みんなどけえええっ！」

バチバチバチッ!!

振り返ると、八卦炉を両手に持った魔理沙が構えていた。

ギ「遅かったな。」

魔「ギーク、待たせたな。これが私のおきだぜ！」

魔；超魔砲「ギヤラクシースパーク」

魔「ギヤラクシー…、スパークっ!!」

ドオオオオツ!!

レミ「避けなさい！」

咲「っ！」

レイ「うわっ!!？」

メンバーは咄嗟に、咲夜はレイを抱えて避けた。

ギ「こ、これは…。」

ゴオオオオツ!!

ギークはギヤラクシースパークに呑みこまれた！

魔「はあ…はあ…、どんなもんだぜ！」

早「なんて威力…。魔理沙さん、流石です！」

見ていた早苗も驚いていた。

文「また煙が上がったのでよく見えませんね〜。」
妖「でも、これならただでは済みません。」

レイ「無事でいられる方がおかしいですよ。」
レミ「……。」

ユニバースキングと一体化したDr. ギーク。さらに超ユニバースキングへと変身してしまい万事休すかと思われたが、魔理沙のとおきがおきが炸裂した。

これで、超ユニバースキングは倒せたのだろうか？

第46話へ、続く…！

第46話 「絶望の夜明け」

幻想天霊伝説 第46話

「惑星ギーク」

魔「だ、誰か、おぶってほしいのぜ。」

気を使い果たしたらしく、一步も動けなかった。

文「今行きます。」

特に急がず魔理沙へ向かった。

早「今の攻撃、私でも無事では済みません。もし生きていたとしても重傷の筈です。」

「・・・！そんな！」

ユニバースキングことギークは無傷だった！

咲夜、レミリア、レイ、妖夢からは煙で見えなかったが、早苗からはユニバースキングの姿がはっきり見えていた！

早「皆さん！まだです！」

ギ；「カオス・シユート」

ビイツ！！

直径1mのエネルギー波だ！

妖「！」

咲「！」

レイ「！」

レミ「！ 避けなさい！」
文「あや？」

ギヤラクシースパークを避けた4人は、止まっただけでも当たらなかつた。しかし、

文「うっ！」

魔「おいおい・・・冗談キツイぜ・・・」

「ごめんな、アリス・・・」

ゴオオツ!!

文は左の羽と腕を擦ってしまい、魔理沙は直撃した！

早「魔理沙さーん!!」

咲「そんな・・・」

ギークの攻撃は終わった。魔理沙は・・・立ったまま、死んでいた。

文「魔理沙、さん・・・」

ギ「驚いた。少しでも今の私の力に届くとはな。」

レイ「・・・まだそんな事を言っているのか。」

ギ「？ まだ殺しは悪だと言うのか？」

「私は愛する者たちを殺された。〈それ〉を倒すために仕方なく殺しているだけだ。お前も愛する者のために殺しをしているではないか。違うか？」

レイが倒した人造人間やビドラーのことだ。

レイ「違う。守る為に戦う事と復讐を盾にした虐殺は別物だ！」

ギ「現実はそう甘くはない、いや、甘くなかった。〈それ〉を倒すためにはより強い生物を作り出すしか方法はない。しかし、どの世界へ

渡っても理解されなかった。」

「交渉決裂による戦闘、つまり人類の戦争と同義だ。どの世界も戦争はなくなるらない。私がやっていることは間違いではない。」

レイ「それは自分の行為を正当化する為の言い訳にすぎない。」

「お前のしている事は、『それ』とやらと何ら変わらないぞ！」

レミ「そうよ。戦争を理解しているなら、正しくないことも理解している筈よ。」

ギ「レミリア・スカーレットごときが調子に乗りおつて。」

「まあいい。私はこれほど交渉の余地を与えた。もう十分だ。」

「レイ・ブラッド、お前から殺す。」

バシユツ!!

レイ「ツ!!?」

レイに襲い掛かった。しかし、

カチツ

レイ「え!?!」

気づくとレイのブレスレットの転送のスイッチが押されていた!

そして微かに咲夜の声で「生きて」と聞こえた。

レイ「さ…咲夜さん!?!?」

レイは、幻想郷へ転送された。

ギ「馬鹿め!」

カタカタカタ、ジャキツ!

左腕が変形し、肘から先が黒い刃物になった。まるで豪剣である。

咲「くっ!」

キキキキツ!!

咲夜は両手にナイフを握り応戦した。しかし、片腕を振るうギークにやっとな追いつく程度だった。

ギ「どうした? 遅いぞ。」

咲「(は、速い…このままじゃ…!)」

妖「どこを見てるんですか!」

ザツ!!バキイツ!!

咲夜に気を取られていたギークの背後に迫った妖夢が、両の剣を全力で水平に振った! ギークのうなじに切目を入れたと同時に、白楼剣と楼観剣はギークの硬さに耐えられず折れてしまった。

ギ「なに?」

咲「っ!」

ザツ!!バキツ!!

このチャンスを逃さなかった咲夜は、斬りきれなかった首を斬り裂くためナイフを握った手を振った! 見事、ギークの首を跳ねることに成功した。

レミ「トドメよ!」

レミ; 神槍「真・スピア・ザ・グングニル」

気を全開にし、グングニルを持ったままギークの首に迫り、

ドカーンツ!!

完全に消した。

シュウウ・

レミ「もう、変身できないわね。」

妖「や、やりましたね。」

咲「…。」

ス・・バタツ

咲夜は首のないギークを前に、疲労で仰向けに倒れた。

妖「はあ、はあ、なんでこの程度で倒れてるんですか。」

咲「うるさい、わね。」

妖夢は動かなくなったギークの前に立ち、咲夜を見下ろしながらそう言った。

文「魔理沙さん！魔理沙さん！」

揺さぶっても魔理沙はピクリとも動かない。文は、耐え切れず泣いていた。

早「頭を吹っ飛ばした。これでセルのように再生はできないはず。」
「でも、残った胴体が何をするかわかりません。皆さん、早く信仰を！」

用意周到である。

妖「実感が湧きません。まさか魔理沙さんが…。」

咲「…。」

レミ「間違いなくこの手で消した。これで運命は変わった。」

「…！ あれは!!」

レミリアが見たものとは？

・・・

「紅魔館 レイの自室」

レイ「ここは!?!」

気がつくのと、紅魔館にある自室の真ん中に立っていた。
もう一度惑星ギークへ戻ろうとしたが、ブレスレットは作動しな
かった。

レイ「そうだ、みんなは…?」

紅魔館のメンバーは、大図書館に集まっているようだ。

レイ「良かった…僕も合流しないと。」

走って向かった。

・・・

「惑星ギーク」

レミ「咲夜……っ!!」

ヴンツ!!

残り少ない力を振り絞り、超サイヤ人Gへ変身し、飛んでいった!

咲「そんな、馬鹿な…。」

妖「(ゾクッ!)」

妖夢は咲夜の方を向いたままだったが、直感で背後の存在に気づいた。

そこにいたのは、

ギ「まさか、隠し味をここで披露することになるとはな。」

首が元通りになっているギークだった!

妖夢はゆっくり振り返り、絶望の表情を浮かべた。

ギ「邪魔だ。」

ザクツ!!

妖「ーっ!」

左腕の豪剣で、背後から左胸を刺された。

妖「む、無念…」

ザツ!!・・・バタツ

豪剣を勢いよく振り上げ、斬り裂いた。

絶命した妖夢は、咲夜に倒れかかった。

咲「嘘、そんな…」

反応がない妖夢を抱いた。もう咲夜には、闘うエネルギーが残っていないのだ。

ギ「滅べ、十六夜咲夜。」

カタカタカタ

豪剣から普通の腕に戻し、左の手のひらを咲夜に向け気を込めた。

レミ「やめろおおお！」

爪を突き立てたが、

ゴツツ!!

気を込めていた左の裏拳で殴り飛ばされてしまった。

ギ「？」

見下ろすと、妖夢の亡骸があるだけで咲夜はいなかった。

文「大丈夫ですか？」

咲「私はもう助からない。早く逃げて。」

文「い、いや、霊夢さんから舞空術を教わつといてよかったですよ。羽が動かなくても飛べるんですから。」

レミリアが攻撃された隙に、咲夜を物陰に避難させたようだ。

咲「お嬢様、今行きます。」

文「本当は隠れて欲しいですが、仕方ありませんね。」

「霊夢さん、魔理沙さん、今いきます。」

ヴンツ!!バチツ!バチツ!

気を込め、物陰から飛び出した!

ガシツ!!

文「あっ!がっ!」

ギ「自分から出てきてくれて助かるぞ。」

現実には残酷なもので、飛び出した瞬間鼻から上を大きな右手で掴まれてしまった。

文はギークの右手を引き剥がそうともがくが、

ギ「ふん。」

ギ；「カオス・サンダー」

ピカツ!!ゴオオオツ!!

右手から高圧電流を流す技だ。

文は黒く焦げ、ギークが手を離しても動かなかった。

咲「お嬢様！起きてください！」

レミ「さく、や？早く逃げなさい。」

咲「お嬢様を見捨てて逃げられるわけがありません！」

レミ「みんなが死ぬ運命は変えられなかった。貴女だけでも生き残って……！」

咲「ブレスレットを使って逃げましょう！」

レミ「駄目よ。みんなが逃げたら、あいつは幻想郷にやってくる。そうなったら幻想郷は終わりよ。」

「でも、貴女一人なら許してくれるかもしれない。だから早」

ギ「レミリア・スカーレット、お前は私が何もせずとも間もなく死ぬ。」

咲「うっ。」

咲夜は恐怖した。

ギ「あれを見ろ。」

レミ「！……しまった！」

幻想郷は夜であるということに惑わされ、惑星ギークはこれから日

が昇るということに気づかなかつた。

咲「お嬢様！」

ギ「邪魔だ。」

ゲシツ!!

咲「あがつ！」

咲夜はあつけなく蹴り飛ばされた。

ギ「トドメは刺さない。そこで主人がゆっくり焦げるサマを見ているがいい。」

レミ「き、貴様……！」

ギ「次は東風谷早苗か。」

バシユツ!!

早苗に危機が迫る！

・・・

〔紅魔館 大図書館〕

レイが入ると、にとりが放送している惑星ギークの映像を凝視している紅魔館のメンバーがいた。

パ「レミィ！」

妖精メイドA「お嬢様！」

レイ「向こうはどうなってますか！」

美「レイくん！無事でよかった。」

フ「レイー！生きててよかったよー！」

泣いて抱きついてきた。

レイ「ご心配をおかけしました…。」

「それよりお嬢様は!?」

パ「…。」

途端に場が凍りついた。

小「…あれを観てみる。」

レイ「…!」

映像には惑星ギークが映っているのだが、レイが闘っている時はないか。太陽が見えているではないか。

レイ「そ、そんなまさか…。」

パ「私のせいよ。星の向きを調べ忘れたから…。」

レイ「パチユリー様は悪くありません…不甲斐ない僕のせいです…!」

美「そんなことはない。その様子だと知らないと思うけど、妖夢さんと文さんはあいつに…。」

別の映像では、血だらけの妖夢がうつ伏せで、全身が黒くなった文が離れた場所で倒れていた。

レイ「そんな…二人とも…。」

フ「レイは死なないよね?」

顔を埋めながら言った。

レイ「……………」

「勿論です。僕は死にません。」

決死の覚悟を交えた約束であった。惑星ギークのメンバーが全滅すれば、幻想郷が安全である保証はなくなるからだ。
依然、紅魔館に不穏な空気が漂っている…。

・・・

「文々。新聞本部」

権「文さあぁあん!!」

天狗 a「うわぁぁあん!」

文々。新聞本部は悲しみに包まれていた。

天狗 c「・・・私たちも行こう。」

天狗 a「?行ってくて?」

天狗 c「信仰を与えよう。文さんの仇を私たちが討つんだよ。」

天狗 b「うん、どうやらあの光は信仰を与えた本人たちみたいだし。」

権「信仰の方は後で上手くスルーすればいいと思います。皆さん、行きましょう!」

一同「うん!(はい!)」

パアツ

文々。新聞にいる妖怪たち全員の信仰が、一気に集まった。

・・・

「惑星ギーク」

早「(こつちへ来た！でも離れたら、みんなが…)」

神「早苗！ここは私たちに任せろ！お前は存分に闘え！」

早「でも、神奈子様！」

諏「大事な私たちの子を危険に晒すほど落ちぶれてないよ！」

早「諏訪子様…。ありがとうございます！」

ギ「ふんっ！」

右の拳を早苗の鼻に当てたつもりだったが、

早「はっ！」

ドゴツ！！

ギ「ぐっ！」

光をすり抜けた先で、逆に頭上から強烈なキックをくらった。

ギ「ちっ、八坂神奈子と洩矢諏訪子なら、信仰と東風谷早苗を天秤にかけて優柔不断になると考えていたが、そうはいかんらしいな。」

「しかし、あの光は何だ？感触がまるでなかった。あれが完成する前に皆殺しにしなければな。」

両者は地面に降り立った。

早「妖夢さん、文さん…、あなたは、絶対に許しません！！」

カツ！！ビュオオオツ！！

ギ「いいぞ。それでいい。お前が抗えば抗えるほど、私はより強化される。」

早「はっ！」

ビュオオオツ！！

片手で突風を巻き起こした！

ギ「・・・。」

早「え？」

しかし、ギークには全く効果がなかった。

ギ「私が発明したへエネルギー順応プログラムはな、この肉体がエネルギーに慣れていくほど肉体が勝手にエネルギーを弾くようになっていく。磁石と同じと考えてもらって構わない。」

「つまりだ。その程度のエネルギー攻撃はもう私には通用しないということだ。さあ、どうする？」

早「っ、まだです！まだ本気は出していません！」

ギ「あれをしてみてください。」

早「？」

見るとそこには、全身がほとんど焦げてしまったレミリアがいた。

咲「おじよ、さま・・・。」

ほぼ匍匐前進（ほふくぜんしん）でレミリアのもとへ向かっていたが、間に合わなかったようだ・・・。

レミ「さ・・・く・・・や」

咲「う、うう。」

レミ「逃げ、なさい・・・」

レミリアは、灰となって消えた・・・。

早「レミリアさーん！！」

咲「あ・・・」

早「咲夜さん！今そちらに！」

ギ「見るだけだ！」

ドゴツ!!

早「うぐっ！」

咲「…」

主人の最期の命令を遂行するため、ブレスレットを起動させたが、

咲「！ そ…ん…」

攻撃による故障のせいか、上手く作動しなかった。

咲「」

そして、咲夜までもが、力尽きた…。

早「そんな、咲夜さんまで…。」

天「よし、少しは闘える。妹紅、もう黙って見てられないよ。」

よろめきながら立ち上がった。

妹「待て、少なくとも早苗がヤバくなってからだ。」

「それに、その身体で闘えるとか嘘つくな女たらし。」

天「それも、言ってられないよ。」

妹「(こんなに仲間が死んでいるのに、何で平然としていられるんだ？この女たらし、いったいどんな人生を歩んだんだ?)」

早「うわあああ!!」

ビュオオオツ!!

ギ「ククク、来い。」

超ユニバースキングにより、魔理沙、妖夢、文、レミリア、咲夜が戦死した。

悲しみのどん底で、早苗は、妹紅はどう闘うのか？悟天は闘えるのか？レイは戦場へ戻れるのか？

第47話へ続く…。

第47話 「凍てつく未来」

幻想天霊伝説 第47話

「惑星ギーク」

神「つ、任せろとは言ったものの、やはり気合だけではどうにもならないな。」

諏「まったくだね。」

集まった光をコントロールしようとしたが、2人には早苗のようによく出来なかった。そのため、光は散らばり始めている。

神「こんな時に、霊夢がいてくれたらな。」

諏「確かに、霊夢なら出来そうだけどね。これはまいったね。」

光を見上げた悟天は、父の面影を思い出し思いついた。

天「神奈子さん！諏訪子さん！俺にその光をぶつけてみて！」

妹「何を言ってるんだ？」

諏「まさか、悟天君が信仰の力を使うって言うのかい？」

神「無理だ。巫女でもない者がこれを使えるわけがない。」

天「今はそんなこと言ってられないよ。とにかく頼む！」

諏「どうする？神奈子。」

神「∴。」

考えている間にも、光は散らばり早苗も消耗していく。

神「∴一か八かやろう。」

諏「わかった。」

まだ散らばっていない光を悟天に届けた！

天「ぐっ！くっ！」

妹「おい、大丈夫かよ。」

天「こ、このくらい…！」

とてつもないエネルギーだ。しかし、ユニバースキングのように通過することなく、悟天の身体に留まっている。

神「みんなの信仰が、悟天君に向いたみたいだ。顔の広さが嬉しいな。」

諏「あとはあの力を制御するだけだね。私たちは散らばった光を集めよつか。」

神「ああ。早苗、もう少し堪えてくれ。」

一方、早苗は。

早「はっ！」

ビュオオオツ！！

ギ「その手はもう通用しないぞ。」

早苗が起こした突風はギークに当たることなく、ギークの周りを包囲し竜巻となった。

ギ「小細工をするな！」

バチツ！！

竜巻を一撃でかき消した！しかし、ギークが見上げると、

ギ「これは…。気を抜きすぎたか。」

早苗は気を集中させ切っていた。

早「避けても構いません。ですがその代わり、この星は消させてもらいます！」

ギ「私は死なないが、お前たちは確実に死ぬぞ。それでもいいのかわ？」

早「覚悟の上です！」

ギ「大事にしてきたこの星をお前に奪われるのは癪だ。いいだろう。そんな攻撃など跳ね返してやる。」

早；「ゴッドバスター」

早「これで最後です！」

ドオツ!!

渾身のゴッドバスターだ！

ギークは両腕を前に突き出し、その攻撃を受け止めた。

ギ「っ、簡単には弾けないか。だが面白い。」

早「はあああっ!!」

早苗は本気だ！

ギ「諦めろ、東風谷早苗。」

早「黙りなさい！」

ギ「あの信仰とやらをお前に集められなかった時点で、既に勝機は失われていたのだ。」

早「っ!!」

無視して攻撃に集中している。

ギ「孫悟天ではあれをコントロールできない。コントロールさせる人物も最早なし。私の勝利は揺るがん！」

バチイツ!!

早「そんな!」

ゴツドバスターは弾かれてしまった。

ギ「風起こしというのはこうやるんだ。」

ギ;「カオス・ハリケーン」

早「あがつ!」

ギークが右腕を振り上げると、突風が発生された。そしてそれは動く体力を失った早苗を襲った。

早「う…ぐ…。」

ヒユウウ…

早苗の変身が解けてしまった…。

ギ「滅べ、東風谷早苗。」

諏「早苗ー!」

諏訪子は思わず飛び出した。

神「待て諏訪子!」

ギ「邪魔だ。」

ボツ!!

諏訪子へ気弾を放ったが、

諏「おっと!」

ギ「なにっ?」

神「機転を効かしたか!」

当たる直前に光の姿になり、やり過ぎたのだった。
距離を取ったままだったギークは、早苗の救出を許した。

諏「もう大丈夫だよ。」

早「諏訪子、様。」

早苗を抱え、今度は地表を走った。

ギ「馬鹿め。星に足をつければ攻撃しないと思ったか！」

ギ；「カオス・ブリザード」

ヒュオオオツ!!

諏「あうっ！」

ギークの攻撃は地面に当たり、氷の礫が散らばった。その一つが諏訪子の脚に命中し、転んでしまった。早苗はフラつきながら諏訪子に近づいた。

早「う、諏訪子様！」

諏「あ、脚が…。」

攻撃のほんの一部だったのにも関わらず、諏訪子の左脚は氷漬けになっっていた！

神「諏訪子！…くそ！この光さえどうにかなれば。」

天「ご、ごめん。」

神「いや、いいんだ。」

妹「こうなったら私も！」

ヴンツ!!バチツ!!バチツ!!バシユツ!!

チ「あ、待ってよ姉貴！」

チルノも遅れて飛び出した。

ギ「洩矢諏訪子、お前の命運は尽きた。」

諏「祟り神をナメてもらっちゃ困るよ。」

ギ「見ている。時間経過とともにお前の身体は凍っていくぞ。」

早「あっ！諏訪子様！」

左脚から徐々に凍り始めた。

ギ「お前たちにとって星から星までの移動は凄まじい疲労だ。それにも関わらず私に挑んだ。」

「その結果、自分の脚を腕（も）ぐ力すら残せず、ここで凍りつく。」

諏「う…。」

早「あなたは、絶対に許さな」

ギ「黙れ。」

ドゴツ!!

早「ぐあっ！」

殴り飛ばされ、早苗は遂に倒れてしまった。

早「皆さん、どうか、悟天さんに、信仰を…。」

近くにスパイカメラが飛んでいたため、その声は奇跡的に幻想郷に繋がった。

妹「化け物めえ！」

妹；「ヒートフランクス」

右の拳を炎で包み、殴りかかったが、

ゴツ!!

妹「くそっ！」

手のひらで簡単に止められてしまった。

ギ「不老不死のお前は目障りだ。」

ガシツ、ブンツ!!

妹「うわっ！」

右の拳を掴まれ放り投げられた。岩場にぶつかり見上げると、

ギ；「カオス・ブリザード」

ギ「そこで止まっておけ。」

ヒュオオオツ!!

妹「！」

目の前まで猛吹雪が迫っていた。

チ「姉貴危ない！」

妹「おま！」

チ「うわあああ!!」

たまたま近かったチルノが、妹紅の前に立ち猛吹雪をモロに受けてしまった。

チ「…あっ！」

妹「チルノおおお!!」

ギ「?なんだ？」

しかし、チルノは消滅しなかった。しかしギークにとっては、至近距離まで冷気が迫っている妹紅に何の影響もないことが不可思議であった。

ギ「出力を上げるぞ。はあっ!!」

ヒュオッ オッ オッ ツ!!

妹「なんて力だ!」

その時!

カツ!!

妹「う!」

ギ「なにつ!」

チルノは眩く光った!

妹「お、お前、チルノなのか?」

チ「…、うん。」

光が収まったそこには、大人の体型になり、衣装も神々しくなったチルノがいた…!

ギ「馬鹿な。私の技を自分のモノに変換しただと!」

チ「みんなを殺して、兄貴を傷つけて…。お前は、あたいが倒す!」
ヒュオオオツ!!

ギ「所詮はチルノ。私に敵う筈など」

ドゴンツ!!

ギ「がはっ!!」

聞く間も無く腹にパンチした!

チ「はっ!」

ドゴツ!!

ギ「ぐっ!」

一回転し、殴り飛ばした。

チ「っ!!」

それからも絶え間なく攻撃した。その戦術は正しく、孫悟天そのものだった。

妹「(なんてスピードだ。私じゃ到底追いつかない。そしてギークは、そのスピードについて行き始めている!)」

「チルノー! あんまり殴るな! ギークの思う壺だ!」

チ「: わかった。」

チ; 氷符「真・アイシクルフォール」

ヒュオッ オッ オッ ツ!!

ギ「ぐおっ!」

ゴツドバスターのように両手で弾こうとしたが、

ギ「くっ!」

全身が凍ってしまうことを察知し、身を躲した。しかし両手は完全に凍ってしまったので、

ギ「ふんっ!」

ゴリッ、カタカタカタ

両手を腕いで再生させた。

妹「そうか、そういうことだったのか。」

諏「何がわかったの?」

諏訪子の脚の氷を溶かしながら言った。

妹「頭を消したのに死ななかつた。そしてあの再生。どこで手に入れたか知らないけど、ギークは蓬萊の薬を飲んだんだ。」

諏「え！それじゃあ。」

妹「ギークは殆ど無敵だ。」

諏「そんな…。」

妹「だが、チルノのおかげで何とかなるかもしれない。チルノ！」

チ「なに？」

妹「目一杯ギークを凍らせろ！それしかない！」

チ「わかった。」

ギ「！ させるか！」

ガシツ!!ガシツ!!

ギークが襲いかかって来たので、両手を掴んだ。

ギ「なっ！離せ！」

チ「本当は、本気を出せばお前なんかすぐに倒せる。だけど、それをしたらみんな凍っちゃう。」

ギ「ククク、残念だったな。」

チ「だから、あたいたいとお前だけ、終わらせる…！」

ギ「何だと？」

ヒュオオオツ!!

チルノは気を高めた。

チ；「ウルティメイト・フリーザー」

ゴオオオツ!!カチカチカチツ!!

ギ「やめろおおお!!」

ドーム状に冷気が広がったかと思えば、次の瞬間、ドーム状のまま

一瞬で凍てつき固まった！

妹「気が消えた。チルノ…。」

諏「まさか、自分と引き換えにだなんて…。」

しかし、

パッ

チ「ふっかーっ！」

妹「な！チルノ!？」

チ「ねえ、あたいかツコよかった？あたいたら最強ね！」

えらく雰囲気が違うため、2人とも困惑している。

諏「妖精の復活力ってすごいね。」

妹「これは驚きだ。だが、よくやったな！」

チ「えっへん！」

天「す、すごい。チルノが本当に倒しちゃった。」

神「連れてきた甲斐があったな。」

天「みんなの光はどうしよっか。」

神「なに、放っておけば元に戻るさ。」

幻想郷の信仰は、95%集まっていた。

天「だけど、あんまり変わらなかったね。」

神「それは悟天君だからだ。巫女の早苗がその光を取り込めば、もつとすごいことになっていたんだがな。」

天「必要無くなって何よりだね。」

安堵したメンバーに、水を差す者が現れた。

ガリツ!!ゴリツ!!ゴオオンツ!!

妹「なんだ!」

諏「あつつ!」

チ「こ、氷が…!」

神「まさか!」

天「ユニバース、キング…!」

今度は灼熱の炎を放ち、Dr. ギークことユニバースキングが爆誕した!

ギ「流石に終わったかと思っただぞ。」

チ「それならもう一回!」

ギ「させん。」

ギ;「カオス・フレイム」

ボオッ オッ オッ!!

チ「うわ!」

ピチューン

妹「チルノ!」

諏「もう、限界…。」

バタツ

諏訪子はその場で倒れてしまった。

ギ「お前もだ。」

ギ;「フィンガーブリッツジ」

バツ!!

ギークの指一本から放たれた一発のエネルギー弾は、

早「がっ!!」

倒れていた早苗を貫いた。

神「早苗えええ!!」

天「ギーク…!」

妹「…。」

悟天と神奈子は、怒りに震えた。妹紅は、絶望のあまり何も考えられなくなった。

ギ「さあ、チェックメイトだ。」

アナザーストーリー話へ、続く…。

アナザーストーリー第1話 「月の開戦」

これは、悟天たちが惑星ギークで闘っている時の、月を舞台にしたもう一つの物語である。

アナザーストーリー 第1話

「月の都」

依「お姉様、あの不審な惑星について何かわかりましたか？」

豊姫「うーん、全貌は全く見えないけど、かなり改造された星であることはわかったわ。」

依姫がお姉様と呼ぶこの少女は綿月 豊姫。依姫と同じく月の使者の一人だ。

依「改造と言いますと？」

豊「そう。星の動きにしては正確で速い。さらには太陽系にこうも早く馴染めてしまうなんて、いったいどんな技術が…。」

依「確かに表面はただの星ですが、起きたことは普通じゃありませんね。」

「調査隊を向かわせた方がいいと思います。」

豊「まだ早いわ。今見える部分にはいないけど、幻想郷の数人がこの星に向かったみたいよ。」

「もしここで調査隊を向かわせて彼女達と接触すれば、彼女たちは誤解して無駄に闘うことになるかもしれないわ。」

依「なるほど。」

その矢先であった。

ドーンッ!!

豊「!」

依「なに!？」

月の都に何かが落ちた。しかしこの姉妹には、その何かを見ずとも砲弾であることがわかった。

豊「依姫!すぐに軍を招集しなさい!自衛戦争に突入するわ!」

「私は結界を張る。すぐにでも攻撃して構わないわ!」

依「わかりました!」

この2人が理解したのは、砲弾が飛んできたことだけではない。

この戦争を持ち込んだ存在がこの星であること、そしてそれは月に匹敵するほど強いということだ。

...

〔基地〕

依「兵は全員集まりましたか!」

レイセン「はい!集まりました!」

この少女はレイセン。綿月邸で働く玉兔だ。

集まった兵の7割が玉兔で、残りの3割が月人である。その数は二個師団に及んだ(本作では2万人ということにする)。

依「諸君も既に耳にしていると思う。警戒し続けていた新惑星は遂に、我々の星である月に刃を向けました。」

「これは聖戦です!祖星を守るため、我々は聖剣を抜き闘わなくてはなりません!」

兵達「おおお!!」

兵の士気は上がった。

レ「私も頑張ります！」

依「いや、レイセンは残ってください。」

レ「何故ですか！」

依「今回ばかりは荷が重い。一つの星を相手にするのですよ。」

レ「ですが…。」

依「私よりもお姉様をお願いします。心配は要りません。私が負けるものですか。」

レ「…わかりました。」

レイセンは豊姫がいる宮殿へ戻った。

依「それでは諸君…」

「出撃です！私に続け!!」
バシユツ!!

依姫が飛び上がり、それに続いて兵達も飛び立った。

月人も玉兎も、真空状態でも生きられるよう鍛えられているため、平然と飛べる。それだけでなく、移動においても我々が知っているスペースシャトルよりも遥かに速い。

玉兎兵「っ！敵星から砲撃です！」

まだまだ距離はあるのだが、砲弾が飛んできた。

これほどの数の兵が飛んできれば、被害は無いとは限らない。しかし、そんな心配はいらなかった。

依「諸君はステルスを使いなさい！」

依姫がそう叫ぶと、

依；神降ろし「金山彦命」

能力である（神霊の依代となる程度の能力）を使い、神降ろしをした。

その効果により、月兵に近づいた砲弾が砂塵となった！

依「お返しします。」

砂塵となった砲弾を再構築し、惑星ギーク目掛けて放った。

玉兔兵「流石隊長です！」

依（ステルスが効いている限り、敵の狙いは私になる。ですが、何か悪い予感がしますね。）

前進を続けた。

・・・

「月の都」

豊「・・・なんで応答がないのかしら。」

レ「どうかしましたか？」

豊「河童に援助を頼もうとしたけれど、何故か反応してくれないの。」

レ「そんな！こんな時に…！」

この時にとりは、タイミングの悪いことに仮眠をとっていた。

レ「まあいいじゃないですか。あれほどの兵が向かえば敵なしです

よお。」

豊「それがね。」

「あの惑星、半分が砲台で出来てるの。」

レ「・・・は？」

ドオオンッ!!

轟音が鳴った。

レ「い、今のは？」

豊「敵の砲弾を迎撃した音ね。依姫でも返しきれないなんて、いったいどれほどの砲弾が…。」

レ「ただ、大丈夫ですよ！」

不穏な空気が漂った。

・・・

「??？」

ギ「これで、月は此方の邪魔などできない。」

悟天たちだけでなく、同時に月も相手にしていた。

ギ「それにしても不可解だ。孫悟天は何故動ける。」

モニターに映る悟天を観ながら呟いた。この時の悟天は、惑星ギークに着いたばかりである。

ギ「もうじき着くか。そちらの相手をすらしよう。…？」

月兵を映すモニターを観ると、大軍が迫ってきているのに砲弾がたった1人を狙っている光景が映った。

ギ「ステルスか。それなら…」

スイッチを押した。

ギ「あの依姫でも、私が作ったこの砲弾を受ければひとたまりもない。」

「依姫には当たらないだろうが、陣形は崩せる。待っている。私の傑作が完成すれば、すぐにでも殺してやる。」

別の部屋に移った。

・・・

「宇宙空間」

月兵は進軍を続け、月と惑星ギークの中間地点まで着いた。

依「(砲弾はワンパターン。これなら心配など何もない。しかし、油断は禁物です。)」

「砲弾は止みました。各自で補給は取るようにしてください。」

最初に飛んだ勢いは簡単には消えない。真空のため、空気抵抗がないからだ。つまり、勢いに身を任せて飛びながら、補給することができきる。

月兵 a 「今回も楽勝だな。」

月兵 b 「依姫様が居るんだし、問題ないか。」

月兵c「依姫様を含めた俺たちが全滅するなんてことが起きたら、それこそ月は終わりだからな。」

依「(滅びる、か。そんなことにはなつて欲しくないですね。)」
「? もう当たつていい筈ですが…。」

返した砲弾は、一向に命中した気配がなかった。

依「(敵にも迎撃の技術があるのでしょうか。だとしても大した問題ではないですが。)」

「! 諸君、補給をやめ迎撃に移ってください!」

砲弾が、依姫でなく無作法に飛んできた。

依「命中を避けるため散開してください!私が先頭を飛びます!」
バシユツ!!

月兵たち「はい!!」

一斉に散らばり、各々で迎撃態勢を取った。

月兵d「はっ!」

ポツ!

ドカーンツ!!

1人の月兵が、迫る砲弾をエネルギー弾で撃ち落としました。
しかし!

月兵d「な!これは…!」

依「! まさか!」

月兵d「がああ!!」

月兵dは、黒く染まって絶命した。勢いは無くなり、宇宙空間で浮

かぶ死体となってしまった。

依「迎撃をやめてください！この砲弾には穢れが搭載されています！」

月兵「!!」

穢れとは、月に住む者全ての弱点となる物質のことである。

永琳など幻想郷で長く滞在した者は、幾分の耐性を獲得することができているが、それとは無縁の月の住人にそれはない。

依「回避に徹底してください！砲弾を避けるだけなら出来る筈です！」

「(何故、私を狙わない!)」

気づけば、依姫目掛けて飛んでくる砲弾はピタリと止んでいた。

依「あの惑星を動かす者たちは、何故月の住人の弱点を知っているのですか……!)」

これがたった1人の所業であるということ、この時はまだ知らない。

アナザーストーリー第2話へ、続く!!

アナザーストーリー第2話 「命を司る者」

アナザーストーリー 第2話

「宇宙空間」

依「こうなれば、庇ってでも…!」

スピードを上げ、右方向へ飛んだ。これにより、ステルスを使っていた月兵の右翼部隊の先頭を飛ぶこととなった。

依「さあ、何発でも来なさい!」

しかし、その途端に砲弾が右翼部隊の方へ飛んで来なくなった。その代わり、他の方角への砲撃が激しくなった。

依「(た、対応が早い!ならば)」

「左翼部隊! 貴方たちは撤退してください!」

左翼部隊 「はっ!」

惑星到達までに甚大な損害が出ると判断した依姫は、守りきれない左翼部隊を撤退させた。

月兵 a 「依姫様、あれは何でしょうか?」

依「…、あれは?」

惑星の一点が光っている。

月兵 a 「! エネルギー砲です!」

突然、直径数100mの大きさのエネルギー砲が飛んできた!

依「それなら！」

依；神降ろし「石凝姥命」
ゴオツ!!

この技はかつて、魔理沙の攻撃を簡単に跳ね返した技である。
しかし、

依「うつ！なんて威力ですか！」

月兵b「依姫様！」

瞬時に反射できなかった。

依「このくらい、本気を出せば簡単に……！」

月兵c「あつ！左翼部隊が！」

依「!？」

左翼部隊が撤退した方角に、もう一つのエネルギー砲が撃ち込まれていった！

依「しまった！これが狙いか！」

左翼部隊にエネルギー砲が命中し、壊滅してしまった。回避するこ
とができた月兵もいたようだが、その数は僅かである。

依「くっ！はっ!!」

バチイッ!!

本気を出したことで、エネルギー砲を跳ね返した。

月兵a「再びエネルギー砲です！」

依「またか！」

ゴオツ!!

依「くっ！右翼部隊、私の背後から離れないでください！」

月兵b「しかし、これではジリ貧です！私たちも戦います！」

依「駄目です！こんな状況では、生還する確率が下がってしまします！」

月兵c「承知してます！指示をください！」

依「…。」

ほんの少し考えた。

依「指示します。右翼部隊、各々散開し惑星へ向けて前進してください！」

右翼部隊「はっ！」

右翼部隊は散開し、惑星を目指した。同時に、穢れの砲弾が一斉に飛んできた。

依「はっ!!」

バチイッ!!

もう一度エネルギー砲を跳ね返した。すると、

ボンツ!!

依「なにつ！」

エネルギー砲は惑星へ帰らず、途中で拡散した！

月兵b「ぐあぁっ！」

月兵c「ぎゃあっ！」

突然の拡散エネルギー砲を避け切ることができず、一挙に数十人が戦死した。

依「そんな…。」

惑星に辿り着けた者は、未だに1人も居ない。

•••

「月の都」

豊「？ あれは月の兵？」

あまりにも早い撤退に驚いていた。

豊「！ その腕は！今祓うわ！」

撤退した月兵の一部は、穢れを付けられていた。豊姫はその穢れを祓った。

月兵d「あ、ありがとうございます。」

豊「いいですよ。それにしてもどうしてこんなに早く撤退したのですか？」

月兵d「依姫様が指示なさいました。」

豊「依姫が？とんでもない相手ですね。」

「他の兵たちはどうしたのですか？」

月兵d「右翼部隊は依姫様とお供しています。他は…、未帰還の兵はおそらく…。」

豊「そんな…。」

宇宙空間から1人、帰還しようとした玉兔の月兵が向かって来ていた。しかし、

豊「あっ！」

月兵d「間に合わなかったか！」

あと一歩のところまで、全身が穢れきり絶命した。

実は、月兵dは月人である。玉兔とはポテンシャルが違うのである。

月兵d「増援なさいますか？」

豊「…、いいえ、あの惑星から月ごと逃げる準備をしてください。」

月兵d「し、しかし、それをすれば幻想郷があるあの星にも被害が。」

豊「私たちが最優先です。依姫には私から指示を出します。」

月兵d「…承知しました。」

...

「宇宙空間」

依「何故だ。何故なんだ。」

確かに依姫の神降ろしは、悉く成功していた。実際、自分の身は守れている。しかしその度に、仲間が戦死しているのだった。

まるで、依姫の技を全て知っているかのような攻撃をする惑星である。

依「八百万の神のほんの一部の力を使って闘っているのに、何故敵は私の動きがわかる。」

「こうなれば、いつそ能力を使わずに…！」

バシユツ!!

既に単身となっていた依姫は、惑星目掛けて全力で飛んだ。無論、砲弾は飛んでくるのだが、

依「はっ!!はっ!!」

全て斬り払っていた。しかし、

依「うぐっ」

砲弾を斬る度に穢れが徐々に染み付いていった。

依「もう少し、もう少しで到達できる!」

そんな時、

豊「依姫、今すぐ撤退して。」

依「お姉様?」

このタイミングで豊姫から連絡が入った。その瞬間、

依「うっ!」

細いレーザーが依姫の右肩を貫いた。その右肩から、穢れが染み出していく。

依「しまった!まさかここまで来てこんな小賢しい攻撃をしてくるとは!」

そう、集中してさえいればそんな攻撃は払えたのである。だが、急な通信と穢れが溜まっていた依姫の身体ではそれが出来なかったのだ。

依「早く、戻らなければ…。くっ！」

砲弾が見えたので、咄嗟に避けた。しかし！

ボンツ!!

依「なっ！」

避けた筈が、依姫の側を通り過ぎる瞬間炸裂した！

依「近接信管!?!この状況で…！」

依姫は、もう避けきることができないと、死を覚悟した。

月兵 a 「依姫様！」

ドンツ!

依「あっ！」

飛び散った穢れが当たる直前、月兵 a が依姫を突き飛ばした。

月兵 a 「あがつ！」

依「そんな！」

依姫は助かったが、月兵 a は、絶命した。

依「(ああ、私は、敵をみくびりすぎていたようだ。まさか、二個師団が壊滅するなんて、私が負けるなんて。)」

「(もう駄目だ。闘えないどころか、帰還すらできない。お姉様、申し

訳ありません…。」

穢れきろうとした身体を見つめ、そっと目を閉じようとした。
その時だった！

？「諦めんじゃねえ！月の都は、おめえが守るんだ！」

依「？ この声は、いつたい。」

気がつくど、周りの景色は止まっていた。勿論自分も動かない。

依「どなたか存じませんが、私はもう闘えません。」

？「いや、おめえならまだ闘えるぞお。」

依「いえ、もう身体が動きませんし、何の神の力を使えばいいかもわかりません。」

？「あーそつかあ！おめえは霊夢と同じで憑依させることが出来るんだつたなあ。」

依「私はあいつより格上です。」

こんな状況なのに張り合ってしまった。

依「と言うか、何故それをご存知なのですか？」

？「ま、そんなことはいいさ。そんじゃ、オラを降ろしてくれ。」

依「ま、待ってください。貴方はいつたい何者なのですか？」

？「オラか？オラはそ、いや…」

「命（みこと）の神、さ。」

そんな神を、依姫は聞いたことがなかった。

依「で、ですが、そんな神は聞いたことが…」

命「今は時間がねえ。行くぞ！依姫！」

依「は、はい！」

すると、その神は依姫にすんなり憑依し、依姫から穢れが一気に消えた！

依「はあああつ!!」

ヴンツ!!!!

命の神の力を解放した依姫は、超サイヤ人4のようなオーラをまとい、瞳は金眼に変化した。

依「け、穢れが…！それに、今までに感じたことのないこの力は…！」

命「闘え方はもう伝わったな？」

依「はい、頭に流れ込んできました。」

命「よっしゃ！そんじゃあの星の半分を倒すぞお！」

依「はいっ!!」

自信満々に答えた。

バシユツ!!

依「！」

飛び出して驚いた。異様に身体が軽かったからだ。その証拠に、

ボンツ!!

依「！」

ヒュンツ!!

先程は苦戦させられた砲弾もレーザーも軽々と避けることが出来るようになったのだ！

依「あんなに遠いと思っていたのに、あつという間に惑星に着いてしまった。」

「これが、砲台だったようですね。」

降りてみると、惑星の見渡す限りに巨大な砲台が設置されていた。一部破壊されているものがあつたが、あれは依姫が跳ね返したことで破壊されたものであろう。

依姫が惑星に到達してもなお、砲台は鳴り止まない。

依「(これほどの装備なのに生き物の気配がない。どうなっているんだ?)」

命「依姫！来るぞ！」

周りを見ると、レーザーの銃口が曲がり此方を向いていた。

依「それなら！」

依；「超爆発波」

依「はあああつ！」

ゴオオツ!!

レーザーは発射されていたが、それごと消し飛ばした！

惑星に大きなクレーターが出来てしまったが、不思議なことに体力が減っていない。

依「神特有の能力を使っていないのに、なんて強さですか…！」

命「危ねえ！」

依「おつと！」

ドドドドドツ!!

破壊されていない砲台が、此方へ一斉発射した。それにとどまらず、飛び上がった依姫に対して執拗に発射し続けている。

依；「連続エネルギー弾」

依「ただただだっ!!」

ズドドドツ!!

両手から気弾を連続で放ち、全ての砲弾を相殺させた。それどころか、無数のエネルギー弾は、砲台すら破壊した。

命「よっしゃ！一気にいくぞお！」

依「かしこまりました！」

ヴンツ!!!

気を最大まで解放し、構えた。

依；「10倍かめはめ波」

依「信じられない。これを、私が作っているのか？」

「かあ、めえ、」

命「はああ、めええ…」

依&命「波あああああっ!!」

ドオンツ!!

惑星の抵抗も虚しく、

ドツガンツ!!

全兵装が壊滅した！見事、勝利を収めたのである。

依「や、やりました…。」

命「おう！よく頑張ったなあ、依姫！」

依「先程からお伺いしてますが、貴方はいったい何者なのですか？」

命「そうだなあ。おめえが知ってる神とは違った神ってやつかな

あ。」

「ま、オラもなりたくなかったんだけどな。あの時は地球のためにやるしかなかったんだ。」

依「そうなのですね。通りで私が知らないわけでした。」

「もしかして、この世界の者ではないのですか？」

命「ああ。よくわかったなあ。」

依「…何故、わざわざ私を助けに？」

命「実はオラの弟子がピンチってわかってよお。助けに来たんだ。」

依「この惑星の反対側のことですか？」

命「ああ。もうそっちは大丈夫だと思うぞ。」

依「あの反対側では、いったい何が…。」

すると、周りの宇宙空間から光が現れ、惑星目掛けて飛んでいった。

依「これは…？」

命「よし、もう大丈夫だ。」

依「ま、待ってください。まだ貴方の能力は発揮されては…。」

命「もう使ったぞお。死にかけのおめえを助けたじゃねえか。」

依「あ、やはり私は死ぬ運命だったのですね。」

命「間に合ってよかったぞ。そんじや、またな！」

依「あっ！」

彼は、一瞬にして消えてしまった。

依「…帰還しないと。」

依姫はただ1人、月の都へ帰還した。

未帰還者は、月人で約4,500人、玉兎はなんと約10,500人だった。右翼部隊の全滅が大きかったのだ。

帰還後、依姫は月の都で讃えられたのだが、自分の判断が兵を死なせたという自責の念から、暫く休暇を取ったという。

しかし、月人にとっての「暫く」、である。

第48話へ、続く…。

第48話「さらば、孫悟天」

幻想天靈伝説 第48話

〔紅魔館〕

パ「…、私たちも行きましょう。」

妖精メイドA「本気ですかパチュリー様！」

妖精メイドB「これでは守矢の連中の思う壺です！」

美「うくん。」

レイ「もう一度僕に行かせてください。」

フ「ダメ！絶対ダメ！」

レイ「このまま僕だけ逃げ帰って終わりだなんて、虫が良すぎます！」

「それに、みんなのあんな姿を見せられて黙って見ている訳にはいきません…！」

フ「あんなのいくらレイでも勝てないよ！お姉様も、咲夜も、魔理沙も、みんなみんな、あいつに…。うう…。」

パ「じゃあレイ、貴方の能力は発動出来るのかしら？」

レイ「そ、それは…。」

1回目を使ってから、まだ24時間経過していない。

パ「打撃を加えれば戦闘力が上がって、エネルギー波もほぼ受け流し、その上不死身の肉体を持つ相手に、強力とは言え時間と回数に制限のある貴方の能力だけで対処出来るかしら？」

レイ「……………」

美「(パチュリー様厳しいなあ。)」

フ「じゃあ、やっぱり。」

パ「ええ、あの光というものがどう作用するかわからないけど、私たちが協力する方がいいわ。」

美「守矢はどうしますか？」

パ「私がどうとでもするわ。レミイが居ない今は私が責任を持つから安心なさい。」

美「わかりました！」

レイ「はい！」

フ「うん…。」

パアツ

・・・

「地底の避難所」

勇「守矢の巫女が、自ら信仰の対象を移したか！」

早苗の、信仰を悟天に向けることを訴えた言葉を聞きそう言った。

隣「さとり様、私たちも行きましょう。」

空「いこーよー。」

さ「そうね。…こいしはどうするの？」

こ「勿論！お兄ちゃんの為なら何でもするよ！」

さ「わかったわ。」

勇「今回ばかりは協力しないとな。」

パアツ

・・・

「にとりの研究所」

に「私たちも行こう。」

亜「もちつす！」

セ「いや、私は…。」

に「なんで断るの？」

セ「私は本来敵だ。協力はしたいがおそらくできない。」

亜「いやいや、私と一緒に闘ったじゃないっすか。」

に「そうだよ。セルはもう幻想郷の一員だよ。」

セ「…私も、光になれるだろうか。」

に「なれるよ！」

亜「当たり前っすよ！」

ペアッ

・・・

「惑星ギーク」

神「(どうする。早苗は死にかけ。妹紅は戦意喪失。悟天君は満身創痍。他の助け舟はなし。…打つ手はなしか。)」

ギ「先に死にたい者は申告しろ。楽に死なせてやるぞ。」

神「何をバカなことを！」

ギ「お前か？」

神「うっ」

神であつてもやはり、死は怖い。

ギ「では気絶した洩矢諏訪子が最初だな。」

神「やめ」

天「やめろっ!!」

ヴンツ!!バチツ!バチツ!

神奈子が言う前に悟天か叫んだ。

ギ「？ 孫悟天、お前…。」
神「これは…！」

悟天の気が上がっていた。光をモノにしたのだろうか。

天「お前は、俺が倒す！」
ギ「無理はするな。」

およそ敵とは思えないほどの情けの言葉である。どれほど余裕なのだろうか。

神「…私の全てを、君に託す。諏訪子も連れて行くよ。」

そう言うと、神奈子と諏訪子は光となり、悟天の身体へ溶け込んだ。

ギ「…、いつの間に。」

ギークが気がついた時、既に早苗も光となって溶け込んでいた。

妹「！ 女たらし！」

正気に戻った妹紅が、悟天へ駆け寄った。

妹「お前、本当に大丈夫なのか？」

天「うん、大丈夫だよ。俺が必ず倒す。だからさ、妹紅も力を貸してくれないかな？」

妹「勿論だ。今の女たらし、いや、悟天なら絶対勝てる。」
天「任せてよね。」

そして妹紅も光となり、悟天に溶け込んだ。そして、

ギ「…。」

天「はあああつ!!」

ヴンツ!!バチバチバチツ!!

再び超サイヤ人3へ変身した!最初とは違い、オーラとは別に全身が少し金色に輝いている。

ギ「幻想郷に反応はなくなった。つまりそれが、この幻想郷を一つにした姿ということか。」

天「そういうことだよ、ギーク!」

ギ「…。」

両者は構えた。悟天はかめはめ波の構え、ギークは両手を前に突き出した。

天「大丈夫、みんなついてる。死んじゃった霊夢や魔理沙たちの分も、俺は負けない!」

2つの大きなエネルギーが、宇宙で瞬いた!

天;「超光(ひかり)かめはめ波」

ギ;「カオス・ブラスター」

天「かー…、めー…、」

ギ「ンンン」

天「はー…、めー…、」

ギ「…。」

天「波あああああつ!!!」

ギ「ツ!!」

ドンツ!!ゴオツ!!

両者の膨大なエネルギーがぶつかり合った。

天「っ！」

ギ「…。」

撃ち合いは互角に見えたが、

天「く、くそっ！」

ギ「はっ！」

ゴオオツ!!

天「ぎぎ、ぎ…。」

バチンツ!!

天「うわあっ!!」

悟天が敗れ、攻撃をモロに受けた！

後方に大きく吹き飛んだ悟天は、吹っ飛ばされながら超サイヤ人3がとけ、地面に叩きつけられ、仰向けに倒れ白目をむいた…。

その光景をにとりのスパイカメラは悲しく捉えていたが、それを観る者はもういない。

ギ「奇跡など起きない。私がそうであったようにな。」

生死を確認する為、悟天に近づいた。

ギ「完全に死んだ。だがやはり、光とやらは消せなかったようだな。」

気を失った悟天の身体には、まだ光が残っていた。しかし、宿主はピクリとも動かない。

ギ「可愛そうだな。この光は、死体の中で輝く他ない。消えるまで

な。」

動かぬ悟天に背を向け、歩いてその場を去った。

ギ「それにしても、月の方で感知したとてつもない気は何だったんだ？少々焦ったが、もう居ないのなら問題ない。」

独り言を呟き歩いていると、

ギ「…これはどういうことだ。」

自分の側を横切る光に気づいた。その光はなんと、戦死した魔理沙たちから放たれていたのだった！
振り返るとそこには、

ギ「お前は…。」

両手を上げ、悟天の真上に光を集めた霊夢がいるではないか！

ギ「あり得ん！お前は死んだ筈だ！」

霊「今回ばかりは私もダメかと思っただわ。」

霊夢が無事だった理由は次の通りである。

くく

霊「もう、ダメ。身体がピクリとも動かない…。」

「霊夢は夢想天生を発動させたまま、湖の底へ沈んでいた。無論、夢想天生を解除すれば死ぬ。」

霊「ごめん、悟天。せつかく来てくれたのに…。」
「もう一回、会いたかったな…。」

意を決して夢想天生を解除しようとした。

その時！

??「諦めんじゃねえ！悟天に会いたくねえんか！」

霊「!？」

その声が聞こえた瞬間、技を発動させているにも関わらず、霊夢は抱えられ異空間へ連れて行かれた。

その声、その手の感触は間違いなく霊夢の師匠であった。

霊「し、師匠!？」

師「遅くなってすまねえな霊夢。今回ばかりは助けに来たぞ。」

夢想天生をといた。

霊「え、えつと…。」

少し黙り、

霊「ごめんなさい師匠！」

師「？　なんで謝るんだ？」

謝った。

霊「私があんな事言ったから、師匠は愛想が尽きて出ていったんでしょ？」

師「それは誤解だぞお。あん時偶然他の世界に行くことになっただけだ。」

霊「ほ、ほんと?」

師「ああ。にしても霊夢、暫く見ねえうちに大きくなったなあ。」

霊「…。その、師匠。」

師「なんだ?」

霊「流石にこのままなのは、恥ずかしいんだけど。」

師「お、悪い悪い。」

霊夢は師匠から離れ、異空間に浮いた。そして、照れ臭そうに黙った。

師「あ、そういやピンチだったな。気を分けてやるぞ。はっ!」

霊「!」

霊夢は全回復した。

霊「すごい。こんなの、全回復なんてレベルじゃ。」

師「霊夢、あれを見てくれ。」

目線の先には、ユニバースキングと闘う悟天たちがいた。

霊「なに。あの化け物…。」

師「あれはDr.ギークっちゅう奴が創り出したすげえ奴だ。」

「あれを倒すには霊夢、おめえの力が必要だ。」

霊「:無理よ。さっきの奴でさえ歯が立たなかったのよ。」

師「大丈夫。あの光が見えるよな?」

霊「うん。」

師「あれをおめえが完成させるんだ。」

霊「たぶん早苗が作ったモノ。確かに私ならできるわ。」

師「それをどうするかはおめえに任せる。さあ、行くんだ。」

霊「待ってよ師匠!まだ、話したいことが沢山あるのに…。」

師「それは、また今度な。」

霊「うう…。」

俯いていると、

ポーン

霊「っ！」

頭を撫でられた。

師「大丈夫だ。おめえはもう立派に育った。胸張って闘ってこい！」

霊「…。」

すると霊夢は笑顔を取り戻し、

霊「わかったわ。行つてきます！」

勢いよく飛び出した。

くく

霊「悟天、あんたはまだ死んじやダメよ。」

ギ「させん！」

ポーン!!

気弾を放ったが、霊夢には命中せずすり抜けた。

ギ「まさか、お前まで…。」

「だが、今更光とやらが増えたところで変わらんぞ！」

霊「お願い、貴方たちの力も貸して！」

ギ「貴方たち？」

すると、惑星ギークの至る所から光が現れ、霊夢の元へ集結した！

ギ「馬鹿な。何故お前たちまで…！」

その光は、これまで惑星ギークで、ギークの手によって葬られた別の世界の幻想少女や彼女らと親しかつた者たち、加えてこの世界で戦死した月兵たちのものである。

月兵については、アナザーストーリーでご確認いただきたい。

霊「あとは頼んだわよ、悟天！」

カッ!!!

霊夢は両手を振り下ろし、光を悟天へぶつけた。そして、自らも悟天へ溶け込んだ。

ギ「み、見えん！」

そこから放たれた光は強すぎて、ギークは目を開けられなかった。光が収まると、そこには…

ギ「だ、誰だ、お前は。」

?「…！」

うつすら輝く一人の男が立っていた。

?「…っ！」

ヴウン…

男が構えを取るとエメラルド色に光が増し、男の姿が半透明になった。

ギ「小癩な！」

バシユツ!!

後方へ飛び上がり、

ギ；「カオス・シャワーレイン」

ボボボボツ!!

10本の指先からエネルギー弾を連続で発射した！しかし、

? 「っ!!」

ドンツ!!

真つ直ぐ走り出した男に、何故か一発も当てられないではないか！

ギ「何故だ！確実に命中してる筈だ！」

? 「…」

ギークは、恐れた。まるで、自分の幻想郷を滅ぼした「それ」に出会ってしまったような感覚だ。

ギ「奴は、必ず倒す!!」

ギ；「カオス・ザ・ファイナル」

ギ「はああっ!!」

ゴオオオツ!!!

指先からの攻撃を続けた上で、ユニバースキングの切り札を繰り出した！

それは、胸部から放たれた凄まじいエネルギー砲である。ギークも男も気づいていないが、今いる空間が歪む程の一撃である。

? 「っ!!」

ドゴンツ!!!

男は大地を、いや、星を蹴り上げ飛び上がった!

? ; 「幻想・ミラクル・スマッシュ」

? 「ーっ!!」

右の拳を突き上げ、エネルギー砲へ突撃した!

ギ「ば、馬鹿な!クソ!クソ!」

男は一瞬止められたかと思われたが、

ブアアアアツ!!!

一瞬にしてエネルギー砲を正面から破り、

ズンツ!!!

ギ「っ!!」

ギークは、胸部を貫かれた。

ギ「ソ、」

「ソングテナーっ!!」

ギークの、ユニバースキングの身体は溶けるように、消えていった…。

•••

「??」

幻想の魔神「まさか、私の呪いを克服するとは。こいしよりも重度なものだ。」

幻想の魔神は、自分の空間から一部始終を見届けていた。

幻「こいしは我の呪いを破れずにいる。しかし彼は、克服どころかモノにした。」

T「そうですね。」

幻「？其方は？」

T「まあ貴方になら言ってもいいでしょうね。」

「私は、〈記す者〉です。」

幻「何を記しておられるのですか？」

T「真の神です。」

幻「真の神とは？」

T「多元宇宙において唯一無二の存在のことです。」

幻「まさか、そんなものが存在するのですか？」

T「はい。未確認が多数あり、全貌はまだまだ掴めておりませんが。」

幻「今まで確認出来た人物をお聞きしても？」

T「はい。」

「此度2度目の確認となった、宇宙の人々の意志を統一なされた命の神、」

「全く別の次元で奇跡的にお目にかかれた、多元宇宙の過去と未来全てを司る救（すくい）の神、」

「そして初の確認となる、彼ということですよ。」

幻「お名前は？」

T「そうですね。」

「幻想の魔神である貴方の、人物の存在を幻に変えてしまおう呪いのお力、そして数多の幻想郷の思いを一つにした存在、幻の神と名付けさせていただきますしょう。」

・・・

「惑星ギーク」

幻「…。」

男は、少しホツとした表情を浮かべた。
しかし、

ゴゴゴゴ

幻「！」

まだやるべきことが、残っているようだ。

第49話へ続く。

第49話 「本当の第5章」

幻想天霊伝説 第49話

「惑星ギーク」

その音は、星の崩れる音であった。

ギークによる無数のエネルギー弾と桁外れのエネルギー砲、そして自分自身が星を蹴り上げたことにより、地表や地下の研究施設が形を保てなくなったのだ。

惑星ギークには何の愛着もないが、そこには仲間たちの亡骸がある。

幻「っ!!」

幻；「ウルティメイト・フリーザー」

ゴオオオツ!!カチカチカチツ!!

幻の神は、自身に宿ったチルノの能力を使い、一瞬にして星を氷漬けにした。それにより、地表の崩落は止まった。

幻「…。」

バシユツ!!

少し浮かない表情を浮かべたが、幻想郷へ向けて飛んだ。

・・・

「博麗神社」

幻「…。」

故郷、特に博麗神社へと帰った神は、右手を空へかざした。

パアツ!!

すると、黄金の光が幻想郷の至る所に放たれた。

その光とは、幻の神と一つとなり闘った幻想郷の者たちである。

・
・
・

「人里」

元の場所へ帰った者たちは始め、自分の身に何が起きたか理解出来なかったが、お互いの顔を見合わせたことにより状況を把握できた。

男 a 「俺たち、勝ったんだ！」

人々 「やったーっ!!」

人々は歓喜した。

ル 「人里に戻ってるのかー？」

ミ 「帰る手間が省けたね。」

リ 「私たち、あんちゃんと一つになったんだよね？」

大 「不思議な感覚だった。」

地底に避難していた者たちは、元の場所に戻されていた。

チ 「…兄貴はどこ？」

ル 「神社じゃないのかー？」

ミ 「私屋台見てくるね。」

リ「どうかしたのか？」

チ「兄貴が、いなくなった気がする。」

「あたい博麗神社に行ってくる。」

バシユツ

大「待つてよチルノちゃん！」

•
•
•

〔地底の避難所〕

さ「私たち、勝利したのね。」

勇「みたいだな。」

燐「やったあ！」

ペットたちは喜んだ。

こ「…！お兄ちゃん！」

バシユツ！！

さ「ちよつと、こいし！」

こいしは慌てて飛び出した。何かを察知したのだろうか。

空「あれ？何してたっけ？」

燐「一緒に闘ってたの。」

空「そっか。私の勝ちだー！」

さ「何か違うけどまあいいわ。」

•
•
•

「紅魔館」

パ「戻ってきたのね。」

小「パチュリー様の活躍で勝利しましたね！」

パ「いや、それは言い過ぎ。」

「レイはどこかしら？」

小「そういえば……。」

妖精メイド a「レイさんはお庭にいました。」

パ「そう。」

フ「パチュリー！」

パ「どうしたの？」

フ「お姉様と咲夜がどこにもいないの！」

パ「…もしかして。」

・・・

「文々。新聞本部」

ここでも、妖怪たちはお祭り騒ぎだった。

天狗 a「今宵は宴ぞ！」

天狗 b「いや記事書かないと。」

天狗 c「言ってる場合か！」

ただ一人、空気が違う者がいた。

権「文さん、どこ？」

・・・

「白玉楼」

幽「やったわね！」

ゴ「まさか、俺もそこへ行けるとは。」

幽「ゴクアちゃんも幻想郷を大事に思ってるってことね。」

ゴ「うるせえ！」

「それより、魂魄はどこだ？」

幽「あれえ？見当たらないわね。」

・・・

「博麗神社」

霊「みんな、帰っていったわね。」

満足げに微笑んだ。

霊「さ、終わったことだし買い物行くわよ悟て、ん？」

幻「∴。」

幻の神は、霊夢をじっと見つめていた。その表情は悲しげだった。

霊「あんたまさか！」

幻の神は彼女に背を向け、飛び立とうとした。
その時だった。

映「待ちなさい。」

幻「∴。」

行く手を阻んだのは、閻魔大王である四季映姫だった。その隣には死神の小野塚小町もいる。

霊「あんたたち何しにきたのよ。」

映「その男は罪人です。突然で申し訳ありませんが連行します。」

霊「は？意味わかんないんだけど。」

映「貴女には関係ありませんので。」

小町が神に手錠をかけた。

こ「お兄ちゃん！」

突如現れたこいしは、映姫へ襲いかかった！

映「突然なんですか？」

ガシッ！

こいしの拳は止められた。それよりも驚いたことに、こいしの能力が映姫に通用していないではないか。

こ「お兄ちゃんは、連れて行かせない!!」

ヴンツ!!バチツ!バチツ!

霊「!!」

なんと、こいしが超サイヤ人G2へ変身したではないか!最後の覚醒の実を食べたのはこいしであったのだ。

映「しかし、」

こ「ふにに！」

映「私の敵では、ありません！」

こ「うわああっ！」

こいしは彼方へ放り投げられてしまった。超サイヤ人G2の力も通用しないようだ。

映「修行をした甲斐がありました。」

小町「いやーきつかったですよね。」

映「貴女にしては真面目に修行を受けてましたね。」

下界の者たちの力が自分たちを超えた時、閻魔や死神はそれを超えるため修行をしなければならぬというルールがあるらしい。

そのため映姫と小町は修行をし、映姫においては超サイヤ人G2を軽く超えてしまったのだ。

霊「：連行してどうするつもり？」

映「裁判の後投獄になります。」

「異論はありませんね？」

チ「兄貴！」

小町「おっと、もう邪魔はさせないよ。」

チ「放して！」

映「それでは、失礼します。」

霊「：。」

やっと異変の元凶を絶てた今、漸く平穏が戻り、悟天との生活が帰ってくる。そう思っていたのに離れ離れ？ましてや投獄？

閻魔大王が相手であっても、彼女は何もせずにはいらなかった。

映「変な気は起こさないでください。」

伸ばした手を押さえたが、

霊「返してよ。」

映「落ち着いてください。」

霊「悟天を…、返してよ!!」
ヴンツ!!バチバチバチツ!!

映「なっ!!」

小町「えっ?」

映姫は、突然新たな形態へ変身した霊夢の衝撃波で吹き飛ばされた!

勿論これで終わる霊夢ではなく、一瞬で映姫に迫り追撃を与えようとした。しかし、

霊「!」

その手は、幻の神に止められてしまった。悲しげな表情は変わらな
い。

幻「…大、丈夫。」

霊「悟天!」

幻「これ、頼んだ。」

霊「これは…!」

手のひらサイズの複数の光を受け取った。この光とは?

映「本来であれば、公務執行妨害として貴女も連行してもいいので
すが、そのお方に免じて不問にします。」

「ですが、そのお方は連行します。いいですね?」

霊「…わかったわよ。」
スツ

変身を解いた。

映「ご協力感謝します。」

霊「(「その男」から「そのお方」に呼び方が変わった。今の悟天がどういう状態かはわかっているよね。)」

映「行きますよ。」

小町「やっぱ博麗の巫女は侮れませんね。」

映「困ったものです。」

幻の神は連行された。

チ「なんで行かせたの！さっきの霊夢なら勝てたじゃん！」

霊「さっきのはたまたまよ。それに、今の悟天は非常に危険な状態よ。」

チ「どういうこと？」

霊「あんたに言ってもわからないかもしれないけど、悟天は色んな者たちを取り込み過ぎたのよ。本来は、別の者をその身に宿せる身体じゃないとやってはいけないことなのよ。巫女とかね。それを承知の上で私は悟天に託した。」

チ「なんで兄貴に託したの？」

霊「そんな力があるはずなのに、みんなの光を少しでもものにしたからよ。だから大丈夫だと思った。」

「結果的に、完全にものにした。でもその代わり、一つ上の存在になったことよって孫悟天という存在が無くなりかけているの。」

チ「そんなあ！」

霊「(それもあるけど、本当はみんなの光を頼りにして悟天を生き返らせたかっただけ。全部私のせいよ。)」

「もし失敗してあの身体から悟天が消えてしまったら、同時にあの身体もエネルギーに耐えきれず消えるわ。」

チ「そんなの嫌だ！」

霊「本当にわかっている？」

チ「わかっている！」

霊「そう。」

その晩は、幻想郷の各地で宴会が開かれたそうだったが、霊夢ほどの宴会にも参加しなかった。

・・・

「にとりの研究所」

数日後、霊夢、パチュリー、妹紅、早苗、さとりはにとりの研究所に集まった。

パチュリーは紅魔館の臨時代表として、さとりは地底の代表として集まったのだ。

霊「魔理沙たちはまだ見つからないの？」

に「全然見当たらないね。セルにも探してもらってるんだけどまだだよ。」

パ「こつちもレイに探してもらってるけど、痕跡すらないわ。」

妹「竹林にもいないぞ。」

霊「魔理亜は？」

に「またシミュレーターに籠ったよ。」

さ「…。」

霊「ならもう確定ね。魔理沙たちはあの星いるわ。」

さ「何ですって!」

霊「悟天からこれを預かってるわ。これは魔理沙たちで間違いないわ。」

複数の光を出した。

早「こ、これは…。」

霊「これは魔理沙たちの魂。この光を魔理沙たちの身体に戻せば、たぶん生き返るわ。」

パ「そんなこと、少なくとも幻想郷では不可能な芸当よ。悟天さんは何者になってしまったの？」

霊「後で話すわ。」

「あとこの光は、並の者には扱えないわ。妹紅、あんたなら扱えるわね？」

妹「まあ、そうだが。わかった、貸しにしといてやる。」

早「え、私は」

霊「護衛としてレイも行かせるわ。あの星にはまだ何かあるかもしれないし。あと氷河もあるからチルノも行かせるわ。」

妹「やけに気が利くな。」

早「ハアツ??」

霊「何としてでも魔理沙たちに帰ってきてほしいからよ。」

パ「それは同感。レミイと咲夜がいないと寂しいもの。」

に「それじゃ妹紅さん、これどうぞ。あとレイ君とチルノの分も。」

修理したブレスレットを渡した。

妹「ありがと。レイとチルノを見つけ次第すぐ向かう。」

妹紅は研究所から出た。

入れ違いになったかのように、セルが帰ってきた。

セ「先程藤原妹紅が研究所を出たが、何かあったか？」

に「いや、任務を与えたところだよ。」

セ「そうか。」

霊「ここからが本題よ。」

さ「本題？」

パ「嫌な予感。」

霊「ちよつと前に、こんな紙が神社に届いたわ。」
に「なに、これ。」

その紙には、要するに宣戦布告の内容が書かれていた。知らない国々の名前が連なっている。

その字を見たセルは目を見開いた。

霊「あんたが知ってるってことは、やっぱりあいつなのね。」

セ「ああ、ドクターで間違いない。」

一同「!!」

ありえない。Dr. ギークは倒されたはずである。

さ「そんな、いったいどこに。と言うか、この国々は？」

紫「おそらく、前の闘いで霊夢の力が弱まった時、結界が破られてしまったのよ。」

早「わっ！ビックリした！」

急に紫が現れた。

前の闘いとは、霊夢が悟天キラー、霊夢キラー、そしてオンリヨウキに追い詰められた時のことである。

霊「結果が破れて、交わる筈のない国と繋がったってことね。」

「完全に私の責任だわ。」

早「そんな！霊夢さんは何も」

パ「いつ攻めてくるのかしら？」

早「ハアツ??」

霊「日時は、一週間後になってるわね。」

さ「早急に戦闘準備をしなくてはいけませんね。」

紫「相手がわからない以上、幻想郷の人間や妖怪たちにも、説明して協力してもらった方がいいわね。」

霊「妖怪たちは闘うことに躊躇がなくて助かるわ。」

妖怪は元々好戦的であるため、召集にも時間はかからないだろう。

霊「あとは人間たちね。」

早「そこは私も頑張ります！」

霊「頼りにしてるわよ。」

セ「それにしても、この国々とドクターとはどんな関係が？」

に「それは調べていかないかね。」

会議は、一旦お開きになった。

帰りに、霊夢はにとりから手紙を渡された。

に「霊夢さん。」

霊「手紙？誰から？」

に「魔理亜ちゃんからだよ。私は読んだけど、霊夢さんにも読んでほしいみたい。」

霊「ありがと。」

・・・

「博麗神社」

霊「直接言えばいいのに、何で手紙なのかしら。」

魔理亜からの手紙を開いてみた。中々の長文である。

くく

この度は、私を信じてくれてありがとうございます。この手紙はにとりさんに渡すつすけど、その後霊夢さんにも渡してほしいっす。

ここに書くのは、セルさんとの闘いの後の、私が来なかった本当の歴史つす。と言つても、聞いた話つすけど。

「vsメタルクウラ軍団」

―第31話より―

魔「なんてザマだ霊夢！お前を殺すのは私だけだつて約束したじゃないか！」

早「霊夢さん、もう大丈夫ですよ。」

魔「レイ、まだ闘えるか？」

レイ「はい！まだまだいけます！」

魔「よし！2人だどちよびつとだけ不安だったのぜ。」

早「これで私たち負けな」

レイ「これなら楽勝ですな！」

早「ハアツ☆」

霊「情けないけど、私はもう動けないわ。瞬間移動を使う体力もないの。」

早「手を貸してください。」

ギユウンツ

早「これで悟天さんも一緒に瞬間移動できます！」

「あとは敵の弱点とかわかりませんか？」

霊「地下よ。光ってる所。半径200m全部よ。」

早「助かります！」

「ここは私たちが何とかしますから、早く行ってください！」

霊「…ありがとうございます。」

ヒュンツ!!

魔「みんな早く変身するのぜ。」

早「行きますよ！」

レイ「たっぷりと仕返ししてやる！」

早「はあああつ!!」

レイ「はあつ!!」

ヴンツ!!バチツ!バチツ!
ボウツ!!

この時はもう咲夜さんと妖夢さんは居なかったすから、最初に到着したのはママと早苗おばさんだけす。

後から文さんたちは到着するすけど、本当の歴史では、随分苦労した闘いだっす。

「vs 咲夜キラー&妖夢キラー」

ー第38話よりー

幻想郷に攻めてきたのは、咲夜さんと妖夢さんを模した人造人間に違いはないす。戦闘力は霊夢さんに合わせたらしく、Dr. ギークはオリジナルと違っていても特に気にしなかったと言うことになるす。

セ「お前たちの勝ちだ、降参する。」

妖キ「デハ、カクゴ。」

セ「だが、タダでは死なん。」

セ;「フェニックスダイナマイト」

ボウツ!!

セ「これが私の能力、へ誰の技でも習得する程度の能力だ。」

「私が使えば核は吹き飛ぶだろう。しかし、にとりを守るためなら惜しくはない。」

「さあ、勇気のある者だけかかってこい!」

そしてセルさんは、何とか妖夢さんの偽物を捕まえて自爆したす。ただ、残った咲夜さんの偽物は、にとりさんごと研究所を吹き飛ばしてしまっす…。

この咲夜さんの偽物を倒したのが、

咲キ「アナタハ?」

こ「お兄ちゃんの好きな場所を壊すなんて、許さない。」
ヴンツ!!バチツ!バチツ!

こいしさんだったつす。

そしてこの辺りから、悟天さんの記録が無くなるつす。みんな、悟天さんの名前を出せば思い出してくれるつすけど、逆に名前を出さないと今まで居なかったかのように生活してるつす。この謎は是非とも解いてほしいつす。

「vsオオコロウリ」

ー第40話よりー

この闘いは、実はあまり変わっていないつす。

私が出た世界ではアリス先生の腕が一本だったつすから、究極魔法を作り出すのに時間がかかったそうつす。

ただ、オオコロウリに喰われてしまうこと、究極魔法をママが代わりに使って倒すことは変わらなかったつす。

「vsメタルクウラ軍団&オンリョウキ&ギーク」

ー第44、45話よりー

ギ「見込み通りだ。此方に来い、レイ・ブラッド。」

レイ「また罫があるんじゃないだろうな。」

ギ「まさか。少し話をしたくてな。」

ギークは一行の背後に向かって歩き出した。

魔「待て!」

八卦炉を構えた瞬間!

ドカーンッ!!

一行「!!」

妹「またこいつらか!」

メ「…」

轟音と一緒に現れたのは、メタルクウラ軍団の残党だったつす。

この世界では咲夜さんと妖夢さんが倒したつすけど、私がいた世界ではママ、チルねえちゃん、もこねえちゃん、早苗おばさん、文さんが倒したつす。

紫がユニバースキングをスキマに閉じ込めて、その後バックアップと闘うことになるんですけど、

ギ「悪いが、実験の成果がわかった以上、もう邪魔はさせん。」

「皆殺しにしろ、オンリョウキ。」

早「オンリョウキ?」

ピリリリッ!!

オ「これはこれはお久しぶりデェス!」

魔「お前!」

簡単には時間稼ぎをさせてもらえず、オンリョウキと闘うことになつたつす。

けど、決死の覚悟で早苗おばさんは信仰を集めて、ママは魔力を溜めて、その他の皆さんがオンリョウキと闘ったつす。けど、オンリョウキとの闘いで、文さんは戦死したつす…。

レイおじさんがユニバースキングに捕まった時は、もこねえちゃんが上手いこと助け出して、この世界のようなパワーアップは防げたつすね。

そして、

魔「オンリョウキ、待たせたな。これが私のおきだぜ!」

魔；超魔砲「ギヤラクシースパーク」

魔「ギャラクシー…、スパークっ!!」

ドオオオオツ!!

オ「霧雨魔理沙の攻撃など。」

ガシツ!!

オ「!」

妹「避けさせは、しないぞ!」

オ「グヒャアアア!!」

オンリヨウキを倒したのは、最後まで足止めしたもこねえちゃんとチルねえちゃん、レイおじさん、そしてママだったつす。

妹；「リザレクシヨン」

妹「やったな。」

チ「やったー!」

魔「はあ…、もう、限界…。」

「文…。」

一方で、

早「信仰は6割程度ですが、仕方ありません。行きます!!」
カツ!!!

信仰は早い段階で妥協して、光を自分に当てたつす。そして、早苗おばさんとはんでもなく強くなったつす。

ギ「こうなったら!」

ギャウツ!!

ギークはユニバースキングと一体化して、超ユニバースキングになつたつす。

ただ、段階は踏んでないつすから、この世界ほど恐ろしいものには

ならなかったみたいっすね。

そして、早苗おばさんは激闘の末、

早；「ミラクル・ゴッドバスター」

ドオオツ!!

ギ「ぐっ！こんなもの！」

早「はあああっ!!」

ギ「馬鹿な！私の身体が、崩れていく…！」

魔「はあ…はあ…、アリスのスターダストブレイカーみたいなやつか…！」

ギ「ゴ、」

「コチヤサナエー…ツ!!」

ユニバースキングとDr. ギークは倒されたっす。

残った方々は、惑星ギークを後にして幻想郷へ帰って、あとは同じっす。惑星ギークは放つたらかしっす。

余談っすけど、この闘いの後、悟天さんともこねえちゃんは結婚するっす。

それから1年後にママも結婚して、さらに1年後に私が生まれるっす。パパが誰かはまだ内緒っす。

ここからが本題っすから、今1人かどうか確認してから読んでほしいっす。

私の世界では、私が生まれてから4年後、いろんな国がユニバースキングを筆頭に幻想郷へ攻め込んで来たっす。幻想郷内は戦争状態になって、平和がここから崩れたっす。私はまだ4歳だったっすけど、パパとママからの修行漬けの毎日だったっす。

ユニバースキングは、この時はまだ幻想郷を乗っ取らず、戦争を長引かせていたっす。ここでもこねえちゃんの子供、つまり悟天さんとの子供が行方不明になるっす。誘拐されたと見て間違いないっす。

私が7歳の頃、ユニバースキング本人が本格的に攻め込んできたつす。奴は、パパとママ、チルねえちゃん達5人組、こいしさん、その他大勢をあっという間に殺したつす。記述は残ってないつすけど、悟天さんもこの時には既に殺されていると見て間違いないつす。そして、私もこの時は既に捕まって幽閉されたつす。その時、私は悲しみで初めて超サイヤ人になったつす。泣き叫んで変身したのを覚えてるつす。

そして、天涯孤独になった私の元に、幽霊のアリス先生が現れて、私に付き添うようになったつす。ママが知らない魔法を沢山教えてくれたうえ鍛えてくれたつす。

9歳の時、早苗おばさんが戦死したつす。

10歳の時、私の面倒を最後まで見てくれたレイおじさんとフランねえちゃんが、私の目の前で殺されたつす。怒り狂ってパワーアップした私も闘おうとしたんすけど、先生が止めたので必死に堪えたつす。

それから私は敵の奴隷にされたつす。1年間耐えたつすけど、先生が時は来たと言つて、ユニバースキングに挑むことを許してくれたつす。

けど、結果は惨敗つす。そりやそうつす。みんなが勝てなかった相手に私が敵うはずがなかったんつす。

その時、私の全身が光った。敵は驚いてたつすけど、先生はわかってたようで、倒れながら光ってる私を見て「頼んだわよ、魔理亜」と呟いたつす。

気がつくど、この世界の白玉楼に居た、というわけつす。

霊夢さん、ユニバースキングはまだ生きてるつす。どうか油断しないでほしいつす。

追記

ユニバースキングの動きが早くなったようつすから、最重要事項をここに記すつす。

敵は、私たちをよく知ってるつす。

どこに誰が居て、どれほどの実力を持っているか、そして関係性ま

で何もかも知ってるっす。

年齢、好みの食べ物、性格まで何もかも。それもそのはずこの戦争どころか一連のDr.ギークとの闘いの黒幕は

くく

霊「!!」

霊夢は視線を感じ取ったため、手紙を閉じた。
しかし、辺りを見回しても誰もいない。

霊「紫から聞いたけど、ユニバースキングは紫のスキマにいるのよね。…まさか!」

「紫ーいる!?!」

紫「わかってるわよ。スキマを破られたわ…。」

霊「やっぱり。どうにも出来ないの?」

紫「完全に利用されているわ。行き来も自由にしているみたい。」

霊「はあ…紫のスキマを利用されているのは厄介ね。」

紫「私も全力で追うわ。自分の能力を好き勝手にされるなんて屈辱ですもの。」

霊「ありがと。」

こうして、Dr.ギークとは別の敵の存在を知った霊夢は、闘いながらその黒幕を追うこととなった。

悟天、戦死した仲間たち、妹紅、チルノ、レイ、そして命の神なき今、どう戦うのか。

第5章?真の神?

〈完〉